
綾子†無双

ZC31S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綾子十無双

【Nコード】

N1860Q

【作者名】

ZC31S

【あらすじ】

いきなり『恋姫十無双』の世界に飛ばされてしまった美綴綾子。全ての武道と相性がいいとされる彼女は、異世界でどんな活躍を見せるのか？

そして、外史の世界は彼女に何を求めるのか？
一応クロスオーバー作品ですが、主体となるのは『真・恋姫十無双』の世界です。

主人公については作者のご都合主義で、原作と異なる箇所も多々あります、予めご了承ください。

総PV400,000オーバー、お気に入り登録も200件を突破しました。

本当にありがとうございます。

〵序〵（前書き）

初めに。

拙作をお読みいただくにあたり、何点か注意事項を書いておきます。もし一点でもお気に召さない、引っかかるという方は、ブラウザの戻るボタンを押していただいた方がよろしいかと思えます。

1）本作品は『真・恋姫＋無双』『Fate／stay night』のクロスオーバーですが、『Fate』に関しては主人公のみの登場となります。英霊や宝具が大活躍する展開をご希望の方は、申し訳ありませんが他の作品をお探下さい。

2）主人公については、作者のご都合主義で原作と異なる箇所が多々あります。展開上、能力もチート気味になっています。

3）オリキャラが数名登場します。

4）ストーリーもあまり原作をなぞっていません。ですので、展開に違和感を覚える可能性があります。

5）その他、原作及び三国志、三国志演義と異なる箇所もあります。

以上、ご承知いただける方のみ、お付き合い願えば幸いです。

序

「うし、ログアウト、っと」

カチッ。

マウスクリックで、画面を閉じる。

そして、大きく伸びをする。

ゲーム好きのあたしが、今ハマっているのが、三国志を舞台としたオンラインゲー。

ちよっと前まで、名ばかりのブラウザ三国志ゲーもやっていたけど、実質ただのカード集めと作業ゲーになってしまい、今はこっちばかりを進めている。

しかし、今日はちよっとやり込み過ぎたかな？

時計は、既に午前二時を過ぎている。

今日も朝練があるし、いい加減に寝ないとな。

パソコンの電源を切り、ベッドに潜り込む。

ではでは、おやすみ。

「……さま」

「…………」

「……しゅ……さま」

「…………」

「ご主人様、ねえ、起きてん♪」

……？

誰かがあたしを呼んでいる……らしい。

あたり一面、靄がかかったように真っ白。

「あら、やっと起きたのねん♪」

……で、あたしの目の前に、巨木が立っている。

……じゃない、大男だ。

全身ムキムキの筋肉に、何故かビキニパンツ一枚の。

「……い……」

「おはよう、ご主人様」

「いやああああああ、変態！……！！！！！！」

「だが、ムキムキマッチョで見るのも悍ましい変態ですってえ？」

「そこまで言っていないし！」

「てか、自覚してるのかこいつは。」

「だ、だ、誰よ、アンタ？」

「うふ、よくぞ聞いてくれたわね。私は、貂蟬ちようせんよ」

「ちよ、貂蟬？ 貂蟬っていや……」

「さっきまでやっていた三国志ゲーのイベントに出てきた名前だ。」

「えーと、確か董卓と呂布の仲を引き裂くために、身を犠牲にした絶世の美女……だったよな？」

「……うん、どこをどう見てもイメージが一致しないんですが。」

「で、その自称貂蟬さんが、一体何の用？」

「あん、酷いわ酷いわ。あたしは正真正銘の、貂蟬よん」

「くねくねすんな、キモイわ！」

「……で、もちろん用があるから来たのねん。ご主人様」

「その、ご主人様って何だ？」

「うーん、詳しい事は話せないの、ごめんなさい。ただ、ご主人様はこれから、外史の世界に行って貰うの」

「外史？」

「そう。ご主人様、三国志の世界はご存知ね？」

「あ、ああ。あたしが知っているのは、ゲームの世界ぐらいだけど」

「概ね問題ないのねん、それでも。でも、外史の世界は、ご主人様が知っているのとは結構違うの」

「何を言っているのかわからないけど、貂蟬の目は真剣だった。」

「でね、ご主人様にはその世界を救って欲しいの」

「世界を救う？ なんてあたしが？」

「それはおいおいわかんと思うのねん。ただ、一つだけ注意してお

く事があるから、それを聞いて欲しいのねん」

「注意？」

「そうよ。外史の世界では、『真名』というものがあるの」

「『真名』？ 何だそりゃ？」

「その名のとおり、真の名前よ。ただし、外史の世界では命に等しい神聖なものねん。本人の許しなしに迂闊にそれを口にする事は、決して許されないもののなの」

「……………」

「だから、相手を呼ぶときは、本人が許さない限り、絶対に真名は使っちゃいけないのねん」

「ふーん。じゃあ、あたしはどうすればいい？」

「ご主人様は真名がないから、そう言えばいいのねん」

「……わからん。」

あたしが世界を救うとか、真名だとか。

遠坂や氷室あたりなら、何か推定できるんだろうけど……あたしの頭じゃ無理だ。

「じゃあ、また会いに行くから、頑張ってねん、ご主人様♪」

そして、ウインクをする貂蟬。

うげ、吐きそう。

……と思った瞬間、あたりは光りに包まれ……あたしは意識を失った。

チチチチチ。

「……………」

鳥のさえずりで目が覚めた。

なんか、変にリアルな夢を見た気がする。

貂蟬とかいう変態に迫られるとか、どんな悪夢だよ。

さて、朝練に……あれ？

ベッドに寝ていたはずなのに、そこは地面の上。

そして、あたりは……森？

お気に入りのキュートなパジャマを着ていた筈なのに、何故か制服姿だし。

おまけに、ご丁寧に通学カバンと愛用の薙刀、弓矢が隣に置かれている。

とりあえず、誰かに連絡してみようか。

ポケットを探ると、買い換えたばかりのケータイが入っていた。

ケータイというよりもデジカメにしか見えない形状で、ソーラー充電タイプだから電池切れはあまり心配要らない。

……ただ、電話として使えれば、の話。

液晶に映っていたのは『圏外』の表示。

どんだけ田舎にいるんだ、一体？

もちろん、メールもダメ、となれば……。

しょうがない、とりあえず人を探しますか。

持ち物一式を手に、あたしは立ち上がった。

勘を頼りに歩いて行くと、やがて視界が開けてきた。

……で、何だここ？

一面に広がる草原に、遥か向こうにそびえる小高い山。

前に蒔寺の家で見た、水墨画みたいな風景。

そして、空気がえらく澄んでいる。

合宿で行った、高原の空気も爽やかだったけど、その比じゃない。

……ふと、人の気配を感じた。

振り向いても誰もいない……いや、違う。

大木の上に、誰がいる。

「……誰かいるのか？」

「……………」

シュタツ。

何かが、目の前に降り立った。

……へ、忍者？

あたしよりも小さいけど、その身長ほどの刀を背負い、脚絆に手甲を付けた、髪の高い女の子。

「よく気づきましたね。……何者ですか、あなたは」

「そりゃ、こっちの台詞だけど」

「……………」

すらり。

無言で、彼女は背負った刀を抜いた。

殺気からすると、冗談ではないみたい。

白刃が、木漏れ日を受けてキラリ、と光る。

「ちよ、ちよっと。あたしは別にアンタと遣り合うつもりは……………」

「……………」

女の子は、剣を下げる気配がない。

参ったなあ、こんなところで殺陣をする気もないんだけど。

でも、隙あらば斬りつけてくるのは、どう見ても間違いない。

……仕方ない、身を守るか。

あたしは手にしたカバンを置き、弓矢を下ろした。

そして、薙刀の包みを解く。

その間にかかってくるかな、と思ったけど……待ってくれるのか
様子を見ているのか、とにかく女の子は動かない。

「お待たせ。その前に……、名前を聞かせて貰えないか？　あたし
は、美綴綾子^{みつづりあやこ}」

「……姓は周、名は泰、字は幼平」

「周泰さん、ね。なら、勝負！」

同時に、周泰さんは横へ飛んだ。

素早い動きだ。

……でも、あたしの目には、ちゃんと追えていた。

そのまま横に払われる刀を、薙刀で受けた。

ガキン！

「……!!」

彼女の目が、驚きで開かれた。

が、それも一瞬。

今度は突きを入れてくる。

それをかわしながら、周泰さんの動きを観察。

見た目の通り、パワーよりもスピードで勝負するタイプみたい。

とは言え、その一撃はなかなかのもの。

どう見ても真剣だけに、間違っても喰らう訳にはいかない。

突きのラッシュをかわされ、彼女は一度間合いを取るべく、下がった。

「やりますね」

「アンタも。それだけ遣う奴は、久しぶりだよ」

ヘルプで出場した剣道の全国大会でも、ここまでやる相手はほとんど覚えがない。

……当然だけど、その大会はあたしが優勝した。

ただ、剣道はルールがあり、防具をつけて竹刀での試合だけど、今は違う。

それだけに気は抜けないけど、あたしは緊張感と同時に、高揚感も味わっている。

「ですが、ここまでです!」

そう言うと、周泰さんは素早く動き出す。

そして、あたしの周りをぐるぐると。

……不思議な事に、あたしの目は彼女を見失う事が、なかった。

動体視力にはそれなりに自信はあったけど、それにしても何かがおかしい。

「……そこっ!」

あたしはその刹那、薙刀を一閃。

ガン!

大きな音と共に、周泰さんの刀が宙を舞った。

「あっ!」

声をあげた彼女の喉元に、薙刀を当てる。

「勝負あったね」

「……の、ようですね」

観念したように、周泰さんは目を閉じた。

「なら、あたしの質問に答えてくれるか？」

「……………」

「黙秘するのか。なら、ここは、どこ？」

……と、周泰さんが目を開いた……というか、驚いている。

「どこ、とは……？」

「いや、気がついたらこんな場所にいるんだけどさ。で、やっと人がいた、と思ったらいきなり襲われるし」

「……………」

「明命。そのぐらいにしなさい」

と、草原の方から声がした。

見ると、馬に跨った女性がひとり。

……いや、もう一人いる。

……二人とも、全く隙がない。

「雪蓮様、冥琳様！」

周泰さんは、片膝を付く。

どうやら、この娘の主人……かな。

「ねえ、あなた。名前は？」

と、最初に声をかけてきた、桃色の髪をした女性。

この中では、一番の遣い手と見た。

「あたしは、美綴綾子。アンタは？」

「私は、姓は孫、名は策。字は伯符よ。で、こっちは周瑜」

「……周瑜公瑾だ」

今度は、あたしも即座に反応してしまった。

「……えーっ！ 孫策に周瑜って、呉の小霸王に美周郎！？」

と、孫策さんは不思議そうに、

「呉の小霸王？ ねえ冥琳、私、そんな風に呼ばれてるの？」

「さあな。私も美周郎とは……。幼平は聞いた事あるか？」

「わ、私も初耳です」

あれ、人違いかな？

……ふと、気がついた。

周泰も、呉の有力武将じゃなか。

……でも、何でもみんな女性なんだろう？

「まあ、いいわ。でもあなた、相当腕が立つわね」

孫策さんは、何故か楽しそうだ。

そして周瑜さんは……。こっちも何故か、こめかみに手を当てている。

「明命を簡単にあしらうなんて、並の腕じゃ無理よ」

確かにそうだろう。

あたしも、何故あんなに簡単に勝てたのかが不思議なぐらいだし。

「雪蓮様、申し訳ありません。私の腕が未熟なばかりに」

「それは違うわよ、明命。わたし、ううん、母様でもその人に勝てるかどうかわからないもの」

そして、孫策さんはあたしを見て、

「とりあえず、わたしのところに来ない？　いろいろと聞きたい事もあるし」

「雪蓮！　不用心過ぎるぞ」

周瑜さんは、あたしを警戒してるっぽい。

まあ、普通はそういう反応するよな。

「いいじゃない。これだけの凄腕、武勇伝也多そうだし。そのあたりも聞きたいなあ、って」

「だが、どこかの間者かも知れんのだぞ」

「んー。でも、悪い人には見えないのよねー。それに、わたしの勘が大丈夫、って言ってるし」

「ハァー……」

すると、周瑜さん、大きくため息を一つ。

「全く、言い出したら聞かない奴だ。ただ、雪蓮の勘働きは外れが

ないからな……。わかった、好きにしろ」

「わーい、ありがとう。冥琳♪」

孫策さん、満面の笑みだし。

……まあ、このままいても途方に暮れるだけだし、申し出はありがたいんだけどさ。

一向に連れられ歩く事、数時間。

程なく、大きな城壁が見えてきた。

「うへー、流石は孫策さん。大きな城持ってるね」

すると孫策さん、微妙な顔つきで、

「残念だけどあれ、わたしの城じゃないの」

「我らは今、袁術の食客でな」

周瑜さんも苦い顔。

「あれ？ って事は、もう都が長安になったって事？」

「え？」

「は？」

「……あ、あの……。美綴さん、何の事でしよう？」

一同が呆気にと取られているけど……あたし、何か変な事、言った？

「……孫策さん、あのさ。変な事、聞いてもいい？」

「変な事って？」

「洛陽の井戸から、アンタのお父さん、何か拾ったりしてない？」

「父様が？ 冥琳、知ってる？」

「いや」

惚けている、という雰囲気でもない。

「ねえ、何の事言ってるの？」

「あ、いや……」

どうやら、武将が女性ばかり、というだけじゃなく、歴史もあたしが知っているものとは違うらしい。

となると……迂闊な事は言えないな。

未来から来たから知っている、なんて……どう考えても危険過ぎる。

「……。ごめん、いろいろと混乱してて」

「……そう。まあ、今日はゆっくりと休む事ね」

幸い、それ以上はツッコまれなかった。

「姉様、お帰りなさい」

「雪蓮姉様、お帰り」

城下町を過ぎ、城門のところで、よく似た二人の女の子が出迎えていた。

ちよつと雰囲気こそ違うけど、どうも姉妹っぽい。

「ただいま、蓮華、小蓮。変わった事はない？」

「はい。……それより、その者は？」

蓮華と呼ばれた娘が、訝しげにあたしを見る。

……まあ、バリバリ不審者なのかもね、あたし。

「じゃ、自己紹介して貰える？」

孫策さんに促され、あたしは頷いた。

「美綴綾子。字とかなくて、姓が美綴で、名が綾子ってんだ。よろしく」

すると一同、ほお、という感じ。

「字もないのか。では、この大陸の生まれではないのか？」

「そうなるかな。生まれ、って意味では東の島国出身になるけど」

「東の島国？　すると、蓬萊の国か？」

う、知らん、その名前は。

「どうだろう？　ただ、地理的に言えばそうなる」

「……そうか。私は姓は孫、名は権、字は仲謀だ」

「シャオは孫尚香だよ！」

孫権に孫尚香、か。

孫権は言わずもがな、孫尚香は確か……ああ、劉備と結婚するん

だっけ。

どうやら、性別が皆逆、という訳じゃないんだな。

「とにかく、今日はもう休むといいわ。明命、部屋に案内してあげて」

「はい！」

「それじゃ美綴、また明日ね」

孫策さんはそう言って、城の中へ。

「では美綴様、どうぞこちらへ」

「あ、うん。ありがとう」

「では、何かあれば呼んで下さい」

「わかった」

ボタン。

ベッドと机だけしかない、シンプルな部屋。

もつとも、外には人の気配。

まあ、見張りを立てるのが当然だろうし、気にしててもしょうがない。

ドサツ。

固いベッドの上に、あたしは身を投げ出す。

「ハア、何がどうなってるんだか」

あの筋肉達磨の言う通り、あたしは三国志の世界に来ちゃったらしい。

ただ、出会う武将は皆女性ばかり。

城下町にいた人は男もいたから、女性だけの世界、って訳でもなさそうだけど。

あたしもゲームを通してだけど、ある程度の知識は持っているつもり。

……でも、歴史からしてそもそもが違っている。

「一体、あたしに何をさせようってんだろぅねえ……」
疲れていたあたしは、そのまま目を閉じた。

〽序〽 (後書き)

誤字修正中、ブラウザがハングアップしてしまい……。

データそのものが消えてしまったので、バックアップから再投稿しました。

中身は変えていませんが、前書きと後書きは保存していなかったの
で書き直しました。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

く式く（前書き）

どうにか次話が書き上がったので公開します。

なお、パソコンで書いているため、携帯で見ると改行などがちよつと見づらいかも……。

一応仮想携帯モードで時々確認は入れています。が、あまりにも見づらいようであればお知らせ下さい。

なお、キャラクター設定はあまりいじらないつもりですが、話の流れはだいぶオリジナル要素が入ります。

く式く

チュン、チュン、チュン。

「……朝か……ふああ……」

スズメの囀りつてのも、久しぶりの気がする。

昔に比べて、スズメが繁殖しにくくなっているらしいし。

ベッドから身体を起こし、

「……やっぱり、変わってない、か……」

見慣れた、自分の部屋ではなく、質素なベッドと机だけの部屋。
当然、照明なんてものもなく、窓から差し込む太陽光だけが唯一
の明かり。

蠟燭か行灯……そもそもあるのか、この時代も？

……まあいいや、とりあえず起きよう。

ガチャ。

「おはようございます。お目覚めですか？」

ドアの外には、周泰さんが立っていた。

「……もしかして、ずっとそこに？」

「はい。申し訳ありませんが、これも命令ですので……」

寝不足なのだろう、やや眼が赤い気がした。

「すまないね、あたしみたいなイレギュラーのせいで」

「いれ……ぎゅらー？」

「あ、ゴメンゴメン。不正規な存在って事」

「なるほど。では、朝食をお持ちしますね」

「ありがとう。それから、顔を洗いたいんだけど」

本当はシャワーも、といいたいけど……ないだろうな、そんな気
の利いたものは。

「では、桶に入れて持ってきます。あと、着替えも何か探してみま
す」

「うん、すまない」

「いえ。では、少しお待ち下さい」

そう言い残し、周泰さんは消えた。

……本当に、忍者じゃないのか、あの娘は？

「入ってもいいかしら」

「どうぞ」

だいぶ日も高くなった頃、孫策さんが部屋にやってきた。

それと、見知らぬ妙齡の女性も一緒。

……周瑜さんもそうだったけど、この世界の女性は胸が立派な人が多いのか？

「自己紹介しておこう。儂は姓は黄、名は蓋、字は公覆じゃ」

またまた有名人登場。

赤壁の、苦肉の計の人だっけ……三国志演義の創作らしいけど、実際は。

「奇妙な者が来ておると聞いてな。策殿に頼んで同道させて貰った」
奇妙かあ。

実際そうなんだろうけど、そう言われるとちょっと複雑なものが。

「あ、その前に。一つ、提案があるの」

と、孫策さん。

「？」

「あなたの事をなんて呼ぼうかな、って」

そう言えば、名前を呼ばれた事がまだなかったな。

「あなた、姓が美綴、名が綾子……だったわね」

「ああ」

「わたしたちと同じように、という事だと姓名続けるんだけど、何か長いような気がするの」

「なら、美綴でも綾子でも。好きに呼んでいいよ」

「わかった。なら、美綴、でいいかしら。わたしたちも、さんづけ

はなしでいいわ」

「そう？」

あたしもその方が気楽でいいし。

「じゃあ美綴。改めて聞くけど、あなたは一体どこから来たの？」

黄蓋も、ジツとあたしを見ている。

「それは、出身という意味か？ それなら、昨日話した通りだけど」

「違うわ。字がない……それは文化の違いだからいいとして。あなた、昨日わたしの事、『江東の小霸王』って呼んだわよね？」

「……ああ」

「それ、どういう事なのか聞かせて貰える？」

孫策の目は笑っていない。

誤魔化そうものなら、腰の刀を抜き放たれそんな雰囲気。

ちなみにあたしの薙刀は、万が一の事があると、という周瑜の言葉で預かって貰っている。

「少なくとも、あたしの世界では、孫策はそう呼ばれている」

「でも、わたしは見ての通り、袁術に飼われているだけ。江東の制覇、なんてもちろん適うわけもない、脆弱な存在よ？ でも、あなたはそう言ったわ」

「……そうだな。この時代と、違う世界から来た、だから知っている。それが答えさ」

「違う世界？ なんじゃ、それは？」

考え込む黄蓋。

証明するもの……そうだな。

あたしはポケットから、財布を出した。

そして、百円玉を二人に見せた。

「これは？」

「あたしの国で使っている硬貨、お金さ」

「ふむ、確かにこの大陸では見た事がない……。輝きといい、意匠といい」

「そうね、こんな精巧な細工の施されたお金なんて、わたしも知ら

ないわ」

二人は、興味深そうに百円玉を眺める。

「後は……そうだな」

取り出したケータイ。

もちろん、本来の電話機としての機能は使えないけど。

「これは、電話なんだけど、今は使えない」

「電話って？」

「あ、そうか。えーと、この端末同士で、離れた場所でも会話が出来る機械さ」

「離れた場所というのはどのくらいだ？ 例えば、ここから城門程か？」

そう言って、黄蓋は窓の外の城門を指さした。

「それも可能だけど……そうだな。ここから洛陽とか長安とか、蜀でも」

「ふむ。なら、やってみせい」

「そうしたいのはやまやまなんだけど、アンテナ……専用の設備がないと使えないんだ。だから、この時代ではどうにもならない。でも、その代わりにこんな事が出来る」

そう言って、あたしはカメラモードを起動。

そして、孫策と黄蓋に向けた。

「貴様！ 何をするか！」

あれ、何か怒らせちゃった？

「え？ いや、写真を撮ろうかと」

「写真？」

「あゝ、ええと、見て貰った方が早いと思うんだよね」

「妖の類ではあるまいな？」

妖……、たぶん、迷信がまかり通っている時代だろうから、怪奇

現象、とでも解釈すれば正解かな？

「いや、そんなつもりはないんだけど……」

「祭。いいからやらせてみせましょ。体調に異変があったら、斬り

捨てればいいだけじゃない」

ぶ、物騒だなあ。

「そんなものじゃないから。な？」

「……わかった。好きにせい」

「じゃ、行くよ」

そのまま、二人のツーショットをパチリ。

「で、何をしたの？」

「これを見て貰えるか？」

撮ったばかりの画像データを液晶画面に呼び出し、二人に見せる。

「これは、策殿と儂？」

「すごい！　こんな精巧な絵を一瞬で描いちゃうんだ」

百円玉の比じゃないぐらい、驚く二人。

「これは絵じゃなくてさっきも言ったけど、写真さ。ここで写したものをそのまま、機械の中に取り込むんだ」

「あ、ちょっと待ってて」

と、孫策はいきなり立ち上がると飛び出していく。

「おい、策殿！」

「祭、悪いけどしばらくよろしく！」

そして、黄蓋はやれやれ、と腰に手をやった。

「あの様子だと、また何か思いついたようだ。策殿らしいと言えばそうだな」

「はは、でも嫌いじゃないですよ、楽しそうだし」

どう見ても年上の黄蓋にタメ口は、という事で丁寧語のあたし。

「お主もそう思うか。なかなか気が合いそうじゃ」

そしてしばらくして、あたしは城の外に連れて行かれた。

孫策に孫権、孫尚香の三姉妹。

黄蓋に周泰、周瑜。

……あと、のんびりした雰囲気巨乳な娘とか、目つきの鋭いス

レンダーな娘とか、メガネをかけて袖丈の長い服を着た娘とかも。

「これでみんな揃ったわね」

「雪蓮姉様。急に一体何なんです？」

「そうだよ。シャオ、訓練の途中だったのに」

姉妹が皆を代表するかのように、不服そうな顔をしている。

「みんなにも聞いて貰いたくて。たぶん、ううん、間違いなく、これからのわたしたちの方針がこれで決まるから」

孫権はそう言うと、

「美綴。あなたが、違う世界の人だ、ってのは信じるわ」

「雪蓮！」

「お姉様！」

「冥琳も蓮華も聞いて欲しい。わたしたち、このままでいいと思う？」

「……………」

「いい訳がないわ。『江東の虎』と呼ばれた母様の娘が、袁術のような能なしにいいように使われるだけなんて」

あゝ、孫堅も女性だったのか。

道理で、親父さんが、って言っても反応なかった訳だ。

……そう言えば、その本人は見かけないな。

と、孫策があたしを見ながら、続けた。

「冥琳。『天の御遣い』の話は知ってるわね？」

「ああ。管輅とかいう占い師が予言したという奴だな。だが……」

「そう。『白く輝く衣装に包まれし者、この地に降り立ち世を救う者なり』……確か、そんな感じだったわね」

「だが雪蓮。その予言と美綴が、どうつながる？」

周瑜の言葉に、何人かが頷く。

「わたしね、あの予言、ちょっと間違っていたんじゃないか、って思うの」

「間違い？」

「ええ。ここにいる美綴が、本当の御遣いなんじゃないかな、って」

「……バカな。何の根拠もないではないか」

「根拠ならあるわ。美綴、あれをやって見せて」

「あれ？」

「けーたい、よ。あれで、みんなを撮ってあげて」

「あ、ああ」

「やれやれ、ソーラー充電タイプで良かった。」

「でなきゃ、バッテリー切れ起こしてただの箱になるところだし。」

「貴様！ 何をするつもりだ！」

と、目つきの鋭い娘が、剣を抜いた。

「この時代の人たち、ちよっと血の気が多すぎないか？」

「思春。平気よ、さっきわたしと祭も、試したから」

「お姉様！ 無謀も大概にして下さい！ あなたは、我らにとって欠かせない玉なのですよ！」

「もう、蓮華は堅すぎるわよ。とにかく、平気だってわかってるんだから」

「そう言いながら、孫策は全員を整列させる。」

「あたしは少し離れて、全員が画面に入る位置に立った。」

「じゃ、行くぞ」

「シャッターを押す。」

そして、画像を呼び出して孫策に手渡した。

「これでいいか？」

「ええ。みんな、その箱を覗いてみて」

興味津々といった風情で、一同があたしの方へ。

「ふえっ？ こ、これ、私ですか？」

「すごいです、私が、とくても上手に描かれていますね」

「面妖な。貴様、やはり妖か！」

名前を知らない娘たち、反応は三者三様。

……驚いているのだけは同じだけど。

「ふむ、この女が妖の類であるかも知れない、という点は認めよう。だが、それだけか雪蓮？」

それでも、簡単に妥協しないあたりが、周瑜という人なんだろう。

「後は、明命との一騎打ちでの振る舞い、それにわたしの勘ね」

「また勘か」

「ええ。まあ、他にもあるんだけどね」

チラ、とあたしを見る孫策。

……なんか、獲物を見つけた猛獣、そんな雰囲気のような……。

「良いではないか、冥琳」

「祭殿まで何を！」

「儂も策殿とこの娘が何を語るか、何者かを見ておった。どうやら、我らに害を成す者とは思えんのじゃ」

「……………」

どうやら、黄蓋さんの言葉は相当、重みがあるみたいだな。

「この娘が、『天の御遣い』なのかどうかは、儂にはわからん。だが、策殿の勘、それに儂の長年の経験、信じてみても損はなからう？」

「どう、冥琳、蓮華？ これでもまだ、反対？」

と、ふう、と息を吐く周瑜。

「雪蓮だけでなく、祭殿までそう仰せとあらば。これ以上の意見は無意味だ」

「……私も周瑜と同じです。ただし、その人となり、これから見せて貰うわよ、美綴？」

「ああ。あたしが孫権の立場でも、同じ事を考えるかも知れない。だから、今はそれでいい」

「じゃ、決まりって事で。思春、穩、あーしえ亞莎、自己紹介してね」

「……姓は甘、名は寧、字は興覇だ」

「私は、姓は陸、名は遜、字は伯言です。よろしくお願いしますね」

「……わ、私は、姓は呂、名は蒙、字は子明ですっ！」

甘寧に、陸遜、呂蒙。

は、まさに呉のオールスター勢揃いってところですかね。

後は太史慈とか朱桓とか程普とか徐盛とか魯肅とか諸葛瑾とか……まあ、あたしの知っている歴史とは違うんだし、みんな揃っている訳とは限らない、か。

こうして、あたしは呉……というか、孫策軍団と共に行動する事となった。

「おい」

翌朝。

こっちに來てから、あまり身体を動かしていないけど、鈍ったら一大事。

という事で、朝食を済ませたあたしは、庭に出てストレッチ中。そこに、甘寧がやって來た。

「あら、おはよう。甘寧」

「……………」

相変わらず、甘寧はあたしを射貫くかのような目。

もつとも、その程度のガンを飛ばされて怯むあたしじゃないんだけどね。

「お前は、薙刀を得物にしていたな」

「ああ。あたしの一番は、それかな」

「……他の得物でも、問題ない、そう聞こえるが？」

「問題ないっていうか……。武道全般と相性がいいんだ、あたしは」

「ほお。なら、これはどうだ」

と、甘寧は手にした剣を、あたしの方に放ってきた。

刃引きした、訓練用の剣。

「雪蓮様はああ仰るが、私は自分の目で確かめないと信じる気はない。私と仕合しろ、美綴」

甘寧っていや、魏の曹操にも認められた、呉随一の猛将だったよな。

もちろんあたしがイメージしていたのは、髭面の豪傑なんだけど……もちろん目の前にいるのは、全く似ても似つかない。

ただ、隙のなさといい、あたしに向ける殺気といい……相当な遣い手なのは事実。

とは言え、断る理由もないな。

「わかった。けど、手加減はなしで行こうぜ、お互いに」

「私は最初から、容赦などする気はない」

あらら、愚問だったかな？

一定の間を置き、あたし達は相対した。

「あ、ちょっと素振りさせて」

「……好きにしろ」

ブン、ブン、ブン！

甘寧から借りた刀。

訓練用とは言っても、竹刀に比べればずっと重い。

手に馴染む、というには程遠いけど……ま、仕方ないな。

「お待たせ」

「……参る！」

ダッ！

あっという間に、あたしの目前まで迫ってきた。

動きはかなり速い。

そして、鎌鼬のように繰り出される、鋭い一撃。

……でも、不思議な事に、あたしには見えている。

もちろん、緩慢どころか、並の人間ならそのまま斬られる方が普通なんだろう。

剣が描く弧の範囲外に、身体をずらす。

「……クッ！」

歯噛みをしたのも一瞬、立て続けに甘寧はあたしに斬りかかる。

ガキン！

最後の一撃だけ、剣を立てて受け止めた。

何故なら、それだけはかわさない方がいい、あたしの本能がそう教えたから。

「もう終わり？」

「……舐めるな！ はあああつ！」

甘寧の剣は、何というか……鋭い。

周泰と違うのは、その一撃が重い事。

だから、訓練用の剣とは言え、まともに食らう訳にはいかない。

「たあつ！」

ヒュン！

今度は、下からの攻撃。

それを間一髪のところで見切りつつ、あたしも隙を伺う。

これだけの手練れだ、そう機会は多くない筈。

あたしはそれを待つ事にして、それまではひたすら回避に努める。

「どうした！ 逃げてばかりではないか！」

「そう？ なら、こっちからも行っていいのかな？」

「何っ？」

ほんの一瞬だけど、彼女の動きが止まる。

「そこっ！」

ガツン！

「うっ！」

あたしの突きを、何とか受け止める甘寧。

「まだまだあ！」

ガキン、ガン！

息つく間もなく、攻め続ける。

「クッ、なんて重い……」

甘寧の顔が、歪んでいる。

そして何合か打ち続け、

「はっ！」

突き一辺倒だったところに、剣の根元を狙った一撃。
パキン！

「あたしの勝ちだね」

「……バカ……な……」

呆然とする甘寧の手には、ポツキリと折れた剣。
そして、その先端は……あれ？

「おい、儂を殺す気か？」

いつの間にか、門のところにいた黄蓋さんの足下に刺さっていた。

「思春。お主の負けじゃな」

「祭様！ たまたま、油断しただけで……」

「ははは、悔しいのはわかるが、実力じゃよ」

「クッ……」

本当に、悔しそうな甘寧。

「どうじゃ、思春。これでもまだ、心許せぬか？」

「……………」

黄蓋さんの言葉に何も応えず、甘寧は去っていった。

「あ奴の事を悪く思わんでやってくれ」

「いえ、そんな。それより、いつからここに？」

「ああ。天氣がよい故、酒でもやろうかと思つての」

確かに、黄蓋さんの手には、大きな酒徳利が。

「ますます、お主の事が気になるの。どうじゃ、一杯付き合え」

「え？ あたし？」

「他に誰がおるんじゃ。さ、行くぞ」

「え？ ちょ、ちょっと待って下さいって！」

問答無用で引きずられていくあたし。

……いや、酒は飲めない訳じゃないんだけど……。

く式く（後書き）

綾子がチート気味ですが、転生した際にパワーアップした……というか、本作では彼女の持ち味である「武」を存分に発揮させたいので、かなり強めの設定となります。

なかなか真名を許す展開にしていますが、命と同等なほど神聖なものなら、あまりホイホイと認めるのもどうか、と。

異論がある方もおいでかも知れませんが、作者の方針ですのでご了承下さい。

〵参〵(前書き)

仕事で遅くなり、続けての投稿が出来ませんでした……。

見ての通り、呉がメインで進んでいきます。
引き続き、よろしくお願いします。

（参）

トクトクトク。

「さ、グツといけ。遠慮なぞするな」

「は、はあ……」

杯……というよりも、大ぶりなそれは茶碗に近い。
それになみなみと注がれた酒……濁り酒のようだ。

この時代、清酒なんてある訳がないし、ビールやウイスキーもあり得ない。

酒と言えば、たぶんイコールこれなんだろうな。

「では、いただきます」

運動系部活なので、どうしても……まあ、飲む機会ってのはある訳で。

でも、飲んだ事のない種類を一気に呷れるほど、酒量に自信がある訳でもないんだけどさ。

とは言え、ちびちび飲んだら黄蓋さんに何を言われるか。

ええい、ままよ。

覚悟を決め、杯の中を一気に空けた。

あれ、結構薄いかな？

匂いから、きつめを連想してただけに、ちょっと意外かも。

「ほお、良い飲みっぷりではないか。さ、もう一杯」

「いえ、あたしからもご返杯を。でないと、失礼に当たります」

「気にせんでいい」

「そうはいきません。これ、あたしの国では礼儀ですから」
実際のところ、本当に礼儀なのかどうかは知らない。

ただ、酒は差しつ差されつつ、というのが暗黙のルールらしい。

「む。礼儀では仕方あるまい。では、いただこう」
「どうぞ」

トクトクトク。

あたしのよりも、ちょっと大きめの杯。

……てか、ご飯茶碗ぐらいあるんですけど、黄蓋さんののは。

「んぐ、んぐ、んぐ……。ふう、甘露甘露」

「でも、いいんですか？」

「何がじゃ？」

「何がじゃないですよ。孫策は、袁術の食客なんですよね？」

「一応、そういう事になっておるが？」

「いくら食客とは言っても、その配下がこんな朝っぱらから酒とかすると黄蓋さん、

「はっはっは。お主、公瑾のような事を言うのお」

いや、周瑜じゃなくてもそう思うし、普通。

「儂はの。嬉しいのじゃよ」

「嬉しい？」

「うむ。お主がここに来てから、策殿が楽しげで、な」

「そうなんですか？」

「ああ。堅殿が亡くなられてからは、策殿は必死であつた」

「……………」

「……呆気ないものじゃな。『江東の虎』と呼ばれた御方も、病には勝てなんだ」

確か、孫堅は病死じゃなかった筈。

……こんなところにも、違いがあるんだ。

「じゃが、策殿はただ、悲しみに暮れておればよいか、と言えは否じゃ。曲がりなりにも、儂らの主となったからには、それなりの実力を見せねばならぬからの」

「実力、ですか。でも孫策は、腕も立つし覇気も備えていますよね？」

「それはそれ。実績がなければ、兵も民も従う訳がなからう？ ましてや、堅殿の威光がなくなり、去っていく者も大勢おつた中じゃ」「そんな……。冷たいですよ、あんまりにも」

が、黄蓋さんはニコリともせず、続けた。

「未だ皇帝は健在とは申せ、この乱世じゃ。自らを守る力のない君主に、従う民はおらぬ。兵もまた然り、己の働く場がなければ、食うにも事欠くのじゃぞ？」

「……………」

「じゃから、必要なのは実績、そして力じゃ。理想を唱えるのは、その裏付けがあつてこそ」

「……わかります、何となく」

比べたら怒られるかも知れないけど、これって部活にも当てはまる。

実績があり、実力がある奴がレギュラーになり、主将やキャプテン、部長になる。

もちろん、面倒見の良さとか、人当たりとかもあるだろうけど。

「じゃが、想いだけでそれは身につくものではない。それ故、策殿は苦しみ、悩んでおった」

大変なんだ、人の上に立つ、ってのは。

「のう、美綴」

「はい」

「お主はまだ、何か秘めたるモノがあるようじゃ。……その力、策殿に役立ててやってはくれぬか？」

「黄蓋さん？」

「この通りじゃ、頼む」

そう言つて、頭を下げる黄蓋さん。

「あ、あの……。でも、あたしで役に立つ、と？」

「儂はの、そこいらのひよっ子どもよりも遙かに多くの戦場に立ち、多くの人を見ておる。じゃが、お主のような娘は、未だ出会っておらぬ」

「でも、周瑜とか甘寧とか、何より黄蓋さんがいるじゃないですか。孫策には」

「無論、儂らとて、策殿を盛り立てるため、力は尽くす所存じゃ。だがの、そこにお主が加われれば、より未来が開ける……儂は、そん

な気がするのじゃ」

空になった杯に、新たな酒が注がれる。

「ほれ、飲め」

「……はい」

今度は一気に干さず、ゆっくりと口に含んでみる。

フルーティーな香り、悪くない。

「黄蓋さん」

「うむ」

「あたし、正直どこまで自分がやれるのかは、まだわかりません。ただ……」

「ただ？」

「……詳しい事は話せませんが。この乱世、終わらせたいと思っています。孫策がそれを目指すなら、あたしもそのために頑張ってみます」

「……そうか。わかった、お主の志。儂はしかと、見届けようぞ」

正直、こんな事を言う自分に驚いている。

……でも、黄蓋さんは、決して酔った勢いで話している訳じゃない。

だから、あたしも真剣に答えたつもりだ。

「あら、祭に美綴？」

孫策がやって来た。

「おお、策殿か。どうじゃ、一緒に飲らんか？」

「そうしたいのはやまやまなんだけどね」

「ん？ また冥琳に何か言われたのか？」

「違うわ。袁術ちゃんから、また雑用を押しつけられたの」
うゝん、心底嫌そうだ。

「雑用？」

「ええ。蜂蜜が切れたから、手配するらしいの。で、その商隊の護衛をしろって」

「そのような事、策殿である必要はなからう？」

「そう言ったわよ。……そうしたら、張勳の奴に、『孫策さんはお強いですからね。美羽様の為に、是非一働きして下さいね』って。もう、本当にむかつくわ!」

袁術はともかく、張勳って……思い浮かばない。

「あの。張勳って誰……かな?」

「袁術の守り役兼軍師、ってところかの。そこそこ頭も腕もいいが……どちらかと言えば、悪知恵が働く奴じゃ」

「……絶対、いつか殺す」

背景に文字が書けるなら、『ゴゴゴゴ』とでもなりそう。

「そんな訳で、これから打ち合わせに行かなきゃいけないの。あゝあ、わたしもこんな事してないで、一緒に飲みたいな」

……そうだ。

思い立ったあたしは、声をかけた。

「なあ、孫策」

「うん?」

「その任務、あたしに手伝わせて貰えないか?」

「え? 美綴が?」

あたしは、大きく頷く。

「あたし、何も仕事がないし。でも、頭使うの苦手だから、何か手伝えないかな、って」

「ふむ……。よし、その意気じゃ、美綴!」

黄蓋さんが、あたしの背中をバシバシ叩く。

結構力があるってか、痛いんですけど?

「いいの、本当に? 言っておくけど、危険を伴うわよ?」

「わかってる。この時代、この大陸じゃ、危険を避けて生きる、なんて無理だろうから。それに、あたしもいろいろと見てみたいんだ、この大陸を」

「そう……。わかった、じゃあお願いしちゃうかな?」

さっきまで暗かった孫策、一気に明るくなったな。

……黄蓋さんとの約束だ、やれるところからやってみるさ。

三日後。

袁術御用達の、蜂蜜商隊が出発。

で、護衛を命じられた孫策も、

「やれやれ。じゃあ、行きましようか」

やはり気が進まないみたい。

「なあ、孫策」

「何？」

「一つ、疑問があるんだが。何故、蜂蜜でここまで大仰な事になるんだ？」

砂糖もないこの時代、甘味料として貴重な存在なのはわかる。

……にしても、ちよつと大げさすぎるんだよな、どう考えても。

いくら物騒なご時世とはいえ、交易商品に軍隊の警護付きとか、コスト悪すぎだろう。

「……簡単よ。袁術ちゃんの好物が、蜂蜜水だから」

「……は？」

ちよつと待て。

「やっぱり、変だと思いですか？」

間延びした声で、陸遜が話しかけてきた。

何かあった時のために、という周瑜の判断であたし達に同行している。

もっとも、黄蓋さんに言わせると、彼女は九節棍の遣い手でもあるらしい。

……あの巨大な胸が邪魔しなければ、の話らしいけど。

「そりゃ、あたしでも変だと思うさ。だって袁術一人だろ、実際に必要なのは」

「確かにそうなんですけどお。でも、袁術さん、何かというと蜂蜜水、ですからね」

「おまけに、あの張勳が袁術ちゃんをダシに腹黒い事をする時、ご

機嫌取りに飲ませるから。減りも早いのよ」

「それにしたって……」

まだ、釈然としない。

「だいたい、蜂蜜なんてミツバチを飼えば済む事じゃないか」

「……は？」

「ええと、美綴さん？」

二人がポカーンとあたしを見ている。

「な、何か変な事……言ったか？」

「変よ……。どうやって、蜜蜂を飼う気？」

「え？　だって、こんな四角い箱に、巣みたいな模様を……」

そこまで言って、ふと気がついた。

「な、なあ、陸遜」

「はい、何でしょう？」

「もしかして……。蜂蜜って、天然だけ？　養殖ってないの？」

「仰る意味がよくわかりませんが。蜂蜜は全部、野生の巣を集めて作ってますよ」

「げ？　なら、とっても手間がかかって……あ」

「ご明察ですね。そうなんです、蜂蜜はかなり高価な品物なので」

「ま、袁術ちゃんの消費量が尋常じゃない、ってのは置いて。

警戒を厳重に、ってのはあながち不可解でもないのよ」

うーん、あたしの世界じゃ、蜂蜜を手にするのにそんなに苦労と
かあり得なかったからなあ。

車も飛行機もない、道路もともに整備されていない、治安も悪
い……。

つくづく、あたしは恵まれた世界にいたんだなあ、ってのを再認
識。

「……だからって、わたしにやらせる事はない、と思うけどね」

「袁術さんの軍、こういう任務ですら、担える人材がいまさんから
ね。雪蓮さまがお出になるかはともかく、ですけどお」

「あれ？ でも袁術の配下って……紀霊とかいなかったっけ？」

「紀霊？……穏、知ってる？」

「いいえ。美綴さん、どなたですかぁ、その方？」

ありゃりゃ、紀霊は存在していないのか。

……あと、袁術の配下って誰がいたっけか？

蒔寺の奴なら、スラスラと出てくるんだろうけど……うーん、思
い浮かばん。

「美綴さん、本当に不思議な方ですねえ」

「……そうね」

そんな、生暖かい目で、あたしを見るな！

日が傾いた頃。

「今日はここいらで野宿ね」

「じゃあ、まずは火をおこさないとな。あと、水」

これなら、あたしも率先して動ける。

「……随分、手慣れてない？」

「ま、サバイバルならお手のものさ」

「さばいばる？ 何ですかぁ、それ？」

「あ、野山である程度自給自足するというか……まあ、野宿もその
一つだ」

「ふーん。ま、いいわ。なら、わたしは軽く一杯……」

早速酒かい！

が、あたしがツツコミを入れるまでもなかった。

「ダメですよ、雪蓮さま。皆さんの支度が調ってからです」

「ぶーぶー。いいじゃないの、穏のケチー」

「冥琳さまから、ちゃーんと監督するよう言われているんですう。

だから、あまり我が儘言わないで下さい」

「わ、わかったから泣かないの。全くもう」

この主従のことは、とりあえず置いておこう。

あたしは、商隊を率いる男に話しかけた。

「おい、食材の用意はあるな？」

「え、ええ。と言っても麦に干し芋、あとは野菜と干し肉……ですかね」

「うーん、イマイチもの足りないな。お、そうだ」

おあつらえ向きに、すぐ近くに川が見える。

そんなあたしに気づいたのか、孫策がやって来て、

「あら、今から釣りをする気？　夜が明けちゃうわよ、魚だって寝る時間なもの」

「わかってる。だから、叩き起こす」

「え？」

両手で持てるぐらいの、小さめの岩を見つけた。

うん、思ったほど重くない。

「せーのっ！」

ブンッ！

思い切り、川に向かって岩を叩き付けた。

ガン！

岩と岩をぶつけると、当然その衝撃は周囲、つまり水中に伝わる。その結果。

「あ、魚が浮いてきた」

「気絶しているだけだけどさ。でも、これなら楽だし手っ取り早いだろ？」

「そりゃそうだけど……。美綴、あなたも案外、荒々しいわね」
孫策に言われたくないぞ、おい。

そして、日がすっかり暮れた頃。

「お待ちどうさん」

何故か、料理当番みたいな格好になってしまったけど、別に嫌いじゃないのでいいや、と。

獲った魚は半分を火で炙り、残った半分は野菜と一緒に揚げてみた。

天ぷら粉がありゃいいんだけど、片栗粉とかすぐに手に入りそうにないので断念、衣は一応ついているけど、ほとんど素揚げ状態。干し芋や干し肉は水で戻したり、軽く炙ってから麦と一緒に鍋に。雑多と言えば雑多だけど……でも、あたしはこの方が得意だし。人数が多いから、量を一度に作れるのはむしろありがたい。

「じゃ、いっただっきまーす」

「では、いただきます」

孫策と陸遜の声を合図に、一同食事開始。

「この雑炊、美味しい！」

「うわー、揚げ物も美味しいですー」

他の面々も、どうやら喜んでくれているみたい。さて、あたしもいただきますか。

「美綴」

後片付けを終えたあたしのところに、孫策が来た。

もともと手伝ってくれる、という期待はしてなかったけど……案の定。

まあ、将来の王様候補だし、別にいいけどさ。

「つくづく、不思議ね、あなたって」

「そうかな？」

「ええ。明命や思春をあしらう強さを見せたかと思えば、あんな風に料理まで出来て。それに、わたし達にはまだ見えない何かを、貴女は見ている」

「……そんな、大層な奴じゃないよ。あたし、頭を使うよりは身体を動かしたい方だし」

「あはは、その意味ではわたし達、気が合うわね」

「……かもな」

ふと、あたしは思い浮かんだ台詞を、口にする。

「なあ、孫策」

「うん？」

「アンタとは、殺す殺さないの関係までいきそうだ」

「……美綴？　あなた、まさか……」

慌てて身構える孫策。

あゝ、誤解されちゃったかな？

「待て待て。何も、孫策を害するつもりはない」

「……じゃあ、さっきの言葉の意味は、何？」

「お前とはとことんまでやりあえる友人になる、そう言いたかったんだけど。どうだろう？」

「……美綴」

「何となく、そんな気がするんだよ。あたしは」

「……そう。ふふっ」

と、孫策はどこから出したのか、徳利と杯を置いた。

そして、酒を満たすと、旨そうにそれを干す。

「今日は月が見事よ。こんな日に、月見酒しないのは、無粋じゃない？」

「……全く、黄蓋さんといいお前さんといい、酒好きだな」

「ええ。今日は、とことん付き合って貰うわよ？　だって、こんなに気分がいいんですもの」

「……そうだな。それも悪くない」

あたしも、倣って杯を干した。

「……美綴。貴女がそう言うのなら、わたしもあなたに言う事があるの」

「何？」

「名前。孫策じゃなく、雪蓮でいいわ」

真名。

神聖だからこそ、迂闊に名乗るべきでもなく、また呼ぶべきでもない……それは、ここに來て強く実感しているもの。

それを許す、と？

「いいのか？」

「ええ。その代わり、わたしも貴女の事、他人行儀で呼びたくない」
「なら、綾子でいいよ。あたしは、真名がないからさ」

「……うん。改めてよろしくね、綾子」

「こちらこそ、雪蓮」

カチン。

杯を杯を合わせたあたし達。

……桃園の誓いならぬ、満月の誓い、って奴かな？

〽参〽(後書き)

雪蓮が真名を許す、というところで今回は終わります。

あっさり許してるんじゃない？というご指摘もありそうですが……。
信頼の証であれば、こういうのもありかな、と。

お気に入り登録やご感想もいただき、励みになっています。
まだまだご意見・ご感想、お待ちしております。

〃四〃(前書き)

また仕事の都合で1日開いてしまいました。
いよいよ、綾子が大きな一歩を踏み出します。

（四）

「ふああ……」

思い切り伸びをする。

結局、あれから雪蓮と……思い出せないぐらい、飲んだな。

いろんな事を語ったし、ちょっとだけど本音も話してくれた。

……その代わり、流石に飲みすぎで頭が重いけどな。

とは言え、早朝のせいもあるけど、やっぱり空気がさわやかだ。

あたしのいた時代、中国は急成長と引き換えに、深刻な環境問題に悩んでいる……葛木先生が、授業でそんな話をしていたな。

今時エコエコと騒いでいる連中、この空気を知ったら愕然とするだろうなあ。

昨日魚を採った川に行き、顔を洗う。

水も程よく冷たいし、澄み切っている。

ついでに、そのまま頭ごと、川の中へ。

ブルブルと水気を切って、手拭いで拭く。

うし、だいぶさっぱりした。

さて、朝の自主トレ開始。

こっちに來てから、あまり手にする機会のなかった、弓矢。

静止して射る事はまずなさそうだけど、折角モノにした腕、むざむざ腐らせるつもりはない。

まずは、身体を軽く解して、と。

弓道部でやっていたのと同じ、ストレッチをひと通り。

弓は、不用意に射ると、筋を痛める傾向があるからな。

特に、これを使うような場面でそのザマじゃ、間違いなく生死に関わる。

そういや、黄蓋さんも、弓を得意としてるって言ってたな。

今度、心構えでも教えて貰おうかな。

だいぶ、身体が暖まったところで、射を開始。
的はないから、手近の太木に、メモ用紙を小刀で留めて、と。
ちよつと小さいけど、無いものねだりをしてもしようがない。
メジャーがないので歩測でいたい、三十メートルぐらいの間を置く。

本当は安土（矢が痛まないようにするための盛土）とかも必要だけれど……ま、そこまで望むのは贅沢って奴だ。

ちなみにあたしの流派は、特にない。

つか、所謂弓道で、流派云々、ってのはあまり重要じゃない。

強いて言うなら、あたしのスタイルは武射系。

理由は簡単、その方があたしに合っていたから。

……ま、藤村先生はその辺放任主義って言うか、投げっぱなしだったから、好きにやるしかなかったのも確かだけどさ。

そして、決めた位置に立ち、弓を構えた。

キリキリ。

久々の弦の音、心地よいもんだ。

ビュン！

カツン！

どうやら、メモ用紙の真ん中に命中みたい。

うん、腕が鈍ってなくて何より。

よし、もう一度。

「ふう、こんなモンかな」

小一時間ほどで、自主トレ終了。

「見事な腕前ね、綾子」

「雪蓮か。ずっと眺めていたようだけど？」

「あら、気づいていたの？」

ニヤリと笑う雪蓮に、あたしも笑みで返す。

「ま、弓って奴は無心にならないといけないから。だから、周囲の気配にはより敏感になる」

「なるほどね。でも、こんな的によく当てられるわね」

雪蓮が手にした、的代わりのメモ用紙。

その中心付近は穴だらけ……というか、もはや破れないのが不思議な有様。

「これでも、弓は一番苦手なんだけどな」

「あら、言うじゃない。これなら、祭だけじゃなく、夏侯淵あたりともいい勝負になるんじゃない？」

「夏侯淵？ 曹操配下の？」

「ええ。大陸一の弓使い、なんていう人もいるぐらいね」

会ったことはないけど、きっと女性なんだろうな。

「どうかな。あたしのは、競技としての弓だから、実戦だとうなるかは」

この世界の弓は、あたしよりも少し小さい。

そして当たり前だけど、鏃は尖っているし、当たれば死に繋がる。ボウガンでヤガモを撃ったバカがいたけど、生物に対して矢を放つなんて、狩猟以外では許されない行為。

そういう世界にいたあたしに取っては、弓ですら人殺しの道具、というのは未だに違和感がある。

……まだ、覚悟が出来ていない、そう言われても仕方ないな、こりゃ。

「雪蓮さま、美綴さん、朝ご飯ですよ」

「穩が呼んでいるわ。行きましょ」

「ああ」

とりあえず……難しく考えるの、ヤメ。

なんか、あたしらしくないな、ここんところ。

……ん？

ふと、感じた妙な違和感。

その刹那、あたしは本能的に、手にした矢を放っていた。

「ギャーッ！」

見知らぬ男が、あたしの矢を肩に受け、転げ回っている。

……いきなりだったので、反射的に放った矢。

それが、人間を傷つけている。

「あなた、何者？」

雪蓮が、男に剣を突きつけている。

頭に黄色いバンダナ……というか、ただの布を巻いている。

「た、助けてくれ！ お、オレはまだ、死にたくない！」

「なら、知っている事を話さない。でないと」

ギリリ。

雪蓮の愛剣『南海霸王』が、朝日を受けて輝く。

昨日、教えて貰ったんだけど、何でも孫堅さんの形見というか、

孫家に代々伝わる名剣らしい。

当然、相当な業物わざものという事で……まさに、賊とおぼしき男の命は、

風前の灯火。

「わ、わかった！ な、何でも話す！」

雪蓮の気迫に加え、首筋に南海霸王を突きつけられてるんじゃない、

抵抗するだけ無駄だろう。

「あれね」

「ああ。ざっと、二百ってところか」

男に洗いざらい吐かせたところ、やはり賊がすぐそばにいらし

い。

しかも。

「黄巾賊……いや、黄巾党、か」

「何か知ってるの、綾子？」

「……ああ」

三国志の世界をかじった人間なら誰でも知る、一大事件。

世界は違っても、歴史は変わらない……そういう事なんだろうな。

「じゃあ、貴方が戻り次第、わたし達を襲う手はずになっている。それで間違いないのね？」

「へ、へい！　ありやせん！」

「そう。他には？」

「そ、それだけしか知らないでさあ！　ほ、ホントですって！」

男の必死さから見て、ウソではなさそう。

「そう。なら、貴方はもう用済みね」

雪蓮は眼を細め、南海霸王を振り上げた。

「ひ、ひいっ！　や、約束が違うじゃねえか！」

「約束？　正直に話せば殺さない、って事？」

「そ、そうだ！　なのに、俺を殺す気かつ！」

「そうよ。だって、あなたを許したら、また罪もない民が悲しむもの」

「ひ、ひいっ！　」

ザッ！

男は、頸動脈を切られて……事切れた。

目の前で、人が死ぬ。

……あまりの事に、現実感がない。

「綾子」

「……………」

「わたしを、非情だと思う？」

雪蓮の目は笑っていない。

いつもの明るく陽気な彼女ではなく、そこにいるのは……まさに

霸王、というべき気迫を持った、強い女性だった。

「……わからない。でも、間違っているとは思わない。確かに、雪蓮の言う事も一理あるから」

ごめんなさいで済めば、警察は要らない。

あたしの世界で時々聞いたフレーズ。

……これも、やっぱりそうなんだ。

今は物言わぬ存在となった賊の男。

みっともなく命乞いはしたけど、何人かの命を奪ったのだろう。

……それも、自分たちの欲望を満たす、という理不尽極まりない理由で。

あくまでも推測でしかないし、偏見かも知れない。

……でも、あたしはこの男よりも、雪蓮を信じたい。
いや、信じなくっちゃ。

預かった真名に、あたしなりに応えるためにも。

男の情報を元に、雪蓮と二人、偵察に来たあたし。

やはり黄色い布を巻いた連中が、一カ所に固まっている。

「どうする？」

「そうね。放っておく訳にはいかないわ。商隊が襲われたら、守るのも大変だし」

打倒漢王朝という大義名分があっても、所詮は反乱でしかない。
こうして、守るべき民衆を襲うようなマネをしている限り。

歴史の事実としてそれは知っていたけど、実際に目の当たりにしてみると……やっぱ、許せない。

「やるしかない、か」

「ええ。戻って作戦を立てましょ」

「……いや、そんな余裕はなさそうだ」

「どういう事？」

「ほら」

雪蓮は、あたしの指し示した方を見て、あっという顔。

「火の始末を始めている……って事は」

「そう。そろそろ動き出す、って訳じゃないか？」

「でも、戻って待ち構える時間も……くっ」

カチャ。

剣を手にする雪蓮。

「おい、まさか一人で斬り込みかける気？」

「……ええ。二百と言ってもたかが賊よ。何とでも」

「無茶だって。雪蓮にもしもの事があつたらどうする」

「その時はその時。蓮華もいるんだし」

「バカッ！」

パン！

思わず、あたしは手を出してしまった。

「綾子？」

雪蓮の頬が、赤くなっている。

「ゴメン。でも、落ち着いて。昨夜の誓い、忘れてないだろ？」

「そんな訳ないじゃない。わたしにも、大切な誓いだから」

「だったら、もう少し自分を大事にしろ！ いいか、今は無茶をする時期でも場面でもない」

「でも、放っておいたら！」

「わかってる。でも、雪蓮のやろうとしている事は、ただの蛮勇だよ。それがわからない雪蓮じゃないだろ？」

「……………」

下唇をギュッと噛みしめながらも、あたしの言葉を聞いてくれている。

「大丈夫。それより、あたしに策がある」

「策？」

「ああ。……周泰、頼みがある。出てきてくれない？」
シュタッ。

あたしの言葉を合図に、周泰登場。

「気づかれていますか。いつからですか？」

「うん？ 南陽を出たあたりかな？」

「最初からですか。私もまだまだ未熟ですね」

周泰、がっくりと落ち込んでいる。

「いや、それは違うさ。だって、雪蓮も気づいたの、さっきだろ？」

「全く、鋭いわね綾子は。そう、さっきわたしが叩かれた時に、ね。」

……冥琳が気を回したんだろうけど、わたしでも全然わからなかつ

たのに。綾子、つくづく底が知れないわね」

主が平手打ちを喰らって、僅かだけど空気が動いた。

……でも、あたしってこんなに鋭かったかな……？

どうも、こっちに来てから、いろいろとパワーアップしている気がする。

……ま、今は気にしないでおう。

「で。本隊に戻って、この事をまず陸遜に伝えて。あと……」

「わかりました。ではすぐに戻ります」

再び姿を消した。

うん、やっぱり忍者だよな……どう見ても。

「どうするの？」

「ま、見てなって」

「お待たせしました」

約束通り、十分程で周泰が戻ってきた。

「美綴さんの弓と、かき集めた矢。それに、荷駄の中にあったこれを」

「ありがとう」

「何それ？」

革袋から取り出した物を、雪蓮に見せた。

「花火？」

「そう。これを、矢にくくりつけるんだ。悪いけど、二人とも手伝って」

「は、はい！」

「いいけど、どうするの？」

「へへ、ロケット花火もどきを、ね」

「ろけっと花火？」

「ま、いいからいいから」

準備が整うと、あたしは弓を手に立ち、

「周泰。合図したら、こいつを反対の丘で派手に叩いて欲しい」

「それで、銅鑼を？ 構いませんが」

「頼む。合図は、花火の三発目だ」

「わかりました。では！」

再び、姿を消す周泰……流石にもう、驚かない。

「で、雪蓮には……」

作戦を告げ、任務を耳打ち。

「いいけど、それだけ？」

ちよつと不満そうだ。

でも、作戦の変更はしない。

「それだけだ。じゃ、頼む」

「はい」

「さて、と」

一人になったあたしは、賊の集団を見やった。

「よし、野郎ども。行くぞ」

「応！」

頭とおぼしき奴を発見。

あたしはそこで、大きく深呼吸。

……そして、これからの事に覚悟を決める。

大切な人を守るため……そう。

バシッ！

両手で頬を叩き、気合を入れた。

「よし！」

そして弓を構え、盗賊の頭に狙いをつける。

慣れ親しんだよりも少し離れているけど……不思議と、あたしは外す気がしなかった。

「……射っ！」

矢は狙い変わらず、頭に向かい。

「グワッ！」

その眉間を射貫いた。

もちろん、無事では済まない……恐らく、即死だろう。

とうとう、この手で人を……殺した。

その事実、もう消しようがない。

震える手を、あたしは無理に抑えつけた。

「済まないな。だけど……」

さっき準備した、花火付きの矢をつがえ、放つ。

賊が混乱の最中でなければ、この策はあまり効果がない。

だから、後悔は後ですればいい……いや、そうでなければ。

パーン！

火薬とはいえ所詮は花火。

だが、混乱から立ち直る前の賊には、十分な効果があった。

「お、お頭がやられた！」

「て、敵襲……！」

「くそ、どこだ！」

この辺りは木立が密集しているから、そうそう見つかりっこない。

ドーン！

そして、三発目を打ち込んだ。

すかさず、

ジャーン、ジャーン、ジャーン！

銅鑼の音が響き渡り、連中はますます混乱する。

「盗賊ども！ 貴様らは完全に包囲されている！ 命惜しくば、武

器を棄てて投降しろ！」

そして、凜々しい雪蓮の声。

戸惑う賊。

うん、いいぞ、その調子だ。

……が、やはりというか、そうそう思い通りには行かないようで。

「騙されるな！ てめえら！」

次席の指揮官……いや、次席の頭（？）らしき奴が、鎮めようと

懸命だ。

そして、騒ぎ立てる仲間を何人か、斬り捨てはじめた。非情だけど、流石に効いたのか、混乱が収まり始めた。

……やれやれ、しょうがない。

あたしは、残った矢を、立て続けに射つ。

連射なんて練習した事もないのに、あまりにもスムーズに身体が動いた。

そして、叫んでいた幹部と、その周りが矢を受けて倒れた。

「さあ、どうする？ 次はお前だぞ！ 後から増援も迫っているぞ。皆殺しに遭いたいかつ！」

ナイスタイミングで、雪蓮の畳み掛け。

更に、彼方で土煙が上がる。

観念したのか、賊たちはついに武器を捨て出した。

……ちなみに、あれは周泰に、とにかく土埃が立つように派手に動き回って貰っただけで、遠目だからこそ使えるトリック。

ま、結果オーライって事で。

「お見事でした」

「美綴さん、まさに文武両道ですねえ」

陸遜が警護の兵士を引き連れてきて、賊は皆連行。

もちろん、こちらは被害なし。

雪蓮は暴れ足りなさそうだけど。

……で、陸遜も周泰も、しきりに感心……というか、何かあたしを見る目が変わってないか？

「いやいや、たまたまさ。それに、こんな子どもだまし、相手がまともな軍隊なら通用しないさ」

「いえ。流石は雪蓮様が、真名を預けられただけの事があります」

「……知っていたのか」

「昨夜、聞いてしまいました。申し訳ありません！」

「ま、聞かれて悪い事はないし。な、雪蓮」

「そうね。だから明命、気にする事ないわよ」

「は、はい。わかりました」

と、雪蓮があたしに顔を寄せてきた。

「綾子」

「ん？」

こうしてみると、ホント美人だよな。

あたしも容姿にはそれなりに自信があるけど、並んだら……負けそう。

「……後悔、してる？」

「……いや。もう、吹っ切れた。やるさ、皆のためにも」

キッパリと言い切ったあたしを見て、雪蓮は満足そうに頷いた。

「ん、ならいいの。さ、行きましょ」

「ああ」

〵四〵（後書き）

戦闘シーンの描写は難しいですね。

この程度で苦戦しているなら、合戦とかはどうなるのか……ちよつと不安ですが、恋姫無双でそれ抜きつてのは無理なので、なんとか頑張ろうかと思っています。

更新が不定期になるかも知れませんが、引き続きよろしくお願い致します。

ご意見、ご感想などもお待ちしております。

〃伍〃（前書き）

仕事の都合と、いろいろと微修正をしているうちに間が空いてしまいました。

しかし、だんだん綾子がオリキャラ化している気がする……。

伍

あれから、賊の襲撃もなく、一行は無事に目的地へ。

同じ荊州の中、とは言え、やっぱり中国は広いもんだ。

「へえ、結構大きな街だな」

「ここは襄陽というところです。大陸中から、人も物も集まりますから、賑わうのが当然ですね」

「太守は、劉表？」

「はい、正解です」

「って事は、蔡瑁や張允、カイ越にカイ良、伊籍あたりもいるって事か」

あたしの知識はゲームがベースだから、わかるのはせいぜい名前と能力値ぐらい。

このあたりは出てきた筈だけど、この世界だと実在しない奴もいるんだろうな。

……と、陸遜と周泰が呆けている。

「どうした？」

「……いえ。劉表配下を、それだけ把握しているとは驚きです」

「明命ちゃんの言う通りです。わたしは立場上、知ってますけど」

あ、勘ぐられたか？

「い、いや、あたしも旅の道すがら、いろいろと……な？」

「……………」

「……………」

うむ、また誤解されたかな、もしや。

そう言えば、雪蓮が妙に静かだけど。

つか、むしろ沈痛な顔。

「どうかしたのか、雪蓮？」

「……え？ あ、うん……」

生返事なんて、雪蓮らしくもない。

と、陸遜が小声で話しかけてきた。

「美綴さん、劉表さんは、雪蓮様の仇なんです」

「仇？」

あたしも、雪蓮に聞こえないぐらいの声で返す。

「はい。私が仕官したばかりの頃、孫堅様と劉表さん、戦っていたんです」

「……で、その戦いで、孫堅さんが？」

「はい……。命は助かったものの、傷が治らないうちに疫病で……」
見ると、いつも明朗な周泰までも、暗い顔をしている。

黄蓋さんも、孫堅さん亡き後の苦勞を語っていたし。

うん、事情はわかった。

なら、あたしのすべき事は……と。

「さて、飯にしようぜ」

ポン、と雪蓮の肩を叩く。

「綾子……？」

「襄陽ってのは賑やかなんだろ？　　なら、美味しいものもあるって訳だ」

「……………」

「あたしは、雪蓮の気持ちがわかる、なんて言わないぜ？　　でも、そんな顔をしていても、何も変わらないぞ」

「綾子……。あなた……」

「ま、頭で考える前に、まずは空腹を抑える事が先。な？」

そう言って、ニカツと笑って見せる。

苦しい時ほど、笑えってな。

「……不思議ね、本当にあなたって」

「難しい事考えるのは苦手だからな」

「……わかった。そうしましょう」

やっと、いつもの雪蓮に戻ってくれた、かな？

周泰と陸遜も、ホッと一息付いている。

商隊の面々も、食事となれば異論はないらしく、一同連れ立って、

食堂街へ。

美味しい昼食を済ませ、本来の目的だった蜂蜜も無事に購入。
すかさずとんぼ返り……という訳ではないので、そのまま宿へ。
まだ日も高いし、寝るには惜しい。

折角だから、街を見て回りたいなあ。

「うーん、わたしはやめとく。いろいろとヤバいしね」
それならそもそも、今回の任務自体が適任じゃない、って事になるんだけど。

「張勳が腹黒い、って意味、少しはわかった？」
ごもつとも。

あたしが雪蓮の立場でも、やっぱりムカついただろうなあ。

「では、私をご案内します」

「なら、私も一緒にいいですかあ？」

周泰と陸遜は来てくれるらしい。

あたし一人だと、何かと勝手が違うので正直助かる。

「なら雪蓮、留守番だな」

「そうね。あ、帰りにお酒よろしくね」

「はいはい」

全く、酒好きなのはどこにいても同じか。

「では、準備してきますので」

「ああ。じゃあ三十分……じゃないな、四半刻後に」

あたしも準備……っても、何も無いな。

この時代の金を持っている訳でもないし、いくら物騒な世の中とは言え、目立つ武器を持ち歩いて無用な警戒をされるのもアレだし。
護身用に、何か手軽な武器でも欲しいところだな。

まあ、稼ぐ方法が見つかれば、だけどな。

軽装になった周泰と、いつも通りの陸遜。

もつとも、軍師がいつも甲冑姿なんてあり得ないけどさ。

「ねえ、明命ちゃん。ちょっとだけ、寄ってもいい？」

と、陸遜が書店を見ている。

やっぱり軍師なんだなあ、と変な感心をしてみるあたし。

が、何故か周泰、慌てているんだけど。

「だ、ダメですよ！ 穏さま」

「で、でもお、ちょっとだけでも」

「ダメです！ 冥琳さまからも、絶対に止めるようにって言われていますから」

「うー。でも……」

未練たっぷりの陸遜に、何がなんでも止めようとする周泰。

……何なんだ、一体？

「なあ、陸遜は軍師だろ？ なら、書を求めるのは当然だと思うんだけど」

あ、陸遜の顔がパツと輝いた。

「そ、そうですねえ。美綴さん、私の事、よくわかりですね」

「だ、だから、ダメなものはダメで……。美綴さま、止めて下さい！」

どっちも譲らないなあ。

「なら、周泰が買ってきたらどうなんだ？ 欲しい本は決まってるんだろ？」

「え？ は、はあ……。ですが……」

「ううー」

妥協案にも、どうにも煮え切らない。

というか、話が見えない。

「周泰。どうしてそこまで止めるんだ？」

「え、ええとですね……。その、あの」
思い切り動揺してるぞ？

「陸遜は行きたがってるのに、必死に止めるのがわからないんだよ。それに、周瑜がそれを頼んだってのも」

「それは……」

言い辛そうだな。

「あ、無理には聞かない。言えない事情があるんだろ？」

「……すみませ〜ん。私の病気のせいなんです……」

「の、穏さま！」

「いいんですよ、明命ちゃん。美綴さんが不審に思うのも当たり前ですから」

「穏さま……」

「どういう事だ？」

周泰は目を伏せ、陸遜は搾り出すように、いつもよりも更にゆっくりと、語り出した。

「私……。素晴らしい書に出会ったと、とくても興奮してしまうんです」

「と、言うത്？」

「はい。例えば、美綴さんを襲っちゃうかも知れません」

「は、ハア？ あたしは、そっちの気はないぞ！」

そうでなくても、同性からもてて困ってたんだから、マジ勘弁。

「いえ、穏さまが仰ってるのは物の例えでして」

いや、流石にわかってるけど。

ホントに襲われたら、反射的に防衛行動に走るぞ。

「だから、書は好きですし、いろんな書を読みたいのですが……」

「……その調子で書店に入ったら最後、どんな事になるか予測するのも悍ましい、と」

「私としても、とても不本意なのですが……お止めするしかないんです」

なるほどなあ。

しかし、厄介な病気というか……軍師が好きに書を読めないのは、何とかしないと。

「……とりあえず、今日のところは止めておこう。何か、ちゃんと手を考えておかないとダメだ」

「はい。穏さま、美綴さまの仰る通りですので」

「はぁーい」

不満そうだけど、仕方がない。

……ホント、何とかならないかな。

こういう時、氷室あたりならいい考えが浮かぶんだろうけど、あたしじゃ無理。

つくづく、自分のおバカさが恨めしい。

「あーっ！」

あたしなりの悩みは、突如して上がった大声で中段。

……あれ、周泰？

何やら硬直しているようだけど。

「お、お……」

「お？」

「お猫様……！！」
へ？

「明命ちゃん、またですかあ」

またって何またって？

見ると、三毛猫が毛繕い中。

じりじりと間を詰めていく……でも、相手は野良猫。

一定距離まで近づくと、身構えて……。

シュタッ！

周泰が手を伸ばしたその瞬間、ダッシュ。

「ああ、申し訳ありません。貢ぎ物が……今、用意します！」

「貢ぎ物って……おい！」

あつという間に、どっかに行ってしまった。

「……で、あたし達はどうすりゃいい？」

「……そうですねえ、とりあえず市でも見に行きましょうか」

「……賛成」

武将が女ばかりなのにも驚いたけど、みんななんていうか……個性強いかも。

「ふう、結構歩いたな」

「ですねえ」

市の外れにあった茶店で、一息つくあたり達。

「お猫様、待っていて下さらなかったのですね……」

そして、すっかりしよげている周泰も。

「そんなに猫が好きなら、飼えばいいんじゃないか？」

「そうしたいのはやまやまなのですが、お猫様を養えるだけの給金がありませんから」

「そうなの？」

こつくりと頷く。

周泰の性格からして、誇張でもウソでもなさそうだ。

「でも、陸遜は高価な書を揃えているようだけど。そんなに給金に差が？」

「ああ、違うんです。私は、実家が多少裕福ですので多少、ね。」

この長閑さ、そのあたりから来てるのかも。

「だから、お猫様をお見かけした時は、お近づきになれるよう努力を」

うーん、ピュアだ。

こんな素直な娘だ、何とかしてやりたいなあ。

……と、あたしのお節介スキルが発動。

あ、そうだ。

「陸遜。この襄陽の規模なら、コレクターもいるんじゃないか？」

「これくたー、ですかあ？」

首をかしげる彼女。

「ああ、ゴメンゴメン。好事家というか、珍しい物を集める金持ち

みたいなの」

「はあ。それなら、いると思いますけどお」

「よし。なら、一旦宿に戻って、そいつのところへ行こう」

一度決断すると、あたしは即行動がモットー。

という事で、二人の手を引いて宿へレッツゴー。

「あ、あの、美綴さま？」

「あら」

戸惑っているようだけど、気にしない方向で。

一刻後。

ずっしりと重い革袋を手し、好事家の家を出るあたし達。

「思ったより、高く買って貰えたかな」

「す、凄い大金ですよ、これ」

周泰が眼を丸くしてる。

ちなみに売った物は、カバンに入っていた英単語暗記用のカード

(白紙)に、赤い下敷きと赤マーカー。

試験が近かったので入っていたけど……この時代じゃ役に立たないというか、使い道がない。

でも、この時代の人からすれば、書いた文字をマーキングしてそれが見えなくなるとか、掌よりも小さい紙の束とか……ま、あり得ないよな。

後は陸遜がばっちり交渉してくれたお陰で、まとまった金になった。

……決して、勉強が嫌で手放した訳じゃないからな？

そして市で買い物をし、裏路地へ。

「美綴さま、薬の材料なんて揃えてどうするのです？」

「ま、いいからいいから。周泰、このあたりか？」

「は、はい。……あ、おられました！」

裏路地で、日の差す一角。

そこには、確かに猫たちの姿がある。

日向ぼっこに格好の場所、って訳か。

「じゃ、周泰。これを持って、近づいてみな」

「え？　で、ですが……」

得体の知れない植物の茎や葉を渡され、明らかに戸惑っている。

「いいから、騙されたと思ってさ」

「は、はい」

恐る恐る、猫たちに近づいていく。

無論、連中もそれには気づいているし、当然警戒する。

「その茎を何本か、猫たちの前に投げて」

「え？　でも、お猫様たちに当たったら」

「そんな程度でケガする筈もないし、そもそもよけるから大丈夫」

「わ、わかりました！」

意を決し、周泰が放った茎は猫たちの前に。

驚いてよけるものの、興味津々といった風情でそれに近づき……。

「ゴロゴロ」

「ニャーン」

途端に、猫たちが無警戒状態に。

「え？　こ、これは？」

呆氣にとられる周泰の頭をポン、と叩いてから、あたしは猫たちのところへ。

そして、ブチ猫を抱きかかえてみせる。

「ホラ。今なら好きなだけ、抱けるぞ？」

「あ……」

周泰は虎模様の猫に手を伸ばした。

もちろん逃げも引っかく事もなく、大人しく彼女の腕の中に。

「あうあうあう」

うん、至福の笑顔だな、まさに。

「モフモフですう」

野良猫ならここまでするのは、普通は無理。

でも、今の猫たちは全くの無抵抗。

「あのー、何をしたんですか、一体？」

キョトンとしながら、残った茎を手にする陸遜。

「木天蓼またたひさ」

「木天蓼？ 確か、冷え性に効く薬の材料でしたね」

「そう。でもこれ、猫の大好物でもあるんだ」

「……なるほど。搦め手から攻めた訳ですか」

妙に感心されてしまった。

「うふふふ、モフモフ、モフモフ」

そして、周泰は……しばらく元に戻らないな、これ。

その夜。

宿に戻ってから、何故か周泰が私の前で土下座。

「美綴さま！ 是非、私をあなた様の弟子に！」

「い、いや、弟子っても……」

「お願いします！ あ、真名もお預けします、私の事は明命とお呼び下さい」

すっかり眼の色の変わってしまった周泰。

「い、いや、真名は……いいの？」

「はいっ！」

断言されてしまった。

「じゃあ、あたしも綾子でいいけど」

「ありがとうございます！ 綾子お姉さま！」

「ちょ、ちょっと待て！ なんで『お姉さま』なんだ！」

「え？ お気に召しませんか？」

そこ、ウルウルすな！

あたしが悪者みたいじゃないか。

ウルウル。

ウルウルウルウル。

ウルウルウルウルウルウル。

「だぁぁ、わかったわかった！ 好きにしろ！」

パツと、満面の笑みを浮かべる周泰……いや、もう真名で呼ばないとまた泣かれそうだから、明命か。

そして、何故か陸遜にも真名を預けられてしまった。

「それだけ機知に富んでいて、人を惹きつける御方ですから」と、陸遜……もとい穩。

……なんか、どんどんあたしが過大評価されていく気がする。

「ま、なるようにしかならない、か」

市で買った、猫のぬいぐるみ（明命とお揃い）を抱えながら、あたしは眼を閉じる。

いろいろあって、疲れた……。

〵伍〵（後書き）

累計PVが10,000を超えました。

見ていただける方が存外に多いのに正直、驚きです。

一定ペースで更新するのと、乏しい文才でどうやって進めていくかが今後の課題でしょうか……。

ご意見、ご感想を心よりお待ち申し上げます。

〓六〓（前書き）

更新が空いてしまったので、頑張って連投してみます。

タイトルが無双なのに戦いのシーンがないよ、とご指摘をいただき
そうですが、今回はこれがメインになります。

拙い描写で恐縮ですが、引き続きご一読いただければ幸いです。

六

いろいろあったけど、襄陽の街を後に、南陽へと向かう一行。昨日また市をぶらついて、剣を二振りゲット。

片方は、まあまあ手頃、でも特に銘もない普通の剣。

もう片方は……見た瞬間、インスピレーションというか、とにかく買わなきゃ、と思ったもの。

衝動買いといえはそうなんだけど、この剣は何故か、手にしておかないと後で後悔する、そんな気がした。

とは言っても、錆は浮いているわ刃こぼれしているわ、そのままじゃ使えそうにもないんだけどさ。

ともあれ、帰り道も気は抜けない。

盗賊が減った訳でもなく、積み荷は高価な蜂蜜。

でも、行きに比べれば幾分、慣れてきた気がする。

……まあ、隣から明命が離れようとしなないせいも、多分にあるかも。

「綾子お姉さま」

この言われ方も、もう慣れた。

つか、悟った。

「どうした、明命？」

「いえ、お姉さまのようなお召し物、作れるでしょうか？」

「うーん、どうだろ？ 素材はともかく、デザインなら」

「でざいん？」

「意匠の事さ。こういう絵を描ける人を探せば、どうにかなるんじゃないか？」

あたしが着ているTシャツの絵柄が、どうもかなり気に入ったよ
うだ。

キュートな猫デザインのだから、無理もない。

「でも、お金がかかりそうですね……」

「ま、後のお楽しみって奴じゃないか。まずは、今の境遇を何とかしないと」

一時的な金なら、あたしの持ち物を売り払えばどうにかなる事はわかった。

でも、例えばそれで兵士を養ったり、兵糧を用意したり……なんてのは、無理。

そのあたりは、穩が教えてくれた。

猫Tシャツを作るようになるには、まだまだかかりそうだな。

帰路について、三日目。

「雪蓮さま、只今戻りました」

「おかえり。どうだった？」

「はい。十里四方、特に異常はありません。このまま進んでいけると思います」

「わかったわ、ご苦労様」

盗賊も、昼間はあまり活動しないとは言っても、油断は禁物。

そんな訳で、明命が偵察に行ってきたんだけど。

……十里四方って簡単に言うけど、普通に歩いたら一時間はかかる距離。

それを素早く偵察してくるとはねえ。

「綾子お姉さま。私の顔に、何かついていませんか？」

「いや、そうじゃなくって。身のこなしが凄いな、って」

「私はこれを取り柄ですから。雪蓮さまや綾子お姉さまのように強くありませんし、穩さまみたいに頭も良くありませんし」

「そんな事ないさ。十分、凄いよ明命も」

あまりの可愛さに、思わず頭を撫でてやる。

「はわっ！ お、お姉さま」

「あ、嫌かな？」

「い、いえ……。はふう」

顔を真っ赤にしながらも、嬉しそうだ。

なので、もうちょっと続けてやろうっと。

「ふうん。仲がいいわね、本当の姉妹みたい」

真名を預かっている事にも特に何も言わないけど、少なくとも雪蓮は好意的に受け止めてくれているようだ。

「こんな妹がいたら良かったんだけど、あいにく……な」

あたしは、生意気な弟の顔を思い浮かべた。

どうしてるんだろうか。

桜に惚れているくせに、それを言い出せないシャイな奴だけど、あれでも弟は弟。

……少ししか経っていないのに、もう何年も見ていない気がするな、家族も友達も。

「どうかしましたか、綾子様？」

「い、いや、何でもないよ穏。ちよつと、家族とかの事を思い出して」

「ご家族ですかあ。きつと、皆さん凄腕なんでしょうね」

「そうね。綾子のご両親とか、きつと貴女の国でも名のある存在なんでしょう」

「……それはない。あたしの家は、ごくごく平凡な庶民だし」

……うん。

完全に信用されていないようだ、眼がそう訴えている。

ハア、どんどんあたしが誇張されていくなあ……。

その夜。

道すがらにある、大きめの邑で泊まりとなった。

邑なのでちゃんとした宿屋じゃなく、民宿みたいな雰囲気だけど、これはこれでいいかも。

この時代、電気がある訳じゃないから、夜の明かりと言えば蠟燭か菜種油。

どっちも貴重品なので、庶人が無闇に使えるものじゃない。

なので、夜が更けたら、後は寝るだけ。

……なんだけど、そんなに早く寝るといふ習慣がなかったあたし、
そうそう眠くならない。

襄陽で買い求めた剣のうち、普通の方を手に、宿を出た。

そして、宿の裏手へ。

カチャリ。

月の光を受けて、刃が青白く輝いている。

「よし」

ヒュン、ヒュン！

ただひたすら、無心に剣を振ってみる。

鍛えた鋼の重みがあるけど、思っていたよりは手に馴染む感じが
する。

ついでだから、イメトレもやってみるか。

相手は……そうだな、藤村先生にしてみるか。

何度か剣道場を借りて、稽古をお願いした事があるから、それを

思い出せばいい。

いい勝負にはなるけど、結局はいつも一本取られていたけどな。

……今なら、もう少し遣り合えるかも知れないけど。

もしあっちに戻る事があれば、一度手合わせをお願いしてみよ
う。

とりあえず、仮想敵になっていたきますかね。

……今、家が数軒木っ端微塵ね。

……今度は、地面に月みたいにクレーターですよ？

……あ、慎二がわくわくざぶざぶんまで吹っ飛ばされた。

……藤村先生を思い浮かべると、何故か人外な結果ばかり出るの
は何故だろう。

この世界も、大概人外ばかりの筈なんだけどなあ。

……うん、藤村先生、あなたはバーチャルでも敵に回さない方が
いい事はよくわかりましたよ、ええ。

「お姉さま？」

「明命か。どうした？」

「いえ、外から話し声が聞こえたので」

……あれ？

「な、なあ。そんなにはっきりと聞こえた？」

「は、はい」

どうも、声に出していたらしい。

こっちに來てから、独り言が増えた……のかなあ。

と、あたしは思考を中断。

……そう、この気配は……。

「綾子お姉さま」

「……ああ」

殺氣。

それも一人じゃない、かなりの人数だ。

「雪蓮と、穩も起こしてきてくれ。あと、警護の連中も」

「はっ！」

「呼んだかしら？」

「もう起きてますから大丈夫ですよ。ふあああ……」

流石は、名のある将だけの事はあるようだ。

氣を回すだけ、無駄だったかな？

「明命。武器を取ってきたら、様子を探ってきて」

「御意！」

身の軽さは、絶対あの娘には勝てないな。

ま、人それぞれ、特技があるってのはいい事だけども。

……あたしは、一体何が特技なのかねえ。

「なるほど。黄色布を巻いた盜賊さん、五百名ですか」

「ちよっと多いわね」

「……確かに」

明命の報告に、正直頭を抱えなくなった。

この前の二百でも十分すぎたのに、今度は更にドン、更に倍。

古すぎる、というツツコミが聞こえた気がするが、多分に空耳だろう。

「穩。どうする？」

「そうですねえ」

と、何故かあたしを見る穩。

「な、なんだ？」

「綾子さんの弓で、指揮官さんを倒すのは必須ですねえ」

あ、やっぱり。

「ただ、この間もそうだったけど、連中、意外とそれだけじゃ崩れないかも知れないぞ」

「はい、それはその通りだと。ですが、後は雪蓮様と明命ちゃんで、頑張っていただきましよう」

「どういう事？」

雪蓮が首を傾げる。

「今回は、投降させるのはちょっと無理かも知れませんが……」

「ま、いいわ。穩、作戦を説明して」

「はぁい♪」

穩の指示通り、あたし達は展開を始めていた。

「あれです」

「わかった」

明命があたりをつけてくれた、盗賊の頭目らしき男。

腕組みをして、何か指示を飛ばしている。

距離は……百メートル、いや百五十メートル以上はありそうだ。

正直、この距離での弓は経験がない。

三十三間堂の通し矢でさえ、百二十メートル程度だし、それですら普通の人間には無理な注文。

それをいきなりやれ、ってんだから……穩もああ見えて、結構無茶振りするな。

とは言え、時間がない。

ギリギリギリ。

矢をつがえ、放つ。

ヒュン。

グサツ！

「う……」

ドサリ。

短くうめいて、頭目は倒れた。

どうやら、首筋を射貫いたらしい。

……前ほど、手の震えは、ない。

慣れたくはないけど、慣れるしかない……よな、こればかりは。

「では、後は手筈通りに」

「わかった。明命、気をつけろよ」

「綾子お姉さまも。では！」

賊は予想通り混乱を始め、それを幹部とおぼしき連中が抑えにかかっている。

ここまでは、前回と同じ。

ただ違うのは、村の中という立地。

つまり、一方的に弓で撃つのは不可能。

あと、違うのは、今日が夜、という事。

そして、月が隠れ始めた。

明るかったあたりが、不意に暗くなる。

よし、今だ。

距離を一気に詰めたあたしは、連中の至近距離まで迫っていた。

しばし止まり、眼を閉じる。

グサツ！

「ギャアアアア！」

「ふんっ！」

「はっ！」

雪蓮と明命が、斬り込みをかけた。

雪蓮は背後から、明命は頭上から。

暗闇の中での出来事に、連中はますます混乱する。

そして、あたしも眼を見開いた。

よし、ある程度だけど、見える！

ギリギリギリ。

ヒュッ！

「ぐわあああ！」

「ぐふっ！」

あたしの弓を合図に、他の兵士も一斉に矢を放つ。

当てる事が目的ではなく、混乱を増幅させるのが狙い。

「て、敵の待ち伏せだあ！」

「に、逃げろ！」

もう、統率も何もあつたもんじゃない。

「よし。かかれえ！」

「応！」

あたしの合図で、兵士達も斬り込む。

もちろんあたしも、剣を抜いた。

ザシュ！

肉を引き裂く感触。

そして、返り血が降りかかる。

もちろん、気持ちのいい訳がない。

むしろ、吐きそうだ。

……でも、やらなきゃ、自分が、みんながやられてしまうだけだ。

そう思い、気持ちを奮い立たせるしかない。

ゴキッ！

ガスッ！

だいぶ数が減ってきたが、それでも相手は大人数。

剣も、最初ほどは斬れなくなってきた。

切れ味が鈍ってきたのもあるし、そもそも、こんな重さのあるものをずっと振り回しながら動いているんだから。

つまり、へばってきたって事。

やっぱ、時代劇とかゲームみたいに、ひたすら無双……とか、あり得ないって事だな。

返り血が眼に入り、視界が霞んでくるし。

くそっ！

ゴン！

「ぐぼっ！」

斬るというよりも、殴りつけるような格好。

やばいな、そろそろ腕の感覚がなくなってきた。

ふらついたあたしに、

「この野郎、くたばれ！」

賊の白刃が、迫った。

ガギン！

辛うじて受け止め、押し返した。

……が、その弾みで、剣を取り落としてしまう。

もうダメ、かな。

覚悟を決め、あたしは眼を閉じる。

短い間にいろいろあったな。

個性的な連中と親しくなったり、こうして人の命を手にかける事になったり。

……人を殺せばその報いが来る、そういう事なんだろうな。

……あれ、いつまで経っても、何もされない。

霞む眼をこすりながら、恐る恐る見る。

「……ぐぼっ！」

あたしに剣を向けていた男が、倒れた。

背中に、矢が刺さっている。

あ、あれ、一体？

「うわああああ！」

「きええええい！」

周囲には、いつの間にか無数の松明。

そして、人、人、人。

ど、どこからこんな人数が？

「無事か、美綴？」

この声は……黄蓋さん？

どこか懐かしくすらなった、ナイスバディ登場。

「おお、無事か。どうやら間に合ったようじゃの」

「ど、どうして……」

「話は後じゃ。ふむ、誰か」

「はっ！」

兵士の一人がかけてきた。

「この者を、安全な場所に。少し休ませてやってくれ」

「ははっ！」

「こ、黄蓋さん。でも……」

「たまには年寄りの言う事も聞くもんじゃ。さ、行けい」

「は、ははっ」

た、助かった。

安心したせいか、あたしの意識はそこで途絶えた。

「……………」

知らない天井で、眼が覚めた。

夢でも見ていたのかな、あたし。

「おお、気がついたようじゃな」

「……黄蓋、さん？」

「うむ。二日も寝ておったから、気が気でなかったぞ」

そう言いながらも、黄蓋さんは笑っている。

「あたし……何が……？」

記憶が、ぼんやりと戻ってくる。

確か、賊に襲われて、殺し合いになって……。

……そうだ、たくさんの血を見たんだ。

「うぷっ！」

「ほれ、桶じゃ」

「す、すみませ……げほっ、げほっ！」

何も食べていないのに、胃の中のもものが全て、逆流してくる。喉に苦いものがこみ上げてきて、桶の中がますますカオスに。

「よくやったの。しばらくは辛いじゃろうが……」

「ハア、ハア、ハア……。え、ええ」

布で、あたしの顔を拭う黄蓋さん。

「あ、ありがとうございます……」

「何、若い者はそれでいい。さ、もう少し休め」

なんか、母さんにあやされているような気持ち。

……今は、この時を大切にしよう。

あたしは、もう一度眼を閉じた。

「さて、儂も一眠りするかの」

おやすみなさい。

そして……ありがとうございます、黄蓋さん。

後で聞くと、黄巾党が村を襲う、という情報が入り、周瑜が袁術に申し入れ、黄蓋さんが駆けつけた、という事だった。

タイミングはまさに間一髪、というところだったみたいだけど。

……どうやら、あたしはもう少し、この世界にいてもいいみたいだな。

〓六〓（後書き）

所詮ゲームなので某無双みたいに一人でバツサバツサ、というのもありなのでしょうが、変なところでリアル指向なため、こんな感じでまとめてみました。

現在、オリキャラをどうしようか思案中です。

全く出さないのも手ですが、話が錯綜しない程度なら………というのもありますし。

ご意見、ご感想がありましたら是非お寄せ下さい。

〓七〓（前書き）

また間が空いてしまいました。

試行錯誤していてなかなかまとまらなかったもので……。

登場人物が多いので、性格や口調、キャラクター設定が間違わないか、違和感を覚えないかが少々心配になってきました。

「そんな事はいいいから更新きちんとしろ！」とお叱りをいただく前に続編、公開です。

翌朝眼が覚めると、身体もだいぶ楽になり、頭もすっきり。

雪蓮に穏、黄蓋さんの姿はもう、なかった。

もともと黄蓋さんは賊征伐で出陣した都合上、作戦が終わったらさっさと引き上げる必要があり、蜂蜜も早く運ばないといけないので、警護で雪蓮と穏が同行。

で、今回の行軍にはイレギュラー参加で、制約のない明命だけが、村に残った。

まあ、あまり世話をかけるつもりもないので、さっさと床上げ。

「綾子お姉さま、もう大丈夫なのですか？」

「ああ。いつまでも寝ていたら、身体にカビが生えちゃうよ」

奇跡的というか、あたしは過労で寝込んだものの、身体そのものは全くの無傷。

剣同士で打ち合った時に、刃の破片が飛んでいたみたいだけど、全部胸当てとか籠手も刺さっていたし。

まあ、いろいろと考えると……運が良かったんだろうな、あたしは。

今は、その幸運に感謝、だな。

「さて、ちょっと身体をほぐすかな。明命、付き合って貰える？」

「はい、喜んで！」

うーん、いい笑顔だ。

もともと純な娘ってのは感じていた事だけど、何より心から慕ってくれているのが嬉しい。

ガチャ。

外に出た瞬間。

「ニャーオ」

「ニャーン」

……なんでしょう、この猫の大群は。

「ほわわわ、お猫様がたくさんいらっしやいます」

既に明命、トリップしかかってるけど。

そのうちの一匹が、トコトコとあたしのところに歩いてきて、顔を持ち上げた。

「ん？ 喉を撫でろ、って事か？」

「うにゃ」

そうだ、と言わんばかりなので、とりあえず撫でてやる。

「ゴロゴロ」

喉を鳴らしながら、あたしの手にすりすり。

や、やばい、可愛らしすぎる。

それを見た他の猫たち、一斉に殺到。

腹を見せて寝転がる子に、やたらと身体を擦りつけてくる子、甘えるように鳴き声を上げる子。

「綾子お姉さま、凄すぎです」

いや、あたし何もしてないんだけど。

木天蓼が、服にでも染み付いているのかな？

でも、仕草が何か違うし……どうなってるの、これ？

「さて、と」

いきなりの猫攻撃（？）で、ちよつと調子が狂ったけど、ストレツチ開始。

明命は……。

「ほわわ」

……まだトリップ中か。

ちよつと可哀想だけど、現実には引き戻すか。すううう。

「明命!!」

「ひゃ、ひゃい！」

文字通り飛び上がる。

「気持ちにはわかるが、とりあえずは付き合ってくれ。終わったら、好きなだけ堪能していいんだからさ」

「は、はい」

軽く一時間は経っただろうか。

おかげでいい汗をかいて、だいぶすっきりした。

「ふう、流石は明命だ。いい鍛錬になったよ」

「ありがとうございます。でも、一本も取れませんでしたけど」

実際はきわどい場面もあったし、そこまで圧倒していたとも思わない。

「もっと自信を持って。まだまだ強くなる余地があると考えればいいだろ？」

「そ、そうですね！」

「そうそう。常にポジティブ思考でないと」

「ぼじていぶ？」

「前向きに、って事。その方が明命らしくていいと思うぞ」

「は、はい。それにしても、綾子お姉さまの言葉、時々わからなくなりますね」

横文字は使わないようにって思っているんだが、思わず出ちゃう事がある。

向こうの世界では、ごく普通に使っている横文字がそれだけ多かったって事だろう。

「もし。その御仁」

と、誰かが声をかけてきた。

白を基調とした露出多めの服を着た、それでいて隙のない女性。手にした朱槍も、かなり使い込んでいると見た。

「あたし？」

「うむ。貴殿たちのお手並み、勝手ながら拝見させていただいてい

た」

「別に秘密でもなんでもないので構わないが」

「そう言って下さるか。いやはや、良いものを拝見できた」

と、女姓は何か気づいたようで、

「おっと、名乗りも上げずに重ね重ね失礼した。私は姓は趙、名は雲、字は子龍と申す」

流石にいちいち驚く事もないけど、はたまた有名人登場ですよ。

趙雲って……あの趙雲、だよな？

まだ劉備に仕えていないって事かな、でなきゃこんな場所にいる訳がない。

「あたしは姓が美綴で名が綾子。字はないよ」

「姓は周、名は泰、字は幼平です」
すると趙雲はほお、という顔。

「字がないとは珍しい。私もあちこち旅をして来てからわかるが……。美綴殿は五胡あたりの出か？」

「いや、違う。東の島国から来たんだ」

「何と。風、稟、知っておるか？」

趙雲が振り向き、後ろにいた女の子達に話しかけた。

「風は知りませんね。稟ちゃん、どうですか？」

「いえ、私も初めて聞く名です」

「ふむ。だが、その武がもっとも興味深い……。一手所望したいが、よろしいかな？」

「え？ アンタが？」

「そうだ。この者たちは武人ではないのでな」

まあ、それは見ればわかるけどさ。

「風は姓が程、名は立、字は仲徳です。よろしくです、お姉さん」

「私は戯志才です。よろしくお願いします」

二人とも聞いたことのない名前。

ただ、頭は良さそうだ。

あたしが知らないだけで、きっと名のある人物なんだろうな、歴

史的に。

……小さい女の子が、何故にペロペロキャンディーを舐めているのかは、大きな謎だけど。

この時代に、そんなものがある訳ないと思う、流石に。

「ああ、よろしく。で、趙雲さん、相手はあたしか、それとも明命か？」

趙雲はあたし達を見比べてから、

「やはり美綴殿かな。ところで、本来の得物は剣ではござらぬな？」

「へえ、よくわかったな」

「うむ、どこか硬さがあったのでな。もちろん、それでも武人としては申し分のない腕前であったが」

流石に、趙雲ぐらいの実力があると、その程度はお見通しか。

「明命」

「はっ！ どうぞ」

いつの間にか、あたしの薙刀を手になっている。

以心伝心、ここまで来ると心地いいもんだね、うん。

「では、早速」

「いざ！」

空気がピンと張り詰めるような感触。

盗賊を相手にするのはやはり、訳が違う。

本物の武人が持つ、気迫と威厳。

これだけでも、趙雲が口だけの人物でない事がわかる。

「やあっ！」

「！！」

繰り出される鋭い突きを、間一髪でかわす。

時には柄で払うが、全く気を抜けない。

甘寧や明命には悪いけど、実力は趙雲の方が上だろう。

「逃げてばかりでは、勝てませぬぞ？」

「だろうな。なら、これでどうだ！」

後ろに飛び、薙刀を上段に構えた。

「では、今度はこっちから行くぜ！」

そのまま、文字通り薙ぎ払うあたし。

ガアン、ガアン！

全て払われるが、それは織り込み済み。

趙雲の槍が下りたところを見計らい、突きに切り替える。

ガン！

「ぐうっ！」

顔を顰めながらも、受け止める趙雲。

そのまま二十合は打ち合っただろうか、互いに決定打のないまま、お互いに一旦距離を置く。

「想像以上だな、美綴殿？」

「それはこっちの台詞だな。流石は趙子龍ってトコか」

……あ、しまった、つい口が滑った。

案の定、趙雲は訝しげにあたしを見ている。

「美綴殿は、私の事をご存知か？」

「い、いや、もちろん初対面さ」

「それにしても、何やら知っておられるな。お聞かせいただこうか」
チャキ。

槍を構え直す趙雲。

「気にしないでくれ。あたしは率直に、アンタが強いな、って」

「そうは聞こえなかったが？」

誤魔化すのは無理かな。

でも、ホントの事は言えないし、言ったところで信じて貰える訳もないし。

なら、言わずに済むようにすりゃいい……結構、それはそれで難題だけだな。

「ならば、腕ずくで聞き出してみるかい？」

「ほお、言うではないか。面白い！」

ヒュッ、ヒュッ！

冗談のような槍捌きを、これまた冗談みたいにかわしまくるあた

し。

某大佐じゃないけど、とにかく見えちゃうモンは見えちゃってる訳で。

……そして、気づいた。

趙雲の、一見不規則に見える槍捌きに、ある特徴がある事を。突きの深さが、一定周期で繰り返されてる。

つまりは……。

「そこだ！」

「！！」

カァン！

槍の軌跡を読んで、得物を跳ね上げる。

そしてすかさず、石突きで肩を一撃。

「ううっ！」

ガラッ。

趙雲は槍を取り落とした。

そして、その鼻先に薙刀を突きつけるあたし。

「ま、参った。私の負けだ」

「流石は綾子お姉さま……。見事です！」

「星ちゃんが負けるところなんて、初めて見ましたね」

「ええ。星殿は私から見ても、かなりの手練れ……。それがあのようになるとは」

賞賛の嵐。

まあ、悪い気はしないけどね……。なんせ、あの趙子龍に勝ったんだし。

三人も今日はこの村に滞在する、という事で。

同じ宿に落ち着くと、

「では、お近づきに一献」

うーん、この時代の人は酒好きなのかな？

雪蓮といい、黄蓋さんといい。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「何かな、美綴殿？」

「……酒のツマミが、なんでメンマなんだ？」

「おや。メンマは嫌いですか？」

心外だと言わんばかりだな、趙雲。

「いや、そうじゃないけど」

「これほど酒に合う食べ物はありませんぞ。さ、遠慮せずに」

「……明命。もしかして、あたしの方がおかしいのか？」

「い、いえ……。たぶん、お姉さまは問題ないかと」

「だよな……」

これはこれで食えない訳じゃないので、まあいいんだけど。

「ところでお姉さん。さっき、東の島国から来たって言ってましたね？」

ペロペロキャンディーを頭上の人形に持たせて、程立が会話に入ってくる。

……てか、この人形も謎すぎる。

「ああ。そうだけど」

「どのようなところか教えて貰えないでしょうか。興味があります」

「そうだな……」

どの程度まで話せばいいんだろうか。

文明の世代がまるで違うし、横文字は使えないし。

……とりあえず、当たり障りのないあたりを、何とか連想。

「国の広さは、ここよりもずっと狭いんだ。あと、雨が多めで水資源が豊富、それに四季がはっきりしている」

「つまり、温暖にして湿潤、という事でしょいか？」

戯志才も話に加わってくる。

「そうなるな」

「では、食べ物には困らない気候と風土という事ですか。豊かな国

という印象を受けます」

「だから、あのように武に長ける、という事か？」

「いや、それは違うよ趙雲さん。基本、平和な国だから武を磨くというのとは一部だけさ」

「ふむ。では美綴殿は選ばれし者であろうな。あれだけの腕の持ち主、これだけ諸国を巡った私でも、まだ出会っておらぬ」

また誤解されているようだけど、訂正するのも面倒だから、敢えてスルー。

「そう言えば、三人はずっと旅を？」

「私は、仕えるべき主探しでな」

「私입니다」

「……ぐー」

趙雲と戯志才は答えたが……程立が寝てる。

「寝るな！」

「……おおっ！ つい陽気に釣られてうとうとしてしまいました」

「……今日、曇り空なんだけどな」

「おうおう、細かい事気にするなよ、姉ちゃん」

頭上の人形がしゃべった。

……な訳がないってか、腹話術か？

「俺は宝？だ。この風の相棒、よろしくな」

「……よろしく」

うん、ツツコミ入れたら負けだから、これ。

「でさ、程立は何を目的にしているんだ？」

「そうですね。稟ちゃんは仕えるべき相手を決めているようですけど。風はまだですね」

と、何故か程立、ジーツとあたしを見つめている。

「な、何？」

「例えばですけど、お姉さんに仕える事になるかも知れませんね」
「は？」

意味がわからん。

あたしは家臣どころか、袁術の食客でしかない雪蓮の世話になっている程度。

この、一見つかみ所がない、でもあたしの何倍も頭の回る娘が家臣とか。

……うん、あり得ない。

絶対無理。

「ふむ。それも一興か」

ニヤリと笑う趙雲。

「お、おい。あたしをからかっても何も出ないぞ？　なあ、戲志才？」

一番冷静そうな奴に話を振る。

戲志才はそんなあたしを見ながら、

「星殿も風も、茶化してはいますが何割かは本気で言っているようですよ。私から見ても、美綴殿は将器たる素質をお持ちですしね」

……あたし、一体何者だと思われているんだ？

「私も、雪蓮様よりもお姉さまと先に出会っていたら、迷わずお姉さまに仕えていましたよ、きっと」

「って明命？」

あ、酒が入って変なスイッチが入ったか？

そのままスリスリと……って、仕草まで猫っぽくなってるし。

「ならば周泰殿。美綴殿の事、とくとお聞かせ願いたい」

「はい！　綾子お姉さまの凄いのはですね」

まさに四面楚歌。

もう、好きにして……。

そして夜が明け。

「ではでは、またお会いしましょう」

「いつの日か、共に戦いましょうぞ」

「お二方とも、お達者で」

三人は、再び旅を続けるという。
あたしと明命も、南陽へ戻る事にした。
なので、ここで一旦のお別れに。

「賑やかな方々でしたね」

「まあ……な」

おかげで、だいぶ精神的にくたびれたけど。

でも、叶うなら次に出会う時、敵ではなく味方であって欲しいけどな。

「じゃあ、行くか」

「はい……。ところでお姉さま。このお猫様達は」

「……わからん」

木天蓼もないのに、何故かあたしの周りは猫だらけだった。
このまま南陽までとか……ないわ。

「うにゃ」

「綾子お姉さまに一生ついていきます、とお猫様が仰せに」
「言ってねえ！」

こうして、大量のお供(?)と共に、雪蓮たちの待つ南陽へと発った。

……無事に着けるのか、これ？

〳〵(後書き)

星一行登場。仲間にしても良かったんですが、綾子は君主になりた
い訳でも、させるつもりもないのでとりあえずは一旦別れる事に。
試行錯誤していたのは、オリキャラを出そうかどうか、とい
うのもありまして。

呉の武将で、何故キャラ設定がないんだ！と言いたい人物もいま
すし……。

「この武将は是非出すべきだ！」というご意見があれば、お寄せ下
さい。

迷っているところでもあるので、参考にさせていただきたいと思
います。

〃八〃（前書き）

通勤途中でも、携帯投稿である程度書いてみましたが、結構はかどるもので……気がついたら次話のベースが出来ていました。

ただ、携帯の日本語入力だと、人名漢字が……。

恋姫＋無双を書いている限り、仕上げはP Cでせざるを得ないようです。

今回は蓮華登場です。

山を飛び、谷を越え……てはいないけど、決して平坦とは言えない道のり。

それを幾日も歩き、見えてきたもの。

そう、南陽の街。

二人とも、無事に辿り着く事が出来た。

「やれやれ、やっと帰れたな」

「はい、本当に久しぶりの気がします」

実際には一月ぐらいたったけど、いろいろありまくりだったからなあ。

この数日だけでも、盗賊に三度ほど襲われたし。

……当然、全員返り討ちにしたらけどな。

つくづく、自分が強くなっていく事を再認識する日々。

同時に実戦経験が、所詮は競技ではない武道とは違うものかも痛感している。

「さ、行きましょう。雪蓮様がお待ちかねでしょうから」

とりあえず、感慨に耽るのは後回しだ。

……似合わないだけ、って話もあるか。

「ああ、そうだな」

城門を潜る時、

「にゃあ！」

「ニャン！」

結局ずっとついてきた猫達が、サツといなくなった。

「あ、お猫様が」

「ここまで着いてきたって事は……。逃げた訳じゃないんだろ。またやって来るよ」

実際、道中は食料をやらなかった……というか、そんな余裕はなかったし。

正確に数を数えた訳でもないけど、見覚えのある柄は一匹も脱落していない……と思う。

この時代の野良なのだから、自給自足するぐらいの逞しさはありそう。

とは言え、一時的に猫が去っていくと。

案の定、落ち込む明命。

何とか励ましたくて、わしわしと頭を撫でてやる。

「お、お姉さま……」

ん、何か嬉しそうにしてる気が……。

つか、この小動物的な可愛さは……おっと、危ない危ない。

「綾子、お帰りなさい」

見慣れた屋敷で、雪蓮と周瑜が迎えてくれた。

「心配かけてすまん。けど、もう大丈夫」

「……ふふ」

周瑜が、あたしの顔を見て笑みを浮かべる。

「どうした？ あたしの顔に何かついてるのか？」

「いや、顔つきが変わった……そう思ってた。ここに来た時は、強さも感じたが、それ以上に脆さがあった。だが、今は違う。いい眼をしている」

「冥琳もそう思う？ 今の綾子なら、わたしでも互角……ううん、もしかしたら勝てないかもね」

それは流石に、と言いたかったけど、あながち否定出来ないあたし。

「雪蓮の見立てなら、間違いはないだろう。とりあえず、今日はお休むといい」

「それじゃ綾子。無事の帰りを祝ってこれから……」

そう言いかけた雪蓮の首根っこを、むんずと掴む周瑜。

「これから何をする気だ、伯符？」

「そりゃもちろん、お酒を……って、ダメ？」

「ダメに決まっているだろうが！ 仕事ならいくらでもあるんだ、サボってないで取りかかれ！」

「ぶーぶー、いいじゃないの今日ぐらい」

「雪蓮の場合は、何かという酒、という日の方が圧倒的に多いのだがな？」

「冥琳のけちー、いけずー」

「何とでも言え。ほら、行くぞ」

「あーん、助けて綾子ー、明命ー」

ズルズルと引き摺られていく、未来の呉王。

「お、お姉さま……どうしましょうか？」

「どう、って。あの状態の周瑜に、何かする自信あるのか？」

「……いえ」

まあ……頑張れ、雪蓮。

さて。

休んでいいとは言われたが……流石に寝るには、まだ日が高い。明命もやる事があるみたいで、どこかへ行ってしまった。

袁術との関係を考えて、あたしがあまり勝手に城の中を彷徨く訳にもいかない。

何かあつて、雪蓮に迷惑がかかるとマズイしな。

……そんな訳で、ぶっちゃけ、ヒマ。

「あら？」

と、そこにやってきたのは孫権。

「戻ったとは聞いたけど、元気そうね」

「ああ。色々あったけど、何とか……な」

「そう」

周瑜みたいに、しげしげと見られるあたし。

「雰囲気、変わったようね」

「かもな」

「ふ〜ん。……あ、そうだわ。美綴、手空いてる？」

「見ての通り、ヒマだけど」

「なら、ちよっと付き合って貰える？」

孫権から誘われるなんて珍しいな。

「いいぜ」

何をするのかは聞かなかったけど、真面目な娘だ、理不尽な事にはならないだろ。

連れて来られたのは、街。

「何か買物か？」

「それも悪くないけど、今日は自主的に仕事ね。誰に頼まれた訳じゃないんだけど」

内職……とか、そういうタイプじゃなさそうだけどなあ。

「見廻りか？」

「正解よ。警らは本来、警備の兵士がする事なんだけど……」

そう言いながら、孫権は大きな溜め息を一つ。

「……もしかして。あまり大きな声では言えないが、って奴か」

「そう。太守がアレだから、どうしても手薄なのよ」

激しく納得……ってのもどうかとは思うけど、その通りだし。

「治安は大事なのに、全くその方には気が回ってないのよ。だから、見るに見かねて、ってところ」

「確かに。な。税収は減る、人口は減る、おまけに盗賊が増えて更に治安が悪化。まあ、いい事はないな」

「……結構、わかっているのね」

意外そうな孫権。

まあ、ゲームやってりゃ、その程度はわかる。

もっとも、ソースがゲームだなんて、少なくとも目の前の人物には言えないけどな。

「全てがそう。とにかく、袁術には、民を支配する資格はない」
孫権は眼を臥せる。

「民には罪はないわ。彼らを守り幸せに暮らせるようにするのも、逆に恨みを買って抵抗勢力にするのも、全ては支配する側次第だから」

「……………」

「袁術にはその自覚がない。君主に自覚がないなら、臣下が教え諭せばいい。でも、それもない」

無念そうに、唇を噛み締める。

「私が太守なら、少なくとも無為に民を苦しめはしない。……でも、今は想いだけでそれを具現化できる力がない」

「そこまで考えているなら、立派だと思うよ」

「考えるだけなら、誰でも出来る事よ。でも、ずっとこのままでもいい筈もないわ」

「それで、せめて警らでも、と？」

コクリ。

頷いた孫権の表情は、曇っている。

「もちろん、根本的な対策じゃない事ぐらい、わかってる。でも、無力な私には、この程度しか」

うーん、ネガティブ思考に陥ってるな。

なら、切り替えて貰えますかね。

「あたしには、難しい事はわからないよ。頭も悪いしさ」

「……それ、自慢にならないわよ？」

「いいんだ、自覚してるから。だから、孫権みたいいろいろな考える奴は、素直に凄いと思う」

「そうかしら……。雪蓮姉様みたいな人なら、道を自分で切り開けるだろうけど……」

自嘲気味に笑って、

「私にはそれだけの覇気も実力もない。所詮は頭でっかちなだけで」
「おっと、そこまでにしな」

あたしは、わざと孫権の話を遮る。

「美綴？」

「さっき、自分で言ったよな。主人の至らないところは、家来が補えばいいって」

「……言ったわ、確かに」

「なら、そうすればいいじゃないか。周瑜に黄蓋さん、甘寧、穩に明命だっている。あと、バカだけどさ……あたしだって」

「プッ」

思わず噴き出す彼女。

「そうそう。そんな感じで、笑っていなよ。いずれは上に立つ奴がネガテ……いや、後ろ向きじゃ、国中が暗くなるぜ？」

「美綴……」

「美人は笑顔が一番だぞ。あたしみたいにな」

「……ふふ。凄い自信ね」

うん、さっきよりいい笑顔だね。

「天狗はダメだけど、自信は持つべきじゃないかな。これ、あたしのポリシー」

「ぽりしい？」

あ、また横文字使っちゃった。

「信念さ」

孫権は、キッパリと言い切るあたしに少しばかり驚いたようだ。

「強いよね、貴女は」

「そうかな。これが普通だけどな」

「そう。……姉様が真名を預けた理由、わかる気がするわ」
ふう、と息を吐く孫権。

さっきまでの、悩んでいる様子もない。

晴れ晴れとした、いい顔つきをしているな。

「さて、見廻りするんだろ。行こうぜ？」

「そうね。折角だから、少し案内するわ」

いくら太守がおバカちゃんとは言っても、もともとの立地がよく、人口も多い荊州北部。

自然、賑わいを見せる土地柄、かなり豊かな方に入るらしい。

人の数が多ければ、比例して犯罪も起きやすくなる。

そこは為政者の腕の見せ処で、見事治めればそれだけの見返りがある。

……筈なんだけど。

目付きの悪い奴らとか、ガラの悪そうな奴らとか、胡散臭い奴らとか……ちよつと歩いただけでも、いるわいるわ。

襄陽と比べると、活気がやや劣るのは、あたしの気のせいって訳でもなさそうだ。

ガッシャーン！

と、何かをひっくり返す音が。

あたし達は頷き合い、駆け出した。

「お、お前さん方。何をするだ！」

「バカ野郎。俺様から金を取ろうだあ？」

「全くだ。オメエ、頭大丈夫か？」

露天が壊され、商品が散乱していた。

そして、大柄な男に胸ぐらを捕まれている爺さん。

そのそばで、女の子が別の男に羽交い締めになされている。

「や、やめて！ おじいちゃんから手を離して！」

「うるせえ、このガキ！」

「おい、じじい。このガキ、借りてくぜ。もっとも、返すつもりはねえがな」

「あ、菖蒲^{あやめ}！ 孫娘には手を出すでねえ！」

「やかましい！」
バキッ。

剣の柄で殴られた爺さん、額が割れて血が流れ出す。

「さ、来いよガキ」

「い、嫌あああ！ おじいちゃん！　だ、誰か助けて！」

女の子は必死で周りを見渡す。

が、いかにも、という連中に怯えて、誰も手助けする様子がない。

「美綴」

「ああ、行くぞ」

「へっへっへ、誰も助けなんてい……いでででで！」

女の子を捕まえていた男の腕を、ねじり上げる。

「全く。下衆とはまさにお前らの事だな」

突然乱入したあたし達に一瞬怯んだ男達。

が、女の二人連れと見て、嫌らしい目つきで迫ってきた。

「へっへっへ、威勢のいい姉ちゃん。なら、ちよつと俺たちとつき

あ……へごぼっ！」

声をかけてきたそんな輩の一人、皆まで言わせずアゴにアップパー。歯の数本は折れたかも知れないな、手応えからして。

「このアマ！　何しやる！」

いきり立った男達が、あたしと孫権を取り囲む。

中には脅しのつもりか、剣を抜く奴まで。

「さて、どうする？」

「決まっているだろう？　こういう連中には、身体でわからせるしかないさ」

孫権の腕前はまだ見ていないが、自分で警らをする言い出すあたり、それなりに覚えはあるんだろう。

身のこなしから見ても、修練を積んでいるってのはわかるし。

……まあ、目の前のバカ共は、全く気づいていないようだけど。

「死ね！」

ビュン！

力任せに振り回される剣。

手入れが悪いようで、錆が浮いていたり、刃こぼれがあったり。

あたしが襄陽で衝動買いた剣よりは、いくらか斬れそう……その程度。

そもそも、振りが大きすぎ。

「隙だらけだぞ！」

がら空きの脇腹に、回し蹴りを叩き込む。

「ギャーッ！」

肋の数本は固そうだ。

もちろん、そいつは戦闘続行不能。

ギン！

孫権は、剣を抜き、斬り結んでいる。

ザシュ！

「ひ、ひぎい！」

男の一人が、剣ごと腕を斬り飛ばされた。

なかなか容赦がないねえ。

「くそっ！」

「おっと」

ナイフごと突っ込んできた男の腕を捕まえ、

「それっ！」

ボキボキボキ。

「いででででっ！」

そのままへし折ってやる。

「美綴！ 剣は！」

「要らないね。この程度なら」

「そうか。せやっ！」

「うぎゃー！！」

また一人、孫権に膝を斬られる。

「う、動くなテメェら！」

連中の一人が、さっきの女の子に小刀を突きつけている。

「動けば……わかるな？」

「クッ！ 卑怯だぞ、貴様ら！」

「やかましい！ このガキぶつ殺されたくなかったら、武器を捨てろ！」

孫権の一喝にも怯まない。

度胸がいいのか、底抜けのバカなのか。

ガラン。

孫権が、剣を地に放り投げた。

比較的軽傷の別の男が、それを拾い、孫権に突きつける。

あたしも、鞘ごと剣を引き抜く。

「それも捨てろ！ ガキがどうなってもいいのか！」

「あゝ、わかったわかった」

剣を投げる仕草をしつつ、あたしは素早くポケットに手を突っ込む。

そして、剣を放り投げると同時に、手にしたそれを、ナイフ男に投げつけた。

ビシュッ！

「ぐはっ！」

眉間を割られた男、ノックアウト。

ポケットの五円玉を、銭形平次よろしく投げつけてみたんだけどね。

「てめえ！」

孫権の剣を奪った男が、いきり立って孫権を突き刺そうとする。

……が。

チリーン。

鈴の音と共に。

ビュッ！

「……あ？」

男は何が起こったのかも、理解する間もなかっただろう。

なんせ、その瞬間に自分の首が飛んでいたのだから。

「助かったわ、思春」

「はっ。……美綴、貴様気づいていたな？」

「ん？ 何の話？」

惚けるあたし。

甘寧が、屋敷を出てから見え隠れについてきている事は、確かに気づいていた。

もっとも、何もなければ出てくるつもりがないのはわかっていたから、素知らぬフリを試みただけ。

「フン。蓮華様、お怪我は」

「え、ええ、大丈夫」

「では、後始末は私の方で」

男達は、生きていた奴も全員、処刑は免れないだろう。

自業自得とは言え、死刑廃止論者すらいた時代から見れば、何とも過酷な限り。

……でも、これが今の現実。

「ありがとうございますだ、何とお礼を申してよいやら」

爺さん、あたし達が気にするなって言っても、頭を下げるのを止めない。

「こちらこそ、警備が行き届かずに酷い目に遭わせてしまった。申し訳ない」

「とにかく、無事で良かった。じゃ、気をつけて帰りな」

その場を去ろうとするあたし達。

が、爺さん、服の裾を掴んで放そうとしない。

「そ、それじゃおいらの気が済まねえだ！ お、お礼をさせて下せえ」

「だからそのようなつもりはない。気にしないで欲しい」
孫権に同じく。

だいたい、このぐらいでお礼されていたらキリがないし。

「菖蒲。よいな？」

「うん、じゃなくって……はい！」

爺さんと女の子、何か頷き合ってるけど。

「美綴様、でしたかな？」

「え？ あたし？」

「おいらには何もねえ。だから、この孫娘を、使ってやって下せえ」
「……へ？」

啞然とするあたしと孫権。

「い、いや、あたしは……」

「じゃ、しっかりやるだぞ？」

「はい。美綴様、よろしくお願いします！」

……どうなってるんだ、一体？

つか、何故に孫権じゃなくあたし？

訳もわからず混乱するあたしと、あまりの急転直下に目を白黒させている孫権と。

……そして、あたしの目の前でニコニコ、目を輝かせる女の子。
ああ、もう何がなんだか……ハア。

〃八〃（後書き）

まだ迷いはありますが、オリキャラを登場させる事にしました。
この娘が誰なのかは……次話でのお楽しみという事で。

この武将は出すべき、出したらいい、というご意見もお待ちしております。

収拾がつかなくなるらない程度に、頑張って出したいと思いますので。

く九く（前書き）

今回からオリキャラ登場。

そして、黄巾党との戦いを迎えます。

話の展開が原作とだいぶ違ってしまっていますが、原作を忠実になぞるつもりはありません。

そういった話を期待されている方には申し訳ありませんが……。

ノリで書いている部分もあるので、違和感がありましたらご容赦下さい。

九

カッポ、カッポ、カッポ。

馬に乗るのって、案外難しいモンだ。

この時代は鞍も鐙もないから、余計に乗り手の技量が問われる、
つてのもあるだろうけど。

もっとも、あたしが考える以上にこの時代の馬は高価らしい。

「綾子は将だもの。馬に乗っていてもおかしくないわよ？」

という、雪蓮の一言でこうなっている。

まあ、悪い気分じゃないけど……いつの間にか、あたしも将に
なっちゃったな。

しかし、ホントに束の間の平穏だった。

「全く、人使いが荒いんだから」

「仕方あるまい。今回は事情が事情なのだ」

「わかってるけどね、そりゃ」

商隊警護から戻って休む間もなく、出陣命令が下ったとあり、雪
蓮はご機嫌斜め。

ただ、今回は規模が違う。

袁術と張勳のコンビは相変わらずいないものの、与えられた兵士
は一気に二桁増。

そして、雪蓮一統は全員が参加。

……あたしと、結局ついてきた菖蒲も含めて。

ちなみに菖蒲ってのは、あたしから離れようとしないうえ、徐盛の
真名。

結局城に連れて帰るハメになり、雪蓮達を前に自己紹介の最中、
いきなり真名を預けます……と。

流石に断ろうとした途端

「ダメ……ですか？」

って目をうるうるさせて頼まれ……押し切られた。

……この、可愛いものに目がない性分、実は結構損をして……いや、気のせいにしておこう。

それでも頭が痛いってのに、

「綾子様が戦うのに、私だけ留守番なんて出来ません。お供します」と、無理矢理についできた次第。

まだ剣も修行中らしいし、市で見た限り、まだまだ武人としてはこれから、というところかな。

それだけに、あまり無理はさせたくないんだが……。

「ま、いいんじゃない？ 綾子を守ってあげればいいのよ」

と、お気楽に雪蓮に言われる始末。

あたし、何でも出来ると思われてないだろうな……マジ勘弁だ、それは。

「雪蓮さま、只今戻りました」

偵察に出ていた、明命と甘寧が戻ってきたようだ。

二人とも、普段にも増して動きが機敏な気がする。

「ご苦勞様。どうだった？」

「間違はなく、張角ら黄巾党の主だった者共、揃っています」

「糧秣もかなりの量で、規模からして連中の本隊である事は確実と思われます」

「そう。でも、あれだけ大きな陣を構えるとはね。どう思う、冥琳？」

「狙いがわからんのだ。都を窺うのであれば、方角が違うしな」

「そうね。ただ、かなりの数が集まっている事は確か、か」

あたしが見る限りでも、十万近い軍勢の集まりだ。

周瑜曰く、これでも少ない方で、本来なら二、三十万いてもおかしくない、との事だ。

こちらは六万で、しかもあの袁術軍の兵士だけあり、練度は今ひとつ。

その上、精鋭と呼べる兵は全て、本拠地の警護が手薄になるという理由で除外され、割り当てられたのは、新兵と老兵が主体。

ある意味嫌がらせでもあるな、これ。

……正直、戦力としては心許ないどころか、不安だらけ。

「せめて、儂自ら調練した兵が二万もあれば、思う存分暴れてやれるのじゃがのう」

「ないものねだりですけどね。でも、確かにこの兵士さん達では、祭さまの指揮でも厳しいですよ」

戦争は数も大事だが、やはり質の高い兵を揃え、優れた作戦と万全の指揮が必要不可欠。

これで敵が少数ならば、烏合の衆相手に、正規軍が負ける要素もないんだろうけど……。

黄蓋さんみたいな猛者も、穏みみたいな秀才でも、ない袖は振れない……その一言に尽きるって事。

マウスをクリックすれば湧いてくる訳じゃないし。

「うーん」

考え込んでいた雪蓮が、閃いたように言った。

「綾子。あなたならどうする？」

「……はい？」

その一言で、全員の視線があたしに向けられた。

「ちょ、ちょっと待て。何故そこで、あたしに振る？」

「だって、皆が手詰まりなんですもの。あなたなら、何かいい思案でもあるんじゃないかな、って」

「そんなモン、あたしの数万倍頭のいい周瑜や穩が思い付かないのに、無理無理無理！」

「あら、常に前向きが、貴女のぽりしい、じゃなかったの？」

孫権、横文字まで使って追い込むな。

……明命と菖蒲は、期待に満ちた目をしてるし。

周瑜は……ああ、明らかに楽しんでるな。

とりあえず、逃れる方法はない、というのは理解。

ええい、ならそれっぽい事で口から出任せだ！

居直りモード、またの名をやケっぱち。

「とりあえず、火攻めかな」

「火？」

「そうさ。ここ、草原になってるけど、枯れ草が多いなって。火をつけたら、勢いよく燃えたりするんじゃないか？」

歴史に残る名軍師たちに向かって、あたしは何を偉そうに、と我ながら思ってみたり。

「火は何より恐怖心を呼ぶし、効果的じゃないかな……なんてな、あはは」

ま、鼻で笑われるな……と思っていた。

……が、予想は思い切り外れたらしい。

てかなんか皆さん、もの凄く真剣に聞き入ってませんか？

「どうかしましたかあ？ 続けて下さい」

穩も例外ではなく、真面目モードで続きを促すし。

うう、プレッシャーで胃が痛い……。

「タイミング……じゃない、機を見て使えば、効果はあるんじゃないか？ いくら弱兵と言っても、混乱する相手ならやれなくもないの……かな？」

そう上手く行けばいいが、そんな事を断言出来るだけの自信が……ある訳ない。

「ふむ。じゃが敵は大軍。確かに混乱させるのは可能かも知れぬが、いっぱしの指揮官がおれば、それまでじゃぞ？」

「黄蓋殿の言われる通りだ。火計は確かに有効だが、それだけでは決め手に欠けるな」

あっさりと、黄蓋さんと周瑜にダメ出しを食らう。

「だ〜か〜ら〜、あたしに軍略を期待するなって言っただろ！」

「あの〜、ちょっと待っていただけますか？」

「なんだ、穩？」

「綾子さんの策、少し手を加えれば有効かと思いますよ〜。夜襲と、

ちょっと火も追加、とかどうでしょうかあ」

「……成程な。うむ、その手でいくか」

ニヤリとする周瑜。

「え？ え？ どういう事よ、冥琳？」

「冥琳と穏がわかったのなら、後は任せるぞ。儂は、指示を待つ」

……どういふ訳だ、一体？

雪蓮もそうだが、何よりあたしがまだ理解してないぞ？

「綾子様、どのような策を？」

「教えて下さい、綾子お姉さま」

菖蒲に明命……少しは空気読め。

「だああ、あたしに聞くな！！」

結局、作戦は周瑜と穏で取りまとめたようだ。

つか、最初からそうしてくれ……。

変に頭を使ったせいで、テンションはだだ落ち中。

そんなあたしを余所に、こちらの軍は行動を開始。

昼間のうちは、連中から離れた場所で休憩。

夜陰に乗じて出発し、じわじわと黄巾党の陣へと近付いていく。

今日は新月、あたり一面が、闇。

行く手に見える、かがり火が唯一の明かり。

時折、

「ほああああああああああああああっつつつ！」

と、地鳴りのような咆哮が聞こえるんだが……。

黄巾党は宗教の一種だったような記憶があるから、何かの儀式なのかもな。

戦いが目前に迫り、漸くあたしも雑念を振り払えた。

「菖蒲、いるか？」

「は、はい」

「いいか？ 始まって、あたしのそばを離れるな。絶対に」

やはり、怖いんだろう。

肩に手を置くと、震えているのがわかる。

「心配するな。あたしだって、死にたくはないし、怖いよ」

「綾子様が？」

「そりゃそうさ。いや、慣れてしまわない方がいい……。命を奪う、その重さを忘れないためにも、な」

「ですが、武人たるもの、恐れは禁物では？」

「確かに菖蒲の言う事もわかる。でも、あたしはそれを貫きたいな」

「……はい。それが綾子様の覚悟、ですね」

「そうだ。だから、生き抜くさ」

だいぶ、震えが収まったようだ。

そこに、伝令の兵士が到着。

「黄蓋様、美綴様。合図です」

暗闇の向こうで、一条の明かりが輪を描いた。

「よし、火の手を合図にかかれ！ 射撃用意！」

あたしは黄蓋さんと一緒に、弓兵隊の指揮を任されていた。

……と言っても、実際には黄蓋さんに全てお任せ。

部活の部長経験ぐらいじゃ、まともな軍隊の指揮官が務まる訳もないし、第一何をしたらいいのかもわからない。

「ま、儂のする事を見ているがよい。伊達に場数は踏んでおらぬよ」
有言実行と言うか、実際に黄蓋さんの統率は見事、の一言。

まともりに欠ける筈の兵士達だというのに、いざ動かしてみると
一糸の乱れも感じさせない。

……もちろん、規律を乱す行為に対しては、容赦なく鉄拳が飛んでくる。

そのせいも、多分にあつたみたいだけどな。

ボッ！

枯れ草に火がかけられた。

「よし、テーツ！」

号令と共に、一斉に火箭を放つ。

燃え盛る炎で、あたり一面は一気に昼間のように明るくなった。

「て、敵襲ー！」

「火を消せ！」

「防げ！ 防ぐんだ！」

混乱に陥る賊軍。

そして、中央の一際目立つ天幕から、パッと火の手が上がる。

明命の部隊が、やってのけた。

周囲から焼き払うのみならず、火の気がない中心部が燃え始めるのだから、連中はますます動揺するばかり。

「二番隊、テーツ！」

逃げ惑う賊の頭上から、矢の雨を降らせる。

立て続けに、三番隊が火箭、一番隊が普通の矢を、と繰り返す。

「美綴。この三段構え、なかなかによいではないか」

「そうみたいです、あはは……」

ふと思いついた、長篠の合戦で織田勢が用いた、鉄砲の三段構え。この時代は鉄砲なんてものはないし、所詮はアイディア倒れかな、と思ったんだけど。

何気なく黄蓋さんに伝えた結果が、これ。

「火箭は準備に時間がかかる。じゃが、これならば交互に射るから、時間が稼げる。儂も、このような使い道は知らなんだ」

……妙に感心されてしまった。

ジャーン、ジャーン！

「わーっ、わーっ！」

派手に銅鑼を鳴らし、鬨の声を上げ。

そして、一人で二本の旗を持ち、陣の周りをランダムに走り回るとにかく、数で劣ることを悟らせず、かつ混乱を増幅させる。

……周瑜が考え、ありあわせの材料でとにかく軽いだけの、ハリボテ旗を用意させる穩。

やっぱ、歴史に名だたる軍師の発想だ。

その間にも、敵陣はますます燃えさかる。

「クソツタレえええ！」

と、陣から向かってくる集団。

決死なのだろう、気迫が感じられる。

「任せて！」

「ここは通さん！」

雪蓮と孫権が立ちはだかる。

ビュッ！

「げえっ？」

ザシュ！

「ぐぼっ……」

流石に直属の兵たち、賊の決死の突撃にも動じる様子がない。

しかし、いくら自暴自棄になったとはいえ、ここで突撃をする…

…？

あたしの勘が、何かおかしい、と伝えてる。

……よし。

「綾子様、どちらへ？」

「菖蒲、一緒に乗れ！」

馬にまたがり、あたしは駆け出した。

「あーん、ちーちゃん、れんほーちゃん」

「ちょっと姉さん。しゃがみこんでないで！ 人和、どう？」

「大丈夫みたい。姉さんたち、急いで」

三人連れが、陣の反対側から飛び出してきた。

やっぱり、身を挺した囃だったみたいだな。

となれば、こっちが本命か。

「待て」

あたしは馬を下り、薙刀を構えた。

三人は、ビクツとなり、動きを止めた。

「黄巾党だな？ 悪いが、逃がす訳にはいかないぜ」

「ちょ、ちょっとれんほーちゃん！ どういう事なの？」

「こっちには誰もいないって……」

逃げ腰のせいもあるだろうが、全く殺気を感じない。

でも、賊軍があままでして逃がそうとするのだから、正解はただ一つだけ……だな。

「張角、張宝、張梁だな？ 無駄な抵抗はよせ」

「……わ、わたし達をどうする気？」

虚勢は張っているが、それだけだな。

「大人しくすれば危害は加えない。一緒に来て貰うよ？」

「……選択の余地は、ないのね？」

「ああ。それでも抵抗するなり逃亡するとなれば……」

ビュン！

あたしは薙刀を一閃。

そして、張角ののど元に突きつけた。

「わ、わかったよ……。行けばいいんでしょ」

「菖蒲。こいつら、縛ってくれ。念のためだ」

「わかりました！」

そして、夜が明けた。

「ふうん、あなた達が今回の反乱の首謀者だったのね」

あたしの独断で処分する訳もなく、張角姉妹を連れて本陣へ帰還。首領が捕らえられたと伝わると、賊軍は瞬く間に降伏。

武器の接收やら後始末やらで皆大わらわ、残っていたのは雪蓮と孫権、周瑜だけだった。

「反乱じゃないわよ。わたしたちはただ、歌いたかっただけよ！」

「そーよ。わたしは大陸のみんなに愛されたかったただけだもん！」

「姉さん達。そんな事を言っても、もう手遅れよ」

一番落ち着いている張梁の一言で、張角も張宝も押し黙る。

「それにしても、変じゃない？ 歌っているだけのあなた達が、こ
うまで手を焼かせる存在になるなんて」

「そ、それは……」

「……だ、だって……」

口ごもる三姉妹。

ふと、あたしの頭の中に、ゲームで出てくるアイテムが浮かんだ。

「なあ、持ってるんだろ？ 『太平要術の書』って」

「！！」

あれ、何か飛び上がりそうになってる。

「美綴。何だその書とは？」

書というキーワードに、周瑜が反応する。

「ホントかどうかはわからないけど、この張角が仙人から貰った書
を持っているんだよ、あたしの知る限りだと」

「な、何の事かなあ」

張角、声が震えてるぞ。

「どれどれ」

「ちよ、な、何するのよ！」

抵抗も空しく（縛られているからそもそも無理だけど）、懐の書
を雪蓮に見えられてしまう。

「『太平要術の書』……あ、本当だ」

「面妖な。これは何なのだ？」

観念したのか、張宝が絞り出すように答える。

「天和姉さんが貰ったのよ。……まだ、わたし達が全然人気のない
時に」

「これさえあれば、大陸一の人気者になれる、って言うんだもん」

「悪用するつもりはなかったわ。……でも、人気と共に、熱狂的な
人達が増えて、いつの間にかこうなったって訳」

あまりの真相に、孫権と周瑜はこめかみを押さえている。

雪蓮もただ、苦笑い。

「全く。諸侯や朝廷が、この事を知ったらどう思うかしらね。……ところで、あなた達の処分だけど」

三姉妹がその言葉に、身を竦める。

上の姉二人は、顔が青ざめているというか……絶望してるな、ありゃ。

「皆の意見はどうかしら。冥琳は？」

「理由はどうあれ、反乱の首謀者として処刑、もしくは都へ送還……が妥当なところだろうな」

「なるほど。蓮華はどう？」

「罪もなき民を苦しめ、多くの命を奪う事になった。それだけで万死に値します」

「そうね。……綾子、あなたは？」

「あたし？」

もう一度、三姉妹を見る。

天真爛漫に生意気、冷静と個性はあるけど……何だか、悪い事をした奴らとは考えたくないんだよな。

実際問題、史実の太平道だって、張角は人々を救うという理想だけで、集まった奴らが勝手に暴走しただけ。

……って、蒔寺に語られたからな。

「なあ、一つ聞いていいか？」

三姉妹は顔を見合わせる。

そして、張梁があたしを見据えた。

「何かしら？」

「今でも、歌いたいのか？ この書がなかったとしても」

「ええ」

「わたしも、歌が好き！」

「れんほーちゃんと同じだよ、わたしも」

うん、この眼はウソを言っていない。

「雪蓮。あたしの意見だけど……許してやって欲しい」

「何を言うんだ、美綴！ そんな事が許される訳ないだろう！」

「蓮華様の言う通りだ、美綴。朝廷から討伐令が出ている以上、それをかばい立てすれば、我らに罪が及ぶ」

「なら、死ねばそれで終わり。そうだな？」

あたしは、薙刀を手取る。

そして、

ビュンビュン！

「たあっ！」

『太平要術の書』を、粉々に切り裂いた。

念には念を入れ、紙くずになった書を、残っていた火の中に放り込む。

「これで、もう黄巾党の首領は死んだ。そうだろう？」

「やれやれ、あなたって人は……。ま、いいわ」

「雪蓮！」

「お姉様！」

二人は詰め寄るが、雪蓮は怯まない。

「あなたが歌いたいだけ、というのなら止めないわ。ただし、勝手にわたしの元を離れる事は許さないけどね」

「え？　じ、じゃあ……」

「助けてくれる……の？」

雪蓮はコクリ、と頷く。

「ええ、その綾子に免じてね。何か考えがあるんでしょ、綾子」
うーん、お見通しか。

「歌ってのは、人の心を癒したり、活力を与えるからな。だから、兵士達の前で歌って貰う、ってのはどうだ？　士気向上になると思うんだ」

あたしのいた世界のライブも、あれだけ熱狂的だったんだ。

この世界でも通用するはずだし、現にこうして、大きなインパクトを生んだんだからな。

「……また、歌えるの？　わたし達」

「それで良ければな。……周瑜、孫権、まだ納得できない？」

二人は顔を見合わせ、大きくため息をつく。

「全く……。突拍子もない事を思いつくのだな」

「雪蓮姉様が助ける、という以上は反対はしないわ。ただし、身勝手な行動を取ったら、その時は……。いいわね？」

「いいわ。姉さんたちも、いいかしら？」

「う、うん！」

「やったあ、また歌えるんだあ！」

こうして、変わった仲間が増えたあたし達だった。

……。それが、どんな影響を当たる事になるのか、この時のあたしにはまだ、知る由もなかった。

〽九〽（後書き）

オリキャラについてご意見をいただいていますが、徐盛を登場させてみました。

個人的には好きな人物なのに、恋姫†無双にも、某カードゲームにも出てこないという……そこまでマイナーでもない筈なんです。Fate原作を含め、キャラを増やすかどうかは展開次第ですが、読みづらくしては本末転倒なので……引き続き、検討課題になります。

ご意見、ご感想がありましたら是非お寄せ下さい。

〃十〃 (前書き)

キータッチが進み、連続投稿。

原作だと、対董卓戦の後になる場面ですが、敢えて前に持ってきてきました。

そして、今回は彼が登場します。

「これでよし、と。では、頼んだわよ」

「はっ」

首の入った桶を三つ。

それを兵士が運んでいく。

行き先は、都。

張三姉妹を救う事に決めたとは言え、討ち取ったという証拠が必要だろう、と周瑜の意見で、賊の死体からそれらしく見えるものを選んで……という次第。

残酷だけど、こうでもしなければ、雪蓮が罰を受ける事になる。

……いろいろと、理不尽な時代だよな、全く。

「孫策様」

と、そこに袁術からつけられた兵が、やって来た。

鎧からして、それなりの身分というか、恐らくはまとめ役なのかも。

「折り入って、お話したい事があります。お人払いを」

「何かしら。冥琳と蓮華、それに綾子だけ残って。後は下がりなさい」

そう指示してから、雪蓮はその兵に向かって、

「悪いけど、この三人は私と一心同体なの。だから、それがダメなら話は聞けないわ」

「……わかりました」

兵士は頷くと、一緒にいた別の兵士に目配せをした。

そして、布に包まれた何かを取り出し、広げる。

……また生首か。

いい加減見慣れてきた気はするけど、そうは言ってもあまり気持ちのいいものじゃない。

「！この者は……まさか！」

普段から冷静な周瑜が、珍しく動揺している。

「はっ。袁術様より派遣された、我らの指揮官です」

そう言えばいたな、そんな奴が。

体のいい目付というか、監視役だったんだろうけど。

威張り散らすだけで無能な奴だった事もあり、雪蓮以下完全に無視していたけどな。

「実は、この戦で、ある密命を帯びていたのです」

「密命とは何だ？」

「……孫策様を、戦闘に紛れて討ち取れ、と」

「何だと、貴様！」

「蓮華、落ち着きなさい！それで？」

兵は臆する様もなく、続ける。

「我々兵士は、命令は絶対遵守が当然です。……ですが、こればかりは疑問を禁じ得ませんでした」

「疑問、ね」

「はい。袁術様は気づいておられませんが、今南陽が安泰なもの、袁家が健在なもの、皆孫策様のお働きによるもの。我らはそう思っております」

あたしが思っていたのと同じ事だな。

袁術は、家柄はいいのかも知れないけど、ただそれに甘んじているだけ。

血を流し、手を汚し、汗をかいているのは雪蓮たちばかり。

いいように使い、成果だけを横取りし、自分たちだけがこの世の春を謳歌している。

その想いは、他の奴も同じだったって訳か。

「袁術様は、自分の意のままにならない孫策様を、常々排しようと考えておられたようです。ただ、孫策様には兵こそありませんが、将の方々は皆、一騎当千。それに、成敗するだけの非がありません」

「それで、黄巾党の戦闘にかこつけて……やれやれ、張勳あたりの

考えそうな事ね」

「何と卑劣な！ 姉様、冥琳。そのような理不尽で失われた兵が、このままでは民が浮かばれません！」

孫権の言葉こそ、まっとうな人間の思考だと思う。

つか、この場でそれを否定する奴がいたとしたら、頭おかしいな。

「孫策様。我ら、もはや袁術様に従うつもりはありません。……この命、いかようにもお使い下さい」

そう言って、頭を下げる兵士達。

「張勲は嫌がらせのつもりであったのだろうが、策は裏目に出たようだな」

「ん？ どういう事だ、周瑜？」

あたしの問いかけに、髪に手を当てながら答える。

「新兵、つまり袁術軍に入って日が浅いという事は、それだけ忠誠心が高くないという事だ。そして老兵は逆に、場数を踏んでいて思慮もあるから、このような非道を見れば愛想を尽かす」

「つまり、あいつらはわざわざ、わたし達の味方を作るような事をしてくれた、そういう事よ」

雪蓮は、頭を下げる兵士の手を取った。

「ありがとう。あなた達の命、確かに預かるわ……力を貸して」

「ははっ！」

さて、ここからどうするか。

一気に選択肢が増えたけど、周瑜あたりはもう考えているんだろ
うな。

「申し上げます！」

と、そこに駆け込んでくる伝令。

「何だ？」

「陳留の刺史、曹操様より使者が参りました」

「曹操？」

皆、顔を見合わせる。

まだ袁術の食客扱いでしかない雪蓮に比べて、向こうは正式な朝廷の官職を持つ。

もし、何かの命令をされれば、従わざるを得なくなる……んだよな、きつと。

「わかったわ。通して」

「ハッ！」

「では、命あるまで控えています」

兵士達は下がっていく。

正式ではないとは言え謁見の場、当然だろう。

……さて、三国志一の大物登場か。

この世界の常識からすると……やっぱ、女性なんだろうな。

そして、案内されてきた、金髪クルクルヘアーの女の子。

……うん、やっぱり美人だ。

雪蓮とはタイプが違うけど、この時代の女性って美人が多いなあ、ホント。

それに髪の毛が変わった形に縛った女の子と……何故か、あたしと同じ年ぐらいの男も一緒。

曹操もそうだけど、この女の子も、全然隙がないな。

そして、男が来ているのはこの時代の着物ではなく……どこかの学ランにしか見えないもの。

白く輝く、つまりはポリエステル製という事らしいけど、だとすると、噂通りなのかもな。

「会って貰えて嬉しいわ。私は、曹孟徳よ」

「孫伯符よ。にしても、本人がいきなり来る、普通？」

雪蓮の言葉に、曹操はフツと笑って、

「たった一晩で、あの黄巾党を壊滅させたのはどんな人物か、この目で見てみたかったの」

「それは光栄ね」

握手をする二人の間に、見えない火花が……気のせいかな？

「紹介するわ。こっちは許仲康、そしてこの男は北郷一刀」

許仲康……許チヨか。

曹操の警護役としてついてきたんだろうけど、確かに適任だな。
北郷ってのは……誰だろう。

この世界の人間、というには違和感がある……というか、むしろ……。

名前からして、いろいろとおかしい。

「ならこっちも紹介するわ。これが妹の孫仲謀、こっちが周公瑾。
あと、そっちが美綴綾子」

と、男が驚いたようにあたしを見る。

「どうかしたの、一刀？」

「いや、俺以外に字がない人がいるなんて。なあ、美綴。一つ、聞いてもいいか？」

「何だ？」

北郷はあたしを窺うように、

「美綴も……その、未来から来たのか？」

「……すまん。意味がよくわからないんだが」

顔に出ているかも知れないけど、素知らぬ顔をするしかない。

あたしが言わないようにしている言葉を、あっさりと口にする奴、
油断が出来ない。

「あ、いや、名前が日本人みたいだし。それに、雰囲気が何か違うから」

「そうなのか、美綴？」

孫権の言葉に、あたしは大きく頭を振る。

「……違うな、多分。少なくとも、あたしはこの男を知らない」

「俺だって初対面さ。でもなあ……」

まだ何か言いかける北郷を、曹操が遮った。

「一刀。今は私と孫策の対面場よ。控えなさい」

「……わかった」

とりあえず引いてくれたけど、まだ何か言いたそうにしている。

「失礼したわ。この北郷は、『天の御遣い』」

「え？」

曹操の言葉に、あたし達は奴を見つめてしまう。

「確か、管輅の予言にあったわね。その本人かしら？」

「ええ、流石はよく知っているわね。縁あって、今は私の配下にいるわ」

「そう。でも、何か証拠はあるの？」

雪蓮が挑発するように言うが、曹操は軽く受け流す。

「いろいろとあるわ。だから、間違いや嘘ではないわね」

「ふーん、随分と自信があるのね。まあいいわ、用件はそれだけ？」

「いえ、まだあるわ。黄巾党の残党が、南陽の方角に逃げ込んだって情報が入ったの」

そんな話、初めて聞いたな。

それなら、ここでのんびりしている時間なんてないし、そもそも明命達からは何の報告も来ていない。

「黄巾党征伐は、朝廷の命令だから従わなければならないでしょ。……ましてや、そんな賊が来ているのに何もしていないとあれば、太守としては失格。いいえ、朝廷に対する反逆者ね」

「……あなた、何を考えているの？」

雪蓮だけじゃない、孫策も周瑜も、警戒の眼で曹操を見ている。

「あら、そんな怖い顔をしないで欲しいわね。私は事実を言っているだけよ」

「……何が狙いだ、曹操？」

「黄巾党にしろ、何にしろ、民の事を想わない奴らに、統治する資格などない。だったら、よりよい為政者が取って代わればいいだけ。違うかしら？」

「では貴様が、黄巾党討伐を名目に南陽を手中にするとでも言うつもりか！」

「孫権、だったかしら？ 貴女は、もう少し視野を広げるべきね。」

第一、私は朝廷の臣よ、勝手に他の太守の城を奪えると思う？」

「そ、それは……」

「それに、もし私がそのつもりなら、ここにこうして来ていないわ。その間に攻め落とせるもの」

曹操の言葉は揺るぎがない。

この自信、どっから来るんだ？

「欲しいものは必ず手に入れる。でも、それは正々堂々と、それが私の霸道よ」

「なるほどな。でも曹操、その言葉が嘘偽りだったときは？」

「その時は、私の首を刎ねるなり、天下に事実を流布するなり、好きにすればいいわ」

英雄、英雄を知る。

……そんな言葉がぴったりだな、このシチュエーション。

雪蓮は、曹操を真っ直ぐ見据えながら、

「では、南陽に向かった残党を討伐する。で、貴女も協力する……でいいのね？」

「そうね。けど、一つ言っておく」

「何かしら？」

「もし、新たな南陽の為政者が、民を守るに値しない者でしかなかった場合。……私は、容赦しないわ」

「ええ。その言葉、覚えておきましょう」

「では、作戦については改めて知らせるわ。私も戻って、準備をするから」

「わかったわ」

颯爽と去っていく、曹操一行。

北郷の事も気にはなるけど、それ以上にあたしは……曹操という人物に圧倒されていた。

「雪蓮。本当にいいのだな？」

「ええ、冥琳。これは借りでもなんでもないんだし、向こうが手を貸してくれるんだったら、ありがたくいただくまでよ」

「雪蓮姉様。やっとこの日が来たのですね……」

「そうよ、蓮華。これでやっと、母様の無念も晴らせるわ……」

孫堅文台。

会う事は叶わなかったけど、きっと破天荒な人だったんだろう。

……あたしだったら、大いに意気投合したかもな。

その娘の雪蓮が、雌伏の時を終えようとしている。

「綾子。この戦いが終わったら、ゆっくり話したいわ」

「ああ……。そうしよう」

雪蓮とあたし、頷き合う。

「誰か。皆を集めてくれる？」

「はっ！」

そして、再び一同集結。

「では、曹操軍が南陽に攻めかかり、呼応して動く。基本はこれだよいのじゃな？」

「そうですね。曹操さんの軍は兵もよく訓練されていますし、将も揃っていますから。まず、袁術さん達に勝ち目はないでしょうねえ」

「……………」

「綾子。さっきから黙っているけど、どうかしたの？」

目敏いな、雪蓮は。

「いや、南陽に残っている兵は、果たして袁術に従うのかな、って」

「どういう事かしら？」

「うーん、何て言うか。さっきみたいに、実は見限っている奴もいるんじゃないかな、って。兵士って言っても、元は庶人の出、って奴がほとんどだろ？　だとすると、袁術の治世に愛想を尽かしている……そんな奴が案外、多いんじゃないかな？」

あたしの言葉に、皆が顔を見合わせる。

見当外れな事言ったかな、こりゃ。

「なるほど。そこに気が回るとは。思春、どう思う？」

「はっ。美綴の意見、一理あるかと。無論、金に釣られている輩も混じっているでしょうが」

「もし味方に出来れば、罪のない民を巻き添えにする事が、最小限で済むかも……姉様！」

「そうね。でも、どうするの？ 曹操はすぐにでも動くでしょうし、あまり時間はないわよ」

「さっきの兵に、あたしと菖蒲、出来れば明命を貸して欲しい。大勢で行けば目立つ」

「……危険よ？ 一步間違えば、全員無事では済まないわ」

「雪蓮、孫権が言ったじゃないか。このまま動けば、袁術達は死ぬ必要のない兵士を死地へ駆り出し、最悪の場合は民を盾にしかねない。自分たちさえよければいい連中なんだ、追い詰めればそのぐらいの事は十分あり得る」

あたしは、想いのままをぶつけたつもり。

奪わずに済む命は奪いたくない。

……ちよつとは成長したのかな、あたしも。

「あのお、確かに説得はいいんですが。成功させる見込み、あるんでしょうか？」

「ああ。何も全軍を説得しようとは思わないし、一応手は考えている」

全員が押し黙った。

が、雪蓮が意を決したように、

「わかった。あなたに任せましょう。でも、軍は進めるわ。曹操の手を借りるだけ、じゃ孫家の名折れですもの」

「あたしだって、まだ死ぬ気はないから安心しな？」

ニカッと笑って見せた。

「よし、明命、菖蒲。行くよ？」

「はいっ！」

「わ、わかりました！」

「開門！ 孫策よりの急使だ！」

「わかった、今門を開ける」

ギギギギギ。

頑丈な門が開けられ、あたし達一行は中へ。

明命と、連れてきた兵がいるのだから怪しまれるところはない。

「さて。今、守備隊の責任者はどこにいる？」

「それでしたら、こちらへ」

兵士と共に、城内へ向かう。

幸い、あたしはほとんど顔を知られていないから、怪しまれる事もないだろうと踏んでいる。

「わかった。明命と菖蒲には、別に頼みがある」

「綾子お姉さま。何なりとお命じ下さい」

「綾子様のためです、頑張ります！」

「よし。なら……」

手早く作戦を打ち合わせ、二人はそろぞれの方角へと散っていく。

「待たせたね。じゃ、行こうか」

「ハッ！」

「アンタが、守備隊の責任者だね」

「誰だ？」

兵士達の溜まり場に出向いたあたし達。

「孫策配下の者だ。時間がないから前置きはしないで話す」

「孫策？」

無論、その名前を知らない訳ではないだろうけど、あからさまに訝しげな顔をされる。

指揮系統が違う上に、彼らは曲がりなりにも、袁術の直属。

接点がないのだから、個人的に面識がある訳でもない相手の、しかも配下がいきなりやってくれば、面食らうのも当たり前。

「まず、黄巾党は壊滅した。昨日一晩でな」

「な、何だと！ 出鱈目を言うな！」

「事実だ。孫策の指揮で、張角も討ち取られた」

兵の言葉に、隊長は頭を振った。

「信じられん……。あれだけ手を焼いていた黄巾党が、たったの一晚で」

あたしは構わず続けた、とにかく時間が惜しい。

「疑うのなら、後で確かめればいい。それともう一つ」

「ま、まだあるのか？」

「この城に向けて、陳留刺史の曹操が進撃中だ。黄巾党の残党を匿っているという理由でな」

「な、なに？」

「黄巾党の残党、つまりは朝敵って訳。それを庇うのであれば朝敵、という訳さ。そして、その命に従い、孫策も向かっている」

「……………」

あまりの事に、固まっている。

「で、アンタはどうする？」

「お、俺は……。兵士だ……。戦わないといけない……」

「誰と？」

「き、決まっているだろう……。曹操と、孫策と……」

「勝てると思うか？ 一騎当千揃いの両軍相手に」

「お、脅すのか！」

「事実を言っているだけさ。それに、そこまでして命を賭ける存在か、袁術は」

「な、何が言いたい！」

「アンタらが守ろうとするものは何か、それを聞きたいのさ。名家というだけで、民の事を顧みず、贅沢三昧の袁術なのか、それとも力なき民なのか」

「……………」

「袁術に忠誠を誓うのならそれはそれでいい。でも考えて欲しいんだ、元は同じ庶人だった彼らが、袁術のような身勝手極まる奴のために、無為に苦しんでいいなんて、おかしいじゃないか」

「……お、俺達に、袁術様を裏切れ、というのか」

「そうさ。でも、それは孫策のためじゃない。民のためだ」

「民のため……」

「孫策なら、己の欲望だけのために民を虐げたりはしない。もし、それが偽りだと思うのなら」

あたしはどつかりと、その場に座る。

「この場であたしを討てばいい。覚悟はしている」

「……一つだけ、聞きたい」

「ああ」

「孫策は、何を目指している？ 天下か？」

「そこまでは本人に聞いてくれ。ただ、一つだけ言える事がある」

「何だ、一体？」

「孫策は、自らの民を守るためなら、命を賭けて死地に飛び込んでいく。そういう奴だ」

「……………」

沈黙。

さて、これで失敗したら……ま、そこまでだったって事だ、あたしも。

ドカドカドカ！

そこに、兵士達が駆け込んできた。

「た、隊長！」

「どうした？」

「こ、この城に向かって軍勢が向かってきます！ 旗は曹と……孫！」

「隊長、大変です！」

別の兵士も飛び込んできた。

「今度は何だ？」

「反乱です！ 街の民が、反乱を起こしました！」

菖蒲、どうやら上手くやってくれたらしい。

この間まで庶人だった菖蒲なら、民の知り合いも多いだろう、そう踏んで任せてみたんだけど。

「隊長！」

右往左往する兵士達。

「……あんた。名前は」

隊長が、静かに聞いた。

「美綴綾子」

「そうか」

そう言うのと、隊長は剣を鞘毎引き抜くと、あたしの前で膝をついた。

「今は、アンタを信じよう。指示……いや、美綴様、ご指示を！」

「……わかった」

あたしは立ち上がると、

「城門を開け、白旗を掲げろ！ 曹操と孫策には抵抗するな！」

「……………」

「ぐずぐずするな！ これは、隊長の命だ！」

「は、はっ！」

隊長の言葉に、兵士達は直立不動で応える。

「あと何人か、一緒に来てくれ」

「ははっ！」

あたしはそのまま、城の奥へと向かう。

途中で誰何されるかと思っていたけど……どうやら、皆それぞれころではないようだ。

そして、謁見の間。

「だ、誰じゃ！」

「ひ、控えなさい！」

玉座にいるのは、金髪の小さな女の子。

そして、隣には小さな帽子を被った、青い髪の女性。

「袁術に、張勳だな？」

「わ、妾を呼び捨てにするのか？ 無礼じゃぞ！」

この期に及んで……。

あたしは、怒り心頭だった。

「状況がわかっているのか？ 貴様ら」

ずかずかと玉座へと向かう。

「よ、寄るでない！」

「だ、誰か止めて下さい！」

その声に、近衛の兵士達が飛び込んでくる。

「貴様！」

剣を抜き、あたしに斬りかかろうとする近衛兵たち。

と、その前に、何かが降り立った。

キン！

剣は弾かれ、次々に近衛兵は打ち倒されていく。

「綾子お姉さま、ここはお任せを！」

「明命。頼む」

そして、袁術と張勳の前までやって来た。

二人は抱き合いながら、震えている。

バシッ！

その頬に一発ずつ、渾身のビンタをくれてやった。

「ひゃっ！」

「あうっ！」

そして、二人を、城下を見下ろすテラスみたいな場所へ引きずって行く。

「見ろ。貴様らがしてきた事の報いを」

城下は、兵と民衆で溢れかえっていた。

「もう、俺たちは袁術には従わないぞ！」

「そうだそうだ！ 自分たちだけ贅沢三昧しやがって！ 俺達がいだけ苦しんでいるか！」

「袁術を倒すぞ！」

「応！」

次々に上がる、怨嗟の声。

そして、袁術に対する非難の嵐。

「なななな、七乃。何じゃ、これは……」

「美羽様あ……」

「わかったか。もう、お前達に民の上に立つ資格はない」
ガツクリとうなだれる二人。

「うおーっ！」

割れんばかりの歓声が、遠くから聞こえる。

……片付いたな、どうやら。

〃十〃（後書き）

全般にシリアス&ご都合主義展開となりました。
タイトルの割にあまり無双してませんが、序盤の孫策軍だとあんまりそういう場面がもととないませんですよね……。
これからおいおい出していきますが。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

〓十一〓（前書き）

とりあえず序盤戦はこれで完結となります。

既に原作シナリオから乖離しまくっています……気にしない方向でお付き合いいただければ幸いです。

十二

「綾子！」

雪蓮たちが到着したな。

僅かに抵抗を示した将や兵もいたけど、とりあえずノシておいた。
……まあ、言ってもわからない奴は、ちよつとばかりフルコン組み手でボコってみた。

明命と菖蒲の見る眼が更に妙になった気がするが……うん、スルーしよう。

「見ての通り、被害もほとんどなしだ」

「そうみたいね。でも、あなた達が無事だ、というのが何よりだけどね」

「しかし、無茶をする。まるで、若き頃の堅殿のようじゃ」

「はは、孫堅さんに例えられるなんて光栄ですね」

さて、再会を喜ぶのは一旦置いて、だ。

袁術と張勳はそのままにしてある、武器だけは取り上げたけどな。

「さて、袁術ちゃん。張勳。あなた達だけど」

「ひいひい、な、七乃お！」

「美羽おとお嬢様！」

あれだけ傍若無人&好き勝手放題やっていた二人も、今はただただ震えるだけ。

雪蓮は冷たい眼で、南海霸王を抜く。

「覚悟は、いいわね？」

「い、嫌じゃ！ な、なんで妾が死なないとならんのだじゃ！」

「袁術ちゃん？ 言いたい事はそれだけ？」

「七乃！ な、何とかするのだじゃ」

「むむむ、無理ですよお！」

我が儘放題の袁術。

……でも、まだまだ子供。

子供という事は、どう育つかは大人の責任じゃないのか？

余計な事とは思いつつ、あたしは口を挟んだ。

「雪蓮。袁術は、殺さなくていいと思う」

「綾子。……これは、あなたには関係のない事、口出ししないで」

「確かに、こいつらが雪蓮達にしてきた事は許されない。でも、もう全てを失った、明日どこか今日からは、誰も従わないし好きにも出来ないんだ。……それに、子供に罪はない」

「……………」

「それでも斬る、って言うのならあたしには何も言えない。それが、雪蓮の決断だからな」

ふう、と雪蓮は息を吐く。

「じゃあ、どうすればいいと思う？」

「そうだな。身分は平民に落として、自分で糧を得る生活をさせてみるとかどうだ？」

「……で、コイツは？」

張勳に、南海霸王が突きつけられる。

「そいつは、袁術を甘やかしてダメにした、張本人だ。他の兵が、民が許さないだろう」

「そうね。なら、ここで死んで貰うわ！」

「あ、あわわわわ……」

張勳は、口をパクパクさせるばかり。

だけど、こいつは断罪されるだけの事をしてきた。

……自業自得、だな。

「嫌じゃ！ な、七乃を殺さないでたもれ！」

袁術が、震えながらも張勳の前に立ちはだかった。

「……どいて。袁術ちゃん」

「い、嫌なものは嫌なのじゃ！ 七乃がおらねば、妾は……妾はどうすればよいのかわからぬ！」

「み、美羽様あ……」

「ぐすっ……七乃、七乃……」

カシャン。

南海霸王は、鞆に戻された。

「ハア。これじゃ、わたしが悪者みたいじゃない。……いいわ、二人とも助けるわ、どこへなりとも行きなさい」

「え……？　ほ、本当ですか……？」

「そ、孫策……。そ、それはまことじゃな？」

「二言はないわ。ただし……」

静かだけど、ドスの効いた一言。

「今度わたしの目の前に現れたら、殺すから」

コクコクコクコク。

二人とも、首がもげそうなぐらいに頷いている。

「綾子。……今回だけは、功績に免じて貴女の甘さに付き合うけど……。その甘さ、いつか命取りになるわよ？」

「……そうかもな。肝に銘じる」

混乱の最中、袁術にっていた文官は、かなりの数が逃亡を謀った。

……まあ、逃げたところであちこちで捕縛されていたけど。

そりゃ、政治が乱れているのをいい事に、甘い汁を吸った連中が大半なんだろうし。

それもあって、まだ南陽は城全体が騒然としていた。

「ちよつといいかしら？」

と、曹操がやって来た。

「何か用か？　雪蓮なら今、城内だけど」

「忙しいでしょうからいいわ。それより、貴女に用があるの」と、あたしを指名する曹操。

「え？　あたし？」

「ええ。少し、時間を貰えるかしら？」

取り立ててする事もないけど……一体何だろう。

「わかった。なら、街の茶店でいいか？」

「いいわよ。季衣、一刀、ついてらっしゃい」

茶と団子を頼み、席につくあたし達。

「さて。美綴、だったわね？」

「ああ」

「そう警戒しないで。別に、貴女に何かしようって訳じゃないから
そうは言われても、相手はあの曹操だ。

緊張するな、って方が難しい。

「貴女の事は、いろいろと聞いているわ。なかなかの腕をしている
そうね」

「そうかな？　これだけ化け物揃いだと……」

と、曹操の横で団子に夢中になっている許チヨを見る。

「ふえ？　姉ちゃん、ボクの顔に何かついてる？」

「ふーん、季衣も、その一人って事かしら？」

「だってそうだろう？　アンタみたいな人物が、側に置くんだから、
相当な遣い手……誰だって、そう思う」

「流石ね。でも、貴女も……見事ね。隙がない」

完璧超人の曹操だからこそその発言だろう。

実際、本気で遣り合ったら……どうなるだろう？

「それに、いくらあの袁術相手とは言え、こうしてこの南陽をほぼ
無傷で手に入れるなんて。猪なだけじゃなく、機転も利くようね」

「よしてくれ。頭がいい、ってのは曹操とか、アンタの陣営なら荀
イクや郭嘉みたいな奴の事だろう？」

「郭嘉？　私のところにはそんな者はいないわ？」

……あれ？

だって曹操のところの軍師って、荀イクに荀攸に郭嘉、程イク……
…ってのは、違うのか。

うーん、曹操の見る眼が……バリバリ疑ってるな、やっぱ。

ついでに、北郷までジツとあたしを見ている。

「貴女……何者なの？」

「さあな。で、話つてのはそれだけか？　あたしもそろそろ、皆のところに戻りたいんだけど」

強引だろうが何だろうが、話の流れを変えないと、いろいろとヤバいんで。

「なら、単刀直入に言うわ。美綴、私のところに来ない？」

「……は？　それってスカ、じゃない、勧誘か？」

「そうよ。今ひとつつかみ所はないけど、少なくとも貴女の武と性格は、十分に希有な存在よ」

ふえー、あの曹操に認められちゃったよ、あたし。

ま、悪い気持ちはしないな。

……けど。

「それは受けられないな」

「あら、何故かしら？　俸給なら貴女の望むままでも構わないし、私の出来る範囲でなら条件も飲むけど？」

「そうじゃない。確かに、曹操みたいな英雄に認められるのは嬉しいさ。けど、あたしは約束したんだ。雪蓮を支えるって」

黄蓋さんとも約束した。

それに、あたしは別にいい暮らしがしたい訳じゃない。

「そう、残念だけど決意は固そうね。でも、これだけは覚えておいて。私は欲しい物は、どんな困難があっても手に入れる。それが、地位だろうと人だろうとね」

「はは、じゃああたしもその対象、って訳か」

「そうね。少なくとも貴女みたいな破天荒さ、嫌いじゃないわよ。それじゃ、失礼するわ」

「あ、待ってくれ華琳」

北郷が、席を立とうとする曹操を押し止めた。

「どうしたの、一刀」

「今は公式の場合じゃないんだろう？　ちょっと美綴と話を……」

「綾子様ー！」

お、菖蒲の声だ。

「こっちだこっち」

「あ、こちらでしたか。孫策様がお呼びです」

「わかった。そういう訳だから、これで失礼する」

「ええ。孫策にもよろしく伝えておいて」

正直、ナイスタイミングだった。

北郷は、明らかにあたしを疑っている。

……けど、未来からやって来た、という事は言わない方がいい気がするんだ。

あたしの勘が、そう告げている。

「綾子様。どうかなさいましたか？」

「……あ、いや。菖蒲はいい娘だな、って思ってたな」
わしわしと頭を撫でてやる。

「綾子様あゝ」

……蕩ける笑顔する程なのか、これ？

まあ、嬉しそうだからいいけどさ。

「呼んだか？」

城には、一同が勢揃いしていた。

というか、食堂に呼ばれたと思ったら……まあ、ご馳走がずらりと並んでいる訳で。

「黄巾党との戦勝祝い、それから袁術ちゃんからの独立記念じゃない？ だから祝宴よ」

堂々と酒が飲めるからだろう、雪蓮ははしゃいでいる。

「今日は仕方ないが、あまりハメを外し過ぎないようにな」

「まあまあ、良いではないか公瑾。儂も今日ほど嬉しい日はない」

「そういう事だから、あなたももちろん参加ね」

「よし、わかった」

ま、皆ではしゃぐのも悪くないしな。

「じゃ、そういう事で……乾杯！」

「乾杯！」

思い思いに杯を傾け、料理をいただく。

……あたしも、ちょっとはこの瞬間のために貢献できたのかもな。そう考えると、感慨深いものがある……って、似合わないね、あはは。

孫権に手招きされ、隣へ。

「あなたの想いと覚悟……見事だった。身震いするぐらいにね」

「あたしは難しいのは無理だからさ、直球勝負をするだけ。ただ、目指すところは同じかもな」

「そうね、ふふ。……それで、貴方にまずは謝りたいの。初対面で間諜かも、って疑ってしまったわ。不快な思いをさせてごめんなさい」

孫権は頭を下げる。

「いや、あれが当然だろう。誰だって、あの時のあたしを怪しむのが普通だと思うよ。だから、気にすんなって」

「ありがとう。信頼の証に真名、受けて貰える？」

「わかったよ、蓮華。あたしも、綾子でいいぜ？」

「思春。貴女は？」

「……蓮華様がお許しになったのであれば、異存はありません。腕は、元から認めるところです」

甘寧は短く、

「思春だ」

それだけを告げた。

「あたしも綾子で。杯、受けてくれるな」

「ああ。……貴様には期待している」

「こちらこそ」

で、今度は軍師コンビ。

「しかし、結果としてほぼ無血開城。黄巾党も一方的。……本気で

軍師にならんか？」

「そうですね。綾子さんなら、立派に務まると思いますよ」
……いや、歴史に残る名軍師達からそう言われても。

「勘弁してくれ……あたしは、身体を動かしている方がいい」

周瑜はメガネを直しながら、

「惜しいな。ま、気が変わったらいつでも来るがいい。それから、私も今後は冥琳で構わない。お前の事も、綾子と呼ばせて貰う」

「よろしくな、冥琳。穩も」

「はぁい♪」

「お前も加わらないか、亞莎」

「は、はひっ？ で、ですが私は武官で」

隅で小さくなっていた娘……呂蒙だったかな？

「ダメよ、亞莎ちゃん？ あなたも、軍師候補なんだから」

「そうだ。綾子共々、鍛えてやるからな」

あたしは全力で遠慮します……。

「あ、あの……私も、亞莎と呼んで下さい。お手合わせも、宜しければ一度……」

「よし、約束だ」

武官というからには、腕もお墨付きなんだろう。

ちよっと楽しみなな。

「儂との約束、果たしてくれたようじゃな」

黄蓋さん、相変わらず凄い飲みっぷりで。

「あなた程の方にああまで言われて、素知らぬ顔は無理です。……
と言うか、あたしの性格を知りながらでしょ？」

「うははは、バレておったか。じゃが、お主を見込んで正解であつたわ。儂の事も、祭で良いぞ」

バシバシと肩を叩かれる。

相変わらずバカ力というか、痛いです……。

「あゝっ、シャオだけ仲間外れ？」

そこに乱入してくる、末の姫様。

「シャオの事も、シャオでいいからね。だから」

「綾子で……」

と言いかけるあたしの顔を、ジーツと見てくる。

「あのね……。お願いがあるの、聞いてくれる？」

ズギューン、って効果音付きであたしにダメージ百ポイント。

上目遣いに指を口に当てるとか、ヤバ過ぎです。

「あ、あたしに出来る事なら……。いいけどさ」

「本当に？ 約束だよ？」

反射的に頷いたけど……。あんまし無茶を言われたらどうしよう。

「あのね。……。綾子お姉ちゃん、って呼んでもいい……？」

綾子お姉ちゃん、綾子お姉ちゃん、綾子お姉ちゃん……。

つか、雪蓮も蓮華も姉様だろうに、なんであたしだけ『ちゃん』

……。ああ、どうでもいいかそんな事。

その時、あたしの中で何かが……。弾けた。

「いいぜ……。ぶはっ！」

我慢の限界で、鼻血が大爆発。

「あ、あれ……。？」

「お、おい、しっかりせい！」

「お姉ちゃん？ ど、どうしたの？」

なんか、お花畑が見えるよ……。

これで死んだら……。ある意味本望か、あたし？

「う……」

気がつくと、ベッドに寝かされていたあたし。

しかし、何とも情けない夢だったな……。

可愛いものに目がないにも、程があるだろう、全く。

「あ、お姉さま」

「……明命か？」

「はい。びっくりしましたよ、いきなり鼻血噴いて倒れるなんて」

夢……じゃなかったのか、アレ。

うわぁ、ハズ過ぎる！

「あれから大騒ぎでしたよ。お医者様を呼ぶわ、血塗れの小蓮さまは固まっておられましたし」

「う……。面目ない」

後で、小蓮には謝りに行かないとな。

「ところで、食欲はありますか？」

「そう言えば、ちょっと空腹気味かも……」

明命はニコリと笑って、

「良かった。今、お粥用意しますね」

「いや、病人じゃないんだし。普通で大丈夫……」

「ダメですっ！」

「……は？」

なんか、いつになく気迫を感じるんだけど……？

「お任せ下さい」

「わ、わかったから」

「では、少しお待ち下さいね」

そう言いながら、明命は外に出て、何かを運んできた。

小さめの土鍋、その蓋を取ると湯気が立ち上る。

「もしかして、明命が作ったのか？」

「はいっ！」

うーん、いい娘だな、つくづく。

「ありがとうございます。早速いただくよ」

と、起き上がるあたし。

「……」

「……？　どうかしたか？」

コト。

土鍋を置くと、明命はあたしを、押し戻した。

「……明命？」

「そのまま、横になっていて下さい。……た、食べさせて差し上げ

ますっ！」

「ハア？ いや、だからあたしは病人じゃないんだけど」

「い、いいですからっ！」

「ちょっ、何でそんなに必死なんだ！」

いろいろとヤバイ雰囲気……って、何だこの展開。

バン！

と、ドアが開かれた。

あれは菖蒲と……小蓮？

「明命！ 抜け駆けとは卑怯よ！」

「尚香様の仰る通りです！ 綾子様を独り占めだなんて、いくら周泰様でも許せん！」

ア、アナタタチハナニヲイッテイルノカナ？

「さ、お姉ちゃん。シャオが食べさせてあげる！」

「いいえ！ 綾子様のお世話は私の務め！ 譲れません！」

「小蓮様も徐盛も、ひ、退いて下さい！」

あゝ、もう収拾がつかない。

とうとう、あたしもリミッター解除。

「オマエら！ 全員そこに正座！！」

「ひゃっ！」

「ひえっ！」

「は、はははいっ！」

ようし、こうなったら根性から叩き直してやる！

……翌日。

「綾子お姉ちゃん、シャオと買い物に行こ？」

「綾子お姉さま。また、お猫様達とお話を。是非！」

「綾子様。武の鍛錬、お願いします」

説教をしたつもりが、却って懷かれてしまったらしい。

そのまま城内に出たものだから、出会う人皆、啞然としているし。
「どうなってるの、これ？」

「……あたしに聞くな、雪蓮」
また、あたしの悩みの種が増えた……ああもう！

〓十一〓（後書き）

ちよつとコメディ要素を入れてみました。

シリアス一辺倒では、と思いましたが……如何でしょうか。

オリキャラはもう少し後の登場になります。

あと、一刀が空気ですが、彼は主役じゃないので、今後あまり出番はないかも。

ご意見、ご感想がありましたらお気軽にお寄せ下さい。

ページビューやお気に入り登録の数と共に、かなり励みにしております。

十二 (前書き)

オリキャラの話を考えているうちに、気づいたら完成していましたので投稿します。

いただいたアイディアを元にしたストーリーです。
そして、久々に綾子の無双ぶり発揮です。

十二

南陽城、謁見の間。

雪蓮以下、将が勢揃い。

ドタバタしていたけど、菖蒲も正式に、雪蓮への仕官が認められた。

……まあ、あたしの下に配置されているから、身分的には陪臣として事になるらしいけど、本人が喜んでいるので何も言えない。

もっとも、雪蓮の事だから、それで差別をしたりって事はなさそうだけど。

「さて、今後の方針だが」

進行役は冥琳。

「つか、他に適任者がいない。

「まずは、この南陽の建て直しだな。なんせ、前の太守がアレだったからな」

「ですねえ。民の皆さんも疲弊していますし、治安も良くしないと」

袁術は、民に重税を課していたが、生活自体が贅沢だったから、城には思いの外、蓄えがないらしい。

もともとは人口が多く、豊かな土地だったのに、あまりの統治の酷さに逃散する民が多く、戸籍も当てにならない状態ってんだから……。

「ふむ。袁術を打倒してみると、想像以上に難儀な状態だった、という事か……」

「冥琳さま、穏さま。復興のための資金も、決して潤沢とは言えません。それに、兵も養わなければなりませんし」

祭さんに亞莎も、難しい顔つきだ。

「こうなると、袁術の兵力がそっくりそのまま手に入った、というのも考え物ね……」

「う……すまん」

「あ、いや、綾子が悪い訳じゃないわ。それとこれとは、また別の話よ」

蓮華は慌ててフォローしてくれるが……まあ、多かれ少なかれ、みんな同じ思いなんじゃないか、これ。

「……となると。この兵力を活かせるうちに、地盤を固める必要がある、って事ね」

「その通りだ、雪蓮。それに、この地に留まるならば、守りの問題が出てくる」

あたしも地図を見せて貰って気がついたんだが、ここ南陽は、大陸のほぼ中心。

都にも近いから、当然、他の勢力と争いになった場合、最悪は包囲されてしまう。

それでも、豊かなままであればまだ良かったが、今は建て直すのも気が遠くなるレベル。

「あの……。打開策はお持ちなのでしょうか？」

菖蒲が、遠慮気味に言った言葉。

その言葉に、皆の視線が冥琳に集まる。

「……なくもない。ただ、覚悟は必要だが……。綾子、わかるか？ って、なんでそこでまたあたしに振る！」

「冥琳。わかってやってるだろ？」

「何の事だ？ 私はただ、綾子の意見を聞いたまでだが？」

うー、ニヤニヤ笑いながら言われても、説得力なさ過ぎだろ。

……さっきから黙っている思春も明命まで、あたしが何か言うのを待ち構えているし。

「あー、ゴホン。雪蓮に聞きたいんだが。……まず、漢王朝は、どう見てももう保たない。それはいいよな？」

「ええ。末期の病人状態ですものね」

「それでだ。仮に漢王朝が倒れて群雄割拠の時代になったとして。もし、国を作るとしたら、その名前は決めているのか？」

「名前？」

キョトンと、あたしを見る雪蓮。

「名前、ねえ。……冥琳、蓮華、どう？」

「……考えていないのだな」

「姉様。その振りはどうかと思いますが」

「だってそうじゃない。だいたい綾子、それが冥琳の質問とどう関係があるの？」

矛先が戻ってきたか。

別に話を逸らした訳じゃないぞ、うん。

「例えばだけど、ここから江東の地を支配していく……とか。つまりは、呉の地だな」

「江東か。しかし、無人の地という訳ではないぞ？　劉ヨウや王朗もいる」

「全くの無抵抗で、つてのは無理だろうけどさ。でも、この面々がいて、質は今ひとつでも、兵は揃っている。それに、北に比べて南はまだ、余裕があるんだろ？」

「そうだな。河北は袁紹に曹操、公孫賛……他にもいろいろとひしめいている。それに、ここからなら江東の方が近い、か。ふふ」

「どうしたの、冥琳？」

「いや何。綾子が、期待以上の答えを返してくれたのでな。つい」

「……やっぱり、わかって言わせたな？」

「いや、江東への侵攻はともかく、呉の名前までは予想していなかったな。相変わらず、読めない奴だ」

「つて事は……。孫家の呉だから……。孫呉！　何故かはわからないけど、とてもいいと思わない？」

「うん！　シャオもいいと思う！」

「私も小蓮と同じです。まだ先の事かも知れません。けど……。呉の国を……。我らの理想とする国を目指しましょう！」

あらら、なんか三姉妹で盛り上がり始めたんですけど？

……うわ、ますますみんなの見る眼が……とほほ。

そして、トントン拍子に話は進み。

南陽は最低限の守備隊を残して、実質放棄に決定。

江東の地を制してそっちで勢力を築く、という戦略で落ち着いた。

「……で。冥琳、あたしをどこに連れて行く気だ？」

「何。戦略が決まれば、後は物資の手配ではないか」

「それはわかるんだけど。それとこれと何の関係が？ だいたい、

冥琳だって落ち着いているヒマなんてない筈だろ？」

そう、翌日になり、あたしはいきなり冥琳に連れ出された。

城内の整理でも手伝わされるのかと思いきや……何故かそのまま城外へ。

で、そのまま馬に揺られている、という訳。

そして、ほど近い邑に。

「すぐにわかる。それ、着いたぞ」

「着いた……って。塀しか見えないぞ？」

「何を言っている。こっちだ」

「こっち……って、何じゃこりゃ？」

冥琳の前には、でっかい門。

って事はこれ……屋敷か？

それにしても、でかすぎだろこれ。

前に見た、武家屋敷どころの規模じゃない。

「千花はいるか？」

「あ、これは周瑜様。お嬢様なら中におられます」

と、門番らしき男。

「そうか。綾子、入るぞ？」

「え？ あ、ああ」

戸惑いながらも、冥琳の後に続く。

門を潜ると、そこもやっぱり豪邸そのもの。

「ふえー。この家、めっちゃ金持ちじゃないのか？」

「その通りだ。このあたり、いや、江東でも三本の指に入る富豪だ

ろうな」

想像もつかないけど、とりあえずは大金持ちらしい。

こんなところの主人って、どんな奴なんだ？

……貧相なあたしの想像力だと、どうしても小太りで葉巻を持って着物を着ているイメージが……。

「あ。冥琳さん、いらっしやい」

「うむ、しばらくぶりだな、千花」

縁側に腰掛けていたのは、紫色の髪をした少年。

……北郷以外で、男を見るのは久々かな？

もちろん、街の人々や兵士にはいるんだが……。

「二人は知り合いか？」

「ああ。千花、紹介しよう。我が軍きつての猛将、美綴綾子だ」

「ブホッ！ こ、こら冥琳！ 知らない人が聞いたら誤解するだろう！」

「おや、私はそう思っているのだがな」

こんだけ人外揃いの中で一番の猛将とか……あり得ないだろそりや。

「あ、どうも。私は姓が魯、名が肅、字を子敬と言います。よろしくお願いしますね」

何だかほわほわした子だなあ。

……でも、魯肅って言えば、周瑜亡き後の呉の軍師じゃないか。

「ん？ どうした綾子。私の顔に、何かついているか？」

「あ、いや何でもない。……そうか、魯肅か」

「私の事、ご存じでしたか？」

「まあ、こやつは洞察力もあるし、意外に人物に対しての造詣も深い。千花ぐらい知名度があれば、知っていても不思議ではない」

「おやおや、随分と私も知られているんですね。なんだか光栄ですよ」

「で、冥琳。あたしをここに連れてきた訳は？」

「その前に、用件を済ませたい。千花、頼みがある」

と、冥琳は居住まいを正した。

「どうしたの、冥琳さん。改まって？」

「実はな。雪蓮を旗頭に、江東の地をまとめる事になった」

「なるほどなるほど。それで？」

「将も兵も揃えられたが……。軍資金と兵糧に事欠いている始末だな。千花に、援助を頼みに来たのだ」

「なんだあ、そんな事でしたか」

と、ニコニコ笑う魯肅。

「なら、あの蔵ごと、使っちゃっていいですよ」

「蔵ごとって……どわっ！」

屋敷の中に、ひときわでかい蔵が、二つ。

……これ、南陽城の蔵よりもでかいんじゃないか……。

「千花。援助してくれるのは有り難いが……しかし……」

冥琳も流石にそのまま受け取るのは躊躇いがあるようだ。

だが、言い出した本人は相変わらずニコニコしたまま。

「いいんだよ。冥琳さんの役に立つなら」

「しかしな……」

「それだけじゃ納得できないかなあ？　じゃあ、そちらの美綴さんの為にも、と言う事でどうかなあ？」

「……へ？」

そこで何故、あたしの名前が出る？

「冥琳さんが、意味もなく人を連れてくる筈がありませんから。」

それに美綴さん、貴女も英雄の相がありますし」

「英雄の相？　何だそれ？」

「流石は千花、気づいたか。本来なら、英雄並び立たず、って奴なんだが……。不思議と、雪蓮と並んでもぶつかり合う事がない」

またなくんか、えらい事言われてますよ、あたし？

「これだけの人物にお会いできたんですから、蔵の一つぐらい安い物ですよ、はい」

魯肅はニコニコしながら、

「でも冥琳さん、ずるいよね」

「ふっ、何の話だ？」

「わかってるくせに。こんな人にお会いしちゃったら、私が断れない、ってわかってるくせに」

「……えーと、何のお話をしていらっしゃるのでしょうか、お二人様は」

怪しい敬語になるあたし。

「私は、一角の人物を見るのが大好きなんです。冥琳さんも、最初にお会いした時はとっても感激でしたから」

「そ、そうなの……」

「ダシにしたように悪かったな、綾子。だが、お前にも千花は紹介しておきたかったんだ。それで千花、前にした話は、考えてくれたか？」

「うーんと、冥琳さん達のところで、お仕事するって話かなあ？」

「そうだ。お前は野に置いておくにはあまりに惜しい。富豪としての地位もあるだろうが、そこを曲げて頼みたいのだ」

何となく納得するあたし。

まあ、あの魯肅と同一人物なら、相当に優秀……なんだよな、きつと。

「ん……。そうですねえ」

何故か、あたしを見る魯肅。

「じゃあ、賭をしましょう」

「賭？」

「そうですよ。美綴さんが私の私兵に勝ったら、冥琳さんについて行きます」

「……ちよつと待て。どうしてそうなる？」

「だって、孫策さんのところで一番の猛将、って聞かされたら、見てみたくなるじゃないですか」

「冥琳！ だから言わんこっちゃない」

「……すまん、綾子。だが、悪い条件ではない」

コラー！ あたしの意味は無視かい！

結局、なし崩し的に勝負するハメになった。

「では、勝負の判定方法ですけど。美綴さんが、無事にこの森を抜けられたら、美綴さんの勝ちとしますね」

あたしの前には、村はずれに広がる森があった。

「無事ってのは？」

「捕まらなければいいですけど。もちろん、大人しく通れるようにはなっていないけどね」

……ハア、気が進まない。

「冥琳。帰ったら覚えてろ」

「……恨まれたままでは敵わん。結果はどうあれ、戻ったら相応に報いさせて貰うさ」

クソ、ならやってやろうじゃないか。

もう、矢でも鉄砲でも持ってこい！

あたしは意を決して、森に飛び込んだ。

結構深い森。

迷ったら出るどころじゃないだろ、と思っていたんだが、時折目印がついている。

一応、順路はあるらしい。

ヒュン！

「！！」

飛んできた矢を、薙刀を振り回して払いのける。

鏃は潰してあるようだけど、当たれば痛い。

間髪を入れず、木立の間からの槍袈。

カンカンカン！

全部叩き付け、穂先を折ってやる。

「そこだっ！」

慌てる槍遣い達に、石突きで一撃を入れる。

「グウッ！」

そして、間断なく飛んでくる矢は、かわしながら発射地点を探す。太い枝の上に、影が見えた。

「そこっ！」

ビームライフル……はないので、携帯用、というかおもちゃの弓を放つ。

鏃はもちろん潰れているのと、命中するとすぐにわかる。

何故なら、

「キャッ！ な、なにこれ？」

樹上にいた弓遣い達が、パニックを起こして落ちてきた。

潰した鏃に、小さな袋が付けてある。

命中すると袋が破け、中に詰めた食紅が飛び出る仕組み。

食紅だから害はないが、真っ赤に染まるので誰がどう見ても命中、という訳。

……子供の玩具として軽い気持ちで作ってみたけど、意外と使えるなこれ。

襲撃をかわして先へと進むあたし。

待ち構えていたのは、落とし穴やら、引っかけたら岩が飛んでくる仕掛けやら。

どこのサ○ケですか、あんたら。

落とし穴はともかく、岩は結構シャレにならなかった。

あっさり砕けたので、軽石か何かだったんだろう。

……その後で、仕掛けたらしき連中が、何故か呆然としていたが。そんなこんなで、森の出口が見えてきた。

やれやれ、やっと終わりか。

「おっと、ここは通さないよ」

誰かが通せんぼう。

両手に刀を持った、女の子。

口調はおどけているが……うん、隙はないな。

「なるほど。アンタがラスボスって訳か」

「らすぼす?」

「最後の敵、親玉って意味さ。さて、どうする?」

「勿論」

女の子はニヤリ、と笑うと、

「ここは通さないよ。つまりは……アンタを倒す!」

「なら、一対一で勝負だね」

あたしも、薙刀を構え直す。

その瞬間、女の子が消えた。

……いや。

「頭上か!」

ガキン!

素早く薙刀で防ぎ、そのまま振り払う。

カン!

女の子は二刀流で防ぎ、一旦間合いを取った。

「へえ。ボクの動きについてくる奴は久しぶりだよ」

「アンタこそ、やるじゃないか」

「余裕? なら、これでどう?」

素早く地を蹴り、そのままあたしの懷に飛び込んでくる。

交互に突き出される剣を、柄で受け流す。

もちろん、そのまま受けたんじゃ、柄は真っ二つ。

なので、振り払いながら刃を受けないようにする……言うのは簡

単でも、実践するのはかなり大変。

「守るだけじゃ勝てないよ!」

「そうだな……。なら、そろそろ反撃といくかね」

「な、何っ!」

がら空きのボディに、蹴りを一撃。

もちろん、かわされる事は承知の上。

体制が崩れたところで、女の子の腕を掴み、

「せいっ!」

そのまま、背負い投げ。

「あ、あわわわっ！」

見事に決まり、女の子は倒れた。

そして手にしていた剣は……近くの木立に突き刺さった。

「勝負あったな」

「くっそー……。強いなあ、このボクが歯が立たないなんて」

「いや、そっちこそ。いい勝負ができたぜ？」

どちらからともなく、握手を交わすあたち達。

森の出口には、冥琳と魯肅が待っていた。

……というか、二人でお茶してるよ。

「あらあら、やっぱりご無事でしたか」

勝負に負けたというのに、魯肅はニコニコ顔。

「悔しくないのか？」

「悔しくない、と言えば嘘になりますけど。でも私は、美綴さんの
凄さを見られた嬉しさが先ですね」

「そうか」

ふう、と息を吐き、あたしも勧められるままに茶を一杯。

うん、動いた後だから、余計に旨い。

「では千花。約束通り、来て貰うぞ」

「うん、冥琳さん。あ、そうそう」

と、魯肅はあたちを見る。

「真名は、千花ちかです。改めてよろしくお願いしますね」

「いいのか、そんな簡単に？」

「はい。美綴さんの武は、嘘偽りのないものですよ。そこに敬意を表しまして、です」

「そうか。ならあたしも綾子でいいよ。よろしくな」

「ありがとうございます、綾子さん」

「ところで、一つ聞きたい。あたと最後に遭り合った娘は？」

「ああ、あの娘なら」

「ボク？」

呼ぶまでもなく、目の前にいた。

「魯肅さん。悪いけど、今は一緒に行けない」

「あれれ？ どうしてですか？」

「……この人に、子供扱いされちゃったんでね。悔しいけど、今のボクじゃそこまでだ」

「子供扱いなんてしてないって。実際、強いと思うぜ？」

本心からそう思う。

だが、女の子は小さく笑うだけ。

「もう一度、鍛練を積んでくるよ。そして、その後で改めて……手合わせ、いいかな？」

「……わかった。じゃ、名前を聞かせてくれ」

「……いや、それもよしておくよ。次に、貴女の前に姿を見せたら、改めて名乗るから」

「そうか、わかった」

「じゃ、世話になったね、魯肅さん」

「いえいえ、こちらこそ。お元気でいて下さいね」

「うん！」

女の子は大きく手を振ると、そのまま去って行った。

「綾子。あの者、どう思う？」

「そうだな。真っ直ぐで、武官としての素質も悪くない。……きつと、仲間にすれば心強い奴になるかもな」

「……そうだな。さて、戻ろう。そうでないと、また雪蓮がサボり出す」

こうして、千花が仲間に加わった。

……案の定、サボって酒を飲んでいた雪蓮は、戻った冥琳に大目玉を食らった。

もはや、お約束だな。

十二（後書き）

オリキャラ二人が登場ですが、片方は敢えてまだ正体を伏せておきます。

もちろん、後で登場します。

累計PVが36,000を超え、お気に入り登録も100件を突破。拙作をこれだけの方に見ただけだというのは有り難い限りです。

ご意見、ご感想もお気軽にどうぞ。

十三 (前書き)

新キャラ、千花の話となります。

……なんか、ただの拠点パートになってしまった気もしますが。
半ば勢いで突っ走ってますので、このまま投稿します。

十三

千花が仲間に加わり、人的にも物的にも用意が整い始めた。
いよいよ、江東制圧に向けて動き出す事になる。

兵については、そのままでは多すぎるため、祭さん、思春、明命で一度調練を行い、兵に適正なし、という連中は手当てを出した上で帰農させ、なるべく精鋭だけに絞った。

調練なら手伝うつもりだったんだが……。

「悪いが、綾子では絞られ過ぎる危険がある」

「すまぬな、徹底的に鍛え上げるのはまたの機会になろう。ここは儂らに任せるがよい」

……思春に祭さん、あたしを一体何だと？

仕方がないので、片隅で猫達と黄昏ていたら、明命が調練そっちのけでトリップしかかり、猫ごと調練場から追い出された。

当てもなく城内をフラフラしていると、たくさんの竹簡を抱えた文官達とすれ違った。

「大変そうだな。そんなに一度に運ぶんじゃ大変だろ？　あたしも手伝うよ」

「あ、美綴様。しかし、そのような事でお手を煩わせては……」

「いいて、あたしもヒマだし。どれ」

先頭の文官の腕から、竹簡を受け取る。

お、案外軽いなこれ。

「そっちのも貸しなよ。このぐらいなら持てる」

「い、いやしかし……」

仕事を横取りするつもりじゃないが、どいつもこいつも足元がふらついていて危なっかしいんだよ。

「ほら」

「は、はあ……」

戸惑う彼らに構わず、全部を受け取る。

嵩はあるけど、重さは……うん、大した事はないかな。

……で、何でこの人は石化してるんだ？

「どうかしたか？」

「……ハッ。い、いえ……。しかし、流石は美綴様ですな、これだけの量を」

「そうかな？ 鍛え方が足りないんだよ、文官だからって、身体は動かした方がいいぜ？」

「あ、あははは、さ、左様で……」

乾いた笑いで返すな。

「で、何処に持って行くんだ？」

「はい。周瑜様と魯肅様、陸遜様のところへ」

「あいよ。じゃ、案内してくれ」

「……………」

「ん？ 行かないのか？」

「い、いえ。こちらです」

……怖がられている気がするの、何故だろう。

「お待ちせ、持ってきたぞ」

「あ、ご苦労。……綾子、何だその量は？」

「綾子さん、ま、まさか全部一度に運んだんですかあ？」

「はわゝ、凄いですね」

なんか、三人の反応がおかしい。

……つか、呆れられてないか？

「あれ？ いっぺんに運んだ方が効率いいかなって。もしかして、余計な事したか？」

「……い、いや……助かる。な、穂、千花？」

声の上擦ってるぞ、冥琳。

「なら、ここに置くぞ？」

空いている机の上に、竹簡を崩れないように置く……結構難しい

かな、この量だと。

「あ、ちょっと待って下さい。綾子さん、いいものをお見せしますよお」

何故かニコニコしている穩。

千花と並ぶと……うん、和む。

「いいものって？」

「では千花さん、こちらをお願いしますね」

「はーい、お願いしました」

カラ。

竹簡を広げた千花。

……その瞬間、あたしは信じられないものを、見た。

目にも止まらぬ早業で、手裏剣を投げ、じゃなく、書簡を処理。

「……何、だと……」

彼女の前に積まれた竹簡が、みるみる減っていく。

適当に片付けて……いる訳がないな。

それなら、横にいる冥琳が黙っていないだろうし。

他の文官もサボっている訳じゃないのに、千花の減り方があまりにも早すぎる。

あの、ぼわぼわした雰囲気は、どこかに消え失せているし……やつぱり、魯肅なんだなあ、と再認識。

「流石は千花だな。計算が速い」

「い、いや……。電卓も算盤もないのに、それは凄すぎだぞ……」
と、あたしのつぶやきを聞き逃さない穩。

「綾子さん。何か、計算に便利な道具でもご存知のようですねえ」

「へ？ ま、まあな」

あたしは、ポケットからケータイを取り出した。

「あらあ？ それは何でしょう？」

あ、千花がぼわぼわモードに戻ってる。

「確か、美しい絵を、自動で描く機械だったな？ けーたい、とか言ったか？」

「よく覚えているな、冥琳」

「忘れる筈がないだろう。それだけ印象深いものを。で、またあの絵を見せるのか？」

「あ、今日は違うんだ。これ、他にも機能があるんだけど……」

メニューキーを操作し、電卓モードに。

「で、例えば……そうだな、このあたりの邑の人口を合計して、平均を計算してみるか」

度量衡も違うから、こんな事しか事例が浮かばないし。

「……七百四十一。どうだ？」

「ふえー、ピッタリですよ綾子さん」

千花は既に、暗算で計算済みらしい。

電卓使ってまで、負けるあたしって一体……。

凹んでいるあたしを他所に、三人はワイワイと盛り上がっている。

「しかし、この小さな箱にどんな絡線が……。ふむ、綾子の国とは、ますます不可思議だ」

「でもー。国中の職人さんたちが頑張っても……無理ですよねえ」

「うーん。便利なんですけどねー。綾子さんー、他には何かご存知じゃないですかー？」

「そうだな。なら、算盤かな？」

実物は流石にないので、碁石と筆で、それっぽくして説明。

「……で、足し算だところ。引き算だと、こんな感じで」

「なるほどー」

十進法が使えないみたいなので、改良しないとそのままでは使えない事が判明。

「すまん、役に立たなくて」

「いえー。これはいいですよー」

「そうですね。千花さんみたいに、計算が速い方だと効果的ですよ」

「ならば、職人に作らせてみるか。計算が速くなるならば、文官にも試させる価値はあるな」

……あら、いつの間にか正式採用の方向に……？

「それはさておき」

と、ニヤリとあたしを見る冥琳。
物凄く、いや々な予感が。

「さ、さて、じゃああたしは鍛練に……」

ガシッ。

両腕を穏と千花に挟まれた。

「綾子さん。ちょろっとだけ、お手伝いして欲しい書簡がありました」

「一緒にお仕事して貰えますよね、もちろん？」

二人ともニコニコしたままだが……逆らいがたい迫力が……ホントにアンタら、文官か？

「……ちなみに、拒否権は……？」

「もちろん、ない」

あゝ、藪蛇だゝ！

「ハア……疲れた」

竹簡の山がなくなり、やつとこさ解放された。

また頼むぞ、なんて冥琳に言われたが、全力で辞退したい。

「にゃ」

黄昏れて城壁に登ったあたしの周りに、猫がわらわらと集まってきた。

スリスリ。

何故か、こっちに來てから猫になつかれるようになった。

あたしも嫌いじゃないし、甘えてくる猫に癒されない筈もない。

「よしよし」

喉を撫でてやると、気持ち良さそうに喉を鳴らす。

次は自分だ、と別の猫がやってきて……ある意味、カオス。

明命がここにいたら、悶え転げ回ってるな、間違いなく。

「あらあら、猫王さん、こんなところにいたの？」

「誰が猫王だよ、雪蓮」

「あら、違うの？ 街の子供がそう呼んでいたわよ」

子供は正直だ、確かにそう見えるんだろう。

……まあ、悪い気はしないからいいんだけどな。

「さて、やっと約束が果たせそうね」

そう言いながら、雪蓮はあたしの隣に腰を下ろす。

猫達も心得たもので、場所を空けつつ、あたしへのスリスリ攻撃は続けている。

「約束って？」

「言ったじゃない。袁術ちゃんの事とか片付いたら、ゆっくり話しましょう、って」

「あ、その事か」

「祝宴はそれどころじゃなかったし、その後も忙しかったからね」

「……その割には、冥琳が探し回る姿を随分見かけたんだけど？」

う、と雪蓮が顔を顰める。

「そ、それは……。そう、偶然がいくつも重なり合ったのよ、うん」

「ま、雪蓮らしいっちゃそうなんだけどさ」

「そういう事で、はい」

何がそういう事なのかはわからんが、雪蓮は徳利と杯を手にしていた。

「また飲むのか。好きだねえ」

「いーじゃない。綾子と飲むお酒、美味しいんですもの」

「とか何とか言いながら、口実にされているとは思えない」

「ぶーぶー。それは酷いわよ、綾子」

拗ねている素振りをしているが、本心からではない。

まあ、あたしも軽くからかっているだけだしな。

「じゃ、かんぱーい」

「ああ、乾杯」

少し、きつめの酒。

だが、悪くないかも。

「ふう、やっぱり美味しいわ。やっぱり、お酒は美味しく飲めなき

やね」

どこことなく、はしゃいでいるな。

「何か嬉しい事でも？」

「そりゃあるわよ、いろいろと。こうして、自由の身にもなれたし」

「ま、その代わり今度は王としての仕事が待っているけどな」

「う……。嫌な事を思い出させないで、もう」

「仕方ないだろ、それが上に立つものの宿命みたいなもんだ」

「……綾子、最近冥琳に似てきたんじゃない？」

「あはは、それはない。逆立ちしたって、あんな稀代の軍師様にはなれないよ、あたしじゃ」

「ま、それもそっか」

そうあっさり認められるのも、それはそれでちょっと癪かも。

「綾子は綾子だもの。……本当、不思議よね、あなたって」

「そうかな？」

「そうよ。あなた、庶人の出、って言ったわよね」

「ああ。まかり間違っても、どこぞの名家とか末裔とか、そんなのはない」

「庶人の出でも、優れた人は大勢いる。漢の高祖だって、元を辿ればそうなもの」

高祖って……。そりゃ、確かに。

でも、比較される対象が偉大すぎ。

「あなたはそう言うけど、武はまさに無双、明命や小蓮、菖蒲があれだけ慕う人徳。それに、いろんな知識もあるじゃない」

「褒めすぎだって。あたしはただの武道バカだよ」

つうか、人徳とは何か違うような気がする……。あの三人の場合。

「あら、謙遜？」

おかしそうに、雪蓮が笑う。

「そんなつもりはないよ。これでも、あたしは身の程をわきまえて
いるつもりだけどな」

「そうかしら？　もし、あなたが仮に独立でもしたら、結構な勢力

を築けちゃったりして」

「……それは、あたしならあの曹操とでも張り合える、とでも？」

「そうね。綾子なら……あり得るんじゃない？」

勘弁してくれ。

あんな完璧超人とタメ張るなんて、考えただけでもゾツとする。

「……でも、ありがと」

「急にどうしたんだ？」

「いろいろとね。綾子が来てから、いろいろあったもの。そして、あなたのおかげで、今のわたしがある」

「大げさだろ、そりゃ。あたしは大した事はしていないさ」

「ふーん、今日はやけに謙遜するのね」

「だから、謙遜じゃないんだって。ああ、もう！」

勢いで、杯の中身を一気に干した。

う、クラクラする。

「じゃあ、どうして曹操の誘いを断ったの？」

「へ？」

どうして、雪蓮がその事を？

「あら、自分の城下町で起きた事ですもの。そりゃ、耳に入るわよ」
まあ、普通の茶店での会話だったからなあ。

誰にも知られないって方が無理、か。

「まず、あたしは曹操が期待する程の器量じゃない」

「謙遜、三回目よ？」

「だから……もういい、それは。あと、フィーリング的に、無理」

「ふいーりんぐ、って何？」

いかん、変に酔いが回ってきたからまた横文字使っちゃった。

「感覚的というか、相性的に。それだったら、雪蓮の方がよほど気
楽だ」

「それ、褒めてるの？」

「当たり前だろ。さっきも言っただろ、あたしはただの武道バカだ
って。小難しい事はダメなんだよ」

「ぷっ、あっはっはっは」

何がツボに入っただのか、雪蓮は大笑い。

「何かあたし、変な事言ったか？」

「い、いえ、あはは、ちょ、ちよっと待って、うくくく」

涙目になってまで笑われてもなあ……。

「ハア、ハア、ハア……。ちょ、もうちよっと、待ってね」

雪蓮は杯を一気に干した。

「ふう……。だ、だって、綾子、あんまりにも直球なんだもの。自分を飾らないのはいいと思うけど、限度があるわよ」

「だからって、そこまで笑わなくてもいいだろ……」

「ご、ゴメンね。でも、綾子がいけないのよ。ぷくくく」

また笑いを堪えてるし。

「つたく。ほら」

徳利を持つと、妙に軽かった。

どうやら、空になったようだ。

「ほれ。酒なら持ってきたぞ。……にしても、何じゃこれは？」

祭さんが、呆れ返っている。

雪蓮は腹を抱えて笑っているし、あたしの周りは猫だらけ。

……まあ、傍から見ればシュールだろうな、この状況。

「まあよい。にしても策殿、綾子。酒の場に儂を呼ばぬとは、随分と冷たくはないか？」

「そんなつもりはなかったのよ。綾子と話がしたかっただけで、お酒はついで」

「にしちゃ、いい飲みっぷりだったけどな」

「あゝん、祭。綾子がいじめる」

「これこれ、じゃれ合うのも大概になされい。それはそうと、綾子」

「何ですか、祭さん？」

「お主、弓にも長けておったの。どうじゃ、今度儂と弓比べをせぬか？」

「望むところです。あたし、祭さんにも教えを請いたいと思っていましたし」

「そうかそうか、よし、決まりじゃな。さ、飲め飲め」
あたしもご返杯。

で、やっぱり水のようにすいすい飲むあたりが祭さんクオリティ
1。

「綾子ゝ。あたしにも」

「はいはい」

「ほれ、綾子もグツといけ、グツと」

祭さんに捕まったんじゃ、相当飲まされるなこりゃ。

……で、気がついたらベッドの上だったんだけど。

「何、これ……？」

ベッドの周りで大量の猫が丸くなって寝ていて。

あたしを挟むように明命と小蓮が、すやすやと安眠中。

どうやら潰れたあたしを、祭さんが運んでくれたらしいんだけど、
その時に猫達と一緒にいつてきたらしい。

それはいい。

……でも、この二人は一体……？

「綾子様。お水をお持ちしました……って」

まさにナイスタイミングで入ってくる菖蒲。

「な、な、な……」

「落ち着け！　まずは話を聞け！」

「何してるんですか、綾子様！」

「な、何事ですか！」

「シャオの寝起きを襲うなんて何様！」

「だあああ、寝ぼけるなオマエら！」

夜中に大騒ぎになり、何事かと皆が駆けつける始末。

……冥琳と蓮華に、全員こってり絞られましたよ、ええ。

ちなみに、明命は猫の気配につられて無意識であたしのところへ。
たまたま目が覚めた小蓮が、後をつけてそのまま……と。

一つ、問いたい。

……あたし、何か今回の件、悪い事したか……？

十三 (後書き)

千花のキャラが、穏や風と被りそうな……書き分けに気をつけないと、訳が分からなくなりそうですね……。

そろそろ、本格的に江東制覇のスタートになります。

戦闘シーンが相変わらず稚拙な描写になっていますので、何とかしたいのですが。

〜十四〜（前書き）

ネタだけはバシバシ浮かんできているのですが、上手くまとめられているのかどうか……。

ちよつと中途半端にコメディ気味が続いたので、今回はシリアス風味で参ります。

十四

「雪蓮」

「ええ」

南陽城に勢揃いした兵士達。

もちろん全員は入りきらないけど、主要な兵士が集められている。その前に、進み出る雪蓮。

「皆の者、よく聞いて欲しい。暴政を敷いていた袁術は既に打倒した。だが、ここ南陽は疲弊し、民も塗炭の苦しみに喘いでいる。袁術の罪は重いが、それを責めるだけでは未来はない！我々は、これより江東の制覇へと進む。これは、新天地を得るためだけの戦いではない！この地の、そして戦乱に苦しんでいる江東の民を解放し、安んじるための義戦である！私はこれより、江東の安寧を目指す！皆はその呉、孫呉の兵士として、立ちはだかる者達を打ち破り、安住の地を得ようではないか！皆、大いに励み、そして力を貸して欲しい！」

「オオーッ！」

湧き起こる歓声。

短期間ではあったが、選り抜かれた士気の高い、精鋭達。

そして、優れた将達。

大陸最強、とはさすがに言えないだろうけど、少なくとも相当に強い軍が、できあがった瞬間。

「綾子」

隣にいた蓮華も、いい表情をしている。

「私も、孫呉のため精一杯やるわ。力を貸して」

「……ああ。やるさ、雪蓮や蓮華のため、そして皆のためにも、な」

「では、出立！」

「応！」

先陣は明命と穩。

……で。

「なあ、穩」

「何でしようか？」

「……あのさ。やっぱあたしが先陣の司令官ってのは……」

「もう決定事項ですよ？ それに、綾子さんなら問題ありませんから」

そう言われてもなあ。

「大丈夫ですよ、綾子さんはどーんと構えていて下さいねえ」
いいんだろうか、しかし。

作戦指揮なんて、祭さんのを一度見たぐらいだぞ。

「それで、目標は寿春……だよな」

「はい」。劉ヨウさんのお城ですね」

……さて、誰だったわけ？

名前が出てこないぐらいだから、あまり気にする事はないのかも知れないけど。

ま、なるようにしかならんか。

「そう言えぱ。あの猫の大群はどうしたのでしょう？」

「ああ。たぶん勝手についてきてると思う。ただ、一緒だと……」

「ああ、明命ちゃんが戦闘どころじゃなくなっちゃいますものねえ」

「……そういう事だ」

どうもあたしが猫に好かれるスキル(?)を身に付けたせいか、余計にトリップしやすくなってるからな、明命は。

別に命令した訳でもないけど、猫達は城を出る前からサツといなくなつた。

……また、猫王なんて呼ばれそうだなあ。

途中で黄巾党の残党を打ち破ったり、軍に志願してきた連中の対応をしたり。

ほとんどは穩が対応方法を指示してくれるし、それ以上の判断が必要な場合は雪蓮のところに使いを出すだけだから問題はない。

寿春までの行軍は、順調そのものだった。

「よし、全軍止まれ！」

かねてからの打ち合わせにあった地点で、行軍をストップ。

明命隊が斥候に出ているので、それを待つ。

「綾子お姉さま、穩さま、戻りました」

って、早っ！

「明命ちゃん、ご苦労様でした。どうでしたかあ？」

「はい。『太史』の旗が、寿春城の手前に立っていました」

江東でその名前って事は……たぶん、あの武将だな。

「太史……。太史慈、か？」

「お姉さま、よくご存じで」

「まあ、いろいろあるんだよ、あたしも。それで、数は？」

「一万ほどかと」

雪蓮から預かった兵も、ほぼ同数。

数の上では互角だけど……。

「それから、牛渚の砦には、張英とハン能の旗が」

あ、そっちは完全に知らん。

「そちらは、雪蓮さまの本隊が来てからでも良さそうですね。とな

ると、まずは太史慈さんでしょうか」

「そうだな。下手にかかる、被害もバカにならなさそうだし」

「あのー。綾子さんは、太史慈さんをご存じなんでしょうか？」

「そうですよ。もしそれなら、作戦の立てようもあると思いますが」

さて、どう説明したものかな。

あたしが知っているのは後世の歴史であって、目の前の現実とは違う。

だから、必ずしも同じ人物とは限らないんだけど。

「伝令、伝令！」

と、そこに兵士が駆け込んできた。

「申し上げます！ 劉ヨウ軍より、使者が参りました」

「使者？ わかった、通せ」

「ははっ！」

入れ替わりに、使者として派遣されてきた兵士が入ってきた。

「我が軍の将、太史慈からの言伝がございます。まずは、尋常に一騎打ちを申し入れたい、と」

「一騎打ち、ねえ」

……この場に雪蓮がいなくて、よかった。

彼女の性格なら、喜んで飛び出していただろうからな。

「返事はこちらからする。一旦戻っていいぞ、ご苦労さん」

「はっ！」

さて、どうしますかね。

ゲームだと、断ると士気が下がるんだけど。

「穩。出るべきか？」

「うゝん。危険ですよお？」

「それはわかるんだが……明命はどうだ？」

「私もあまり賛成は出来ません。ただ……」

「ただ、何だ？」

「はい。今いる兵は、雪蓮さまに従ってまだ日が浅く、忠誠心も決して高い訳ではありません。ここで断れば、ますます彼らを指示通りに動かすのが難しくなるかも知れません」

「なるほど」

兵を間近で見ている、明命ならではの意見だろう。

「穩。あたしもそう思う」

「……そうですねえ。明命ちゃんの見る目は、間違いないと思います」

……なら、話は決まりだ。

「穩。あたしが行ってくる」

二人とも、驚いてあたしを見る。

「え？ 綾子さんが？」

「ああ。向こうも一軍を率いている将なんだろう？　だったら、あたしが行かないと」

「ですが」

「大丈夫、簡単にやられはしないさ。司令官としちゃ頼りないだろうけど、一対一なら何とかなる」

「……お姉さま、気をつけて下さい。ご武運を」

「ああ」

そのまま、馬に乗って陣の前に出る。

「太史慈！　申し入れ通り、来てやったぞ！」

あたしの呼びかけに、敵陣から一騎、飛び出してきた。

「よし、敵ながら天晴れ。我が名は太史慈！」

「あたしは美綴だ。さて、勝負はどうする？」

「私の得物はこれだ。貴殿は？」

と、弓を取り出す太史慈。

そういや、弓の名手だったな、太史慈って。

「あたしも弓で構わない。弓比べと行こうか？」

「結構だ。そうだな、的は……あれにしよう」

と、太史慈は頭上を指した。

雁の群れが飛んでいる。

って、飛ぶ鳥を落とせって？

「では私から、参る」

太史慈は手にした弓を構え、狙いを定める。

「フッ！」

短い気合いと共に、放たれた弓。

「ギャッ！」

狙い過たず、一羽の雁が落ちてきた。

見事に羽を射貫かれて。

……百発百中の腕、ってのは伊達じゃなさそうだ。

「では、次は貴殿だ」

うゝ、止めときゃよかったか？

あたしの弓は、静止した的ばかりだったし。

そりゃ、こっちに来て多少は動くものも射たけど。
とにかく、落ち着けあたし。

「……行くぞ」

覚悟を決め、矢を番える。

ギギギギ。

ヒュン！

「ギョエ！」

……当たった。

落ちてきた雁、その首を射貫いていた。

「見事な腕だ。私よりも優れているとはな」

いや、たまたまなんだよね。

とか言ったら、本気で怒られそうだからやめとこ。

「では、次はこれで参る」

と、槍を取り出す太史慈。

「なら、あたしもこれで」

薙刀を構える。

「いざ！」

「来いっ！」

キイン！

突きを受け流す。

間を取り、素早く足払いをかける。

「なんの！」

そして、繰り出される槍。

ガッ！

ビュッ！

ガチン！

趙雲の突きも速かったが、太史慈のそれも、勝るとも劣らない。
気を抜いたら、やられるな……。

打ち合う事、五十、いや七十合を過ぎたかな。

いい加減、手が痺れてきた。

「や、やるな……」

「貴殿こそ……。私がここまで手こずるのは、初めてだ」
息も上がってるし、喉もカラカラ。

「太史慈様！」

「何だ！ 邪魔をするな！」

声をかけてきた兵士を一喝する太史慈。

「そ、それが……。牛渚の砦、陥落したとの事」

「な、何だと！」

さっき明命が言っていた砦か。

……となると、雪蓮達、もう着いたって事だろうな。

「劉ヨウ様より、退却の命が来ております」

「クッ！ しかし！」

あたしは、構えを解いた。

「命令なんだろう？ 行けよ」

「し、しかし！ 敵前で退却など！」

「ん？ ああ、追撃ならしないし、させない。安心しな」

あたしはそう言って、親指を立てる。

「美綴殿……？ しかし、それでは」

「あたしと互角にやる相手に、追い討ちをかけたくないだけさ。武人としての礼だよ」

太史慈は、あたしの言葉にフツと笑みを浮かべる。

「武人として、か。ではこの場は、お言葉に甘えよう」

「今度は負けないぜ？」

「それは私の台詞だ。では美綴殿、失礼する」

くるりと踵を返し、太史慈は自陣へ戻っていく。

「寿春城へ戻る。全軍、続け！」

「応！」

砂塵を上げて、太史慈の軍勢は去って行った。

「綾子お姉さま。大丈夫ですか？」

明命が、手ぬぐいと水筒を手渡してくれる。

「ああ、すまない。……ふう」

「流石は綾子さんですね、お見事でした」

穏もやって来た。

「すまない。独断で見逃してやった……。処罰は覚悟している、あたしの責任でな」

「えーと、何の事でしょうか」

「……え？」

「私、目が悪いので何が起きたのか見えなかったんですけどおそ、そんな訳ないだろ？」

「明命！」

「あ、見て下さい。こんな戦場にも、お猫様がいらっしやいますよ」

猫なんていないし、いる訳がない。

「ささ、戻って休みましょう」

「そうですよ。お姉さま、お疲れ様です」

「穏、明命……」

二人に手を借りて、陣に戻った。

「み、美綴様、凄かったです！」

「お、俺、あんな勝負、生まれて初めて見ました！」

なんか、兵士達から賞賛の嵐が。

自分の武が認められるのだから、悪い気はしないね。

とにかく、少し休憩。

「綾子。ご苦労様」

数刻後、雪蓮達と合流。

城から出ていた軍勢は全て蹴散らすか、退却したらしい。

「綾子。貴様と互角に遣り合った将がいる、というのは本当か？」

「そうさ、思春。それは明命も穏も見ていたから。太史慈って奴だ」

「あの綾子と五分……恐ろしい手練れだな」

……それは、あたしもその恐ろしい方に入る、と聞こえるぞ。

「残念ねえ。私も勝負したかったなあ」

「雪蓮。立場を忘れるな」

「そうです、雪蓮姉様は大事な身体なのですよ!」

「ぶー。冥琳も蓮華もわかってるわよ」

と、頬を膨らませる雪蓮。

「江東にそのような将が……。私でも、戦えたでしょうか……?」

「これ、亞莎。お主は武官でもあるが、自分で戦うよりもいかにして兵を動かすかを考えい! 冥琳に言われたばかりであろうが」

「は、はひ! も、申し訳ありません、祭様!」

「でも、綾子お姉ちゃんと互角って事は、かなり強いんだよね、その人? シャオも会ってみたかったな」

「うーん、なら、会えるようにすればいいんじゃないでしょうか」

口に手を当てながら呟く千花に、皆の視線が集まる。

「しかし、牛渚の砦は落としたとはいえ、まだ寿春には数万の軍勢がいるぞ」

「冥琳さん、私にお任せなのです」

「千花? 何か、策でもあるの?」

雪蓮の言葉に、ニコニコしながら頷く千花。

「策と呼べるほどのものじゃありませんけど」。劉ヨウさんに、城の明け渡しを交渉してきます」

あまりに気軽に言うので、その場の一同は皆啞然とする。

……一名を除いて。

「千花。勝算はあるのね?」

「もちろんですよ」

「いいわ。なら、任せましょう」

「雪蓮! いくら何でも」

「あら、千花の才を評価したのは冥琳、あなたでしょ? その彼女

が策があるというのなら、信じてあげて当然じゃない？」

「それはそうだが……しかしな」

まあ、心配なんだろうな、友人として。

「あのー。雪蓮さま。お願いがあるんですけどー」

「何かしら？」

「綾子さんをー、貸していただけないでしょうかー」

「綾子を？」

「はいー」

敵地に使者として乗り込むのであれば、当然警護が必要。
使者は普通斬らないものだが、それも相手によるからな。

「そうね……。思春は蓮華の警護、明命は斥候。祭は全体を見ているし……。あ、なら私が」

「却下だ、雪蓮」

「ぶーぶー。いけずよ、冥琳」

「……立場を考えろ、と言ったはずだが？ 綾子、頼む」
確かに、動ける武官はあたししかないさそうだ。

「わかった」

「ご無沙汰ですー、劉ヨウさんー」

「おお、魯肅ではないか」

寿春城の、謁見の間。

ちなみに、劉ヨウは男だった……。まあ、女ばかりじゃ、子孫が残らないし。

正使は千花、あたしは副使という立場で。

どうやら二人、知り合いらしい。

「して、今日は何用かな？」

「はいー。孫策さまの使いで参りましたー」

「……そうか。お前ほどの者も、孫策に仕えているのか」
ちらり、とあたしを見る劉ヨウ。

「あの者も、そうか？」

「美綴さんは、孫策さま第一の武将さんですから」

「では、太史慈と互角だったというのは……そうか、なるほどな」
劉ヨウはふう、と息を吐く。

「それで。用向きは何だ？」

「おわかりかと思えますけど。降伏していただけないかと思いまして」

「それはできん。孫策の勢いと人望のほどはわかったが、臣従するつもりはない」

「そうですか。では、戦うと？」

「……いや、牛渚の砦が奪われ、戦力が半減してしまった。今の勢いで、我が軍では孫策を止められないだろう」

「劉ヨウ様、何を！」

側に控えていた太史慈が、いきり立つ。

「まあ聞け、太史慈。儂が病を得ている事は知っているだろう。息子共も、残念ながら天下に名を成す程の器量は持ち合わせておらん」
「ですが、戦わずして降るなど、武門の恥です！」

「恥など、雪げばよいだけの事。もちろん、皆がどうしようと止めはせぬ。ただ、儂は孫策にここを明け渡し、どこぞに退去しようと思う」

「バカな！ 私はこれで、御免！」

太史慈はズカズカと出て行く。

「あ奴は性根は良いのだが、自分が納得できなければ降る事はあるまい。それよりも魯肅、城を明け渡すに当たり、孫策に一つ、条件がある」

「はい、何でしょう？」

「民を、苦しめる事のない政治を。それを約束できるのなら、儂はもう思い残す事はない」

青白い顔にも、しっかりとした意思を宿す劉ヨウ。

あたしは知らない人物だったけど、刺史を務めるだけの人物、ただ者じゃないって事か。

千花はあたしを見てから、しっかりと頷いた。

「はい。確かにその言葉、伝えましょう」

ぽわぽわモードを解除した千花の言葉に、劉ヨウも頷き返す。

「ふふ、世代交代が進んでいるという事だな……。そちらの副使、美綴、とか申したか？」

「はい。姓が美綴、名が綾子です」

「……よい眼をしている。それに、運氣もあるな……。この者がおる限り、孫策は安泰であろう」

おいおい、占い師かアンタは。

「では、戻って孫策に伝えるがよい。儂は、引き継ぎの支度にかか
るでな」

こうして、寿春は無血開城。

劉ヨウは宣言通り、どこかに落ち延びていった。

そして太史慈は、降伏に同意できない兵士たちを集め、丹陽とい
うところに向かった……。らしい。

今度こそ、決着をつける日が、迫っていた。

〓十四〓（後書き）

原作では省かれている、江東制圧での戦い。

戦いらしい戦いは太史慈との一騎打ち、本来ならこれは孫策の役目なのですが、敢えて彼女に代わって貰いました、主人公ですし。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

〽十五〽(前書き)

明日は投稿できるかな……。
とりあえず、続きをどうぞ。

十五

丹陽を目前に、軍議中。

メンツは蓮華に思春、そして亞莎。

雪蓮は来たがったが、冥琳が引き摺って連れて行った。

まあ、寿春の体制作りがあるしな。

「それで思春。敵の数は？」

「ハッ！ およそ五千かと」

率いてきた軍勢は二万。

数の上ではこちらが優勢……だけど。

「相手の将が、あの太史慈なのよね」

「はい。美綴様と互角に打ち合えるだけの猛将、相当に厄介かと」

さりげなく亞莎に人外扱いされている気がするんだが……確かに奴は強い。

「綾子。実際に手合わせした経験からして、どうかしら？」

「そうだな、得意は弓らしいが、それだけじゃなさそうだ。それに、

あの時率いていた軍も、一糸の乱れもなかったように思う」

「となると、将としても優れている、と……厄介ですね」

亞莎も、必死に考えを巡らせているようだ。

本人はあまり自覚はないが、冥琳や穩も理由があって自分たちと同じ、軍師として育てようとしている。

……あたしの知識からすると、むしろ呂蒙って智の人ってイメージが強いぐらいだし、素養は間違いないだろう。

「ともあれ、一戦交える事になるのは避けられないでしょう。戦わずして降る、武門の恥だと宣言したのですから」

「仮に思春が太史慈の立場だったとしても、そう思う？」

「……かも知れません。それ故に、正面から当たるとなれば、相應の覚悟が必要かと」

「今後の事も考えると、あまり多くの犠牲は払えない。とは言え、

放置も出来ない……か」

考え込む蓮華。

「なあ」

「何？ 綾子」

「太史慈なんだけど……。討ち取るつもりか？」
「え？」

あたしの言葉に、怪訝な顔をする一同。

だって、太史慈は実際に孫策に仕えたんだし、ここで死んじゃったらおかしいだろ？

「綾子様？ あの、それはどういう？」

「いや、あれだけの手練れ。あと性根もいって劉ヨウさんも言っていたじゃん。そんな奴を、いくら戦場だからって言って討ち取るのかな、って」

「綾子の言いたい事はわかるわ。確かに、孫呉にとって、あれだけの人材は欲しいわ」

「とは言え、犠牲は……。ど、どうでしょう……」
手詰まりか。

数で圧倒する事は出来るけど、被害もバカにならない上、太史慈を討ち取らない、となると……。

「……あたしが出る。それしかなさそうだ」

「綾子？ 何をする気だ？」

「アイツとは、まだ一騎打ちの決着がついていない。だから、それを利用する」

「利用って……。危険過ぎるぞ、いくら貴様でも」
思春の懸念ももつともだろう。

あの時互角だったとは言え、一瞬の隙が、油断があれば、討ち取られるのはあたしなんだから。

「わかってるさ。だけど、ここは戦場。危険な真似をせずに勝ちだけを拾えるとか、そんな都合よく行かないだろ？」

「それはそうだが……」

「亞莎」

「は、はひっ！」

「太史慈を引き摺りだすのは、あたしでやる。その間に、丹陽を何とかしてくれ」

「ええっ！ わ、私ですか？」

「冥琳が信頼して送り出した軍師じゃないか。自信を持て」

「そうね。太史慈が一番の問題なんですから、それを綾子が引き付けてくれる。後は私達の仕事ね」

「そういうこった。頼むぜ、みんな？」

あたしの言葉に、蓮華と思春が大きく頷く。

亞莎も、決意が眼に宿る。

「……わ、わかりました！ 綾子様、お氣をつけて」
「任せな」

親指を立てて、ニカッと笑う。

丹陽の城。

規模も小さいし、全軍で攻めれば落ちるだろう。

……ま、被害を気にしなければ、だろうけど。

城門の前まで、あたし一騎で進み出る。

敵は弓を構えているものの、射ってくる気配はない。

「太史慈！ 美綴が来てやったぞ、こないだの決着をつけないか？」
これで出てこなかったら、手を変えるしかない。

ギギギギ。

早速、門が開いた。

槍を手にした、太史慈登場。

「よっ、来たな。武人としての決着をつけないか？」

「望むところだ。いざ、尋常に勝負！」

あたしも馬を下り、薙刀を手にする。

「いざ！」

「参る！」

カキン！

カンッ！

「いい腕だ！」

「余裕か？なら、これでどうだ！」

ガン！

ガキッ！

繰り出される槍を受けつつ、間合いを保つ。

「どうした？ その程度かい？」

「ほざけ！」

突きと払いの応酬。

勿論、殺したくない相手だけど、だからと言って手加減はできない。

ふふ、久々にゾクゾクする相手だね。

キン、キン！

ガァン！

……けど、あたしは負けないよ。

そして、数十合打ち合っただろうか。

パキン！

聞きなれない音が、二人の間で響いた。

「……え？」

「……な、何っ？」

驚いて、手にした薙刀を見る。

見事に、刃がポッキリと欠けている。

そして、太史慈の槍も、穂先がない。

「仕方がない。こうなれば」

「力比べだな！」

ビュッ！

回し蹴りを、腕で受け止める。

そして、返す刀で正拳突き。

止められるが、それは四。

「おりゃ！」

「クッ！」

顎に向けての頭突き。

太史慈は身体を反ってかわすが、すかさず蹴り上げるあたし。

ガッ！

直撃はできなかったが、兜は吹っ飛んだ。

長い髪が、フワッと流れる。

……まあ、予想はしていたが、太史慈も女だった。

しかしまあ、どうしてこの世界の女性武将ってのは、どいつもこいつも美形揃いなものやら。

「まだまだあ！」

反撃の蹴り。

間一髪で避けられたけど、喰らったらタダじゃ済まなさそうだ。

「ふんっ！」

「なんのっ！」

ガシッ！

腕と腕がぶつかり合う。

「それそれっ！」

「……なんてバカ力だっ！」

「それはお互い様だろう、っ！」

その時。

「ワッ！」

丹陽城から、喚声上がる。

「何事だ！ あっ！」

振り向いた太史慈は、短く叫んだ。

城内から、煙が上がっている。

どうやら、亞莎が上手くやったらしいな。

「は、謀ったな！」

「謀ったとは人間が悪いな。正々堂々と勝負はしてるだろ？」

「クッ！ この場は預ける！」

「おっと。そうはいかないと思うぜ？」

「何だと！」

城門の上に、一斉に立つ弓兵。

全員が、太史慈に狙いを付けている。

「そ、そんな……いつの間に」

「大人しくしてくれるな？ あたしは、アンタを殺したくない」

「……わかった。投降する」

太史慈は、抜き払った剣を、地面に置いた。

彼女を連れ、本陣へ戻った。

亞莎と思春は、丹陽の制圧に向かっていて、この場にいるのは蓮華とあたしだけ。

「あなたが、太史慈ね」

「……そうだ。私を、どうする気だ？」

「できる事なら、力を貸して欲しいの」

「孫策の野望のためにか？」

「違うわ。呉の民のため」

「呉の……民？」

怪訝な顔をする太史慈。

「そう。攻めこまれた貴女達にしてみれば、私達の行動は野心によるもの、そう見えても仕方のない事。だけど、この地の民は、本当に安寧に暮らせているかしら？ 盗賊に怯え、戦乱に泣いている」

「それはそうかも知れない。だが、この地の事はこの地の者が決める事だ。他人に指図される事ではない」

「ええ、そうね。でもね、私達はそのままで見て見ぬふりはできないわ。だから、民を守るためなら、武力行使も辞さない。少なくとも、孫家はその信念で動いているわ」

「……………」

蓮華は、何だかんだでやっぱり王たる資質を持っていると思う。

「それが嘘か真か、貴方の眼で確かめたらいいわ。もし、私の言葉が偽りだった、そう思ったなら、もう引き止めはしない」

「随分と、自信があるのだな」

「ええ。その、綾子のお陰でね」

「どうして、そこであたしの名前が出る？」

「なるほど。ただ武が優れているだけの御仁ではない、という事か」

「……いやいや。あまり過大評価しないで欲しいんだけどな」

「ふふ、面白い。いいだろう、暫くここに置かせて貰う。その前に、一つだけ、提案がある」

「提案？」

蓮華が首を傾げる。

「そうだ。丹陽は落ちたが、兵達は散らばっているだけだ。その中には勇者も少なくない、これを集めて来たいのだ」

「それで、一時解き放て、そう言いたいよね？」

「そうだ」

太史慈の言葉にしばし考え、そして、

「綾子。どうかしら？」

「……あたしに振るな。」

あたしは軍師でも何でも無いんだが。

「どう、と言われても……」

「太史慈という人物を、少なくとも私よりも知っているのは貴女よ。そのあなたから見て、この提案はどう思うか、意見を聞かせて欲しいのだけど？」

「……そう来たか。あたしは、太史慈の提案、悪くないと思う」

「そう。なら、任せるわ。ただし、期限は設けさせて貰うけど、いかしら？」

「勿論だ。明日の日暮れまでに戻ってくる」

太史慈という人物を、信じるしかない。

「蓮華様！ 何という事を。綾子、貴様がついていながら！」

制圧を済ませ、本陣に戻ってきた思春は、あたし達に詰め寄ってきた。

「逃げるための口実、そうに決まっています！」

「いいえ。私にはそうは思えなかった。だから、許可したわ」

「ですが！」

「ああ、あの、蓮華様も、思春様も、おおお、落ち着いて下さい！」
亞莎、どもりまくりだぞ。

「一騎打ちで決着がつかなかった、それは仕方のない事だ。だが、おめおめと逃がすとは」

「逃げたんじゃない。それは保証する」

「何だと！」

あたしの胸倉をつかむ思春。

「思春、やめなさい！」

「しかし、蓮華様！」

「決定を下したのは私よ。もし、本当に戻ってこなければ、罰は受けるわ」

その言葉に、澱みは全く感じられない。

思春も、それでいくらか冷静さを取り戻したようだ。

「……わかりました。明日の刻限まで、待ちましょう。ですが、戻らない場合は追っ手を差し向けます。よろしいですね？」

「ええ、それでいいわ」

「あ、あの、この事は、雪蓮様には……」

「報告しておいて。ありのままを」

「は、はいっ！」

翌朝。

「では、これが一周するまでという事で」

地面に円を描き、中心に棒を立てる。

太陽光で影ができるから、その動きで時刻を調べる。

要は日時計。

……さて、太史慈は。

頼むから、蓮華と、あたしの信頼は裏切らないでくれよ……。

「それはそうと、綾子。薙刀は砕けたらしいが、得物はどうする気だ？」

「そうだな。とりあえずはこの剣で……」

襄陽で買い求めた剣は、二振り。

一本は惹かれて買ったものの、錆やら何やらで手入れしないといけない有様だが、ここのところ落ち着く間もなくそのままになっている。

もう一本は使えるので、とりあえずはこれで行くしかないだろう。

「あ、そう言えば」

「ん？ どうした、亞莎」

「は、はい。寿春に、鍛冶の名人がいる、と聞いたことがあります」
「鍛冶の名人？」

「そうです。変わった人で、どんなにお金を積んでも、気に入らない人だったら絶対に仕事は受けません。その代わり、その手から生み出される武器は、いずれも名のあるものになるとか」

「なるほど。なら、明日にでも行ってみるか」

「その方がいいわ。貴女が戦えないと、それだけで大変な損失だもの」

「いや、そんな事はないと思うけどな。それに、あたしには弓もあるし。でも、ちょうどいい機会だし」

変人らしいから、行っても無駄足になるかも知れないが、な。

昼も過ぎ、日も傾き始めた。

日時計は、もうすぐ一周を迎えるところ。

「……どうやら、来ないようだな」

「いえ、まだ日は沈んでいないわ。もう少し、待ちましょう」
まだか、太史慈。

蓮華の事だ、戻ってこなければ自分を責めるだろう。

折角、自信を持って動き始めたところなんだから、挫けさせたくない。

……頼む、戻ってこい。

「刻限です」

「……………」

「……い、いえ、待って下さい。あっちに砂塵が見えます！」

「何！」

亞莎の声に、皆が視線を向ける。

確かに、荒野の向こうから何かが向かってくる。

先頭にいるのは……太史慈だ。

「蓮華様、申し訳ありません。ご無礼については、いかようにも処罰を」

「いいのよ、思春。それより、彼女を迎えましょう」

「ハッ！」

良かった、本当に良かった。

蓮華とあたしは、笑顔で頷き合った。

〓十五〓（後書き）

太史慈のエピソードは、某漫画のストーリーそのままです。
義理堅いというイメージを出したかったので……。

十六 (前書き)

携帯で空き時間に書き進めているのですが、PC程辞書が賢くないので、どうしても後で修正が必要となる事が多いです。

誤字のほとんどがそれに起因していますし……。
チェックを徹底するしかなさそうです。

十六

太史慈を仲間に加えたあたしは、寿春城へ戻った。

城主が変わった混乱も治まってきたようで、街には活気があった。

「で、どこなんだ亞莎？」

「は、はい。確か、この辺りと聞いたのですが」

やはり、ちゃんとした武器を用意した方がいい、という蓮華の勧めもあり、件の鍛冶屋を探してる訳だが。

……なかなか見つからない。

「美綴殿。貴殿はわかるが、何故私も付き合わされているのかな？」
連れてきた太史慈は、あまり乗り気ではない。

と言うか、戸惑ってるようにも見える。

「いや、アンタだって得物なしって訳にもいかないだろう？」

「だが、武器を与えては、貴殿に危害を与えるかも知れぬのだぞ？」

「それはないな。少なくとも、あたしはアンタを信じる」

「ふ、おかしいものだ。昨日まで敵対していた私を、こうも容易く信じるとは。お人好しにも程があると思うが」

「蓮華もそうだが、一度信頼した人物は、大事にするってのがあたしの主義でね。だから、信頼した仲間が戦えるようにする。当然だろう？」

「全く。貴殿だけならともかく、孫策殿までその調子とはな。ま、私としても、弓だけで戦場に出たくはないがな」

ここに来る前に、雪蓮にも会わせたが、あたしとほとんど同じ事を言ったのには……なんつーか、シンクロし過ぎだなあたしらは。
で、太史慈をここまで信じる訳。

もちろん、根拠はあるけど、それは口にしない。

まさか、後世の歴史で義理堅い事を知っているから……なんて言えないし、言ったところで信じて貰えないだろうから。

もっとも、戦いの中で、そして約束を果たした時点で、例え歴史

と違っていようとも、あたしは信じるに足りる、そう思った。

「あ、ここみたいです」

ホッとした亞莎の声。

どうやら、探し当てたらしい。

古びた建物で、特に看板も何も掛かっていない。

……まあ、わからんわな、これじゃ。

奥から、金属を叩く音が聞こえてくる。

「ごめんください」

声をかけるが、返事はない。

「失礼しまーす」

庭の方を覗くと、大柄な男が、一心不乱に熱した鉄の棒を叩いている。

「集中しているようだな」

「邪魔しない方がいいだろうな」

「では、待たせていただきますでしょうか」

三人並んで、職人の仕事を見る。

カン、カン、カン。

分厚かった鉄の棒が、次第に薄くなっていく。

厚さは測ったように均一。

腕が確かなのは、間違いではなさそうだ。

と、男があたし達に気付いたようだ。

「何か用か」

ぶっきら棒に言う。

「あたしと、こっちの武器を頼みたいんだ」

「悪いが、他を当たるんだな」

男は全く関心がなさそうだ。

「そうはいかない。一軍を率いる将が、適当な得物って訳にはいかないからな」

「ほう。……そっちは太史慈様か。で、アンタは？」

「美綴綾子。孫策の将だ」

「なるほど。だが、俺は相手が例え皇帝陛下だろうが、気に入った仕事しかしねえ。だから、他を当たったほうが早いぜ？」

本当に偏屈な男らしい。

恐らく、金をいくら積んだところで、首を縦に振る事はしないだろう。

「そもそも、剣なら腰にあるようだがな？」

「ああ、これはまた別だ。後で、研ぎに出すつもりでな」

もう一振りの剣も、そのままにしておく訳にもいかないしな。

いくら錆だらけとは言え、相応の値はしたんだし。

……と、男の表情が動いた。

「……なあ、その剣、少し見せては貰えないか？」

「いいぜ」

あたしは剣を抜き、男に手渡した。

「……こ、こいつは……まさか！」

さっきまでの態度はどこへやら、真剣に剣を調べ始めた。

砥石で身を擦ったり、柄を何やら調べたり。

「間違いねえ。……なあ、アンタ。こいつを二、三日預らせてくれ！」

「どうする気だ、一体？」

「俺が全力で研ぎ、いや、甦らせる。頼む！」

思わず顔を見合わせるあたし達。

さっきまでの傲岸さは、すっかり影を潜めている。

「アンタが、全力でやってくれる、そう言うのか？」

「そうだ。もし、仕上がりが気にいらなけりゃ、この首落としてもらっても後悔はねえ」

男は、何故か必死だ。

「……わかった。なら、頼むでしょう。ただし、条件がある」

「何だ？ 俺に出来る事なら何でも言ってくれ」

「この太史慈の槍を頼みたい。もちろん、生半可な奴じゃなく、将として相応しいものを、だ」

「美綴殿、それは」

何か言いかける太史慈を、手で押し止めて、

「なら、三日後にまた来る。その剣と槍、宜しく頼むぜ」

「……わかった。一世一代の大仕事だ、やらせて貰う」

男は、しっかりと頷いた。

工房を出て、あたし達は城へと戻る。

「綾子様、宜しかったのですか？」

やりとりを見ていた亞莎、心配になったのだろう。

「ま、大丈夫だろ。あれだけの名人が全力を尽くす、そう宣言したんだ」

「は、はあ……」

「それより太史慈。この辺りで、何か美味しい物、ないか？」

「む？ そうだな、懇意にしている茶店があるが」

「ほお、そいつはいいね。よし、案内してくれ」

「案内も何も、そこだ」

太史慈について、茶店に入る。

「いらっしやいませ。おや、太史慈様」

「茶と、いつものを頼む」

「はい、少しお待ち下さいませ」

店の主人が、丁寧な頭を下げて奥に入っていく。

「どうした、呂蒙。意外か？」

「い、いえっ！ ただ、太史慈様と店の主人が、あまりに親しげなので」

「私とて、年中鍛錬や調練を行っている訳ではない。たまさか、こうして街に出る事もある」

そう言って、太史慈は茶碗を口にする。

……まあ、あたしからしてもちよつと意外な感じはする。

普段から、こんな調子でちよつとお堅いし。

それとも、もっと親しくなったら違った面が見られるのかな？

「お待たせしました。どうぞ」

小皿に置かれたのは、こんがりと揚がったごま団子。

「へえ、こいつは美味そうだ。じゃ、いただきます」

あちちちち、火傷しないようにしないとな。

気をつけながら、口へと運ぶ。

……うん、軽い歯ごたえに、ゴマの香ばしさ。

そして、餡が絶妙だ。

「美味い！」

「うむ、このごま団子は、少なくとも揚州では随一、と私は見ている」

「随一って。食べ比べでもしたのか？」

「な、何を言うのだ美綴殿。武人ともあろう者が、そのような真似、する筈がなからう」

「……まあいいけど。顔、赤くなってるぞ？」

「い、いいから黙って食べるのが礼儀というものだぞ」

うーん、敢えてツツコまない方がいいのかな、これは。

……あれ、亞莎がジーツとごま団子を見つめたまま、固まってないか？

「どうしたんだ、亞莎？」

「……は、はい……」

「熱いうちに食べるのが一番美味いんだぞ。それとも、ごま団子は嫌いだったか？」

「い、いえ！　そ、そんな事は。いただきます！」

そして、一気に口へ。

「あ、あひひひっ！」

「熱いのを一気に頬張る奴があるか！　ほら、水」

「す、すひばせん。んくっ、んくっ……ふう」

一息ついて、今度は慎重に食べている。

「……美味しい、美味しいです！」

感激している。

「ごま団子って、こんな味だったんですね」

「何だ。食べた事なかったのか？」

「はい。私の家は裕福ではありませんでしたから。このような砂糖を用いたお菓子など、到底口には出来ませんでした」

泣ける話というか、向こうの世界では考えられない話だよな。

実際、この時代の砂糖の値は、相当に高い。

袁術の蜂蜜じゃないが、甘味料自体がとても高価だ。

「よし！ すいません、ごま団子をあと十個追加で！」

「美綴殿。気に入ったのはわかるが、食べられるのか？」

太史慈が目を丸くしている。

「いや、亞莎のためさ。あたしの奢りだ、食べてくれ」

「え？ で、ですが、それでは綾子様に申し訳ないです」

「いって。鍛冶屋に案内してくれたお礼って事で。な？」

「綾子様……。あ、ありがとうございます」

嬉しそうに、次のごま団子に手を伸ばす亞莎。

見ているこっちが、何だか幸せな気分だよ。

城に戻ったあたし。

……さて、何をしたものか。

働き詰めだったせいもあり、ゆっくりするといい、と冥琳。

とは言え、何もせずにはぼーっとしているのは性に合わない。

なので、菖蒲の鍛練を思い立った。

……あたしのところに来てから、雑用ばかりさせている気がするし。

本人は嫌がっていないが、武官候補である以上、それではまずい。

「いいか。あたしを敵だと思って、全力でかかってくるんだ」

「し、しかし綾子様を……」

「菖蒲。強くならなければ、自分が死ぬ。守りたい者を守れず、願い事も叶えられずにな。今のお前はまだまだ弱い。あたしを慕ってくれるのは嬉しいけど、ならば尚更、強くなれ。いいな？」

「は、はいっ！ 行きます！」

剣を構え、突進してくる菖蒲。

思い切りはよし、でも！

ガアン！

「うっ！」

菖蒲は、剣を取り落としてしまう。

「自分の狙いをつけるだけじゃ、相手にやられるぞ。もっと意識して！」

「はい！ もう一度！」

今度は払いから、突きへの変化か。

悪くはないが、それだけでは。

「それっ！」

「あうっ！」

薙ぎを辛うじて受け止めるが、顔が苦痛に歪んでいる。

そのまま剣を一閃すると、菖蒲の剣は宙を舞った。

「……あ」

「今のあたしの動き、少しは見えたか？」

「……いいえ」

悔しそうに頭を振る。

「なら、もう一度だ。来い！」

「い、行きます！」

がむしやらかな剣の乱れ打ちを受け止めながら、がら空きのボディに蹴り。

「ぐっ……けほっ、けほっ」

「攻撃は武器だけとは限らない。あたしが敵ならば、次は菖蒲の首を落としているさ」

「あ、綾子様……。ですが、私には……」

「ああ、まだまだ無理だ。とりあえず、明日からこれを毎日五百回、ひたすら振るんだ」

櫓の木で作った木刀を、菖蒲に手渡す。

「こ、これ、重い……」

「それを重いと感じるうちは、あたしはまだ菖蒲に何も教えられない」

「……………」

「それが出来るようになったら、あたしのところに来るんだ。いいね？」

「わかりました。私、頑張ります！」

うん、いい眼だ。

素養は悪くないんだ、鍛えれば立派な武人になれる。

あたしはそう確信している。

三日後。

あたしはまた、太史慈と一緒に鍛冶屋へと向かった。

さて、あの男、どんな仕事をしてくれたのか。

「邪魔するぜ」

「お、来たな。まずは、見てくれ」

あたしが預けた剣を差し出す男。

……え？

「剣が……光り輝いている……？」

そんな筈はないのに、そうとしか見えない。

錆も刃こぼれも全くないどころか、正しく名剣、と呼べるだけのものになっている。

「それから、これもだ。その剣を使うからには、な」

男は、もう一振りの刀を持ってきた。

それも、この剣に劣らず、輝きを放っている。

「どういう事だ？　これが、あの剣なのか……」

「そうだ。その件は、『青コウの剣』。そしてこっちが、『倚天の剣』。どっちも、アンタの物だ」

……ちよつと待て。

青コウの剣に、倚天の剣って。

確かそれ、曹操が作らせた、二振りの名剣じゃないか？

何でそれが、ここにあるんだ……。

「ひとつ、聞いてもいいか？」

「何だ」

「この剣は、あたしが襄陽の市で惹かれて買い求めたものだ。なん
で、あんな場所にあんな状態であったのかも謎だけど、もう一本は
何だ？」

「……アンタが持ってきた青コウの剣は、俺の師匠が鍛えた剣だ」

「アンタの師匠が？」

「ああ。師匠の、最後の作品だ。そいつを鍛え上げて間もなく、死
んじまったんだ」

「……………」

人は、作品に魂を込める……なんて言うけど、文字通りこの剣は、
この男の師匠にとって、魂そのものだろう。

そう思うと、剣の重みがズシリ、と増した気がする。

「だが、師匠がなくなった後、弟子の一人に小悪党がいてな。遊ぶ
金欲しさに、そいつを持って逃げたんだ」

男は無念そうに言う。

「もっとも、買い取った古物商も、ケチな野郎だったらしくてな。

その剣の真価をわからなかったらしい。……おまけに、盗んだ奴は
盗賊に殺され、古物商は洪水で流されたって話だ」

「それで、この剣があんな場所に埋もれていた訳か」

「おかげで、こうしてまためぐり合う事ができた。アンタには感謝
している」

「それはわかった。けど、倚天の剣は？」

「これは……。俺の渾身の作だ。師匠を目指して、一心に鍛えてき
たんだが、何かが足りなかった。だがな、師匠の剣に再び出会って、
その足りなかったものが何か、わかったんだ」

「それは一体何だ？」

「……口では言えねえ。だが、対となるに相応しい出来になった、俺はそう自負している」

シュン！

倚天の剣を抜き、払った。

何年も共にしたかのように、しつくりと手に馴染む。

重さも、サイズも、何の違和感もない。

「……わかった、アンタとアンタの師匠の魂、確かに受け取った。代金は……」

「要らねえよ。いや、貰っちゃいけねえ」

男はきっぱりと断った。

「そうはいかないだろう。少なくとも、倚天の剣はアンタの作だ」「いや、それは例え山ほど黄金を積まれても売る気はなかった。だが、アンタのおかげで、俺は師匠によりやく肩を並べられたんだ。むしろ、俺から礼を言いたいぐらいだ」

「しかし、アンタは鍛冶屋が生業なんだろう？ だったら」

「……じゃあ、一つだけ、約束してくれ。代金は受け取れないが、これだけは守って欲しい」

「いいだろう。何だ？」

「その剣は、大義のためだけに使って欲しい。……それだけだ」男は、もう話は終わりだ、とばかりに手を振る。

「おっと、太史慈様の槍がまだだったな。これでどうだ？」意匠の施された槍。

オーラすら漂う、これも業物だ。

「……これは……見事な」

太史慈も、ただただ見入っている。

「こいつは、俺の一番弟子に任せたシロモノだ。その対の剣と比べちゃ気の毒だが、それでも俺が太鼓判を押せる出来だ」

「……いや、こいつは……。うむ、素晴らしい」ビュッ、ビュッ！

槍捌きが、一段と鋭く見える。

「これは、代金を払うからな」

「……いいのか？ 俺じゃなく、俺の弟子の作だぞ」

「太鼓判を押す、と言ったではないか？ それに、これにも立派に、魂が込められている。その魂に敬意を表したい、ただそれだけだ」

「……わかった。なら、遠慮無く受けよう」

「うむ。ところで、美綴殿」

「何だ？」

「貴殿、得物は薙刀であったな。それは良いのか？」

確かに、あたしの一番の得意は薙刀だ。

それは、今でも変わらないだろう。

……けど。

「こんな業物を二振りも手にしたんだ。あたしにはこれを、という運命なのさ。きつとな」

「運命、か……。なるほど、それも良いのかも知れぬな」

こうして、あたしと太史慈は、新たな力を、得た。

十六（後書き）

オリキャラはもう一人だけ登場させます。

全員登場したら、紹介の頁でも作った方がいいのでしょうか……。挿話として、入れるのがありますし……。少し考えてみます。

〓十七〓（前書き）

どうにか書きあがったので投稿します。

クオリティを下げる事なく、毎日のように連載している方を見てみると、敵わないなあ、と思います…。

せめて、更新頻度だけでも見劣りしないようにしないといけませんね。

十七

会稽の太守、王朗。

一応、降伏を求める使者を出してみたらしいが、劉ヨウの残党やら周辺の豪族やらが彼につき、抵抗の姿勢を見せた、という事で、戦う事が決まった。

揚州に残る、最後の有力な勢力らしいから、これが終わればしばらくは平穏な日々になる筈。

……らしい、つてのは、あたしの出番がないから。

雪蓮が、私も戦いた〜い、と……要は駄々をこねた結果だったりするんだが。

「止めたら止めたで勝手に抜け出すだろうから、それぐらいなら行かせるか」

と、冥琳がしぶしぶ許可を出した。

まあ、何というか……雪蓮らしいな。

もつとも、太史慈クラスの将はいない、つて話だし、祭さんと穩が同行しているから、恐らく何も問題なく片付くだらうけどさ。

そんな訳で、あたしは居残り。

……なんだが、冥琳に呼び出された。

はて、何だろう。

「呼んだか？」

「あ、すまん。休んでいたところだろう？」

「別に構わないさ」

「そうか。まあ、かけてくれ」

勧められた椅子に腰掛けると、冥琳は改まった顔で、

「まず、改めて礼を言わせて欲しい。この揚州が、あと一歩でまともなる。その立役者は、間違いなく綾子だ」

頭を下げられてしまった。

「よ、よせよ。あたしは太史慈と戦ったぐらいだぞ？」

「だが、それが大きかった。そして、劉ヨウが降服したのもある」
「いや、あれは千花の功だし」

「ふ、相変わらず謙遜するのだな。ま、それが良いところでもあるのだが」

と、眼鏡を直す冥琳。

「そこで、綾子に二つほど頼みがある。聞いてくれるか？」

「……事と次第による。書類仕事なら、全力で願い下げだ」

「ふふ、安心しろ。それなら、まだ今のところはない」

今のところ、って事はそのうちにあるのかよ。

頼むから、それは振らないでくれ。

「……ならいいけど。で、何をしろって言うんだ？」

「まず一つ目だが、領内の巡検を頼みたい。城下はどうにでもなるが、ここを離れればそうもいかん。まだ手に入れたばかりの地で、勝手もわからん。だから、村々を回って、様子を見てきて欲しいのだ。もちろん、不逞な輩の退治もな」

「そりゃいいが、あたしが行けばいろいろと聞かれると思うぜ？」

正直、政治向きの話になったら、あたしじゃ無理だ」

「だろうな。想定される問答については、書簡に認めておく。文字は、だいぶ読めるようになったのであろう？」

そりゃ、字が読めなきゃ何も出来ないからな。

言葉は通じるけど、文字だけは古代中国のままだから、厄介だった。

漢字だから何とかなるだろう、ってのは甘かったし、そもそもあたしは漢文が得意でもなかった。

教科書みたいにレ点付きならともかく、白文だぜ？

字も微妙に違ってにいる上に、パソコンとか印刷なんて気の利いた技術はある訳もないから、全て手書き。

とにかく、地図を見ると文字を覚えるのだけは必死にならざるを得ない。

おかげで、どうにか日常の読み書きは支障のないレベルにはなっ

た、と思う。

それでも時々、読めない字が出てきて頭を抱えてるけどな。

「ま、とにかくわかった。で、もう一つは？」

「人材発掘だ」

「人材発掘？」

「ああ。劉ヨウもどうやら、人材を求める事にあまり熱心ではなかったようだな。何人か面談を試みたが、将たる器の人材がいなかった。だが、揚州を束ねていくとなれば、今のままではあまりにも手不足だ」

「それはわかる。でも、何故にあたしなんだ？」

「人を惹きつけるものを備え、人を見る目もある。そしてかつ、比較的自由に動ける人物。……綾子以外に、適任はいないと思ってな」

「……あのなあ。過大評価し過ぎなんだよ、あたしを」

「では、無理だと言うのか？」

「無理って言うか、そこまで期待されても応えられるだけの自信なんてないって」

「ふむ。……では、この書類の処理を、やはり手伝って貰おうか」

冥琳の机に、山のように積まれた書簡。

実際、これぐらいでもこなせるからこそこうなっているんだろうけど。

「く、謀ったな、冥琳！」

「人聞きの悪い事を言わないで欲しいものだ。私は、選択肢を与えているのだぞ？」

だったら、ニヤニヤと笑うな。

「何も最終的な判断まで下せ、とは言わんよ。それは、私の方でやる。ただ、最初の目利きは任せたいのだ」

「わかったよ。あたしだって、別に怠けたい訳じゃないからな」

「頼んだぞ、綾子」

全く、あたしは便利屋かよ。

人を遊ばせておく余裕が無い現状、冥琳なりに考えているんだろ

うけど……ハア。

「綾子お姉ちゃん！」

いきなり、小蓮乱入。

「どうしたのです、小蓮様」

「ねーねー、シャオも連れてって、巡検に」

「は？」

唐突に何を言い出すんだ、この娘は。

「だってシャオも、お仕事したいんだもん」

「いや、それはわかるが……。どうして、巡検なんだ？」

「もちろん、綾子お姉ちゃんと一緒だからよ」

うーむ、何という直球勝負。

イラブクラゲも真っ青だな。

「小蓮様。これは遊びではありませんぞ？」

「むー、また冥琳ったら、シャオの事子供扱いするんだから」

いや、そこでムキになるところがお子様なだけど。

「しかしな、小蓮。まだこの地は、治安も不安定だ。黄巾党の残党を見たって話もあるんだし」

「大丈夫よ。シャオだって戦えるもん」

「そうじゃなくってな……」

あたしと冥琳は、互いに肩を竦めた。

「どうする？」

「……仕方ないだろう。小蓮様は、言い出したら聞かないからな」
冥琳は大きくため息を一つ。

「小蓮様。では、綾子に同行を認めます。ただし、綾子の指示に従う事、決して無理はしない事、これが条件です。宜しいですか？」

「わかった。よろしくね、綾子お姉ちゃん！」

……不安だ。

とは言え、この天真爛漫さ、何も言えないあたしだった。

「では、困り事があれば城へ伝えるようにな」

「見廻り、ご苦労様です」

この村も問題なし、と。

小蓮は言いつけ通り、大人しくしている。

……っーか、むしろ歓迎されてすらいる。

これだけ愛らしく天真爛漫な子供なんだ、大抵の大人は弱い。

……本人はそう言われると、嫌がりそうだけどな。

勿論、良からぬ企みを持って近付く不屈き者もいたが、とりあえずボコっておいた。

一応、保護者として。

この時代にも、ロ○コンはいるんだな、と妙なところで感心してしまっただが。

そういう輩はさておき、彼が歓迎されたのは事実。

本人がカミングアウトしてしまい、孫家の末娘って知られた時は、思わず頭を抱えたが。

……少しは、人を疑う事も覚えるべきだぞ、小蓮。

「あれゝ？」

「どうした？」

四つ目の村を出て、五つ目の村が見えてきた頃。

小蓮が、不意に声を上げた。

「綾子お姉ちゃん、あそこに誰か倒れてるよ？」

「何処だ？」

「ほら、あそこだって。見えない？」

この時代の人は、エラく眼がいい。

あたしもそこまで視力は悪くないけど、現代人の生活はとにかく眼を酷使する。

……ってのが、こっちに来てから痛感した事。

パソコンもテレビもない、ケータイはあるけどメールもウェブも使えないので、画面を見続けるという事が皆無。

眼は疲れないし、以前よりも遠目が効くようになった気がするし。……でも、まだまだ追いつかないようだけどな。

「小蓮、あたしの馬に」

「え？ う、うん」

小蓮を前に載せた。

「おい、二名ほど先に行け。人が倒れているらしいから、確かめてくれ」

「ハッ！」

命を受けた兵士は、即座に駆けていく。

「綾子お姉ちゃん、どうしたの？」

「万が一、という事もあるからな。小蓮に何かあったら大変だ」
「でもシャオだって戦えるよ？」

「わかってるさ。それでも、あたしは小蓮を守る」

「……ありがとう、お姉ちゃん」

何だかんだで、嬉しいらしい。

「美綴様、どうやら行き倒れの様です！」

お前、もう行って来たのかよ。

いくら馬でも、結構な距離があるんだが……。

「お姉ちゃん、行ってみようよ！」

「よし」

馬を駆けさせ、その場所へ。

流石に、馬は速い。

ほどなく、到着。

「この者です」

「怪我は？」

「はい、調べましたが目だったものは特に」

そんなやり取りを始めた時、小蓮が馬から降りた。

馬上からは結構な高さがあるんだが、器用なものだ。

「ねえ、大丈夫？」

倒れていた少年は、あたしと同年代ぐらいかな？

身なりはややみすばらしいが、傍らに落ちている、刺さすまた又またみたいな
格好の槍からして、武人なのだろう。

身体つきも細身だけど、逆に無駄がない印象だし。

どうやら、誰かに襲われたとか、そっちの線はなさそうだ。

「お姉ちゃん、どうしよう」

「とりあえず、村まで運ぼう。誰か、この先の村で、医者がいないかどうか聞いてきてくれ！」

「ハッ、ただちに！」

兵士に指示を出した後、胸に手を当ててみる。

鼓動が聞こえる……どうやら、心臓は動いているな。

息もしているから、至急の手当てが必要、という訳ではなさそう。

「う……」

「あ、お姉ちゃん」

「ああ、気がついたらしいな」

小蓮が、顔を覗き込む。

「……は……」

「は？」

「腹が……減って。な、何か食わせて……」

小蓮と顔を見合わせる。

やれやれ、空腹で倒れていただけか。

とにかく、命に別状はなさそうだな。

「しょうがないなあ。ほら、お饅頭あげる」

腰に下げた巾着から、やや小振りの饅頭を取り出した。

「よく持ってたな、そんなもの」

「武人のたしなみよ。こうしておけば、いつお腹が空いても平気でしょ？」

そりゃそうだが、武人のたしなみって……吹き込んだ奴は、後でシメておかないとな。

「う……」

饅頭を見て、彼は即座に反応。

「ガツガツ……う、み、水！」

「慌てないの、はい」

「んくっ、んくっ、んくっ……。プハッ！」

まさにツーカーだな、小蓮。

面倒見の良さは意外だったけど、物怖じしないってのは流石だね。

「ねえねえ、あなた。名前は？」

「凌統……。あ、アンタは？」

「シャオは孫尚香。よろしくね」

「あ、ああ……」

出番がないな、あたしは。

凌統、か。

やっぱり、歴史にも登場する、呉の武将。

もう驚きはしないけど、まさかこんな形で出会うとは、ね。

カツカツカツカツ！

カチャカチャカチャ。

「ゴク、ゴク、ゴク……」

目の前に並べられた皿が、みるみるうちに空になっていく。

「よく食べるね……」

「ひゃって、いつひやもなにもちゃべていにゃい」

「ああ、もう！ 口に物を入れて話さないの！」

小蓮、まるで姉気取りだな。

……どう見ても、逆だけだな。

二人に聞こえないように、あたしは食堂のオヤジと話をする。

「なあ。支払いは、寿春城にツケといってくれるかな？」

「は、はあ……」

「頼む。流石にこれ而建て替える自信がない」

頭でも何でも下げちゃう。

つーか、マジでシャレにならんぞ、これ。

「ほら、口の周りがベトベト。拭いてあげる」

「すまにゃい。おれは」

「だーかーらー、お行儀悪すぎだって！」

……とりあえず、見ている方が気持ち悪くなってくるな、この食べっぷりは。

「ふう……。人心地ついた」

「全く、いくら何でも食べすぎよ？」

「仕方ないだろ。路銀が尽きて、何も食べてなかっただから」

それにしたって、魚を捕るなり出来ただろうに、と内心でツッコミを入れておく。

「あんなところで行き倒れになって、どうする気だったんだ？」

「あ、そうそう。俺の親父が病気で倒れちまったって便りが来たんで、余杭から急いで来る途中だったんだけど……。途中で、財布を無くしちゃって」

「ドジね。それで、あんなにお腹を空かせていたんだ」

「う、うっせ！」

「でも、それなら親父さんのところに、急がないといけないんじゃないか？」

「あ、そ、そうだった！ いけね！」

凌統は急に立ち上がると、持ち物の大剣を手を取った。

「世話になった。この恩は、必ず返す！」

「ちよっと待ちなさいよ！」

「な、何だよ？」

小蓮の声に、凌統は振り向く。

「バカねえ、アンタ。路銀もないのに、この先旅をする気？」

「……けど、俺は行かなきゃならないんだ。路銀は……ないけど」

「しょうがないわね。これ、持って行きなさい」

と、懐の袋を手渡した。

「これは……金？」

「そうよ。シャオのお小遣いだけど、持って行きなさいよ」

「そ、そんな。メシを食わせて貰った上に、こんな」

「いいのよ。だって、恩は返してくれるんでしょ？」

「……ああ。この槍に誓って」

「なら、さっさと行きなさい」

「わかった。必ず、戻るからな。孫尚香と……誰だっけ？」

某喜劇のノリで、ずっこけそうになるあたし。

「……美綴綾子だ」

「美綴か、よしわかった。じゃあな、いろいろありがとうよ！」

そして、砂埃を上げて去っていく。

……マンガのキャラみたいな奴だな、ありゃ。

にしても。

「小蓮」

「うん？」

あたしは、小蓮の頭に手を載せ、撫でた。

「綾子お姉ちゃん？」

「……こう言っちゃ悪いけど、あたし、小蓮の事、見直した。あたしの出番がなかったからな」

「だって、見てられなかったんだもん。あの子、危なっかしくて」

「ま、そうだけどさ。……やっぱ、小蓮も、立派な孫家の娘、って訳だ」

「ありがとう、お姉ちゃん。シャオ、嬉しいよ」

いい笑顔が見られた。

……凌統は、戻ってくるだろう。

小蓮の恩、借りたままにするにはちよつとでかいぜ？

〽十七〽（後書き）

今回はシャオがメインな感じ。

ちよっと大人にし過ぎて、イメージが変わってしまったかも……。

あと、オリキャラ追加です。

美仁さんからいただいたアイディアを元にさせていただいています、
どうもありがとうございます。

誤字チェックは行っていますが、見落としがあるかも知れません。
お気づきの方はご指摘いただければ幸いです。

もちろん、ご意見、ご感想も心よりお待ちしております。

十八 (前書き)

今回は重めです。

ややグロい描写も含まれていますので、ご注意ください。

十八

「いい天気ですねえ」

「うむ。これは絶好の月見酒日和だな」

「……祭さん。終わってからにして下さいね、酒は。冥琳に小言喰らうのは願い下げですから」

「わかっておる。儂を何だと思っておる」

「……いや、雪蓮と貴女に関しては、酒にまつわる逸話だらけですし。」

今日も、あたしは巡検に出ている。

小蓮はまた同行したがったが、賊が出没している、という情報があったので、置いてきた。

……雪蓮が折よく戻ってきて、助かった。

雪蓮と蓮華のステレオ説得（と言う事にしておいてくれ）が効いたな。

勿論、戦闘に備えて兵も多めに連れてきている。

あまり多いと、無意味に民を威圧する格好にもなるので、バランスが難しいところだけど。

それもあり、祭さんが一緒に来てくれている。

「やれやれ、冥琳も人使いが荒いの。年寄りほもつと労るものじゃ」
祭さん、貴女そこまでトシでもないでしょ。

「そう言わずにお願いしますよ。昔、祭さんはこのあたりも行き来したって聞いていますし」

「昔の話じゃがな。まだ、堅殿が若かりし時分でな」

「それでも、土地勘があるとないとでは大違いですよ」

「ま、お前程の者に頼られるのは、悪い気はせぬが、な」

祭さんに評価されるのは、素直に嬉しい。

……母さんみたいな人だからかも知れないな、いろんな意味で。

「綾子。今、何やらよからぬ事を考えておらなんだか？」

「えーと。何の事ですか、一体？」

「惚けおって。まあよい」

危ない危ない、鋭いお人だ。

今日は、長江付近の村を廻るコース。

「この辺りは、昔から洪水が多くてな。土地は肥沃なんじゃが」
「でしょうね」

家は皆、頑丈な石垣の上に立てられている。

洪水対策の知恵だろう。

「……けど、田畑はそのままですね」

「気付いたか。家はあれで良いが、作物は土の上でなければ無理じゃからな」

じゃあ、洪水の度に流されてしまう訳か。

何せ、川と言っても、あたしが知っている奴とはスケールがダンチ。

大げさに言えば、向こう岸が霞んでみえるぐらい。

鎧をつけて泳げ、とか言われたら相当にしんどいだろうな。

これが氾濫したら……と思うと、ゾッとする。

「民も困っておるのだが。綾子、何か良い策はないか？」

と、祭さんはあたしの顔を覗き込む。

こうして、祭さんはよく人を試す。

一生懸命考えたり、いいアイデアを出せば褒めて貰えるが、いい加減な事や頓珍漢な事を言うと、容赦なく拳骨が飛んで来る。

雪蓮も、何度となく洗礼を浴びているらしく、祭さんの前では上手く立ち回っている印象がある。

あたしも今のところは無事だけど……どんだけ恐れられているんだ、この人は。

「いや、治水をすればいいってのはわかるんですが……」
コンクリートで護岸工事をすればいいんだろうけど、そもそもコ

ンクリートってどう作るんだ？

石灰と砂を水で混ぜればいいんだろうけど、分量とか知らないし。それに、測量技術だって、まだまだ原始的だろうし。

伊能忠敬みたいに、歩幅とロープみたいにとか、あんな程度だろう。

後は……思いつくのは信玄堤、とか？

でもあれ、何十年もかかったって記憶があるし、そもそも川幅が違いすぎる。

根気よく川底をさらうとか、そんな水深でもないし……無理だな。

「そうですね。思いつくのは、放水路とか、そんな程度ですかね」

「放水路？」

「ええ。川は一本だと、水量が増えれば水位が上がって、そのうちに溢れますよね」

「当たり前ではないか。そのぐらい、儂とて承知しておる」

祭さんはムツとする。

いや、バカにした訳じゃないんですけど……。

「でも、一本の川が、数本に枝分かれしていたら、どうなると思います？」

「それは、水もその分、分散して……成程、そういう事か」

「はい。ただ、新たに川を作るような真似をする事になるので、労力がハンパじゃありませんけど」

「……確かに。権殿の代ですら完成しそうにはない話だ」

「ブルトーザーとか、ショベルカーもないしな……」

「ぶるとうざあ？　しょべるかあ？」

祭さんの頭に、クエスチョンマークが見える。

……わかる訳ないか、てかあたしの独り言に反応しないで下さい。

「あたしの国にある道具です」

「ふむ。それは、職人たちに作らせる事は出来るのか？」

「無理ですね。それだけの技術は、どこにもないでしょう」

「ますます興味深いな、綾子の国は。儂も元気なうちに一度見てみ

たいものじゃ」

見せてあげたいけど、それは無理です。

……祭さんを連れて行ったら、豊富な酒の種類の方に興が行きそうだけどさ。

「もしくは、浮稲みたいなのがあればいいんですけどね」

「浮稲？ 稲が浮くのか？」

「あ、そうじゃなく。稲の背丈がとんでもなく高い種類で、水嵩が増しても穂が水没しないんです」

「それも、綾子の国にあるのか？」

「いえ。確か……ベトナムとかラオスあたりに行けば」

「……聞かぬ名じゃが。南越あたりか？」

南越とは、南にいる異民族の国……って、地図にあった。

いわゆる中国から見て南東側は全部南越と記されているから、間違いないかな。

……でも、この時代にあるのか、あれ？

「あたしも見た事はないんですが。聞いた話ですよ」

「それがあれば、田を作らずとも湿地で米が取れる、か」

ブツブツ言ってる。

あたしのいた時代の知識と技術が全て揃っていたら、どれだけ豊かになるんだろうな。

ただ、それが正しい事なのかどうかは微妙な気もする。

「よし。呉が安泰となったら、南越に出向いてみようぞ」

「……へ？」

「何じゃ、その顔は。綾子も聞いただけの話と言うが、お主の伝聞はかなりアテになるではないか」

「い、いや……。それはですね、結果論で」

「つべこべ言うでない！ その時は頼むぞ」

……もしかして、またやっちゃったか、あたし？

思わず、天を仰いでしまう。

「ふふ。まだまだ底を見せぬとは。全く、お主が味方で良かったと

思うぞ、つくづくな」

まあ、褒められるのは嬉しいけどさ。

今度、胃薬でも処方して貰うかな……胃に穴が空きそう。

「申し上げます！」

と、そこに兵士が一人、慌ただしくやって来た。

「何事か！」

「ハッ！ この先で、煙が上がっております」

「煙？ 綾子、参るぞ」

「え？ あ、はい！」

何やら、雲行きが怪しくなってきたな。

祭さんに続いて、近くの高台に登ると。

「煙が……いや、火も見える。火事か？」

「ただの火事ではあるまい。火の勢いが強すぎるし、範囲も広い」

付近には人家もないし、山火事としては不自然だ。

「誰ぞある！」

「ははっ！」

「斥候を放て！ それから、周囲を警戒せよ！ 手の空いているも

のは、水を探して消火の準備をせい！」

祭さんが、テキパキと指示を出す。

「綾子。どう考える？」

「山火事や野火の可能性もあります。ここしばらく、晴天が続いて乾燥していますから」

「確かにそうじゃ。……が、何やら嫌な予感がしての。杞憂で済めばよいのじゃが……」

勘、か。

雪蓮もそうけど、ここの人達の勘が、バカに出来ない事を最近、改めて感じている。

ましてや、百戦錬磨の祭さんが言う事だ。

……当たらないといいな、ホント。

火はかなり燃え盛っているらしい。

空気が乾燥しているだけに、余計に始末が悪い。

「黄蓋様！ 泉がありました！」

待ちに待った、消火用水源は確保したな。

「よし、直ぐに取りかかれ！」

「はいっ！」

あ、そうだ。

これなら、使っても問題ない未来知識だろう。

そんなものを、あたしは思いついた。

「祭さん！」

「何じゃ？」

「バケツリレーをやれば、少しは早く消せるかも知れません」

「ばけつりれえ？」

「はい。兵士達の胃に水を汲んで、自分で運ぶのではなく、大勢で協力するんです。おい、何人か来てくれ」

「ハッ」

あたしは兵士を一行に並べ、手本を見せる事にした。

「そうだな、桶はないだろうから兜で代用しよう。まず一人が水を汲み、それを次の人に手渡す。で、火元に近い人間が水をかける。

こうして数珠繋ぎになって、順々に水を手渡しで運ぶんだ」

「ですが、火の勢いは盛んです。これでは、追いつかないのでは？」

兵士の一人が、疑問を示す。

「確かにそうだが、なら皆が一人ずつ泉に行き、火元まで走るのを繰り返せばどうなる？」

「……草臥れますな、確実に」

「そうさ。それだけじゃない、泉自体はさほど大きいものじゃない。一斉に殺到すれば、水を汲むのに順番待ちになる。その時間も無駄になるだろう？」

「成程。一見非効率に見えますが、これならむしろ効率が良くなり

ます」

うん、どうやら理解して貰えたようだな。

「さあ、皆並べ！ それから、水汲み担当と火消し担当は適宜交代するんだ、運動量が多くなるからな」

「了解であります！」

そこまで指示を出してから、あたしは祭さんの所に戻った。

「後は皆で頑張るしかありません。あたしも、兵を手伝います」

「待たんか、阿呆が」

ゴツン。

拳骨を喰らってしまった。

うう、手加減なしかよ……。

「な、何をするんですか！」

涙目のあたしを、祭さんは厳しい顔で睨み付ける。

「お主の策、これは妙案じゃ。しかしな綾子、将たる者、すべき事を見誤ってはならぬ」

「……………」

「さっきも言っておったが、役割は適宜入れ替えるのであろう？」

その指示は誰が出すのじゃ？ 消火に懸命になっている兵に、それを考えろと申すのか？」

「そ、それは……」

「それだけではない。火は一カ所ではないのだ、消火する地点もその都度変えねばならぬし、そうなればこの並びの長さも調整となる。それはどうするのじゃ」

ビシビシと指摘され、あたしは何も言えない。

……そうだ、それを動かす人間がいなければ、折角のアイディアも企画倒れになってしまう。

「……どうやら、わかったようじゃな。綾子、将とは何だ？ 先頭に立ち、敵を殺す事か？ 武を磨き、自己陶醉していれば良い存在なのか？」

「違います……。それならば、将である必要はありません」

「その通り。前者はただの猪、一兵卒ならばまだ存在価値があるうが、将としては最悪じゃ。後者は、武芸者であって将ではない。わかるな？」

「……はい」

「もっと視野を広く持て。人の上に立つ、という事は、従う者全てに責任を持つ事でもある。肝に銘じておくのじゃ、良いな？」

「わかりました。……ありがとうございます、祭さん」

「わかったら、さっさと動かんか。火の手は、待ってはくれぬぞ！」

「は、はい！」

弾かれたように、あたしは動き出した。

あたしも戸惑いながらも兵の動きを、火の手を見ながら指示を出す。

兵たちも初めてのバケツリレーながら、懸命に指示通りに動こうとしてくれた。

お陰で、一部だけが消し止める事が出来た。

その間に、手空きの兵が斧で木を切り倒していた。

祭さんが、延焼を食い止めるために指示を出していたらしい。

そこまでは気が回らなかったが、適切な処置だと思う。

……まだまだ、祭さんには敵わない、いろいろと。

「後は、雨が降るのを待つ他あるまい」

「そうですね」

兵達は皆、疲労困憊で座り込んでいる。

合戦とは違うが、あれだけ必死で動き回ったんだから当然だろう。

「綾子。さっきはあのような事を言ったが……。その後の指揮、なかなかのものじゃ」

「……いえ。あたしはわかってなかったんです、自分の思いつきに夢中になり過ぎて。その先まで考えなくて」

「それがわかったら、二度と同じ過ちを繰り返すでないぞ？ さもなくば、いつでもコレじゃ」

と、殴る仕草を見せる祭さん。

「兵はの、率いる兵の用い方一つで、無敵の槍とも有象無象の集団ともなり得る。無論、普段の訓練は欠かせぬが、それだけでは戦場で勝利を得る事は適わぬ」

経験と実績に裏打ちされた、祭さんの言葉。

まさしく、千金に値すると思う。

「も、申し上げます！」

息も絶え絶えの兵士が、他の兵士に抱えられてやって来た。

「おお、お主は斥候に出した者ではないか」

「は、はっ！……お、遅くなりまして……ゼエ、ゼエ」

「良い。して、どうであった？」

「そ、それが……」

息を整えつつも、兵は言葉を選ぼうとしているように見えた。

「ええい、有り体に申せ！」

「は、はっ！ では」

祭さんの一喝に、意を決したようだ。

「こ、この先に、小さな村がございます」

「え？ そんな村、あったかな……」

あたしは地図を広げ、首を傾げる。

「儂も覚えがないな。まあいいわ、して？」

「……村人が……全滅しているようでした」

「ぜ、全滅？」

「皆殺しという事か？」

あたしも祭さんも、二の句が継げない。

信じたくないが、目の前でうなだれる兵士が、嘘を告げる訳もない。

「……綾子。参るぞ」

「祭さん？」

祭さんが、ブルブルと身体を震わせている。

……本気だ、祭さんが本気で怒っている。

「このような真似をする輩、相応の報いを与えねばなるまい？」

「で、ですが。犯人が誰だかもまだ」

「だから、探すのじゃ。手がかりを持ってな」

「……では、その村に行くのですね」

「そうじゃ。……ただ、まさに地獄の様相であろう。もし見るに堪えぬのであれば、無理強いはせぬ」

「……いえ、行きます。これも、将たる務めでしょうから」

「……そうか」

それ以上、祭さんは何も言わなかった。

そう、あたしはもう決めたんだ、今更逃げるつもりもないし、それはあたし自身が許さない。

「皆の者！　よう聞けい！」

祭さんの言葉に、兵達が顔を上げる。

「消火で奔走し、皆が疲れている事はよく存じておる！　だが、悪逆非道な賊どもが、すぐ近くにいますようじゃ！　正体突き止め次第、そ奴らに天罰を下す！　もう一踏ん張り、皆の力を貸して貰いたい！」

「応！」

「応！」

声も出せないかと思った兵達が、祭さんの檄に氣勢を上げている。
……凄い、やっぱり祭さんは。

「では、儂と綾子は村を見て参る。それまで、この場にて全員待機して備えよ。それから、ご苦労だがこの事を寿春城へ伝えるのじゃ」
「ハッ！」

パチパチパチ。

確かに、小さな村だった。

……動く者は、皆無。

家という家は全て焼け落ち、道には人……だった物体が横たわっ

ている。

ある人は喉を切られ、ある人は腹を切られて、腸がはみ出していた。ハリウッドのホラー映画なんて、これを見たら怖くも何ともなくなるだろう。

こみ上げる吐き気を抑えるのに、あたしはそんな事を思っていた。

「酷い……。ここまでするか……」

殺されているのは、男だけじゃない。

あたしの目の前には、子供の小さな腕が転がっている。

ガラガラ！

ドーン！

放火された家が、また一軒、焼け落ちた。

「惨いな……。本当に、全滅させられたようじゃ」

「こんなの……。こんなのって……」

「綾子。……これは現実。受け入れるしかあるまい」

「……わかってます！ わかってますけど……クッ！」

視界がぼやける。

……あたし、泣いている……の？

「ム？ 誰じゃ！」

ヒュン！

祭さんが、素早く弓を構え、何かを射た。

「ぐわっ！」

茂みの向こうで、人が転がるのが見える。

見ると、黄色の布を頭に巻いた、小男だった。

……黄巾党の残党か……。

「い、痛えよ！」

「痛いじゃと？ 屑の分際で何を言うか！」

グッ！

鏟を押し込む祭さん。

「ぎゃああああっ！」

「貴様。この村を、何故襲った？」

「そ、そりゃ、村を襲えば食い物も女も手に入るから……ウギヤ―ッ！」

ギリギリギリ。

男は、首を締め上げられる。

「おい。仲間はどうした？」

「し、知らねえな」

「そうか。なら、貴様に用はない」

カチャリ。

祭さんは剣を抜くと、

ヒュン！

「ぎゃああああ！」

男の片耳を切り落とした。

「最後の機会をやろう。仲間はどうした？」

「……あ、い、言う！ 言うから、殺さないでくれ！」

「いいだろう。それで？」

「こ、ここから十五里ほど山奥に入ると、山寨がある。そ、そこが

俺達のねぐらだ」

「で、人数は？」

「た、た、確か、二百人ぐらいだ」

「他にはいないんだな？」

「い、いない。本当だ、信じてくれ！」

殺気を緩めない祭さんに、男は失禁していた。

「そうか」

ヒュン！

男は、もう片方の耳も、切り落とされた。

「あ、ああああ……」

傷みと恐怖で、気絶……したらしい。

「直ちに、兵達を連れて参れ！」

「ははっ！」

連れてきた兵が、馬に乗って駆けていく。

「綾子。儂を、酷だと思うか？」

「……いえ」

「……そうか。だが、無理はするな」

「は、はい……。うぷっ！」

吐いた。

初めて人を、この手で直に斬った、あの日以来。

胃液しか出なくなっても、まだ吐いた。

……そして、やり切れなかった。

黄巾党の残党は、結果として皆殺し。

そのアジトに連れられていた女性達は、一部を救えた。

……だが、全員、身も心も傷を負った状態で。

あたしにとってはこの先忘れられない、だが忘れちゃいけない、
そんな一日となった。

〃十八〃（後書き）

累計PVがいつの間にか60,000オーバーとなりました。
拙作にお付き合いいただいている皆様、ありがとうございます。

タイトル通りに綾子の無双が炸裂するのは……もう少し先になるかも知れません。

十九 (前書き)

まとめていたら、ギリギリになりましたが投稿します。

……あまり、章タイトルと関係ない内容になってしまっている気もしますが、このまま参ります。

十九

「うん」

今、あたしは悩んでいる。

……というより、日々悩みが深まるばかり。

先日のショッキングな出来事は、もちろん脳裏から離れない。
でも、そうじゃなく。

いろいろとあるんだが、一番は……。

「綾子。ちよつといい？」

ベッドで寝転んでいたあたしは、ガバツと起き上がった。

「どうした、雪蓮？」

「ちよつと話があつて。入るわよ」

どうやら一人らしい。

まあ、雪蓮の場合は誰かを連れてないと、という事はない。

むしろ、一人でどこかに抜け出す方が、彼女らしいぐらいかも。

「掛けてくれ。今、お茶でも入れるよ」

「ありがと。本当は、お酒でもいいんだけどね」

頼むから、朝っぱらからそれは勘弁して欲しい。

冥琳あたりに見つかったら、あたしまで大目玉だぞ？

朝食の時に貰ってきたお湯で、煎茶を入れ、茶碗に注いで手渡した。

「準備がいいのね」

「いや、ついでだし、その都度お湯を沸かすのは手間だからな」

電気ポットでもあれば別だけど、望むだけ無意味だしな。

「で、話って？」

「ああ、そうね。……わたし、綾子はいつも不思議だなあ、って思
つてたけど。その強さの秘訣、あるの？」

雪蓮の素朴な疑問だった。

……確かにそうなんだ。

あたしは、少なくとも競技レベルの武道じゃ、かなりいい線行っていたし、自信もある。

でも、リアルで命のやり取りをした経験は流石にないし、だからそこないだみみたいな醜態も晒してしまったんだし。

今にして思えば、思春や明命にはあっさり勝てたけど……だからと言って、彼女らは決して弱くはない。

いや、むしろ強い部類に入るだろうな。

太史慈ははかなり強かったけど、あたしはそれでも後れを取らなかった。

指揮能力ではもちろん敵わないけど、あの正確無比な祭さんと、弓の腕も見劣りしない。

……ゲームのキャラ魔改造じゃありまいし、これだけ一騎当千の強者揃いの中で、あたしがこうして存在感があるのは、どう考えても異常。

けど、原因がわからない。

あの筋肉オ○マは、あたしの持ち物だけと一緒に飛ばしたようだけど、まさか武力ステータスまで弄れるとは思えないし。

「それでね。わたしと仕合してみない？」

「……え？ 雪蓮と？」

「そうよ。わたしのところで、武官はみんなあなたには敵わない。なら、後はわたしぐらいじゃない？」

「しかしなあ。万が一怪我でもさせたら……。雪蓮の身体はもう、雪蓮一人のモノじゃないし」

「あら、心配してくれるの？ それとも、余裕？」

あゝ、絶対これ、戦いたくてウズウズしてるな。

……でも、あたし自身、気になるのは確か。

「仕合えば、何かわかるかも知れないしね」

「それも、勘か？」

「あはは、違う……とも言えないか。そうね、それもあるけど、で、どう？」

そうだな……。

仕合なんだ、真剣を使わないなら、多分問題ないだろう。

後は……雪蓮の後ろで青筋を立てている人物が、同意してくれたら、かな。

「雪蓮」

「あら冥琳。何かしら？」

冥琳の怒りオーラに平然と出来るってのは、長年の付き合いだからなのかなあ。

あたしでも、ちょっと怖いぐらいなのに。

「どこを探しても見当たらないと思えば。全く、いい加減、上に立つ者としての自覚を持って欲しいのだが？」

「何よ。それじゃ、まるでわたしが好き勝手放題みたいじゃない」
頬を膨らませる雪蓮。

「ほう、違うとでも言うのか、伯符殿？　ならば、すべき事はわかるのでしょいうな？」

「め、冥琳？　いや、あのね」

「とりあえず、来るんだ。綾子もな」

何で、あたしまで？

疑問には思ったけど、反論できる雰囲気じゃなかったので、そのままついていく。

……で、執務室。

これはこれは、見事な竹簡の山で。

「さて、自分のなすべき事をわかっているのなら、これを片付けて欲しいのだがな」

「ぶー。わたしは、綾子と仕合したいー！」

「……頼むから、すべき事は果たしてくれ。さもないと、政が滞って仕方がない」

切実なのだろうな、実際。

が、それだけでないのが冥琳クオリティ。

「それが片付いたら、仕合もいいだろう」

「おい、ホントにいいのか？」

思わず、口を挟んでしまった。

「構わんさ。雪蓮が簡単に手傷を負う程弱いとは思っていない。それに、こう言えば、これをほったかしにして逃亡する事もないだろう。私としては、その方が助かる」

「ううー、わかったわよ。これを片付けたら、綾子と仕合よ。冥琳、後から約束破ったら承知しないわよ？」

「雪蓮。私が、お前との約束を違えた事があるか？」

「……ないわよ。いいわ、わたしの本気を見せてあげるから」

「出来れば、それが普通であって欲しいがな」

ま、雪蓮の本気ってのを見せて貰いますか。

で、数刻後。

まだ日は……高いな、うん。

「……なあ、冥琳。あたしは何か、おかしい夢を見ているのか？」

「だとすると、私もそうなのだろうな」

「ぶーぶー。二人とも酷いわよ」

「いや、しかしな……」

「よもや、とは思ったが」

そう、目の前にあった山は、綺麗さっぱりなくなっている。

雪蓮はあの量の書簡を、完全に仕上げて見せた。

冥琳の表情からしても、本気であり得ないんだろう、これ。

「約束だから、いいわね？」

「あ、ああ。構わない」

「やったね。じゃ綾子、早速行くわよ」

スキップでもしかねない様子の、雪蓮だった。

模造刀を手に、調練場に出た。

「あら？ 薙刀じゃなくていいの？」

雪蓮もまた、同じ模造刀。

「いいんだ。実戦でも、あたしの得物は剣だしな」

「そう。でも、手加減はしないわよ？」

「勿論さ。そうでなければ意味がないだろ」

「……いいわ。本気で仕合うのは久しぶりだから、ゾクゾクする」
獲物を狙う、トラのような目付き。

身の毛がよだつ程の、殺気が感じられる。

やはり、並みの腕じゃない。

「……行くぞ」

「いつでもいいわ」

「ハアッ！」

キン！

やはり、受け止められるな。

すぐさま、反撃が来る。

ガキン！

「ぐっ！」

こんな細身の身体で、どうしてこんな力が出せるんだ？

受け止めた一撃は、かなり重かった。

何とか押し返し、後退りして間合いを取る。

「やるな、流石だ」

「うふふふ、もっと楽しませてね」

そう言って、雪蓮は地を蹴る。

は、速い！

咄嗟に剣を下げる。

ガッ！

「チッ、見切るとはね」

……まただ。

あたし自身、疑問の一つ。

動体視力が、ハンパじゃなく良くなっている事。

他勢力の武将がどうなのかは、まだ戦った事がないからわからないけど、趙雲といい、明命に思春と、素早さを活かした戦い方をす

る人が多い。

勿論、彼女達も自信を持っている筈だろう。

……でも、何故だかその動きは、あたしの眼には確実に捉えられる。

「クッ、ちょこまかとかわしてくれるわね！」

ビュン、ビュン！

宣言した通り、一切の手加減も容赦もない、雪蓮の剣捌き。

考え事しながらとか、そんな余裕がある方がどうかしてる。

……あたし、何か取り憑いてるんじゃないか、とでも思いたくない。

「せいやっ！」

「！！」

これは……ヤバい！

カァン！

無意識に立てた剣が、雪蓮の突きを防いだ。

「綾子。やっぱりあなた、普通じゃないわね」

雪蓮、あたしも残念だが同感だ。

「あれを防ぐとはね……。思春、どう？」

「はい。今の雪蓮様の一撃は、綾子の一瞬の隙をついたものでした。私でも、運が良くなければ受ける自信はありません」

……あれ、いつの間にか蓮華と思春が見物に？

というか、見えてるのかよこれ！

「綾子。余所見していいのかしらっ！」

カン！

しまった、剣を弾かれた。

「これで決まりよ！」

雪蓮が、トドメに剣を振り下ろした。

うわっ、もうダメか！

……が、雪蓮の剣は、あたしに届いていない。

「……何よ、それ」

呆れたような彼女の声で、あたしは我に返った。

……あらら、そりゃ、呆れるしかないか。

だって、雪蓮の剣先はあたしの手の中。

所謂『真剣白刃取り』をやってるんだから。

……柳生新陰流なんて名前しか知らないし。

この技も、ドラマや小説の中でしかない、フィクションだとずっ
と思っていたのに。

「うわぁ、綾子さん凄いですね〜」

「剣を弾かれた時点で勝負あった、と思いました。が。綾子様に、ま
だ策があったとは」

「そうですね〜。まさに達人、とでも言うべきなんでしょう〜」

軍師様ご一行までいるし。

……つか、止めたはいいけど……コレ、どうすりゃいいんだ？

「ハア、何だか馬鹿馬鹿しくなってきた。もうお仕舞いにし
ましょ」

雪蓮の言葉に、あたしは力を抜き、剣から手を離れた。

「……と、見せかけて!」

ビュッ!

「うわっ! 危なっ!」

間一髪でかわすあたし。

「卑怯だぞ、雪蓮!」

「あら、それは言いがかりよ? わたしは、お仕舞いにするとは言
ったけど、仕合を中断するとは言っていないもの」

ザク、ザク、ザク!

雪蓮、地面に剣を突き立てるな、いくら模造刀でもそれはヤバイ
だろ!

転がりながら、何とかそれをかわす。

つか、かわさないとマジで大変な目に遭う。

「あーっはっはっは。あー、楽しい!」

「あの〜、雪蓮さん?」

……ダメだ、眼がイッちゃってる。

これ、仕方だね？

「血を見た訳でもないのに……どうなっているんだ？」

「わ、わかりませんよ冥琳さま。ああ、綾子お姉さま、危ない！」

「綾子お姉ちゃん、頑張れ！」

「綾子様！　そこです、ああ、そうじゃありませんってば！」
ちよっと待て、ギャラリ増えすぎだろ！

内心でツツコミを入れつつ、どうにか飛ばした剣を掴めた。

ガキッ！

ようやく、雪蓮の剣を止めた。

今度こそ、罅迫り合い。

「力比べだ……。と見せかけて」

「え？」

すかさず足払い。

ジャンプでかわされたところへ、左アッパー！

「クッ、これもかわすか！」

「わたしの勘を甘く見ない方がいいわよ。せつ！」

あんたはニュー○イプか！

すれすれのところで、雪蓮の一撃をかわし、再度打ち込みをかける。

キイン！

お、避けずに受け止めた。

「しかし、ここまで避けられるかしら？　普通」

「そりゃ、あたしの台詞だ……ぞっ、と！」

キン！

キイン、キイン！

あたしが通っていた道場の乱稽古でも、ここまでの迫力はなかったな。

まあ、一歩間違えば冗談抜きで死ぬからなあ。

特に、今の雪蓮は……いろんな意味でヤバ過ぎだろ。

……よし、ならば。

あたしは剣を目の前に突き刺し、柄頭に両手を置いた。
「ふふふ、諦めたの？ でも、わたしは止めないわよ！」

雪蓮が迫り、剣を一閃。

「よし、今だ！」

剣を、シャベルのように雪蓮の方に払いながら、抜く。

「え？ キャツ！」

勢いよく抜いたから、その分土も一緒に抜け、飛んだ。
雪蓮の顔にも直撃しかかり、一瞬だが視界が遮られる。

「……え？」

「チェックメイト。……じゃない、終わりだな」

あたしは、剣を雪蓮の喉元に突きつける。

「……負けちゃった」

途端に、雪蓮の眼から狂気が、消えた。

ガクリと膝をつく。

「勝った……か」

あ、もう体力限界気味かも。

いくら運動量豊富なあたしでも、これはしんどいて……。

「……あれ？」

気がつくと、そこは見知らぬ天井……はもういいな。

どうやら、あたしの部屋らしい。。

「あ、気が付かれたようですね」

「……亞莎？」

特徴のある帽子に服、見間違いようがない。

「はい。ご気分は如何ですか？」

「……別に、何ともないような気がする。あたし、一体どうなったんだ？」

「あのまま、調練場で気を失ってしまわれたんです。雪蓮様も、で

すが」

「雪蓮は大丈夫？」

「ええ。……回復するためにはお酒が、と仰せになって、祭様と一緒に」

ああ、なら問題なさそうだ。

それにしても、激闘だった。

……そして、いつにも増して、あり得ない自分が、いた。

そのうち、昇○拳とか使えるようになった、とか……あり得ないと言いつつ切れないのが嫌過ぎる。

真剣白刃取りとか、まるでこっちに来る前に読んでいた……。

……ん？

読んでいたって……まさか？

「亞莎！」

「は、はいっ！」

いきなりあたしが大声を出したせいで、びびらせたようだ。

「あ、すまん。あたしのカバン、取って貰っていいか？」

「はい。これでしょうか？」

「そうそう。……えっと」

カバンの中身は、何度か確認している。

その中で、一番意味のなさそうなもの。

意味がないので気にもしていなかったけど、ここまで揃うと思いが当たる節がある。

「綾子様。それは？」

「ああ。情報端末、とでも言えばいいのかな」

「情報端末……。情報を得られるものですか？」

「そうさ。……動けばだけど、な」

大画面液晶が特徴の、タブレット型コンピュータ。

メカ音痴の遠坂に見せたら、どんな反応するかと思って、カバンに入れた記憶がある。

とは言え、ただのネタにする程は安くないので、電子書籍とゲー

ムを入れておいた。

……うん、確か入れたゲームに、三国志とか戦国で大暴れする、見切りの達人が主人公、ってのがあったわ。

で、電子書籍は、剣豪モノがずらり。

……ま、あたしが魔改造状態な原因はわかった……というか、これ以外にあり得ん。

でもな……これ、バッテリー切れで動かないんだよなあ。

……わからん。

あゝ、頭が茹だってきた。

と、言うか。

グー。

盛大に、腹の虫が鳴ってくれた。

「……とりあえず、何か食うか。亞莎、街に行こうぜ」

「え？ でも、寝てなくて大丈夫なんですか？」

「ああ。それに、この時間じゃ厨房に行っても何もないだろう。ごま団子、ご馳走するぜ？」

「え？ で、ですが……」

今、明らかに動揺しただろ。

別に、虐めるつもりはないし、ご馳走するのも本心だけだな。

「世話になった礼さ。ほら、行くぞ」

「は、はいっ！」

謎はあるけど、今はこれでいいのかも知れない。

魔改造だろうが何だろうが、今のあたしは、この人達にとって、必要とされているじゃないか。

……いずれ、何かわかるだろう、きっと。

十九 (後書き)

いろいろとご指摘をいただいておりますが、綾子の強さが不自然、というご意見が多いようです。

後でその理由を記していく予定でしたが、ちょっとプロットを変更、今回少しだけ触れてみました。

結果、蛇足的になってしまいましたが……力不足で申し訳ありません。

ゝ二十ゝ(前書き)

凌統登場です。

二十

「たあっ！ やあっ！」

ブンッ、ブンッ！

菖蒲は今日もまた、鍛錬に励んでいる。

あたしの教えを忠実に守って、例の木刀を振るい続けていた。

少しずつだけど、足腰がしっかりしてきたかな。

あれが自在に出来るようになれば、次の段階に進むとするかな、
とか思っていたりする。

さてさて、あたしも自主トレ始めますかね。

青コウの剣と、倚天の剣を抜く。

二刀流なんて、それこそ時代劇の世界というか……あたしのイメージだと宮本武蔵と、中村主水ぐらいか？

もっとも、あっちは長刀と脇差しの組み合わせだけど。

さて、上手く扱えるのかねえ。

左手に青コウの剣を持ち、何度か振ってみる。

……うーん、やっぱり違和感がある。

剣は両手で扱うか、さもなくば右手で操る事が多い。

竹刀は割と持ちやすさを考えて作られていたけど、昔居合いを習いに行った時は、かなり戸惑いがあった。

まず、重い上に、握り方や力のかけ方が、まるで違う。

それに、吊した紙を斬るとか、冗談みたいな真似を本気でやる道場だったし。

そんなもん斬れるか、と思ったけど、そこの師範代はあっさりとやってのけてみせた。

曰く、力任せに『切る』んじゃなく、あくまでも『斬る』ものなんだ、と。

西洋の剣みたいにな、鎧の上から叩き潰すような代物とはまた違う

から、力の要れどころが難しい。

この時代の剣は、またこれはこれで違う。

少なくとも、襄陽で買った普通の剣は、最後まであたしの手に馴染まなかったからな。

ちなみにあの剣、使い道がないので部屋に放置しておいたら、菖蒲が勿体ないですね、とか言っていたので、

「なら、菖蒲にやるよ。ただの剣だけだな」

と言ったら、文字通り飛び上がって大喜びされた。

言っちゃ何だけど、宝剣とか名剣とか、そんな類じゃないと思うんだがなあ。

……その後しばらく、鞘に頬ずりする菖蒲は、コメントのしようがなかった。

まあその……世の中には知らない方が幸せな事もあるって、アレだな、うん。

右手に倚天の剣を追加。

ビュッ！

うん、これだけなら問題なさそうだ。

……しかし、この剣も不思議だ。

長年愛用した筆記用具みたいに、ぴったりと手に馴染む。まるで、身体の一部のように思える。

斬れ味は……言うまでもない。

両手に剣を構え、仮想敵をイメージ。

……そうだな、太史慈にしよう。

「フッ！」

槍を青コウの剣で払おうとするが、押し込まれてしまう。

左で受け、右で反撃。

……そう、単純には行かないようだ。

二本でこれだから、某ゲームみたいに、刀を八本も十本も一度に

振り回すとか、やっぱありや無理があるよな。

「おりゃあ！」

今度は、左右から交互に打ち込みをかける。
数十回これを繰り返す。

……ダメだ、違和感が払拭できない。

利き腕の右はいいが、左が思うように動かない。

誰かに聞こうにも、二刀流なんて遣い手はいないしなあ。

やっぱり、一本ずつ使うのがいいんだろうか？

試しに、倚天の剣だけで突進してみる。

受け流されるけど、さっきに比べれば雲泥の差があるな。

こちらの方が確実に相手に迫れる気がする。

「綾子お姉ちゃん！」

小蓮が、向こうで手を振っている。

そのままこっちに駆けてきて……ダイブ？

慌てて、受け止めるあたし。

ちなみに剣は、彼女が向かってきた時点で、地面に突き刺しておいた。

「どうした、小蓮？」

「……む」

あれ、何かむくれてるな。

「お姉ちゃん、なんでシャオの事、『シャオ』って呼んでくれないの？」

「え？　だって、雪蓮も蓮華もそう呼んでないだろ？」

「お姉さまたちはいいの！……綾子お姉ちゃんは、特別だもん」

ズギューン、ドガガガガガ！

なんかライフルで狙撃された後、マシンガンで蜂の巣にされましてよ、あたし？

この娘の上目遣いは、ヤバ過ぎる。

破壊力が半端ないというか……自覚してるのかしてないのかはわ

からんけど、可愛い過ぎ！」

「わ、わかったよ。じゃあ、シャオ」

「えへへへ♪」

うわ、めっさいい笑顔。

……はっ、一瞬だけど、黄色い花畑がフラッシュバックしたような。

しっかりしろ、あたし。

バシ、バシ！

「お姉ちゃん？ どうして、頬を叩いているの？」

「あ、いや、こうでもしないと、いろいろと危険が危ないんだよ」

「？ 変なお姉ちゃん」

はい、自分でも変だと思います。

ちなみに、さっきの返事も誤用じゃないからな？

「ところで、何か用があったんじゃないのか？」

「あ、そうそう。あのね。凌統が城下に来たみたいよ」

「凌統が？……そうか、シャオに恩返しに来たか」

「でね、シャオに会いたいって。行こうよ、お姉ちゃん」

「ちよ、ちよっと待て。あたしもか？」

「だって、あの時は綾子お姉ちゃんも一緒だったじゃない」

「そりゃそうだけどさ。でも、シャオに、って来たんだろ？」

「むー、シャオは綾子お姉ちゃんと一緒がいいの！ ほら、行こう！」

「お、おい！」

手を引っ張られる。

もちろん、力任せに振り解く事は出来るけど……。

「綾子お姉ちゃん。シャオと一緒に、嫌？」

とか泣き顔で言われたら……だああ、そんなになったらあたしは今日一日、部屋で自己嫌悪&ヒキコモリ決定だ！

……という訳で、選択の余地はなく、そのまま引き摺られていくあたしだった。

「よっ、久しぶり」

指定された飯店へと着いたあたし達。

「……何だ、これ」

「相変わらずね……」

テーブルの上には、空になった皿が堆く積まれていたりする。

もちろん、全部綺麗に平らげられている次第。

「よく食うな、ホント」

「いや、寿春ってところはメシが美味しいね。あ、青椒肉絲と炒飯お代わりね!」

「い、いらっしやい。ご注文は?」

凌統の食いつぷりにドン引きしながら、注文を聞きに来た店員。

まあ、普通は引くわな。

「シャオ、烏龍茶と点心でいいか?」

「……う、うん」

「何だ? もっと食えよ、力出ないぞ?」

いや、この光景見てがつつり食えるとしたら、それはお前さんと同類だから。

「あ、そうそう。これ、返すよ」

箸を置いて、凌統が巾着をシャオに手渡す。

ズシリと重そうだから、シャオが貸した分、入っているんだろうな。

「お父さんは、大丈夫だったの?」

「ああ、何とか持ち直した。全く、お陰でメシも喉を通らなかったよ」

説得力全くないぞ、おい。

「あ、その金は別にやましいモンじゃないからな? ちゃんと、俺が自分で稼いだんだ」

「ふうん。どうやって?」

「そりゃ、賞金首を捕まえたり、盗賊をやっつけたり。そんなので

も、結構な稼ぎになるからな」

そう言いながら、凌統はまた、箸を取った。

まだまだ食うつもりらしいな、こりゃ。

「お金返してくれるのはいいんだけどね。ちゃんと、ここのお代は払えるんだよね？」

シャオの疑問はもつとも。

「大丈夫、大丈夫。余裕だからさ、孫尚香と……名前なんだっけか、そっちの奴も好きに食ってくれ。あたしの奢りだ」

そっちの奴って……また名前覚えられてないのか、あたしは？

「綾子お姉ちゃん？ どうしたの、テーブルなぞったりして」

「……いいんだ、少しほっといてくれ」

『の』の字を描く、あたしだった。

結局、半刻ほど、目の前の大食いショーは続いた。

「ふう、食った食った」

「食べ過ぎよ？ あ、もう、口の周りまだついてる？」

「え？ どこだ？」

「ここよ。もう、ちょっと屈みなさい。拭いてあげるから」

シャオって、時々わからなくなる。

あたしにはあんなに甘えてくるのに、こんな風に面倒見がいい事もあるし。

どっちにも打算も何もないから、悪い事じゃないんだけどな。

「ところで、この後はどうする気だ、凌統？」

「ん？ もう一軒行くか？」

また、ずっこけそうになるあたし。

「これだけ食ってどうしてそうなる！ あたしがいいたいのは、身の振り方だ」

「何だ、それならそうと言ってくれよ」

普通はそう思うだろう……。

何か、調子狂うなあ。

「ん、俺は武でしか世の役に立てないからな。また、盗賊退治でもするかな」

「なら、仕官しないか？」

「へ？ 俺が？」

「そうさ。まだ世は乱れている、アンタみたいな腕の立つ奴は、重宝されるぞ？」

「うーん、仕官か……。でもアレだろ、仕官って試験もあるんだろ？ 俺みたいなバカには無理だって」

この時代、科挙なんてあったっけ？

確か、もっと後の時代だった気がするんだけど……。

「それか、有力豪族の推挙とか。でも俺、そんな伝手はないしなあ」「という事は、伝手さえありゃ、仕官してもいいんだな？」

「え？ そ、そりゃ、俺だっていつまでも根無し草じゃられないし」

「そうか。だそうだよ、シャオ」

「え？」

首を傾げるシャオ。

うん、仕草は可愛いが、見とれていたら先に進まないから続けるな？

「シャオの推挙なら、間違いないじゃないか。な？」

「……あ。うん、そうだね！」

わかってくれたらしい。

「へ？ 何の話だ、一体？」

「いいから、ちょっと来てくれ」

「お、おい！ 俺をどこに連れて行く気だよ」

何か文句を言っているが、気にしない方向で。

城門の処まで来た。

日本と違い、中国では城と街が合体した、城郭都市がデフォらし

い。

だから、ここで言う城門ってのは、軍事施設としての城の門。
……まあ、早い話があたし達が普段いる場所に連れてきた訳。

「って、ここ城じゃないか。勝手に入ったら」

凌統、戸惑っているな。

「いいんだよ、ここ、シャオのおうちだもん」

「え？ えーっ！」

「……なあ、凌統。まさかと思うけど、孫尚香って名前で何か浮かばなかったのか？」

「だって、孫尚香は孫尚香……。ま、まさか、あの孫家の？」

「そうだよ。シャオは孫家の娘だもん」

あらら、何か固まったぞ。

「ねえ、綾子お姉ちゃん。どうしちゃったのかな？」

「……とりあえず、冥琳のところに連れて行くか」

硬直したままの凌統を担いで、あたしは城内へと入った。

「ご、ご無礼の程を！」

「だからもういいってばあ」

「い、いえ。俺、いや自分の無知から来たとは言え、孫家の姫君に
対して数々の非礼、お詫びしてもたりまひえん」

あ、噛んだ。

冥琳と、いつの間にかやって来た雪蓮、顔を見合わせている。

「何か面白そうな事が起こりそうだから、来てみたのよね」

ってアンタはどうしてそういう勘は無駄に働くかね、しかし。

「もういいんじゃない？ 小蓮も、気にしてないって言ってるんだ
し」

「で、ですが！」

土下座という習慣があったら、間違いなくやりかねない勢いだな。

「そ、それに。そちらの方も将とはつゆ知らず、重ねてご無礼を」

「あゝ、あたし？ 別にいいよ、将らしくないのは自覚してるから

さ」

「ねえ、本人達がもういいって言ってるんだから。それより、自己紹介して貰えないかしら？」

雪蓮の言葉に、あっと気づいたようだ。

「つか、百面相だね、まさに。」

「あ、こ、これは。俺、いえ私は、姓を凌、名を統、字を公績と。余杭の出です」

「凌統ね。わたしは孫策で、こっちが周瑜。あと、彼女にもちゃんと美綴、って名前があるんだけど」

名前を覚えてないの、早速雪蓮にバレてるよ。

「は、はい！ ももも、申し訳ありません！」

「あんまり硬くなられてもやりにくいんだけどね。じゃ、後はよろしくね、冥琳」

「任されよう。さて凌統、尚香様からの推薦という事で、何点か聞かせて貰いたい」

「は、はい。どどど、どぞ！」

うーん、カチカチになってるなあ。

よし、ちょっと手助けしてやるか。

あたしはそつと、凌統の後ろに回った。

これぐらいの手練れなら気配で気づかれそうなものだけど、緊張過ぎて全然反応がない。

「せーの」

こちよこちよこちよ。

脇腹を、思い切りくすぐってやる。

「い、いや、やめろ、あはははははっ！」

いーや、しばらく続けてやろう。

「どうだ？ 落ち着いたか？」

「……は、はい。何とか」

「よし。じゃ冥琳、続けてくれ」

冥琳は、ハア、とため息を一つ。

「全く、綾子が何をするのかと思えば。まあ、緊張は解れたようだがな」

「にしても、いきなりくすぐるとか。突飛もないわね、綾子も」

「雪蓮に言われたくないけどな。突拍子もないって意味じゃ、アンタもそうだし」

「ぶー。何気に酷いわよ、それ」

「……始めたいのだから」

「すいません。」

「ゴホン。では、まず初めに。得意とする事は何か、聞かせて貰いたい」

「得意ですか。おれ、私にはご覧の通り、武しか能がありません」

「なるほど。今までに、どこかに仕官した事は？」

「ありません。ずっと一人でしたから」

「そうか。では、兵を率いた経験もない、という事だな？」

「ないです」

「ふむ。なら、實力を見せて貰った方が良さそうだ」

「はいはい、ならわたしが」

「雪蓮。先ほど渡しておいた書簡は片付いたのか？」

「あ、あれ？ え、えーと。あ、あはははは」

全く手を付けてないな、あの様子だと。

「じ、じゃ、わたしはそういう事で」

あ、逃げた。

結局逃げても一緒なんだけどなあ。

「……すまん。では、仕合をして貰うか……。相手はどうするか」

この部屋には、シャオとあたししかない。

いやまあ、あたしでもいいんだけど。

祭さんとか思春、明命、太史慈と腕自慢は揃っているしなあ。

「では」

冥琳がそう言いかけた時。

「失礼するわ。仕官希望者が来た、って聞いたんだけど」
蓮華が入ってきた。

そして、当然の如く従っている思春。

二人に視線を向けた凌統が……ん、何か驚いてる。

「し……いや、甘寧！」

「……凌統か！ 貴様、何故ここに」

あら、二人は知り合いだったのか？

……なんか、空気がピリピリするんだけど。

一波乱、ありそうだな。

二十（後書き）

長くなりそうなので一旦切ります。

全体的に読み返してみるとまだ誤字が残っていたり、話の流れでおかしいところがあるんですが、修正をどのタイミングでしようかなあ、と。

もし、各話で「改」マークがついている場合は、その辺の修正に留めるのを原則としますので、どうぞご了承下さい。

オリキャラの紹介は、まとめてもう少し後で考えています。
ちなみに、拠点フェイズ的な短編はどうでしょうか。

もともと会話が多めの話なので、やるとすれば視点を変えて……で
しょうか。

もしリクエストがあれば考えてみますので。

二十二 (前書き)

二十話からの続きになります。

（二十一）

思春と凌統。

二人は今、調練場で対峙中。

「フン、貴様が相手か。いいだろう」

「甘寧、いくらアンタが孫家に仕える身だろうが、容赦はしねーぞ！」

一触即発の雰囲気だった面談の場。

「なら、思春とやればいいんじゃないの？ どうせなら、とことんね」

雪蓮の一言で、こうなっている訳だが。

また、将の面々が勢揃い。

いつも思うんだが、これで政務が滞ることはないのか？

「蓮華。思春と凌統、何かあったのか？」

「知らないわ。たぶんだけど、思春が孫家に仕える前の話じゃないかしら。私も、凌統とは面識ないもの」

「だよな」

確かにゲームだと、二人の相性は良くない設定にされていたような記憶がある。

……でも、何でだかまでは知らない。

こうなるってわかってたら、せめて演義の方だけでも読んでおくんだった、とは思うけどな。

「……では、参る」

「かかって来い！」

二人は、得物を抜く。

模造刀で、と思ったが、二人とも希望は真剣で、との事。

……まあ、簡単に死ぬ事はないだろうけど、どんだけ因縁あるんだろうな、あの二人。

シュン！

思春が姿を消した。

……いや、ホントに消えた訳じゃなくて、素早く動いているだけなんだ。

あたしはまたしても見えてるけど、他の人はどうなんだ？

「ハン！ 変わらないねえな！」

凌統はそう叫びながら、槍を振り下ろす。

ズドン！

土埃が巻き上がる。

しかし、槍でこれって……凄いバカ力だ。

「チッ！」

思春の動きが止まっていた。

「オラオラオラオラア！」

ビュン！

カン！

思春は、鈴音でその突きを受け流す。

一撃一撃が重いのか、表情はかなり歪んでいる。

だが、やられっぱなしなままである訳もない。

パワータイプの凌統の攻撃は、どうしても思春に比べれば間断があるようだ。

と言っても、並の将ならば受けきるのは至難の業だろうけど。

その一瞬の隙を突き、思春は間合いを取る。

「どうした？ 腕が落ちたんじゃねえのか？」

「……ぬかせ！」

思春は地を蹴り、ジャンプ。

いやー、バスケットボールとかハンドボールの選手だったら、プロスカウト間違いなしだね、ありや。

「……うっ！」

「でえええい！」

ガアン！

今度は思春のターン。

とにかく、一撃一撃が素早い。

柔と剛。

その言葉がぴったりの、二人の仕方だ。

「なかなかやるじゃない、あの子」

「うむ。力任せに見えて、動きも迅いようじゃ。あの思春相手に全く引けを取らぬとは」

雪蓮と祭さんは、二人の動きが追えているようだ。

「どうだ、周泰殿。貴殿から見て」

「はい。思春さまは本気でかかっておいでです。その攻撃を受けきるとなれば、私では太刀打ちできないかも知れません」

太史慈と明命もいたのか。

ガッン！

受けた状態から、凌統は力で思春を押し返した。

「雪蓮姉様。本当に、とことんやらせるおつもりですか？」

「ええ。だって、あの二人因縁があるようだし。その方が、後腐れがなくていいじゃない」

「ですが……。あの腕、間違いなさそうです。どちらかが傷つきでもしたら」

蓮華はそう言って、眼を伏せる。

心配なんだろうな、思春の事が。

仲のいい主従だから、余計にそう思う。

ガン！

カン！

と、金属音が交錯した。

「！」

「うわっ！」

あまりに激しく交叉したせいか、それぞれの得物があらぬ方向へ……って。

「シャオ、危ない！」

「え？ キャアッ！」

咄嗟にシャオのところに跳び、身体を抱えて転がる。

その直後、シャオの立っていた場所に、凌統の槍が突き刺さった。ふう、まさに間一髪だった。

「大丈夫か、シャオ？」

「う、うん……。ありがとう、綾子お姉ちゃん」
ふう、良かった。

シャオにもしもの事があつたら、大変な事になっていたからな。

「尚香様、大丈夫ですか！」

「綾子！ ケガはないか！」

仕合中だった二人が、慌てて駆け寄ってくる。

「へーきよ、この通り。綾子お姉ちゃんが、守ってくれたから」

「あたしも、ちよつと擦り剥いたぐらいかな」

「ハア、よかった……」

へなへなと座り込む凌統。

「すまん。私の未熟さ故、小蓮様と貴様を、危ない目に遭わせてしまった」

「いや、みんな無事だったから、それでいいじゃないか。な？」

思春の事だ、放っておくと自分のミスを責めかねないからな。

あたしは親指を立ててニカツと笑ってみせる。

「フツ。また貴様には借りが出来たらしいな」

「気にすんなって。あたしら、仲間だろ？」

そう言いながら、あたしはシャオを立たせた。

パンパン。

シャオが、埃を払ってくれた。

「さて、続きはどうするんだ？」

あたしの言葉に、二人は頭を振る。

「俺は、無理。何か力が抜けちゃった」

「私もだ」

「なら引き分けだな。どうする、雪蓮？」

「ま、仕方ないんじゃない？ 少なくとも、実力は見せて貰えたし。」

腕も確かみたいだし」

みんな、雪蓮の言葉に異存はないようだ。

「なら決まりね。あなたを、孫呉に迎えるわ」

「あ、ち、ちよっと待った！　じゃなくって、待って下さい！」

慌てて、凌統が立ち上がり、雪蓮の前へ。

「あら？　まだ何かあるの？」

「はい！　仕官は勿論、有り難くお受けします！　ですが、一つだけお願いが」

「言ってみて。あまり無理難題じゃないなら、考えるわよ」

「……おれ、私を、尚香様付きにして下さい！」

「小蓮付きに？」

「そうです。尚香様には、恩があります。仕官するなら、恩返しのもりでいたいんです」

「だってさ。小蓮はどうなの？」

雪蓮の問いかけに、シャオはしっかりと頷いてみせた。

「うん。雪蓮姉様がそれでいい、って言うてくれるなら。シャオも孫家の娘だもん」

「そっか。蓮華もいい？」

「構いません。私には思春がいるように、小蓮にも凌統が必要かと」

「決まりね。貴女の望み通り、小蓮付き武官として迎えるわ。ただし、小蓮に仕えるという事は、当然、孫家に仕える事にもなるから。命には従って貰うわよ？」

「勿論です。存分にこの力、お役立て下さい。証として、真名を預けます。刃霧^{はぎり}と呼んで下さい」

「ええ、宜しくね。改めて、わたしは孫策。真名は雪蓮よ」

「なら、私も預けないといけないな。孫権、真名は蓮華だ」

「あゝっ、お姉様達ずるい！　刃霧は、シャオ付きなんだからね！　剥れながらバタバタと、手足を動かすシャオ。

うん、可愛い。

「じゃあ、シャオは孫尚香、真名は小蓮。シャオって呼んでね♪」

「い、いや、それは流石に。小蓮様、ではどうでしょうか？」

まあ、普通は呼び捨ては抵抗あるよな。

……それを言うなら、あたしのこの馴染み度は……異常か？

「む、シャオがいいって言うんだからいいの！」

「で、ではシャオ様、とお呼びします」

シャオ、まだ不服そうだけど。

「小蓮。手の打ち所というものがあるでしょう」

「わ、わかったわよ」

蓮華に諭され、しぶしぶながらも呼び方決定。

で、孫家スリートップが預けるなら、と言う訳で、真名の交換会に。

最後に、あたしの番。

「悪いけど、あたしは字も真名もないんだ。姓が美綴、名が綾子。好きに呼んでくれ」

「字どころか、真名がないだって？ ふん」

ジロジロとあたしを見る凌統。

「怪しいね、アンタ。何者だい？」

「刃霧！ 綾子お姉ちゃんに失礼よ！」

「し、しかしシャオ様！」

「いい？ 私に従うなら、綾子お姉ちゃんを悪く言わない事！ ぜったいだからね！」

「刃霧。それについては悪いけど、わたしも、いいえ、孫家に関わる全員が同じ意見よ。綾子は皆の信頼を、実力と実績で得ている。その意味、わかるわね？」

雪蓮……ありがとう。

が、凌統は納得できないらしい。

拳を握りしめ、肩を振るわせていたが、

「……わかりました。そこまで言われるのなら。ただし、アンタには真名は預けられない」

「刃霧！」

「シャオ様。俺は、皆さんの言う信頼を、美綴から得ていません。俺自身が信頼できる仲間と認められるその時まで、待って下さい」

ま、言いたい事もわかるかな。

若干地が出ている事は敢えてスルーしておこう。

「あたしは別にいいぜ」

「綾子？」

「お姉ちゃん、ダメ！」

「いいんだ、雪蓮、シャオ。字がない、真名もない、それじゃ凌統が不審に思っても仕方ないさ」

「そう。綾子がそう言うなら、わたしは何も言わないわ。ただ、刃霧」

「は、はい？」

雪蓮はニヤリとして、

「あんまり、綾子を甘く見ない方がいいわよ。その方が身のためよ？」

「は？」

「ま、いずれわかるわよ。さてと、じゃあ刃霧の歓迎って事で祝宴を……」

「雪蓮。逃げたつもりだろうが、そうはいかん。さ、来い！」

「あゝん、冥琳がいじめるゝ。助けてゝ」

「お馴染みの光景過ぎて、誰も驚かないな。」

……あ、例外発見。

ま、すぐに見慣れるだろうけど。

その日の夜。

何となく寝付けなかったあたしは、城壁に来ていた。

昼間なら、地平線まで一望できるこの場所だけど、夜は何も見えない。

今日は月明かりがあるので、近くは何とか、というレベルかな。

ともあれ、揚州は孫家により平定された。

これから、やる事は山のようにあるんだろう。

でも、民を守っていくには、避ける事のできない道に進んでいるんだよな、雪蓮達は。

あたしは……。

「あら？」

「美綴殿？」

考えるのをやめ、振り向いた。

そこにいたのは、雪蓮と太史慈。

「珍しい組み合わせだな」

「わたしは、いつものように月見酒、って思ったんだけどね。ちょうど太史慈と偶然出会ったから、連れてきちゃった」

「と、いう訳なのだが。お邪魔だったかな？」

「いや、別に。眠れなくて、ここに来ていただけだし」

「じゃ、一緒に飲みましょ」

そんな感じで、いつもの如く酒盛り開始……と思ったんだけど。

「これ、儂を除け者にするな、と言ったであろう？ 策殿」

「雪蓮姉様。姿が見えないからと思ったら、またここだったんですね」

祭さんに加え、蓮華までやって来た。

「まあまあ、いいじゃない。一緒に……あ、杯が足りないか」

「なら、私が取ってこよう」

と、太史慈が腰を浮かした。

「待ちなつて。足りなきゃ、みんなで使えばいいだろう？ 回し飲み、つて奴だね」

「あ、何か面白そう。じゃ、まずは」

「孫策殿。美綴殿と、私にいただけないだろうか？」

「あら？ どうして、太史慈？」

「宴を始める前に、美綴殿と話しておきたい事がある」

「ふーん。別にいいわよ」

雪蓮は素直に、二つの杯に酒を注ぎ、渡してくれた。

……主がこんな真似するのは、恐らく孫家ぐらいだろうなあ。

「で、話って？」

「うむ。昼間の事だが……貴殿は、孫家に仕えてまだ日も浅いと聞く。だが、既に皆の信頼を得ている。それが決して、孫策殿や孫権殿の身びいきではない事は、私にもわかった。ただ、一つだけわからぬ事がある。貴殿は、この孫家で、何を目指す？」

「あたしは……」

一旦言葉を切り、考えをまとめる。

「難しい事はわからないかな、頭がいい訳じゃないからな。ただ、あたしの持つ力、武もそうだし、役に立つかどうかは別にして、たまに出る閃きとか……それが、みんなの役に立てばいい、そう思っている。こんなあたしを見出して、信用してくれる雪蓮たちのためにもな」

「……自身の事はないのか？ 人間、多少なりとも欲はあるものだと思うが」

「うーん、あたしは武を極められて、後は……可愛いモノがあればそれでいいや」

「ふ、ははははは。欲のない御仁かと思えば、とんでもない事を言うな。武を極める、か」

「だってそうじゃない？ どうせやるなら、極みを見たい、ってね」
「なるほど。貴殿が、少しわかってきた気がする」

そう言って、太史慈は杯を差し出す。

「どうやら、貴殿は轡を並べるに相応しい御仁のようだ。……我が

真名、せん霰せんと言う。貴殿に預ける」

「わかったよ。じゃ、あたしも綾子と呼んでくれ」

「承知した、綾子殿。では、固めの杯を」

互いに杯を交わし、飲み干す。

「孫策殿、孫権殿、黄蓋殿。綾子殿ほどの御仁が従う、と言うのだ。貴殿らにも、我が真名を預けたい」

その言葉に、三人も頷く。

「ええ、改めて宜しく。わたしは、雪蓮ね」

「蓮華だ。宜しく頼む」

「祭じゃ」

そして、めいめいに杯を干す。

「ふう、お酒が美味しいわ。今夜は格別ね」

「全くじゃ。地盤も出来、人も集まった。……見ておるか、堅殿」

「二人とも、いつもお酒お酒じゃありませんか？」

そう言いながらも、蓮華もあまり深刻ぶった口調ではないけどな。雪蓮に蓮華、そして小蓮の孫家三人を筆頭とした、まだまだ小さな勢力。

でも、柱石の冥琳を初め、穩に亞莎、千花と知謀の士は揃っている。

武も、祭さん、思春、明命に、霰と凌統が加わった。

菖蒲も、このまま鍛えれば、きっと皆に負けない将に育つだろうし。

……あたしも、やれる事をやるさ。

この世界が、あたしに何かを求めているのならば。

パカラッ、パカラッ、パカラッ。

……ふと、馬の足音が聞こえた気がする。

酔っぱらって、幻聴でも聞こえたかな？

……いや、まだ聞こえる。

「霰。何か、聞こえないか？」

「……ああ、馬蹄の音だ」

風雲急を告げる。

まさに、その幕開けの瞬間だった。

ゝ二十一ゝ（後書き）

登場予定のオリキャラは、これで全部登場です。

（まだ名前が出ていないキャラは、この後になります）

真名も明らかになりましたので、キャラ紹介を次に上げたいと思います。

書きながら気になる箇所もちらほらとあるのですが、話そのものが崩れかねないのでこのまま続ける事にします。

主人公及びオリキャラ設定（前書き）

主人公とオリキャラの設定となります。

全話見直しの中で、キャラ設定も変更が発生しています。

これで、矛盾や特徴がない、という問題は解消できたと思いますが……。

主人公及びオリキャラ設定

◇主人公◇

姓…美綴

名…綾子

字…なし

真名…なし

□ステータス

武力…99（+23）

知力…55（+0）

政治…60（+0）

魅力…100（+15）

※綾子は英霊ではないので、コー〇ー三国志風で

※知力と政治力は高いんじゃない、と思われるかも知れませんが、後漢時代から見れば遙かに高度な教育を数年受けているため、平均値は上回っているという設定にしています

□武器

青コウの剣（コウは金へんに工）

倚天の剣

弓（無銘だが綾子専用）

※薙刀は破損し、現在未修復

□エピソード

・三国志ゲームをやっていたら、夢の中に貂蟬が出てきて、そのまま平行世界へ。理由はまだ聞かされていない

・飛ばされた先で明命に発見され、不審者と思われるいきなりバトルに突入

・ 本人にも理由が不明なまま、ずば抜けた強さなどで、呉の客将的存在になっている

□性格及び特徴

・ 基本的に飄々としていて、細かい事にあまりこだわらない
・ 面倒見が良く、姉御肌。そのためか、平行世界に来て、妙に年下に慕われる傾向がある

・ 可愛いモノに目がない。その可愛いモノの一つが猫なせいか、異常な程猫に好かれるスキルが付与

・ 武全般と相性がよく、更にまだ謎の追加要素によって平行世界ではかなりの強さを誇る

・ 未来知識はあまりひけらかさないようにしているが、時々ドジを踏んで漏らす事がある

・ 三国志の知識も断片的なものしかないが、それが他の人物には機転が利くと誤解される要因にもなっている

□人間関係（二十一話時点）

・ 敬愛…雪蓮、菖蒲、小蓮、明命、祭、冥琳

・ 信頼…蓮華、千花、思春、穩、亞莎、霰

・ 好意…曹操

・ 知己…一刀、趙雲、程立、戲志才

・ 無視…凌統、張角、張梁、張宝

※これもコー〇ー三国志風に

※真名を交換していない人物は、姓名だけとしてあります

◆オリキャラ・壹◆

姓…徐

名…盛

字…文嚮

真名…菖蒲^{あやめ}

□ステータス

武力…70(+0)

知力…72(+0)

政治…46(+0)

魅力…75(+0)

※英霊ではないので、コー〇ー三国志風で（以下全て同文）

□武器

無銘の剣

□エピソード

・南陽の街で、ならず者に祖父共々襲われていたところを綾子に救われ、熱烈アタックで押しかけ仕官

□性格及び特徴

・背丈は明命とほぼ同じぐらい、スタイルも？

・碧色の瞳をしていて、青みがかった黒髪をリボンで束ねている（イメージ的にはガンダム戦記のメイ・カーウィン）

・性格は素直で、礼儀正しい

・綾子を絶対的に慕っていて、時々暴走する

・武は現在修行中、ただし素質はあるので後々には一角の将となる事が期待されている

・綾子の呼び方は「綾子様」、自分自身は「私」

□人間関係（二十一話時点）

・敬愛…綾子

・信頼…雪蓮、蓮華、冥琳、祭、千花、思春、穩、亞莎、霰

・好意…小蓮、明命

・知己…

・無視…凌統

※小蓮と明命は真名を交換しているが、綾子を巡ってのライバルのためワンランクダウン

※凌統（刃霧）は綾子と打ち解けてない以上、菖蒲にとっても同ランクのまま。真名交換も拒否中

◆オリキャラ・式◆

姓…太史

名…慈

字…子義

真名…霰^{せん}

□ステータス

武力…97（+2）

知力…48（+0）

政治…44（+0）

魅力…69（+0）

□武器

寿春の鍛冶屋特製槍（名称未定）

□エピソード

・劉ヨウ配下で、雪蓮の揚州平定に対して対決。綾子との壮絶な一騎打ちを繰り広げるが、勝負つかず

・劉ヨウ降伏後、丹陽城で抵抗するが、綾子との一騎打ちの間に城を落とされ、降伏

・綾子が孫家で信頼を勝ち得ている事を見て、綾子を信頼できる仲間と見なすようになる

□性格及び特徴

- ・背丈は雪蓮程度、均整の取れたスタイル
- ・茶色の瞳をしていて、青髪のショートカット
- ・性格は固いが、頑固一徹という程でもない
- ・武の腕は綾子と互角、礼節をわきまえているのと、冷静な判断も併せ持つ

・綾子の呼び方は「綾子殿」、自分自身は「私」

□人間関係（二十一話時点）

- ・敬愛…
- ・信頼…綾子、雪蓮、蓮華、小蓮、冥琳、祭、千花、思春、明命、穂、亞莎、霰、刃霧、菖蒲
- ・好意…
- ・知己…
- ・無視…

◆オリキャラ・参◆

姓…魯

名…肅

字…子敬

真名…千花^{ちか}

□ステータス

武力…58（+0）
知力…96（+0）
政治…99（+0）
魅力…78（+0）

□武器

特になし、ただし剣も弓も一通り扱える

□エピソード

- ・南陽近郊に住む富豪の当主で、顔も広い
- ・私兵を集めて狩猟を行い、兵法の取得や軍事の訓練などを行っていた
- ・冥琳のスカウトに対し、綾子をテストして決めると宣言。綾子がパスしたため、孫家に仕官

□性格及び特徴

- ・背丈は思春と同じぐらい、スタイルはそこそこ
- ・紫髪紫眼の子供っぽい少年で眼を前髪で隠している
- ・性格はとにかくのんびりおっとり
- ・事務処理能力は冥琳も凌駕する
- ・綾子の呼び方は「綾子さん」、自分自身は「私」

□人間関係（二十一話時点）

- ・敬愛…冥琳
- ・信頼…綾子、雪蓮、蓮華、小蓮、祭、千花、思春、明命、穩、亞莎、霰、刃霧、菖蒲
- ・好意…
- ・知己…
- ・無視…

◆オリキャラ・四◆

- 姓…凌
- 名…統
- 字…公績

真名…刃霧^{はぎり}

□ステータス

武力…92（＋0）
知力…33（＋0）
政治…27（＋0）
魅力…54（＋0）

□武器

刺又（名称未定）

□エピソード

- ・綾子と小蓮が巡検中、空腹で倒れているところを発見
- ・小蓮に恩を受けた事を忘れず、呉にやって来る
- ・思春との仕合はドロ―だが、晴れて仕官。ただし本人の希望で小蓮付き

□性格及び特徴

- ・背丈は祭ぐらい、引き締まった体つきをしている少年
- ・青髪黒眼
- ・ややがさつで大食漢、根は正直で悪人にはなれないタイプ
- ・小蓮が綾子を特別扱いするのが不満で、綾子とは打ち解けていない（綾子をライバル視しているが、綾子の方は自覚がない）
- ・武一辺倒で、パワーで押しまくるタイプだが、俊敏さも備えている
- ・綾子の呼び方は「美綴」、自分自身は「俺」（無理をして「私」と言う事もあるが、すぐにボロが出る）

□人間関係（二十一話時点）

- ・敬愛…小蓮
- ・信頼…雪蓮、蓮華、冥琳、祭、千花、思春、明命、穩、亞莎、霰

• 好意 ..
• 知己 ..
• 無視 ..
美綴、
徐盛

主人公及びオリキャラ設定（後書き）

残るオリキャラは、次話にて。

二十二 (前書き)

新しい章に入りました。
今回はシリアス気味です。

二十二

「皆、集まったわね」

翌朝。

孫家の将一同が、謁見の間に顔を揃えていた。

新顔の凌統に加え、菖蒲の姿もある。

もちろん、シャオも。

「じゃ、冥琳。よろしく」

「では始めさせて貰う。この写しを、皆に」

「ハッ！」

文官が、全員に書簡の写しを配って歩く。

あたしも受け取り、目を落とす。

「見ての通り、袁紹からの書簡だ」

袁紹。

河北に本拠を構える、現時点で大陸最大の勢力を誇る、名家中の名家。

まだまだ弱小でしかない孫家はもちろん、あの曹操ですら、袁紹とでは国力も兵数も比較にならないらしい。

……でも確か、袁紹って後で曹操に滅ぼされたんじゃないかったか？

確かに、あの曹操ならそのぐらいの事はやりかねないけどな。

あの絶対的な自信と、溢れる覇気は凄かった。

で、その袁紹から何を言ってきたのかな？

……………。

……えーと。

読んでいる皆、黙り込んでいる。

その内容の重さよりも、

『この華麗な袁本初が、陛下をないがしろにする、悪逆非道の董卓を討ちますわよ。つきましては皆さんも一緒に戦いませんか？

おーほっほっほっほ』

……あ、これ原文ママな。

つか、なんだこのアホ全開の書簡。

「……皆、思うところがあれば遠慮なく言って欲しいのだがな」

冥琳、こめかみに手を当てながら言うのがやつとか。

雪蓮は苦虫を噛み潰したような顔だし、蓮華は呆れ返っているし。

「……あの。もしかして袁紹って……バカですか？」

そのまんま、ど真ん中ストレートな凌統の一言。

いや、みんなそう思ってるってば。

「冥琳さま。これ、檄文ですよね……一応は？」

「……そうなんだろう。そう思わないと、見ていられないがな」

「し、しかし、檄を飛ばすのであれば、もっと書きようがあると思うのですけど……」

軍師三人にしてみても、これは知恵を出す出さない以前のレベルだろうな。

「しかし、董卓がそのような暴虐を働いているなどは、聞いた事がないな」

「霰。私の方では、噂ではあるがそのような情報も入っている。ただ、信憑性は薄いがない」

「私の方でも、同じ噂は耳にしています。ただ、明確な根拠はないんですが」

思春と明命ですら、正確な情報がないのか……。

袁紹のバカさ加減は、とりあえず確定事項として。

あたしもこの場にいます以上、発言をしなきゃな。

「つまりこれ、董卓を攻めるための連合軍参加を促している……でいいんだよね？」

「ああ。いくら袁紹が強大とはいえ、単独で董卓に挑むとなると少々厳しいからな。それに、暴虐の信憑性はともかく、今の都は董卓軍が抑えている。これを中心となって打ち破ったとなれば、天下に名声が広まる」

「名声が欲しいのは、どこも一緒。そう、この孫家もね」

雪蓮の言葉は切実だ。

確かに袁術からの独立を果たし、事実上滅亡させたし、揚州もほぼ手中に収めた。

でも、天下あまねくそれを称えられるか、と言われると……あり得ない。

まず、この時代はインターネットはおろか、テレビもラジオもない。

だから、情報の伝達手段が人伝しかない。

それに、落ちぶれたとはいえ、漢王朝の権威は未だに残っている。元の時代からは想像できないけど、まだまだ権威というモノが幅を利かせている……と、あたしなりに感じている訳さ。

「雪蓮姉様。それでどうするのです？」

「連合軍の事なら、参加するしかないと思うわ。不参加なら明確な理由が必要だし、それに名声は必要だしね」

「そうですね。ただ、情報は欲しいところです。何をやるにせよ、情報が揃っていませんと」

穩の言葉に、何人かが頷く。

「参加する事は決定事項として。冥琳、将の振り分けは？」

「ああ、考えてある。まず、留守居は蓮華様、小蓮様、思春、穩、

千花、亞莎、刃霧」

「えーっ、シャオまたお留守番なの？」

「小蓮。孫家のやり方、わかってないとは言わせないわよ」

蓮華にたしなめられるが、やっぱり不満なんだろう。

「シャオだってそれぐらいわかるけど……。シャオだって戦えるんだし」

「留守を守るのも立派な戦いよ。それとも、貴女は戦場に立つだけが戦い、とでも言いたいのか？」

「……………」

「今はまだその時期じゃない。わかるわね？」

「…………うん。蓮華姉様と、しっかり留守を守る。それでいいんだよ

ね？」

何とか、納得してくれたようだな。

「では、続けるぞ。連合軍に参加するのは、雪蓮、私、祭殿、明命、霰、綾子、菖蒲。兵は……二万が限度というところか」

あたしも遠征組か。

「ただし、明命と綾子には別に動いて貰う。現地で集合、という事になるだろうな」

「ん？ それはいいが、何をさせる気だ？」

「ああ。都の様子と、董卓軍の実情がどうしても気になってな。二人で調べてきて貰いたいのだ」

「冥琳さま。お言葉ですが、綾子お姉さまは、私のようには動けません。斥候ならば、私一人で」

「それも考えたのだがな。やはり、危険が大きい。それに、言っただろう、調べたいのは都の様子と。それは何も、漢王朝の事だけではないのだ。街や民の様子もそうだ。そうなれば明命一人で全ては厳しいのではないか？」

「はい……。それだけ多岐に渡るものを、短期間で、となると」

「兵の準備に手間取る事を理由に、出兵は引き延ばすが、それでも稼げる時間は限度がある。だから、二人にはまず先発して貰い、向こうで合流すればいいだろう。隠密行動だから、兵はつけられないが、必要な物があつたら言ってくれ」

なんか、とんでもない事になったな、こりゃ。

「冥琳様、あの……私は」

菖蒲が遠慮がちに切り出す。

「菖蒲には、輜重隊の警護を任せるつもりだが？ ああ、無論いきなり全てを、とは言わないがな。黄蓋殿に補佐をしていただくつもりだ」

「で、では、綾子様とは別行動と？」

「そうなるな。お前が綾子と行動を共にしたい気持ちはわからんでもないが、これは作戦でな」

冥琳の言葉を受けて、雪蓮が続ける。

「あなたも、いつまでも綾子に寄りかかったまま、はよくないわよ。それに、今回は斥候と調査が任務。これ以上、人は割けないの」

「わかりました……。綾子様、どうか御無事で」

「勿論だ。菖蒲こそ、しっかりやれよ」

「は、はいっ!」

……とは言うものの。

「結局、あたしは何をすればいいんだ?」

「忍びこんで調べるべきところは、明命に任せればいいだろう。綾子には、都の人々の暮らしぶりや様子、街の雰囲気などを見てきて欲しい。飢えている様子はどうか、治安はどうか」

「そんな事でいいのか?」

「案外、そういう世情を知る事が重要な事もある。それに、綾子ならば怪しまれる事もあるまい?」

うーん、それだけ信頼されているって事なんだろうけど。

大丈夫かなあ、いろんな意味で。

「綾子お姉さま。頑張らしましょう!」

……明命が張り切っているんだ、あたしも頑張るとしますかね。

馬を駆けさせ、一気に南陽へ。

防衛は諦め、その意味ではほぼ放棄しているとは言っても、まだここは孫呉の拠点の一つだ。

もっとも、現時点で南陽を狙ってきそうなのは、同じ荊州に勢力を持つ劉表ぐらいで、それも今のところは動く気配もないらしい。

確かに、あたしの知っている歴史でも、劉表は自領の安泰を図るだけで、彼が死んだ後で後継者問題が出て曹操に降服した筈。

……同じ事を繰り返すのかどうかはわからないけど、少なくとも、この世界の劉表も好戦的でない事だけは確からしい。

そして、久しぶりの館へ。

もっとも、かさばる物を除いて、寿春に移した後なので、結構中

はガランとしているけどな。

「ちよつとの間離れただけですけど、何だか懐かしいですね」

「そうだな。あたしにとって、ここが始まりだったしな」

準備を整える少しの間だけ、感傷に浸る。

……似合わないと言われそうだけど、あたしだってセンチになる事はあるんだからな。

「にゃ」

「ハッ？ この声は、お猫様？」

あたしがいた部屋に、数匹の猫がいた。

お、そうだ。

「明命。いい物をやろうか」

「え？ 何でしょうか？」

「これさ」

そう言いながら、路傍で見つけた一本の草を取り出した。

「これ、ネコヤナギって言う草なんだ。これを、猫の前で不規則に揺らしてみな」

「え？ ですが、お猫様はお怒りにならないでしょうか？」

「大丈夫だって。なら、やってみせるよ」

手本、という程の事もないけど、あたしは実演して見せる。

「ニャン！」

「ウニャ！」

猫達は、ネコヤナギを捕まえようとじゃれ始めた。

「うわぁ。綾子お姉さま、そ、それはどこに売っているものなのですか」

「いや、これ、あちこちに生えている草。別に売り物じゃないさ」

「で、ですが、あのお猫様達が、これほど夢中になられるとは、妖か奇術の類としか思えません」

そりゃ大げさだって。

「ほら、やってみな」

「は、はい。では、よろしくお願い致します。お猫様」

恐る恐る、といった感じでネコヤナギを近づけ、ゆっくりと上下に動かす。

猫は、大きく口を開けてあくびをしている。

「あうー、どうしてお姉さまみたいに出来ないのでしょうか……」

「もう少し動きに変化をつけた方がいいかもな。時々、止めたりとか」

「む、難しいものですね」

必死にネコヤナギを操るうち、

「ニャッ！」

とうとう、猫が反応した。

「あゝっ！ お猫様が、お猫様が！」

感激しているし。

「はうー、癒されますー」

見ているこっちが癒されるよ、全く。

と、そこに兵士がやって来た。

「失礼します。周泰様、美綴様。馬の準備が整いました」

おっと、休憩もここまでのようだ。

「明命。また今度だな」

「ううー、名残惜しいですけど……。また今度よろしくお願い致します、お猫様」

「ナーオ」

はいはい、と言わんばかりに猫は一鳴き。

南陽を出て、一路洛陽へ。

いくら近いとは言っても、長旅な事には代わりはない。

ましてや、城郭の外の治安なんて、あってないようなご時世だからな。

途中でも、賊に襲われて村人がいなくなった村や、破壊された砦跡などもちらほらと見受けられた。

……残酷な光景だけれど、これが現実なんだよな。

「そう言えば、董卓の情報に前に聞いた噂ぐらいなのか？」

「あ、はい。大まかな構成はわかります。董卓を筆頭に、軍師に賈馱と陳宮、武官は呂布と張遼と華雄、以上が主な将、との事です。それ以外はわからないところが多いと言いますか、謎だらけなんです、董卓軍は」

あたしの知っているのとは、ちよつと将の構成が違うかもな。

確か、軍師は李儒って奴がいた筈だし、あとは李カクとか郭シ、って奴もいたような。

……やっぱり、脂ぎった大男なんだろうか、董卓は。

主な武将が皆女性だから、董卓もしかしたら女性なのかもな。

……マツ〇・デラックスみたいだったらどうしよう。

呂布はきつと、この世界でも化け物じみた強さなんだろうし。

楽しみ半分、怖さ半分、ってとこかねえ……董卓軍の連中を見るのは。

「で、明命は洛陽に行った事は？」

「いえ、初めてです。私は、もともと庶人の出ですから」

「へえ。それで、それだけ優秀な忍者……じゃなく、間諜としての能力を持つとはね」

「昔から、身軽なのが取り柄でしたから。剣も、それに合わせて覚えましたし」

まあ、それを言ったらあたしなんて一般人だったんだけどな、こないだまで。

「……？」

不意に、明命から緊張が伝わってきた。

「どうした？」

「……何か、聞こえます。……あっちです！」

あたしには何も聞こえないけど、明命の言う事だ、何かあるんだろう。

「どうする？ 行ってみるか？」

「……そうですね。さほど通り道ではなさそうですし」

「よし」

しばし、馬を駆けさせる。

……と、立ち上る煙が見えてきた。

あたりには山も林もない。

つまり……。

「村が襲われたのか？」

「……かも知れません。とにかく、行ってみましょう」

もしそうだったとしたら……あたしは、どうすればいい？

今は明命と二人だけ、しかも都へ向かう途中。

無理も無茶も出来ない。

でも、助けを求める人がいたら、あたしは……。

やがて、村が見えてきた。

あの時の事が、込み上げてくる。

……ダメだ、こんなんじゃ。

しっかりしろ、あたし。

「お姉さま！ 向こうに誰かいます！」

「賊か！」

ガタイのいい男が、数人。

そして……女の子が一人、取り囲まれている。

両手に剣を持ち、男達を睨みつけているようだ。

「へへ、観念しな、姉ちゃん」

「そうそう。そんな物騒なもの、こっちに寄越して俺達に付き合いな」

下衆野郎めが。

男の一人が、女の子に飛びかかろうとした。

ビュッ！

その瞬間、剣が振られた。

「ギャッ！」

男は腕を切り飛ばされ、その場に踞る。

「このガキヤ！ なめやがって！」

いきり立った男達は、一斉に彼女に襲いかかった。

けど、女の子は尋常な腕ではなかったようだ。

華麗に動き回りながら、ならず者どもを確実に倒していく。

……あの動き、どこかで見た気がする。

ふと、別の方角から殺気を感じた。

……弓か！

あたしは弓をつがえると、素早く放った。

「ぐはっ！」

矢は男の喉を突き破った。

「明命！ そのあたりに仲間がいるはずだ、片付けてしまえ！」

「はいっ！」

持ち前の身軽さで、潜んでいた賊を次々に打ち倒していく明命。

あたしは青コウの剣を抜き、女の子の方へと突進した。

「はあああっ！」

ズシャ！

女の子を背後から襲おうとした男を、一刀で斬り捨てた。

「あ、貴女は！」

「話は後だ！ こいつらを始末する！」

青コウの剣を実戦で遣うのは、よく考えればこれが初めてだ。

想像以上の切れ味。

……流石、魂の籠められた剣だな。

賊を一人、また一人と斬り捨てていく。

……命を刈り取る、その重さに耐えながら。

賊共は殲滅。

逃げようとした連中も、明命にかかればそれも適うはずもなく。

そして、女の子が誰なのか、あたしも思い出していた。

「そうか。あの時の」

「ああ。……ありがとう、助かったよ」

千花に試された時、最後に出てきた二刀流の女の子。

「まだ、名乗ってなかったね。ボクは朱然、字は義封」

「美綴綾子だ」

「私は周泰、字は幼平です」

「ここは、朱然の村だったのか」

「……うん。ボクが留守にしている隙に、襲われて……。ボクがいれば、こんな事にはならなかったのに！」

「朱然。自分を責めない方がいい。個人の力には限界がある、そうだろう？」

「そうだけど、そうだけど！ みんな、みんな殺されちゃったんだ！ みんな……ううっ」

悲痛な朱然の叫び。

「泣きたいなら、泣けよ。我慢は良くない」

「う……うわああああん！」

あたしにしがみつくと、朱然は泣き出した。

その頭を撫でながら、落ち着くまでそうしている事にした。

「明命。念のため、生存者がいないか、確認してくれ」

「……はい」

「それで、これからどうする？」

「……よければ、ボクも連れて行って欲しい。美綴さんと一緒に」

「え？」

「もうボクには行く場所もない。それなら、孫呉の将である美綴さんを手助けしたい」

「……そうか。明命は？」

「私は、お姉さまの判断に従います。残していても、危険な事には変わりありませんから」

「そうか……。そうだな」

悲劇を伴いつつ、また新しい仲間が増えた。

「さ、急ぐぞ」

「はいっ！」

「……うん。さよなら、父さん、母さん」
朱然の呟き。

もの悲しさと後味の悪さ……辛いよな。

二十二（後書き）

誤字訂正に併せて、オリキャラに関する記述に手を入れました。

以前から読んでいただいている方には「あれ？」と思われるかも知れません。

推敲不足が原因で、ご迷惑をおかけします。

それから、更新重視で進めるあまり、内容が薄くなってしまっているようなので、少しペースを落とすかも知れません。

更新を止める事はしませんので、気長にお付き合いいただければ幸いです。

〈二十三〉（前書き）

出張続きで時間が取れず、ちょっと間が空いてしまいました。

その代わりではないですが、予告通り（?）、今までに公開した全話について、

・誤字脱字修正

・キャラ設定、口調の矛盾点や不自然な点の見直し

・文脈としておかしい箇所や訂正や加筆

などなどを行っています。

誤字については徹底的に潰したつもりですが、まだ残っているようでしたらお知らせ下さい。

（二十三）

都・洛陽。

「ふえ」

「大きいですね」

あたしと明命、ただただその規模に驚いていた。

城壁からして、南陽とも寿春とも、比較にならない。

元の世界で大きな城、と言えば姫路城とか江戸城が浮かぶが、そんな規模じゃない。

まあ、日本の城とは根本的に考え方が違うから、当然といえばそうなんだが。

「最初に見たら、誰でも驚くのかもね」

と、朱然。

「来た事あるのか？」

「あるよ。ボクはもう何年も前の事だけどね」

「なら、街の作りとかは？」

「詳しくは覚えてないけど、少しなら。案内するよ」

正直、これは助かる。

土地勘があるのとないのとは、動きが変わってくる。

「じゃ、行こうか」

「はい」

「うん」

ちなみに、馬は途中の村に預けてある。

対董卓連合軍結成の動きは、既に董卓側にも伝わっていると考える方が自然だろう。

当然、出入りする人間に対する警戒もされている筈だろうから、そんなところに馬で乗り込むのはリスクが大きい。

この時代、馬は高価な乗り物で、旅の武芸者が持っている、というだけで怪しまれる恐れもある。

とにかく、用心に越した事はない。

街は、大勢の人で賑わっていた。

人々の表情も、さほど暗さは感じられない。

「活気がある。商店に並んでいる商品も豊富だ」

「そうですね。朱然さん、以前と比べてどうでしょうか？」

「そうだね、あまり変わっていないというか、むしろ人の数が増えている気がするよ」

人も、物流も活発。

そして、暗さや悲しみがあまり見られない。

「とても、暴政を敷いているとは思えないな」

「例の噂だね。ボクも、変だと思ったんだ」

明命も同感らしく、頷いている。

流石に、街の警備に当たる兵士は、顔に緊張を浮かべている。

こればかりは、仕方ないだろうな。

「あれが、皇帝陛下のおわす城。もちろん、入った事はないけどね」
行く手にそびえる、巨大な門。

そして、その向こうに見える、大きな城。

見ているだけで、圧倒されそうな、そんな雰囲気を持っている。

あまり見っていると怪しまれそうなので、あたし達すぐそばにある
茶店に入った。

「いらっしやい」

店のおばあさんが、奥から出てきた。

「茶と、月餅を」

「はいはい」

とにかく、休憩。

「ふう、流石に広いな。この街は」

「そうですね。これほどの規模とは、想像以上でした」

「一日で歩き回れる規模じゃないからね。とりあえず、ここを出たら宿を取ろう」

朱然の提案に、異存はない。

どちらにせよ、数日間は滞在する事になるのだし。

「泥棒だっ！」

と、通りの向こうで誰かが叫んだ。

警備の兵士は……見当たらない。

痩せぎすの男が、宝飾品を手にもちらに逃げてくるのが見えた。

「関わらない方がいい。ボク達は、目立ってはいけないからね」

「わかってるさ。明命も、いいな？」

「はい。口惜しいですけど、仕方ありませんから」

捕まえるのは簡単だろうけど、手出しは出来ない。

警備の兵士が気づいてくれるのを待つしかないか。

……と、その時。

「ちよっと待たんかい！」

誰かが、男の前に立ち塞がる。

サラシ一枚の……女性だ。

痴女なのかも、とか思ってしまったが、

「あの人、隙がありません」

「……だな。ただ者じゃないな」

素手だが、身のこなしから、相当に鍛えられた人物だと見た。

「何だ、テメエは？」

「アンタ、泥棒や言うたな？ 黙ってここを通す訳にはいかへん」

「怪我したくなかったら、そこをどけ！」

懷から、小刀を取り出す男。

腕は大した事はなさそうだけど、たぶん何人かの命は奪っていそ

うな雰囲気だ。

「やれるもんなら、やってみい！」

「クソったれが！」

男は、そのまま突進してくる。

意外に、身のこなしが素早い。

「ああっ！」

「キャアッ！」

野次馬から、悲鳴が上がる。

……が。

サラシの女性は、ひらりと身をかわしつつ、男の腕を取っていた。そのまま、捻り上げる。

「あたたたた！ は、離せ！」
カラン。

小刀が、男の手から落ちた。

「この、アホンダラが！」

そのまま、見事な背負い投げ。
ドスン！

「ぐへっ！」

男は目を向いて、気絶した。

「うーん、やるねえ」

「相当な遣い手ですね。戦場で会いたくない類の方です」
朱然と明命に、全くの同感。
得物を持たせたら、相当に厄介な相手だろう。

「ん？」

あれ、眼が合ってしまった。

今更素知らぬ顔も出来ずに、サラシ女を見つめ返す。

「なあなあ、アンタ」

って、近づいてきたよ。

「あたし？」

「せや。アンタ、なかなか腕が立ちそうやな」

「はは、そう見える？」

「そらそうや。隣の娘らもな」

あたしはそっと、明命の手を握る。

そして、小声で囁いた。

「お姉さま」

「焦るな。明命の敵う相手じゃない」

「……わかりました」

気持ちにはわかるが、相手が誰だかわからない以上、軽挙妄動は控えないと。

「そないな顔せんといてえな。ウチはただ、強い奴に興味があるだけや」

言葉に嘘は感じられない。

「アンタら、これから用事でもあるんか？」

「ああ。知り合いを訪ねていく最中なんだ」

「そうかあ。残念やな、酒でも付き合おうて貰おうか思ったのに」

「はは、光栄だね。ところで、アンタは？」

「あ、せやせや。ウチ、姓は張、名は遼、字は文遠や。よろしゅうな」

張遼！？

張遼っていや、曹操麾下の名将じゃないか。

……あれ、でもこの時期は曹操じゃなく、別の君主に仕えていたような。

うーん、誰だっけ……って。

さつき、明命が言っていたじゃんか、董卓の武官だって。うわー、こりゃマズいわ。

「で、アンタらは？　ウチにだけ名乗らせるつもりか？」

「い、いや。あたしは姓が美綴、名は綾子、字はない。で、こっちが姓が姜、名が維、字は幼平。もう一人は姓が朱、名は然、字が子義だ」

「へえ、字がないんか、珍しいやっちな」

明命は名前を知られている可能性があるから、思いつきで偽名にした。

姜維はもっと後の時代の人物だし、張遼とは縁がなかった筈だからな。

……姜維の字が思いつかなかったので、そこだけはそのまんまだが。

「なあなあ。その、知り合いの用事済んだら、ウチのところに顔見せてんか？ アンタら、なんかおもしろそうやし」

う、ますます興味を煽ったか、これ？

「し、しかしなあ。会ったばかりの人の誘いというのも……」

「ああ、構わへんって。ウチ、これでも董卓の将なんやで」
知ってるけどね。

うゝ、どうやったら断れるんだ？

「張遼様！」

と、向こうから董卓軍の兵士が駆けてきた。

「どないしたん？」

「ハッ！ 賈駆様がお呼びです。至急お戻りを」

「詠が？ しゃあない、すぐに戻る言うといてや」

「では、これにて」

慌ただしく兵が去って行く。

「あゝあ、もうちょっと話したかったんやけど、しゃあないわ。ほな、必ず連絡してや、城門でウチの名前言うてもろうたらええから」
そう言い残し、張遼は立ち去った。

「ふう……」

「はあゝ」

「ふふ、さすがの美綴様も周泰様も、形無しだね」

朱然は何故か楽しそうだ。

「あのなあ。あたしはああいいうやり取りは苦手なんだよ。ましてや、今回の場合は余計に」

「それはわかるけどね。さて、またおかしな事に巻き込まれないうちに、宿を探そうよ」

「……ああ、賛成だ」

なんか、ドッと疲れた。

しかし張遼、イメージしていたよりも捌けた感じだな。

今は無理だけど、もし味方になる事があれば……いいなあ。

無事に宿を取り、旅装を解いてから再び街へと出た。
明命は、城の様子を探ってくるといい、別行動を取っている。

朱然は特にする事もないので、まだ見ていないところを案内する、
と言う事であたしと一緒だ。

「この辺りは職人が多く住んでいるんだ。ホラ、聞こえるだろう？」
カン、カン、カン。

ギーコ、ギーコ。

確かに、多種多様な音がする。

「職人も、何事もなかったように仕事をしている、か」

「そのようだね。仕事をしているという事は、まだ落ち着いている
証拠。董卓軍は、思っている以上に民の信頼を得ているのかもね」
となると、あの噂はますます怪しい。

ホントに暴政を敷いているのなら、こうした人々は逃げ出すか、
もしくはやる気を失っている筈なのに、それがない。

「ワンワン！」

あれ、犬か？

一匹の犬が、いつの間にか足元にいた。
パタパタと尻尾を振っている。

……う、ヤバイ……めっちゃ、可愛い。

あたしが屈むと、ベロベロと顔を舐め始めた。

「こ、こら！ やめろって」

本気で嫌な訳じゃないんだけど、ビックリしたので、つい。
でも、犬は止めるつもりはないらしい。

「ハッハッハッ」

「もう、コイツったら」

「……楽しそうだね」

朱然のツツコミが入った。

はい、楽しいです、ええ。

「……セキト」

「ワンッ！」

声がしたので振り向くと、赤毛の女の子が、いた。肩の刺青と、触角みたいに髪の毛の一部が特徴的。ゾクッ。

あたしは背筋に寒気を感じた。

……この娘から、物凄いオーラを感じる。

殺気はないけど、そばにただでこの威圧感。張遼も相当なものだったけど、その比じゃない。

……何者だ、この娘？

「……セキト、懷いてる」

「え？」

「……お前、凄い」

そ、そうなのか？

でも、この犬が人懐っこいだけじゃないのかな。

「そうか、この犬、セキト、って名前なんだな？」

コクッ。

女の子が頷く。

「……名前」

「名前？」

「……名前、教えて」

「あたしの？」

コクッ。

何だか、掴みどころのない娘だけど……この威圧感、素直に応えていいんだろうか？

「えっと、あたしは……」

「……………」

う……。

偽名を名乗るつもりだったけど、プレッシャーがそれを許さない。……まあ、あたしの名前なら、大丈夫かな。

「美綴綾子だ」

「……綾子？」

「あ、ああ」

いきなり名で呼ばれたし。

まあ、あたしはどっちでも気にしないけど。

「で、アンタは？」

女の子が答えようとした時。

「呂布殿〜！ どこですか〜！」

おや、誰かを探しているのかな？

シャオぐらいの娘が、叫びながら近づいてきた。

「あ、呂布殿。見つけたのです」

と、目の前の女の子のところへ。

……って、呂布って言わなかったか、この娘？

呂布って……あの呂布だよな？

赤兎馬に乗って、董卓を殺したり裏切りを繰り返した、天下無双の猛将。

……それが、この娘？

でも、このプレッシャー……成程、それなら納得だ。

「おお、探しましたぞ」

「……ちんきゅー」

ちんきゅー……陳宮か？

おいおい、董卓軍の文武の柱が目の前に、ってどんなお約束だよ！

「ねねで良いのです。こんなところで、何をしていたのですか」

「……セクト、探してた」

「董卓様がお呼びなのです。ねねと一緒に戻って欲しいのです」

「……綾子、一緒に来る」

「……へ？」

何を言い出すんだ、この子は？

「な、何を仰せになるのですか、呂布殿！ このような、得体のしれない輩を」

「……綾子、セクト見つけてくれた。だから、お礼する」

「呂布殿」

陳宮は困っている。

まあ、あたしもはいそうですか、とついて行く訳にも行かないし。「あたしは何もしてないんだ。だから、気にしないでくれ」フルフル。

呂布は、あたしの腕を掴んで離そうとしない。振り切れ……ないな。

「……綾子、いい奴。家族に、会わせたい」家族って何だ家族って。

って、引っ張るなって！

「りよ、呂布殿！」

「……ダメ？」

と、呂布は眼をうるうる。

……な、何だこの破壊力は！

こんな眼でお願いされたら、ダメって言えないじゃないか！「やれやれ、どうやら、行くしかないようだね。美綴様。ボクは、どうしたらいい？」

肩を竦める朱然に向かって、

「と、とりあえず宿に戻っていてくれ。明命が戻ってくるだろうか」

「うん、わかったよ。じゃ、待ってるから」

「……じゃ、行く」

「呂布殿！ お待ち下され」

そのまま、引きずられていくあたし。

……これ、とってもピンチじゃないのか？

「な、なあ、呂布？」

「……恋」

「……は？」

「……恋でいい」

な、なんかいきなり真名を預けられましたよ？

あたしはますます混乱したまま、城まで来てしまった。
ど、どうしよう……。。

二十二 (後書き)

今更ですが、PSP版を入手しました。

ネタの補充&食い違い撲滅のため、しばらく平行して進めたいと思います。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

〈二十四〉（前書き）

累計PVが100,000を突破しました。

ノリと勢い8割で書いている拙作にお付き合いいただき、感謝の念に堪えません。

いろいろとご批判もあるかと思いますが、こういう作品でもよろしければ引き続き、お付き合いの程お願い致します。

二十四

「ワンワン！」

「ニャーオ」

「チチチチチ」

家族って、そういう事だったのね。

呂布の屋敷に案内され、出迎えたのは多様多様な動物たち。

しかしまあ、よくもこれだけ飼えるモンだ。

そりゃ、呂布ほどの将になれば、それなりの給金は貰っているだろうけど。

エサの世話とか、まさか呂布一人でやってるのか？

「お前は誰なのです！」

膨れっ面で、陳宮はあたしを睨み続けている。

まあ、迫力は全くないので怖くはないんだけど。

「誰、って言われてもなあ。あたしはあたしだけど？」

「答えになってないのです！ 呂布殿を騙して、何を企んでいるのですか！」

「ハア。どこをどうすれば、あのやり取りで騙す、って解釈ができるんだ？」

「ちんきゅー。綾子、いい奴」

「呂布殿ー！ お優しいのも程がありますぞ」

ホント、呂布には甘いようだなあ。

しかしまあ、怪しまれても仕方ないというか。

あまり怪しまれると、ホントにヤバいんだけど……。

「……食べる？」

あたしのそんな心中はお構いなしに、呂布があたしの前に。

どこから持ってきたのか、ほかほかの肉まんを手になっている。

……量が半端じゃないというか、その抱えきれない程の袋の中身、まさか全部……か？

「……………」

いや、黙って見つめられても、リアクションに困るんだけど。

「じ、じゃあ、少し貰おうかな？」

「むう、この上に呂布殿からたかろうとは。食らえ、ちんきゅーき
ー！ーつく！」

いきなり、陳宮が跳び蹴りを浴びてきた。

……まあ、やっぱり迫力がないというか。

俊敏というには程遠い動きだったので、思わず足を掴んでしまう。

「は、放せなのです！」

「あ、いや……。呂布、これどうすりゃいい？」

「……綾子、いじめたらダメ」

「りよ、呂布殿お！」

呂布は陳宮を掴むと、そのまま窓の外へ。

ドボン！

「……なあ。なんか、いい音がしたんだけど」

「……？」

小首を傾げているけど……いいのか、これ？

「……肉まん。温かいうちが、美味しい」

「はは、そうだな。じゃあ」

1個受け取り、頬張る。

お、餡が絶妙だな、これ。

中華街で食った奴よりも、美味しいかも。

「美味い」

「……よかった」

あまり表情が変わらないのかと思っていたけど、微妙に嬉しそう
……だよな？

「あ、呂布も食べなって。温かいうちに」

「……ん」

はむっ。

もきゅ、もきゅ。

……と、擬音が聞こえてきそうな風情で食べ始めた。
それも、結構なペースで。

……ん？

ペースもそうだが、食べる仕草が……なんか、ハムスターみたいな。

……か、可愛い？

ぶるぶる、そんな筈はないって。

だって、あの呂布だぞ？

関羽と張飛が二人がかりでかかっても倒せず、許ちょと典韋は子供のようにあしらわれた猛将なんだ。

可愛い筈が……。

筈が……。

「……？」

不思議そうに、あたしを見る……首を傾げながら。

判決、被告人は可愛い！

よって無罪、いやむしろ原告有罪！

……落ち着けあたし、錯乱し過ぎだ。

モキュ、モキュ。

黙々と食べ続ける呂布。

だあああ、可愛い、癒される！

「おい、呂布。何をしているのだ？」

際どい鎧姿の将が、顔を覗かせた。

……董卓軍は、露出狂の集団か、おい？

「……かゆー」

「む？ 誰だ、貴様は？」

露出狂は、あたしを見て表情を険しくする。

「誰って……。呂布に連れて来られた、しがない一般人だけど？」

「怪しいな。おおかた、どこその間諜であろう！」

おや、案外鋭いな。

……かゆー、って事は、あの華雄なんだろうけど。

どうなんだろう、やっぱり関羽に斬られるのか、この人？

「……綾子、怪しくない。恋の、友達」

「何を言っている！ このような時に、怪しい奴を城内に入れるなど！」

と、バカでかい斧を構えた。

「呂布はいざ知らず、私の目は誤魔化せんぞ。ハアア！」

ブオン！

「うおっ、危ねえだろ！」

「ほお、それを避けるか」

「避けないと死ぬだろ、あたし！」

「当然だ。殺そうとしているのだからな！」

ブン！

食らったらマジで真つ二つだぞ、ありや。

ただ、破壊力はあるそうだが、その分大振りか？

なら、やりようがあるか。

できるなら、ここで剣を抜かずに済ませたいしな。

ブオン、ブオン！

その間にも、華雄はますますいきり立つ。

「ちょこまかちょこまかと！ それでも貴様、武人か！」

あたし、一言も武人なんて名乗っちゃいないぜ？

……あ、もしかして、この剣が原因かな。

「うーん、まぐれ当たりが怖いし、そろそろケリをつけさせて貰うか。」

「でやああああっ！」

ブン！

華雄が斧を振り下ろした瞬間、あたしは奴の背後に回った。

「なにっ！」

動きには気づいたようだけど、もう遅い。

足払いをかけ、華雄を転倒させた。

そして、腹に正拳突き。

「ぐげっ！」

叫び声を上げて、どうにか気絶してくれた。
ふう、やれやれ。

「……お前。強い」

「うわっ！」

呂布が、ジーツとあたしを見ている。

「そ、そうかなあ。あたしも必死だったし」
フルフル。

黙って頭を振られてしまったし。

「……華雄も、強い。でも、綾子には敵わない」

「そりゃ、過大評価って奴だぜ？」

「……そんな事ない」

うー、そんな真っ直ぐな眼で見られると、反応に困るんだけどなあ。
ボタン！

と、全身ずぶ濡れの生物が、戸を開けて入ってきた。

さっきいい音がしたけど、やっぱり池か何かに落ちたな、陳宮は。

「やっぱりお前は怪しいのです！」

「……ちんきゅー」

「呂布殿がいくらお許しになられても、やはりこの陳宮は認められないのです！」

ガーツと両手を挙げてまくし立てる。

……迫力がないというか、これはこれで可愛いとしか言えないけど。

さて、そろそろ逃げるとするか。

華雄に目でも覚まされたら厄介だしな。

「ちんきゅー、すぺしゃるきー……っく！」

あれだけずぶ濡れのまま、よくまあ跳べる事だ。
ひらりとかわしたあたし、そのまま外に出る。

「待つのです！」

「イヤだね。じゃあな！」

「こらー！」

追いかけてくるが、追いつかれる訳もない。

しばらく走っているうちに、姿も見えなくなった。

……さて。

出口はどっちだ……えーと。

……迷った、もしかなくても？

入るときは呂布に引き摺られてだったし、初めて来た城じゃ、勝手がわかる訳もない。

誰かに聞く、って言っても……そうもいかない。

ケータイが使えりゃ、誰かに連絡も取れるんだろうけどさ。

参ったな……。

サク、サク、サク。

と、足音が聞こえてきた。

これ、ヤバイよな、確実に。

どう見ても不審者だろうし、そうでなくても誰何されたら危険だ。えーと、隠れられそうな場所は……。

と、とりあえず手近な場所に隠れよう！

目に付いたドアを開け、咄嗟に飛び込んだ。

「ど、どなたですか？」

「いっ？」

そこは厨房だったようで、小さな女の子が驚いてあたしを見ている。

「あ、ああ、すまない。道に迷って」

「道に……？」

女の子は、訝しそうだ。

にしても、綺麗というか、清楚、という言葉がぴったりくる娘だなあ。

それに、どこことなく貫禄も……誰だろう？

「月」

げ、誰か来る？

ど、どうする？

「その卓の下に入っていて下さい」

と、女の子。

「え？」

「説明は後です。さ、早く」

「あ、ああ。すまん！」

とにかく、指示されたテーブルの下へ隠れた。

「詠ちゃん。何か用？」

「あ、ここにいたの？」

また、別の女の子の声。

「うん。久々に、ちょっとお茶菓子でも作りたくって」

「そう……。なんかねが、不審者がいるって騒ぎ回っているみたいなの。どうやら、ここは大丈夫みたいね」

「不審者？」

「ボクも詳しい事はわからないけど。ただ、時期が時期だから、どこかの間諜かも知れない。兵士には、警戒を強めるようになっておくけど」

「うん、お願いね。詠ちゃん」

「じゃ、月も早めに部屋に戻ってよ」

タッタッタ。

そして、足音が遠ざかっていく。

「もういいですよ」

月、と呼ばれた娘は、そう言ってテーブルの下を覗いた。

「ふう。けど、どうしてあたしを助けたんだ？」

「少なくとも、悪い方には見えませんでしたから」

「そ、そう。でも、ここに長居したらアンタにも迷惑がかかる。城を出たいんだけど、どうすればいい？」

「それでしたら、私のご案内します」

「え？ いいの？」

「はい」

女の子はニツコリと笑う。

とにかく、あたしに害意はないみたいだな。

「……じゃあ、頼む」

「わかりました。では、ついてきて下さい」

女の子は、迷う事なく城門まで案内してくれた。

城の侍女か何かか、と思っていたんだけど。

……すれ違う兵士が、皆頭を下げていくのは何故だ？

それに、あたしを見て訝しげな顔をする兵士もいたけど、女の子は何か言うとも黙って去って行くし。

……この娘、誰なんだ？

「ここまで来れば大丈夫でしょう」

ちなみに、城門もスルーパス。

「あ、ありがとうよ。そう言えば、名乗ってなかったな。あたし、姓は美綴、名は綾子。字はない」

「では、私も自己紹介します。姓が董、名が卓、字が仲穎です」

「……は？ 今、董卓……って言わなかった？」

「はい？ 私の名前は、確かに董卓ですけど？」

と、彼女は首を傾げた。

ハア？

あの暴虐非道の董卓が、この娘だって？

あ、あり得ん！

だって董卓って、残忍で、強欲で、粗暴で……。

けど、目の前の可憐な娘は、その欠片も感じさせないぞ？

「あのさ。一つだけ、聞かせて欲しい」

「何でしょうか？」

「董卓は、何を志している？」

あたしの問いかけに、董卓はあたしを正面から見据えて答える。

「私は、無力です。でも、私を慕ってくれる民がいる限り、これを支えたいと思います。みんなが、それで笑顔になれるのなら」

迷いも、ためらいもない言葉。

これでウソだって言う奴がいるのなら、そいつは一度、聴力検査を受けた方がいい。

「……今の都は、少なくともそうなってるな。あたしが見る限りは、だけどさ」

「美綴さん、ありがとうございます」

「あと、もう一つだけ。何故、あたしを助けたんだ？」

「その事ですか」

董卓は微笑んで、

「確かに、あなたは見慣れないお方です。……でも、悪い人にはどうしても見えませんから」

「そ、それだけ？」

「はい」

うわゝ、めっさいい娘じゃんか。

誰だよ、董卓が朝廷をないがしろにしているだの、暴政を敷いているだのぬかす奴は！

「……そ、そうか。ありがとうな」

あたしは、無意識に彼女の頭を撫でていた。

「へうゝ」

……照れてる。

つか、何してるんだよ、あたし！

「あ、ご、ゴメン！ つい、手が」

「い、いえ……」

い、いかん！

この娘もヤバ過ぎる可愛さだ！

「月ゝ。おらへんかゝ？」

……この声は……。

ヤバ、張遼じゃないか？

「じ、じゃあ、またな。董卓」

「え？ はい、またお会いしましょう」
小さく手を振る董卓。

……断言しよう、この娘は悪くない。
走りながら、あたしは確信を深めた。

「綾子お姉さま」

建物の影から、明命が現れた。

「どうしたのですか。城から出てきたようでしたが」

「あ、ああ。いろいろあってな。宿で話すから、とりあえず戻ろうぜ？」

「はいっ！」

さて、どう報告したものかな……この事実を。

二十五

「そうか。やはり、噂とは大違いだったのだな」

「だとすると、今回のこの連合軍……。まずまず胡散臭いわね」

洛陽を出たあたし達は、無事に雪蓮達に合流。

連合軍は東から洛陽に迫るため、手前にはシ水関と虎牢関という、難攻不落の関があるとの事。

なので、今はまだ、諸侯の終結待ち、という状態らしい。

あたし達の報告に、雪蓮と冥琳は難しい顔をしている。

「少ししか話をしていないけど、董卓も、呂布も、張遼も。非道の欠片も見えなかった」

「相手の将の情報は、たとえ僅かでも金玉きんぎょくに値するからの。全く、こやつは大した奴じゃ」

バシバシバシ。

だから祭さん、もう少し手加減して叩いて下さいってば。

肩が外れそうなぐらい、馬鹿力つてのもなあ。

「明命の情報と照合するに。ふむ、そう容易くは勝てないと見ていいだろうな」

「で、どうするの？ 相手の分析もいいけど、わたし達も名を上げなくっちゃいけないし」

「ふむ……。まずは、シ水関を担当する諸侯が、誰になるか、だな。それにより、我らの行動も変わってくる」

「申し上げます！ 袁紹様より使者が参りました」

と、兵士が天幕にやってきた。

「通して」

「ハッ！」

入れ替わりに入ってきた兵士。

「……どうして、金ぴかの鎧着てるんだ？」

「我が主、袁紹よりの言伝をお伝えします。これより、軍議を執り

行きますので、我が本陣へとお運び願いたいと」

「承知した。すぐに参上すると、袁紹殿へお伝えを」

「ははっ！」

伝令が立ち去った後、雪蓮は大きなため息を一つ。

「どうしたのさ？」

「いや、めんどくさいなーって思っで。腹の探り合いでしかない場
に、行きたくないのよね」

「雪蓮。あなたが、孫呉の代表なのよ？ 好き嫌いがまかり通る訳
ないって事ぐらい、わかってるだろう？」

「わかってるわよ。でも、気が進まないものは進まないの。ね、冥
琳行ってきた？」

「同行するのなら構わんが、私が代表として行くのはどうかと思う
ぞ？」

「ぶー、それぐらいならお酒でも飲んでいた方がずっといいのに」
子供か、アンタは。

あたしと霞、思い切り呆れている。

「なら、軍議が終わった後に酒なら認めよう」

「えっ、ホント？」

途端に、雪蓮の表情が変わる。

「いいのか？」

「なに、構わんさ。戦闘が起こるのは、早くても明日以降になるだ
ろうからな」

「やった♪ なら、ちゃっちゃと行ってきましたか。あ、綾子も一緒
に来てね」

「……は？」

なんで、そういう展開になる？

「曹操の事だから、きつとあの天の御遣い、とやらを連れてくるで
しょう。それなら、わたしも対抗しないとね」

「いや、その理屈はおかしいって」

「それに、綾子の人を見る眼、かなりいいモノがあるじゃない。董

卓軍の将にしたってそうだったし、その眼で、諸侯を観察して欲しいわね」

「一理あるな。それに、綾子なら腕も立つ、警護としてももってこいかも知れぬの」

「そうだな。雪蓮と祭殿の仰る通りでしょう。綾子、頼めるか？」

一同の視線が、あたしに集まる。

「……ハア、わかったよ。何とかやってみる」

「うん、よろしくね」

……もう、言い返すのもバカバカしくなってきたな。

「失礼します。孫策様をお連れしました」

「お入りになって」

巨大な天幕の中に通された。

諸侯が既に勢揃いして、あたし達を見ていた。

うーん、歴史に名を残す英雄英傑大集合か。

曹操以外は、見たことのない顔ばかりだけど、皆一癖もふた癖もありそうだ。

……あれ、北郷は連れてきていないのか。

代わりに、ネコミミフードを被った、小さな娘が一緒のようだ。

「孫策さんで最後ですよですわね」

と、ド派手な鎧を着た、金髪縦ロールの女性が座るように促した。

「雪蓮。あれ、誰だ？」

「あれが袁紹よ。まあ、バカだけどね」

小声で会話しながら、指示された席へ。

「さて、皆さんよくお集まりいただきましたわね。では、僭越ながら、名家であるこのわたくし、袁本初が、軍議を進めさせていただきますわ」

「それで、作戦はどうするのか、それをまずは確認したいわね。麗羽？」

と、曹操。

ありゃ、真名を呼んでいるという事は、二人は親しいのかな？

「華琳さん。もちろんですわ」

「じゃ、それを聞かせて貰える？」

「それは、雄々しく、華麗に、突撃、粉碎、勝利！　ですわ」

……はい？

それ、作戦じゃなくって……。

案の定、袁紹以外の全員が固まっている、というか呆れているんだけど？

「……麗羽。あのシ水関と虎牢関を抜かなければ、洛陽には辿り着けないのよ？　しかも、董卓軍には驍将、勇将が揃っている」

「おっっほっほっほ、華琳さんともあろうお方が、随分と弱気なのではなくって？　だから、そのように胸が育たないのですわ」
「貴女みたいに、身体にばかり栄養が回って、頭の中が残念な人に言われたくないわ」

「キーツ、なんですってえ！」

うわー、低レベルの争い始めちゃってるよ。

「あのさ。まずは、先鋒を決めないか？　その部隊に、シ水関攻略を任せる、という事で」

と、見かねたのか、まともな意見を言う人登場。

赤い髪のポニーテール、この人もなかなかの武人のようだ。

「そうね。私も賛成だわ」

「フン！　伯珪さんに免じて、この場合は許して差し上げますわ！」

「……で、どうする？」

「そうですわね……」

と、袁紹があたし達で目を止めた。

「孫策さんに、お任せしましょうか」

「いいけど、どうしてわたしなのかな？」

「あーら、美羽さんを追い出し、英雄と祭り上げられている孫策さんなら、パパーッと片付けてしまえるんじゃないかと思ひまして」
「やっぱりか。」

いくら犬猿の仲とは言え、彼女の従姉妹を追放したのはこの雪蓮。何らかの形で意趣返しがあるんじゃないか、そう思っただけだ。

「ま、待って下さい！」

誰かが会話を割り込んできた。

「どなたですか？」

「は、はい！ 平原の相、劉備と言います！ 孫策さんだけの部隊で、あのシ水関に挑め、と仰るんですか？」

「ええ、勿論ですわ。あれだけお強いんですもの、董卓軍など鎧袖一触でしょうし」

「で、でも、兵数が違います！ 無茶です！」

「あゝら。なら、あなたも手助けして差し上げればよろしいのではな

「……え？」

「ですから、劉備さん、あなたも先鋒に加わってはいかが、と言っているのですけど？」

「そ、そんな……。私のところも、兵数は……」

「兵数が足りない、と仰ったのはあなたではありませんか。なら、これで話は決まりですわね」

「……………」

劉備は俯いてしまった。

諸侯は……誰も助け船など、出そうともしないか。

そりゃ、変に意見を出せば、被害を被るのはわかりきってるしなあ。

「では、先鋒は孫策軍と劉備軍で決定ね。陣地に戻って、準備しましょう」

曹操の言葉で、諸侯は席を立った。

「ちょ、ちょっとお待ちなさい！」

「何よ麗羽。まだ、何かあるの？」

「何かある、じゃございません事よ。この連合軍の、総大将がまだ

ですわ」

「総大将……？」

「そう！ この華麗なる、連合軍の頂点に立つ者が。まあ、力があり、名家であり、美しい方が務めるべきだと思いますけど」

つまり、自分がやりたい、って事だろ？

そう言えばいいのに、何を勿体ぶってんだか。

「もう、袁紹がやればいいんじゃない？ 他のみんなはどう？」

あっさりと言ってしまふ雪蓮。

確かに、時間をかけて議論する意味のない議題だけださ。

「私も、それでいいわ」

「異論はない」

「わ、私も……」

反対意見はない、というよりも、出ようがない。

「で、では、仕方ありませんわね。この名家、華麗なるわたくし、

袁本初が……」

最後まで聞くことをなく、そろそろ天幕を出て行く諸侯。

「お、お待ちなさい！」

なんか袁紹が叫んでいるけど、アホらしくて誰も聞いちゃいない。

「久しぶりね。孫策、それに美綴」

袁紹の陣を出たところで、曹操が話しかけてきた。

「ええ。寿春以来かしらね」

「貴女の活躍は、耳にしているわ。やはり、流石は江東の虎の娘ね」
そして、曹操は私に視線を向けた。

「美綴、貴女の事も報告を受けているわ」

「そ、そっか。あたしは、大した事しじゃないけどな」

「ふふ、謙遜かしら？」

尊大に笑ってみせてから、

「シ水関攻略、頼むわね。総大将がアレだから、貴女達をアテにしているわ」

「そうね。孫家の武勇、見せてあげるわ」

「ええ、楽しみにしているわ。それじゃ、またね」
立ち去っていく曹操。

「何か、意図があった訳じゃないさそうね。綾子、どう思う？」

「あたしも賛成だ。……ただ、油断はできないけどな」

「そうね。彼女は、危険ね」

雪蓮と二人、自陣へと戻った。

「先鋒を押しつけられたか」

「ええ。袁術ちゃんの事、何事もない、とは思わなかったけどね」
流石に、面と向かって非を鳴らす事はしなかったけど、雪蓮も同じ事を思ったようだ。

「しかし、名を上げる好機とも言える。なるべく被害を抑え、かつ目の覚めるような戦果も必要か……」

「何とも虫のいい事だけど、成し遂げない訳にはいかないわね。ここで敗退すれば、名声を得られないだけじゃない。折角手に入れた呉だって、まとまりを失うわ」

「ままならぬものじゃな、つくづく」

難しいモンだな、ホント。

「明命。シ水関の情報は？」

「はっ。率いる将は張遼と華雄。兵数はおよそ十万です」

うへー、全軍でかかってでも五倍か。

こりゃ、真っ正面から当たったら勝目ないんじゃないのか？

「華雄って、母様がこてんぱんにやつつけた、ってあの華雄？なら、楽勝なんじゃないの？」

「確かに、堅殿が打ち破った相手ではある。じゃが、武人としては名の知れた相手でもある。甘く見ぬ方がよいぞ、策殿」

「うーん、そうかなあ。でも、祭がそう言うなら間違いはないわよね」

どちらにせよ、正攻法で行くしかない……か。

「冥琳。背後から攻めるとか、出来ないのか？」

「無理だ。あのように切り立った断崖絶壁を塞ぐように建てられた関だ。通じる道もないし、だからこそ難攻不落、と言われているんだ」

「そうか……」

となれば、歴史同様、華雄を引っ張り出すしかない。
でも華雄だって一軍の将、そう簡単に……いや、アレなら。

「綾子。何か、思いついたようだな」

「いや、思いつくって程じゃないけど。アイツ、猪だから挑発すれば出て来ないか？」

「なるほどな。だが、出てこない場合はどうする？」

「それはないような気がする。あの調子だと。それに、聞けば雪蓮とも因縁があるみたいだし」

「ま、それが最良の策というところか」

冥琳が、結論づけるように言う。

実際、これ以外の作戦も……ないよなあ。

「申し上げます。劉備軍より使者が参りました。劉備様が、お目通りを願いたい、と。如何しましょうか」

狙い澄ましたようなタイミングだな。

「劉備本人が来たのね？」

「はっ！」

「いいわ、通しなさい」

「改めまして初めまして。劉備、字は玄德です」

「我が名は関羽、字は雲長です」

軍議の間でも見かけた、ポワポワした感じの娘が劉備。

で、この見事な黒髪ロングの娘が関羽らしい。

……うーん、『美髯公』ってよりも、『美髪公』だよなあ、どう見ても。

「周瑜、字は公瑾です」

「儂は黄蓋、字は公覆じゃ。見知りおき願おう」

「あたしは美綴綾子。字はなし」

と、劉備が眼を丸くして、関羽は訝しそうにあたしを見る。

ま、もう慣れっこだな、この反応は。

「さて、用件はシ水関攻めの事ね？」

「はい。まさか、あんな事になるとは」

悄気返っているな。

「わたし達は知ってると思うけど袁紹の従姉妹、袁術に従わされていたわ。でも、今はこうして自由を得たわ。その経緯は知っているわね？」

「はい」

「もともと、あの二人が仲良しとは程遠いのは知っていたし、実際に袁術を打ち倒しても、袁紹からは何も言ってこなかった。けど、いくら仲違いしているとは言っても、あの家柄自慢の袁紹が何もしないとは思わなかった。だから、今回の処置はむしろ想定の範囲内」

「そ、そうですよね」

「確かに厳しいのは事実だけど。でもね劉備。あなたのした事は、悪いけど単純に考えれば無意味よ」

「何だと貴様！ 我が主が黙っているのをいい事に、その言い方はなんだ！」

まさに、怒髪天を衝く。

そんな感じで、関羽が怒りを爆発させた。

「あら？ どういうつもりかしら？」

「どうもこうもない！ 目の前で我が主が侮辱されているのだ、黙っておられるか！」

「ふん」

雪蓮は、冷たい眼で関羽を見る。

「関羽。あなた、いつから主同士の会話に口を挟める立場になったの？」

「……ぐ。し、しかし！」

「しかし何もない！ 下がれ下郎！」

いっになく、厳しい雪蓮の態度。

……でも、これが出来るからこそ、雪蓮は主として皆に認められる存在なんだろうな。

「愛紗ちゃん。控えて」

「……わ、わかりました。ご無礼の程、お許しを」

「わかったわ。けど、次はないわよ？ 劉備も、いいわね」

「は、はい。すみません……」

とりあえず、二人が謝罪した事で、一応その場は収まった。

関羽はまだ悔しそうだけど、それだけ主君想い、って事だろう。義に厚いというのは、どうやら変わらないみたいだな。

「さて。何故、意味がないって言ったか。劉備、あなたはわかる？」

「……私達が率いている兵の数が少なくて、焼け石に水……だからですか？」

「それもあるけどね。でも、一番の理由は違うわ」

「ええと……何でしょうか？」

「……あなたの兵は確かに少ない。けど、あなたを慕ってついてきている、貴重な戦力なのでしょう？ あなたの後先を考えない発言で、その者たちを無為に死に迫いやる。そうは考えなかった？」

「……でも、私達は」

劉備が言いかけるのを、雪蓮は遮った。

「そう。あなた達だって、連合軍に参加したのだから名を上げたい。それ自体は間違っていないけど。でも、あの時のあなたはそうではなかった。違う？」

「……そうです。私、孫策さんが一人だけ酷い目に遭ってしまう、そう思って……つい」

「私が言いたいのはそのこよ。ちゃんとした裏打ちもない状態で、しかも兵を無駄死にさせる。あなたのした事は、無意味もいいところなの」

「……………」

「あなたも、人の上に立つ人間なら、ついてくる者をどうするか、もっと意識を持つべきね。私が言いたいのは、それだけよ」

「……余計な事、言っちゃって済みませんでした。私……」

と、天幕を出ようとする劉備。

「待ちなさい。仮にも、連合軍総大将から先鋒に任命されたのだから、どう戦うべきかを考えないといけないわよ」

「で、ですが……」

「一度決まった事は覆らない。だったら、どう動くべきか、最善の方法を考えるのも、主たる者の務めよ」

「孫策さん。私、どうしたらいいか……」

「自分で考えなさい。……と言いたいところだけど、今回だけは助言するわ。僅かでも兵が増えるのは確かに有り難いしね。じゃ冥琳、後よろしくね」

「わかった。さて、劉備殿。シ水関には、張遼と華雄が指揮を執り、立て籠もっています。ここまではよろしいですね？」

劉備はコクリ、と頷く。

「ただ、立て籠もっているまま攻めれば、こちらの被害も大きくなります。そこで、関から引っ張り出します」

「え？ どうやって？」

「張遼はともかく、華雄は猪武者だと聞いています。これを挑発し、釣り上げます」

「でも、そんなに上手く行くでしょうか？」

「そこは、何とかしましょう。そして、劉備殿は、華雄のおびき出しに成功した後、一緒に出てくるであろう張遼の部隊を、横撃していただきたいのです」

「……わかりました。大まかな作戦は、それでいいんですね？」

「ええ。細かいところは、追って打ち合わせしましょう。あなたの軍にも、優秀な軍師がいると聞いていますから」

ん？

劉備軍の軍師って……この時期、そんな人いたっけか？

まあ、冥琳が言ってるんだから、デマではないんだろうけど。

「……はい。では、その作戦で行きましょう。今日のところは、これで失礼します」

劉備は落ち込んだまま、そして関羽はあたし達を一睨みして、天幕から出て行った。

「やれやれ。先が思いやられるわね」

「そう言うな雪蓮。あれでも、関羽、張飛といった豪傑達が従っているのだ。戦力として当てになって貰わねば、な」

二人の会話を聞きながら、あたしは感慨に耽っていた。

孫策に、曹操、そして劉備。

三国志の英傑全てが、ここに揃っているんだ。

……人の命を奪う事にはまだ慣れないけど、明日はきっと壮絶な戦いになるんだろう。

身震いが、してきたな。

二十五 (後書き)

劉備の扱いがあんまりになってしまいました。原作と違った展開の都合上、こうなっています。

蜀ファンの方には申し訳ありませんが……。

二十六

その夜。

「美綴様。朱然と名乗る者が来ております」

「ああ、通してくれるかな？」

「ハッ！」

兵士に連れられ、朱然が天幕に入ってきた。

「ふゝん、この娘が朱然？」

「……美綴様。この方は？」

あたしの隣にいる、杯片手の雪蓮に、戸惑っているようだ。

冷静な朱然でも、こういう事があるんだな。

「わたしは、孫伯符。よろしくね」

「こ、これは失礼致しました。私は朱然、字を義封と申します」

「綾子から聞いているわ。綾子についていく、そう宣言したそうね？」

「はい。美綴様には勝負にも勝てず、更に命を助けていただきまし
たから」

朱然、一応目上には敬語使えるんだな。

……じゃあ、あたしは目上じゃないって事か……まあ、いいけど
さ。

「そう。でも、綾子はどこかの太守って訳でもないし、あなたを雇
うのも無理だと思う。だから、わたしに仕えて貰う事になるけど、
それでいいのね？」

「勿論です。孫策様、よろしく願います」

「ええ、こちらこそよろしくね」

そう言つて、雪蓮はあたしを見る。

「ふふ、良さそうな娘じゃない。きっと、将来有望ね」

「……酒飲みながらじゃ、説得力がないんだけどな」

「ぶー、いいじゃないの。お酒は、人生の友ですもの」

それはいいけど、朱然が呆れているぞ……。

「ふう、型破りなお方だね」

朱然は、いつも通りに戻っていた。

この方が、あたしもじっくりくるな。

ちなみに雪蓮は、いつも通り冥琳に見つかり、自分の天幕に連れ戻されていた。

本人曰く、約束を果たさせて貰っただけ、だそうだけど……まあ、冥琳に通じる訳もないし。

「確かにそんな面もある。でも、王者としての威厳と才能を持ち合わせた、凄い人だよ」

「そうだね。ボクも、それはちょっと感じた」

「ところで。調査の結果を聞かせて欲しい」

「あ、そうだったね」

朱然は、懷から竹簡を取り出す。

「董卓は間違いなく、美綴様が会った人物と同じと見て間違いないと思うよ。真名は月……どう？」

確かに、彼女は誰かにそう呼ばれていたな。

「それに、彼女は官吏としても相当に優秀らしいね。并州刺史としてもかなり民に慕われているみたいだし、家臣の結束が強いのも彼女に人望が集まっているからこそだって」

「そうになると、董卓が都で暴政を敷く理由がない、か」

「うん。誰かが、裏で董卓を陥れようとしている。そうとしか思えないよ」

あたしは、都を離れるにあたり、朱然に董卓について調べて貰う事になっていた。

どうしても、城内であった彼女のイメージと、事前の噂がかみ合わなかったからな。

明命とあたしは、合流するために戻らなければいけなかったし、あたし自身はあのまま、洛陽に残っているのは危険だったし。

少なくとも、華雄や陳宮に見つかれば、厄介な事になりかねない。もつとも、あたし達が洛陽を出たのと前後して、董卓の将たちも配置についたらしいけど。

「……とりあえず、報告は以上だよ。他に何もなければ、休ませて貰っていいかな？」

「ああ、そうだな。お疲れさん」

「では、お休みなさい」

朱然が出て行った後も、あたしは董卓の事が頭から離れなかった。あんな娘が、無実の罪で今、攻められようとしている。

こんな理不尽で、身勝手な事がまかり通っていいんだろうか。

……出来る事なら、袁紹を締め上げて真意を問いただいたいぐら
いだ。

やれば雪蓮達に迷惑がかかるし、そもそも出来る訳がないけど。

呂布や張遼も、出来る事なら敵に回したくないし、殺したくもない。
い。

……でも、あたしにできる事なんて限られているしな。

武だけはかなりのレベルになっているけど、一個人の武だけで全てが解決できる訳もない。

ハア、こんな事、あたしが悩んでも仕方ないだろうにな。

とにかく、シ水関攻略が済んでからだ。

そうしないと、あたし達自身の未来がない。

パン、パン！

あたしは頬を叩いて、気合いを入れ直した。

翌朝。

シ水関の手前まで進軍した孫策軍と劉備軍。

いきなり攻めかかる……事はもちろんせず、まずは兵士による罵

倒作戦。

狙いはもちろん、華雄。

「出てこないわね」

「そのような。明命、旗に動きはあるか？」

「いえ。張、華、どちらの牙門旗も、そのままのようです」

「やっぱり、わたしが行って挑発する必要があるかもね」

と、手綱を取った雪蓮を、冥琳が止める。

「ちょっと冥琳。行かせてよ」

「バカな事を言うな！ お前にもしもの事があつたらどうする！」

「大丈夫だって。あんなへなへな矢に当たる程、わたしは間抜けじゃないわよ」

「とにかく、却下だ」

「ぶーぶー。つまんなーい」

でも、動かなければこのままだろうな。

董卓軍が動かない限り、こっちは手出しのしようがない。力攻めでもしようものなら……全滅だろうなあ。

「なら、あたしが行く。華雄も、あたしが行けば出てくるだろう」

「綾子が？ 確かに、華雄とは因縁があつたみたいだけど」

「雪蓮の場合は、孫堅さんの娘、という因縁だろ？ それはそれで効き目はあると思うけど、あたしの場合はタイムリー、じゃない、まだ記憶に新しい上に、当の本人だろ？」

「ふむ。確かに……。だが、危険な事には変わりはないのだぞ？」
と、冥琳。

「戦場に来ておいて、危険も安全もないさ。それに、このまま手をこまねいていても仕方ないんだろ？ でも、雪蓮を出す訳にはいかないなら、な？」

「わかった。だが、くれぐれも無理はするな？ お前に何かあつても、皆が悲しむ」

「心配すんなって。それより、出てきた場合の作戦、よろしくな」

そして、関の近くまでやって来た。

弓も、この距離なら何とか届かない、というまさにギリギリまで。とにかく、華雄にあたしを確認して貰わないと、意味がないから

な。

一度深呼吸して、気持ちを落ち着ける。

「おい、華雄！　いるなら顔を見せろ！」

怒鳴るよりも、声を通る事を意識しながら、あたしは叫んだ。

「先日はよくもいきなり襲いかかってきてくれたな。だが、全然迫力もなかったし、あたしはこうしてピンピンしている。武が自慢らしいが、大した事はないんだな！」

お、城壁の上で何やら騒ぎが。

「き、貴様か！」

華雄が顔を覗かせた。

しかし、自製の聞かない奴だねえ。

「やっと顔を見せたか。でも、あたしが怖いんだろ？　なんせ、貴様の攻撃はかすりもせず、無様にあたしに気絶させられたんだからな」

「い、言わせておけば！　我が武を穢すか！」

「武って言われても。貴様はただ、バカ力があるだけだろ？　あたしに勝とうなんて無理無理。さっさと逃げ帰ったらどうだい？」

「おのれ！　それ以上の罵詈雑言、許さん！」

飛び出そうとした華雄を、誰かが必死に抑えているな。

ありゃ、張遼か？

流石にやり取りまでは聞こえないけど、今飛び出せばどうなるか、張遼ぐらいの将なら気づかない訳ない。

でももう一押し、かな？

「その斧は飾りか？　その際どい鎧は、誰かを誘惑するためか？　これだけ言われてまだ動かないとは、腰でも抜けたのか？」
ドタドタドタ。

あ、『華』の旗が動き出した。

さて、出てくるようだ。

「明命。合図を」

「はいっ！」

隣にいた明命が、素早く陣地へと引き返していく。
ギギギギ。

シ水関の、門が開かれていく。

「皆の者！ 受けた屈辱、倍にして返せ！ 奴らの血で贖わせよ！」
「応っ！」

まさに阿修羅、という表情で迫ってくる華雄。

「出てきてやったぞ！ 今度こそ、雪辱を果たす！」
ドドドドド。

華雄の後に、軍勢が従ってくる。

「今じゃ、放て！」

ヒュンヒュン！

伏せていた祭さんの部隊が、一斉に弓を放つ。

「ぐわっ！」

「ぎゃっ！」

次々に倒れていく、董卓軍の兵士たち。

「おのれ！ 更に卑怯な手を使うか！」

「卑怯も何も、これは戦だろ？ さ、かかってきな」

「減らず口を！」

ブオン！

大斧が振り下ろされる。

勿論、そんなものを受けたりはしない。

力だけなら、間違いなく華雄には勝てそうにもないから。

「どうしたどうした？ 口ほどにもない」

「ほざけ！」

ますますいきり立った華雄、今度は斧で突いてきた。

本来、斧は突きには向かない武器なんだけど、あの重さだ、食らえばタダじゃ済まない。

それも受けずに、かわす。

「避けるな！」

「無茶苦茶言うな！」

「でええええい！」

重そうな大斧をこれだけ自在に操れるのだ、やっぱり猛将と言うべきなんだろう。

……が、いつまでも付き合う義理もない。

ガシッ！

大斧を突き出された状態で、柄を掴み取る。

「は、放せ！」

「お断りだ」

そのまま、手前に引き寄せ、左肘でエルボーを叩き込む。

「ぐふっ！」

食らいながらも、得物はどうにか取り落とさないか。ならば。

カチャリ。

青コウの剣を抜き、柄に切りつけた。

スパッ！

「ああっ！」

刃の部分が、根元から切断された。

ふえー、流石の斬れ味だわ。

呆然としている華雄を、あたしは馬上から蹴り落とす。

「グッ！」

「よし！ 捕らえろ！」

あたしの合図で、兵士達が駆け寄ってくる。

「クソッ！ 殺せ！」

「悪いけど、そんなつもりはないんだよ。ちょっと、眠っていて貰うよ？」

腹に、体重を載せてパンチを一撃。

「……う」

ドサリ。

倒れた華雄を、兵士達が縛り上げた。

「敵将華雄、捕らえたぞ！」

大声で叫ぶと、董卓軍に動揺が走る。

「かかれ、孫呉の勇敢な兵士達よ！」

すかさず、雪蓮が先頭に立ち、襲いかかった。

あつという間に総崩れになり、董卓軍は潰走を始めた。

あたしも、雪蓮の後から追撃戦に加わった。

……関の方を見ると、劉備軍が張遼隊を上手く防いでいるのが見えた。

華雄隊さえ崩せば、いくら張遼と言えども兵をまとめるのは無理だろう。

「あ、アンタか！」

張遼は苦戦しながらも、あたしを認めたらしい。

「そうか。孫策とこの将やったんか」

「……ああ」

ビュン！

偃月刀を振るい、手近の兵を一人倒しながら、

「残念やな。ウチ、アンタと手合わせしてみたかったんやけど」

周囲を見て、

「……ま、今回は無理やっちゅう事はわかる。ウチらの負けやな」

「そうだな。でも、後悔はしてないぜ」

「当たり前や。後悔するような戦するなら、最初からせえへん事や」

そして、周囲に向かって、

「撤退や！ 虎牢関まで退くで！」

号令を掛けた。

「今度会った時は、手加減せえへんで？」

「望むところだ」

張遼はニヤリ、と笑うと、手勢をまとめて去って行く。

董卓軍が潰走する中、関の上に兵達が登ったようだ。

そして、『孫』の旗が掲げられた。

シ水関に入ると、雪蓮が待っていた。

「ご苦労様、綾子」

「雪蓮も、お疲れ」

「ん♪」

大勝に、雪蓮もかなり上機嫌だ。

「華雄は捕らえたけど、何故殺さなかったの？」

「情けを掛けた訳じゃないんだけど。でも、生かしておけば使い道もあるかな、って」

「ふーん、また何か、考えているみたいね。ま、いいわ」

と、そこに劉備達がやって来た。

「孫策さん。お見事でした」

「ええ。劉備もお疲れ様、張遼を足止めしてくれたおかげで、勝てたわ」

「いえ、私達はそこまで精一杯でしたから。愛紗ちゃんや鈴々ちやんが頑張ってくれましたし」

関羽と、見慣れないちびっ子が、ジーツとあたしを見ている。

「美綴殿。見事な腕前でした」

武神にそう言われると、なんだかこそばゆいな。

「お姉ちゃん、強いのだ！」

「ええと、アンタは？ あたしは美綴綾子」

「鈴々は張飛なのだ！」

張飛って……いやいや、今更驚くところじゃないんだろうけどさ。

でも、あの無双で酒癖が悪くて髭面の……程遠いイメージだな。

まあ、この長い蛇矛を軽々と抱えているあたり、ホントに張飛なんだろうけど。

「孫策さん。それで、この後なんですけど」

「何かしら？」

「……何とか勝ちましたけど、被害も大きくて。次の虎牢関、戦える状態じゃないみたいです」

「それなら、心配要らないと思うわよ？ たぶん、わたし達が前線

に出る事はないから」

「え？　そうなんですか？」

「当たり前よ。わたし達だけで、このシ水関を落としたのよ？　この連合軍は、名を上げたくて参加している諸侯ばかりなんだから」

「そうです。桃香様、まずは兵士さんを休ませましょう」

またちびっ子登場。

しかも、二人組か。

「あら、この娘たちが劉備自慢の軍師？　諸葛亮に鳳統、だったかしら？」

「え？　雪蓮、この二人が？」

「は、はわっ！　わ、私たちの事ご存じだったんですか？」

「あわわわ……」

……何この可愛い生き物。

「臥龍に、鳳雛がこの娘たち、ねえ……」

「はわわわっ！　な、なんでその呼び方をご存じなんでしゅか？」

「しゅ、朱里ちゃん。あわわわ……」

カミカミかよ！

人目がなかったから悶え転げるレベルだぞ、おい。

「綾子。臥龍に鳳雛、って？」

「え、えーと。水鏡門下で、そう呼ばれる二人がいる……って聞いた事があったさ。襄陽で」

「ふーん。わたしは、孫策伯符。よろしくね」

「は、はわっ！　わ、私は諸葛亮、字は孔明でしゅ！」

「あわわわ……。わ、私は鳳統、字は士元でし……。はうう……」

お、落ち着けあたし！

「綾子？　何自分の頭を殴りつけてるの？」

「い、いや、ね。あははは……」

ハア、この世界……可愛いモノが多すぎる……。

そして、連合軍は次なる目標、虎牢関へと動き出す。
迎え撃つ将は呂布、張遼、そして賈馮と陳宮もいるらしい。
……あの呂布と戦う事になるんだな、いよいよ。

二十六（後書き）

誤字脱字チェックを行ったにも関わらず、また盛大にやってしまっていたようで……お恥ずかしい限りです。

ご指摘いただいた箇所は全て訂正しました。

なお、他の方も書かれているとおり、一部の漢字が正常に出ないと、出ても機種依存文字だったりするみたいなので、その箇所だけはカナ表記となっています。

（例…シ水関、青コウの剣）

程立もどうしましょうかね……。

（二十七）（前書き）

まとめていたら、日付が変わってしまいました。
呂布登場です。

そして、相も変わらずご都合主義です。

（二十七）

虎牢関。

シ水関もとんでもない規模だったけど、こっちはもつとでかい。

……つーか、これ、まともに攻めて落ちるものなのかね？

「ま、お手並み拝見、というところかの」

「幼平。敵情を見て、変化があればすぐに知らせろ」

「はっ！」

今は自陣で、戦況を眺めているあたし達。

シ水関を、孫策軍と劉備軍が呆気なく落としたせいとか、

「わたくし、袁本初の、華麗で、雄々しい、優雅な戦いぶりをお見せしますわ！」

とか何とか、アホな事を言いながら袁紹軍が攻めかかっている。

曹操軍も、名は欲しいようで、袁紹軍と並んで攻略に参加している。

……とは言え、被害ばかりが増えているようだけどな。

曹操は流石に無駄な攻撃は控えているみたいだけど、そもそも、正面からの攻撃自体が無理。

これがあるからこそ、洛陽は都として長く続いたんだろう。

軍師などには到底向かないあたしでも、その程度はわかる。

「しかし、長期戦は厳しいですよね」

「ん？ 菖蒲。どういう事だ？」

「いえ、自分の見える範囲内で、なんですが」

「構わん。聞かせてくれ」

冥琳の言葉に、やや躊躇いながらも菖蒲は続ける。

「食糧の問題です。袁紹殿より補給の確約はいただいた、と聞いていますが……。本当に、問題ないのでしょうか？」

「何故、そう思うのだ？」

「はい。まだ、その補給が来ていないので、受け取りに行ったので

すが……。準備が整っていないので、まだ渡せない、と断られました」

「それは変ね。わたし達が着陣してから、もう一週間以上経っているのに。……まさか、これも仕返し？」

「雪蓮の言う可能性もあるが、本当に糧秣が不足している、という可能性もあるな」

「あら、どうして？」

「冀州が昨年、不作になった、という話だ。短期で片付けるつもりで袁紹が来ている可能性もある、という事だ」

「じ、冗談じゃないわ！ 兵糧が不十分で、戦える訳がないじゃない！ わたし達だって、潤沢に持っては来ていないのよ？」

「……そうか。つまり、他の諸侯も同じ条件、そう言いたいんだな、菖蒲？」

「そうです、綾子様。食事は兵士の一番の楽しみ。それに影響が出れば、隠し通すのは難しいかと」

その言葉に、一同難しい顔になる。

「つまり、袁紹が犠牲も省みず攻めているのは、それが原因か……。いやはや、それで大軍を集めるとはの」

「きつと、焦りから後先を考えずに檄を飛ばした……。そんなところでしょうね。冥琳、どうする？」

「幼平！」

「はっ！」

「他の諸侯の様子、それから袁紹の糧秣を調べて欲しい。まずは事実を確認する」

「了解です！」

「文キョウ！」

「は、はい！」

「我が軍の糧秣、現状で何日もつのか、至急取りまとめた上で報告を！」

「わかりました！」

「黄蓋殿、子義！ 万が一、エンシヨウ軍が突破された場合に備え、迎撃の備えを」

「承った」

「委細、承知」

冥琳の指示で、皆が飛び出していく。

「あたしも、出来る事があれば言ってくれ」

「ふむ、そうだな」

冥琳は少し考えてから、

「では使いを頼む。書簡はすぐに用意する」

「わかった」

「義封も連れて行くといい。諸侯の様子を見せるのもいい経験になるだろう」

「貴女が来るとはね」

虎牢関攻撃中にも関わらず、曹操は会ってくれた。

「あ、コイツは朱然な」

「お初にお目にかかります。朱然と申します」

無難に挨拶をする朱然。

「なら、こちらで紹介するわ。この娘が、荀イク。それから、この娘たちは、許チヨと典章よ」

「……初めまして」

「この間も会ったよね！ よろしく！」

「あの、よろしくお願いします」

見事なちびっ子トリオ。

……まあ、曹操もどっちかと言えば、そっち系だけだな。

「……今、何か凄く失礼な事、考えなかったかしら？」

「な、何の事だ？ 気のせいじゃないか？」

流石は曹操、勘も鋭いぜ。

あたしは内心冷や汗をかきながらも、素知らぬ顔。

……できてるかどうかは、知らん。

「ま、良いわ。それで、用件は何？」

「この書簡を持ってきた。読んでみてくれ」

「わかったわ」

曹操は、黙って書簡を広げた。

そして、素早く目を通すと、

「……なるほどね。承知した、と孫策に伝えて」

「それだけでいいんだな？」

「ええ」

とりあえず、使者としての任務は済んだかな。

「そう言えば、北郷の姿が見えないけど。どうしたんだ？」

「ああ、一刀ね」

「華琳様！ あのような全身精液男の事など、お口になされては」
全身精液男って……随分な言われようだなあ、アイツも。

もつとも、この世界の荀イクは、かなりの毒舌家らしい、つての
もあるか。

「桂花。仮にも、使者の前よ。控えなさい」

「は、はい……。申し訳ありません」

「一刀兄ちゃんなら、具合悪いって、寝込んでるよ？」

と。許チヨ。

「風邪とか？」

「うーん、それならいいんだけど……」

チラ、と許チヨは曹操を見る。

「季衣。構わないわ」

「はい。兄ちゃん、人が死ぬ光景見て、それで吐いちゃったんだ」

「懦弱なのよ。天じゃ、殺し合いを目の当たりにした事がないみたいでね」

あたしには、笑えない事実だ。

間違はなく、北郷はあたしと同じような時代から来たんだと思う。
横文字に反応してみせたり、ポリエステルなんて、この時代では
あり得ない服を着ているとか。

それなら、人が目の前で死んでいくのを見て、平気でいらなくて当然だ。

ついこの間まで、あたし自身がそうだったんだから。

「あたしが口を挟むべきじゃないだろうけどさ。……あまり、北郷を責めないでやってくれ」

「あら、どうしてかしら？」

曹操が、当然の疑問を口にする。

「あたしにもわかるんだ。北郷の気持ちさが、さ」

「……………」

皆、意外そうな顔をする。

「美綴さん。あの猛将華雄と、一騎討ちをしたあなたが……ですか？」

典韋が遠慮がちに言った。

ああ、そうか。

あれを見たから、こんな反応なんだ。

「あたしは、覚悟を決めたからな。たぶんだけど、北郷はまだ、その覚悟がない……。それだけだと思うんだ」

「あなたね！ あんな男の肩を持つなんて、どういう了見よ。あり得ないわ」

「桂花！」

「し、しかし華琳様」

「私の言う事が聞けないのかしら？」

「……申し訳ありません」

荀イクは黙ったけど、悔しげにあたしを睨み付けている。

「覚悟、ね。なら聞かせて、貴女の覚悟は、どういうものなのか」曹操は、何故かこの問答を楽しんでいるみたいだ。

「そんな大したモノじゃないさ。ただ、雪蓮……孫伯符の夢に、希望に力を尽くす。その為なら、あたしは戦う。それだけさ」

「……ねえ。何故、貴女は孫策にそこまで出来るの？ 貴女自身、人の上に立つ器量はあると見ているけど」

「はは、曹操程の人物にそこまで評価されるのは有難いけど、あたしはそこまでの器じゃないよ。ただ、目指す道が同じで、孫策の方が指導者として、より資質を持っている。なら、あたしは力を尽くすだけって事」

「……そう。なら、もし貴女の目指す道が、私と同じだったら？」

「そうだな……。曹操の下じゃ、あたしは無理だな」

「そうかしら？ 貴女程の器量、私ならば存分に使いこなすだけの自信はあるつもりだけど？」

「いや、アンタは優秀過ぎる。あたしは、曹操の下だと、たぶん息が詰まるよ」

我ながら、随分と失礼な物言いだと思う。

仮にも、あの英雄・曹操にここまで言うんだからな。でも、あたしには確信があった。

このぐらい本音をぶつけても、曹操はまず怒らない。

そのぐらい、器量の大きな奴。

だからこそ、英雄と呼べる存在なんだろうから。

「ふふ、私にそこまではつきり言うとは、ね」

やっぱり、な。

……まあ、その代わり荀イクが凄い顔で睨んでいるけど。

許チヨと典章は……呆氣に取られているというか、たぶん意味がわかってないな、ありゃ。

「全く。ますます貴女が欲しくなったじゃない」

「あゝ、言っておくけど、あたしはそっちの気はないからな？」

「別にいいわ。嫌がる娘にまで、手を出すほど、私は無粋じゃないもの。勿論、その意味でも、貴女は十分に魅力的だけどね」

「……そりゃどーも。さて、そろそろお暇するよ。まだ、やる事があるんでね」

「ええ。また会いましょう。……あと、私の事は、今後華琳、と呼んで構わないわ」

「華琳様！」

荀イクが思わず叫んだ。

「それ、真名じゃないか。あたしは、アンタの臣下でも何でもないんだぜ？」

「わかっているわ。でも、貴女は仮に敵になろうとも、私が真名を預けるに足る存在。そう思ったからよ」

「……わかった。なら、あたしも綾子でいいよ、華琳」

「ええ、またね。綾子」

うーん、使いに來ただけなのに、意外過ぎる展開だ。

劉備軍、そして公孫賛軍を回り、同じ書簡を手渡した。

公孫賛は素直に同意してくれたが、劉備には洩られた。

はわわ軍師とあわわ軍師が、最終的には説得に加わってくれたけど……どうもこの娘、甘すぎるというか……あたしには、波長が合わない。

陣に戻り、冥琳に報告。

「そうか。曹操と公孫賛は賛成、劉備は洩々、か……」

「どーもあの娘、信用できないわね。大丈夫かしら？」

「まあ、義理堅いようではあるから、一度取り付けた約定を破るような事はしないだろう。今後のつきあいは、考える必要があるが、な」

「そうね。とにかく、これで行きましょう」

あたしと朱然は、その場を一旦下がった。

「どうだった？ 諸侯に会った印象は？」

「そうだね。ボクから見ても、曹操はやっぱり英雄だと思う。何より、覇気が違うよ」

「確かに。他は？」

「公孫賛は、一角の人物だと思う。英雄というには、少々物足りないけど。劉備は……危ういね」

「危うい？」

「うん。理想は立派だけど、理想に囚われすぎている、そんな感じ」

がしたから」

へえ、やっぱり見ているところは見ているな。

朱然の観察眼を、改めて見直すあたしだった。

「あれだけの人材を揃えているんだ、人徳はあるのかも知れない。でも、一歩間違えば全てを失い、皆を不幸にする。そういう人じゃないかな」

「だろうな。雪蓮との決定的な違いは、そこだと思う。みんなが笑顔で暮らせる世界……その理想そのものは、似ているんだけど」

「美綴様が、孫策様についていて良かったよ。劉備だったら、ボクも考えちゃったからね」

ホント、ずけずけと言うわ。

「さて、ボクも徐盛を手伝ってくるよ。まだ、正式な将じゃないからね、ボクも」

「ああ、そうしてやってくれ」

さて、あたしも……とりあえず、剣の手入れでもするかな。

三日後。

立て続けに攻撃を行っている袁紹軍は、流石に疲労の色が濃い。被害もバカにならない筈なんだが、それでもまだまだ数が多いのは流石、という感じ。

……と、その時。

ギギギギギ。

虎牢関の門が開かれ、董卓軍が打って出てきた。

「敵の牙門旗を確認！ 呂布です！」

ついに、最強の武将が戦場にお出ましか。

……あの呂布なんだよな、あれが。

あの不思議な娘が、天下無双の猛将……結びつかない。

真名で構わない、そう言われたけど……今のあたしには、まだその名で呼ぶつもりは、ない。

袁紹軍は、あつという間に蹴散らされている。

確か、顔良と文醜という、かなりの猛将がいる筈だけど、それを以てしても呂布の勢いを止められないみたいだ。

「孫策様！　続けて張遼が出てきたようです！」

「とうとう来たわね。よし、曹操と公孫賛、劉備に伝令を！」

「はっ！」

そして、蹂躪されるがままの袁紹軍を余所に、あたし達は動き出した。

虎牢関を攻めていた筈の曹操軍は、何故か少し距離を置いて布陣している。

袁紹も底抜けのバカみたいで、その真意が理解できなかったらしい。

普通に考えれば、名が欲しい筈の曹操が、一步下がる訳がないんだけだな。

その曹操軍が、突出した呂布隊を横撃。

同時に、孫策軍も呂布隊に攻めかかる。

一方、張遼隊には公孫賛軍と劉備軍が立ちほだかり、呂布隊との連携を取らせない。

乱戦に持ち込めば、将が限られる董卓軍は、次第に不利になる。

……つくづく、冥琳の策は恐ろしいよ、ホント。

「綾子！　行くわよ！」

「了解。菖蒲、朱然、ついて来い！」

「はいっ！」

「うん！」

あたしは、預けられた手勢と共に、進撃を開始。指揮官なんて、未だに自信はないけど……やるしかない。

「菖蒲！　左右から一斉射撃！　敵兵を釘付けにするんだ！」

「わかりました！」

「朱然は一隊を率いて、退路を断つそぶりを見せろ！　ホントに敵が逃走を図ったら、深追いするな！」

「任せて！」

「残った者は、あたしと一緒に呂布に当たる！　呂布には構わず、周囲の兵を狙え！」

「応っ！」

この中で、何人が命を落とすか。

せめて、それを最小限にとどめるのが、あたしの役目。

……辛くても、やるしか、ない！

そして、呂布との対面。

……できれば、戦場以外が良かったんだけどな。

「……綾子」

「よう、久しぶり……でもないか」

やっぱり、武器は方天画戟か。

リーチが長い分、あたしは不利だ。

……いいさ、やってやろうじゃないか。

倚天の剣を抜き、構える。

二刀流はまだ自信がない以上、呂布ほどの相手にはベターな手で挑むしかない。

「……行く」

「来い！」

ビュッ！

速い！

間一髪のところ、薙ぎを避けた。

前髪少し、持って行かれたな。

「今度は、こっちからだ！」

あたしは、突きを繰り出す。

ガン、ガン、ガン！

自分では怒濤のラッシュのつもりでも、案の定全て受け止められる。

更に突き……と見せかけて、払い！

カアン！

これまた、完璧に防がれる。

「今度は、こっちから」

「！！」

鋭く、速い突き。

キイン、キイン！

何とか、剣で防ぐ。

……あたしの異常な動体視力を以てしても、これは厳しい。
一歩間違えば、もちろんタダじゃ済まない。

それがわかるだけに、あたしも必死にならざるを得ない。
と、方天画戟が微妙に動いた。

「クッ！」

身体を無理矢理反らし、一撃を避けた。

「……避けられた」

「そ、そりゃ、避けなかったらあたし、お陀仏だぞ？」

「……やっぱり、強い。でも恋も、負けない」

突き、薙ぎ。

いろいろなパターンを織り交ぜてくる、呂布の攻撃。

知らず知らず、あたしも不思議な高揚感を、得ていた。

滴る汗を拭う間もなく、あたしと呂布は……戦い続ける。

二十八

ドドドドド。

「ワッ！」

「うおおっ！」

武器と武器、人と人が、ぶつかり合う。
血飛沫か、悲鳴が、怒号が、飛び交う。
まさに乱戦だった。

「ハア、ハア、ハア……。流石は呂布だ」

「……恋の攻撃、当たらない」

攻撃力は、やはり呂布には敵わない。

相手は歴史有数の猛者、あたしが太刀打ち出来る方が、どうかしている。

あたしが無事なのは、この謎の動体視力があるから……。それだけだ。

それでもかわしきれず、あちこちにかすり傷は受けたみたいだけどな。

懷に飛び込んでも、パンチやチョップをお見舞いされるし、つくづく化け物レベルだと思うぜ。

体力がそろそろ、キツくなってかたかな。

「呂布將軍！」

と、そこに董卓軍の兵士が駆け寄って来た。

「張遼將軍より伝令！ 直ちにお戻り下さい、との事！」

「まだ、ダメ」

「火急との事！ 何としてもお連れせよ、との厳命です」

「……………」

呂布は、あたしを見る。

「……。行けよ、急ぎなんだろう？」

「……でも、勝負ついてない」

「また今度でいいだろ。な？」

「……わかった。また、会える？」

「ああ。セキト達にもよろしくな」

コクッ。

頷くと、呂布は馬首を巡らせ、駆けて行った。

「ふう……。流石に、辛い……。かな」

馬上でバランスを崩し、ふらついてしまう。

「綾子殿！　しっかりなされい！」

霰が、そんなあたしを支えてくれた。

「はは、精魂尽きた、かな？」

「将がそれでは示しがつかぬぞ！　さ、兵達に指示を」

「あ、ああ」

氣力を奮い起こし、

「伝令！　徐盛隊に伝えろ！　敵に一当てして、すぐに兵を退け、と。

深追いするなとも」

「はっ、直ちに」

「朱然隊にも伝えよ！　退却する敵の退路に伏せ、銅鑼を派手に鳴らし、弓を少しばかり射かけるように。敵の潰走が目的だ、それを見届けたら引き上げろ、とも」

「ははっ！」

「残る者は、勝鬨を上げろ！　我が軍の勝利だぞ！」

「応っ！」

ふう、こんなもの……。かな。

祭さんや、思春達の指揮を見よう見まねで覚えた成果……。あったかな？

「霰。ありがとう」

「やれやれ。貴殿という御仁はわかりにくいようで、わかりやすいと言うか。つくづく不思議だな」

とにかく、董卓軍は撃退した。

……とりあえず、休みたいな。

翌日。

菖蒲からの報告で、孫策軍の糧秣は、残り一週間分を切っている事が判明。

諸侯も似たり寄ったりで、曹操軍だけが若干余裕があるらしい。ちなみに袁紹軍は、ただでさえ人数が多かったのに、短期決戦で算出した量しか持参しておらず、とても他に供出する余裕はなさそう、と。

明命の報告に、全員が呆れかえっていた。

「……底抜けのバカね、袁紹って」

「全くだ。何を根拠に、そんな簡単に決着がつくと思っていたのか」
「腹が減っては戦はできぬ。その程度の事、そこらの童子でも気づくもんじゃがの」

辛辣な三人の批評も、的確だったので皆はただ、黙って頷くだけ。
「ところで孫策様。もう一つ、気になる事が」

「あら。何かしら、明命？」

「はあ。虎牢関の様子なのですが……。どうやら、董卓軍は放棄した模様です」

「え？　虎牢関が、もぬけの殻って事？」

「はい。旗は残っていますが、敵の気配がまるで感じられません」
え？

だって、昨日の今日だぜ？

「どういう事じゃ。確かに昨日の戦で、奴等には痛手は与えた。じやが、我らとて損害は出ておる。退く理由がなかるう？」

「祭の言う通りよ。ましてや、あの呂布と張遼が、この程度で引き下がるとは思えない」

「となると、洛陽で何かが起きた、と考える方が妥当か……。諸侯は気付いているか？」

「今のところはまだ。ただ、時間の問題でしょう」

「特に、曹操あたりは、かしら。明命？」

雪蓮の質問に、明命は大きく頷いた。

「さて、どうする雪蓮？」

「そうねえ。脱け殻の虎牢関なんて、先陣争いする価値もないわ。無用な妬みを買いたくないしね。……でも、都には急ぐべき、かな？」

「勘か？」

「ええ」

「ふむ。だが、今回は私も賛成だ。負傷者や疲労の激しい者は残し、精鋭を選んで向かわせよう」

雪蓮の勘に、冥琳が賛成の上での画策、か。

ある意味、最強の組み合わせだな。

「だが、諸侯に気取られるといろいろと面倒だ。雪蓮、義封を連れて行ってきた欲しい」

「私、ですか？」

朱然はいきなりの名指しに、少しばかり驚いているよう……に見えるいな。

「そうだ。少なくとも、この中で洛陽の地理に詳しいのはお前だろう。頼む」

「わかりました」

肝心な人選が抜けている気がするんだが。

「あれ？ 冥琳は行かないのか？」

あたしの問いかけに、冥琳は即答する。

「軍の代表に軍師まで姿が見えなければ、それこそ怪しまれるだろう。明命は引き続き諸侯の動向を監視
。霰は残す兵の再編成を」

「了解しました！」

「承知した」

「黄蓋殿、伯符の手綱役、頼みますよ？」

「やれやれ、年寄りを少しは労ろうとは思わんのか。策殿の抑えは

なかなかキツいと言うに」

「そう仰らずに。済んだら、とびきりの黄酒を差し上げますから」

「本当か？ 必ずじゃぞ、公僅！」

酒と聞いた途端、張り切り出す祭さん。

ホント、わかりやすい。

「菖蒲は、再度袁紹に約定の糧秣を渡すよう、使者に立て」

「は、はい。ですが、先ほど明命からの報告では……」

不安そうに話す菖蒲に、冥琳はニヤリと笑う。

「案ずるな。約定を果たせてないのは我が軍だけではあるまい。諸侯からも、同じ用件の使者が向かっている筈だ。皆が一斉に求めても、のらりくらりを通せる程の人物が、袁紹軍にはおるまい？」

「は、はあ……」

恐るべし、冥琳。

何と言うか……黒いな、うん。

「あのさ。あたしは？」

「綾子は待機を。と言うより、少し休め。ずっと働きづめの上に、呂布相手にやり合ったのだ」

「そうね。綾子はその方がいいわ」

祭さんも、明命も、菖蒲も、霰も、朱然までも。

皆が同感だ、とばかりに頷いている。

あたしを氣遣ってくれるのは、正直嬉しい。

……けど。

「いや、あたしも洛陽に行かせて貰うよ」

「綾子様。しかし、孫策様や周瑜様が仰せの通りでは」

「菖蒲の言う通りです！ 綾子お姉さまは無理をし過ぎです！」

あはは、菖蒲と明命に心配をかけるようじゃ、あたしもまだまだだよな。

「ありがとう。けど、あたしが行かないと、殺しちゃいけない奴が、助からなくなるかも知れないから」

「董卓の事、かしら？」

「ああ」

「……それは、無理ね。今回の連合軍結成の名目、忘れた訳じゃないでしょ？」

雪蓮はピシヤリと言う。

「わかってるさ。だからこそ、あたしは行かせて貰う。いや、行かなくちゃならない」

「何か、考えがあるようね」

「ある。だから、頼む」

冥琳は少し考えてから、あたしを見た。

「ならば、綾子も同行を。ただし、決して無理はするな……いいな？」

「わかったよ。それから、もう一人、連れて行きたいんだ」

「ほお、誰だ？」

「それは」

あたしは、ある人物の名前を、皆に告げた。

「こっちで間違いないのね？」

「ああ。この間道は、地図にもない。まず、我ら以外に知られてはいない筈だ」

「でもさあ、この恰好だけは何とかならなかったのかなあ」

「貴様！ 我が軍の鎧を侮辱するか！」

「誰もそんな事言っていないわよ。ただ、違和感があるのよね」

「仕方ないだろう、雪蓮。少しの辛抱だから、な？」

「はい」

そして、無事に洛陽へ到着。

何度見ても、スケールが違うねえ。

「開門！」

城門の上から、様子を伺いに姿を見せた兵士が、驚きの声を上げた。

「あ、あなた様は……」

「華雄、只今戻った。開門！」

「は、はいっ！」

ギギギギギ。

頑丈な城門が、ゆっくりと開かれた。

「やったわね」

「油断はまだ禁物だぞ、雪蓮」

「わかってるわよ。華雄、宜しくね」

「フン。貴様に言われるまでもない。行くぞ！」

華雄に続き、あたし達は洛陽に入る。

雪蓮の言う、『違和感のある格好』。

要は、虎牢関の戦いで戦死したり、捕虜になった董卓軍の兵士から、鎧を拝借して着込んでいるって事。

あたし達だけなら不審な点があるかも知れないが、なんせ将である華雄が率いているのだ。

流石に、誰にも怪しまれる事はない……たぶんだけど。

「華雄將軍！ ご無事でしたか。敵に捕らわれた、と聞いておりましたので」

「確かに捕虜になったがな、隙を見て脱走してきた。その時、こいつらも一緒に連れてきた」

「そうでしたか。ご無事で何よりです」

兵士は、怪しむ様子もない。

内心、ホッとするあたしだった。

……ギャンブルだったからからな、これ。

「そう言えば、皆はどうした？」

「は……」

何故か、言い澀む兵士。

「どうした？ 恋も霞も、戻ったのだろうか？」

「は、はい。確かにお戻りになれましたが……」

「ええい！ 歯切れの悪い！ 何があったか、はっきり申せ！」

華雄がいきり立つ。

「実は……」

と、兵士は華雄に何か耳打ちをする。

「……何？　それは、本当か？」

「……はっ」

「……おのれ……っ！　許さん！」

そのまま、どこかに駆け出そうとする。

慌てて、あたしは華雄を止めた。

「は、離せ！」

「何があつたか知らないが、落ち着け。その為に、ここまで来たんだろうが」

「クッ……。し、しかしな」

あたしは華雄を宥めながら、雪蓮に目配せする。

ほんの少しだけ頷くと、

「華雄將軍。まずは城内へ参りましょうぞ」

「……何を言っている？」

空気の読めていない華雄を、あたしはそのまま押していく。

「お、おい！」

「では、我々はこれにて」

とりあえず、その場を離れた。

人気のない路地裏に向かい、一息つくあたし達。

「貴様ら！　こんな事をしている場合か！」

「落ち着きなさいよ。それより、何があつたの？」

雪蓮に続けて、あたしも、

「董卓に何かあつた、そうだな？」

「な、何故わかる？」

「……この状況で、華雄がいきなり冷静さを失うとすれば、董卓の事ぐらいだろう。で？」

「……う、うむ。どうやら、月が行方不明らしいのだ」

「行方不明？」

「まさか、一足先に逃げ出した、とか？」

と、華雄が烈火の如く怒った。

「貴様、月はそのような奴ではない！　いくら孫策でも、月の事を愚弄するのは許さん！」

「わ、悪かったわよ。そんなつもりじゃないの、ただ可能性を口にただけよ」

「万に一つも、そのような可能性は、ない！」

「わかったから落ち着け！　大声で怒鳴れば、人が来てしまうぞ？」

「む……。そ、そうだな……。だが、行方不明とは……」

確かにおかしい。

そもそも、呂布や張遼達がいるのだ。

城門は警備こそされていたけど、とても迎撃体制を整えているようには見えなかったし。

……と、なると。

「張遼達は、城か？」

「どうもそうらしい。ただ、どうやらどこかに監禁されているらしいのだ」

「監禁って、穏やかじゃないわね。朱然、あなたはと思う？」

雪蓮に話を振られた朱然、少し考えて、

「……あくまで、可能性ですが。董卓は逃げたのではなく、人質に取られているのではないでしょうか」

「人質か……」

あたしは、可憐な董卓の姿を思い描いた。

仮にも、刺史にまで任命される程の人物。

虫も殺さない、とまでは言えないにしても、だ。

あの少女ならば、自らを襲う魔の手を全て斬り捨てる……そんなシチュエーションは想像もつかない。

そして、そんな彼女が人質に取られていたら、他の将達はどうするだろう？

華雄の様子を見る限りでも、董卓は相当に慕われ、また信頼されているようだ。

この間の見た、洛陽の街の様子からも、彼女の治世がいかに上手く行っているか、それを物語っている、そう思う。

「華雄。もし人質の話が本当だとして、犯人に心当たりはないか？」

「犯人か……。月によからぬ企みをしそうな奴は……」
考え込む華雄。

「例えば、十常侍、なんてどうかな？」

「十常侍……張譲と趙忠か！」

朱然、しかしお前さんはいろいろ知ってるねえ。

どうやら当たりだったのかも知れない、華雄の反応を見る限りでは。

「宦官共の仕業って訳ね。確かに、あり得るわ。あの何進大將軍を暗殺した、と噂されているぐらいなもの」

「どうする、雪蓮？」

「ちょっと厄介よ、相手がもしそうだとしたら。何せ、帝の側に控える連中だから、宮中の奥深くにいるもの。無官のわたしじゃ、入る事すら叶わない」

「華雄はどうなんだ？」

「私か？……私も、官はないが……そうだ。霞なら」

「張遼が？」

「ああ、奴は私と違い、正式な官位を持つ身だ。……だが、奴も監禁されている……。くそっ、くそっ」

「八方塞がりじゃない。どうするの？」

困った。

董卓を探し出さなきゃ話にならないし、張遼も呂布も恐らくは監禁場所は、宮中だろう。

明命ならともかく、あたし達に忍び込むのは無理。

……いい思案も浮かばないし。

ううん、どうしたらいいやら……。

「ニャー」

と、一匹の猫が、いつの間にかあたしの足許に。そのまま、スリスリと甘えてくる。

「悪いな。今は相手をしてやる暇がないんだ」

……でも、屈んで、喉を撫でてやる。

可愛いんだから、その、不可抗力なんだ、うん。

「貴様！ 和んでいる場合か！」

「……悪いけど、今回ばかりは華雄に同意ね」

「ま、美綴様ですしね」

三対一かよ！

民主主義に絶望して、ブルーになるあたし。

猫は、そんなあたしを見上げると、歩き出した。

……と、思いきや。

「ニャー」

少し歩いたところで振り向き、また一鳴き。

「……もしかして、わたし達を何処かに案内する気なんじゃないかしら？」

「孫策！ この期に及んで、まだ巫山戯るか！」

「いや、待て。どうせ行き詰まっているんだ、可能性があるなら賭けてみよう」

あたしが歩き出したので、三人も自然、ついてくる。

「ニャーン」

猫は、塀の隙間から中に入っていく。

「こ、こんな場所に、城壁の破損があったとは」

華雄は呆然としているが、あたし達には好都合だ。

ちよっと狭いけど、人一人が通れそうな穴が、開いている。

「綾子。でも、鎧を着たままじゃ、無理ね」

「だな。鎧は捨てるしかない」

「ちよ、ちよっと待て！ 私はどうするのだ」

あ、そっか。

華雄はもともと鎧装備なんだが、それが際どいデザインだから脱ぐとか……無理だな。

「とりあえず、その辺りで適当に服を借りるしかないんじゃない？」

「ひ、他人事だと思って！」

いきり立つが、結局はその通り、着替えるしかなく。

どこから手に入れてたのか、チャイナドレス姿になっていた。

「へえ。結構似合うね」

「うんうん。いいんじゃない」

「だな。あたしもそう思うぜ？」

「貴様ら……。後で絶対……殺す」

赤くなる華雄はほっというて、穴を潜る。

ホント、ギリギリの大きさしかないな、これ。

「よっ、と」

穴の向こうに出たあたし。

「な、何者だ！」

……まさか、その向こうに人がいるとは思わなかったな。

二十八（後書き）

いろいろと思うところがありますが、読んでいただけているうちは続けたいと思います。

なお、華雄関連は後日きちんと書きます、決して手抜きではありませんので……。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

二十九（前書き）

登場人物が多いため、会話が交錯して少し読みづらいかも知れませんが、

どうぞご了承ください。

二十九

いかにも、高貴な人物ですよ、と言わんばかりの服装。

あと、仕草からも育ちの良さが滲み出ているし。

気品、っていう奴も溢れている時点で、既にただ者じゃない事ぐらいはわかる。

年格好からすると、あたしよりも年下っぽいかな。

「君は誰？」

朱然……お前は少し自重しろ。

「ぶ、無礼者め！」

ほくら、この手の子はプライド高いんだから気を付けないと。

「……き、協皇子！」

「皇子って……まさか？」

皇子って言ったな、今？

華雄と雪蓮の反応からして、間違いなく皇族。

……確か、皇子は二人いた筈だったよな。

「何故、我が名を？」

「こ、これはご無礼を。私は華雄、董卓麾下の武官です」

「董卓の……？ では、その方らもか？」

「はっ。わたしは孫策、字を伯符と申します。元長沙太守にして烏程候、孫文台が娘です」

雪蓮の敬語は初めてだな、何か新鮮かも。

「孫堅の……。そうか、そなたの母御とは、生前に会った事がある。では、この者達も、か？」

「我が家臣、美綴と朱然でございます」

「左様か。……ここでは人目につく、私の部屋に来るがいい」
思わぬ展開になったけど、ここで話すよりはいいだろう。

皇子は私室にあたし達を入れると、人払いを命じた。

いくら傍若無人な十常侍と言えども、皇族のする事全てを思いのままには出来ないらしい。

それに、数少ないとは言え、漢王室を第一に考える朝臣もいる。あたし達は、手短に忍び込んだ理由を説明。

「では、董卓を救いに参った、そうなのだな？」

「ハッ」

「華雄はわかったが、何故孫策が参ったのだ？」

協皇子の疑問は当然だろう。

「それは二つの理由からです。一つは、わたしの勘です」

「勘、とな？」

「はい。御不審に思われるのは当然ではありますが、わたしの勘は、我ながら確かなもの、と自負しております」

「なるほど。では今一つは？」

雪蓮は、あたしを示して、

「この者が、董卓と少々面識があり、救うに値する人物である、と」

「そうか。美綴、であったか？」

「ひ、ひゃい！」

あちゃー、声が裏返っちゃった。

まだ子供とは言え、相手が相手だからなあ。

緊張するな、つてもあたしは庶民だし。

……ま、それを言ったら雪蓮とか華琳みたいな連中と、普通にタメ張ってる時点で、あり得ないけどな。

う、いかん。

朱然がニヤニヤしてやがるし、雪蓮も笑いを堪えてる。

後でからかわれるネタにされる前に、立ち直れ、あたし。

「失礼致しました。確かに私は、董卓殿と多少面識を得ています。

巷では暴虐の君主などと言われていますが、そうは思えないのです」

「ほお。何故、そう思う？」

「理由はいくつあります。民が慕っている様、この華雄を初めとした将たちの忠節ぶり。それに、あのように儂く可憐な人物が、巷

の噂とはかけ離れすぎています」

「それで、救いに参った、か」

「はい」

ふう、どうにかかまずに言い切れたぜ。

皇子は一度、全員を見渡してから、

「そなたらの心根はわかった。私とて、董卓がどのような者か、わかってるつもりだ。……だが、残念だが私の力ではどうにもならぬのだ。宦官共は、今や兄上ですら、蔑ろにする専横ぶりだ」

ホントに無念そうな皇子。

……そうか、この子が猷帝になるんだな。

あたしの知る歴史だと、確か優秀で、董卓が見込んで帝の地位につけた……だったよな。

「いえ。わたし達に考えがございます。監禁場所は、ご存知ですか？」

雪蓮の言葉に、皇子は視線を宙に泳がせてから、

「確か、中庭より通じる地下牢に閉じ込めたと聞いておるが、しかし、見張りは嚴重だぞ？」

「問題ありません。ただし、一つだけお願いが」

「何だ？」

「少々手荒な方法を採ります。この宮中を、穢す事になりますので、お許しいただきたいのです」

「……それで、董卓を助けられるのだな？」

「はい」

即答だった。

「よかろう。私も力を貸そう」

「失礼致します。お呼びと伺いまして」

皇子は、張讓と趙忠を呼び出した。

「うむ。そち達に、頼みがあったな」

「はい。何でござりましょう？」

口ではへり下っているけど、仮にも皇太子を前に、敬うという素振りも見せない。

……つくづく、腐った連中だ。

「もっと近う寄れ」

「では」

無警戒に、皇子に近寄る二人。

「今だ！」

物陰から、あたしと華雄が飛び出した。

そして、宦官共に剣を突き付ける。

「な、何だ貴様らは！」

「ひ、控えい！　ここは宮中、しかも協皇子の御前なるぞ！」

威厳を取り繕うが、そんなモノにびびるあたし達じゃない。

つか、もっとお偉いさん公認だし。

「お、皇子！　我らにこのような振る舞い、いかに皇子とて許されませぬぞ！」

「もとより覚悟の上よ。もう、その方らの傀儡にも飽きた」

「と言う訳だよ、極悪人ども。さ、董卓の居場所まで案内して貰おうか」

「あんな小娘の為に、このような無法を働くとは。気は確かか！」

「ああ、確かだ。あたしも、その華雄もな」

「華雄……？」

宦官二人は、そこでやっと気付いたらしい。

「か、華雄だと！」

「馬鹿な！　シ水関で死んだ筈だ！」

「……私はこの通り、五体満足だがな？」

「あの露出狂の華雄が、このような出で立ちでは、気づく筈がない！」

なんだ、あたしと同じイメージだったんだな、こいつらも。

鎧姿しか記憶されない華雄に、少し同情。

「貴様。今すぐ死にたいらしいな？」

趙忠に突き付けた剣を、動かそうとするのに気づき、慌てて止めた。

「何をする！ こやつらは、武人としての私を愚弄したのだぞ！」
別にそういう訳じゃないと思うが、面倒になりそうなので敢えてそこはスルーで。

「落ち着け。まずは、董卓を救う事が優先だ。そうだろう？」

「クッ……。おい貴様ら、月のところにさっさと案内しろ！」

剣を突き付けたまま、宦官二人を先に、部屋を出た。

待ち構えていた兵士に気付かれたけど、素早く気絶させる。

「こ、このような事をして、逃れられんぞ？」

「脅しなら意味ないぜ？ あ、言っておくけど時間稼ぎするつもりなら無駄だぞ？ だいたいこの場所は把握しているんだ」

「……………」

凶星だったんだろう、二人は黙り込む。

「どうするんだ？ 何なら、華雄の好きにさせてもいいんだぜ？」

「わ、わかった！ 案内する！」

もはや、張讓の言葉は悲鳴に近かった。

これが、専横を欲しいままにした宦官のトップか……はあ、嫌だ嫌だ。

ズズズズ。

重そうな石をずらすと、地下への階段が姿を見せた。

どんなドラ○エだよ、これ。

「先に入れ」

「……………」

「華雄。好きにして」

「わ、わかった！」

二人は見るからに憔悴しきっている。

ま、いい気味なんだけどな。

「む？ 何だ、貴様ら！」

地下牢にいた兵士が、あたしらを見咎めて近づいてきた。

「……ち、張讓様！ こ、これは？」

驚いている間に、華雄が素早く一撃。

兵士は気を失い、崩れ落ちた。

まあ、猪だけど強いのは確かだしな。

「月！ どこだ！」

華雄が、地下牢に響き渡るほどの大声で、叫んだ。

「その声は……。華雄さん？」

一番奥の牢から、か細い声。

「月！ 無事か！」

華雄に続いていくと、確かにそこには董卓の姿があった。

「あなたは、先日の方？」

「話は後だ。おい、鍵はどこだ？」

「……………」

宦官共は答えない。

単純に知らないのかも知れないけど。

ま、いいけどさ。

「華雄。そこをどけ」

「美綴？ 何をする？」

「いいから。董卓も下がって」

「は、はい」

あたしは、青コウの剣を抜く。

そして、

「でやっ！」

気合一閃。

スパッ！

鉄格子は、あっさりと切り裂かれた。

……流石、鉄を泥のように斬る剣。

「……凄いですね」

「フン。私も、金剛爆斧さえあれば、この程度……」

「あ、あわわわ……」

反応が皆違うけど、今は気にしている場合じゃない。

「董卓。あたしに掴まれ」

「は、はい」

切り裂いた鉄格子の間から、彼女を救い出した。

「ありがとうございます。美綴さん、華雄さん」

「いいって事さ」

「月。怪我はないか？」

「はい。……でも、詠ちゃん達は、どこにいますのしょう……」

表情を曇らせる董卓。

「心配するな。董卓さえ無事なら、すぐにでも会えるさ」

「え？ それは、一体……？」

首を傾げる董卓に、あたしはニカッと笑ってみせる。

「その前に。美綴、私はこいつらを許せない」

と、宦官共に剣を突き付ける華雄。

二人は既に生きた心地がしないようで、ただただガクガク震えるばかり。

「……まあ、気持ちわかるが、待て。今は殺すな」

「何を言う！ もう月は救い出したのだ！ このような悪辣な輩を生かしておく理由が、どこにある！」

「落ち着けて。あたしもお前の気持ちはわかるさ。でも、今は抑えて欲しい」

「いや、ダメだ。こいつらには死あるのみだ」

人の話を聞かない奴だなあ、ホント。

が、そんな華雄に向けて、董卓が言った。

「華雄さん。美綴さんには、何か考えがあるようです。今は、従って下さい」

「……わかった。月がそこまで言うなら」

ホント、董卓には素直だなあ、この猪も。

地下牢から出たところで、

「綾子！」

雪蓮が駆け寄ってきた。

「どうだった？」

「ああ、見ての通りだ」

「わかったわ。後は宮中ね」

雪蓮に皆が続く。

もちろん、宦官共も。

顔面蒼白でガタガタ震えるばかりだけど、華雄が睨み付けているので黙って従うしかない。

中庭から宮中に戻ろうとすると、兵士の一団が向かってきた。

「狼藉者だ！ 出会え出会え！」

数は決して多くはないが、相手は完全武装。

まともにやり合うのは少々厳しいかも。

「待って下さい」

と、董卓が前に出た。

「あ、あなたは……董卓様！ ご無事だったのですか」

「はい。この方たちが、救い出して下さったのです」

「出鱈目だ！ こやつらは宮中にて騒ぎを起こし、乗っ取ろうとする輩だぞ！」

「五月蠅い。黙れ！」

喚き立てる宦官二人を、華雄が殴り付けた。

「……お願いします。そこを通して下さい」

董卓の言葉に、兵士達に動揺が走った。

「お、おい。どうする？」

「董卓様のお言葉なら、従うしかないだろう」

「し、しかし。張讓様と趙忠様が……」

「お願いします」

重ねての董卓の懇願。

「どうやら、勝負あったようだ。」

「……わかりました。お通りを、いえ、ご案内しましょう。賈馱様や呂布將軍のところ、ですね」

「はい。ありがとうございます」

「き、貴様ら！ 後で死刑ふべっ！」

黙っておけばいいのに、また華雄に殴られてる。

「殺すなよ？」

「わかってる！ 手加減はしている」

まあ、本気で殴ったら吹っ飛んでるだろうけどさ。
ドタドタドタ。

そこに、別の兵士の一団が到着。

「張讓様！ 趙忠様まで」

「お、おお。すぐに助けよ、こやつらは、反逆者だ」

鼻が折れたのか、二人揃って鼻血塗れ。

確かに、誰が見てもあたしらの方が狼藉者だろうけど。

「さて、雪蓮。どうする？」

「あら綾子。わたしに確認の必要があるのかしら？」

二人揃って、剣を抜いた。

「董卓、華雄。早く呂布達を」

「で、ですが」

「美綴。私も戦うぞ！」

「あたし達なら心配要らない。時間稼ぎぐらいしてみせるさ。あと華雄、アンタがついていかなきゃ、誰が董卓を守るんだ？」

「そういう事。さ、急いで！」

あたし達の言葉に、董卓は少し俯いてから、顔を上げた。

「わかりました、華雄さん、行きましょう。決して、無理はしないで下さいね」

「わかってるさ」

「来るわよ、綾子！」

「了解！」

もはや邪魔者でしかない張讓と趙忠を手早く気絶させると、董卓達を止めようとする兵士を遮った。

「ここから先は行かせない」

「どけ！ どかなければ斬る！」

近衛兵なのだろう、意地があるのはわかる。

……が。

「相手を見て言うべきだな」

「そうなのよね。ま、仕方ないけど」

近衛兵の隊長らしき男が、キレたらしい。

「ええい、構わん。押し通れ！」

全員が抜刀し、向かってきた。

ほどなく、董卓達が戻ってきた。

どうやら、全員無事だったらしい。

「……綾子。久しぶり」

「孫策に美綴か。とりあえず、礼を言わなアカンやろうな。ありがとう」

呂布と張遼はピンピンしていた。

「し、仕方がないから礼を言ってやるのです！ あ、ありがとう」

陳宮、プチツンデレは似合わないんだが。

……で、もう一人。

昔懐かしい学生帽みたいなのを被った、メガネっ娘。

「私達を、助けたりしてどういうつもりかしら？」

「詠ちゃん！」

「月。騙されてはダメよ、助けるフリをして、何を企んでいるかわかったものじゃないから」

バリバリ警戒されているし。

「……綾子。いい奴」

「……癪だが、こいつらは月に危害を加えないさ。それだけは私も

認める」

呂布と華雄の言葉にも、キツい視線は変わらない。

「どうだか。まだ、ボクは信用しないよ？」

ガチャガチャガチャ。

「いたぞ！ 囲め！」

そんなやり取りをしている間に、わらわらと兵士が出てきた。

「阿呆！ 自分ら、何しとんねん！」

「黙れ！ 陛下の名により、貴様らを捕らえる。かかれ！」

武器を持っているのは、あたしと雪蓮、華雄と、さっきの兵士達だけ。

流石に、このままじゃマズい。

と、その時。

「火事だ！」

「な、何っ！」

宮中の一室から、火の手が上がった。

慌てて、兵士の一部が駆け出す。

「朱然、やったみたいね」

「だな」

人間、火にはどうしても敏感になる。

タイミングを見て、被害の少なそうなところに朱然が放火。

……簡単な打ち合わせしかできなかったけど、どうにか上手くやつてくれたようだ。

「た、大変です！」

その時、宮中の奥から、別の兵士が駆けてきた。

二十九（後書き）

十常侍は、本来ならもう殺されていないとおかしいのですが、それを言うとは原作からして連合軍の結成時期が不自然になりますよね。原作では詳しく書かれていない当時の洛陽情勢ですが、本作では霊帝は逝去、少帝が在位している、という設定にしています。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

三十

「……何だ、これは」

「……酷いわね」

宮中の奥。

本来ならあたし達のような身分じゃ、入る事は許されない場所。

……というか、宮中自体そうだけど。

それだけに厳かで、聖なる場所。

……だったんだろう、ついさっきまでは。

「こ、こんな事って……」

「月、落ち着いて」

「で、でも詠ちゃん……」

タッタッタ。

そこに駆けつけた人物もまた、声を失う。

「……………」

協皇子。

……今この場所で、一番のお偉いさんになってしまった人物。

「まさか、皇后様が早まるとはね……」

「こ、こないな事って……許されるんかい！」

「クッ、何というザマだ……っ！」

皆、やり場のない怒りに苛まれている。

……あたしは、実感が伴わなかったけど、目の前の惨劇が現実である事だけは、否定できない。

血溜まりになった、玉座の周囲。

その中心に横たわるのは、何皇后と……少帝。

事もあるうに、帝である自分の息子を手にかけ、自分も自殺。

……つまりは、無理心中。

普通でさえ許し難い暴挙なのに、皆の頂点に立つべき人物の振る舞いとしては、もはやあり得ない。

「あ、兄上……」

何皇后はともかく、少帝は協皇子にとって、掛け替えのない実の兄。

それが今、目の前で物言わぬ存在になっているのだ。

……この子の年でこれは、ショックなんてもんじゃないだろう。

「兄上ーっ！　うううう……」

衣服が血で汚れるのにも構わず、少帝を抱いて嘆き悲しむ姿に、皆無言だった。

どうやら、兄である何進大將軍が殺され、更に董卓を巡るいざこざで、前途に絶望してしまっただけ。

……死ぬのは勝手かも知れないけど、いいのか、それで。

あたしは、血溜まりの中の二人に、そう語りかけずにはいられなかった。

「さて、この後始末をどうつけるか……」

やっと落ち着いた協皇子を前に、一同が顔を揃えた。

「宦官が糸を引いていて、それを暴いた途端に今度は皇后様と陛下が自害。……こんな事、連合軍に話したところで信じて貰えると思う？」

「無理、だろうね。ボクが向こうにいたら、信じない」

雪蓮の言葉に、賈馱が大きく頷いた。

でも、虎牢関がもぬけの殻、なんてのはいくらマヌケな袁紹でも、そのうちに気付くだろう。

そうなれば、後はこの洛陽まで遮るものはない。

……時間がない、とにかく。

「とりあえず、十常侍は皆処刑ね。董卓も、それでいいわね？」

「……はい。仕方のない事ですから」

董卓は、どこか悲しそうだ。

何か、どこまでも優しい娘なんだろうなあ。

「や、やめろーっ！」

「は、放せ！」

で、連行される本人達は、必死に抵抗する。

……が、もともとがただの宦官、屈強な兵士に敵う訳もなく、そのまま連れて行かれた。

奴らについては同情の余地なし。

処刑されなければ、この中の誰かが首を刎ねていただろうし。

「さて、問題はすぐ近くに迫っている連合軍ね。あと数日は余裕があると思うけど」

「も、申し上げます！」

そこに、董卓軍の兵士が飛び込んできた。

「どうしたの？」

「ハッ、賈馱様！ 城外に、軍勢が迫っております」

「旗は？」

「曹操の手勢です」

華琳か。

あのトリックを見破るとしたら、アイツぐらいだろう、って思っ
てはいたけど。

「雪蓮！」

「策殿！ おお、綾子も朱然も無事か」

「冥琳に祭？ どうして、ここに？」

「話は後だ。曹操が迫っているのだ、早急に手を打つしかないだろ
う」

冥琳に、皆の視線が集まる。

「ああ、自己紹介が遅れました。私は周公瑾、ここにいる孫伯符の
軍師です」

そう名乗ってから、

「綾子。手短に、今の状況と経緯を説明して貰えるか？」

「え？ あ、わかった」

あたしは、宮中に忍び込んでからの流れを、掻い摘んで説明した。

時々、雪蓮や董卓がフォローしてくれたけどな。

「……なるほど、わかった。今、私が思いつく策は、ただ一つだけです。宜しいですか？」

冥琳は、協皇子と月、そして雪蓮を見る。

「まず、協皇子。貴方様は、好むと好まざると、皇位に就いていた
だく必要がございます」

「う、うむ。……兄上がこうなった以上、やむを得まい」

「そして、董卓殿。貴殿には、死んでいただきます」

「……な、何ですって！」

「待て！ 話が違うではないか、貴様！」

「せや！ 月は死なせへんで、絶対に！」

董卓軍の将達が、一斉に抗議する。

思わずあたしも同調しかけたけど、冥琳の表情を見て、それを堪えた。

「落ち着け！ 本当に死んでいただく訳ではない！」

「……構いません、続けて下さい」

「月？」

「いいの、詠ちゃん。お願いします、周瑜さん」

「はい。話の筋書きは、こうです。連合軍に敗れた董卓は、洛陽に逃げ帰った。そして、陛下に遷都を迫ったが、拒否され逆上して、陛下と皇后様を殺害。そこに飛び込んだ将が、その場で董卓を討ち取った……そういう話です」

「で、でも、月はどうするの？ 死んだことにするとしても、身代わりが必要じゃない」

賈馱の指摘は織り込み済みだったようで、冥琳は即答。

「それならば問題ない。巷に伝わっている董卓の風貌、賈馱殿はご存じか？」

「巷の？……ううん、知らない」

「我が呉では、このように言われている。董卓は脂ぎって太った大男で、怪力無双だ、と」

「周瑜！ 貴様月をそのように」

華雄、少しは話を理解する努力をしろ。

「阿呆！ 周瑜は別に、月を悪く言った訳やないやろ？ 話をややこしくせんといってくれへんか？」

「霞、し、しかし……」

「しかしもかしもあるかい！ 周瑜、済まん、続けてくれ」

「ああ。そこで、その噂を最大限に利用します。幸い、先ほどの戦闘で、似た体格の者が討ち取られた由。これを用いれば辻褄は合います」

「周瑜とやら。十常侍はいかがするのじゃ？」

黙って話を聞いていた皇子が、冥琳に問いかける。

「はっ。混乱に乗じて、粗暴の振る舞いを見せたために、陛下の英断で処罰された。これで十分でしょう」

「そ、そうか。では、そのように取り計らおう」

「それで、ウチらはどないなるねん？」

「そうだな。張遼、それに呂布、華雄は、その憤りを演じた将となつて貰う。そのまま出奔し、後で呉に下る……。これでよかろう」

「ははは、自分、なかなかえげつないな。せやったら、ウチらは呉に仕えるちゅう事やな？」

「私としては、そうして欲しい。神速の張遼に飛將軍呂布、そして猛將華雄。いずれも喉から手が出る程欲しい人材でな。もっとも、貴殿らが望まないのであれば仕方がないが」

冥琳の言葉に、張遼は少し考えてから、

「ウチはそれでもええ。ただし、条件がある」

「何だ？」

「月と詠も、一緒に呉に迎えて欲しい。二人を守れんのやったら、意味がない」

張遼の条件は、至極当然だろう。

「それなら、あたしも賛成だ」

「ふむ……。だが、それには問題がある」

「問題？」

あたしと張遼は、顔を見合わせる。

「言っただろう、董卓殿は死んだ事になる、と。死んだ者が呉にいるとなれば、どうなる？ 諸侯、特に袁紹あたりからはいらぬ疑念を持たれてしまう」

「それならば、私から提案があります」

董卓が、決意を込めた眼で、冥琳を見た。

「董卓殿？ どのような？」

「はい。……董卓仲穎は、ここで死にます。つまり、名を捨てる……どうでしょうか？」

「……それがどのような意味を成すか、おわかりの上で仰っているのでしょうか？」

「わかっています。……真名だけで、生きて行こうと思います。詠ちゃんや霞さん、恋さん、華雄さん達のためにも」

この、可憐な少女のどこに、こんな決意が秘められているんだろう。

今の彼女からは、逆らいがたいオーラが感じられる。

「月がそうするなら、ボクもそうする。月は、ボクが守るんだから」
「詠ちゃん……ありがとう」

頷き合う、董卓と賈馱。

この二人の信頼関係は、雪蓮と冥琳に勝るとも劣らない、そう思えた。

「よっしゃ、ならウチはもう何も言う事はない。よろしく頼むで！」

「わかった。呂布と華雄はどうする？」

「……恋も、月と一緒に」

「私もだ。詠が智謀でなら、私は武で月を守らねばならん」
話をついたな。

流石は冥琳だ、短時間でここまでまとめ上げるとは。

「では、準備にかかるとしよう。協皇子、全て、お任せいただけますでしょうか？」

「無論だ。頼むぞ、周瑜」

「ははっ！ 雪蓮、あなたにも手伝って貰うわよ」

「えー？ めんどくさいなー」

雪蓮、仮にも次期皇帝の前で素に戻るな……。

まあ、その本人が笑っているからいいんだろうけどさ。

「そうそう。綾子、お前にも一役買って貰いたい」

「え？」

「頼むぞ」

……なんか、冥琳からどす黒いオーラが……。

「……何故、貴女がここにいるのかしら？」

「成り行きでな。いろいろあって」

「成り行きで入れる場所じゃない事ぐらい、わかっているでしょう？」

華琳は、明らかに不機嫌だった。

そりゃまあ、洛陽に一番乗りを果たした、と思った矢先に呉の軍勢がいて。

その上、あたしが宮中に居るとか……まあ、華琳じゃなくても訝しむか。

現に、華琳も連れているのは夏侯惇だけ。

信じられない事に、この猪も官位持ちで、曹操軍でも唯一の存在なんだとか。

「……何だ、貴様。私の顔に何かついているのか？」

「いや、別に」

「馬鹿にしているのか！ 何なら、今この場で斬り捨ててくれるぞ！」

「……春蘭。止しなさい、ここは宮中よ」

「し、しかし華琳様」

「言う事が聞けないのなら、しばらく閨は禁止にするけど？」

「うう、わかりました……」

そっちは関わりたくないの、スルーして。

「とりあえず、案内するから。ついて来て」

「ハア、わかったわ。けど、納得のいくように説明はして貰うわよ？」

「はいはい」

全く、冥琳の奴も無茶振りばかりするよな、ホント。

玉座には、協皇子が座っている。

正式にはまだ帝ではないけど、今は彼がこの朝廷の最上位。

どのみち、もうすぐホントに皇帝になるのだし、そもそも咎め立てするような奴は、もうこの宮中には残っていない、。

「典軍校尉、曹操、参上致しました」

「うむ、大儀である」

皇子は鷹揚に頷く。

「ところで皇子。一つだけ、お尋ねしたい事が」

「申してみよ」

「この者ですが、何故ここにいますのでしょうか？ 官位も持たぬ身でありながら、許されざる大罪かと」

あゝ、そう来たか。

しかし、説明ってあたしじゃなくて皇子にさせるかね、普通？

あたしをチラ見して、一瞬だけニヤツとしてるし。

……皇子とあたし達がグルなんじゃないか、そう疑ってるぞ絶対。

「その者ならば、心配は無用だ」

「理由をお聞かせ下さい。朝廷の臣として、見過ごす訳にはいきません」

「ならば、聞かせよう。董卓が、私の母上と兄上を手にかけてのは、承知であろう？」

「はい」

皇子は、そこでフツと息を吐いた。

「その後、血迷ったのか、私まで亡き者にせんと、襲ってきたのだ」
「なんと」

夏侯惇は驚いているが、華琳は黙ったまま。

「間一髪で奴の手を逃れ、城門まで行ったのだが……。そこで、董卓に見つかつたのだ。だが、間一髪でこの者が飛び込み、董卓を追い、見事討ち取つたのだ」

「しかし、それはそれ。官位を持たぬ者がみだりに宮中に出入りしては、漢王朝の沽券に関わるかと」

……よく言うよ。

漢王朝はもう終わった、なんて公言している奴が。

「ならば、官位を持てば問題ないのだな？」

「……は？」

「これ、孫策をここへ」

「ハッ！」

どういう事、という顔をする曹操。

このぐらい、冥琳がお見通しって訳さ。

「お召しにございますか」

「うむ。私が協だ」

「姓は孫、名を策、字を伯符と申します。拝謁を賜り、恐縮に存じます」

「この国のため、先んじて駆けつけてきた事、大儀である。また、先には黄巾党の征伐並びに揚州の平定、重ねて見事であった」

「ははっ」

「よって、孫策。皇帝代理として、その方を揚州牧に命じる。励むがよい」

「ありがたきしあわせ！」

「そして、曹操」

「は、はっ！」

「その方も黄巾党征伐に多大なる功あり、と聞き及んでおる。また、エン州を見事に収め、民に平穏をもたらす手腕、また見事だ。よっ

て、その方はエン州牧を命ずる」

なるほどなあ。

雪蓮だけじゃなく、曹操までも賞してしまえば、不公平感はない。しかも、二人は真っ先に駆けつけた、という点で、他の諸侯との差別付けになる……そういう事か。

はあ、あたしにや無理だね、こういうのは。

「また、美綴。董卓を討ち、その臣下を屈服させたその武勇と機智、見事である。よって、会稽郡の太守と、討逆將軍に命ずる」

「は？……あ、は、ははっ！」

いきなり名指しされたので、どもってしまった。

けど、太守って……。

あと、將軍って何だ將軍って。

勢いで受けちゃったけど、いいのかこれ？

「逆賊董卓を討ち果たしたのだ、その名に恥じぬよう、励むのだ」

いや、励むって言われましても……。

混乱したままのあたしを余所に、皇子は席を立つ。

「では、皆の者、大儀であった。下がって良い」

「ははーっ」

訳がわからないまま、あたしは雪蓮に引き摺られるように、退出した。

「どういふつもりかしら、これ？」

「いや、どうって言われても……」

退出後、華琳に迫られた。

確かに、あたしが董卓を討った云々は、グルになってるけど。

官位云々は聞いてなかったし、そんなつもりもなかった。

だいたい、あたしが朝廷の官位とか似合わないし。

「まあ、今更下された沙汰を覆すのもおかしいし、有り難く頂くしかないけど。それにしても、釈然としないわ」

そりゃそうだろ。

一応辻褄こそ合わせたけど、やってる事はかなり強引だし。

……かと言って、事実を話す訳にはいかないしなあ。

「あ、いたいた。綾子、行くわよ」

そこへ、雪蓮がやって来た。

「へ？　行くって、どこへ？」

「決まってるじゃない。わたしと、綾子の官位拝領祝いよ」

そう言いながら、あたしの手を引っ張り、歩き出す。

「ちょっと待ちなさい！　まだ、話は済んでいないわ！」

「悪いけど、綾子は呉の臣よ。あなたに指図される謂われはない。

それに、今のわたしは曹操、あなたと対等の立場よ？　わたしが命令を聞かないといけない理由、どこにもないわよね？」

「クッ……。わかったわ、けど覚えてなさい。このまま黙って引き

下がる私じゃないから」

華琳は、冷たくそう言った。

……後が怖いけど、とりあえず今はこの場を逃れるとしよう。

「じゃーねー」

「それじゃ」

あたし達を睨み付ける華琳を残し、雪蓮についていく。

「ぷはー。んー、お酒が美味しいわ」

ホントに酒宴になっていた。

「うむ。策殿も正式な官位をいただき、揚州もこれで胸を張って支配できる。綾子もこれで、誰もが認めるところ。まこと、万々歳じやな」

「ふう、雪蓮も祭殿も、ほどほどにして下さいよ」

「何を言う冥琳。このような場ぐらい、好きに飲ませんか」

「そうそう。ねー、綾子？」

だから、あたしに振るな。

ほら、冥琳が難しい顔であたしを見てるし！

と、そこに董卓と賈馱が、やって来た。

「皆さん、これからよろしくお願いします。私の事は、月、と」

「……ボクは詠」

「ん、よろしくね♪ わたしは雪蓮でいいわ」

「儂は姓は黄、名は蓋、字は公覆じゃ。今後は、祭で良いぞ」

「私も、冥琳で構わない」

必然的に真名を名乗らざるを得なくなった二人に、みんなも真名を許す事にしたみたいだ。

明命、霰、菖蒲もそれぞれに真名を交換。

「あたしは真名がないから、綾子でいいぜ？」

と、ただ一人黙っていた奴がいきなり発言。

「……皆さん。私、いえボクも、仲間に入れていただきます」

「あら、朱然？ どうしたの？」

雪蓮だけじゃない、皆が驚いた。

……まあ、ボク口調は隠していたからな。

「ボクだけ名前のまま、つてのは変でしょ。それに、皆さんがどういう方々なのか、理解できたつもりですから。ボクの真名、預けます。紅蓮ぐれん、とお呼び下さい」

「わかったわ。よろしくね、紅蓮」

こうして、新しい仲間が加わった。

……しかし、ホントに貰ってしまった官位と役職だけど……どうすんだ、これ？

〓三十〓（後書き）

まだ続きますが、平行して別の話を書こうと考えています。
活動報告でそちらについては触れていきたいと思しますので、よろ
しければご確認下さい。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

挿話　く華雄の場合く（前書き）

予告通り、華雄についての挿話を投稿します。

挿話　く華雄の場合く

我が名は華雄。

字は……ええい、ないものは仕方ないだろう！

真名は、あるにはあるのだが、言う訳にはいかないのだが。

月には、多大な恩がある。

武しか取り柄のない私を、大切な仲間として迎え入れてくれた。

それだけの事だが、それすらも叶わなければ、今の私はないだろう。

だから、この武は全て、月のために。

月に向けられる刃を全て、打ち払うため。

私はただ、そのためにのみ、戦う。

そんな月を一方的に悪に仕立て上げ、諸侯が連合を組んで攻めてくる。

そう聞いた時は、皆が激怒した。

無論、私も。

許せない、月が一体何をした？

ただただ、何進の求めに応じて、洛陽の民のために都に出てきただけ。

それが、宮中の権力争いに巻き込まれ、挙げ句の果てには宦官共
に人質に取られてしまった。

命を助けたければ、我らに従え、と。

月が悲しむ度、民の怨嗟の声は高まる。

月が涙する度、宦官共はますます肥え太る。

詠が何とか月を救おうと懸命に手立てを講じてても、どうにもならない。

……ましてや、武しか誇るもののない私には、何もできない。

そんな自分の無力さが、辛かった。

そんなある日。

「全く、軍議の時間だというのに何をやっているのだ、あやつは！」「思わず呟きながら、私は恋のところに向かっていた。

連合軍はシ水関目指して、集結中……その知らせが入った。

それで、軍師である詠が、全員を招集。

……したのだが、肝心の恋の姿が見えない。

詠は兵に探させる、と言っていたが、どうせ居る場所は限られている。

大方、自宅で動物と戯れているのだろう。

武は到底敵わないが、何を考えているのかが一向に読めない奴だ。

「おい、呂布。何をしているのだ？」

家を覗き込むと、案の定奴はいた。

……が、見知らぬ奴が一緒だ。

私と似た髪型の、女。

「……かゆー」

「む？ 誰だ、貴様は？」

女の視線が、何故か不快だ。

……この鎧が、何か気に入らないのか？

自然、私の表情も険しくなる。

「誰って……。呂布に連れて来られた、しがない一般人だけど？」

「怪しいな。大方、どこぞの間諜であろう！」

今は、不審人物が城内にいる事自体、おかしいのだ。

「……綾子、怪しくない。恋の、友達」

「何を言っている！ このような時に、怪しい奴を城内に入れるなど！」

恋では話にならん。

私自身で、この怪しい奴を引っ捕らえてくれる！

金剛爆斧を取り出し、構えた。

「呂布はいざ知らず、私の目は誤魔化せんぞ。ハアア！」
ブオン！

「うおっ、危ねえだろ！」

「ほお、それを避けるか」

ただの鼠ではないようだ。

あの身の軽さ、ただ者じゃない。

「避けないと死ぬだろ、あたし！」

「当然だ。殺そうとしているのだからな！」

捕らえるつもりだったが、気が変わった。

問答無用で、斬る！

ブン！

クッ、また避けられた。

恋、お前も見えてないで手伝え！

ブオン、ブオン！

一撃も当たらないとは、どういう事だ？

私は、次第に苛立ってきた。

「ちょこまかちょこまかと！ それでも貴様、武人か！」

腰に帯びた剣を抜く素振りも見せない。

これだけ動けるというのに、私を愚弄しているのか！

ますます、許し難い。

「でやああああっ！」

ブン！

かわしながら、奴の姿が一瞬見えなくなる。

背後？

「なにっ！」

振り向こうとした私は、足を掬われた。

そのまま、転倒してしまう。

そして、腹に衝撃が来た。

「ぐげっ！」

情けない声を上げた私の意識は、そこで途切れた。

「……華雄。おい、しつかりせえ！」

気がつくと、目の前に霞が。

「……私は……」

「はあ、全くしゃあないやつだな。ほれ、起きんかい」
「ああ……」

まだ痛む腹を押さえながら、身体を起こす。

「華雄まで戻らへんから、むっちゃ心配したんやで？」

「すまん。あのような不覚を……」

と、そこで気付いた。

「や、奴はどこだ！」

「奴って誰の事言うてんのや？」

「決まっているだろう！ あの間諜だ！」

寝ている場合じゃない。

あの怪しい奴を探し出し、今度こそ斬り捨てねば。

「ちよい待ち！ 誰の事やよう知らんけど、軍議が先や。アンタを皆が待つとる」

「し、しかし……」

「しかしもかかしもあるかい！ 行くで！」

「ま、待て、霞！ 私にも……」

抵抗空しく、引き摺れていく私だった。

……必ず探し出して、奴を斬る！

「連合軍の方が数で勝る。となれば、こっちは地の利を活かして戦うしかないわね」

詠の言葉に、霞が頷く。

「待て！ たかが烏合の衆ではないか。私が蹴散らして来よう」
それが手っ取り早い。

そう判断し、出撃に向かおうとする。

その前に、詠が立ちはだかった。

「華雄！ どこに行く気よ！」

「決まっているだろう。敵はシ水関に迫っているのだろう？ ならば、討って出て、私の武を見せつけてやるのだ」

「ド阿呆！ さっきの詠の言葉聞いとらんかったんか？ 敵の方が数が多いんやで？」

霞が、私の胸ぐらを掴んでくる。

「クッ、放せ！」

「いいや、放さへんで！」

「霞、お前は口惜しくないのか？ 月があのように一方的に蔑ろにされて」

「そないな訳あるか！ ウチかて口惜しいのは一緒や。せやけど、無闇に敵に突撃をかければええっちゅうもんやない」

「で、ではどうやってこの屈辱を晴らす！」

「……そのために、ボクが策を講じる。口惜しいのは華雄だけじゃない、ボクだって」

ギリ。

詠が、奥歯を噛みしめている。

「……わかった。では、指示を頼む」

だが、どうあれ敵には鉄槌を食らわせてやる。

月を苦しめる輩は、誰であろうと容赦はしない。

「おい、華雄！ いるなら顔を見せろ！」

「こ、この声は！」

私は城壁へと向かう。

「華雄、どこ行くつもりや！」

霞が制止するが、私は止まるつもりもない。

「先日はよくもいきなり襲いかかってきてくれたな。だが、全然迫

力もなかったし、あたしはこうしてピンピンしている。武が自慢らしいが、大した事はないんだな！」

「華雄將軍！ 危険です！」

「ええい、どけ！」

兵士達をかき分け、城壁から身を乗り出す。

馬に乗った将が、こちらを見上げて声を張り上げている。

奴だ、間違いない。

「き、貴様か！」

「やっと顔を見せたか。でも、あたしが怖いんだろ？ なんせ、貴様の攻撃はかすりもせず、無様にあたしに気絶させられたんだからな」

「い、言わせておけば！ 我が武を穢すか！」

「武って言われても。貴様はただ、バカ力があるだけだろ？ あたしに勝とうなんて無理無理。さっさと逃げ帰ったらどうだい？」

「おのれ！ それ以上の罵詈雑言、許さん！」

これ以上、罵詈雑言を吐かせておく必要はない。

あの頸、我が手で落としてくれる！

「待たんかい！」

飛び出そうとした私は、霞に羽交い締めにされた。

「行かせろ！ 我が武を穢した罪、贖わせる！」

「阿呆！ あんな見え透いた挑発に乗るんやない！ ウチらの任務を忘れたんか！」

「そうではない。だが！」

「わかつとるやろ？ ウチらは、ここで時間を稼がなアカン。時間を稼げば稼ぐだけ、月は助かるんや」

「しかし、しかしだな！」

「ウチかて、戦いたい人は一緒や。せやけど、堪えてくれ」

「クッ……うわあああああ！」

口惜しい。

何故、これ程までに屈辱を味わわなければならんだ。

「その斧は飾りか？ その際どい鎧は、誰かを誘惑するためか？
これだけ言われてまだ動かないとは、腰でも抜けたのか？」

「華雄！」

「霞、頼む！ もう、私には耐える事などできん！」

「ああもう！ 何べん同じ事言わせるんや！」

「華雄將軍！」

と、我が隊の兵士がやって来た。

「もう、これ以上の侮辱には耐えられません。討って出ましょう」

「ちよい待ち！ 何を言うてんねん、自分ら！」

「……いや、よくぞ言ってくれた。華雄隊、出るぞ！」

「応っ！」

「こ、コラッ！ アカン言うとりやろうが！」

部隊が動き出したせいか、霞は私を放した。

「行くぞ！」

金剛爆斧を手に、私は城門へと向かう。

「皆、揃っているな？」

「ハッ！」

「もはや、耐える必要はない。敵を粉碎するぞ！」

「応っ！」

ギギギギ。

シ水関の、門が開かれていく。

「皆の者！ 受けた屈辱、倍にして返せ！ 奴らの血で贖わせよ！」

「応っ！」

あたしは、まっしぐらに奴のところへと向かう。

「出てきてやったぞ！ 今度こそ、雪辱を果たす！」

ヒュンヒュン！

何っ、伏兵だと？

「ぐわっ！」

「ぎゃっ！」

兵士たちが、次々に矢を受け、倒されていく。

「おのれ！ 更に卑怯な手を使うか！」

「卑怯も何も、これは戦だろ？ さ、かかってきな」

「減らず口を！」

ブオン！

金剛爆斧を振り下ろす。

またしてもかわされる。

なら、当てるまでよ！

「どうしたどうした？ 口ほどにもない」

「ほざけ！」

振り下ろしてダメなら、突きはどうだ！

……かわされた。

「避けるな！」

「無茶苦茶言うな！」

「でえええええい！」

ガシッ！

奴に、柄を掴み取られた。

「は、放せ！」

「お断りだ」

そのまま、奴は左肘を叩き込んできた。

「ぐふっ！」

一瞬、気が遠くなった。

だが、金剛爆斧は、手放さない。

カチャリ。

奴は剣を抜くと、柄に切りつけた。

スパッ！

「ああっ！」

刃の部分が、根元から切断された。

わ、私の金剛爆斧が……。

呆然としていると、今度は蹴りが飛んできた。
反応が遅れた私は、そのまま落馬してしまう。

「グッ！」

「よし！ 捕らえろ！」

敵兵どもが、駆け寄ってくる。

「クソッ！ 殺せ！」

「悪いけど、そんなつもりはないんだよ。ちよつと、眠っていて貰うよ？」

とどめとばかりに、腹に、重い一撃を食らった。

「……う」

またしても、意識を失った。

「……う……」

「気がついたか？」

どこかの、天幕の中。

そして、目の前には奴と、見知らぬ女がいた。

私は、雁字搦めに縛られている。

「どういうつもりだ！ 殺せ！」

「頼むからちよつと話を聞いてくれ」

「聞く耳など持たん！ 貴様らは敵だ！」

死を恐れはしない。

ただ、月を守ってやれなかったのは心残りだが、それは霞や恋が何とかするだろう。

私は、武人として死ねれば本望だ。

パン！

と、頬に鋭い痛みが走った。

どうやら、奴に撲たれたらしい。

「何をする！」

「話を聞け、と言っただろう？」

少し冷静になった私は、奴の話を聞く事にした。

奴は、美綴、というらしい。

そして、背後にいる女が、孫策。

孫堅には一度、屈辱を味わっているが、その娘らしい。

美綴は、語った。

洛陽で月に会った事。

短い時間ではあったが、その人間性を垣間見た事。

……そして、何とか救い出したい、という事も。

「正気か？ 貴様」

「ああ、正気さ。あたしは、信じた奴は何としても守り抜きたい。そう思ってる」

美綴は、真剣そのものだ。

「だが、それと私とが、どうつながるのだ？」

「だから、華雄も董卓を信じているからこそ、従っているんだろう？ だったら、目指すところは同じじゃないか」

「……し、しかしだな。そんな事をして、貴様らに何の得がある？」

美綴の言葉に、心を動かされ始めている事は、自覚していた。

だが、容易く信じていいものだろうか？

「わたしも、最初はそう思ったわ」

それまで、黙ってやり取りを見ていた孫策が、口を開いた。

「でもね。わたしは仲間が笑顔でいられる、そんな国にしたいって思ってるわ」

「そ、それとこれと何の関係がある」

「その綾子達の報告。支配される民が、みんな笑顔だった。つまりは、目指すところがわたしと同じって事じゃないかしら、それって」

そうだ、確かに月の治世は、民が嘆いている姿は見たことがない。

「それに、とってもいい娘みたいじゃない。だったら、助けて仲間にできないかな、ってね」

孫策の言葉に、偽りは感じられない。

視線も、真っ直ぐに私を捉えたままだ。

「だから、華雄にも力を貸して欲しいんだ」

「……美綴、孫策。話はわかった。月を害するつもりがないのなら、私はそれでいい。ただし」

私は言葉を切って、

「もし、その言葉が偽りであつたら、その時は貴様らの素っ頸、そのままでいると思うな」

「ははは、その時はそうしてくれ。けど、絶対にそうはならないけど、な」

不思議な奴だ、美綴も孫策も。

……敵愾心が、もはや湧いてこない事に、今さながら気付いていた。

「わかった。月を救うため……私もお前達と共に行く」

「決まりね。じゃ、皆に紹介するわね」

孫策は、私の縄を切りながらそう言った。

月とは違うが、こいつも王者の器……なのかな。

挿話　く華雄の場合く（後書き）

他のキャラについても、挿話を書いています。
次章に進むのは少し先になりそうです。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

挿話　く徐盛の場合く（前書き）

徐盛（菖蒲）の挿話です。

挿話　く徐盛の場合く

「秣はこれで全て、と。糧の方は如何ですか？」

「ハッ！　後少しとの報告が」

「わかりました」

竹簡に、数字を書き込んでいく。

綾子様から教えていただいた、『あらびあ数字』というモノは、とても便利だ。

私が知っている数字だと、こんな風に細かに書き足していくには向かない。

でも、これなら場所も取らないし、後から見ても一目でわかる。

綾子様曰く、

「あたしのいた世界なら、誰でも知っている事さ」

……だそうだ。

でも、綾子様の事だ、きっと謙遜しているのでしょう。

常にご自分には謙虚で、他人には屈託なく。

……つくづく、凄いお方だと思う。

私が今、こうして雪蓮様にお仕えし、糧秣の管理という任務までいただけているなんて、少し前の自分からは想像もできない。

「徐盛様！　全て確認終わりました。詳細はこちらに」

「ありがとうございます」

最後の竹簡を受け取り、照合に入る。

「よっ、やってるな」

「え？　あ、綾子様！」

お忙しい筈の綾子様が、片手を上げてそこに立っておられた。

「どうだ、調子は？」

「は、はい！　何とか、やらせていただいています」

「そっか。できれば何かアドバイスしてやりたいところなんだけど

……」

「あどばいす？」

綾子様は、時々不思議な言葉遣いをなされる。

「あ、悪い悪い。助言、って言いたかったんだ」

「そうでしたか。ですが、お気遣いは無用です。冥琳様がいろいろと相談に乗って下さいますので」

「そ、そうか」

と言っても、冥琳様は軍師として、全体を見ておられるお方。

私は、なるべくお邪魔にならないよう、頃合いを見てお尋ねするようにしている。

「美綴様！ 孫策様がお呼びです、お戻りを！」

本陣から、伝令の兵士が駆けてきた。

「雪蓮が？ わかった、すぐに戻る。じゃあ、頑張れよ、菖蒲」

「はい！ ありがとうございます」

去っていく綾子様の背中を見送りながら、私は思う。

……あの時、綾子様にお会いできて本当に良かった、と。

ガシャン！

「おじいちゃん！」

慌てて、駆け寄る私。

「大丈夫？」

「あ、菖蒲よ……。お前はお逃げ」

「だ、ダメだって。私だって」

キッ、と男達を睨み付ける。

「なんだ、このガキは？」

「邪魔だ、どけ！」

「あっ！」

男の一人に胸ぐらを掴まれ、突き飛ばされた。

「お、お前さん方。何をするだ！」

「バカ野郎。俺様から金を取ろうだあ？」

「全くだ。オメエ、頭大丈夫か？」

言っている事は滅茶苦茶。

露天で食糧を売っていたおじいちゃんは、代金も払わずに商品を持って行こうとする連中を、押しとどめただけ。

もちろん、食糧は全て対価があるのに、それを払わないのだから当たり前。

なのに、男達は逆に因縁をつけてきた。

ドンッ！

連中は、おじいちゃんを蹴り飛ばした。

並べていた商品は散乱し、売り物にはもうなりそうにもない。

そして、今度はおじいちゃんの胸ぐらを掴む。

駆け寄ろうとした私は、別の男に羽交い締めにされた。

勿論、抵抗するが、非力な私では振り解く事もできない。

「や、やめて！ おじいちゃんから手を離して！」

「うるせえ、このガキ！」

「おい、じい。このガキ、借りてくぜ。もっとも、返すつもりはねえがな」

「あ、菖蒲！ 孫娘には手を出すでねえ！」

「やかましい！」

バキッ。

おじいちゃんを剣で殴り付ける男。

あ、額が割れて血が……！

「さ、来いよガキ」

「い、嫌ああ！ おじいちゃん！ だ、誰か助けて！」

誰でもいい、助けて！

必死で周りを見るけど……皆、怯えの色を顔に出すだけ。

私に、もっと力があれば……。

「へっへっへ、誰も助けなんてい……いでででで！」

不意に、身体が自由になった。

私を捕まえていた男が、顔を歪ませている。

「全く。下衆とはまさにお前らの事だな」

女性二人が、そこに立っていた。

……孫権様と、美綴様。

もちろん、ただの庶民がお二方と面識などある訳がないけど、私は知っていた。

片や孫策様の妹君にて王者の相を持ち、片や『天の御遣い』と噂される人物。

……少なくとも、私達の間では、そう噂される人物。

「へっへっへ、威勢のいい姉ちゃん。なら、ちよつと俺たちとつきあ……へごばっ！」

おじいちゃんを殴り付けた男が近づいたところを、美綴様が顎を殴り付ける。

歯が折れ、そのまま吹き飛んだ。

「このアマ！ 何しやがる！」

男の仲間が、剣を抜く。

「さて、どうする？」

「決まっているだろう？ こういう連中には、身体でわからせるしかないさ」

お二方はは怯むどころか、逆に男達を睨み付けた。

……本当に、強い方たちなんだ。

「死ね！」

ビュン！

振り下ろされた剣を、軽々とかわされる、美綴様。

「隙だらけだぞ！」

そして、回し蹴りが決まった。

「ギャーッ！」

蹴られた男は脇腹を押さえ、のたうち回っている。

そして、孫権様と言うと、剣を振るっておいでだ。

ギン！

ザシュ！

「ひ、ひぎい！」

剣ごと、腕を斬り飛ばされた男が、転げ回ると、別の男が小刀を出し、突っ込んでいく。

あああ、危ない！

「くそっ！」

「おっと」

でも、美綴様は余裕でそれをかわされると、男の腕を捕まえた。

「それっ！」

そして、思い切り体重をかける。

ボキボキボキ。

「いでででででっ！」

腕を折られた男、もちろん戦うどころじゃなさそう。

「美綴！ 剣は！」

「要らないね。この程度なら」

「そうか。せやっ！」

「うぎゃー！！」

また一人、膝を斬り割られた男。

……凄い、その一言に尽きる。

感嘆しながら見ていた私は、不意に腕を掴まれた。

「う、動くなテメェら！」

残った一人が、私に小刀を突きつけてきた。

「動けば……わかるな？」

「クッ！ 卑怯だぞ、貴様ら！」

「やかましい！ このガキぶっ殺されたくなかったら、武器を捨てろ！」

ガラン。

孫権様が、剣をお捨てになった。

腕を折られた男が、それを拾い、孫権様に突き付ける。

美綴様も、鞘ごと剣を引き抜かれた。

「それも捨てろ！ ガキがどうなってもいいのか！」

「あゝ、わかったわかった」

美綴様が剣を放り投げると同時に、何かが飛んできた。
ビシュッ！

「ぐはっ！」

私を捕まえていた男が、眉間を割られて、倒れた。

い、今の……何？

「てめえ！」

最後に残った男が、孫権様に向かっていく。

チリーン。

え、鈴の音？

ビュッ！

「……あ？」

男は一瞬何かを言いかけて……首を飛ばされていた。

血飛沫が、あたり一面に飛ぶ。

「助かったわ、思春」

見るからに業物の剣を手に、武人らしき人が登場。

孫権様に対する態度……間違いない、孫権様にお仕えする方だ。

名前までは存じ上げないけど、あの腕前だ、並のお方じゃないだろう。

「ハッ。……美綴、貴様気づいていたな？」

「ん？ 何の話？」

「フン。蓮華様、お怪我は」

「え、ええ、大丈夫」

「では、後始末は私の方で」

何を話しているのかはわからない。

……でも、私もおじいちゃんも、助けられたのは確かだった。

「ありがとうございますだ、何とお礼を申してよいやら」

私は、手当を受けたおじいちゃんと一緒に、何度もお礼を言った。
命を救われたのだ、これでも足りないぐらいだろうけど。

「こちらこそ、警備が行き届かずに酷い目に遭わせてしまった。申し訳ない」

「とにかく、無事で良かった。じゃ、気をつけて帰りな」と、お二方は立ち去ろうとする。

慌てておじいちゃん、お二方の服の袖を掴んだ。

「そ、それじゃおいらの気が済まねえだ！ お、お礼をさせて下せえ」

「だからそのようなつもりはない。気にしないで欲しい」

おじいちゃんの必死の様子に、かなり困惑しているご様子のお二方。

「菖蒲。よいな？」

何を言いたいのか、察しはついた。

……私も、勿論異存はない。

「うん、じゃなくって……はい！」

私は、大きく頷いて見せた。

「美綴様、でしたかな？」

「え？ あたし？」

「おいらには何もねえ。だから、この孫娘を、使ってやって下せえ」

「……へ？」

あ、驚いていらっしゃる。

「い、いや、あたしは……」

「じゃ、しっかりやるだぞ？」

「はい。美綴様、よろしくお願いします！」

思いがけない機会、でも絶好の機会でもあった。

だって、あの美綴様にお仕えする事ができるのだから。

困惑しておいでのようにだけど、私は引き下がるつもりは、ない。もう、決めた事だもの。

「……で、どうしても？」

「はい。お仕えするなら美綴様。そう決めています」
孫権様と美綴様について、孫策様の館へ。

「美綴。どうするんだ？」

「どうするって……。あたしは太守でも何でも無いんだし、アンタを」

「徐盛です」

「あ、ああ。……徐盛を部下にするだけの資本もないんだぞ？」

「お給金なら、後で構いません。多少は、蓄えもあります」

「し、しかしな……」

ここで断れる訳にはいかない……この機会を逃したら、もうこんな事はないかも知れない。

思わず、涙が溢れて来ちゃった。

「ダメ……ですか？」

上目遣いに美綴様を見る。

「う……」

動揺されている、もう一押し。

「お願いです。私、どうしても！」

と、孫権様が見かねたように、

「美綴。この娘、本気みたいだぞ？」

「そ、そうなんだろうけど……」

「決心がつかない？　なら、私から質問、いいか？」

「は、はい！」

まさか、孫権様から直々にお声がかかるとは思わなかった。

身体が、自然と緊張で硬くなってしまう。

「知っての通り、美綴は孫伯符に仕える身。お前が望んでいるのは、孫伯符の陪臣になる、そういう事だ。それはわかっているのか？」

「はい。孫策様にお仕えする事に、否はありません。ただ、直接お仕えするのは美綴様だけ、そう決めています」

「ふむ。ならば何故、そこまで美綴にこだわる？　先ほど救ってやった、それだけではあるまい？」

孫権様の疑問は、もつともだと思う。
だから、私も素直に答える事にした。

「一目惚れ、です」

「ひ、一目惚れ？」

孫策様は驚かれていますし、美綴様は慌てふためいている。

「ま、待て！ あたしはそっちの気はないぞ！」

「そ、それはどうかと思うぞ、私も」

「あ、申し訳ありません。誤解を招く言い方をしてしまいました」
……正直、そういう気持ちが皆無かと言うと、嘘になるけど。

コホン、ま、まあ、それはさておき。

「美綴様が、この地に来られて間もない頃ですが。街の酒家で、酔っ払いが暴れていた事は覚えておいででしょうか？」

「……ああ、確かに」

「その時、初めてお姿を拝見しました。そして、その腕前も」

「美綴。どういう事だ？」

孫権様は腑に落ちないようで、美綴様にお尋ねになっている。

「いや、黄蓋さんに美味しい酒を飲ませるからついて参れ、と連れ出された事があったんだ。で、目的の酒家に着くと、酔っぱらい同士が喧嘩していたんだよ」

「そこで、あつという間に酔っ払いをちぎっては投げ、ちぎっては投げ。……あまりのお姿に、感動してしまいました」

「で、美綴に惚れ込んでしまった……という事か」

「はい。そして、今日は助けていただきました。このご恩も返したいのです」

私の偽りない気持ち。

「孫権、どうしたらいい？」

「わ、私に聞くな！ 第一、この娘が仕えたいというのは、貴様だろうが」

やっぱり、無理なんだろうか。

剣もまだまだ未熟だし、背も小さいし。

……でも、諦めきれないし、今更そんなつもりもない。

「お願いします！」

私は、全身全霊をかけて、お願いする。

「……参ったな」

美綴様は、ポツリと呟いた。

「とりあえず、雪蓮姉様に聞いてみるのはどうだ？」

「あら、わたしに何か用？」

そこに、孫策様と周瑜様が。

「姉様！」

「雪蓮、実はさ……」

美綴様は、私の事をお二方に説明した。

「なるほどね。そっかそっか、綾子の事が大好きなのね、あなた」

「……っ！」

孫策様のお言葉に、顔が真っ赤になってしまう。

「冥琳はどう思う？」

「ふむ。まだ何とも言えんが……磨けば光る、原石かも知れん。これだけ真っ直ぐな眼をしているのだ、間諜の疑いはなさそうだしな」

「じゃ、問題ないんじゃない？ 結局は、わたしに仕えてくれる、そういう事でしょ？」

「は、はい。勿論です」

「わたしは別に構わないわよ。綾子が、どうしてもダメ、というのは別話だけど」

孫策様から、お許しはいただけた。

後は、美綴様だけ。

「お願いします、どうか！」

「だああ、わかったわかった！ 好きにしてくれ！」

半ば自棄気味に、でも美綴様のお許しも出た。

「ありがとうございます！ 私は姓は徐、名は盛、字は文キヨウです。真名は菖蒲です、皆様にお預けします！」

「ちよっと、いいの？ いきなり」

驚く孫策様。

「はい！いきなり押しかけた私を、信用していただいた証です！」
「そ、そう？……そういう事だから、綾子。この娘、お願いね♪」
「……わかったよ。よろしくな、あたしの事は綾子でいい。真名がないからさ」

「は、はいっ！よろしくお願いします、綾子様！」

「……様。徐盛様」

「……はっ？」

我に返った。

目の前で、さっきの兵士が困惑している。

「如何なされました？」

「あ、い、いえ、何でもありません」

いけないいけない、思わず思い出に浸ってしまった。

「次のご指示をいただきたいのですが」

「あつ、はい。糧を、小分けにしていただけですか？ 急な行軍に

備えたいのです。量は、ここに記しました」

「ハッ、では早速」

駆けていく兵士の姿を見送りながら、私は決意を新たにす。

……もつともつと、頑張らなきゃ。

敬愛する、綾子様の為にも。

挿話　く徐盛の場合く（後書き）

他のオリキャラについての挿話は如何でしょうか。
特にリクエストがなければ、次章へ進みます。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

主人公及びオリキャラ設定その2（前書き）

オリキャラが一人追加になりましたので、その紹介を。

あと、綾子のステータスが変化していますのでそれも載せておきます。

主人公及びオリキャラ設定その2

◇主人公◇

姓…美綴

名…綾子

字…なし

真名…なし

□ステータス

武力…105(+28)

知力…55(+0)

政治…60(+5)

魅力…100(+25)

※綾子は英霊ではないので、コー〇ー三国志風で

※官位を得た事により、魅力と政治値アップ

※実戦をいくつかくぐり抜けた事により、武力値もアップ

□武器

青コウの剣(コウは金へんに工)

倚天の剣

弓(無銘だが綾子専用)

※薙刀は破損し、現在未修復

□人間関係(三十話時点)

・敬愛…雪蓮、菖蒲、小蓮、明命、祭、冥琳

・信頼…蓮華、千花、思春、穂、亞莎、霰、月、詠、紅蓮

・好意…華琳、協皇子、恋

・知己…一刀、趙雲、程立、戲志才、華雄、張遼、陳宮、許都、

典韋

・無視…凌統、張角、張梁、張宝、荀イク、夏侯惇

※これもコー〇ー三国志風に

※真名を交換していない人物は、姓名だけとしてあります

◆オリキャラ◆

姓…朱

名…然

字…義封

真名…紅蓮^{ぐれん}

□ステータス

武力…85(+0)

知力…81(+0)

政治…64(+0)

魅力…80(+0)

※英霊ではないので、コー〇ー三国志風で

□武器

剣(名称未定)二振り

□エピソード

・千花のところで綾子と出会い、敗北

・綾子が洛陽の偵察に向かう途中、窮地から救い出され、以後同行する

□性格及び特徴

・背丈は綾子とほぼ同じ

・鳶色の瞳に、ウェーブのかかったセミロングの銀髪

・性格は捌けていて、普段は冷静。ただし激情をあらわにする事も

・ 武だけでなく智にも長けていて、明命ほどではないが情報収集を得意とする

・ 綾子の呼び方は「綾子様」、自分自身は「ボク」

□人間関係（三十話時点）

・ 敬愛…千花

・ 信頼…綾子、明命、雪蓮、冥琳、菖蒲、霰

・ 好意…祭、月、詠

・ 知己…張遼、華雄、呂布

・ 無視…

〓三十一〓(前書き)

次章に入ります。

（三十一）

いろいろあったけど、無事に呉の地に戻って来られた。

「ちよつとの間だったのに、随分懐かしい気がするなあ」

空気も、水も、人々の雰囲気も。

……まだ一年も経たないってのに、この懐かしさは何だろうな。

「あら、綾子もだいぶ馴染んできたわね。古参みたいな事言つて」

悪戯っぽく、雪蓮が笑った。

「さ、行きましょ。討逆將軍様」

「……だから、それは勘弁してくれって」

「しかし、皇帝陛下代理直々のご沙汰だからな。なあ、会稽太守殿？」

「うう、冥琳まで……」

全く、官位なんてあたしは望んでないのに……ハア。

「溜息などつかぬ方がよいぞ、綾子殿。貴殿は、今回の功一等なのだからな」

「霞様の仰る通りですよ、綾子様。元気出して下さいよ」

「もっと胸を張れ！ お主はそれだけの働きを見せたのじゃからな」

「そうですよ。綾子お姉さまがいらっしゃらなければ、ここまでの結果は出せなかったと思います」

「……って、みんな褒めてるよ？ ボクも、もっと自信持った方がいいと思うけどね」

みんな揃って、慰めてくれているつもりなんだろうけど……ああ、気が重い。

やがて、寿春に到着。

街の人々が、大歓声で出迎える。

「雪蓮ちゃん。良かったの」

「あら、おじいちゃん。久しぶりね、腰の具合はどう？」

「ああ、お陰さんでだいぶ良いようじゃよ。ワシの息子が取つてきた魚じゃ、みんなで食べてくれ」

「ありがとう。おばあちゃんにもよろしくね」

雪蓮は相変わらずというか、気さくに街の人と話している。

「ねえ、綾子。雪蓮っていつもああの？　とても太守の取る態度じゃないわね」

呆れたように、詠が言う。

「そう言うなって。あれも、雪蓮の素顔なんだからさ」

「そうよ、詠ちゃん。見て、街の人達の顔。……みんな、笑顔だよ」

「ボ、ボクもそれぐらい見ればわかるけどさ」

「詠ちゃん。これからお仕えする方なんだから、失礼のないようにね」

「月。ボクはそこまでバカじゃないよ」

この二人、ホントに仲がいいな。

……けど、良かった。

初めての土地で、しかも地位も財も捨ててここまで来た二人。

実は、ちょっと心配だったりしたんだけど、どうやら杞憂に終わりそうだ。

城内に入ると、蓮華を初め、ほとんどの将が揃っていた。

「雪蓮姉様、お帰りなさい」

「ええ。蓮華もご苦勞様。留守中、変わった事は？」

「はい。匪賊が何度か領内を荒らしましたが、徹底して掃討に当たりました。ただ……」

「ただ、何？」

「……荊州との境界付近の豪族の一部に、不穏な動きがあるようです。今、穩が詳細を調査中です」

「わかったわ、その件の対処は追ってしましょう。さて、みんなに報告があるわ」

雪蓮は玉座に着いて、一同を見渡した。

「まず、わたしは揚州牧の沙汰があったわ。これで、正式に呉の地を治められるわ」

「そういう事だ。幼平、この事を揚州各地へ流布しろ。これで、不穩分子も多少は大人しくなるだろう」

「はっ！」

明命は、冥琳に頷くと、素早く飛び出していく。

ホント、フットワークの軽い娘だよな。

「それから、新しく仲間になった娘たちよ。自己紹介してね」

「はい。私は月です、皆さんよろしくお願いします」

「……ボクは詠。よろしく」

流石に捨てた名前を名乗る訳にもいかないもんな。もっとも、みんなは事情を察しているようだけど。

「二人は、当面の間冥琳に預けるわ。悪いけど、わたし達も手が足りてないの。あなた達なら、冥琳を手伝える筈よ」

「わかりました、雪蓮さん。詠ちゃんも、いいよね」

「ボクは、月が一緒なら、それでいいよ」

「うむ、頼んだぞ。亞莎、お前も二人の相談に乗ってやってくれ」

「は、はひっ！ わかりました」

呉のいいところは、仲間同士の団結が強いところ。

きつと、月も詠も、馴染んでくれるさ。

「さて、後は……。綾子、どうする？」

雪蓮の奴、楽しそうだな。

冥琳もニヤニヤしてるし。

「ほれ、綾子。お主から報告があるじゃろ？」

うゝ、祭さん、余計な事を……みんなが注目してるじゃないか。

「諦めなさい。別に、悪い事をした訳じゃないんだし」

仕方がない、あたしは覚悟を決めて、席を立った。

「……えっと。朝廷で何だか知らないけどあたしの働きを評価してくれて。会稽太守と、討逆將軍、とかいう称号を貰ったんだけど……」

途端に、蓮華と亞莎、千花の顔が、驚きに包まれた。

「か、会稽太守？」

「討逆將軍、ですか？ それ、朝廷の正式な位……ですよ？」

「ふえー、凄いですね。一気に大出世じゃないですか？」

「……そんなに凄いのか、これ？」

確かに、太守とか將軍とか、偉そうではあるけど。

「蓮華お姉ちゃん、どういう事？」

シャオが小首を傾げる。

「……小連。お前も孫家の娘なのだ、そのぐらい知っておけ」

溜息をつきながらも、説明を始める蓮華。

「いいか。会稽太守、つまりは郡太守。私達の中では雪蓮姉様に次ぐ、それだけの権威を与えられたという事だ」

「討逆將軍ですが、これは逆賊を討ち果たすための將軍位、という意味合いがあります。綾子様は董卓を討ち果たした、という事で与えられたのかと」

亞莎は、月の方をチラ、と見ながら言った。

「やっぱり、気を遣っているんだな。」

「ふーん、綾子お姉ちゃん、凄いんだね！」

「あんま、大げさに騒がれても困るけどな。あたしは、今まで通りのつもりだし。別に、独立して領地が欲しいとも思わないしさ」

「だが、正式な官職だ。任地には赴かねばならんが、どうする気だ？」

「……そう言われてもな。冥琳、これって行った事にして知らん顔とかできないのか？」

「そうだな。非常時であれば、赴任の延期、という事もあるだろうが。漢王朝の権威がまだ残っている限り、そうもいくまい」

うー、太守なんて柄じゃないんだよ、あたしは。

「ただし、会稽という土地には意味がある、我々に取っては、な」

「どういう事だ？」

「はいはい、それは私から説明しちゃいますねー」

いつの間にか、穩が戻って軍議に加わっていた。

「ご苦労様。荊州境の報告も聞きたいけど、とりあえずは続けて」
「わかりました〜♪」

そう言いながら、巨大な谷間から地図を取り出す。

う〜む、便利と言えば便利なんだろうが……。

この集団に入ると、あたしも自信なくなるよ……特に胸とか胸とか胸とか。

「えっとですね？、会稽郡というのは、ここなんですわ〜」

穩が指し示した場所を覗き込む。

「どうですかあ？ 何か、お気付きになりませんか？」

「随分広い……な」

この当時の地図だ、縮尺も不正確だし、地形も違う。

少なくとも、あたしが地理で使っていた、地図帳とは大きく違っている。

それでも、イメージだけは何とか掴める。

「そうですねえ。でもでも、もっと大事な事があるんです。わかりますか〜？」

穩は、ニコニコしながらあたしに訊いてくる。

ふと気がつくと、冥琳や千花、亞莎、おまけに詠までも、地図を見ながら何やら頷いたり、考え込んでいる。

……もしかして、思い切り試されてないか、あたし？

「う〜ん、海にも面しているけど。それだけじゃない、とか」

「ですね〜。もちろん、それはそれで大事な事ですけどね」

塩や海産物が得られるメリットはあるけど、そうじゃないのか。

……ん、待てよ？

「なあ、穩」

「はい、何でしょう？」

あたしは地図を示して、

「このあたりなんだけど、色分けされているよな？」

「はい♪」

「ここは……あ、何か書いてある。山越……？」

あれ、何か聞き覚えが……。

「山越……あ、異民族か。って事は、そいつらと接触するな……」

「はーい、大正解ですよ。さっすが綾子さんですねえ」

「へ？」

正解って……何？

「よく気付いたな。その通り、会稽郡は呉の最南東にある。山越とは国境に当たる地域でな。北の匈奴や西の五胡程ではないが、諍いの絶えない地だ。そこを任されるのだ、責任重大だろう？」

「……マジ？」

「私は至って真面目だか？　なあ、穩」

「ですよねー♪」

……容赦ないな、お前ら。

「知らなかったの？　ボクはてっきり、承知の上で受けたんだとばかり思ってたけど」

「あははは、綾子さんなら大丈夫ですよきっと。ねー、亞莎さん？」

「え、えっと……。多分」

「知るかそんなの！　あと、その根拠のない信頼すな！」

「あら、根拠ならあるわよ？」

「どんな根拠だよ……」

……嫌な予感しかないけど、一応確認してみる。

雪蓮はニコリとして、言った。

「勘よ、勘」

やっぱりな……。

「そう気を落とすな。太守は州牧の下だ。基本的に、その指示で動けばいい」

「なら、応用的には？」

希望を持てる返事をどこかで期待するが、冥琳の返答は素っ気ないものだった。

「それは、現場判断だな」

止めを刺された気分だぜ……全く。

とは言え、赴任するにしても少し先の事になるらしく、補佐の選定とか、実際の業務についてはレクチャーしてくれるらしい。

……でも、不安だ。

その日は、無事の帰還と雪蓮……ついでにあたしも含めての出世(?) 祝い、月と詠の歓迎会を兼ねた祝宴、となった。

久しぶりの再会。

一気に天下に轟いた名、そして官位という大きな実。

新しい仲間も得て、孫呉は飛ぶ鳥を落とす勢いだ。

宴が盛り上がらない筈もなく、みんなのテンションは高かった。

「さ、ぐーっといけ、ぐーっ」と

「はぁ」

「何じゃ何じゃ、主役がそんな顔をしていてどうする」

祭さんは、思う存分飲めるとあってか、いつも以上に陽気だ。

……それはいいんだが、あたしにどんどん飲ませようとするのはどうかと思うんだ、うん。

「そうれすよく、綾子しゃま。ひっく」

あたしの隣では、菖蒲がベロベロに酔っぱらっているし。

……成人の基準が違うから何とも言えないが、あんまり飲ませていい年頃じゃない気がする。

「そーよそーよ。ほりゃ、シャオのおしゃけも飲むのっ」

……こっちにも酔っ払いがいるし。

っーか、なんで挟まれてるんだ、あたし?

「ふふ、モテモテだね。綾子様」

紅蓮は変わらず、マイペースで飲み続けている。

「おい、美綴」

徳利を手にした凌統がやって来て、あたしの前にドスン、と座る。

「ちよつとぐらい活躍したからって、いい気になるな？ あ？」

「どうかしたのか？ あたしはアンタに妬まれる謂われはないぞ？」

「じゃあ、それは何だ！」

と、凌統はあたしの隣を指し示す。

「えへへ。綾子お姉ちゃん、大しゅき♪」

蕩けそうな笑顔のシャオが、いた。

……あゝ、焼き餅焼いてるのか。

「シャオ。ほら、凌統が心配してるぞ？」

「だゝめ。シャオ、お姉ちゃんがいいんらもゝん」

そう言いながら、あたしにスリスリ。

……ダメだ、こんな可愛いシャオを引きはがすなんて、あたしには出来ない。

で、シャオが甘えれば甘えるほど、目の前の凌統は……あゝ、お怒りですな。

「貴様！ いい加減にしろ！」

「うるしゃい、刃霧。しゅこしは落ち着けないのゝ？」

「シ、シャオ様あ」

あ、今度は半泣きになってる。

「綾子しゃまに、何生意気言ってるんれすか！ 百億年早いのれす」

「菖蒲、お前も落ち着け！」

「ダメれすよ、綾子しゃま。シャオしゃまがお優しいのをいい事に、なゝんにもしてないじゃないれすか、こいつ」

うわゝ、火に油を注ぐなあ！

「な、何だとこのガキ！」

「おう、なんれすか、私とやろうって言うのれすか」

「だああ、やめろお前ら！」

一触即発の二人を、何とか引き剥がす。

「はん！ 主が主なら、家臣も家臣だな」

「……何だと？」

あたしは、思わず語気を強める。

「だってそうじゃないか。まともに敵も殺せない分際で、大口叩いているんだ。そりゃ、運だけで成り上がった奴の家臣だからなあ、ははっ」

「にゃにおく！」

「菖蒲。少し、黙ってろ！」

「あ、あやこひゃま？」

菖蒲は、あたしの剣幕に驚いたようだ。

そして、周囲の将達も、何事かそこちを見ている。

「凌統。今の言葉、すぐに取り消せ」

「あん？ 何でだよ？」

あたしは、そんな凌統の胸ぐらを掴む。

「いいか？ あたしの悪口はまだいい。けどな、菖蒲の悪口は許さん。こいつが、普段どれだけ努力しているか、今度の遠征でもどれだけ頑張ったか、わかっているのか貴様？」

「し、知らねえよ、そんなもん！ だいたい、喧嘩売ってきたのはコイツじゃねえか」

「いい加減にせんか、小童ども！」

祭さんの雷が、落ちた。

「祝宴の場を何だと思っておるのじゃ！ 少しは頭を冷やせい！ 誰ぞ、こやつらをつまみ出せ！」

「は、はっ！」

警備に当たっていた兵士達が、恐る恐る入ってきた。

「策殿。この場は儂にお任せ願いたい。よろしいか？」

「……え、ええ。任せるわ」

気圧されたように、雪蓮が頷く。

「刃霧。お主は儂が呼ぶまで、部屋にて謹慎しておれ！」

「は、はいっ！」

凌統は直立不動で答えると、兵士に連れられ部屋を出て行く。

「菖蒲もじゃ。部屋で反省しておれ！」

「……は、はい……」

酔いも吹き飛んだのか、素直に頷く菖蒲。

「綾子。お主もお主じゃ。もう、己の武勇だけを誇ればよい身分でもなからう？」

返す言葉もない。

凌統の挑発に、軽々しく乗ってしまった、それは事実だ。

「すいません、祭さん。あたしが間違っていました」

「わかればよい。これ、尚香殿も部屋へお連れしろ」

「ハッ！」

……あたし、どこかで浮かれていたんだろうか。

まだまだ、修行が足りないな、あたしも。

「ホーツ、ホーツ」

フクロウの声が、訝する。

草木も眠る丑三つ時、もちろん人の気配などある訳がない。

「ふう……」

ドサッ！

あたしは馬から下りると、草むらに寝転んだ。

「ここから、何だよな……」

夢の中に、あの変態が出てきて。

気が付いたら、この場所にいて。

そして、明命と出会って。

……いろんな事があったし、あたし自身、よくも生き残っていると思う。

いろんな武道との相性には自信があったけど、今は食うか食われるか、殺し合いの時代なんだ。

「綾子お姉さま、こちらでしたか」

スツと、あたしのそばに降り立つ人影。

確かめるまでもない。

「明命か。よくここがわかったな」

「お姿が見えないので、もしや、と思ひまして。隣、よろしいですか？」

「ああ」

「では、失礼します」

明命も、同じく草むらに寝転がった。

森の中で草むら、というのも妙な話だが、枝葉が密集しない場所ならば、草も育つ。

当たり前の事だけど、あたしのいた世界じゃ、そんな場所も限られていたからな。

「なあ、明命」

「はい」

「……あたし、少しは成長出来ているのかな？」

「……お姉さまは、十分に務めを果たされていると思います。孫呉に欠かせない人物として」

「そうか。……でも、まだまだだよな」

「お姉さま……。そんな事ありません！」

明命は上半身を起こすと、あたしを見つめてきた。

そして、あたしの手を取る。

「私も、まだまだ未熟です。お姉さまのようになりたい、そう思っています」

「……………」

「だから、悲しくなる事を仰らないで下さい」

明命の、偽りのない言葉。

あたしの心に、スツと染み入ってくる。

……そうだよな、何くよくよしてるんだ、あたしは。身体を起こすと、そのまま明命を優しく抱いた。

「はうあっ！ お、お姉さま？」

「ありがとう、明命。……ごめんな、弱気になって」

「お、お姉さま……………」

「ホーッ！」
フクロウが、鋭く、啼いた。

ゝ三十一ゝ（後書き）

宴席でドタバタにしようかと思いましたが、收拾がつかなくなるので展開をちよつと変更。

人数が増えてきたので、書き分けが難しいですね……。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

三十二 (前書き)

今日はたぶん、更新できそうにないので……こんな時間になりましたが。

ご都合主義全開でお届けします。

（三十二）

「会稽郡の視察？」

「そうよ。赴任するのはまだ先としても、その地を見ておくのは大事でしょ？ 綾子、まだ行った事ないところなんだし」

まあ、確かにそうなんだけど。

まだ、現実感がないんだよな、実際。

「実際、会稽は我が呉に組み入れてまだ日も浅い。いきなり行くよりは、まずは様子を知っておいた方がいいと思うぞ」

「でも、いいのか冥琳？ まだあたしは、何もわかつちやいないぜ？」

「太守として向かうのであれば問題だが、一個人として行くのであれば構わんだろう。今の綾子ならば、幸いにまだまだ無名だ。ま、それも時間の問題だろうがな」

「そうねえ、なんせ綾子、目立ち過ぎですもの」

「……雪蓮。あたしは、好きこのんで目立ってるつもりはないぞ？」

「あら、それこそ今更じゃない？ 連合軍でもあなたを知らない兵はいないもの、大陸中に知られるのも時間の問題よ？」

「まあ、あの呂布と互角に一騎打ち、そして董卓を討って陛下をお守りした……。目立てない方がどうかしてるな」

とほほほ、あたしは自分のできる事を精一杯やっただけなのに、どうしてこうなるんだよ……。

「そういう訳だから、行ってらっしゃい。今はまだ、こっちも比較的落ち着いているしね」

「……わかったよ、どうせ行かなきゃならないんだ。行ってくるさ。

明日、出発するから」

それだけを言い、あたしは部屋に戻ろうとした。

「あ、ちょっと待って。ついでに、頼みたい事があるの」

そんな雪蓮に、嫌な予感しかないあたし。

「……何だ？　言っておくけど、無茶振りだけは勘弁してくれな」
「そんなんじゃないのよ。シャオも連れて行って欲しい、ってだけよ」

「シャオを？」

「ええ。あの娘、子供扱いされるのを嫌がるくせに、まだまだ世間知らずだから。それに、綾子に懐いているんだし」

「いや、好かれているのは否定しないけどさ。けど、今回は太守としてでなく、あたし個人での視察だろ？　万が一シャオに何かあったらどうする気だ？」

「その時は助けに行くから心配しないでいいわよ。もっとも、綾子と一緒に、そんな不測の事態が起きるとは思ってないけどね」

「……信用してくれるのは有り難いけどさ。あたしを、絶対無敵だと思ってないか？」

「そんな訳ないでしょ。綾子は綾子なもの♪」

あたしは、冥琳を見て、

「止めないのか？　孫家は、血筋を残すのが絶対の方針だろ？」

「ああ。だが、今は雪蓮も蓮華様も、何らかの危機に陥る状態にはないからな。それに、大陸一の武人が一緒なのだ、心配する方が愚かではないか？」

「……冥琳。あたし、何かアンタに恨み買うようなマネでもしたか？」

「さあな。ただ、綾子の武はそれだけ評価されているというのは事実だ。自分を卑下する事はないさ」

いや、卑下してないし。

つーか、恨み云々は否定しないのかよ！

「ふふ、冗談だ。そのように怖い顔をするな」

「言っていい冗談と悪い冗談があるぞ、全く。まあ、ホントにシャオを連れていけ、ってんなら、あたしは全力で守るけどな」

「さっすが綾子、頼りにしてるわね」

なーんか、上手く乗せられた気がする。

「急ぎで済まないが、明日出立してくれ。小蓮様には、私から伝えておく」

「はいはい。とにかく、行ってくるよ」

「うふふ♪ 綾子お姉ちゃんと一緒だ♪」

ご機嫌のシャオ。

……まあ、それはいい。

可愛いし。

……ただ……なあ……。

「……………」

「……………」

もの凄いプレッシャーを、背後から受け続けるってのは、何かの試練ですかこれは？

片や、あたしにベタベタするシャオに文句も言えず、不満爆発寸前の菖蒲。

もう片や……まあ、シャオを連れていく、という時点で思いつかなかったあたしが悪いんだろうけど。

「……絶対、クロス……」

もの凄い憎悪を向けてくる、凌統。

他の将達はそれぞれに任務があって、一緒には連れて来られなかったので、メンツはこれで全部。

せめて、紅蓮だけでも、思ったんだけど。

「いやいや、ボクも馬に蹴られて死ぬのは御免だからね」

とか言いながら、逃げられた。

……つか、なんでそこで馬に蹴られる云々が出るんだ。

酒宴の場で騒ぎを起こし、謹慎処分だった二人だけど、菖蒲はあたしが行くと知るや雪蓮に泣きつくし、凌統はシャオ一人にはできない、と祭さんに平謝り。

……いや、ただの視察だし、シャオだけで良かったんだけどなあ、

これなら。

そんな雰囲気打破しようと、あたしはシャオに話しかける。

「なあ、シャオ」

「うん、なあに？」

クッ、満面の笑みとはっ！

やるようになったな、シャオ！

……いかんいかん、凌統が更に殺気立ってる。

「会稽って、行った事はあるのか？」

「んー、ないよ。こないだ、雪蓮お姉ちゃんが初めてじゃないかなあ、シャオのところで行った事あるのは」

「そ、そっか。じゃあ、どんなところかもわからないな」

「ヘッ！ それで太守様とはね。お先真っ暗じゃねーか」

「凌統！ 綾子様に対して、その態度は何だ！」

「お、何か文句あんのか、このガキ！」

あゝあ、また始まったよ。

何かあると、すぐこの調子なんだからなあ。

「刃霧。綾子お姉ちゃんの悪口は、シャオも許さないよ？」

「で、ですがシャオ様あ」

相変わらずシャオには頭が上がらないので、すぐに収まるんだけどさ。

「菖蒲も、すぐに挑発に乗るな」

「綾子様、そうは参りません！ 孫呉一の勇者である綾子様を貶めるなど、万死に値します」

「んだとコラァ！ 叩っ斬るぞ！」

「やれるものならやってみなさいよ、この脳筋！」

ゴン、ゴン！

「あたっ！」

「あうっ！」

二人の頭に、拳骨を一発ずつ落とす。

「いい加減にしろ！ それ以上騒ぐなら、二人ともここから帰れ！」

「痛ててて……。おい貴様、何の権限があつて！」

ゴッン！

食ってかかる凌統に、もう一発拳骨。

「痛えな！」

「いいか？ あたしは雪蓮の指示で、みんなを連れてきている。つまりは、雪蓮の代理だ。そのぐらい、わからんか？」

こんな、虎の威を借る狐みたいなマネはしたくないけどさ、あたしだって。

「し、しかしな！」

「……シャオ。凌統はこれだけ言ってもわからんらしいぞ。どうする？」

「刃霧。シャオは、聞き分けのない子は嫌いだからね。綾子お姉ちゃんを困らせないの！」

「ううゝ……」

シャオに言われると、堪えるらしいな、流石に。

「菖蒲も、いいな？ あたしも、聞き分けのない奴は嫌いだ」

「……はい。申し訳ありません……」

やれやれ、絶対人選ミスだぞ、これ……。

その夜。

「ハッ！ フッ！」

ヒュン！

ヒュッ！

二振りの剣を構え、仮想敵相手に振りかざす。

……藤村先生はダメだ、ある意味人外過ぎる。という事で、恋にする。

……ま、こっちはこっちで人外だけどさ。

鋭い突きを、剣で受け流す。

が、それで安心するのはダメだ。

左手で、殴りかかってこられた。

間一髪で躲し、すかさずカウンターを叩き込む。

受けられるが、それは想定内。

そのまま突っ込み、体当たりをかける。

倒れ込みながらも、突きを入れてくる恋。

危うく、片腕を持って行かれるところだった。

左腕が、右腕ほどに動かせていない事を見抜いたらしい。

「たあっ！」

って、ホントに槍が……って何だよこれ！

ガキッ！

何とか受け止めたけど……あれ、この槍……どこかで。

「流石ですな、美綴殿？」

月光に、白い着物が映える。

この声、この姿……。

「おや、私をお忘れか？」

「……思い出した」

そう、あたしがこっちに来て間もない頃、一度手合わせをした相手。

「趙……子龍」

「はっはっは、覚えておられたか。いやいや、流石は天下無双の剣、見ていてほればれしましたぞ」

心底楽しそうだな。

……あれ、そう言えば……。

「なあ、趙雲」

「何でござるかな？」

「……あのさ、確か仕官先を探している最中、って言っていたよな、あの時」

「左様。あの後も、大陸を回っておりましたよ」

「なら、平原にも行ったのか？」

「ああ、劉備殿ですか。確かに、参りましたとも」

あれ、劉備とは面識があるのか。
でも、ならばどうしてここにいる？

「劉備殿がいがなされた？」

「ああ、いや……。こないだの連合軍で、姿を見なかったな、と思
つてな」

趙雲は、首を傾げる。

「はて、私はまだどこにも仕えておりませぬ故、あの場にいら
なくても当然でござろう？」

「……え？ まだ浪人中？」

「なかなか、私の眼鏡に適う御仁に巡り会えておりませぬ故。それ
より、久々の再会、一献如何かな？」

そう言つて、徳利を持ち上げる趙雲。

……あたしも、雪蓮や祭さんのせいで、ある程度飲めるようには
なつたけどさ、前よりも。

まあ、聞きたい事もあるし、付き合うか。

「いいぜ。なら、ちょっと待っていてくれ。汗だけ流したい」

「構いませぬぞ。夜は長いですからな」

あたしは一旦、部屋に戻つた。

「あわつ、あ、綾子様？」

「あれ、菖蒲。まだ、起きていたのか？」

何故か慌ててる菖蒲。

……めっちゃめっちゃ不審だぞ？

つか、背後に何か隠してないか？

「どうしたんだ、一体？」

「いいい、いえ、別に。ななな、何でもないですっ！」

何でもないなら、何故どもりまくるんだ。

……ま、後でしっかりと聞かせて貰うか。

「あたしはまた外に出る。先に寝ていてくれ」

「外へ？」

「ああ。ちょっとした知り合いに会って、酒に誘われたんだ」

「そうですか。……あの、お供します」

「え？」

「綾子様のお知り合いがどのような方なのか、私も興味がありますから」

「いや、別にいいとは思うけど。……ただ、お前にはあまり酒飲ませたくないんだけどなあ」

と、こないだの失態を思い出したのか、菖蒲は真っ赤になる。

「あ、綾子様！　そ、そのような事を思い出させないで下さい！」

「……いや、忘れるっても無理だし。あれは」

「はううゝ、一生の不覚です……」

がっくりと落ち込む菖蒲。

「ま、そういう訳だから今日は諦めろ。ところで、あたしの着替え、知らないか？」

「……へ？　ああああ、きききき、着替えですか？」

だから、何でそんなにどもる？

「その辺に置いておいた筈なんだけど。……ん？」

菖蒲が必死に隠そうとしている後ろ手。

見覚えのある布地が、チラッと見えた。

「……菖蒲。お前が手に持っているのは、何だ？」

「いえっ、ななな、なんでもありません」

今度は噛んでるよ。

「……いいから、それをこっちによこせ。それ、あたしの着替えだろ？」

「ちちち、違います！　こ、これはそそそそ、その、そう！　畳んで差し上げよう！」

「……の割には、思いつきりシワシワにしてないか？」

「はうっ！」

……ホント、こいつは嘘がヘタだ。

「もう、それでもいいから早く寄越せ。知り合いを待たせてるんだ」

「でで、ですがっ！」

何故か抵抗する菖蒲の手から、ようやくそれをもぎ取った。

「あゝあ、ここまで皺だらけにする事もないだろ？」

「も、申し訳ありません……」

しよげ返った菖蒲をこれ以上追い込むのもかわいそうなので、あたしは着替える事にした。

「じーっ」

……って、何を見つめてるんだ、コイツは？

「……何してる？」

「はうっ！ い、いえ、みみ見ていません！」

しっかり見てるってーの。

「頼むから、邪魔しないでくれ。つーか、自分の部屋に戻れ！」

「あ、綾子様あ」

ボタン。

とにかく、部屋から追い出した。

……しかし、何をしていたんだろうな、ホント。

宿から少し離れた、小高い丘の上。

予想外に時間を食ったあたしは、急いでそこに向かった。

「随分と長いお召し替えでしたな」

やっぱり、趙雲は待ちくたびれていた。

「……すまん。いろいろとドタバタしていた」

「ま、良いでしょう。さ、お座り下され」

徳利と、二つの杯。

……あと、小皿に盛られた、大量のメンマ。

「では、再会を祝して」

「ああ、乾杯」

互いに、杯の中身を干す。

……白酒か、このキツさは。

「ふむ、美味なるかな。さ、もう一献」

「……にしても、相変わらずだな」

「何がですか？」

「何もかも。メンマ好きなのもそうだし」

「うむ。これぞ至高の食物にして、人生の最良の友ですからな」

まあ、いいけどね。

他にツマミもないので、あたしも一口。

「……お？　これ、美味しいな」

「む、おわかりですか？」

ずい、と顔を寄せてくる趙雲。

「これは諸国を巡るうちに手に入れた、秘蔵のメンマでしてな。この違いがわかるとは、流石は討逆將軍殿」

「……え？　知ってるのか？」

「はっはっは、貴殿の噂はよく耳にしましたぞ。あの呂布にも引けを取らぬ武勇、私が唯一敗れた相手だけの事がありますな」

うう、この話題にはあまり触れて欲しくないのに。

よし、話を変えてしまえ。

「そう言えば、一緒にいた戯志才と程立は？」

「ああ、そう言えば貴殿とはあれきりでしたな。まず、戯志才とは偽名、あやつは郭奉孝と申しましてな」

「郭奉孝？」

「左様。曹操に仕える事が念願だったようで、それを為すまでに偽名を名乗っておったのですよ」

「郭……。あ、郭嘉か！」

「む？　ご存じでしたかな、貴殿は？」

「あ、いやまあ……知っていると云えば知っている……かな？」

曹操に仕えた名軍師じゃないか、郭嘉って。

でも、確か若くして亡くなった筈だけど……この世界だと、どうなんだろう？

「妙な御仁ですな。まあよい、程立は……」

「ここにいますよー」

ひよこっ、とあたし達の間から顔を出した。

「どわっ！」

「風を見て驚くようでは、まだまだですねー。お姉さんも」

「普通驚くわ！」

「ではでは、失礼しますねー」

あたしのツッコミはスルーし、対面に座る程立。

「稟ちゃんは、曹操さんにお仕えしましたがけど、風は断ったのです」

「へ? ……あ、もしかして」

「もしかして?」

「……お前、程イク?」

趙雲はキョトン、としているが、程立は何故か難しい顔。

……あれ、何か間違ったか?

だって、曹操配下の軍師で郭嘉が出たら、後は司馬懿か賈馱、程イクだろ?

「お姉さん。その名前、どうしてご存じなんでしょう?」

「え?」

「風は、いずれ仕える主君に巡り会えたら、その名前にしようと心に決めていたのです。でも、稟ちゃん以外にはまだ話していなかったのですよ?」

「え? じゃあ、程イクってのは……」

そうか、あたしはゲームの武将名しか知らないからな。

「怪しいですねー、お姉さん。そんなお姉さんには、責任を取って貰うのです」

「は? 話が見えないぞ?」

「こらこら、風。私の話が済んでおらん」

「……ぐー」

「寝るな!」

「おおー! つい、名月に釣られてしまいましたー」
つかみ所がないなあ。

「で、趙雲。話って」

「……ハッ」

と、趙雲は一步下がり、膝をついた。

「ど、どうした？」

「私を打ち負かしたのみならず、天下に轟くその武勇の腕、そして天子まで認めた大器ぶり、それを見込んでお願い申し上げる。私を、貴殿の末席にお加えいただきたい」

「は？ 末席って……あの……」

訳もわからず困惑するあたしに構わず、趙雲は続ける。

「諸侯を見て参りましたが、貴殿よりも我が槍を預ける相手は見つかりませんでした。劉備殿も確かに大器、なれど、その前に貴殿に会ってしまいましたからな」

じゃあ何か、劉備に仕えてないのはあたしのせいだったのか？

どんなチートフラグだよ、それ！

「どうか、伏してお願ひ申す！」

って、真剣……だよなあ、これ。

「あ、あのさ。知ってると思うけど、あたしは雪蓮……孫策麾下だぜ？」

「ふむ、陪臣で構わぬか、という事ですかな？ 大いに結構、貴殿程が仕えるお方ですからな」

あゝ、これ……どうしろと？

……断ったら、腹でも切りかねないな、この様子だと。

「……じゃあ、孫策の許可を得てから、って事になるけど……。それでもいい？」

「おお、お許しいただけるか！ かたじけない。真名は星です、今後はそうお呼び下され」

いや、まだ決定事項じゃないし。

「さてさて、次は風の番ですよ。風も、お姉さんにお仕えしたいのですよ」

「ちよい待ち！ 曹操じゃなくて、なんであたし？」

「そうですねー。曹操さんは確かに英雄ですけど、お姉さんほど楽

しみがないのです」

「……なんだ、それ？」

程立は口に手を当て、フフフと笑って、

「曹操さんは、ご自身も優秀過ぎますし、軍師にも稟ちゃんと荀イクさんがいるのですよ。だから、風の出番がないのです」

まあ、あの二人は実際、かなり優秀だもんなあ。

「それに比べて、お姉さんには軍師がいないようなのでー。星ちゃんがお仕えするようなので、風もお願いするのです」

「……マジ？」

「むー、風の知らない言葉で誤魔化そうとはずるいのですよ。でも、風はもう決めたのですよ。ですので、程立ではなく、風と呼んで下さいねー」

こらこら、話を勝手に進めるな！

「では、主。我ら二名と、改めて主従の杯を」

「よろしくですよー」

……どうなってんの、一体？

つーか、雪蓮達にどう説明すんのさ……ハア。

三十二 (後書き)

三人全員は流石にやり過ぎなので、星と風だけにしました。

……これでも十分、やり過ぎですが。

でも、こうなると鼻血は誰が止めるんでしょう、とか。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

（三十三）

「我が名は趙雲、字は子龍。宜しくお願い致す」

「風は程立、字を仲徳と言うのですよー。よろしくお願いするのです」

「うん♪ シャオは孫尚香。よつろしく♪」

シャオはホント、人見知りしないよな。

「綾子お姉ちゃんが認めたんだもん。きっと、二人とも凄いだよね？」

「そうかも知れませんねー。風は、自分を安売りするつもりはないです」

「大陸中を歩いて出した結論ですからな。いただいた信頼には、応えるつもりですぞ」

……訂正。

シャオは、あたしのだから、って事で信頼しているって事らしい。

……余計、重圧だけだな。

「は、はあ……。わ、私は徐盛、字は文キョウです。よ、宜しくお願いします」

「……俺は凌統、字は公績だ」

二人の反応は予想通りかなあ。

「おや、お二方はどうかされたのですかな、主？」

星が、少しだけ驚いたような様子を見せる。

「おうおう、新参者に面食らってるんだらうぜ。気にしちゃいけないぜ、姉ちゃん」

風……宝慧で喋るな、菖蒲が固まってるぞ。

「……とりあえず、出発しようぜ。会稽には向かわないといけないしな」

一同、それには異論がある筈もなく。

……二人の事、雪蓮には、戻ってから説明するしかないかな。

「ふうん、星と風は、あちこちを旅して来たんだね。シャオも行ってみたいな」

「はっはっは、シャオ殿はなかなか好奇心旺盛ですな。いや、結構結構」

「そうですねー。北方は風土も違いますし。その時は、風がシャオ様を案内するですよ」

早くも、二人はシャオと打ち解けたらしく。

真名まで交換するとは、順応性が高いというか……馴染み過ぎだろ。

……一方、後の二人は。

菖蒲は突然の出来事のせいか、未だに戸惑ったままだし。

凌統に至っては、いきなり現れた二人がシャオと仲良くしているので不機嫌……つうか、めっちゃ睨まれてるよ、あたし？

「貴様……。どこまで俺の邪魔をすれば……」

ちょ、それ逆恨みだから！

「綾子様……。私というものがあらながら……」

菖蒲も地味に不穏当発言しない！

つーか、それ何か大きく間違ってるから！

「主、如何なされた？　そのように悶絶なさるとは」

「お姉さん、どうやら修羅場みたいですわねー」

……星、お前絶対わかって言ってるだろ？

風は風でニヤニヤしてるし。

どいつもこいつも、何なんだよおお！

着実に日々ダメージを受けながら、あたしは会稽郡に到着。

ハア、これなら戦場にいる方がずっと楽だわ……。

「綾子様、如何なさいますか？」

幸か不幸か、星と風が代わる代わるシャオの相手をしていたせい

で、シャオがあたしにべったりな時間が激減。

……それで、菖蒲はだいぶ機嫌が直ったらしい。

凌統は……見なかった事にしよう、うん。

「そうだなあ」

地図を取り出し、眺める。

「風の意見は？」

曲がりなりにも軍師志望なんだし、実際に頭はいいんだろう。

試してみたい、というのもあるし。

「ぐう」

「何故そこで寝る！」

すかさずツツコミを入れる。

「おお。お姉さん、なかなか素早いのですよー」

「つーか、あたしの軍師なんだろ……頼むよ」

「そうですねー。お姉さんの気の向くまま、というのはどうでしょうー」

「聞いた意味がないだろ！」

「掴みはおっけー、なのです」

……風、アンタ何者だよ。

しかも微妙に古いし。

「いえいえ、そんな電波を感じたものですからー」

あたしの心を読むな！

つ、疲れるな、この娘の相手は。

「ではでは、話を元に戻しまして。風は、会稽以外の邑から廻るのがお薦めですねー」

「どうして？　だって、綾子お姉ちゃんが赴任するのは、会稽城でしょ？」

シャオの疑問は、もつともだと思う。

あたしも最初は、そのつもりだったし。

「勿論ですよ。でも、お姉さんがこの郡を正しく治めたいのなら、先にそれ以外を見るべきだと思うのですよ」

「正しく？　どういう意味だ？」

「えっとですねー。会稽城は、この郡の中心になるところです。当然、人も物も、そこに集まりますよねー？」

「ああ、そうだろうな」

「では、その人や物は、どこから来ると思いますかー？」

「そりゃ、他の邑から……あ」

風の言いたい事が、何となくわかった気がする。

「気づいたようですねー。その出処を知る、というのはとっても重要なですよ」

うむむ、そう言われれば。

……やっぱ流石、歴史に名を残す軍師だわ。

「主。一度ですがこの辺りも歩いた事があります。私のご案内しますぞ」

「わかった。それで行こう」

あっさりと領いたので、菖蒲が驚いたらしい。

「綾子様。その、良いのですか？　失礼ですが、お二人はまだ」

「わかってる、仕官したばかりで信用していいのか、そう言いたいんだろ？」

「は、はい……」

凌統も、口にはしないが、同意だ、という眼をしている。

「ああ、構わんさ。あたしは、二人を信じているから」

まだ納得出来ていなさそうな菖蒲に、あたしは続けた。

「この二人なら、信じていい……雪蓮じゃないけど、あたしの勘だよ。それに、真名を預けて貰ってるんだ。何よりも、それでいいじゃないか」

「ふっ……嬉しい事をさらりと仰る事だ」

「やっぱりお姉さんは風の見込んだ通りですねー」

歴史を知っているから、とは言えないからな。

でも、ホントにあたしは信じているさ。

「どっしたの、刃霧？」

と、シャオが悪戯っぽく笑い、凌統を見上げた。

「い、いえ。な、何でもありません」

「そうかなあ？ シャオには、綾子お姉ちゃんを見る眼が、前と違うような気がするのよね？」

「な、な、何を仰いますか！ た、ただ甘い奴だな、と思っただけです」

「ふうん。ま、そういう事にしておいてあげる♪」

「シ、シャオ様！」

なんか、凌統が顔を真っ赤にしているぞ？

……ま、いいけどさ。

「まずは、この邑から参りましょう」

星の先導で、比較的大きめの邑へ。

「あ、言っておくけど。あたしはまだ赴任前、視察に來ただけだ。くれぐれも、人々にバレないようにしてくれよ？」

「心得ましたぞ、主」

「わかりましたー」

他の連中は、来る前に言っておいたし……大丈夫だろう。

「結構、賑やかなんだな」

「はい。予想以上ですね、ここ」

小さいながらも城壁もあるし、警備の兵士も立っている。

そのせいもあるんだろうけど、邑全体から活気が感じられた。

「ここは、私も見ております。ふむ、以前よりも人が増えたような星が言うんだ、間違いないんだろう。

「人が増える、つまりはそれだけ安全な邑、という事なのでしょうねー。城壁も堅牢ですし」

「確かに、ただの邑じゃない、って事か。ま、入ってみるとしよう」星を先頭にして、あたし達は城壁内へと進んだ。

街のいたるところが飾り付けられ、華やいだ雰囲気だ。

忙しそうに動きまわる人々も、どこか浮かれている。

「もう、お姉さんを迎える支度でもしているのでしょうか」

「んな訳ないだろ。まだ、正式な布告もしていないんだから」

「いえいえ。民の噂話と言うのは、存外早く伝わるものでしてな。

風の推測が誤っているとはかりは申せませんぞ？」

だとすると、余計に勘弁して欲しいよ……。

「ちよっと聞いてきますね。少し、お待ち下さい」

菖蒲は、近くにいた人々に何かを尋ね、すぐに戻ってきた。

「どうやら、今日は一年に一度のお祭りみたいです。それで、人も普段より多いみたいです」

ま、そんなこったろうとは思ったけどな。

「お姉ちゃん、折角だからお祭り見て行こうよ？」

「ま、それも悪くないな」

「えへへ、やった♪」

シャオ、嬉しそうだな。

「シャオ様。この人出です。何かあったら……」

「その時は、刃霧が守ってくれるんでしょ？」

「む、無論です！」

「なら、問題ないよね♪」

どうやら、シャオの方が一枚も二枚も上手らしい。

「反対はないな？ よし、じゃあちよつと見ていくか」

祭りが嫌いな奴の方が少ないだろうし。

みんな、何だかんだ言いながら買い物があるらしく。

一旦、自由行動になった。

「一緒に廻ろ、お姉ちゃん♪」

……くどいようだけど、シャオの笑顔は無敵だ。

「お姉さんは、小さい子がお好みなのですねー」

「風。あなたも小さいじゃない！」

ブンブンと、腕を振って抗議するシャオ。

「風は、こう見えてもシャオ様よりも年上なのですよ。邪魔する気はありませんので、どうぞごゆっくりー。行きましょう、星ちゃん」
「うむ。では主、程々になされよ?」

二人ともわかって言ってるから、余計に始末が悪いんだよなあ。

「私もお供を!」

「俺だって、シャオ様から離れません!」

……ある意味、もっと厄介な二人。

こっちは悪意とか皮肉じゃなく、本心からだし。

「刃霧は、買物お願いしたいの。いい?」

「ハッ。ではお供を」

「そーじゃなくって! めも渡すから、揃えてきてって言ってるの」
貴重品の紙は使えなくても、小さな木片に文字を書く事はできる。
ちよつと蓮華達にメモというものを説明したところ、予想以上に好評で、言葉と共に広まっていた。

「し、しかし。シャオ様お一人では」

あたしは無視ね、ハイハイ。

「言う事が聞けないんだったら、もう刃霧って呼んであげない」

「いいっ? シャオ様、それだけはお勘弁を」

「じゃ、よろしくね」

項垂れた凌統を余所目に、菖蒲は何故か勝ち誇っている。

「では綾子様。私はお付き合い致します」

「あゝ、悪いんだけど宿、手配してきてくれないか? この人混みじゃ、後から探すのも一苦労しそうだし」

「い、いえっ! それでしたら、邑の長に話してみます」

「……あのな。それじゃ、個人として来ている意味ないだろ? 普通に探してくれればいいんだ」

「で、ですが……」

「菖蒲にしか頼めないから言ったんだけどな。そうかそうか、あたしの頼みは聞いてくれないか」

暗い顔で言ってみる。

「う……。ひ、卑怯です。そんな事を仰られるなど……。わかりました。探して参ります」

……やれやれ。

折角の祭りに、あんな真面目組連れて歩いたら、周囲の人をビビらせちゃうからな。

ちよつと悪い気もするけど。

「じゃ、行こ♪」

……いいんだ、こんな可愛いシャオと少しの間でも、二人でいた
いんだからさ。

「ねーねー、綾子お姉ちゃん。あれ、やってみない？」

シャオが指さしたのは、射的。

と言っても、銃なんてある訳がないこの時代、使うのは弓。

「なら、シャオやってみるか？」

「うんっ！」

料金を払い、シャオが位置につく。

弓腰姫のお手並み、拝見といくか。

キリキリキリ。

ヒュー。

「あれえ？」

弦を離れた矢は、途中で見事に失速。

「ぶーっ！ もう一度！」

「シャオ、落ち着け。矢はまだ四本ある」

「ぜーったい、当ててやるんだから！」

キリキリキリ。

ヒュー。

キリキリキリ。

ヒュー。

全部、同じようなところに落ちた。

「もーっ！ もう一回やる！」

「シャオ、ちょっと待て」

「なんだい、姉ちゃん。途中交代はなしだぜ？」

「いかつい露店主が、あたしを睨んでくる。」

「そんなんじゃないさ。ちよつと、確かめるだけさ。シャオ、弓を貸してくれ」

「え？ うん」

射的用の弓だから、玩具的な作りなんだろうけど。

それにしても、全然張りがないな、これ。

矢も……なんか曲がってないか、これ？

いやいや、これじゃ真っ直ぐ射つのは無理だぞ。

シャオは未熟とは言っても、祭さんから弓の指導を貰ってるんだ、ここまで当たらないなんておかしいと思ったよ。

「オヤジ、これ、換えて貰えるか？」

「そいつはできねえな。それに、矢も残ってるじゃねえか」

「これを見るよ？ いくら遊びでも、これはないだろ？」

張りのない弦と、曲がった矢を見せても、オヤジは平然としている。

「俺んところはそれでやってるんだ。文句あんのか？」

「そっか。なら、この娘に射方を教えてやるのはいいだろ？ 見ての通り、まだ慣れてないんでね」

「むー、お姉ちゃん。シャオを子供扱いしてる」

「いいから、耳貸して」

むくれるシャオを宥めながら、あたしはシャオに囁いた。

「え？ いいの？」

驚いてる。

……それよりも、喜んでいるな、あれ。

「ああ。大丈夫、あたしがついてる」

「うん、わかった！」

シャオに弓を渡すと、

「いっくよ」

キリキリキリ。

ヒュー。

矢を、見当違いの方に放つ。

……オヤジの、足元へ。

「おっと、あぶねえな。嬢ちゃん」

「えへへ、ゴメンゴメン」

無邪気モードのシャオに逆らえる奴は、いない。

このあたしが太鼓判押すんだ、うん。

で、最後の一本。

キリキリキリキリキリキリ。

「お、おい。嬢ちゃん、引きすぎだぞ？」

「いゝんだもん」

キリキリキリキリキリキリ。

プツン！

安物の糸は、敢え無く切れた。

「あれえ？ 切れちゃった」

「これじゃダメだな。オヤジ、返すわ」

店のオヤジ、途端にキレた。

「おいコラ！ わざとやりやがったな」

「何言ってるんだ？ 弦は普通このぐらいじゃ切れないぞ？」

「そーよ。シャオ、悪くないもーん」

「上等じゃねえか。おい！」

わらわらと、ガラの悪そうな男どもが出てきた。

「まずは詫び入れろ！」

「それから弁償して貰おうか。有り金全部、置いていけ！」

口々に、あたしを脅す。

「山賊か、お前らは」

蛮刀まで取り出してるし。

「喧嘩だ！」

「キヤーツ！」

周りにいた人々が、軽くパニックに陥る。

「綾子お姉ちゃん！」

「ああ。話し合いで解決する気はないみたいだな。シャオ、あたしの後ろに」

「へーきだよ。シャオもやれるんだから」

「ダメだ。それじゃ、雪蓮との約束を破る事になる」

「ぶーっ。綾子お姉ちゃん、また子供扱いする！」

「いいから、下がれ。来るぞ！」

片手でシャオを制しながら、あたしは素早く周囲を見渡す。

七人、か。

ガラは悪くても、腕は大した事はなさそうだ……ん、一人だけちよつと手強そうなのが。

よし、アイツからだ。

「はああああっ！」

助走をつけ、そいつに飛び蹴り。

「なっ！」

驚く顔を、そのまま蹴り飛ばした。

「ギャツ！」

吹っ飛んだ奴は、そのままオヤジの店に突っ込んだ。

もちろん、一撃ノックアウト。

「て、てめえ！」

「この程度かい？ ケンカ売る相手、間違ってるんだよ」

「この野郎……。ナメやがって、みんなでやっちゃまえ！」

オヤジの号令で、全員がかかってきた。

あゝあ、雑魚が何人ががりでも一緒なのに。

「よっ！」

やつらの斬撃をジャンプでかわし、そのまま一人の頭を踏み台に。

「お、俺を踏み台にしたあ？」

どこぞの三連星か、お前は。

そのまま、踏んだ奴を蹴り飛ばし、一旦着地。

そして、両肘を二人の腹に、叩き込む！

「ぐべっ！」

「ごほっ！」

で、屈んだまま一人にローキックで倒して、と。

もう一人は、向う脛を蹴り上げた。

「痛えええ！」

しばらくはこれで戦うどころじゃないだろ。

「あ、あわわわわ……」

すっかり青くなっているオヤジ。

「おい。弓の正しい射方、教えてやるよ」

「な、なんだと……」

背にした騎乗用の弓を取り出し、矢を番えた。

キリキリキリ。

「ひ、ひいっ！ や、やめろお！」

ガタガタ震えるオヤジに向けて、放つ！

ヒュン！

トスッ！

矢はオヤジ……の着物を貫いた。

そのまま、連射。

ヒュン、ヒュン、ヒュン！

カッ、カッ、カッ！

裾やら襟やらを狙い、全部命中。

うん、オヤジの縫いつけ完成、と。

……あら、オヤジは気絶してら。

「う、動くなテメェ！」

その声に振り向くと、さっき蹴り倒した一人が、シャオに包丁を突き付けていた。

「お、お姉ちゃん……」

くそっ、油断していたか……。

ゝ三十三ゝ（後書き）

今日は間に合えばもう一話投稿できるかも知れません。

〓三十四〓（前書き）

何とか時間を取れたので次話投稿です。

（三十四）

「はーっはっは」

不意に、誰かの声が響いた。

「だ、誰だ！」

「悪のあるところに正義あり。とうっ！」

声の主は……怪しげな仮面というか、メガネみたいなものをつけた奴。

……っか、星だろ、あれ？

「え？ あなた、誰？」

……シャオ。

もしかしくなくても、あれが誰だか……わからない、とか……？

「な、何だテメエは！」

「悪党である貴様らに名乗る名などない！……と言いたいところだが、正義の味方の宿命により、聞かせてやろう。我が名は、華蝶仮面！」

「華蝶仮面だあ？ 何だか知らねえが、動くとコイツの命がねえぞ！」

そうだった。

星の事に気を取られていたが、シャオが危ないんだった。

「おい、星」

「私は、星などという名ではない。華蝶仮面だ」

何だそりゃ。

よくわからんけど、一応変装しているつもりらしい。

「じゃあ、華蝶仮面。アイツの注意を引いてくれ。その間に、シャオを救い出す」

「よし、任せておくがよい。たあっ！」

星、いや華蝶仮面がジャンプ。

そのまま、近くの民家の屋根に乗った。

明命には敵わないだろうけど、それでもあの身軽さは大したものだと思う。

「な、何のつもりだ。脅しか？」

「フッ。我が華麗なる舞に酔いしれるが良い！」

……ま、注意を引くのには成功しているし、ツツコミは後にしよう。

素早く、奴の死角に移動して、と。

……よし、気づいてないな。

そーっと、そーっと。

後少し……。

距離を測り、ベストなところまで移動した時。

「シャオ様！ 美綴、貴様がついていながら、なんたるザマだ！」

……あちゃー、肝心な事を忘れていた。

これだけ騒ぎになってるんだ、星以外の連中もそりゃ、駆けつけてくるよなあ。

で、よりによって一番手が、シャオ命の凌統かよ……ハア。

「おい、その屑野郎！ シャオ様から手を放せ！ 御無事ですか、シャオ様？」

「う、うん。へーきだよ、刃霧」

「……何だあ、このガキは。もしかして、コイツはどっかのお姫様か？」

「控えおろう、そちらの御方をどなたと心得る！ 畏れ多くもモガッ！」

お前は助さんか！

とお約束ツツコミはさておき、つられていらん事を言いかけた凌統の口を、既のところで菖蒲が防いでくれた。

うん、グッジョブ。

「全く、脳筋はこれだから困るんです！」

「モガ、モガガガッ！」

とりあえず……頑張れ、菖蒲。

「て、テメエら、舐めてんのか！」

すっかり蚊帳の外状態の男が、キレてる。
と。

ガブツ！

「痛えっ！」

シャオが男の手に噛み付いた。

そして、男の腹にヘッドバッド。

「ぶへっ！」

不意打ちみたいで格好で、男はあっけなくノックアウト。

「シャオ！」

「だから言ったでしょ、シャオだってやれるんだもん♪」

「ぶはっ！ シャオ様、お怪我はございませんかっ！」

菖蒲を振りほどいた……というか、弾き飛ばして駆け寄る凌統。

「みんな、大げさなんだから」

やれやれ、ともあれシャオが無事で良かった。

「うむ。やはり、最後は悪が滅びた。ではさらばだ！」

結局、出てきたただだったな、星も。

「どうやら片付いたようですねー」

「どわっ！」

風が、いきなり目の前に出てきた。

「むー。風は妖ではありませんよ、お姉さん」

「そんな出方すれば誰でもビビるわ！」

「それより、この後どうするつもりなのでしょう。風は、すぐに
決断する事をお勧めするのですよ」

「決断って？」

「周りを見ていただければ宜しいかとー」

「周りって……あらら」

騒ぎが起きれば、当然、警備兵が駆けつけてくる訳で。

「貴女達が、この騒ぎの中心のようだな。詰所まで同行願おうか」
有無を言わず、槍を構えた兵士に囲まれた。

「ちなみに、この場合の最良の策、出して貰えるか？」

「……ぐー」

寝てやがる。

「さ、来られよ」

逆らうってのもアレだしなあ……しようがない、ついていくか。

……さて。

まず、今の状況を整理しようか。

詰所に連行されたあたしとシャオ、当然身の潔白を主張。

風や凌統達は、最初から関わっていた訳ではないので、気にかかれなかったらしい。

一方、露天商の男達は、素直に認めたらもちろん処罰を受けるのはわかりきっているので、必死に弁解。

警備兵達は、周囲の人々にも聞き込みを行い、その結果。

「露天商共に非があるのは明らかだが、店や用具を壊し、また相手に怪我を負わせたのも事実。よって、貴女方にも処罰を受けていただく事になるな」

そのまま、牢屋にぶち込まれた次第という訳で。

身分を明かせばどうにかなる、というものでもないだろうし、そもそもあたしは、身分を証明するものなんざ持っていない。

郡太守の印綬とかは、会稽に行かなきゃない訳で。

兵でも連れてくるのならともかく、今のあたしはただの個人。

……さて、どうしたものかなあ。

菖蒲と凌統は、思惑は違うけどそれぞれに納得がいかず、猛抗議をしたみたいだけど、あたしの方で止めさせた。

これ以上、騒ぎを大きくしても仕方がないし、今回の警備兵が執った措置は、決して間違っていない。

……これでも、一応近いうちにここいら辺の責任者になってしまふんだし、その前からおかしい前例は作りたくないからな。

ま、なるようにしかならないか。

粗末な寝台に、あたしはゴロンと横になった。

「綾子お姉ちゃん。随分、余裕なんだね」

「だって、騒いで何か解決するか？　だったら、とりあえず寝るのがいいと思わない？」

「シャオはそこまでお気楽になれないな。お姉ちゃんがうらやましいかも」

と言いながら、あたしの横に寝っ転がるんじゃないって。

……とと、危ない危ない。

「すーっ、すーっ」

……あれ、シャオの奴、寝息を立ててるな。

あんな事の後だ、疲れたんだろうな。

「七乃。妾は湯浴みしたいのじゃ。何とかしてたもれ」

「無理ですって、美羽様」

「なんじゃとく！　七乃は妾の守役ではないか。何とかするのじゃ！」

「ですから、物理的に無理なんですってば」

聞き覚えのある声というか、会話だな。

しかし、牢屋で騒いでいいのか、おい？

緊張感のない連中の正体を確かめようと、鉄格子から覗き込むと……
相手と目が合った。

「ん？　お前は確か……」

「あーっ！　あああ、あなたはっ！」

あたしを指差して、滅茶苦茶ビビりまくりの少女。

「どうしたのじゃ、七乃？」

「おおお、お嬢様！　に、に……」

パニック過ぎて、何言ってるんだかわからん。

「に、とは何じゃ？」

「に、に、逃げて下さい！」

「七乃。ここから妾を出してくれるという事じゃな？　ならばさっさとそうするのじゃ」

「い、いえ、出られなくても逃げて下さいっ！」

「わからんの。ん？……そ、そ、そなたはっ！」

あ、もう一人も気づいた。

てか、遅すぎるだろ。

……にしても、こんなところで何やってんだ、この凸凹主従は。

「ひいひい、わ、妾を殺しに参ったか！」

「は、ははは、ま、まさか違いますよねえ。だ、だって、孫策さんは助けて下さいましたし」

「……いや、お前らがここにいて、って知ったらわからんぞ……。

袁術に張勳」

「や、やっぱりじゃ！　な、七乃、こ、こやつを斬るのじゃ」

「それも無理ですよ。武器もないし出られないし。って言うか、両方あっても無理です」

「……あのさ。まずは落ち着け、な？　あたしもこの通りだ、剣もないし、そもそもお前らをどうこうするつもりはないから」

「う、嘘なのじゃ！　あの時と同じように、妾にひどい事をするつもりなのじゃ！」

あゝ、うるさい。

いい加減黙ってくれないと、そろそろ兵士が駆けつけてくるぞ。

「ほわあああああああ！」

「ほわあああああああ！」

突然、外から大きな歓声が。

「何だ、ありゃ？」

「や、やっぱりなのじゃ！　孫策が、妾を殺しに、兵を連れて参ったに違いないのじゃ」

「いやゝ！　せ、折角助かったのにあんまりですよお」

この二人は、この際ほつとこう。

「はーい、みなさんこんにちはー！」

「みんなのちーちゃん、この邑にもやって来たよ♪」

「お待たせしたわね、私達のらいぶ、始まるわよ！」

「ほわああああああああああああああ！」

あれ、これもどつかで聞いたような……。

とりあえず、ここを出ないと、わからんな。

あたしは、天井に向かって声をかけた。

「明命。いるんだろ？」

「はうあつ？ い、いつから気づいていたんですか？」

「いや、ついさっきだけど。下りてこいよ」

「は、はい！」

シュタツ。

お馴染み、忍者ルックの明命登場。

「うー、私は修行が足りないのでしょうか……。綾子お姉さまに、いつも気配がバレてる気がします」

「まあ、あたしもそこは謎なんだ。それはいいとして、外の騒ぎ、ありや何だ？」

「はい。張……いえ、例の三人組のらいぶ、です」

「例の？」

「綾子お姉さまもよくご存知の三人です。らいぶ、という言葉はそもそも、お姉さまの発案ですよね？」

「……あ、もしかして。そうか、なるほどな」

明命が言い淀む筈だな。

そこにいる、袁術達に聞かれでもしたら面倒だし。

「あまり横紙破りはしたくないけど、ちょっと確かめたい。ここから出たいんだけど、責任者を呼んできてくれないか？」

「わかりました」

一旦天井に姿を消した明命、数分後には廊下に戻ってきた。

ガチャガチャ。

鍵が開き、あたしは外へ。

「大変ご無礼を致しました。まさか、貴女様が美綴様とは露知らず。処分は、いかようにもお受け致します」

警備兵の隊長らしき女性が、膝について謝った。

「いや、気にしないでくれ。あの時のアンタの処置は、間違っていないんだからさ」

「ですが、存じ上げなかったとは言え、私の落ち度には変わりはありません」

「でも、あたしが騒ぎを起こしたのも確かだし。それなら、あたしだって処罰されるべきだろ？　それが、法ってモンだと思うけどな」

「……………」

女性はジッと、あたしを見上げて、

「わかりました。そのように仰せられては、これ以上は水掛け論でしょう。……しかし、聞きしに勝る御方の方ですね、安心しました」

「……いや、あんまり感心しなくていいよ。あたしは、そこまで大した奴じゃないから」

「ふふ、そう受け取っておきましょう」

うゝむ、気に入られてしまったらしい。

まあ、軽蔑されるよりはいいけどな。

「ところで、そっちの二人は一体、何をしたのだ？」

別の牢に入れられている袁術と張勳を指さすと、隊長は溜息をつきながら、説明してくれた。

「ハッ。詐欺と、無銭飲食です」

「……はあ？」

「詐欺と、無銭飲食……ですか」

あたしと明命は、揃って呆れた。

仮にも名家の出で元太守が、なんちゅうせこい罪で捕まってるんだ？

「そうです。架空の名家を騙り、衣服の代金を後で届けさせると偽

り、また同じ手口で、飲茶をハシゴしておりまして。その上、大量の蜂蜜を騙し取ろうとして、不審に思った商人の通報で捕らえました」

いやいや、いくら放り出されたと言っても、犯罪はダメだろ。

「妾は悪くないのじゃ!」

「いよつ、どう見ても犯罪なのにその居直りっぷり。この大陸一の悪人め」

「うははははは、もっと妾を褒めるのじゃ!」

「……という次第でして。反省の色もなし、身元引受人もなしで。処分に困っております」

深刻そうに溜息をつく隊長。

「ところで、外の騒ぎはなんなのじゃ? まさか、本当に孫策が来ておるのか?」

「いえ、何やら歌っているようですね」

「なんじゃ、歌か。それなら、妾の方が上手いのじゃ」

そう言って、袁術は歌い始めた。

……お、何気に上手いぞ?

「明命。どう思う?」

「はい。袁術にこのような才があるとは、知りませんでした。確かに、上手かと」

「お嬢様、褒められてますよ?」

「うはははは、そうじゃそうじゃ。もっと妾を褒め称えるのじゃ!」

……まあ、調子に乗るのだけは控えた方がいいけどな。

お、そうだ。

「隊長、頼みがあるんだが。こいつら、仮釈放して貰えないか?」

「は? 仮釈放、ですか?」

「ああ。勿論罪は犯しているんだから、釈放はできない。けど、外に出るだけの仮処分ならできるだろう?」

「は、はあ。確かに可能ですが……。ただ、身元引受人がいないと」「あたしじゃダメか?」

「え？ 美綴様が？ どういう事でしようか」

真剣にあたしを見据える隊長。

無法な圧力には屈しないぞ、そんな姿勢が垣間見える。

だから、あたしも真顔で返した。

「コイツらは、ちよつとした知り合いというか、因縁があるんだ。それで、確かめたい事がある。勿論、それが済んだら、ここに連れて帰る事を約束する。どうだろうか？」

「……誓って、お約束いただけますか？」

「ああ。この、美綴綾子の名に賭けて」

この時代、名というのは重みのあるものだ、という実感がある。それを穢すような真似は出来ないし、誰もがとても嫌がる。

あたしも、その気持を込めて、言った。

「……わかりました。では、特例という事で、今日一日の仮釈放を認めます」

「という事だ。袁術、張勳、ちよつと外に出るから付き合え」

「ひいひい！ そ、そのような事を言って、わわわ、妾を殺す気であらう？」

あらら、すっかりビビられてるよ。

しかし、居丈高になってみたり、感情の起伏が激しい娘だよなあ。

「そんな訳ないだろ。だいたい、お前を殺す気なら、外に出す必要もないだろ？」

「……ふむ。それもそうじゃの」

あつさりと怯えを捨てやがったよ。

「綾子お姉さま。よろしいのですか？」

「明命、心配するな。言っておくけど、二人とも逃げようだなんて思うなよ？ そんな素振りを見せたら、その時は本当にコレだからな」

あたしは、手で頸を横に斬る仕草を見せた。

コクコクコクコク。

二人は、壊れた人形みたいに首を立てに振った。

後は、シャオだな……このままって訳にもいかないしな。

「あ、隊長さん。悪いんだけど、この娘、どこかで寝かせておいてやってくれ。疲れているようなんだ」

「わかりました。……この方は、もしや？」

隊長が何か言いかけるのを、あたしは制した。

「気付かないまままで居てくれると嬉しいんだけどな。あたしとしては」

「……わかりました。では、お預かり致します」
さて、いっちょ参りますか。

ゝ三十四ゝ(後書き)

長くなったので一旦切ります。

三十五 (前書き)

相変わらずのノリで話は進んで参ります。

（三十五）

三姉妹のライブは、絶好調のようだった。観客も超満員で、皆盛り上がっている。

「さ、こっちだ」

「あら？　ここ、楽屋ですよ？　入っていいんですか？」

張勳が、もっとの疑問を口にする。

「まあな。じゃ、ついてこい」

あたしを先頭に、袁術と張勳が続き、最後に明命。

あれだけ脅した以上、逃げるとは思えないけど……隊長との約束がある以上、万全を期さない。

そして、会場の隅にある天幕へ。

「何者だ！」

誰何する兵士に、

「美綴綾子だ」

「美綴？　知らんな、ここは立ち入り禁止だ。帰れ帰れ！」

名乗ってみたが、けんもほろろ。

……あたし、やっぱりそんなに知名度ないんじゃないか？

「無礼者！　貴様、どこの麾下か！」

そんな事を考えているうち、明命が、毅然とした態度で言った。

「な、何だと」

「私は周幼平。この名にも聞き覚えがないと言うか？」

「知らんと言ったら知らん！　貴様ら、これ以上騒ぎ立てるなら、

ひっ捕らえるぞ！」

生真面目っつか、融通の利かなさそうな奴だな、こりゃ。

「おい、どうした？」

隣の日幕から、別の兵士が数人出てきた。

「ハッ！　こ奴等が無断で立ち入ってきたので」

「何だと？　怪しい奴、ちよっと来て貰おう」

おいおい、またかよ。

つか、あたしはまだしも、明命まで知らないとかあり得ないってば。

お前ら、呉の兵士だろ？

「綾子お姉さま、如何なさいますか？」

あ、明命も怒ってるな、これは。

「ちよいとばかり、お仕置が必要かな。いくらなんでも、な」

「賛成です！」

明命は身構えた。

「明命、剣は抜くな。この程度なら、不要だ」

「はいっ！」

「その二人！ ケガしたくなきゃ、離れてろ！ あと、逃げようなんて思うなよ？」

「妾に命令とは無礼な奴……ヒッ！」

自分の立場を忘れているようなので、ガンを飛ばしてやった。

「はいはい。美羽様、こっちにいきましょうね」

二人が離れたのを確認してから、

「待たせたな。さて、あたし達をどうするって？」

連中を、軽く挑発してみる。

「おのれ、虚仮にするか！ 取り抑えろ！」

「応っ！」

……つくづくバカだ、こいつら。

で、勝負はあっけなく終了。

まあ、あたしと明命が、この程度で後れを取る訳もないんだがな。

「ちよっと、何の騒ぎ？」

天幕から、張宝が顔を覗かせた。

「よっ！」

声をかけたあたしを見て一言。

「……誰？」

コラッ、お前もか！

……いい加減、ツツコミ入れる気力もなくなってきた。

「どうしたの、ちい姉さん」

末の眼鏡娘が、続いて登場。

「あ、人和。コイツがね、馴れ馴れしくするんだけどさ。誰だったっけ？」

あたしと、明命を見た張梁が、みるみるうちに顔を変える。

「ち、ちよっとちい姉さん！ よりによって、何て事を！」

「もう、ご飯ぐらいゆつくり食べさせてよー。……あ、揮毫ならまたにしてね」

一番上の姉までこれかよ……。

「もう、天和姉さんまで！ 忘れたの、私達がこうしてまた歌えているのは誰のお陰？」

「そりゃ、孫策が許可をくれてるから」

「そうじゃなくって！……私から謝罪させて貰うわ、美綴様」
張梁だけは、覚えていたか……やれやれ。

「……あ」

「……あーっ、あの時の」

……もういいよ、ハア。

さっきの兵士達は、三姉妹のライブに合わせて雇われた、新顔だったらしい。

だから、連合軍に参加していたあたしや明命を知らなかった、との事。

……にしても、将を名前も知らないとか、流石にあり得んだろ。冥琳には報告しておかなきゃな……。

あ、勿論さっきの連中、直接お仕置きはしておいたけど。

……少なくとも、もう二度とあたしと明命の顔を忘れはしないだろう、うん。

「明命。どうした、ボーッとして」

「はうあっ？ な、なんでしょうか綾子お姉さま様！」

なんか、呼称が多くないか？

「で、ホントに大丈夫か？」

「だ、大丈夫あります。綾子お姉さま様には、一生ついていくであります！」

何かパニックってるらしく、言っている事が滅茶苦茶すぎて、訳わからんぞ。

「ごめんね、天とお姉ちゃんって天然だから、人の顔をなかなか覚えられなくて」

「ぶーっ、ちーちゃんだって忘れていたくせに」
相変わらず、姉二人は……まあ、いいけどさ。

「重ね重ね、申し訳ないわ。それで、用と言うのは？ 次の公演が迫っているから、手短にお願いしたいの」

唯一まともに話せる張梁に、小声で尋ねる。

「まず、アンタらを何と呼べばいい？」

元の名では、呼べない。

既に殺された筈の名が出れば……あたしでも、想像がつく。

「そうね。姉は天和と地和、私は人和でいいわ」
示されたのは、彼女たちの真名。

……月達と同じ運命、か。

ある意味、こちらは自業自得だけだな……。

「わかった。あたしも綾子で構わない。それで、用件なんだけど」
あたしは、張勳を手招き。

「ちょっと耳を貸せ」

「はいはい」

「お前ら、食うにも事欠いてるだろ？ でなきや、あんな情けない事で捕まるなんてあり得ないからな」

「……うう、その通りです。美羽様は、蜂蜜水を飲みたがりますし……。でもあんな高価なもの、無理なんですよお」

腹黒い奴だが、袁術への忠誠心だけは確か。

雪蓮に追放されて以来、ずっと苦勞を重ねてきたのだろう。

以前に比べると、その意味での思い上がりがあまり感じられなくなっている気がする。

「そこで、一つ提案だ。袁術の奴は、なかなか歌が上手いじゃないか。それで稼いだらどうだ？」

「それで、私達をここに？」

「ああ。後はわかるだろう？」

「ん〜と。ちなみに、お断りしたら、どうなっちゃうのでしょうか？それに、引き受けて貰えるとは限りませんし〜」

「まず、断れば当然、牢屋へ逆戻りだな。後、知っているかも知れないが、あたしは今度、この会稽郡太守に任じられた。つまり、あたしがお前らを裁く権限がある……。そして、あたしは雪蓮の意向に逆らうつもりはない」

「……ですよねえ、やっぱり」

「それからもう一つは、あたしは奴等に貸しがある。だから大丈夫だろう」

「……選択の余地とか、あったりしないですか？」

「ない。後、決断はこの場でな」

「そんなあ〜。お嬢様を説得出来るかどうかはまだわからないですよお」

半泣きの張勳。

「出来なきやそれまでさ。あと、当然だが名前は捨てて貰うか、芸名を名乗る事になるからな。で、どうするんだ？」

「うう〜、わかりました……。やってみます」

あたしは、袁術を説得するように伝えてから、人和に話しかけた。「待たせたな。時間がないから単刀直入に言う。あの娘を、お前達のライブに加えてやって欲しいんだ」

「唐突ね。けど、そんな事をするメリットは？」

流石はダメ姉二人を抱えて切り盛りするだけあるな。

「実力は、実際に見て貰ったらい。それで、観客の反応と、アンタらの評価で決める、って事で。メリットだが、アンタらにとっては、新顔が加わる事で、バリエーション、いや、公演の幅が広がるし、新たな観客を呼べるかも知れない。アイツらは、性根は少々問題ありだけど、食いつめて犯罪に走るところまで追い込まれているんだ。ここで稼げればそれを防げるし。それに」

「それに？」

「あたしが治める事になるこの土地で、犯罪者は出来る限り出したくないからな」

「それはわかったわ。けど、私達のメリットはそれだけ？　だとすると、ちよっと弱いわね」

「なら、あたしの貸し、これで帳消し。これならどうだ？」

あたしの言葉に、クールな人和の顔が、歪んだ。

「……それを言われたら、何も言えないわよ」

「ま、あたしも貸しを作ったまま、ってつもりもないし。だから、妥当な取引だと思うが、な」

「……考える時間は？　姉さん達も説得が必要よ」

「あまりない。つーか、今決めてくれ」

「そ、そんな！　いくら何でも強引過ぎるわよ」

人和の抗議は当然だろう。

が、折れる訳にはいかない。

「理由は三つある。一つは、あたしは視察の途中で、明日にはここを発つ。二つ目は、あの二人、今仮釈放なんだ。だから、機会は今のしかない。最後に、アンタらのライブはあちこちを回っているから、次に一同揃えるのがいつになるかもわからない」

「……選択の余地、ないみたいね。いいわ、姉さん達に話してみる。公演の開始時間を少しずらすわ」

「ああ」

後は、それぞれで話が上手くまとまるか次第。

……さて、どうなるか。

「みんなー、お待たせ！」

「ほわああああ！」

待ちかねた観客の熱気。

あたしも、元の世界で何度もライブに行っただけど……凄いな、これ。

「ちょっとみんなにお願いがあるの。かわいいいちーちゃんのお願ひ、聞いてくれる？」

「ほわああああ！」

「ありがとう！　じゃ、私達の新しいお友達、紹介しちゃうわ！」
演奏と共に、袁術登場。

「うむうむ。皆の者、大儀じゃな。妾は槇子^{カンツ}じゃ！」
いきなり真名、というのは抵抗があるらしいので、芸名を考えてくれ、と言われたあたし。

……三姉妹が麻雀っぽい名前だったから、咄嗟に考えた名前だけど、張勳が言い聞かせてどうにかなった。

「槇子ちゃんよ、よろしくね！　じゃ、早速一曲、行ってみよう！」

「苦しゅうないぞ。妾の歌に聞き惚れるがよいのじゃ！」

口調とか態度だけは、流石に即席じゃどうにもならないけど。

この大観衆の前でも、物怖じしないってのは流石ではあるな。

そして、袁術は歌い始めた。

「いやー、凄かったね。槇子ちゃん」

「美羽様、本当に盛り上がってましたねー」

「うはははは、妾の凄さ、見たか。もっともっと褒めるのじゃ！」

ご褒美の蜂蜜水を手に、ご機嫌の袁術。

……まあ、これで釣ったんだけどな。

「で、どうだ？　人和」

あたしは、実質リーダーの人和に、今回の評価を聞いてみた。

「そうね。盛り上がったのは事実だし、実力もあるようね。まだ荒

削りなところはあるけど」

「なるほど。槇子はとうだった？」

「うむ、妾も満足なのじゃ。のう、七乃？」

「ええええ。美羽様、とくっても素敵でした」

凸凹主従も手応えを感じたようだな。

「なら、両者とも、提案通りで問題ないな？」

三姉妹と、凸凹主従に確かめる。

人和は少し考え、

「天和姉さん、ちい姉さん。私に任せて貰っていいかしら？」
まず、姉二人に聞いた。

「うん。れんほーちゃんがいいなら、私は構わないよ？」

「そうねー。楽しそうだし、ちいもいいと思う」

肯定的な返事に、人和は頷く。

「そう、わかったわ。ただし、条件がもう一つあるの。いいかしら？」

「ん？ あたしに言ってる？」

「そうよ。規模も大きくなってきたし、もう一人増えるのなら、そろそろ私も公演の管理とか、その辺を誰かに任せたいの。適任者を紹介してくれたら、私も異存はないのだけれど」

「要は、マネージャーが欲しい、って事か」

「まねーじゃー？」

「そう。まあ、人和が欲しがっているような仕事をする人間の事さ。
……マネージャー、ね」

少し、考えてみる。

三姉妹は、噂によればアイドルにありがちな性格をしているらしい。

……つまり、わがままだって事。

そうになると、それに応えつつ、頭が良くて機転が利いて。

……いるか、そんな奴？

「七乃。蜂蜜水、おかわりじゃ！」

「美羽様。無理ですよ、それもいただきものですし」

「それを何とかするのが七乃の役目であらう！」

「だから無理なものは無理なんですってば」

……あ、いるじゃん。

「張勳」

「はい？」

困り果てていた張勳、救われたようにあたしを見る。

「美綴さん、あのー。蜂蜜水を、いただけないでしょうか？」

「ああ、いいぜ。その代わり」

「……な、何でしょうか」

嫌な予感がするのか、ちょっと引き気味。

「たった今から、三姉妹のマネージャーをやるんだ。もちろん、槇子はそのままでもいい」

「え？ ええっ！ それって、もしかして皆さんのお世話を、私が

……？」

「ああ」

「無理無理！ 無理ですってばあ！」

慌てて手を振るが、

「なら、蜂蜜水は出せないな」

「そ、そんなあ」

「何じゃ？ 七乃が何かすれば、蜂蜜水を持ってくるのか、美綴？」

「ああ。約束するぞ」

「ふむ、わかったのじゃ。七乃、美綴の言う通りにせい」

「み、美羽様あ。他人事だと思って、あっさり言わないで下さいよ
お」

ちなみに、拒否権はなしな。

これも、太守時代に好き勝手やった報いだ、諦めろ。

「という事だ。これから、この……対子トイツがマネージャーだ。いいな、
人和達？」

あたしの言葉に、三姉妹はジッと張勳を見て、

「わかった。よろしくねー、対子さん♪」

「そうだねー。早速だけど、ちいの買物、お願いね」

「ええ。引き継ぎはするから、今後は頼むわね」

うん、話は決まりだ。

「ふえーん。私の意志は無視ですか」

「人間、諦めが肝心だぞ。じゃ、後は任せたぞ。……あと、よからぬ事を企めば……わかってるな？」

「……え？ あ、あはははは、わ、わかってますってば」

釘を刺しておかないと、な。

ついでに、二人の真名も預かった。

余計な事をしない限り、二人の安全は保障する……その証として。

で。

すったもんだの末、宿に戻っている訳だが。

「美綴様……いや、姐御と呼ばせて下さい！」

凌統……いや、刃霧から、こう呼ばれるようになった。

あたしが三姉妹と一緒にいるところを見られたので、経緯を説明したところ。

……どうも、三姉妹の大ファンだったらしい。

今までの事をくどいほど詫びられた挙げ句に、こうなった。

当然のように、真名も預かる事に。

まあ、嫌われるよりはいいんだけど。

「なあ、何で姐御なんだ？」

「あの、ご迷惑でしょうか？」

ものすごく、あたしが罪悪感を感じる程、悄気返るとか……何だよ、もう。

「い、いや……別に、迷惑とかじゃないんだけど……な」

「俺、至らないところは直しますから！ 一生、姐御についていきます！」

……また、妙な事になっちゃったなあ、やれやれ。

（三十五）（後書き）

伏線張ったままだったキャラをいろいろと登場させました。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

三六

「どうしようたって……。逃げ出す訳にもいかないだろう?」

「ですよね。これから綾子様が統治される地だから、余計に無理です
ね」

全く、めんどくさいなあ、権力って奴は。

誓って言うが、あたしは政治家向きじゃない。

誰かが代わってくれるなら、喜んで譲っちゃう。

「明命でもいれば、連絡のつけようはあるけど。帰っちゃったしな
明命は呉の諜報活動を一手に引き受けているだけあり、かなり忙
しいらしい。」

あたしのところに来たのも、たまたま同じ方角での任務があった
からで、

「綾子お姉さまの顔を、どうしても見たくなりまして」

……多少、公私混同があったのは置いておこう。

とにかく、ずっとこの部屋に缶詰、ってのだけは願ひ下げだ。

ガチャ。

「なあ、ちよつといいか?」

ドアの外にいる兵士に、声をかけた。

「ハッ! 何なりとお申し付け下さいませ」

「あ、いや、そんなに畏まらなくていいから。ちよつと庭に出たい
んだ。いいかな?」

「庭、ですか? 散歩とか?」

「そうじゃなくて、ちよつと鍛錬をしたいんだ。ここんところ、あ
まり身体を動かしてないからな」

兵士二人は顔を見合わせて、

「わかりました。ただし、私が同行させていただきます」

最初に話しかけた方の兵士が、そう言った。

監視、って訳じゃないんだらうけど、彼らにしても任務である以

上、突っぱねる訳にもいかないな。

「菖蒲、久々に稽古をつけてやるよ」

「はい！　ありがとうございます！」

うん、いい笑顔だ。

豪族の屋敷だっただけあり、庭の広さも相当なものだ。
これなら、多少動き回っても平気だな。

「菖蒲。あたしの言った事、続けていたな？」

「はい。お言いつけ通りに」

「よし。じゃあ、今日はこれを使い」

あたしは、櫓の木を削って作った木剣を、菖蒲に放り投げた。
ブン、ブン。

「あれ？　随分と軽いですね」

「そう思うか？　準備ができたなら、いつでもいいぞ」

「はい。では、参ります！　たあああっ！」

ブンッ！

思い切り、木剣が振り下ろされた。

ガシッ！

避けずに、正面から受け止める。

「いい動きだ！　遠慮せずに来い！」

「はいっ！」

ビュッ！

ビュッ！

動きが、以前とは比べものにならないぐらい、格段にキレイがいい。
時々受け止めるあたしの腕にも、重みがしっかりと伝わってくる。
「どうだ、菖蒲？」

「は、はい！　教えをいただく前とは、全然違います！」
ま、そりゃそうだ。

あれは、大の男でもそう何度も振れる代物じゃない。
そのぐらい重さがあり、また頑丈な棒だからな。

非力さを素早さで補うのも手だけど、それには天性の身軽さが必要だろうとあたしは思う。

特に、思春や明命を見ているから、余計に。

刃霧のように力任せ、という手もあるだろうけど、あれはあれでもともとの素質が影響していそうだし。

菖蒲は、筋力をつける事である程度カバーし、身体の軽さを鍛えていけば、と。

……まあ、一応これでも部長やら師範代やらやっていたし、身体能力を見る眼はあるつもり。

「よし。今度はあたしが打ち込むから、受けて見せろ」

「は、はいっ！」

「せいっ！」

まずは、様子見に軽く突きを繰り出す。

「はっ！」

カン！

剣先を弾かれる。

そのまま突きを繰り返すが、なかなか巧みにかわしてくれた。

「やるな。なら、これはどうだ？」

剣を上段に構え、振り下ろす。

木剣とは言え、受け損なえばケガをする。

少し、手加減したところ、全て受けるか避けられた。

「よし。これならどうかな？」

今度はしっかりと踏み込んで、打ち込む！

カアン、カアン！

「うっ、くっ……！」

菖蒲の顔が、歪み始めた。

「ほら、どうしたどうした！ 受けるだけで終わりか？」

「……ええい！」

あたしの打ち込みを避け、懷に飛び込んできた。

「貫います！」

「甘い！」

あたしは咄嗟に片手を剣から放した。
そして、籠手で剣を受け止める。

「な……」

「おりゃ！」

そのまま、蹴りを繰り出す。

「ぐっ……！」

蹴りを受け、菖蒲は吹き飛んだ。

「あ、綾子様……」

「今のはいい動きだった。だがな、戦闘は武器だけじゃない、こうして体術の出番もある。恋とかも、そうだしな」

「ケホッ、ケホッ……。わ、わかりました」

ふらつきながらも、菖蒲は立ち上がった。

「よし。今日はここまでにしよう。よく頑張ったな」

「い、いえ、まだ行けます！」

「いや、ここまでだ。それ以上は無理だ」

「で、できます！」

それでも、食い下がろうとするので、

「これでか？」

ちよっと、膝を軽く叩いてやる。

「あっ……」

菖蒲は、ガクリと膝をついた。

「足腰に来ているだろ？ これ以上無理をしても、ケガをするだけだ。いいから休め」

「……わかりました。ご指導、ありがとうございました」

そんな菖蒲の頭を、あたしは撫でてやる。

成長したよな、この娘も。

「にへへ」

……この、ある意味不気味なにやけ顔は変わらないけど。

その晩。

食事だけは同じ部屋で、という希望は通り、全員で夕食となった。「はむっ、あむっ……。刃霧さん、相変わらずよく召し上がりますね」

「がつがつがつ。そう言う菖蒲こそ、今日は大した食欲じゃねーか」刃霧はともかくとして、菖蒲もまた、よく食べる事食べる事。

「綾子様に、ご指導いただきまして。ですから、お腹が。んくっ、んくっ」

「ちえ、いいな菖蒲は。俺も、姐御と仕合をしてみたいのにな。ズズッ」

「もう、二人ともお行儀悪いよ。口に物を入れてしゃべらないの！」シャオに説教される二人。

……にしても、ホントよく食うわ。

「しかし、この娘がそれ程の腕になった、と。主のご指導の賜ですか」

「そんなんじゃないって。この娘が頑張ったからだよ」

「フフ、また謙遜なさるか。ですが、腕を上げたと言えばこの星もまた然りですぞ。今度は、主におめおめと後れは取りませぬ」

そう言いながら、星はまたメンマを口にする。

「頼もしいですねー、お姉さんのところは。星ちゃんは一騎当千ですし、菖蒲ちゃんと刃霧ちゃんも、将来楽しみなのです」

「一騎当千、ね……。まあ、そうかもな」

「おや、私をそうお認め下さるのです？」

星は嬉しそうだ。

「当然だろ。あの時、たまたま勝ったぐらいで、あたしは星を見下すつもりはないさ」

「なら、その期待には応えねばなりませぬな。主の槍として」

「お、俺だって、シャオ様と姐御のためなら、大手柄立てて見せますって。……う、み、水！」

「私も負けません！ 綾子様の……うーっ、うーっ！」

「だからお行儀悪いの！ ほら、二人とも水！」

……ま、この二人にも期待はしてるけどな、もちろん。

「風」

「何でしょうカー？」

「お前さんにも、もちろん期待してるぜ？ あたしには、策とかそういうものがないしな」

「そうですねー。シャオ様からは、お姉さんが立てた策で、何度も大きな成果を上げた、って聞いてますけどー」

……は？

「そーだよ。綾子お姉ちゃんは凄いんだから♪ あの冥琳や穩が感心してたもんねー」

「い、いや、あれはそうじゃないんだ、シャオ」

「ですから、さっきのお姉さんの言葉は、ご謙遜と受け取っておくのですよ。もちろん、風は軍師ですから、請われれば策は立てますがねー」

わ、バカ止せ！

……ほら見ろ、菖蒲と刃霧がまた、あたしを違う眼で見てるじゃないか……ハア。

「……ん？」

する事もないので、早々とベッドに入ったあたし。

……でも、落ち着かなくて眠れずにいると、夜中に妙な気配を感じた。

「すぴー、すぴー」

爆睡している菖蒲を起こさないように、あたしはそっと、ベッドを出た。

窓の外には、兵士が不寝番として立っている。

……と、不意にその一人が、倒れた。

「な、何やつ！　ぐわっ！」

もう一人も、続けて倒れた。

あたしは愛用の剣を取り、菖蒲を起こした。

「菖蒲。起きろ、おい！」

「うゝん……。綾子様……お慕い申しております」

「だあああ、どんな夢見てるんだ！　つか寝ぼけてる場合じゃない！」

仕方がないので、頬に軽くビンタ。

「ああ、愛の鞭ですね。もっと下さいよお」

「いい加減にしろ！」

ゴン！

手加減なしに拳骨を食わせると、

「いたたた……。もう、どうしたんですか、せつかくいいところだつたのに」

……不穏な事を言いながら、起きてきた。

「いいから、早く剣を取れ！　何かおかしい！」

「な、何だ貴様ら！　ぎゃっ！」

今度は廊下からだ。

「……菖蒲。いいか、鍛錬を思い出せ」

「……え？　あ、は、はい！」

と、その瞬間、あたしの勘が何かを告げた。

「菖蒲、伏せろ！」

言葉と童子に、あたしは床に伏せた。

ヒュン、ヒュン！

カッ、カッ！

壁に、矢が刺さっている。

しかも、ご丁寧に火箭だ。

くそっ、焼き殺す気か！

「よし、そっちがその気なら」

「綾子様。一体何を！」

「菖蒲、ちょっと下がってろ。せーのっ」

あたしは、部屋にあった重そうな岩を持ち上げ、ドアに向かって放り投げた。

……きつと、何かしら高価な芸術品だったのかも知れないけど。

ドン！

バキッ！

岩がドアにぶつかり、そのまま突き破った。

「ギャッ！」

ドア越しに悲鳴が聞こえたのを確かめ、あたしは廊下に飛び出た。

「……………」

燃え始めた炎のおかげで、廊下の様子がよくわかる。

倒れた兵士と、ドアの下敷きになっている男。

……そして、覆面をした奴が、剣を手にしている。

「あたしが誰だか、知っての事らしいな？」

「……………」

覆面の賊は、無言で剣を構えた。

そして、そのままあたしに斬りかかってきた。

ビュッ！

その一撃をかわし、賊の腕を斬り飛ばす。

「ぐっ……………」

「菖蒲！ 捕らえろ！」

「はいっ！」

「そうはいくか…………ぐえっ！」

……賊は、即座に舌を噛み切った。

口を開けて止血をしようにも、齒を食いしばっているのどうにもならない。

そして、そのまま…………倒れた。

「綾子様……………」

菖蒲は、顔が青ざめている。

その頬を、何度かそつと、撫でてやった。

「事情はわからない。けど、あたしはこんなところで死ぬつもりはないさ。行くぞ！」

「はいっ！」

身の回りの物だけを持ち、あたしと菖蒲は外に向けて、走った。

「主！ ご無事ですか！」

槍を振り回している星の姿を確認。

「でえええい！ 邪魔だ、貴様ら！」

そして、さすまたを使う刃霧も。

「お姉ちゃん！」

「シャオ、無事か！」

「うんっ！」

駆け寄ってきたシャオも、弓を手に使っていた。

建物に火が回ってきた。

焼け落ちるのも、時間の問題だろう。

「そう言えば、風はどうした？」

「大丈夫ですよー」

と、地面から声が聞こえた。

見ると、土と同じ色をした布を羽織って、伏せていた。

「……どうしたんだ、これ？」

「はいー。周泰ちゃんに教えて貰ったのですよ」

なるほどな、それならわかる。

……いつの間に、というのはこの際置いておくか。

「みんな無事だな。よかった」

「……いえ、まだ喜ぶには早いですぞ、主」

星の声に、あたりを見る。

相手は、数十名。

完全に包囲された、か？

「やれ」

「ハッ！」

ヒュン、ヒュン！

一斉に矢が放たれる。

「はああああっ！」

ビュンビュンビュン！

星が、槍を振り回してそれらをはたき落とす。

流れ矢は、あたしと刃霧で叩き落とした。

……とは言え、マズい状況に変わりはない。

特に、風とシャオは、自分の身を守る事を望むのは酷だろう。

あたしと星だけなら、切り抜けられる自信はあるが……流石に厳しい。

何か、連中に隙を作らせないと。

あ、そうだ。

「風。あたしのカバンの中から、小さな輪状のものを取り出してくれ」

「了解なのですー」

ごそごそとカバンを漁り、目的の物を見つけてくれたらしい。

「風、シャオ。それに火をつけて、奴らの足下に放り投げてくれ」

「火をつければいいのでしょうか？」

「別にいいけど、どうして？」

「説明は後だ！ 早く！」

二人は、言う通りにそれに火をつけ、包囲網へと放り投げた。

パン、パンパンパン！

シュルシュルシュル！

「うおっ！」

「な、何事だっ！」

賊は、突然の爆発音と火花に、慌てふためいている。

「星、今だ！」

「応っ！ でええええい！」

あたし達は、獲物を手に、斬り込んだ。

そして、夜が明けた。

「申し訳ありません。警備に手拔かりがありました」

「謝らないでくれよ、隊長。相当の手練れ集団だったんだ」

「ですが、結果として孫尚香様と美綴様を危険な目に遭わせてしまいました」

「助かったんだから、もういいよ。それより風、生存者は？」

敵を調べていた風は、頭を振った。

「ダメですねー。全員、事切れています」

手がかりなし、か。

とにかく、あたしかシャオを狙った事だけは、確かだろう。

そして、可能性が高いのは……。

「シャオ、刃霧、それに菖蒲。雪蓮に使いを出すから、迎えが来たらすぐに寿春に引き返せ。いいな？」

「えーっ。シャオ、綾子お姉ちゃんと一緒じゃないの？」

「いいか、シャオ。こんな事件が起きた以上、あたしはシャオの安全を図らなきゃいけないんだ。わかるな？」

「で、でも、お姉ちゃんは……？」

上目遣いで、あたしを見るシャオ。

「そうです、綾子様と別行動なんて納得いきません」

「お。俺もそうです！ シャオ様の安全はわかりますが、なら姐御はどうするのですか」

あたしは、考えていた事を、みんなに伝える事にした。

「今回の事は、十中八九、あたしを狙ったものだと思うんだ。タイミング、いや時候が合いすぎる。だとすると、連中はまたやってくる筈だ」

「だったら、雪蓮お姉ちゃんに言って」

「それはダメだ。今回は大げさにしない、そう決めてきてるんだ。これで軍勢を連れてきたりしたら、余計な混乱を招きかねないだろう？」

「……じゃあ、綾子お姉ちゃんは？」

「あたしは、会稽に向かうさ。今度の敵の正体を突き止めるためにも、そして最初の目的を果たすためにも、な」

三人は押し黙ったけど、納得はしていないようだ。

「そ、そうだとしても、です。私は綾子様と共に！」

「菖蒲。これは危険を承知で行くんだぞ？ それに、シャオを守るのも、大事な役目だ。それを、刃霧一人に押しつける訳にはいい」

「俺なら平気です！ シャオ様も、姐御も守ってみせます」

「ダメだ」

わざと、突き放すように言った。

「綾子様……？」

「姐御……」

「わからないのか？ 危険だと言っているだろ、足手まといなんだよ」

「お、お姉ちゃん！ 酷いよ、いくら何でも！」

「……とにかく、帰れ。いいな？」

あたしは、そう言って背を向けた。

「主。あれで良かったのですかな？」

「風は大丈夫だと思いますよ。だって、みなさんお姉さんの事が大好きなんですから」

「……………」

連れていく事にした、星と風。

危険は承知の上だけど……誰も死なせるもんか。

ゝ三十六ゝ（後書き）

更新がやや不定期になりつつありますが、なるべく間を開けないようにしたいと思っています。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

（三十七）

再び、荒野に行く。

ただし、今度は三人だけで、だが。

警護に兵をつける、と言っていた、あの邑の警備隊長も、予定外の襲撃で死傷者が出てしまい、人員に余裕がなくなってしまったせいもあり、あたしが断ると、申し訳なさそうに引き下がっていった。……でも、あそこで殺された兵達は、あたしの部下となる筈だった。

理由はどうあれ、あたしを狙った奴らに殺されたのだ。

敵は、絶対取るからな。

彼らの墓前で、あたしは誓った。

「お姉さん、これからどうするおつもりでしょうか？」

「ふむ、私もそれを伺おうと思っていたところだ。主、お聞かせ願えますかな？」

「……ああ」

あたしは、振り向いて二人を見た。

星は真剣に、風も……眠そうな眼はそのままでも、やっぱり真剣さは伝わってくる。

「とにかく、会稽に向かう」

「主自ら、囀になろう……という事ですか？」

「そうだ。奴らの狙いは、あたしみたいだからな」

「よっぽど、お姉さんを会稽城に入れたくない輩がいるという事でしょうねー」

「風、相手はだいたい、予想がついているんだろ？」

「何故、そう思うのでしょうか？ 風は何も言ってませんが」

「あたしでさえ、全く敵の姿が想像できない訳じゃないからな。ましてや、風ならもっと精度の高い予測をしている筈だろう？」

「やれやれ、お姉さんにはお見通しでしたか。その通り、風も選択

肢は絞り込んでいますよ。ただし、決定的証拠に欠けているので、断定はできませんがー」

「……とにかく、証拠だな。捕らえても口を割らないんじゃ、他の方法を取るしかない」

あたしの言葉に、二人も頷く。

「何とも、難儀な事ですな。ですが、主の身は、この星が必ずやお守りしますぞ」

「風は戦えませんから、軍師としてお姉さんを支えるのですよ」

「頼む……。二人が頼りだ」

「はっ！」

「はいー」

その日は、野宿とした。

敵があたしを狙っている以上、邑に入れば人々に迷惑がかかる恐れがある。

もちろん、野宿は危険が伴うけど、逆に言えば敵を誘い出す手段でもある。

シャツ、シャツ。

「主。今のところ、周囲に異常はないようです」

見回りから、星が帰ってきた。

「ああ、ご苦労さん」

「ところで、何をしておいでか？」

「あ、これか」

あたしは、手元の枝を、星に手渡した。

近くの森で切ってきた枝を、小刀で削っている最中だ。

「ふむ。変わった形をしておりますが」

「ま、ちょっとした手慰みさ」

用途が想像もつかないのか、星はしきりに首を傾げている。

「お待たせしましたー。食事ができましたよ」

あたしは小刀と枝を置き、風のそばへ。

「それにしても、この飯盒という物は便利ですねー。お米が適量炊けますから」

「それも、天の知識ですか？」

「ま、そんなところかな。こんな風に、屋外で食事を作る時の必需品だったからな。まあ、野宿ってよりもキャンプの場合に使うんだけど」

……ん、風が何やら考えているな。

「お姉さん、お願いがあるのです」

「どうした？ 改まって」

「お姉さんの言葉には、不思議な物が多いと思うのです。それを、風に教えていただけないかと思ひましてー」

「別に構わないけど……どうしてまた？」

「いえいえ、知的欲求の一環なのですよ」

口に手を当て、謎めいた笑みを浮かべる風。

……な～んか企んでるぞ、あれ絶対。

「まあ、考えておくさ。まずは、今を乗り切ってからな」

「むー、何かごまかされた気がするのです」

「良いではないか、風。それよりも、食事にとしようぞ」

緊張感の中でも、食事はやはり、ホッと一息つける時間。

このメンツは、旅慣れているのでこういった事は手慣れているので、助かる。

刃霧は雑だし、菖蒲は意外と応用が利かず、シャオは……アテにする方が間違いだし。

「星ちゃん、ご飯にメンマは無理があると思うのですよ」

「何故だ？ 美味ではないか」

……まあ、味覚はさておき、だけどさ。

それから二日続けて野宿をした。

……しかし、一向に襲われる気配がない。

「妙だな……」

「左様。確かに不寝番は立てましたが、それでも襲うならば夜の方が有利です。わからんな」

星程の武人が、異常に気付かないはずがない。

でも、こうして三日間、何事もないというのも……。

「風？ どう思う？ こうして神経戦を挑んでいるとか……かな？」

「それも可能性としてはあり得ますけどねー。でも、敵の狙いは他にあるかと」

「他？ まさか、シャオが？」

マズい、向こうが本命だったら、あたしは取り返しをつかない事をしてしまった事になる。

が、風は慌てた様子もなく、

「いえいえ、シャオ様は恐らく無関係でしょう。狙われるなら、やはりお姉さんかと」

「しかし、わからんな。いきなり官位を貰った妬みか？」

「それもあるでしょうねー。人間の妬みは、時に恐ろしい程負の力になりますから」

だろうな。

いくらあたしが望んだものじゃない、そう言っても、地位や権力を欲しがる奴は、いつの世でも一緒だ。

「そんなに官位が欲しいものなのかなあ。あたしには理解できないよ」

「主も、大概自由人のようですからな」

「む。星に言われたくないぞ」

「おや、私をそのように見ておいでか。失礼な、私はそこまで自由気ままではありませんぬ」

「だってさ。どう思う、風？」

「ぐー」

「……あたしの前では別にいいけど、あまり兵とか部下の前で寝るなよ？ つーか寝たふりだろ、それは」

「おお、新しい形のツツコミですか。お姉さんもやりますねー」
こんな二人と一緒だと、いい意味で緊張感に欠ける。

……そのぐらい、張り詰めた数日を過ごしているのだから。

「とにかく、近くの邑へ向かおう。食糧も補給したいしな」

「そうですね。汗もいい加減、流しておきたい」

「では星ちゃん、ご案内よろしくですよー」

「うむ」

その夜。

疲れていたあたしは、思い切り爆睡していた。

「主、主」

「……ん、星か。こんな時間にどう……」

寝ぼけ眼で起き上がったあたしは、すぐに異変に気づいた。

「……いるようだな」

「ですな。やはり、我らを疲れさせる目論見かも知れませぬな」

何か引っかかるんだよな……。

他にも狙いがあるんじゃないか、そんな気がする。

「さ、お急ぎ下され」

「わかった。風は？」

「ご心配なくー」

しっかりと手荷物をまとめ、星の後ろに立っていた。

今度は庭はないけど、手口は同じだろう。

となると……。

「伏せるんだ！」

バリッ！

ヒュンヒュン！

カッ、カッ、カッ！

……やっぱり、な。

「星！ あたしは弓を黙らせる！ その間、廊下を警戒してくれ！」
「はっ！」

矢が心許ないから、これを使おう。

この際だ、使えるものは何でも試すしかないだろう。。

壊れた雨戸の隙間から、外を確かめる。

一人、二人……七人か。

「よし……やってやる!」

手にしたそれを引き絞り、発射。

ビュッ!

「ギャッ!」

一人が、顔を押さえてのたうち回る。

流石に見えないけど、鼻柱を叩き割ったんだ、たぶん鼻血が止まらない筈だ。

立て続けに撃ち、他の連中も同じ目に遭わせた。

「お姉さん、それは何でしょうか?」

「ああ、これか? パチンコさ」

「ばちんこ? 天の武器なのでしょうか?」

「うーん、武器ってよりは玩具かな。もちろん、玩具じゃなく、ちゃんとした武器として使われるものもあるけどさ」

枝にゴム、糸さえあれば用意できる優れもの。

……まあ、この世界じゃ、ゴム自体が貴重品なんだけどさ。

ポケットにたまたま輪ゴムが入っていたんで、ふと気づいて作ってみたんだけど、案外役に立つかも。

「こうやって、石なんかを撃つんだ。これなら、矢と違ってなくなっても気にならないだろう?」

「確かに。ですが、主でなければ使いこなせそうにもありませんがな」

「そうですねー。この距離を、正確に命中させるのは至難の業ですからね」

そうやって、人を化け物扱いするのはやめてくれ。

コツさえ掴めば、あたしじゃなくなつてできるさ。

……今度、祭さんや霰に試して貰おうかな。

ドタドタドタ！

「主、来ましたぞ！」

階段を荒々しく駆け上がってくる、足音。

「風。ちよつと失礼するぞ」

あたしは、風を小脇に抱えた。

「え？ おおー、いきなり風をこのように襲うとは、お姉さんもなかなか油断できませんねー」

「言うと思った。けど、ふざけるのは後だ、行くぞ」

そう言いながら、あたしはボロボロになった雨戸を蹴り飛ばす。

「もしや、主はそこから飛び降りるおつもりか？」

「もしかしくなくてもそうだ。風は無理だろうから、こうした」

星はニヤリ、として、

「つくづく、無茶ばかりをなさる御方ですな」

「なーに、華蝶仮面だってこのぐらい飛んでいたし。なあ、星？」

「はて？ 華蝶仮面……存じませぬな」

まだ惚けるか……バレバレだっつーの。

ドン、ドン！

ドアを蹴破ろうとする音。

あまりモタモタしてらんないな。

「行くぞ、星。風、しっかり捕まってるよ」

「やれやれ。主が無茶をなさる以上、お付き合いせねば、な」

「星ちゃん、人間諦めが肝心なのですよ。お姉さんみたいな方に仕えたのが運の尽きと言う事で」

……お前らなあ。

バァン！

ドアが蹴破られた。

その瞬間、あたしは跳んだ。

「バカなっ！ 飛び降りただと？」

「血迷ったか？」

賊どもが騒いでる。

……ま、こんな事で死ぬつもりは更々ないけどさ。

あたしは手近の枝に足をかけ、反動でまたジャンプ。

別の方角へと向きを変えた。

星は……しっかりとついてきてる。

「あっちだ！」

「逃がすな！ 射落とせ！」

待ち構えていた連中、慌てて矢を射ってきた。

勿論、当たる訳もない。

そのまま、草地に着地。

咄嗟に風を投げ出し、あたしは転がってエネルギーを殺した。

「むー。乱暴なのですよー」

風が抗議してくるが、仕方ないだろ。

あのまま足を踏ん張ったら、下手すると捻挫しかねないんだから。

「星！」

「心配御無用！」

ひらりと着地するや否や、龍牙を振りかざす。

族どもが群がってきていたのが見えたが、星に油断はなかったようだ。

「はいはいはいっ！」

神速の突きが繰り出され、賊は混乱に陥った。

「うっ！」

「げえっ！」

たちまちのうちに、二人が星の槍の前に、沈んだ。

算を乱して逃げ回る賊。

こないだの連中に比べると、腕も劣るようだし、統率もイマイチだ。

カアン！

あたしは手近な奴に迫り、得物を弾き飛ばした。

そして、柄を腹に叩き込む。

「うげっ……」

そいつが気絶したのを確かめると、

「おい、貴様ら！　あたしの腕は知っているだろうな！　死にたい奴からかかってこい！」

二本の剣を煌めかせながら、大見得を切る。

時代劇の剣豪みたいだよな、これじゃ。

明らかに狼狽する奴等を、確実に仕留めていく。

「何をしている、殺せ！」

と、別の一団が迫ってきた。

こちらは鍊度が高いらしく、一人一人が自信に満ち溢れている。

本命はこっちか！

青コウの剣を収め、倚天の剣を構えた。

「星、背中には預けた！」

「フッ、主とこうして戦えるとは。またとなき光栄に存じますぞ！」

あたしも同じ気持ちだ。

今の星は、ホントに頼もしい限りだ。

「死ねっ！」

繰り出された槍を弾き、賊の懷に飛び込む！

「それはこっちのセリフだ！」

躊躇う事なく、相手を刺し貫く。

「ゴボッ……」

口から血が滴る。

致命傷を与えた事を確かめ、あたしを挟み撃ちにしてきた二人に
対した。

「くたばれ、この化け物がっ！」

「誰が化け物……だっ！」

一人を袈裟斬りに、返す刀でもう一人は脳天を叩き割った。

「でやああっ！」

星の方も、龍牙が一閃する度、賊の命が確実に刈られている。
残るは……まだまだいるな。

たかだかあたし一人を殺すつもりなら、随分と大袈裟な事だな。

「主！ まだ音を上げるには早いですぞ！」

「上げていいならさっさと上げてるさ。けど、そうもいかないみたいで、な！」

ザシュ！

槍の穂先を、まとめて斬り飛ばす。

「くそっ！ 弓だ、弓で仕留めろ！」

バカめ、この至近距離で弓とはな！

足下に転がっていた槍を拾い、慌てて弓の準備をする一人に投げつけた。

「ぐえっ！」

よし！

「星！」

「はっ！」

弓を手にした連中を一掃し、あたしと星は阿修羅のように暴れ回った。

……全身、返り血だらけになりながら。

バシヤ。

「……う……あ、あれ？」

「気が付いたか」

さっき気絶させた男に、水をぶっかけた。

「……お、お前は……っ！」

「おあいにく様だね。あたしはそう簡単には死ねないのでね。さて、知ってる事、話して貰おうか？」

「し、知らねえな」

男はそう言って、そっぽを向く。

「ほう？ 仲間のようにになりたいのから、そうしてやろうか？」

「……………」

強情だな、よし。

カチャ。

出番のなかった青？の剣を抜き、

「たあっ！」

男に向けて振り下ろした。

「……？ あ、ああっ！」

男の着物がはだけ、真っ二つになった。

「さ、どうするんだい？」

「わ、わ、わかった！ 何でも話す！」

「よし。じゃあ、まずあたしを狙った理由を聞こうか」

「雇われたんだ、金でな」

「雇われた？」

「ああ。女一人殺すだけで、五年は遊んで暮らせるぐらいの金を出す、そういう約束でな」

かなりの大金を用意しているようだけど。

……でも、あたしを狙うだけで……？

「それで。お前の雇い主は誰なんだ？」

「名前は知らねえ。ただ、交州のぐえっ！」

不意に、男が叫んだ。

「どうした？」

「主。これを」

星が、男の背に刺さった矢を示した。

全く、気配を感じなかったが……何者なんだ？

「厄介ですねー。姿の見えない敵は」

「……全くだ。にしても、交州か……」

もう、襲ってくる気配はない。

夜明けまで、もうすぐだった。

（三十七）（後書き）

年度末という事もあり、仕事に追われています……。更新頻度がしばらく落ちますが、ご容赦の程を。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

（三十八）

「来たな」

「そのようすな。では主、参りましょう」

「ああ。風、手筈通りに頼む」

「了解ですよー」

あたしは、弓の一隊を引き連れて、匍匐前進。

この時代、もちろんそんな事を知っている奴はいないので、あたしの発案というか提案で。

鎧装備じゃ無理なので、思い切り軽装になって貰っている。

……まあ、敵と切り結ぶ事を前提にしているから、出来る真似だけだな。

「美綴様。あれを」

あたしの泊まっている宿を取り囲むように、賊が布陣しているのが見えた。

「ん。今夜はちょっと多いようだな……。よし、打ち合わせ通りに散開。合図と共に一斉射撃。いいな？」

「ハッ！」

そのまま、兵士が散っていく。

あたし自身も、弓を構える。

弓の利点は、遠距離攻撃だけじゃない。

こうして、寝そべった姿勢から射つ事が出来る、というのも大きい。

もちろん命中率を高めるのなら立射が一番なんだけど。

「全員、配置につきました」

よし、いっちょ始めるとします。

「いいか、命中には拘るな。とにかく速射を心がけて貰えばいい。あと、くれぐれも無理はしないでくれ」

「了解です」

そして、作戦開始。

キリキリキリ

ヒュッ！

「うぐっ！」

賊の、リーダーっぽい奴の背に、矢を突き立てた。

それが、合図。

ヒュンヒュン！

無数、とまではいなくても、かなりの本数の矢が飛んでいく。

しかも、賊はほとんどが背を向けているから、かわしたり叩き落とす事も叶わない。

命中には拘らなくていい、そうは言ったが、弓兵にも意地があったのか、なかなかの命中率だ。

「ギエッ！」

「ガアッ！」

いくら統制が取れている集団とはいえ、指揮官が倒された上に不意打ちで、どこから飛んでくるかもわからない矢の雨。

これで、混乱するなという方が酷だと思う。

「今だ！ かかれっ！」

そこに、絶妙のタイミングで突っ込む、星率いる歩兵隊。

「怯むな！ 押し返せ！」

「生憎だが、それは聞けん！ はいはいはいっ！」

グサリ。

「ぐふっ……」

星が、また一人討ち取った。

「このまま、適当に援護射撃よろしくな」

「美綴様？ どちらへ？」

「星の援護さ。あたしも、見ているだけってのは性分じゃなくってね！」

今日は二刀流で行こう。

乱戦になっているし、相手も大した事なさそうだからな。

ビュッ！

手近にいた奴の、頸を刎ねた。

……人間って、頸を一度に飛ばされると、血が噴水みたいに出てくる。

こっちに来て、知った事のうちの一つ。

まあ、見ていて気持ちのいいモンじゃないよな、もちろんだけど。

「だ、ダメだ！　かなわねえって！」

「逃げる！」

「おい、貴様ら！　勝手な退却は許さぐはっ！」

潰走する賊を押し止めようとした奴を、一刀で斬り捨てた。

「ひいひい、こ、こんなの聞いてねえぞ！」

「化け物相手じゃ命がいくらあってもたりねえよ！」

全く、人を化け物化け物と、失礼な。

逃げる事しか頭がない連中を数人、気絶させた。

「逃がしませんよー。やっちゃって下さい」

「応っ！」

そして、風の隊が連中の退路を断ち、生き残りを仕留めていく。

勝ったな……。

皆が、引き上げてきた。

負傷者は出たが、死者はゼロ。

「今宵は少しばかり、齒ごたえがありませんでしたな」

「そう言うな。風、よくやった」

あたしは、今夜の殊勲者、風の頭を撫でた。

「やれやれ。風は子供ではないのですよ？」

口ではそう言うが、嬉しそうにしているので説得力ゼロ。

……星が、何やら羨ましそうに見ているが……気のせいだ気のせい。

「皆も、協力ありがとう。お陰で、被害がなくて済んだ」

「いえ、美綴様の指揮と、趙雲様のお働きに、程立様の策。これが

揃ったが故の勝利です。我らこそ、邑の治安を乱す輩を討てて何よりです」

この邑の警備隊長は、そう言って慇懃に礼をする。

……まあ、いつまで経ってもこそばゆいというか、慣れないよなこれ。

野宿だと、どんなに隙を見せても襲ってこないくせに、人家のある場所では必ず、過剰なぐらいの人数でやって来る連中。

風がそれに気づいて、一計を案じた。

日の高いうちに小さな邑に入り、休養を取りながら夜を待つ。

暗くなってから宿を抜け出し、あたりに隠れて待つ。

連中が宿を包囲し、動き始めたところで、一斉に矢を射る。

そして、混乱したところに星が突撃、逃げようとした連中は、風が指揮する伏兵が叩く。

……邑の警備兵に身分を明かした上で、数を恃みにした策だったけど、これが的中。

捕らえた連中からは、やっぱり大した情報は聞き出せなかった。

……恐ろしく、情報統制に長けた相手のようだ。

そして、数日後。

あたし達は、会稽城を望む丘に立っていた。

「あれか……」

「はっ。しかし、長い道中でしたな」

「お姉さんと星ちゃんの組み合わせだから辿り着けたんでしょーねー」

全くだ。

「城内でも襲ってきますかな？」

「あり得るでしょうねー。ただし、そろそろ向こうも勝負を決めに来ると思いますが」

「風、どうしてそう思うんだ？」

「根拠はですね、先夜の賊の構成なのですよ」

「構成？」

「はいー、最初は手練れ揃いだっただのが、次第に雇われた破落戸しやくちやとか、食いつめた農民とか、質より量、そんな印象を受けるのです」

確かに、その通りかも知れないな。

相手が何処かの太守なら、こんなにチマチマと暗殺するよりも、軍勢を揃えてくるだろうし。

かと言って、盗賊とも思えない。

……ホント、誰があたしを狙うのやら。

「さて、行くか」

「……主、待たれよ」

星があたしを制止する。

……なるほど、殺気か。

「誰だ？ 姿を見せたらどうだい？」

木立の陰から、二人の男が姿を見せた。

「ここから先に通す訳にはいかん。立ち去る事も認めないがな」

槍を手にした、髭面の男が言った。

もう一人は、蛮刀を抜き放つ。

「あたしは生憎アンタらを知らないんだけどさ。名前ぐらい、名乗ったらどうだい？」

「よからう」

「おい、待て！」

髭面は止めようとするが、もう一人は構わず続けた。

「我が名は、朱霊だ」

「……仕方あるまい。俺は紀霊」

「おやおや、袁術ちゃんの配下だった人ですかー」

「そうなのか、風？」

「はいー。お姉さん達が南陽に攻め込んだ時は、確か一揆の鎮圧に向かっていたかと」

と、二人が無念そうに齒噛みする。

「そうだ！ あの時我らさえいたならば、むざむざと袁術様を……クッ！」

「得体の知れない貴様ごときに、戦わずして破れた俺達の無念、わかるまい！」

うーん、あの袁術にこんな忠義を尽くす家臣がいたとはねー。

てっきり、そんなのは張勳だけかと思っていたよ。

けど、わからん事もある。

「アンタ達の言いたい事はわかる。けど、あたしを狙うのは何故だい？」

「まず、袁術様を滅ぼした立役者が貴様だという事。そして、あろう事か皇帝陛下を誑かし、官位に將軍の座まで得るとは。許しがたい所業だ！」

「……まあ、信じないかも知れないけどさ。あたしが董卓を討ったのは事実だけど、官位も將軍も、あたしからは望んじやいないぜ？」

「黙れ！ そのような逃げ口上で済むと思うか！」

紀霊は憤り、槍を向けてきた。

星が、その前に立ちはだかる。

「どけ、貴様！ 用があるのは美綴だけだ！」

「そうは参らん。主殿に手を出す輩は、何人たりとて容赦はせぬ！」

「ぐぬぬぬぬ」

星には全く、隙がない。

腕前はわからんけど、得物や動きを見る限り、紀霊も朱霊も、それなりには腕に自信がありそうだ。

……でも、今の星に対するならば、まず勝ち目は、ない。

一度手合わせした時は……今にして思うと、よく勝てたと思うわ、マジで。

そのぐらい、最近の星は槍さばきが冴えているし、気迫が違う。

……それはともかく、あたしの言い分ぐらいは言わせて貰うさ。

「それに、袁術はアンタらにとってはいいい主君だったのかも知れな

いけどさ。民や兵はどうだった？ 贅沢三昧の為に、徒に民を苦しめた。兵を労る事もなかったんだろ、どうせ。きっかけを与えた事は認めるけどな、それも袁術が人望を得ていれば、ああはならなかった。違うか？」

「だ、黙れ！ 貴様ごときに何がわかる！」

「主君の無念、晴らさせて貰う。貴様は、我が主の仇にして、にくき孫策の片腕だからな。まずは、貴様を討つ！」

怨念の籠められた眼。

「主、もはや話すだけ無駄かと。散っていった兵の無念、晴らしましょうぞ」

星の言う通りだ。

殺し殺されるを繰り返す以上、避けては通れないのかもな……誰かに恨みを買うのは。

「風、下がっている」

「わかりましたー」

あたしの言葉に、風は頷いた。

「さ、相手になるぞ。来い！」

二振りの剣を抜き放つ。

「星、紀霊を頼む。あたしは、朱霊を」

「承知！」

得物から、お互いに与し易い組み合わせにした。

「いざ！」

「フン、死ね！」

ブオン！

唸りをあげて、降り下ろされる蛮刀。

ガキン！

受け止めたあたしは、思わず剣を取り落としそうになる。

「クッ、何て馬鹿力だ！」

「力では袁術軍随一と言われた身だからな。その頭、叩き割ってやるわ！」

「おっと！」

力勝負が不利なら、まともに受ける必要はない。それならばそれで、やりようがあるからな。

「はいはいはいはいっ！」

ガアン、ガアン！

横目で星を見ると、完全に紀霊を押しまくっている。これなら、勝負もじきにつくだろうな。

「余所見とは余裕だな！」

ブオン！

朱霊の一撃。

確かに重いが、それだけだ。

「なら、そろそろ終わりにさせて貰うさ」

「な、なにっ！」

「やあっ！」

倚天の剣で蛮刀を抑え、青？の剣を突き出す。

ドスッ！

肉を断ち、骨を砕く手応え。

「ゴホッ……」

朱霊は、そのまま倒れた。

「とどめだ！」

「うわっ！」

紀霊は槍を弾かれ、星に胸板を貫かれた。

「く、くそ……。無念」

ドサリ。

「ふう。片付きましたな」

槍の穂先を振りながら、星があたしを見た。

「ああ……」

何となく、モヤモヤした感じが残ったけど……。

「ギャーッ！」

と、不意に悲鳴が上がった。

「何だ？ 主、ご用心召されい！」

「いや……。多分、大丈夫だ。星、風を頼む」

「主？」

「お姉さん、どうかしたのですかー？」

戸惑う二人を残し、あたしは声のした繁みに飛び込んだ。

……この気配……。きつとそうだ。

バサッ！

ドスッ！

……一面、何十人もの男が、絶命していた。

そして、それはたった一人の人間の仕業だった。

見間違えようもない。

……この大陸で、掛け値なしに最強の武人。

「……久しぶり」

「ああ。そうだな呂布……。いや、恋」

真名で呼ぶと、恋はかすかに微笑んだ……。ように見えた。

どうしてこんなところにいたのかを尋ねると、恋があたしの危機を悟って、わざわざ駆けつけてくれたらしい。

「呂布殿のおかげですぞ、感謝するのです」

「……綾子、無事。恋も、嬉しい」

「二人とも、相変わらずだな。ははっ」

そんなあたしを、星と風がジーツと見ているのに気づいた。

「どうかしたか？」

「いえいえ。ただ、風も知らないところで、随分とお姉さんと仲良しだと思ひまして」

「それに、ただの武人ではない……。と。主の顔の広さに、感じ入ったまです」

……うん、多分だけどあたしと恋達で盛り上がってるんで、勘ねてるな、これ。

恋も、見知らぬ二人には、どこか警戒気味だし。

「なら自己紹介すればいいだろ、お互いにさ」

「ならば、私から。姓は趙、名は雲、字は子龍。綾子さま一の槍でござる」

「風は姓は程、名は立、字は仲徳なのです。お姉さんの軍師として、お仕えしているのですよー」

「……趙雲に、程立。……私は呂布」

お、二人が驚いている。

「で、では、貴殿があゝの飛將軍、呂布奉先か？」

「おおー、大陸中に名を馳せる、一騎当千のお方ですねー」

コクッ。

相変わらず、無表情で頷く恋。

「私は姓は陳、名は宮、字は公台ですぞ。呂布殿の軍師を任されているのです！」

そう言つて、胸を張る陳宮。

……まあ、張るほどの胸はないんだけど、とか言うと、跳び蹴りされそうだからやめとこ。

クイクイ。

と、恋が袖を引いた。

「どうした？」

「……趙雲と程立。綾子の、仲間？」

「ああ。もちろん大切な仲間さ」

なし崩し的に主従関係にはなっているけど、あたしはそう思っている。

「ん。綾子の仲間、恋も友達。なら、恋でいい」

「呂布。それは真名であろう？ 良いのか？」

コクッ。

恋はまた、頷く。

「わかった。ならば私も、星で構わない」

「風も、風でいいのですー」

どうやら、打ち解けたようだな。

あたしは、一人蚊帳の外な奴を見た。

「さて、アンタはどうするんだい？」

「ぐぬぬぬ。仲間外れにするなです！ 良いのです、ねねは音々音ですが、特別にねね、と呼ぶ事を許してやるのです」
ツンデレだねえ、この娘も。

さて、自己紹介も済んだ事だし。

行くか、会稽城に。

「恋はどうする？」

「……一緒がいい」

「恋殿が行かれるならば、ねねもお供しますぞ！」
はいはい。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

〓三十八〓（後書き）

オリキャラは増やすつもりはないのは一緒ですが、こんな感じで
よい役は出てきます。

ご意見、ご感想などお気軽にどうぞ。

〽三十九〽（前書き）

累計20万PVを超え、週間も4,000PVを上回りました。
拙作にここまでお付き合い下さり、ありがとうございます。

今回は戦闘シーンはありません、日常シーンです。

三十九

「何か、随分と活気がないな。そう思わないか？」

「はっ、確かに」

「ですねー」

「（コクッ）」

「そのようすな。まるで、荒れ果てたままの長安と変わりませぬぞ」

全員一致、か。

会稽城に入った、あたし達の第一印象。

城壁が壊れたままなのは、雪蓮が攻め落としてから修繕に着手する余裕がなかったから、これは仕方がない。

それでも警備兵は数多く駐屯しているし、並の賊なら手出しもできないだろう。

……それなのに、人の往来もあまり多くないし、店も閉まっているところが目立つ。

「主。私が、情報収集をして来ましょう」

星がそう申し出た。

「ならば、風も星ちゃんと一緒に行くのですよ。恋ちゃんは、お姉さんの警護をお願いしますねー」

「……わかった。綾子、恋を守る」

「いや、あたしなら平気だけど」

「お姉さん。敵の首魁は討ち取りましたが、油断は禁物ですよ。敵がまだいる可能性がありますので」

「風の言う通りなのですぞ、綾子殿」

軍師二人（片方は恋専属だけど）にそう言われて、逆らうつもりはない。

「わかった。じゃあ恋、ねね。先に宿を探そう」

「合流は、市の入り口にしましょうー」

そして、一旦あたし達はそこで別れた。

城にほど近い場所に宿を見つけて、入った。

「ちよつと聞きたいんだけどさ。部屋は空いているか？」

出てきた主人に聞くと、

「はい。何名様ですか？」

「五人だ」

「畏まりました。では、こちらへどうぞ」

二階の部屋に、案内された。

「皆様同じ部屋となりますが、よろしゅうございますか？」

「構わないよ。……他に客は？」

宿の中が、妙に静かなのに気付いて、あたしは尋ねてみた。

「いえ、今日はお客様方だけです。ここ最近、ずっとこんな感じなのですよ」

「ここ最近？　じゃあ、以前はそうじゃなかったって事？」

「はい。ここは揚州でも有数の大きな城、人も物も盛んに行き交います。ただ……」

主人は、顔を曇らせる。

「ただ？」

「はい。今度、新たに美綴様というお方が、この郡太守として赴任されるそうなのですが、……そのお方が、かなり苛烈なお方、という噂が広まっておりまして」

あたしが苛烈？

……そりゃまあ、敵には容赦しないけど。

けど、罪もない民にも、兵にもそんな事をするつもりはないんだけどな。

「へえ、誰がそんな噂を？」

素知らぬ顔で、聞いてみた。

「さて、噂ですからな。私は、都から来たという旅商人から聞きました」

「旅商人、ね」

「はい。税も容赦なく取り立てる、気に入らない者は処刑する、腕が立つので誰も逆らえない……と。なんせ、たったお一人で数万の兵を倒した、そんなお方とか」

……それ、どこの三国○双さ。

つーか、既にいろいろとあたしじゃないなあ。

「ですので、恐れて近寄らず、他国に移る者も出る有様でして」
「そう言って、主人は溜息をつく。」

「では、ごゆっくり。何かございましたら、下におりますので」
主人が出て行くと、あたしはベッドに横になった。

まるで、歴史の董卓そのものじゃないか、あたしの噂って。

犯人はあの連中……だろうな、きつと。

……と、恋があたしの隣に腰掛けた。

そして、あたしの顔を覗き込んでくる。

「……平気？」

「心配してくれるのか……？」

「ん。……綾子、悪くない」

そう言いながら、あたしの頭を撫でてくる。

「恋殿。甘やかす事はありませんぞ！」

「……ちんきゅー。綾子、恋の友達。友達心配するの、当たり前」

「サンキュー、恋」

「……さんきゅー？」

恋が首を傾げる。

「あたしの国の言葉さ。ありがとう、って意味」

「……ん。さんきゅー」

「こらー！ 恋殿におかしな言葉を教えるなです！」

落ち込んでいたつもりはないけど、知らず知らずのうちに気にしていたのかも。

……でも、気が楽になったよ。
ぐー。

……と、恋の腹が盛大に音を立てた。

「ははは、星達を探しながら、何か食いに行くか」

「……綾子も、食べる？」

「そうだな。あたしもそういや、腹が減ったしな。ねねは？」

「勿論、恋殿あるところにねねあり、ですぞ」

愚問だったな。

市の中にある、小さな飯店に入り、皆で昼食となった。

「そうか。宿の主人と同じだな」

「はいー。お姉さんは、風評だけならばすっかり会稽の人達に怖がられてますねー」

炒飯を取り分けながら、星と風の報告を聞いた。

「噂を流した者は、旅の商人や武芸者、占い師……。なかなか手が込んでいますぞ」

「……はむはむ」

恋の食べる姿に癒されながらも、あたしは考え込む。

そこまでの理由は？

あたしは、政治なんてものはわかりっこない。

だから、何をするにも教わりながら、やってみながらになるだろう。

……でも、やる前からこう悪印象を植え付けられるのは、実際にキツイ。

「むむむ。相当に厄介な敵のようすな、綾子殿」

「だが、ここに来る前に討ち取った紀霊と朱霊、あれが首魁ではないのか？　そうであれば、噂は所詮噂、直に沈静化すると思うのだから」

「だいいいのですけどねー。風は、まだ何かありそうな気がしているのですよ」

「……もきゅもきゅ」

黙々と食べる恋を除いて、全員が難しい顔をしている。

「とにかく、何とかしないと活気がなくなる一方、って訳か。風、ねね、何かいい案はないか？」

あたしの問いかけに、思案する二人。

「うーむ。なかなか難題ですなあ」

「ぐー」

頭を抱えるねね、そして……やっぱり寝る風。

「こらー！　ねねにばかり考えさせて、寝るなのです！」

風に、ねねのチョップが炸裂。

「おおー、お姉さんではなくねねちゃんが手を出すとは」

「真面目にやりやがれなのですー！」

「……ねね。適当に流した方がいいぜ？　風はいつもこうだからな」

あ、この酢豚美味しいな。

「とにかく、今すぐ思案は浮かばないって事だろ。それに、今回は視察が目的だからな。暫く滞在して様子を見るしかないさ。恋、その餡掛け焼きそば、少し貰うぞ」

「……ん。これも、美味しい」

「主の仰せの通りですな。む、亭主、メンマ焼売のお代わりを。それから黄酒を頼む」

「……桃まんと、回鍋肉も」

……ま、なるようになるさ。

とにかく、今は食べよう。

「お姉さんはお気楽ですねー」

「お前が言うなです！」

やれやれ、この二人は手がかかりそうだな。

宿に面した路地裏で、野良猫が毛繕いをしていた。

「チチチチチ」

口で音を立てると、猫があたしを見た。

毛並みの綺麗な三毛猫だ。

明命が見たら、またトリップするだろうなあ。

「ニャー」

猫は立ち上がり、あたしの足下に。

「ゴロゴロ」

「よしよし」

喉仏を撫でてやる。

しかし、ホント猫に好かれまくりだな……。

別に、何かをした訳でもないのに。

「ウニャー」

猫は寝転がり、腹を見せる。

……ま、可愛いからいっか。

「こんな感じで、みんなにも好かれたらいいかもな……」

「そうなんですかー」

「どわっ！」

不意に声をかけられ、驚いて叫んでしまった。

お陰で、猫までびっくりして逃げちゃったし。

「風！ 気配消して近づくな！」

思春や明命じゃあるまいし、何で軍師のお前さんがそんな真似出来るんだよ。

「謎めいた女は良いものですよー」

「はあ、もういい。で、何か用か？」

「いえいえ、お姉さんが猫を誑かしているのを目にしましてー」

「人聞きの悪い。人懐っこい猫だから、可愛がっていただけだ」

「おやおや、それは意外ですねー。お姉さんは、面倒見のいい姉御肌で、武人としての誇りに喜びを見出だすのとばかり思っていたのですが」

「……あのな。確かに美人は武道をすべき、ってのはあたしの主義だけだな。可愛いものには目がない、本来はそんな女の子らしい奴なんだぞ？」

「……ぐー」

「そこで寝るな！」

「おおー、あまりのお姉さんの自己陶醉ぶりに、ついうとうとと自己陶醉って……あたしゃ、そんなナルシストじゃないぞ。」

「ミャー」

「ミー」

お、また別の猫が……今度は、子猫が二匹か。

そして、同じ模様の大きな猫が、後からついてきた。たぶん、親子だろう。

「よしよし。ちょっと待ってな……お、あったあった」

市で買った煮干しの袋を取り出し、手に持った。

「ニャー、ニャー」

親猫が、すかさずねだり、近寄ってくる。

「おおー、今度は物で釣るのですね」

「……いいから、黙っていてくれ」

トコトコと近寄ってきた親猫が、あたしの手から煮干しを咥え、食べ始めた。

それを見て、子猫もやって来る。

親猫のように、煮干しを噛もうとして必死になっている。

ちよっと固いのかも知れないけど、親猫は何もしない。

これも、子育ての一環なんだろうな、きっと。

「ニャーン」

じゃれついてくる親猫。

猫って、もっとツンデレだったと思ったけど、この世界じゃ違ούνだろうか。

……と思っていたら、風が聞いてきた。

「お姉さん、どのようにすれば、ここまで猫に好かれるのでしょうか？」

「どう、って言われてもな。あたしは特別な事はしてないぜ？」

「むー、答えになってないのです。それでは、風が猫と話をする手

がかりが得られないのです」

猫と会話って……まあ、風ならやりかねないか。

「不思議ですね、お姉さんは。あれだけの武人としての働きをしているのに、全く血なまぐさいところがないと言いますかー」

「そうだいいな。あたしは、本当に殺し合いをする世界って、未だに馴染めてはいないからな」

「では、何故戦うのですか？」

「雪蓮や蓮華、呉のみんなの為にやれる事はする。……そう、覚悟を決めたからさ」

「それでは、自己犠牲に酔っているだけの、被虐的なお人、と言われてしまいますねー」

「かもな。でも、仲間がいて、そのみんなが楽しく笑って過ごせる。雪蓮の理想、あたしは素直に感心したんだ」

あたしがそう言うのと、風は首を傾げた。

「でも、その為には多くの血が流れますよねー？ 矛盾するとは思わないのですか？」

「結果から言えばそうだろうな。けど、あたしは劉備みたいに、理想だけで全てが済む、なんてのは甘い考えだって思う」

「そう言えば、劉備さんは話し合えば解決するって、本気で考えみたいですなー」

「……それも、悪い考えじゃない。でも、現実的じゃないしな」
子猫も、親に倣ってすり寄ってきた。

例えば、こんな小さな命を守ってやるのも、力が要る時代じゃないだろうか。

人間の傲慢とか、そんな偉そうな事は言わないけどさ。

子猫の頬を、指の背でそっと擦ってやる。

「ニャー♪」

嬉しそうに鳴く子猫。

あゝ、癒されるわ。

「……猫、たくさんいる」

恋が、いつの間にか立っていた。

……って、たくさん？

あたりを見ると……うわゝ、ホントに猫だらけだわ。

「わーい、猫さんがたくさんいるゝ」

「あゝ、ホントだ。ねえねえ、触ってもいい？」

釣られて、街の子供達まで寄ってきた。

「いいか、お前ら？」

通じるかどうかはわからんけど、一応猫達に聞いてみる。

「ウニャー」

「ニャー」

「……いいって」

って、通じてるのかよ恋は。

「ありがとう、お姉ちゃん！」

「うふふゝ、かわいい♪」

笑顔の子供達。

……いいじゃん、この光景。

「どうだ、風？　これは、守るに値するものじゃないかな？」

「……お姉さんは、本当にずるいですねー」

ふう、と溜息をつく風。

「何がさ？」

「こんな状況でそんな事を言われて、否定できる軍師はいないと思うのですよ。だから、ずるいのです」

「それでもいいさ。おっと」

子供が、屈んだあたしの背に、飛び乗ってきた。

「ねーねー、お姉ちゃんも遊ぼうよー」

見ると、恋も同じように、子供にじゃれつかれている。

「よし、何して遊ぶんだ？」

「んーとね、かくれんぼ！」

「えー？　鬼ごっこがいいなー」

さっきまでの悩みなんて、どこかへ吹き飛んだ。

……そう思えるぐらい、気持ちが軽くなったあたしだった。

「お姉ちゃん、バイバーイ！」

「ありがとうございます」

日暮れになり、子供達を迎えに来た母親に、何度もお礼を言われた。

「いって、あたしも楽しかったんだしさ」

「また、遊ぼうね！」

「猫さんもね」

「ニャー」

猫に、子供達に。

……旅に出て、何度も荒みそうになった心が、ホントに今は清々しい気分だ。

「よい表情をされておられるな、主」

宿から出てきた星が、あたしを見てそう言った。

「そうか？」

「ええ。なあ、ねね？」

「星殿の言う通りですぞ」

「そうか。……なら、意味があったな。今日という日は」

「……お腹空いた。ご飯、食べる」

「そうしましょうー」

「よし、そうしよう」

あたしは、宿へと戻る。

一番星が、鮮やかに輝いている中を。

「三十九」(後書き)

仕事がしばらくバタバタしそうで、更新間隔が不定期になってしまっています。

お付き合いいただいている皆様には申し訳ありませんが、当面このような感じとなりますので、ご了承下さい。

ご意見、ご感想などお気軽にどうぞ。

ゝ四十ゝ(前書き)

いつの間にか四十話到達です。

（四十）

チチチチチ。

チュンチュン。

早朝の街は、人通りも少ない。

窓を開け放つと、特有の冷たい空気が流れ込んでくる。

「うーん」

大きく、伸びを一つ。

さて、軽く柔軟でもしますかね。

あたしは、皆を起こさないよう、窓を閉めてからそっと、部屋を出た。

「おや、お早いですな」

既に起きていた主人が、声をかけてきた。

「ああ、おはようさん。今日もいい天気みたいだね」

「そうですな。朝食はまだ仕度中ですので、少しお待ちいただけますか？」

「ああ、少し外で身体を動かしてくるよ」

ギイ。

通りを歩く人の姿は、ほとんどない。

宿の裏手に出て、ストレッチ開始。

毎日毎日、戦いばかりというのは願い下げだけど、身体を動かさないとなまっちゃうからな。

「主。お目覚めでしたか」

星が、姿を見せた。

「あれ、起こしちゃたか？」

「いやいや。私も朝は早い方でしてな。主の起きる気配がありましたし」

「そっか。なら、一緒に柔軟でもやろうぜ」

「柔軟、ですと？」

あれ、通じてないな。

「えーと、柔軟体操って意味なんだけど」

「ふむ、それは一種の鍛錬ですか？」

「そうじゃなくなつてな。身体を動かす前に、筋肉を伸ばしたり縮めたりして、怪我を防ぐための事前準備……とでも言った方がいいのかな」

我ながら説明がヘタだな、あたし。

「とにかく、実際にやってみた方がわかりやすいと思う。一緒にやってみるか？」

「はっ。是非、ご教示の程を」

そんなに畏まる事もないんだけどね……ま、いいけど。

「恋殿、こちらは如何ですか？」

「……ん。食べる」

「ねねちゃんは、まるで恋ちゃんのお母さんみたいですわー」

「な、何を言うのです風殿！　ねねはただ、恋殿のために」

賑やかな朝食。

……そして、ある意味恒例の光景が。

「……星。朝からメンマか？」

「朝でも夜でも構いませぬ。メンマは、酒のつまみによし、ご飯のお供によし、まさに万能ですからな」

確かに美味しいけど、そんなにいつもいつも食べていて、飽きないんだろうかねえ。

あたしは、そろそろ和食が恋しくなってきたよ。

味噌とか醤油さえ手に入れば、いろいろ出来るんだけどね……。

流石に、ドラ○もんの四次元ポケットみたいなあたしのカバンにも入ってないし、レシピも知らないしなあ。

いかに、あたしのいた時代は食事情が良かったか、つくづく実感してしまう。

……寿春に戻ったら、時間を見つけていろいろ試してみたいな。

「お姉さん、どうかしましたか？ 箸が止まっていますか？」

風の声で。我に返る。

……気がつくとき、全員が、あたしを見ていた。

「何でもないさ。ちよつと考え事を、な」

「……食べないと、ダメ。恋も、心配」

あれだけ食事に集中していた恋にまで、心配されてしまった。

「ゴメンな。さ、食べないと」

いかんいかん。

あたしは、気を引き締め直した。

朝食後、あたしは街へと出てみた。

……やっぱ、活気がない。

噂の一人歩きって奴は、ホントに恐ろしいな。

新聞もテレビもインターネットもない時代、情報は全てクチコミか、支配する側からの通達だけ。

だから、逆に情報操作は容易とも言えるんだろう。

……もつとも、あたしのいた時代、マスコミが正しい情報を流していたか、と言われれば激しく疑問だけど。

ともかく、人々が情報の取捨選択をできない以上、噂は払拭するしかない。

でなきゃ、あたしがここにやって来たところで、民の上に立つ事なんかできやしない。

力づくで、なんて考えたくもないからな。

「た、大変だあ！」

と、男が叫びながら駆け込んできた。

「こ、黄巾党の残党だ！ こ、こっちに向かってくるぞ！」

「な、何だって！」

黄巾党？

残党がただの盗賊に成り下がっているのは知っているけど、奴らが襲うのはもっと小さな邑ばかりじゃなかったか？

いくら補修前とは言え、城壁のあるここを攻めて来る理由がわからん。

「ど、どうすりゃいいんだ？」

「あああ、もう俺達はおしまいだ。こんな事なら、新しい太守様が来る前に逃げ出しておくんだった」

「そうだ。苛烈な分、随分と恨まれている御方らしいからな。きつと、そのせいだ」

「違うない。俺達は巻き添えかよ」
クッ。

とにかく、これを取り切らないとどうしようもないな。
まずは、敵情を知る事、それから迎撃体制だな。
あたしは、急いで宿に戻った。

「何者だ！」

城の前で、兵士に止められた。

「美綴綾子、今度ここの郡太守を務める事になった者だ」

「……証拠は？」

「ない。ただ、本人だと言えない」

「そのような者を通せるか！ さ、帰った帰った」

まあ、当然の対応ではあるんだけどさ。

「今はあたしが本物か偽物か、それどころじゃないだろう？
黄巾党が攻めて来る」

「それがどうした！ 貴様には関係なからう」
「どうした、何事だ」

騒ぎを聞きつけて、上官らしき兵士が、奥から出てきた。

「はっ。この者が、美綴様だと称して、中に入れろと」
「美綴様だと？」

訝しそうに、あたし達を見て、

「おい。寿春城から赴任してきた者がいるな。連れてこい」と、傍らの兵士に命じた。

「失礼だが、面体を改めさせて頂く。しばし待たれよ」
けんもほろろに追い返されずに済みそうだ。

「お姉さんも、この辺りではまだ知られてないようですねー」

「当然なのです。まだ支配に入って日も浅く、綾子殿はもっと北方で動かれましたからね」

だからこそ、こっそり視察、なんて事が出来ただけど。

……まさか、こんな形で正体を明かす事になるとはな。

そして、奥から連れて来られた兵士が、あたしを見て、一礼。

「こ、これは美綴様。隊長、間違いありません」

「そうか。ご無礼仕りました、では中へ。お連れの方々もどうぞ」
まずは、第一段階クリア、かな？

「それで、数は？」

「ハッ。およそ五千、と」

「ご、五千ですと？ それは既に、賊の規模じゃないのです」

ねねでなくても、驚くだろう、そりゃ。

「確かに、黄巾党の残党としては、数が多すぎますな」

「それに、ただの邑と違って、城壁がありますからねー。攻城兵器なしに攻めるのは無謀だと思うのですよ」

あたしは、隊長に尋ねた。

「それで、この城の守備兵は？」

「はい。総勢で四千名です。ただし、領内の巡検などで出払っている者もあり、実際は三千名強というところです」
数では劣勢。

となると、打って出るのは普通はあり得ない、と。

「風、ねね。策は？」

「そうですねー。常識で考えれば、籠城しかないのですが」

「ただし、城壁が破損したままですからな。そこを突かれると厳し

いすぞ」

だよなあ。

「隊長。賊軍が到達するのは、後どのぐらいだ？」

「報告によれば、半日ほどかと」

半日か。

補修を進めても気休めにしかないな。

「恋、星。籠城が無理だとなると、後は野戦しかない。……行けるな？」

「主、私を誰だと思いで？ たかが賊、蹴散らしてみせましょうぞ」

「……恋も、やる」

愚問だったな。

「よし。風、城内に噂を流してくれ。この城内には、美綴と、飛將軍呂布がいる。賊などあつという間に蹴散らすだろう、とな。そして、戦える者は集まれ、とも」

「はいー。お姉さんと、恋ちゃんの武名を活かす策ですねー？」

「ああ。この際、使える物は使おう。隊長、兵士にもそれを広めてくれ」

「は、はあ。しかし、美綴様はともかく、呂布様とは……」

「いるさ。目の前に」

あたしに指差された恋は、首を傾げる。

「ほ、本人なのですか？」

「……証拠は、戦ってみればわかる、としか言えないけどさ。でも、事実だ」

「それならば、話は違います。わかりました！」

隊長は、一礼して駆けていった。

「星は一隊を率いて貰う。ねね、補佐してやってくれ？」

「はっ」

「ううー、ねねは恋殿のそばにいたいのですが……。やむを得ませんな」

「頼む。では、作戦だけ……」

あたしは、自分なりに考えた作戦を、みんなに説明し始めた。

「前方に砂塵！ 賊軍です！」

見張りの兵が、叫んだ。

「よし。出るぞ」

「ハッ！ 城門を開け！」

ギイイイイ。

あたしを先頭に、一千の兵が城外へ。

「いいか、よく聞け！ 敵は有象無象の賊の集まりだ！ 普段から訓練を積んでいる諸君の敵ではない！ それに、あたしがついている。あの、天下無双の呂布將軍もいる。負ける訳がないのだ、皆、思う存分力を発揮せよ！」

「応っ！」

隊長が上手く流布してくれたらしく、兵の士気は高い。

さて、まずはあたしが率先しないとな。

弓を取り出し、構える。

砂塵はどんどん大きく、そして迫ってくる。

やがて、姿がはっきりしてきた。

……やっぱり、賊なんかじゃない。

賊にしては、装備が良すぎるからな。

あたしは、馬に乗った、立派な甲冑姿の奴に、狙いを定めた。

キリキリキリ。

ヒュン！

矢はまっしぐらに、その男へと吸い込まれていく。

「うぐっ……！」

そして、胸板を貫き、男は落馬した。

すかさず、二の矢、三の矢を放ち、目ぼしい奴を討ち取っていく。

「怯むな、かかれい！」

ヒュン、ヒュン、ヒュン！

敵陣からも、矢が飛んで来る。

けど、まだ距離が遠い。

あたしの矢に驚いて射ってきたようだけど、こちらはまだだ。

「もっと引きつけるんだ……あともう少し……よし、射て！」

ヒュン、ヒュン、ヒュン！

「ギャーッ！」

「ぐわっ！」

満を持して放たれた矢は、確実に敵の数を減らしていく。

とは言え、敵の方が数が多いので、連中は屍を超えて向かってくる。

さて、いっちょ暴れますか。

「いいか！ 一人が一人を倒そうとするな！ 卑怯と言われても構わない、必ず二人がかりで敵にかかるんだ、いいな！」

「応！」

こちらの方が劣勢だけど、あたしは敢えてその作戦を指示した。

犠牲は少ない方がいいし、そうすれば疲れ方も違うからな。

「いくぜ！」

青紅の剣と、倚天の剣。

二刀流にもだいぶ慣れてきたな。

「はあああああっ！」

ザシュ！

「ぐはっ！」

スパッ！

「や、槍が真っ二つだと……。グギャー！」

「おらおらどうした！ そんなんじゃ、あたしは討ち取れないぜ？」

「おい、あの化け物を討ち取れ！」

化け物とはご挨拶だね。

あたしは号令をかけた奴に向かって突き進む。

「ふ、防げ！ 防げ！」

へっぴり腰の敵兵を蹴り飛ばし、殴りつけて。

それでも向かってくる奴は斬り捨てながら、そいつの前でジャンプ。

「せやっ！」

真っ向から幹竹割り。

流石は鉄を泥のように斬る剣、兜が真っ二つだ。

血しぶきを浴びちまったけど、昔みたいに眼に入るようなドジは踏まない。

「何をしている！ 敵はほんの僅かなんだぞ！」

「ば、バカ言うな！ あんな化け物に」

「化け物で悪かったなっ！」

グサツ！

そいつらを、まとめてたたき斬る。

……とは言え、数の差は覆せないかな、流石に。

振り向くと、だいぶあたしの隊は、数を減らしている。

と、その時。

「あ、新手だ！」

敵の間に動揺が走った。

手筈通り、恋の部隊が突撃を開始。

深紅の『呂』の旗。

あの後急ごしらえて作らせた旗だけど、その効果は絶大。

「りよ、呂布だあ！」

「弓だ！ 弓を！」

ま、無駄だろうな。

恋の突撃は、そうそう止められるモンじゃない。

「こ、こっちからも敵だ！」

そして、十分に敵が動揺した頃に、星が突っ込む。
あたしに気を取られていた敵は、対応が取れない。

「よし、今だ！」

そして、真打。

星の隊で控えていた、弓隊が一斉に火矢を放った。
予め撒いておいた油に火がつき、敵の後曲が、火に包まれた。

「ぎゃああああ！」

「火が、火があ！」

ただ地面に撒いただけなら、染み込んでしまい効果はなかったんだが。

「それなら、水を撒いた上から撒くとか、枯れ草にみせたものに染み込ませておくとかで、効果はありそうですねー」

……と、風のアイディアを採用。

「くそ、こうなれば……美綴だ！ 奴を集中狙いだ！」

……げ。

敵も死にもの狂い。

その勢いで向かってこられたら、ひとたまりもない。
味方の兵もそうだろうけど、そもそもあたしが限界。

……ヤバいね、どうも。

ヒュン！

「グッ……」

右腕に、焼けつくような痛みが走る。

矢を喰らっちゃもうとは……不覚。

敵の攻撃を、左腕一本で防げるか……？

恋も星も、邪魔をする敵をまだ蹴散らせていない。

「よし、討ち取れ！」

今度こそ、ダメ……か？

……でも、あたしの運は、まだ尽きてなかったらしい。

「新手だ！ 一万はいるぞ！」

一万だって？

けど、敵の混乱ぶりは本物っぽい。

どういう事だ……？

見ると、敵の後方で、砂塵が上がっている。

旗は……蓮華と思春か。

どうやら、助かったらしい……な。

あたしは、ペタンとその場に座り込んだ。

はは、安心しすぎて腰が抜けたよ……情けないねえ。

ゝ四十ゝ（後書き）

別作品ですが、現在手付かずです。
進捗は活動報告に書きますので、たまにご確認いただければ幸甚です。

ご意見、ご感想などお気軽にどうぞ。

（四十一）

「全く、無茶し過ぎだ」

「思春の言う通りよ。仕方なかったとは言っても、危なかったのは事実よ？」

治療を受けながら、蓮華と思春に、ダブル説教を喰らうあたし。実際、確かにヤバかった。

相手が盗賊と敗残兵の連合という組み合わせじゃなかったら、今頃はここにこうしていられなかったかも知れない。

「しかしですねー。あの状況では、他にいい策もなかったかとー」

「いささか無茶ではありましたが。主であれば、と信じて任せた我らにも責任はありますからな」

「……みんな、無事。良かった」

「恋殿の言われる通りですぞ。そのぐらい、城内は切羽詰まっておりましたからな」

一緒に戦った、仲間の証言。

これもまた、事実なんだよなあ。

「……で。これは、どういう事なのか、説明がして貰える？」

「……だな」

あたしは、星と風と一緒にいる経緯と、恋達がやって来た経緯を話した。

もともと、寿春に戻ったらみんなに話すつもりだった事だ、包み隠さずに全てを打ち明けた。

「なるほどね……。でも、これじゃ立派な軍団ね。まるで」

「如何なさいますか、蓮華様？」

「私だけでは判断出来ないわ。雪蓮姉様に判断を仰ぎましょう」

そう言って、蓮華はこめかみを押さえる。

「……すまんな、重ね重ね面倒をかけて」

あたしは、謝らずにいられない。

「仕方ないわ。綾子に悪意があってやった事じゃないんだもの」

「だが、あまり蓮華様に心配をかけるのは感心しないな。貴様の事だ、責任逃れはしないと思うがな」

「……ホント、すまん。蓮華、思春」

「さ、怪我人は大人しく休みなさい。後は他の皆に聞かせて貰うから」

「……ああ、そうさせて貰うよ」

寿春に戻ったシャオ達は、あたしを取り巻く状況を、雪蓮や冥琳に伝えたらしい。

で、雪蓮の勘があたしの危機という事で、すぐに動ける兵を集め、蓮華と思春が率いてきた……という次第。

お陰で九死に一生を得た。

雪蓮の勘には感謝するばかりだな。

とにかく、この右腕を治す事に専念しないと。

利き腕が使えないと、何かと不便だし。

「先日の賊軍、正体が判明したわ」

数日後、蓮華があたしの部屋にやって来て、聞かせてくれた。

「黄巾党だけ、じゃないんだろう？」

「ええ。それは呂布も趙雲も言っていたわ。綾子、道中で交州云々と耳にしなかった？」

捕まえた奴が、そんな事を言ってたな、確か。

「前の会稽太守、王朗の残存勢力が、そっちに逃げたという情報は得ていたみたいなの。でも、ここを落とした時点で、雪蓮姉様も追撃するだけの余裕がなくなってる。少数だから放っておいても問題ない……そういう判断だったらしいわ」

「なるほど。あたしでも同じ判断をしただろうな、目的は達しているんだから」

「ええ。でも、まさかこんな事になるなんてね……」

蓮華はそう言って、吊られたあたしの右腕を見る。

「あんなに向かうところ敵なし、という感じのあなたでも、やっぱり限界はあるのね」

「……あのな。あたしは言っておくけど、ただの人間だぞ？」

「その腕前と胆力は、とてもそうは思えんがな」

そう言いながら、思春が入ってきた。

「思春、ご苦労様。その後、動きは？」

「はっ。賊軍は一度霧散しましたが、不穏な動きは続いているようです」

「しつこいな。一掃してしまわないと、長引きそうね」

一度制圧した地で、こんな動きが続けば、人々は不安になるし、治安も安定しない。

こんな事になるんだったら、最初から兵を連れてくるべきだったかもな。

今更ながら、あたしの判断は甘かったのかも。

「失礼します」

兵士が入ってきた。

「何か？」

「ハッ。街の長老や、近隣の邑から代表者が集まり、美綴様にお目通りを願いたいと。如何なさいますか？」

あたしに会いたいって？

あたしは勿論構わないし、むしろこちらから出向くべきかな、と思っていたからな。

「綾子、どうするの？」

蓮華の問いに、あたしは即答。

「会うさ」

「しかしな。まだ、貴様を狙う奴は生きているんだぞ。万が一という事がある」

「思春の言う通りよ。それに、今は怪我をしている。無理をする事もないわ」

二人の言う事はもっともだと思う。

あたしを敵視している連中が、会見を口実に襲ってくる危険は確かにあるだろう。

けど、他意のない人々の訪問だったら、門前払いなどあり得ない。つか、あたし自身、それは許せない。

……リスクはあるけど、会うべきだと思うんだ。

「庭に通してくれ。あたしも行く」

「ちよっと！ 私の言った事、聞いてなかったの？」

「しかも謁見の間ではなく、庭だと。危険だぞ」

「わかってる。けど、あたしの思う通りにやらせて欲しい。頼む」
あたしは頭を下げた。

「御免。その場に、私も立ち合いましょうぞ」

「……恋も」

星と恋、どうやら聞いていたらしい。

「趙雲。あなたが綾子に忠節を尽くすのはわかるわ。けど、綾子はどう、呉だけの存在じゃない。漢王朝の官位を持つ、雪蓮姉様や曹操達と並ぶ、英雄なのよ？」

「孫権殿、それは我らとて存じております。ですが、主の意思も尊重したい」

「（コクッ）」

「程立に陳宮。あなた達も賛成なのかしら？」

蓮華に振られた二人もまた、即答だった。

「お姉さんは言い出したら聞きませんしねー。それに、好機でもあるかとー」

「ねねも賛成するのですぞ！」蓮華はふう、とため息をひとつ。

「どうしても、決意は変わらないのね？」

「ああ」

「……わかったわ。でも、用心はさせて貰うわよ。……思春」

「手の者を、潜ませておきます」

「急いで。それから、私もその場に同席するわ」

蓮華の言葉に、全員が驚いた。

「蓮華！ 危険だと言ったのはアンタだぞ」

「綾子の言う通りです、蓮華様。これは綾子の意向であり、蓮華様まで危険に身を晒す事は」

他の三人も同意とばかりに頷く。

……恋だけは、相変わらず無表情だけど。

「いや、私も出るべきだと思う。彼らは呉の民でもある、ならば孫家に連なる者として、陰から覗き見みたいなのは真似はしたくない」

蓮華の気持ちは、尊いものがある。

……ただ、彼女はただ、孫家の一族というだけじゃない。

雪蓮が、自分の後継者と明言している身だし、争いがなくなれば、たぶん本気でそうするつもりなんだろう。

彼女に万が一の事があつたら、それこそ一大事。

「ダメだ。それこそ、もし何かあつたらどうする気だ？」

「平気よ。思春が備えてくれるんだし、それに呂布や趙雲だっている。不穏な気配があれば、程立や陳宮が防いでくれる。違うかしら？」

「そりゃそうだけど……」

「なら、問題ないわね。綾子、私はね、姉様から言われているような、王としての才覚があるかどうかを試したいの。だから、こんな程度で逃げ隠れするような無様な姿は、誰にも見せたくないから」

そう言い放つ蓮華の眼に、迷いはない。

「お姉さん、孫権様の言われる事にも一理ありますしー。それに、お姉さんだけでなく、孫家の代表も会うとなれば、更なる効果も期待できると思うのですよ」

「そうですね。民は権威に弱いところがありますから、綾子殿と孫権殿が揃って、となれば、民の評価は違ってくるはず」

「……そうだな、風とねねの言う通りだろう。わかった、蓮華も一緒に」

「ああ、任せて貰おう」

これだけのメンツが揃っているんだ、不測の事態もないだろうし。

……いざとなれば、あたしの身を挺してでも、蓮華は守ってみせるさ。

庭に行くと、十数人の爺さん達が、いた。

あたし達の前で、平伏している。

……蓮華は平気そうだけど、あたしはどうやっても慣れそうにもない。

恋や星、思春は少し間を置いて立っている。

「顔を上げてくれ」

「失礼致します」

爺さんたちと、視線が合う。

「美綴綾子だ」

「私は孫仲謀。揚州牧孫策の一族だ」

「おお、美綴將軍だけでなく、孫権様までお会いいただけるとは」

「いやいや、ありがたやありがたや」

あたしは神様じゃないっつーの。

爺さんの一人が、あたしと蓮華を見て、話し出す。

「まずは、この会稽城の危機を救っていただき、その御礼を申し上げます」

「いや、当然の事をしたまでさ」

「美綴の申す通りだ。自らの民は全力で守る、それが孫家のやり方だ」

「ほっほっほ。恩に着せる事もなく、当然のように仰いますな」

「そりゃそうさ。孫策が願うのは、呉の民が笑顔で過ごせる事。そのために、あたしも孫権も、他の将も頑張っているんだ」

「ならば、一つお聞かせ願いたい。美綴様は、この会稽で何をなされるおつもりか？」

別の爺さんが、訊いてきた。

たぶん、例の噂を踏まえての事だろう。

全員が、ジッとあたしを見る。

「正直に言うけど、あたしはどこかを治めた経験なんてものは、ない。だから、あまり偉そうな事を言うつもりはない」

一旦、言葉を切る。

爺さんだけじゃなく、周りにいる兵士も、あたしの言葉を待っているようだ。

「だから、あたしは基本的に、孫策が目指すもの、それをここでも目指したい。大まかにはそれで行く」

「では、具体的には？」

「まず、人を殺した者は死罪とする。次に、人を傷つけた者は処罰を与える。そして、盗みを働いた者も処罰を与える。……以上さ」

風から教えてもらった、そのまんまだけど。

なんでも前漢の祖、劉邦が関中に入った時に、人々に宣言したのがこの三ヶ条らしい。

秦の始皇帝ってのはあたしもある程度は知っているけど、その法治主義は徹底しすぎていて、かなり苛烈だったようだ。

それで人々は圧政に苦しみ、窮屈な思いで過ごしていた……だからこそ、劉邦は敢えてシンプルに宣言をした。

……まあ、本人のアイディアじゃなく、軍師の張良から提案された事らしいけどな。

「高祖と同じ事を仰るとは。しかし、それだけですかな？」

学のありそうな爺さんが、更に突っ込んでくる。

「はつきり言おうか。あたしは、自分で面倒だと思ふ事は、他人にさせない主義なんだ。それに、別に贅沢がしたい訳じゃないし」

「では、税を厳しく取り立てたり、逆らう者を容赦なく斬る、というのは」

「全部、嘘だ。あたしがここにこうしている事を、気に入らない連中が流した噂だよ」

「なるほど。では、美綴様がお約束を守っていただけるといいう、証はございますかな？」

「証ね……」

と、視界の片隅に、一匹の猫が目に入った。
……あれだな。

「ちよつと、一緒に来て貰えるか？」

腰を上げたあたしに、周りの連中が慌てた。

「綾子。どこへ行く気？」

「街さ。爺さん達に、見せたいものがある」

「な、何を言ってるの？」

蓮華の言いたい事はわかっている。

……けど、この爺さん達の信用ですら得られなくてどうするんだ。

「すまないが、ついてきてくれ」

「はぁ……」

街に出て、子供たちが集まるといふ広場へ。

「あ！ 猫のお姉ちゃんだ！」

「あれ、怪我したの？ 大丈夫？」

「ねえねえ、また猫さん、抱かせてよ！」

見覚えのある子達に、あつという間に囲まれた。

「ちよつと待ってな」

これでいいのかはわからんけど、多分大丈夫だろう。
ピーー。

口笛を吹くと、

「ニャー♪」

「ニャー♪」

ぞろぞろと、猫が集まってきた。

「おお、街の猫が一斉に……」

「綾子……。あなた、変わった特技があるわね」

爺さんだけじゃなく、蓮華まで驚いているし。

「わーい、猫さんだ！」

「お姉ちゃん、一緒におやつ食べようよ！」

ハイテンションで騒ぐ子供達。

「待て待て。一度に話しかけられても無理だって」

子供と、猫に囲まれたあたし。

……恋と風が、いつの間にか猫とじゃれているのはもはやお約束だけどさ。

その姿を見て、爺さん達はほう、と感心しているようだ。

「随分と、子供に好かれておられますな」

「子供は正直、悪意のある者には決して懐かないというのに……」

「猫もまた然りですぞ。警戒心が強い生き物なのに、この愛らしさは一体」

そんな爺さん達に向かって、あたしは言う。

「アンタ達の言う証になるかどうかはわからん。けど、この子達がかうして笑顔でいてくれる。その為に力を尽くす、というのはどうだい？」

「……子は国の宝、ですかな？」

「そうさ。……後は、あたしの遣り様を見てくれ、としか言えない」

あたしの言葉に、頷く爺さん達。

「……そうですね。まずは、信じてみましょうかの。この子らの、笑顔を信じて」

「美綴將軍。数々のご無礼、お赦し下され」

「孫権様も、私共へのお言葉とお気遣い、痛み入ります」

「い、いや……。良いのだ、これも孫家の務めだからな」

蓮華、顔が真っ赤だぞ。

「お姉ちゃん、私にも」

「あー、ずるい。僕が先だからね！」

「わかったわかった、お前らケンカすんな」

「……どういう事だ？」

「ハッ。ですから、会稽郡太守の沙汰は、取り消し、と」
翌日。

朝廷からの使者がやって来たと思ったら、太守の任は取りやめになった。

「それで、理由は？」

「私にはわかりかねます。なお、討逆將軍の座はそのまま務めよ、と」

「どういう事かしら。一度任じたものを、急に取消しだなんて」

「確かに、不可解ですな」

蓮華とねねも、首を傾げている。

「とにかく、お伝えしましたぞ。では、これにて」

そう言い残し、使者は去っていった。

「風、どう思う？」

「何か裏はあるかとー。ただ、調べてみない事にはわかりませんね、不自然ではあるのですが」

「だな……」

まあ、太守なんてガラじゃないし、こだわっちゃいけないけど……。

「主。どうなされますかな？」

「とりあえず、寿春に戻ろう。太守でもないあたしが、ここにいても仕方ないだろう」

「そうね。交州の件は気になるけど、一度体制は立て直した方がいいわ」

あたしも、異存はない。

どちらにしても、冥琳や穩にも相談したいし。

……星達の事も、きちんと雪蓮に話しておきたいしな。

……と、恋が方天画戟を手にした。

「どうした？」

「……何か、いる」

そう言った瞬間、謁見の間に何者かが飛び込んできた。

「い、いつの間に！」

思春が驚いているところを見ると、ホントに不意打ちなのだろう。あたしも、全く気がつかなかった。

「曲者だ！ 出会え出会え！」

「何者だ！」

黒装束の集団が、あたしに向かってくる。

とっさの事で、剣を抜く間もない。

「……させない」

恋が素早く、数人を突き伏せる。

「主には指一本触れさせん！」

「蓮華様の御前で無礼な！ させるか！」

星と思春も、それぞれの得物を振りかざし、敵を防いでくれる。

「どういう事なの？ 綾子の太守の任は、解かれたというのに……」

「わからん。……こいつらの狙いは、一体なんなんだ？」

風とねねを庇いながら、あたしは賊を睨みつけた。

……上等じゃないか、あくまでもあたしを狙うのなら、徹底的に

やってやるさ。

あたしはまだ、死ねないからな。

ゝ四十一ゝ（後書き）

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

〔四十二〕（前書き）

東北関東大震災に巻き込まれていたため、更新が滞っておりました。本日より更新を再開させていただきます、引き続きよろしくお願ひ致します。

（四十二）

「おおっ！ 孫権様、美綴様をお守りしろ！」

「応っ！」

騒ぎに気づいた兵士が続々と、駆け込んできた。

「チッ。引き上げだ！」

賊が、それを見て撤退を始める。

「……逃がさない」

「待て！」

恋と星が追いかけるが、敵は素早く姿を消した。

「蓮華様、お怪我はございませんか？」

「ええ、大丈夫よ、思春。綾子、あなたは？」

「まあ、これだからな。無理してないし、守って貰えたからな」

あたしは、吊ったままの腕を見せながら、苦笑い。

「それにしても……」

蓮華は、息絶えた賊の覆面を剥ぎ取る。

勿論、見たことのない男だ。

「一体何者なのかしら」

「恐らくですけど、お姉さんを狙っている輩の手のものかとー。お姉さんが、太守の任から外れた事を知らないとか」

「それはあり得ますぞ。綾子殿ですら、先ほど知ったばかりの情報ですからな」

蓮華の疑問に、風とねねが答える。

確かに、その可能性は高いかもな。

……ただ、それで襲撃が止むんだろうか。

やっぱり、一度交州に行く必要がありそうだな。

「行ってしまわれるのですな」

「ああ。あたしは太守じゃなくなったし、どちらにしても一度戻らないといけないんでね」

翌朝。

あたしは、城門のところで、街の人々の見送りを受けていた。

「お姉ちゃん、行っちゃうの？」

「折角、お姉ちゃんや猫ちゃん達と遊べるようになったのに」
しよげ返る子供達。

あたしは、そいつらの頭を一人一人、撫でてやる。

「また来るよ。約束するさ」

「本当？」

「絶対だよ？」

「約束だ。あたしの名にかけて、な」

わしわしと撫でてやると、どうにか子供達は笑顔になってくれた。
「残念ですな。美綴様であれば、よき領主様となっていたただけなのを」

「ありがとう。そう言ってくれるだけで十分さ」

「いえいえ、伊達に年はとっておりませんぞ。今後も呉の民のため、ご健勝をお祈り致しまする」

「綾子。そろそろ」

蓮華に促され、あたしは頷く。

「じゃあ、またな」

「道中、お気をつけて」

「ばいばーい、お姉ちゃん」

人々に見送られ、城門を出た。

「すっかり、気に入られたようですな、主」

「……みんな、綾子の事、好き」

「全く。皆に好かれる奴だな、貴様も」

「あら、思春。そういうあなたもじゃないの？」

「れ、蓮華様！ わ、私はそのようなつもりは！」

蓮華がからかうように言うと、思春は妙に慌てた。

クールな思春にしては、珍しい光景だ。
巻き起こる笑い声。

……いいね、こういうのってさ。

旅の途中は、何事も起こらなかった。

流石に、大勢の軍勢に守られている以上、手出しができなかったのか。

……とにかく、いずれ決着はつけるさ。

「綾子様〜！」

「姐御〜！」

寿春城の方から、誰かが駆けてくる。

……菖蒲に、刃霧だな。

「ご無事ですか？」

「姐御、お怪我は大丈夫ですか？」

「この通りさ。心配かけて、済まなかったな」

あたしは、腕をグルグル回してみせる。

鏃も綺麗に抜けたのもあって、怪我はほとんど治っていた。

「良かった……グスッ」

「バカだな、菖蒲は。姐御がやられる訳ないだろ？」

「あら、刃霧だって大騒ぎしていたじゃないですか。シャオ様に怒られた事、言いましょうか？」

「だあああ！ よ、よせ！」

そんな様子を見て、蓮華と思春が目を丸くしている。

「綾子……。あなた、いつの間に刃霧と？」

「菖蒲とも、あれだけ陰悪な雰囲気だった筈だが……」

「……ま、戻ったら話すよ」

そうこうしているうちに、城門に到着。

「綾子お姉ちゃん！」

待ち構えていた、シャオが飛びついてきた。

「もう、心配したんだからね！」

「はは、悪い悪い。けど、ちゃんと帰ってきただろ？」

雪蓮に冥琳、穩、亞莎、霰、祭さん、明命、千花……皆出揃って迎えてくれた。

「お帰りなさい、綾子」

「……ただいま、雪蓮。みんな」

「積もる話はあるだろうけど、まずはご苦勞様。今日は、ゆっくり休んで」

「平気だよ、あたしなら」

「ダメ。と言うか、今日は綾子の無事を祝って、宴会するからね……は？」

いや、だってみんな忙しいのに集まって……って、まさかそういう理由か？

「そうじゃ。のう、冥琳？」

「ま、今日ぐらいは大目に見ましよう。だけど雪蓮、明日はきっちりと政務をして貰うわよ？ 勿論、祭殿も」

「はいはい、そういう話は後よ、後。そうそう、新しい顔が増えたみたいだけど、宴の席で自己紹介、よろしくね」

流石は雪蓮、目敏く星達に気づいていたみたいだな。

「……お腹、空いた」

「恋殿、参りましょうぞ」

うん、恋の食べる姿を見ながら、癒されますかね。

で、宴会スタート。

……は、いいんだけどさ。

「……なんで、あたしが雪蓮の隣なんだ？」

「そりゃそうでしょ。今回は、あなたが主役なのよ？」
そう言いながら、いいペースで杯を干していく雪蓮。

「しかし、無事で本当に良かったの。儂も気が気ではなかったぞ？」

「確かに我が主は、いつも無茶をなさいますからな。ですがこの趙子龍、主は守り抜くと決めました故」

「おうおう、頼もしい事よ。趙雲よ、儂の事は祭で良いぞ！」

「では、私も星とお呼び下され」

もう打ち解けてるな、この二人。

酒好き、という点で話題が共通してるしなあ。

で、反対側には恋と当然の如くねね、それに霰がいる。

「貴殿ほどの武人と共に戦えるとはな。よろしく頼む」

「……モグモグ。ん、恋でいい……」

「……う、そ、そうか……。では私は、霰で……」

あら、恋の食べる姿は、霰まで見とれてるわ。

「音々音の事は、ねねでよいですぞ！ ささ、恋殿、こちらも召し上げ」

「……ん。モグモグ……」

「……な、何だ……これがあの、飛將軍呂布なのか……。い、いかん……鼻血が」

……癒されすぎだろ、霰。

その向こうは……軍師組か。

「天下に名高い美周嬢とご一緒出来るとは、風も光栄なのですよー」

「ふふ、そういうお前も、なかなかの智謀の持ち主だそうじゃないか。なあ、穩？ 亞莎」

「ですねー♪ いろいろとよろしくお願いしますね、程立さん」

「あ、あの、よろしく願います！」

「おう、よろしくな姉ちゃん達」

「は、はひっ？ な、何ですか今のは」

だから宝慧にしゃべらすな、風。

「腹話術ですねー。こんなものを使えるとは、やりますね程立さん」

動じないな、流石は千花。

「風でいいですよー」

「そうですね、じゃあ私も、千花でいいですよー」

「ふっ、気が合うようだな二人は。私も、冥琳で構わんぞ」

「私も、穏でいいですよー」

「で、では私は、亞莎と言います」

「……なんか、簡単に真名交換しているけど……いいのか、おい？」

「さ、綾子様。どうぞ」

「菖蒲、シャオが先だよ！ 綾子お姉ちゃん、これ食べて♪」

「お二人とも、食べ物ばかりではありませんか。それより綾子お姉さま、杯を」

「明命！ 酌なら俺が先だ！」

「……とりあえず、あたしの周りは何でこんなにカオスなんだ？」

「というか、どんな修羅場だよこれ。」

「四人にくつつかれて、身動きも取れないんですが？」

「綾子様？ どれだけ私が心配した事か……ぐすっ」

「だから泣くなよ、菖蒲。な？」

「いいえ、綾子様はわかっておられません！ もう、お側を離れませんからね！」

「……お前、飲んでるだろ？」

「にやにを言うんでしゅか？ 綾子お姉しゃまには、わたひがいるのです！」

「おい、いつの間にへべれけになった、明命？」

「つか、そのまま背後から寄りかかるな！」

「こらー！ 綾子お姉ちゃんを独り占めしちゃダメ！」

「そう言いながら膝に乗るな、シャオ。」

「そ、そうですね。シャオ様がそう仰せなんですからね……姐御」

「……ハア、頭痛くなってきた。」

「ほお。主はだいぶ、もてるようすな」

「……ニヤニヤしながら言うな、星。あたしだって参ってるんだ」
「良いではないですか。それだけ、主の人徳というものでしょうからな、孫策殿？」

「綾子の場合はちょーっと違う気がするけどね。あ、趙雲は私に仕える事にもなるんだから、雪蓮でいいわよ？」

「では、私も星、とお呼び下され。時に雪蓮殿、このメンマは如何ですか？」

「うん、美味しいわね♪ 酒が進むわ」

雪蓮の場合は、酒があれば何でもいい気がするんだが。

「どうした、綾子。もっと飲まんか？」

「祭さん。この状況で、どうしろと？」

「だらしがないのお。振り解けば良いではないか」

「……出来ればやってますよ、そんな事」

眼をウルウルさせている菖蒲に、満面笑顔のシャオ、もじもじしながらそばにいる刃霧、酔っぱらいながら甘えてくる明命。

……これをどうやって払い除けろ、と？

無理です、ええ。

「やはり、お姉さんは小さい子好きという事でー」

風……否定は出来ないけど、そうあからさまに言うな。

「でも、あなたの人望は大したものよ。結果として会稽の人々の心も掴んだしね」

「全くね。朝廷の気まぐれにも困ったものだけど、おかげで蓮華の言う通り、あの地方の混乱は収まったみたいだからね」

「それに、孫呉の地に、綾子の武勇が広まったのも事実です。飛將軍呂布の加入と共に、これは大きいかと」

「……星や恋が戦い、風とねねが知恵を絞って。それに、蓮華と思春が来てくれたおかげさ。あたしは、ホント危なかったんだから」

「そういうところがいいのよね、綾子って。さ、飲んで飲んで！」

だから、どうしてそういう結論になるんだ、雪蓮？

「おひゃくなら、わたしがしまふ……ひっく」

「姐御！ そんな酔っ払いほっといて、俺の酒をどうぞ！」

「刃霧！ シャオを差し置いて何て許さないよ？」

「もう、綾子様が困ってますっ！ 私がまとめて差し上げますから！」

……もう、どうにでもしてくれ。

カオスなまま、酒宴は盛り上がりまくる。

「もうヤケだ、飲みまくるぞ！」

「そうこなくっちゃ。はい、かんぱーい」

「……うう、いてて……」

ズキズキする頭を振りながら、あたしは起き上がる。

気が付くと、自分のベッドに寝かされていた。

明命、菖蒲、シャオに刃霧が、周りで転がっていたり、あたしの隣にいたり。

少し、外が明るくなっているな。

とりあえず、水でも飲んでくるか。

みんなを起こさないように、そっとベッドを出る。

台所に行こうかと思ったけど、少し、外の空気に当たりたい気分だ。

確か、井戸があったな。

ちよつとふらつきながら、廊下に出た。

しかし、途中から記憶がないんだが……結構、飲んだんだろうなあ、これ。

こういう時、キャベ○ンとかパンシ○ンとかがあると……って、あたしはオヤジか。

ゴクッ、ゴクッ。

ふう。

冷たい井戸水を汲み上げ、茶碗に移して一気飲み。

ついでに、顔も洗うと、だいぶスッキリした。

もう少して、夜が明けそうだ。

あたしは、城壁に登ってみた。

一面の星空が、だんだんと白んでいく。

吹き抜ける風が、火照った身体に心地よい。

……そういや、家族はどうしてるかなあ。

実典は、相変わらず桜に片想いのままなんだろうな。

衛宮はやっぱり朴念仁で。

遠坂は、猫被りなんだろうし。

氷室や蒔寺、三枝のトリオも、元気にしているんだろうか。

慎二は……やっぱり、いい加減な日々を過ごしているだろうけど。

弓道部の連中は、ちゃんと部活に出てきてるんだろうか。

……いつの間にか、遠い昔の事みたいに見えるな。

あの、キモイ貂蟬に連れて来られてから、もう何年もここにいるような気がする。

……あたしに何をさせたいのか、それもまだ聞いちゃいないし。

「何をしている」

振り向くと、思春が、いた。

「そういう思春こそ、こんな時間にどうした？」

「明命がああ調子だからな。私まで気を抜く訳にもいくまい？」
なるほど、用心のため見回り中って訳ね。

「そう言っただけでやるな。明命だって、たまには息抜きしないと、な。
もちろん思春もだぞ？」

「必要ない。私は、蓮華様をお守りするという責務があるからな」
「ま、あたしが気にする事じゃないけどな。ご苦労さん」

「労われる謂われはないが、拒む理由もないな。受けておこう」
そう言っただけで、思春はかすかに笑った。

お、クールな思春にしては珍しいかも。

「私が笑っては、おかしいか？」

「あ、いや。そうじゃないさ、ただ、珍しいと思ってさ」

「そうか……。蓮華様に言われたのだ、少しは貴様を見習え、とな」
「……あたしを？」

なんでまた。

思春は、あたしなんか及びもつかない、一流の武官だぞ？

「飄々としていて、物事を柔軟に受け入れていく。それが、美綴綾子という人物の本当の強さだとな」

あらま、随分とんでもない評価をされてるんだねえ、あたしって。

「覚えているか？ 最初、貴様とやった仕合の事を」

「勿論さ。あの俊敏さには驚いた……。流石は甘興覇、ってな」

「フッ。だが、私は貴様の敵ではなかった。いずれは勝つ……。そう思っていた。つい最近まではな」

「じゃあ、今は？」

「勝ち負けの問題ではない。今の綾子は、孫呉には欠かせない存在。それは、私も否定はせん」

水平線から顔を出した太陽が、思春の顔をはっきりと映し出していく。

「私は私、貴様は貴様だ。ならば、蓮華様の仰せの通り、見習うべきは見習う、それも良いと思ってな。もっとも、私は貴様のようにはなれんがな」

「いいんじゃないかな、それで。思春は、そのクールなところがいいんだから」

「くーる、とは何だ？」

「冷静沈着、って事さ」

「なるほど。褒められた、と受け取っていいのだな？」

「生憎と、面と向かって悪口言う性分じゃないんでね。それでいいよ」

「……やはり、貴様には敵わんな。では、見回りに戻る」

そう言い残して、思春は姿を消す。

……元の世界の連中も気になるけど、ここの仲間も、大事だよな……やっぱ。

思春が去り際に見せた、笑顔を思い浮かべながら、あたしはそう思い直していた。

……これで、酔っぱらってなけりゃ、もつとサマになるんだけどな……ははは。

（四十二）（後書き）

サブキャラの挿話を何話か書こうかと考えております。

このキャラの話が読みたい、というリクエストがありましたら、コメントかメッセージをいただけると幸いです。

特になければ、こちらで本編と並行して話を考えてみます。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

〔四十三〕（前書き）

更新が不定期になっておりますが、震災の影響が公私に出ています……。

進みは遅くなりますが、何とか続けたいと思います。

今回から新しい章になります。

（四十三）

「さて、では始めましょうか。冥琳、よろしく」

「わかった」

寿春城の、謁見の間。

孫呉の将が、一堂に会している。

現在の情勢分析と、今後の方針を決めるための、軍議が開かれる事になったからだ。

……あたしは別に、将というつもりは未だにないんだけど、もうそう言える立場でもなくなっているからな。

「まず、諸侯の動勢を整理しておこう。月、詠、資料を配ってくれ」

「はい、わかりました」

「全く、何でボクがこんな事を……」

「詠ちゃん。ダメだよ、私達の立場を忘れちゃ」

「わ、わかってるって、月」

二人とも、姿を見ないと思っていたら、侍女としての修練を受けていたって聞いた。

冥琳は文官として働いて貰う、って言っていたけど、露骨に官吏の格好をして見つかるはずなので、って事らしい。

月は様になっているけど、詠は……まだ、どこか馴染んでないしな。

……ただ、何であの二人、メイド服なんだろう？

そんな事を思いながら、あたしは手元の資料に眼を落とす。

勿論、パワー○イントで作られたものとかじゃなく、手書きの竹簡だけだな。

「最大の勢力は、やはり河北の袁紹だ。公孫賛を打ち破り、北方の憂いを断っている。兵数の点では、大陸随一であろう」

冥琳がまず、口火を切った。

「では、穏、亞莎、風、続けてくれ」

お、役割分担か。

「はいはい♪ 次は曹操さんですね。曹操さんは、陳留を拠点に、黄巾党の残存勢力を吸収して、エン州だけじゃなく、青州も抑えているようですね。袁紹さんと違い、人材も揃っていますし、間違いない強敵になる存在でしょう。じゃ、次は亞莎ちゃんね♪」

「は、はい！ 平原の相から、陶謙の後任として徐州牧に任じられた劉備ですが、まだ兵数から行けばさほどではありません。ただ、関羽、張飛を初めとして、将は揃っています。いずれ、勢力を伸ばしてくるか。では風さん、お願いします」

「了解です。その他としては、西涼に拠を構える馬騰ですが、どうやら病気がちらしく、ほとんど勢力は広がっていませんね。益州の劉璋は暗愚みたいなので、外に出るところか州自体がまとまっていないですよ。後は荊州ですが、劉表は特に何もしていないように、襄陽近辺から動きませんね。他にも漢中の張魯とか、荊州南部の太守もいますけど、諸侯とは呼べませんので」

完全に溶け込んでいるなあ、風。

まあ、本人はあたし以外に仕える気はないって言うんだけど……どっちでもいいよ、あたしや。

「袁紹さんと、曹操さんがぶつかるのは必至でしょうね。ですよ、ね、冥琳さん？」

千花の問いかけに、冥琳は頷く。

「もともと、あの二人は因縁があるようだしな。それに、双方が勢力を広げようとするれば、ぶつかるのは必然だ」

「そうになると、すぐに曹操との衝突はない……。姉様、徐州の劉備はどうでしょうか？」

蓮華の問いかけに、雪蓮は手を振る。

「あゝ、あの娘？ 確かに将は揃ってるけど、何でも綺麗事で済ませようとするからね。とりあえず、こっちらから手を出さなければ大丈夫かな、っとは思っただけ……」

劉備の義理堅さから行けば、確かにそうかも知れない。

歴史上だと、この時期は軍師らしい軍師はいなかった事もあった、実際に徐州からは外に出なかった……って、蒯寺が言っていたな。

……ただ、この世界ではもう、諸葛亮に鳳統がいるんだよね。

あの二人なら、近い将来の予測は立つだろうから、その前に何とかしようとする筈。

天下三分の計を思いついて、益州を取ろうとするか。

……それだと、華琳か雪蓮の領地を通るしかない。

華琳がそんなのを認めるとは思えないし、雪蓮だってそうだろう。だとすると、華琳か雪蓮の隙を突いて攻めてくる事も、ないとは言えない。

諸葛亮と鳳統……油断大敵だよな、ホント。

「只今戻りました」

と、誰かが入ってきた。

「お帰りなさい、ご苦労様」

あれ、紅蓮だ。

いないと思ったら、任務で出ていたのか。

「ご苦労だったな、紅蓮。早速、報告を頼む」

「わかりました、冥琳様。徐州の様子を探ってきたので、この場で報告します」

と、一同を見渡す紅蓮。

あたしと眼が合った時は、かすかに頷いた。

ま、後で話は出来るしな。

「徐州ですが、牧の交代に伴い、若干の動揺と混乱が見られます。

ただ、それも僅かなものでして、劉備は着々と支配を固めています」

「先の牧、陶謙も治世に関してはそこそこ業績を上げておったと聞いておる。その辺りはどうなんじゃ？」

「はい、祭様。確かに陶謙の治世は、民からは大きな不満は上がっていません。ただ、陶謙配下には武官が少なく、治安の安定という面では今ひとつだったとか」

「なるほどの。それで、劉備達に支援を求めた……その縁で、今に至っているという訳じゃな？」

「そうです。劉備配下には関羽と張飛がいますからね」

ホントなら、そこに星もいたんだよなあ。

……どこをどう間違えたか、あたしんトコっつか、呉にいるけどな。

「おや、主。如何なされた？」

「え？ あ、何でもない」

「左様ですか。私の顔をジッと見ておられたようですからな」
星はそう言って、首を傾げている。

ま、この世界じゃ、趙子龍は劉備とは無縁……それでいいさ、うん。

「それで、どうなの？ 領内をまとめるのは時間の問題として、その後は？」

「当面は、体制の建て直しと兵の増強に専念するようです。どちらに向かうにせよ、現在の兵力では不足していますから」

「そうかしら？ 確かに今すぐって事はないとは思うけど……わたしの勘だと、それでも何か、狙っている気がするのよね」

雪蓮はそう言って腕組みをする。

「雪蓮の勘、となると……無視する訳にもいかな。霰、亞莎。一軍を率いて、建業に向かって貰えるか？」

「うむ、承った。して、出立は？」

「早いほどいいだろう。準備が出来次第で頼む、霰」

「では、それで参ろう。亞莎殿、頼むぞ」

「は、はひっ！」

二人が慌ただしく、出て行く。

「では、続けるとしよう。曹操への監視は怠りのないよう……明命、いいな？」

「はいっ！」

「荊州南部も気になるが、小勢力だから後回しとして、だ」

「劉表ね……。厄介よね、やっぱり」

孫呉にとっては、因縁の相手。

華琳や雪蓮に比べれば劣る、と言われているが、それでも将はそこそこ揃っているらしいし。

特に、水軍の強さは、孫呉に引けを取らないらしい。

「思春。劉表と戦うとなれば、どう攻めるのが一番望ましいと思う？」

「は……」

あれ、普段ハキハキしている思春が、珍しく言い淀んでいる。

あたしが首を傾げていると、隣の蓮華がそっと、耳打ち。

「思春はね、昔劉表に仕えていた事があるのよ。もっとも、劉表に直接じゃなく、黄祖って将にだけどね」

それで、遠慮してるのか？

……雪蓮の性格からして、それを気にするとは思えないけどな。

「思春。私は誰より、お前を頼りにしているぞ。思うところを、答えればいい」

「蓮華様……」

「あらら、わたしが何か言う前に済んじやった？ ま、あなたを信じてる、ってのは蓮華と一緒にだけどね」

「……はっ。では、申し上げます」

思春、嬉しそうだな。

「劉表軍は我が軍と似ており、水軍が主力です。陸軍についても、弓と歩兵が主体で、騎馬はほとんどないかと」

「つまりは、どこまでも我が軍と共通点が多い、と？」

「はい、冥琳様。ただし、兵の錬度は、ほとんど戦を経験していないため、高いとは言えません。それに、率いる将も、めばしい者は数名でしょう」

「ふむ。明命、その顔触れはわかるか？」

細作を仕切るのは明命、最新情報はやっぱり彼女に聞くのが一番

って事か。

「はい。恐らく、思春さまがご存知の面々のままでしょう。武官として蔡瑁、文聘、張允、黄祖など。文官はカイ越、カイ良、韓スウが主なところですよ」

明命の報告に頷きながら、雪蓮は思春を見る。

「どう？ あなたが知る顔触れとの違いは？」

「変わりはありません。今の我が軍であれば、負ける相手ではありません」

「そ。母様の無念、何としても晴らさないかね……」

「だが、雪蓮。今はまだその時期ではないぞ？」

「冥琳、わかってるわ。でも、時が来れば必ず」

「ああ。文台様の無念は、私とて変わらないからな」
冥琳の言葉に、雪蓮は大きく頷いて、席を立った。

「皆の者！ まずは揚州の安定に務める。その後、荊州制圧に向かう。頼むわよ！」

「御意！」

そう、いくら揚州をまとめたとは言え、孫呉には立て続けに外征する程の余力はない。

単純な兵力で行けば、被害があまりなかった上に新兵を集めているから、以前よりもずっと増強されてはいる。

が、兵は訓練しなければ強くはならないし、兵を動かすとなればそれだけの糧秣が必要となる。

……そうなると、そのための準備期間が必要となる、って訳だ。

あたしも、この程度の事はいやでも思い知らされるようになった。

「ああ、今度から綾子にも一軍の指揮を任せるわ。副長は菖蒲。星と風、紅蓮は綾子の下につけるから」

「……わかった」

行動には責任を伴う。

あたしの本意ばかりじゃないけど……逃げるつもりはない。

「皆、よろしくな」

「はいっ！」

「はっ！」

「了解ですー」

「うん、任せて」

頼れる仲間がこんなにいるんだ、やってやるさ……全力で。

「ところで、預ける兵なんだが。これからは騎兵を増やしたいと思う。恋のような将も加わった事だ、綾子達で集めてみるといい」

と、冥琳。

「けど、ノウハウがないだろ……呉軍には」

「のうはう？」

「あ、知識って言うか……。それに、馬がそんなに揃わないんじゃないか？」

馬はこの時代、かなり高価だって聞いているし。

騎馬隊を作るなら、それなりの数もいるだろう。

「実はですね。策はありまして、それをお伝えしようかと」

穩が、ニコニコしながら言う。

「策？」

「そうです。馬は確かに高価ですし、それに、乗りこなすには訓練も要りますよね？」

だろうな。

鞍とか鎧がなくて、裸馬を操るだけでも大変なのに、それに乗ったまま戦うのが、どんだけ大変な事か。

……実際、あたしには無理だし。

「そこです。馬の扱いに長けた方々に、ご協力いただくかどうか。具体的には、西涼の馬騰さんと、手を組もう、って事です。」

「あれ？ でも馬騰って、確か病氣じゃ？」

「です。でも、今は娘の馬超さんが、馬騰さんに代わって指揮を取っているそうですよ。」

「どちらにせよ、接触は必要、って事か」

「はい」

穂の案、いいんじゃないか。

「あー、ちょっと、いいでしょうか？」

風が、手を挙げる。

「はい、何でしょうか？」

「馬超さんと交渉するのはわかりましたが、向こうもただ話を持っていくだけでは、上手く行かないと思うのですよ。穂ちゃんは、どんな条件を提示するつもりなんでしょう？」

「さっすが風ちゃんですねえ、いいところに気づきましたね？」

穂の後ろから、二人が進み出た。

月と、詠か。

「そこで、私の出番です。翠ちゃんとは、家族みたいなものですか」

「月が行くなら、ボクも一緒に行く」

「と言う訳なんですネ。ただ、涼州まではちょっと遠いのが問題でして。あまり目立って、曹操さんの細作に見つかるとう面倒です。だから、警護は少人数にしたいんです」

そう言いながら、穂はあかしを見る。

「……で、あたしに警護をしろ、と？」

「正解です♪」

いいけどさ、別に。

「で、あたしだけか？」

「いえいえ、紅蓮ちゃんも一緒に、って事でどうでしょう？」

「いいぜ」

「ではでは、それをお願いしますネ。冥琳さま、如何でしょう？」

「ふむ、いいだろう。星と恋は、今いる騎兵を集めて、練兵に当たって欲しい。待っている間が惜しいのでな」

「承った」

「……わかった。やる」

二人はあたしについていく……とは言わないな、流石に。

「風は、外交で意見を聞きたい。暫く、私と共にいてくれ」

「了解ですよー」

「菖蒲、お前は隊を率いるに必要な知識と実地訓練だ。祭殿、お願いします」

「は、はい！」

「応、任されよう。儂が鍛えてやる故に、覚悟せい」
みんな、それぞれに役割を与えられた。

「月、詠、宜しくな」

「いえ、私の方はご迷惑にならないようにしますね」

「頼むわよ。アンタが頼りなんだからね」

「ああ。紅蓮もな？」

「うん、ボクも頑張るよ」

……と、何故か不機嫌そうな詠。

「どうかしたか？」

「……別に。ただ、なんか被るな、って思っただけよ」
なるほどね。

確かにボクっ子とボクっ娘……微妙に被るかもね、キャラが。

「月様。出発はいつ頃ですか？」

「あ、私の事は月、で構いませんよ？ 紅蓮さん」

「え？……ですけど」

月は、優しく微笑んで、

「構いませんよ。今の私は、ただの月、ですから」

「……じゃあ、月さん、って呼ぶから。それでいい？」

「はい」

「……ボクも詠でいいわよ、月だけそれじゃ、格好つかないもの」
「うん。改めてよろしくね、月さん、詠さん」

そう言って、紅蓮はあたしを見た。

「綾子様、出発は月さんと相談、という事でいい？」

「そうするさ。今回は、あたしはただの護衛だ。な、月？」
何となく、月の頭を撫でてやる。

「へう〜……」

……な、なんかものすごく可愛らしい生き物に変貌しましたよ、この娘？

「ちょ、ちょっと！ 月に何すんのよ！」

「いや、何って。あ、詠もやって欲しいんだな、わかったわかった」
「違うって！」

……まあ、今回も静かに任務完了、って訳にはいかなさそうだな
……どうも。

一日の仕事を終え、部屋に戻る。

……ホント、将ってのも楽じゃない。

これを当たり前のようにこなすみんなは、マジで凄いと思う。

……しかし、疲れた。

シャワーなんてある訳もないし、風呂という文化もないみたいで、
せいぜいが水浴び。

……あゝ、風呂入りたい。

なんで、香なんてものが流行ったのか、この時代に来てやっとわ
かったぐらいだし。

……ん？

そう言えば、温泉ならこの時代でもあるんじゃないか？

もちろん、ボーリングは無理でも、自然に湧き出ている奴ぐらい
なら、探せばありそうだな。

……そうだな、星や風なら何か知ってるかも。

明日にでも、聞いてみるとしよう。

石鹸はないけど、米糠なら用意できそうだ。

シャンプーも、灰汁とか米のとき汁でもいい、って何かで読んだ
し。

……そう考えると、急に自分の臭いが、気になりだした。

……とりあえず、水でも被ってこようっと。

〔四十三〕（後書き）

挿話については特にご意見もないようですので、こちらで頃合いを見て何話か公開する事にします。

なお、新規作品について、ご意見を募りたいと思います。

活動報告の方に載せておきますので、ご覧の上是非ご意見をお願い致します。

〔四十四〕（前書き）

ちよつとだけ、お色気展開です。

やり過ぎるとR15じゃなくてR18になってしまうので、過大な期待はしないで下さいね。

（四十四）

「ふむ。温泉ですか」

「確かに、大陸ではそのような場所をいくつか見かけましたねー」
翌朝、朝食の場で聞いてみると、二人からは案の状の答えが。

「河南に温泉というところがありましたな。県内に温泉があるので
そう命ぜられたとか」

河南って……洛陽のあたりじゃんか。

「後は、巴蜀の山中にそういう場所があるって言ってましたねー」
そりゃ遠すぎだ。

「風、江南ではたくさんあると聞いた気がするが」

「そうですねー。それ以外だと青州にもありましたねー」
なんだ、結構あちこちにあるのか。

……つーか、この辺にないだけじゃね、もしかして？

なら、今度の道すがらでもありそうだな。

「しかし、主もなかなか風流を解するお心をお持ちのようで
何故か嬉しそうな星。」

「は？　なんで？」

「決まっております。露天風呂に酒、これこそ至高の時ではあ
りませぬか」

あゝ、そういう意味ね。

確かに、お盆に銚子載せて、ってのはあるらしいけどさ……。

「おやおやー。風はてつきり、別の楽しみを求めているのかと思
いまして」

こっちはニヤニヤ。

「楽しみ？　温泉に入るのはそりゃ楽しみだぞ？　つーか、他に何
がある？」

「いえいえー。曹操さんのように、温泉で閨、という趣向もありま
すからねー」

ブッ！

な、なんて事言うんですかこの娘は！

「ほう。主にはそのような嗜みがござったか」

「ないない！ てか星、絶対わざと言ってるだろ！」

「はて、一向に何の事か。なあ、風」

「風は、お姉さんの性癖にまで口出しはしませんから、ご安心下さいねー」

……こいつらがこのモード入ったら、もうスルーに限るね。

「おやおや、早速閨作戦開始ですかー？ 相手は菖蒲ちゃんか、明命ちゃんあたりと思うのですが」

「いやいや、紅蓮や月という可能性もあるぞ。皆、主を慕っておりますしなあ」

……言ってる、もう！

……けど、噂話というのは、不必要に広まるものらしい。

「……言っておくけど、月に手を出したら承知しないからね！」

「詠ちゃん……もう。あ、あの、綾子さん……私、気にしてませんかからね？」

「綾子様……。綾子様がもし望むなら、ボクは別に……」

「だあああ！ お前らも真に受けてるんじゃないやねえ！」

おかげで、出立前に妙に消耗したあたしだった……ハア。

「では、この書状を馬騰に渡してくれ。頼んだぞ、月」

「はい、お任せ下さい」

夜中、こっそりと出立する事になったあたし達。

見送るのは、冥琳のみ。

月と詠は、今はただの侍女。

それが、馬に乗って出かける時点で、十分過ぎる程怪しい。

一応、曹操の細作は明命と思春が虱潰しに始末したらしいけど、

用心に越したことはない。

……それに。

「良くも悪くも、綾子が目立ちすぎるからね」
と、雪蓮の意見も。

……好きこのんで目立っている訳じゃないんだが、今更どうにもならない。

「じゃ、行ってくるわ」

「頼んだぞ、綾子、紅蓮」

「おうさ」

「はい！」

ギギギギギ。

背後で閉じられる門。

静まりかえった夜の荒野には、えらく響く気がする。

さて、行きますか。

歩み始めてすぐに、紅蓮が話しかけてきた。

「帰る頃には、本拠地が変わってるんだね」

「ああ。もつとも、完全に移転が終わるのは相当先だろうけどな」

出立前に、雪蓮達から聞かされた。

ここ、寿春ではなく、建業へと本拠地を移す事を。

理由はいくつかあるけど、最大の理由は、来る曹操との決戦に備えて。

寿春は、中央に近いというメリットがあるが、それは同時にデメリットでもある。

周囲は遮るもののない平野のため、より大軍を率いている方が絶対的に有利。

袁紹との決戦は残す曹操だが、孫呉の軍師達は、一致して曹操の勝利という結論に至っている。

北方をまとめ、兵力を立て直してやって来れば、揚州を抑えた程度の孫呉に、勝ち目はない。

……ただ、地勢を利用しての戦いであれば、話は別らしい。

呉軍は、陸戦よりも水戦で本領を発揮する。

建業は長江流域で、水運の利便性が高い。

更に言えば、長江を利用しての戦にも適している。

実は、あたしが会稽に出向いている間にも、既に建業移転の準備は進んでいたらしい。

「そんな中、あたしのために集まって貰ったのか……。みんな、忙しいのに」

あたしの呟きに、紅蓮が応える。

「皆、綾子様の事をそれだけ大切に思ってるって事だよ」

「そうですよ。私達だけじゃなく、綾子さんのおかげで、どれだけの人が救われ、助かっているか」

と、月。

「……ま、それに関してはボクも否定はしないわ。一軍の将としての働きはともかく、個人としての貢献は割と多いんじゃない？」

「ふふっ、詠ちゃん素直じゃないね。綾子さんの事、詠ちゃんも好きなんでしょ？」

「な、そ、そんな訳ないじゃない！　ボクには月だけいればいいのっ！」

ツンデレだねえ、相変わらず。

とにかく、ありがたい事さ、全く。

あたしみたいな、得体の知れない奴をこうして、仲間として認めて貰えてるんだから。

「ところで月さん。馬超ってどんな人なんだい？」

「世間一般では、『錦馬超』なんて呼ばれているんですよ。その武勇を称えて」

「それに騎兵を率いての戦闘なら、たぶん霞とか、公孫賛ぐらいじゃないだと思っ、アイツに匹敵するのは」

「なるほど。五虎将、つてのは伊達じゃないって事だな」

「五虎将？　綾子、何の話よ？」

あ、やべ。

三人が、怪訝な顔であたしを見ている。

「いや、馬超って、あたしの国でも有名だからさ」

「そうなんですか？ 翠ちゃん、流石なんですね」

翠ちゃん？

ああ、真名か。

「もつとも、合ってるのかどうかはわからないけどな。あたしのも、伝聞だし」

「ちなみに、どんな風に聞いたんだい、綾子様は？」

内心、冷や汗をかきながら、当たり障りのないように。

……あたしも、ゲームでの能力値とかエピソードぐらいしか、知らないんだけどね。

「個人の武勇なら、関羽や張飛に匹敵するぐらい。あと、義に厚い。……ぐらいかな」

月と詠の様子を見る限り、どうやら間違っではないみたいだ。

「結構、正確に伝わってると思うけど……月はどう思う？」

「そうね、詠ちゃん。翠ちゃんの一面としては、その通りだね」

「ちなみに、一応聞くけど。……馬超も、女性？」

「そうよ。綾子と同じぐらいじゃないかな？」

あゝ、良かった。

てつきりむさ苦しい男だったらどうしようかと。

……ただ、どんな女性なんだろう？

和田○キ子みたいな、豪傑だったりして……。

まあ、張飛とか許チヨとかもあんな感じだし、たぶんその心配はないと思うけどさ。

「そっかあ。綾子様と、どっちが強いかな？」

「……紅蓮。あのな、なんでそこであたしが出てくる？」

「え？ だって、あの関羽や張飛と同じぐらい強いんでしょ？ そりゃ、恋さんと互角に遣り合った綾子様だもの、興味ない方がおかしいよ」

「そりゃまあ、あたしもどのぐらい強いかは、興味はあるけどさ」

「ならいいじゃない。月さんだって、興味あるでしょ？」

「え？ 私はその……。あまり、無茶するのはどうかと思いますし」

「そう？ でも、楽しみだね、綾子様」

久々に一緒にいるせいなのかも知れないけど、紅蓮は妙にはしゃいでいる。

普段は結構冷静な奴だけど、感情は案外豊かだからな。

あたし達は荊州を通り、西へ。

ホントは司隷を通るのが一番の近道だけど、あそこは華琳の勢力圏内。

油断も隙もない奴だから、見つからないようにしないとな。

……あたしだけならともかく、月や詠は、絶対に巻き込めない。ただ、野宿の連続、って訳にはいかない。

パカラッ、パカラッ。

一頭の馬が、こちらに駆けてきた。

「綾子様。この先の邑は、大丈夫そう」

「わかった」

こういう時の紅蓮は、マジで頼りになる。

身軽な上、状況分析がとてもの確。

「ありがとうございます、紅蓮さん」

「ううん、気にしないで。それより、日が暮れる前に急ごう」

勿論、全員異存はない。

馬を駆けさせると、ほどなく邑が見えてきた。

あまり大きくはないが、泊まるだけなので場所は気にならない。

「旅の者か？」

「ああ」

「すぐに門を閉める時刻だ。早く中に入れ」

「わかった、ありがとう」

門番に声をかけ、邑の中へ。

……あれ、奥から煙が……でも、火事って雰囲気じゃないな。

あたしの様子に気付いたのか、門番が教えてくれた。

「ああ、あれか。この邑は、温泉が引かれているんだ」

「え？ 温泉？ それって、あたし達でも？」

「入れるさ。勿論、ただではないけどな」

「やったぜ！」

「嬉しそうですね、綾子さん」

「まあね。長いこと、風呂に入れてないしな」

「とりあえず、宿を探そう。どうせなら、温泉の近くだといいいけどね」

あまり大きくない邑なので、宿の数も限られている。

しかも、全部が源泉の近くにあった。

……まあ、当たり前っちゃそうかもな。

「綾子様、どこにする？」

「うーん、あまり大きいところはな……。向こうの、こぢんまりしたところは？」

「じゃ、聞いてみようか」

目指す建物に入ると、女将らしき人が出てきた。

「いらっしやいませ」

「四人だけど、部屋は空いてる？」

「ええ。どう……」

女将が、あたし達の顔を見て、固まった。

……何だ、一体？

「ええと、何かあった？」

「……あ、いえ。これは大変失礼を……さ、どうぞどうぞ」

その間が気になるんだけど……何だ、一体？

通された部屋で旅装を解くと、あたしはいそいそと湯へ。

「あれ？ もう行くの？」

「ああ。楽しみにしていたからな」

「じゃあ、交代がいいかな。綾子様と月さん、行っておいでよ。詠

さんは、後でボクと」

あれ、いいのかその組み合わせで？

「何も起きないとは思うけど、一応身は守らないとね。さっき、詠さんと相談しておいたんだ」

「……いいよ、ボクは。確かに、月とボクじゃ、何かあったらどうしようもないしね」

いつも月と一緒にいたがる詠も、流石に用心するしかないって訳か。

「綾子さん、よろしくお願いします」

「あ、月。もし、綾子に変な事されたら、大声で叫んでよ」

「だからしないってーの！」

「くすくす。では綾子さん、参りましょうか」

「……だな」

浴衣……なんてものはないから、軽装になって行く事にした。

小銭と、念のため短剣を懐に入れておく。

流石に、青？の剣や倚天の剣は持って行けない、ありゃ目立ちすぎだな。

ザバー。

露天風呂は、少し広めだったけど、誰も入っていないくて貸し切り状態。

「ふう……」

「いいお湯ですね」

「ああ……」

バシャバシャ。

湯で顔を流しながら、堪能するあたし。

……ホント、いつ以来だろう？

やや青みがかかった、少し温めの湯。

循環式、なんてものがある訳がないから、完全掛け流しなんだろう。

「……でもまさか、こんな風に綾子さんと温泉で一緒にできるなんて、思いませんでした」

「あたしも、かな」

だって、目の前にいるのは、あの董卓なんだぞ？

……あまりにも可憐すぎて、たまーにそれを忘れてしまうけどな。

……と、月がチラチラとあたしを見ているのに気付いた。

「どうした？」

「……いえ。ちょっと、羨ましいなあ、って」

「羨ましい？ あたしが？」

「はい。……身体つきも立派ですし、とっても女性らしいな、って」

そう言っ、月は恥ずかしそうに自分の身体を隠す。

「そうかねえ。なんか、ナイスバディ……身体つきの立派すぎる奴が多すぎて、そうは思えないけど」

雪蓮とか、冥琳とか、穂とか、蓮華とか。

劉備も関羽もそうだったし、袁紹も霞も恋も……。

……そりゃ、あたしもプロポーションにはそこそこ自信はあったけど、こうも人外ばかりだとへこむよなあ。

「いや、月は月で自信持っていって」

「そうでしょうか……。でも、女性は胸が大きい方が」

「……でもないと思うけど。確かに、そういうのを好む男もいるけどさ」

「やっぱり、そうですよね……」

「でも、月はそれでいいじゃんか。あたしが男なら、そのまんまの月が好きになると思うけど」

「へうへ。へ、変な事言わないで下さい」

真っ赤になる月。

……女のあたしから見ても可愛すぎる。

「さ、身体洗おうぜ。これを使ってな」

と、準備して来たものを、手に取った。

「何でしょう？」

「米糠を袋に入れたものさ。ちよっと上がって、使ってみればわかるさ」

「は、はい」

湯から出て、早速実演。

「ちよっとだけ湯に浸して。で、こうやって擦るんだ」
ゴシゴシ。

実際に、あたしの腕でやって見せた。

米糠の香りと共に、腕からボロボロと垢が落ちる。
うへへ、こりゃ凄いわ。

「さ、やってみな」

「はい。……えっと、こうですか？」
怖々と米糠袋を動かす月。

「もうちよっと強くても平気」

「……あ、これ……いいですね」

月の真っ白な肌からも、垢が落ち始めた。

「じゃ、今度は背中だ。まずは、月から」

「え？ そんな、悪いです」

「いいから、背中向けて」

強引に背中を向けさせる。

……はへ、この時代だったのに、きめの細かい肌をしているなあ。

「じゃ、行くよ」

ゴシゴシ。

それでも、擦る度に結構な垢が、こそげ落ちていく。

「どうだい？」

「なんか、気持ちいいですね」

「だろ？」

「ふふっ、じゃあ代わりばんこで。今度は私が」

「おう、頼むよ」

「はい！」

ゴシゴシ。

うゝ、効くなあ。

「痛かったら言って下さいね」

「ああ、大丈夫」

「……綾子さんの肌、柔らかいですね……。あんなに強いから、もつと筋肉質かと思ってました」

「あはは。まあ、あたしだって乙女だぜ、一応は」

「いえ、やっぱり羨ましいですね」

……ん？

なんか、視線を感じる。

あたしはそっと、手元の桶を引き寄せる。

そして、

「そこだっ！」

視線を感じた方角へ、投げつけた。

ゴッン！

「ぐはっ！」

鈍い音と、短い叫び声。

「誰だ！」

素早く布を身体に巻き付け、そこに駆け寄った。

見知らぬ男が、鼻血を出して伸びている。

「つたく、覗きかよ」

ガサガサ。

向こうの茂みに、誰かが飛び込んだらしい。

覗き仲間か？

……けど、流石にこの格好で飛び出す訳にも。

「な、何だてめえ！ うぎゃっ！」

と思つたら、そんな声が聞こえてきた。

「貴様、月の裸を覗くとは。万死に値するな」

……あれ、どっかで聞いた声だな。

そして、伸びた男を引き摺りながら、現れた女性。

「お、お前は……」

「華雄さん……？」

「久しぶりだな。月、綾子」

紛れもなく、あの華雄だった。

〓四十四〓（後書き）

新規作品についてのアンケートを、活動報告にて募集中です。
ご協力、よろしくお願い致します。

（四十五）（前書き）

原作では不遇、でも二次創作では大人気のあの人が、今回は出まくりです。

（四十五）

「華雄さん、ご無事だったんですね」

「ああ。月を守る、その為には死ぬ訳にはいかないさ」

華雄は、以前と雰囲気はどこか違っていた。

なんかこう、吹っ切れたと言うか……一皮むけた印象。

覗き野郎を、邑の警備兵に引き渡し、あたし達は宿に戻った。
再開を祝して、ささやかに乾杯。

月はもちろん、普段はツンツンしている詠も、珍しく笑顔だ。

「あれから、一体どうしていたの？」

「私は、あの戦いでつくづく、己の未熟さを悟った。武ばかりに拘り、視野を自ら狭めていた」

華雄は、杯をくい、と干す。

「だが、それでは、月を守るという事など、おぼつかん。あのままでは、皆に迷惑をかけるばかり、そう気付いた私は、己を鍛え直す事に決めたのだ」

「それでか。……紅蓮、どう感じた？」

あたしの問いに、紅蓮は軽く頷く。

「うん、ボクから見ても、今の華雄さんには、以前にない強さを備えていると思うよ」

「だな。以前は強いだけっつーか、隙だらけだったけど。落ち着きが出たせいか、別人みたいだ」

「フフ、だが、まだまだだ。私はもっともっと、強くあらねば」
ホントにあの華雄……なのか？

危うさを微塵も感じさせない落ち着きぶりに、あたしは眼を疑いたくなる。

「そう言えば、霞さんはどうしたのですか？」

「うん、ボクも気になっていたの」

月と詠の言葉に、華雄は難しい顔つきになった。

「どうかしたのか？」

「……いや、奴は無事だ。……多分な」

「どういう事？」

「実はな。あの後暫く、洛陽に留まっていたのだが……」

急に、齒切れが悪くなったな。

「でも、無事なんですよね？」

「少なくとも、数週間前までは、な……」

「ねえ、月が不安がってるわ。はつきり言って」

詠が、苛立ちを隠さずに言う。

「……わかった。あの後で、霞のところに曹操が来たんだ」

「曹操が？」

「ああ。目的は、霞を配下に招く事だ。どうやら、霞をひどく気に入ったらしくてな」

華琳なら、わかる。

あいつのヘッドハンティングぶりは、凄まじいからな。

あたしにもそうだったけど、一度目をつけた人材には、どんな手を使っても手に入れようとする。

ましてや、張遼は文武両道、おまけに騎兵の指揮は折り紙つきだ。とにかく、人材集めへの情熱と、コストの度外視ぶりは、誰にも真似出来ない。

……もし、張遼が誰かに仕官でもしようものなら、仕官先を攻め滅ぼしてでも、手に入れようとするんじゃないか？

「それで、霞はどうしたのよ？」

「もちろん、断ったさ。けど、『董卓が死んだ今、貴女程の人材がその才を活かす場がないなんて、天下の損失、いえ、天への冒瀆よ。だからこそ、私に仕えなさい、張遼。覇道を歩む私こそが、貴女の才を十二分に活かせる、唯一の存在よ』、なんてほざく始末さ。私は顔を見せられないから、ジッと耐えるしかなかったが、な」

よくそこで華琳に斬りかからなかったもんだなあ。

……まあ、斬りかかったところで、むざむざ斬られるような奴じゃないだろうけどな。

「霞は、曹操が強硬手段で来て、私の存在が知れたら面倒だから、と、別行動を提案してきた。……残念だが、私が知るのはそこまでだ」

「で、その後は華雄さん一人で自己鍛練をしながら行動した、って訳だね？」

「その通りだ、朱然」

「詠ちゃん。何とかならないかな……。霞さんも、大切な仲間だからね」

「相手は、よりによってあの曹操だからね。考えてみるけど……」

あたしも、いいアイデアがある訳じゃない。

……張遼が、どこまで華琳の手を逃れられるか。

今は、それに賭けるしかない。

かなうなら、敵には回したくない相手だし。

「お客様、失礼致します」

女将が、盆を手に入ってきた。

テーブルに、炒め物を置いた。

「あれ？ そんなの頼んだっけ？」

「いや、知らないわ。ねえ、間違いない？」

詠がそう言うと、女将は頭を振って、

「いいえ、これはお代は結構です……賈駆様」

「な……」

いきなり、正体バレたんかい。

けど、何故だ？

「貴様……何者だ」

華雄が、女将を睨み付ける。

「待って下さい。……あなたは、恋さんの部下だった方ですね？」

「はい、ご無沙汰しておりました。董卓様」

「やっぱり。ですが、何故こんな処に？」

「呂布將軍が楊州に行かれる事になり、私達は全員、自由に行動するよう伝えられました。私は実家であるこの宿を継ぐ為、戻った次第です。……ですが、やはりご無事でしたか、私は、討たれたという噂、信じておりませんでしたから」

人の縁なんて、わからんモノだね。

こんな形で、再開する事もあるんだから。

「ささ、もっとお召し上がり下さい。お酒も、まだまだお持ちします」

「はい、ありがとうございます」

一人だけ、全く酔った気配のない月。

……ある意味、この娘も超人だよな。

「ふう……」

何となく、寝付かれなかったあたしは、改めて温泉へ。

流石に真夜中、誰もいる訳がない。

バシヤッ。

……と思ったら、誰か入ってきた。

「何奴？」

華雄の声がした。

「あたしだよ」

「美綴か。すまん、邪魔するぞ」

雲に隠れていた月が、姿を見せた。

シルエットでしかなかった華雄の顔が、ぼんやりと見えてくる。

「なかなか良い湯だな」

「ああ。良かったよ、この大陸にも温泉があつてさ」

バシヤ。

そう言つて、あたしは湯に手を入れ、顔を拭う。

「……美綴。本当に貴様は、不思議な奴だな」

「あたしが？」

「そうだろう。私が無知なのは承知しているが、いくら大陸広しと言えども、あの恋と互角に打ち合う武を持ち合わせた人物がいようとは思わなかったぞ」

だろうな。

あたし自身が、この化け物じみた強さが、未だに信じられない。

……原因は間違いなく、アレなんだろうけど、それにしてもあり得ないと思う。

「それだけでも十分、驚嘆に値するが。月や詠に聞いたが、内政でも斬新な提案をする、軍略でも呉の面々を驚かせているらしいではないか」

「大袈裟だよ。あたしはただ、思いついた事を言っているだけさ」

「はっはっは、それも月の言う通りだな」

「え？」

「謙虚だという事だ。貴様の功は、十分すぎる程誇って良い筈なのに、鼻に掛ける様子が微塵もない、と言っていたぞ」

「ガラじゃないだけさ」

「……フツ。道理で、私では貴様に太刀打ちできない訳だ」

それ、十分過大評価。

確かにあっさりとのしてしまったけど、相手は歴史に名を残す猛将。

あたしがチートとしか思えない強さを持っているだけで、決して華雄は弱くはないんだ。

……ただ、その差を感じていたとしても、猪突猛進だった少し前なら、怖くはなかったけど。

「そう言えば、華雄」

「何だ？」

「自分を鍛え直していた、と言っていたが……。何をしたんだ、一体？」

さっき、聞きそびれたが、この変わりよう、聞かざるを得ない。

「大した事はしていない。精神集中のため、滝に打たれたり。金剛

爆斧がなくなったので、剣で藁を斬ったり」

お前は山伏か。

それか、どこぞのホームランバッターですか？

「……すまん。あれ、華雄には大切な得物だったんだよな」

「……ああ。だが、あれで目が覚めた、とも言える」

華雄は、意外とサバサバしていた。

「どういう意味だ？」

「簡単な事だ。あれは、確かに私の手に馴染み、威力も大きかった。だが、ただただ振り回すだけでは、本当の強者には勝てなかった。美綴や恋のようにな」

「……………」

「だから、金剛爆斧を失った後、私は剣や槍、いろんな得物を試しているところだ」

「……あたしが言うのもおかしいけど。そんなにいろいろな手を出して、大丈夫なのか？」

「斧に専念しろ、そう言いたいのだろう？」

あたしは、大きく頷く。

「あたしも、たまたま二振りの名剣を手にしてしまったから、薙刀を一切使わずにいる。場数だら、戦いは」

「その通りだ。……だが、今の私は……」

華雄が、肩を振るわせている。

ザバツ。

あたしは、立ち上がった。

「美綴？」

「そろそろ出よう。長湯は禁物らしいぞ」

「……ああ」

「……華雄。一人で悩むなよ？」

ポン、と華雄の肩に手を置く。

「あたしでよけりゃ、相談でも鍛錬の相手でも、してやるからさ。な？」

「……わかった。その時は、頼りにするぞ、美綴」

翌朝。

朝食を取りながら、今後の事を打ち合わせ。

「では、やはり北は危険……そういう事ね？」

「はい。司隸は曹操の勢力圏ですし。雍州は、荒廃したままで、盗賊が多いという噂ですから」

女将は、ジモティーらしく、近隣の情勢に詳しかった。

「そうになると、襄陽から上庸、漢中。そういう経路になるね」
広げた地図を前に、紅蓮が呟く。

「しかし、便利ですねこの地図。綾子さんがお作りになったとか」

「いや、元になる地図があったんでね。ないよりはいいかな、って」
カバンに入っていた地図帳から、中国の地図をなぞって、風や星に聞きながら国と主な都市の位置を書き込んだだけ。

グー○ルマップみたいなモンがありゃ、一発なんだけどねえ。

「時間はかけられないけど、安全には変えられないわね……。それで行きましょう」

詠の言葉で、ルートが決まった。

……とは言え、まだまだ長旅には違うない。

つくづく、中国は広大ななあ、と思う。

「華雄はどうするの？」

「愚問だな。私は月を守る為に、戻ってきたのだ。離れるつもりはない」

「わかったわ。頼りにしてるからね」

「フツ、任せておけ、詠」

不敵に笑う華雄が、頼もしく見える。

……もしかして、あたしいなくても、大丈夫だったりして。
なら、ここで言うべきだろうな。

「月、詠。西涼には、先に向かっていて貰えないか？」

「え？　どういう事？」

「張遼の事が、気になってな。アイツの才覚なら、そう簡単には、と思うけど」

「ま、待て美綴。霞の事は確かにあるが、護衛はどうするのだ？」

「華雄がいるじゃないか。今の華雄なら、二人を立派に守り抜けるさ」

「しかし……。昨夜も言った通りで、今の私は……」

不安を隠さずに言う華雄に、あたしは笑いかけた。

「でも、月は何があっても守り通す。そうだろう？」

「当然だ！」

「なら、頼む。……そうだ、これを貸すよ」

あたしは、倚天の剣を取り出し、華雄に手渡す。

「な……。こ、これは綾子の」

「そうだ。あたしの分まで、そいつで二人を守ってやって欲しいんだ」

「しかし……」

まだ、躊躇う華雄。

あたしは、月を見て、

「張遼は必ず連れてくる。だから、使者の役目、よろしくな」

「綾子さん。……ありがとうございます」

「華雄。……月とボクの事、頼んだわ」

顔を上げた華雄の顔から、迷いが消えていた。

「……そうまで言われて、いつまでも悩んでいても仕方ないだろう。

では、貴様の分までしっかりと護衛の任、果たさせて貰う」

「頼むぜ」

三人を見送り、あたしは洛陽へと向かう。

「綾子様と二人旅か。悪くないね」

紅蓮だけは連れてきた。

……あたし一人だと、道に迷いそうだし。

何でも器用にこなす紅蓮は、こういう時とても頼りになる。

「急ごう。張遼が気になる」

「うん」

あたし達は、馬がへばらない程度に、駆け出した。

「綾子様。張遼さん、大丈夫かな？」

「……そう信じよう。華琳も、相手の気持ちを踏みにじってまで、という事はしない筈だからな」

その代わり、相手を論破する事に関しては、天才的。

張遼は頭もいい奴だから、案外その方法で来られると、危ないかも知れない。

……と、考え事をしていると。

「綾子様、危ない！」

「え？」

目の前に、矢が迫っていた。

咄嗟に、顔を逸らす。

……が、頬を掠ったようだ。

かすかな傷みと、血が伝わる感触。

「何者だ！」

ガサッ。

ガサガサッ。

茂みから、わらわらと男達が出てくる。

「へっへっへ、姉ちゃん達。そんなに急いでどこに行くんだい？」

チッ、野盗か。

「お前らには関係ないだろ。そこをどけ」

「おっと、そうはいかねえな。ここを通りたいのなら、通行料を貰おうか」

「通行料だと？」

「そうさ。有り金全部と、その剣。後は、身体で払って貰えば十分だな」

「ヒッヒッヒ」

連中は、下卑た笑いを上げる。

「綾子様。どうする？」

「……決まってるさ。乙女の肌に、傷つけた報い、きっちりと味合わせてやる」

「なんだ？ たった二人で、俺達とやろうってのかい？ やめときな」

……哀れなのは、お前らの方だ。

何故なら、あたしは一切の容赦をしない事に、たった今、決めたから。

「紅蓮。……わかってるな？」

「……うん」

あたしと紅蓮は、剣を抜く。

「おりゃあああっ！」

そのまま首領らしき男に、斬りかかる。

「このアマ！ つけあがるな！」

いきり立ち、槍で突いてきた。

「バカめ。相手を間違えたな！」

スパッ！

青？の剣で、穂先を斬り、そのままそいつの顔を……貫いた。

「お、親分！」

「て、てめえ！ ぶっ殺す！」

「やれるもんなら、やってしろ！」

久々に、本気であたしは怒っていた。

「こんなところで、死ねるかあああああっ！」

〔四十五〕（後書き）

仕事が忙しく、なかなか更新できません。

新規作品もありますので、こちらを着実に更新していきたいところですが……。

活動報告でアンケート実施中です、ご協力よろしくお願い致します。

（四十六）

「ハアッ、ハアッ、ハアッ……」

「あ、綾子様。ハア、ハア、た、大丈夫？」

「あ、ああ。ハッ、ハッ、な、何とかな」

向かってきた野盗どもは、全員を討ち果たした。

しまいにゃ、あたし達の暴れっぷりに、雑魚どもは逃げ出そうとした。

けど、あたしは容赦しなかった。

どう見ても生かしておく価値もないし、そもそもが女の敵だし。手近の連中は斬り伏せ、距離があつた連中には、矢を浴びせて。

……我ながら、ここまでやるか、とも思ってたけどさ。

でも、雪蓮や華琳なら、同じ処置を執った筈だ。

青？の剣は、最後まで切れ味は落ちずに、役割を果たしてくれた。

……ただ、あたしも紅蓮も、返り血を浴びまくって、エライ事になっている。

それに、流石にしんどい。

「とりあえず、これを何とかしようぜ。もう敵はいないようだ」

「賛成。……あっちから、水音が聞こえる」

紅蓮の示した方向に向かうと、小さな森があつた。

その中に、小川が流れている。

あたしはジッと、耳を澄ませる。

……よし、怪しい気配はないな。

「綾子様、念のため、交代にしよう。ボクが見張りをするから、先にいいよ」

「わかった。じゃ、お先に」

血で汚れた鎧と服を脱いで、川に入った。

うう、冷たい。

昨日、温泉に入った後だから、余計に冷たさを感じるのかも。

でも、あちこちについた返り血は、徐々に流れていく。
ついでに、鎧についた汚れも、古くなった手拭いで。

「ふう、一息つけたかな。今上がるから、もう少し待ってくれ」
ザバツ。

川から出て、身体を拭く。

「……いいなあ」

「ん？」

「綾子様の体型。出るところが出て、引込むところは引込んで。
本当に、女らしいよね」

紅蓮が、自分の胸を見下ろしながら言う。

「……言う程、貧しくはないと思うんだけどな、紅蓮も。」

「人それぞれだって、こんなモン。そんな事言ったら、華琳に殺
されるぜ？」

「はは、違くないね。じゃ、ボクも入らせて貰うよ」

あたしが着替え終わるのを待ち、紅蓮も脱ぎ始めた。

「さて……。とりあえずは、洛陽に向かう、って事になるか」

「そうだね。でも、まずは休もう」

「……賛成だ」

その晩。

途中で見つけた小さな村で、宿を借りた。

「……と言っても、小屋に藁を敷いただけで、野宿よりはマシ、と
いう程度だけど。」

宿屋もないような貧しい村みたいだし、贅沢も言えない。

干飯ほしいいと干し肉、それに途中で見つけた梅の実で夕食。

「この干飯も、綾子様の発案なんだって？」

「まあな。保存も利くし、軽いからな。それに、いろいろと応用が
利くんだぜ？」

紅蓮が、あたしをまじまじと見る。

「ど、どうした？」

「ううん。ただ、綾子様って本当に物識りだよね。改めて凄いな、って思うんだ」

「そんな事ないって。あたしの知識だって、先人から受け継いだものばっかだしな」

藁に寝っ転がってみる。

日に干した藁は、思っていたよりも柔らかいな。

「でも、知識は持っているだけじゃ意味がないからね。それを活かせる綾子様って、流石だよ」

「そうかねえ。あたしから見れば、紅蓮の方がよっぽど凄いなと思うけど」

「ボクが？」

「そうだろう？ 腕も立つし、頭も回る。明命みたいに細作もやれるし、あたしなんかよりずっと器用じゃないか」

「……それ、器用貧乏、って言わない？」

「あたしはそうは思わないぜ？ 紅蓮がいてくれて助かった、なんてのも一度や二度じゃないからな」

あたしの言葉に、紅蓮は俯いたようだ。

暗くて、表情はよくわからないけど。

「ありがとう。ボク、綾子様についてきて、良かったよ」

ポリポリ。

照れるじゃないか、そう言われたら。

「さ、寝るぞ。休めるときに、休んでおかないと」

「そうだね。おやすみ」

すぐに、寝息が聞こえてきた。

ふああ、あたしも疲れた……。

翌朝。

目が覚めると、紅蓮の姿が見えない。

荷物はあるから、そのあたりにいるんだろうけど。

「あれ、起きてた？」

そう思っていたら、何かを手に戻ってきた。

服と……ツラ？

「このままの格好じゃ、怪しまれるじゃない？」

確かに、洗ったとは言え、服も鎧も血塗れだったからな。
ところどころ切れてるし。

「こっちが綾子様の。たぶん、寸法は問題ないと思うけどね」
渡された服を確かめる。

……サイズは、問題ないだろう、たぶん。

……ただ。

「なあ、紅蓮」

「うん？」

「……これを、あたしに着ろ、と？」

「そうだけど？ 何か気に入らない？」

「……つーか、もろに女物じゃないのか、これ？」

まるで、亞莎が着ているような服じゃないか。

「だって、綾子様だって女性でしょ？」

当たり前だ。

あたしは男勝り、と言われる事はあっても、女の子なんだぞ。

し、しかし……身体ラインがはっきり出る服だな、これ。

「あ、ちなみに着替えはそれしかないからね」

「つまりは、これを着る以外に選択の余地はない……そう言いたい
んだろ？」

「その通りだよ」

はいはい、わかったよ。

諦めて、袖を通す事にした。

「それから、これも被ってね」

と、ツラも渡された。

もちろん、ツラってもカトちゃんみたいなのじゃなく、ロン毛の

ツラ。

「なんか、変装みたいだな、これじゃ」

「みたい、じゃなくて変装だよ？」

見ると、紅蓮も男物の服に着替えている。

もともとセミロングだから、あまり違和感はない。

つか、ハマリ具合がヤバくね？

「はい、鏡。ボクの方は、どう？」

「……いや、似合い過ぎ。違和感まるでないな」

「はは、複雑だね。それでもボク、女なんだけどさ」

あたしは、鏡を覗き込む。

「……誰、これ？」

「誰でもないよ。綾子様は綾子様だもの」

「いや、しかし……」

美人を自称するあたしだ、容姿に不安はない。

……けど、鏡に映っているのは、まるで別人。

「惚れちゃうね、誰でも。完璧な美女だし」

「これ、却って目立たないか？」

「でも、逆に誰も綾子様だなんて、思わないんじゃないかな。なんなら、そのまま雪蓮様の前に行ってみたら」

「……全力で却下」

間違いなく、からかわれて酒の肴にされるからな。

「あと、名前も変えよう。どこに、曹操の細作がいるかわからないからね」

「そうだな。その方がいい」

「綾子様、どんな名前にする？ 綾子様が決めていいよ」

急に言われてもな……。

とりあえず、実際にいる人物はまずいだろう。

かと言って、あまりデタラメなものアレだし。

「そうだな……。李応、字を元璋があたし。李俊、字を則徐が紅蓮。これでどうだ？」

「いいんじゃないかな。でも、よく即興でそんな名前を思いついたね」

「たまたま、知っている人物の名前を借りて組み合わせただけだ。ただ、間違いなく華琳は知らない名前だから」

「ならそれで行こう」

ちなみに、水滸伝から取った名前に、明の初代皇帝とか、清の有名人とかを適当にくつつけただけ。

本人に知られたら怒られそうだなあ。

「さて、着替えも済んだし。この服は、燃やすけど……いいね？」

「しかたないさ。持ち歩いて見つかりでもしたら大変だからな」

「うん。じゃあ行こうか。……あ、同じ姓みたいだけど……。これって、姉弟でいいの？」

「その方が面倒がないだろう？」

「いいけど。じゃあ、綾子様の事は、姉さん、って呼ぶよ？」

うわ、そう来たか。

でも、そうじゃないと不自然だよな。

「……いいぜ。則徐」

「ありがとう。元璋姉さん」

妙に嬉しそうな紅蓮……まあ、いいけどさ。

旅を続け、いよいよ洛陽が目前に迫っていた。

しかしまた、ここに来る事になるとは、な。

「姉さん、くれぐれも自然にね？」

「則徐の方こそ」

最初は、お互いの名前を普通に呼んでしまいそうだったけど、そのうちに偽名にも慣れてきた。

流石に洛陽だけあり、人の出入りは多い。

これなら、中に入るのに苦労する事はなさそうだな。

そう思いながら、城門にさしかかった。

「ご苦労様です」

「うむ」

門番にさりげなく挨拶し、城内へ。

活気は相変わらずというか、前よりも人が増えている気がする。

「とりあえず、宿を探そうか」

「そうだな。しかし、活気があるな」

「うん。曹操が支配するようになって、治安に不安がなくなったからじゃないかな？」

月の頃が悪かった訳じゃないが、あの時は連合軍が迫っていた。だから、人々はどこか、不安げだったけど。

でも、行き交う人々には、それが感じられない。

……と、周囲の人々が騒ぎ始めた。

「あの、どうかしましたか？」

そばにいた人をつかまえて、聞いてみた。

「曹操様が見回りにおいでとか。それで、一目見ようと皆が向かっているようですぞ」

う、それは拙い。

今、華琳に見つかるというろいと面倒だ。

「則徐。裏へ回ろう」

「うん」

あたし達は、人混みをかき分け、その場を離れた。

そして、町外れの小さな宿に、落ち着いた。

「やれやれ。危なかったね」

「全くだ。ここまでやって来た苦労が全て水の泡になるところだったな」

しかし、華琳がここにいるとは計算外だった。

ここを支配しているとは言え、本拠地は違う筈。

「則徐。曹操の本拠って、陳留だよな？」

「姉さん、それは少し前の情報だね。今は許都に移っているよ」
「それでも、ここに来ているってのは……。張遼の事なのかな？」
「それもあるだろうね。でも、忙しい身だから、いつまでもここに
いるとは思えないけど」

「……まずは、張遼の居場所だな。聞いてくるか」

あたしが言うと、紅蓮は怪訝な顔をした。

「聞くって、誰に？」

「ま、見てなって。その前に、少し休もうぜ」

「う、うん」

夕方。

あたしと紅蓮は、裏路地へ。

えーと……。あ、いたいた。

「ニャーン」

猫の溜まり場を発見。

あたしが近づくと、ぞろぞろと集まってきた。

「ゴロゴロ」

「ウニャーン」

身体を擦りつけてくる奴、寝転がる奴。

「相変わらず、猫に好かれてる。どうしてなんだろうね？」

「……理由はわからんけど、どうやらあたしは、自分で可愛いと思
ったものに好かれる、という特技が身についたらしい」

「いつの間に？ どうやって？」

「……それはあたしが聞きたい。けど、そうでもないと説明がつか
ないんだよ」

そう答えながら、あたしは猫たちに話しかける。

「なあ、知っていたら教えてくれ。こいつの居場所、誰か知らない
か？」

手にしたケータイの画面を、猫達に見せる。

前に撮った、張遼の写真データを呼び出してある。

最初はびっくりしていた猫達も、何だろうと覗き込み始めた。

「それ、姉さんの持ち物だっけ？ 本物そっくりの絵を、瞬時に描いてしまうって」

本来は別の用途があるんだけどさ。

この時代じゃ、カメラとしての機能しか活用できないからなあ。

……と、ブチ猫があたしの方を見て、

「ニャン」

一鳴き。

そして、どこかへ歩き出した。

ついてこい、って事だな。

「案内してくれるのかな？」

「そうだろうな。……でも、ホントに通じるとは思わなかったけどさ」

この能力、明命に教えてあげたいぐらいだな。

「ニャーン」

ブチ猫が止まった場所。

……まあ、ある意味予想通りというか。

『酒家』と書かれた看板の掛かった、店の前だった。

「とりあえず、ご苦労さん。ほら、お礼だ」

途中で見かけた露天で買った魚を一匹、ブチ猫の前に置いた。

「ニャンニャン♪」

嬉しそうに鳴くと、ブチ猫は去って行った。

「さて……入るか」

「そうだね。くどいようだけど、くれぐれも気をつけて」

「ああ」

店に入り、店内を見渡す。

……いた。

テラス風の場所で、相変わらずのピッチで飲んでいる張遼を発見。
「いらっしゃいませ。お二人様で？」

「うん。外の景色が見える席がいいな」

「では、こちらへ」

そのまま、張遼の隣のテーブルに案内された。酒と料理を適当に注文しながら、様子を伺う。

「どうだ？」

「……いるね。店内に二人と、店外にも二人」

「そうか」

華琳の事だ、手抜きはないだろう。

「……なら、これを使うか」

あたしはメモ帳を取り出し、ペンで書き付けた。そして一枚を破る。

「どうするの？」

「ま、見てなつて。……すみません、厠は」

あたしは席を立ち、厠へ。

頃合いを見て戻るすがら、わざとよろめく。そして、張遼にぶつかる。

「ん？ 何やアンタ？」

「とつとつと。す、すみませんね」

「だらしないなあ……って、何やえらいべっぴんさんや」
どうやら、あたしの正体には気付いていないな。

立ち上がりながら、手の中のメモを、素早く手渡した。

「……アンタ、誰や？」

「話は後で。それは、ここを出てから読んで」

「わかった」

あたしはかすかに頷いて、自分の席に戻る。

「気付かれてないな？」

「たぶんね。……でも姉さん、大胆すぎだよ」

紅蓮に呆れられてしまった。

「ま、いいじゃんか。それよりも、せっかくの料理だ。いただきます」
「う、うん」

深夜。

さっきの裏路地で、あたしは一人、暗がりですわっていた。
紅蓮は、あたりを見張ってくれている。

そして、靴音が近づいてきた。

「来たで。久しぶりやな」

「ああ、張遼も」

無事に、再会する事は出来た。

さて、ここからどうするか……それが一番の難題だな。

〃四十六〃（後書き）

活動報告でアンケート実施中です。
ご協力よろしくお願い致します。

〱四十七〱（前書き）

総PVが30万を突破しました。
皆様、ありがとうございます。

（四十七）

宿に戻り、部屋に入った。

少なくとも、監視の目は感じられない。

トクトク。

「ほな、改めて」

「再開を祝して、だね」

「乾杯」

カチン。

三人で茶碗をぶつけ合い、口に運ぶ。

肴もない、徳利から注いだだけの白酒だけど、これで十分だ。

「んくっんくっ、ぷはー、やっぱ一人で飲むより、こっちの方が旨いわ」

「そう言いながら、さっきも飲んでなかったか？」

あたしがツツコミを入れると、張遼はしれっとした顔で、

「あんなん、飲んだうちに入らへんわ。自棄酒みたいなモンやし」

「曹操からの勧誘、か？」

「せや。華雄からあらましは聞いたやろ？ めっちゃしつこいねん」

そう言って、張遼は大きな溜め息をつく。

「けどさ、張遼」

「あ、霞でええ」

「いいのか、真名で？」

あたしが聞くと、意外そうな顔をされた。

「逆に、何で今まであかんかったんやろ？ ホンマやと、月と詠の時に、別にええよ、って言うだけやったのにな」

「ま、あの時は仕方なかったさ。とにかく、二人を殺させない事で手一杯だったし、な」

「せやな。けどな、あん時……一緒に行けへんかったんが、悔やまれる」

霞……。

「そう言えば、恋さん達はどうやって抜け出したの？ 監視は同じようについていたと思うんだけど」

あ、それはあたしも聞きたいかも。

「簡単な話や。恋には、監視がおらへんかったんや」

「どういう事？」

「綾子も紅蓮も知ってるやろ、恋がめっちゃ勘がええちゅうんは」
あたし達は、頷く。

「曹操がつけた監視の連中もな、みんな恋にバレてしもうて。無事で帰った奴はおらへんちゅう話や」

……恋だと、それぐらいやりかねないな、確かに。

「あとな、どうも曹操は、恋にはあまり興味なさそうやったしな」
「そうなのか？ 才ある奴には、割と見境がない筈だよな」

あたしが、どうしてそっち側なのかはともかくとして。

「曹操は、自分の配下になった将には、自分の求めるモンか、それ以上の結果を求めるやろ？ 恋の場合は、どっちかっちゅうと、自分の勘を優先しよるしな」

そうかも知れない。

あたしの知る歴史の曹操も、関羽や趙雲、徐庶なんかは欲しがったけど、張飛とか呂布は見向きもしなかった。

華琳も、そこは変わっていないだろうな。

「それに、夏侯惇と違って、恋の場合は制御の効かへん猪やからなあ。いくら曹操でも扱いにくい思うで」

「なるほどね。それでも、黙って恋さんを去らせたとは思えないんだけど」

「せや。ねねの策で、恋が西に向かうと見せかけといて、その間にセキトやら何やらを、ねねが連れ出したんや。後は、わかるやろ？」
「理解したよ。でも、流石にあたしの危機まで察知してくると思わなかったけどさ」

あたしも、茶碗酒を呷る。

「綾子もなかなか強いなあ。ウチ、嬉しいわ」

すかさず、霞は徳利を持ち上げた。

「まあ、呉は雪蓮と祭さん、それに星がいるからな。魏は……」

「みんな飲めるけど、酒が好き、ちゅう奴はおらへんな。せやから余計につまらん」

「……なあ。それでだけど、これからどうするんだ？」

やっと、本題に入った気がする。

語りたい事はまだまだあるけど、時が惜しいし、華琳がいつまでも手をこまねいている訳がない。

ここに来ている、という事は、何か手を打つつもりなのかも知れないしな。

「ウチかて、月のところには行きたい。……けど、無理やろうな」

「ここを出す方法、か？」

「それもある。けど、問題なのはその後や」

「後？」

霞は頷いた。

「恋もそうやし、華雄の事もいずれ曹操にはバレるやろ？　そこにウチが加われば、曹操はどう考えるやろうな？」

「董卓軍が勢揃い。つまり……」

「月さんと詠さんが生きている、という疑いを持たれてしまう、という事かな？」

「その通りや、紅蓮。たぶんやけど、曹操は勘付いとるで、その事実」

「だろうな。あたしも、咄嗟とは言え随分見え見えの芝居だった、とは思うからな」

「皇帝陛下がああ言ってるさかい、曹操も強くは言われへんけど。もしそうになったら、アンタも、伯ちゃんも立場が悪うなる」

そう言われてみると、その通りだ。

あの時は、霞を連れ出せば済む、そう考えていたけど。

「……けど、このままここにいないんだろう？」

「当たり前や。月に刃を向けるような真似、できるかい」
きっぱりと、霞は言い切った。

「なら、どうしようか。相手があの曹操だから、小細工は効かないだろうし」

「……ん、待てよ？」

「霞。ちょっと、この服を着てみてくれ」

昼間、あたしが着ていた服を取り出した。

ちなみに、今は部屋なので、寝間着みたいなものを着ている。

「別にええけど……」

「どう？」

「寸法は同じぐらいか。けど、恥ずかしいなこれ」

「……まあ、普段の霞の格好の方が恥ずかしいけどな、あたしなら。あたしと霞は、同じようなスタイル。」

思った通り、あたしのサイズで問題ないみたいだ。

「後は、これを被って。紅蓮、どうだろう？」

髪留めを外して貰い、ロン毛のヅラを被せて、と。

「……確かに、これならわからないね。でも、どうする気？」

「簡単だよ、替え玉作戦って奴だ」

「ウチと綾子が、入れ替わるちゅう事やな。せやけど、上手く行くんか？」

「まずは、ここを出る事を優先させようぜ。今後については後でもいいだろうし」

「それで、いつ決行するの？」

「……今すぐだな」

とにかく、事態は一刻を争う。

それなら、思い立ったが吉日だ。

「せ、せやけどウチ、何も準備してへんで？」

「わかってる。武器は、あたしの青？の剣を預ける。飛龍偃月刀の

事を気にしてるんだろ？」

「……バレたか。アレは、思い入れがあんねん。それに、アンタの剣かて」

「綾子様。また、無茶をするつもりなんだね？……ダメ、これ以上危険な事はしないで」

「紅蓮の言う通りや。アンタに何かあってみい、伯ちゃんやみんなが悲しむで？」

二人は、少し怒ったように言う。

「その代わり、とっても単純な策があるんだけど……どうかな？」

「単純って、曹操相手やで？ 通じるんか？」

「だからこそ、だよ霞さん。綾子様も、聞いてくれる？」

紅蓮の策か。

……あたしの無茶よりは、間違いなくマシだろう。

「じゃ、こんな策なんだけど……」

紅蓮の話に、あたしと霞は聞き入った。

数時間後。

霞が住んでいる家にて。

「誰やっ！」

霞の声が、あたりに響き渡る。

「ウチんとこに泥棒に入るやなんて、ええ度胸しとるやないか。飛龍偃月刀の餌食にしたる！」

そう言いながら、ホントに得物を手に、霞が飛び出てくる。

パン、パパパン！

追ってくる霞の足下に、爆竹を投げつける。

「何すんねん、アホンダラ！」

悪態をつく霞を背に、門へと駆ける。

予め失敬しておいた馬に跨がり、駆け出した。

「コラァ、待たんかい！ 逃がさへんでえ！」

大声を上げながら、霞はまだ追ってくる。

「何者だ、止まれ！」

城門のところに、兵士が数名、行く手を塞いでいた。

「それっ！」

あたしと紅蓮は、新たな爆竹を連中に放り投げる。

パンパンパン！

パパパン！

いくら歴戦の兵士とは言え、火と爆発は誰でも恐怖を感じるもの。

その隙に、あたしは馬上から、用意していた棒を背中から抜き、突きまくる。

「ゲッ！」

「ガッ！」

素早く全員を打ち倒し、

「則徐！」

「うん、姉さん！」

ギギギギギ。

紅蓮が、門を開けた。

「よし！」

馬がやっと通れるだけの隙間を開け、続いて通る。

「待て、待たんかいボケ！」

霞も、馬に乗り追いついてきた。

「張遼將軍！ ど、どちらへ！」

騒ぎを聞いて駆けつけてきた、他の兵士が霞を止めようとする。

「やかましい！ ウチの邪魔すんなや！」

全部それらを蹴散らし、外に出てきた。

「綾子様」

「追っ手か」

「うん」

これを予測していたとは思えないけど、案の定、華琳の手先が追ってきた。

「ここじゃまずい。少し、引き離す」

「そうだね」

あたしと紅蓮は、馬をそのまま、駆けさせた。

向かう方角は、北。

西へ向かいたいのはやまやまだけど、なるべくあたし達の意図がバレるのを遅らせたい。

かと言って東は華琳の勢力圏だし、南は目が光っていそうだから、そうなると北、という訳だ。小高い丘のシルエットが見えてきた。

そのまま、馬で駆け上がる。

そして頂上で止まり、振り向いた。

「観念しいや！」

霞の奴、ノリノリだな。

さて、追っ手は……七人、か。

全員の気配を確認し、あたしは弓を取り出した。

今日は新月、眼は暗さに慣れたとは言っても、見えづらい事に変わりはない。

……どうやら、あたしは動体視力だけじゃなく、視力そのものが、化け物じみているようだ。

追っ手の姿を確かめ、矢を放った。

シュッ！

矢を放つ度に、追っ手が落馬していく。

矢そのものを真っ黒に塗ってあるから、気付いた時には手遅れ。

「おし、後一人！」

シュッ！

狙い変わらず、最後の一人も射抜けた。

「やったね」

「ああ」

城内では無用な殺生を避けられたけど、今度は無理だった。

何人かは、命を落としただろうな……。

「待て言うとりやろ！」

霞は、あたし達に気づかないかのように、丘の下を通り過ぎていく。

「さて、行くか」

「うん、姉さん」

……紅蓮の奴、まだ偽名続行モードか？

まあ、いいけどさ。

上党近くの、小さな城跡。

崩れ落ちた城門を通り、中へ。

当然、こんな場所に人気はない。

……が。

「止められない、止まらない」

城壁の陰から、声が聞こえた。

「カ○ビー、かっぱえ○せん」

すかさず、あたしが返した。

「無事やったか」

「お互いにな」

あたし達は、顔を見合わせて、笑った。

「ところで、けったいな合図やけど。これ、何や？」

「ああ、気にしないでくれ。あたしの国では、割と知られている宣伝文句なんだ」

……嘘ではない、よな？

「せやけど……あれで諦めたんかな、曹操は」

「いや、華琳に限って、それはないな。……ま、時間稼ぎにはなっただらうけどさ」

「じゃ、急ごう。月さん達に合流しなきゃ」

「よし。案内は、霞に任せる」

「任しとき。最短で着く筈やで」

あたし達は再び、荒野に出る。

そして、再び旅が続く。

やっと、本来の目的地、西涼に到着。

「長かったなあ」

「そうだね」

華琳の追跡こそなかったが、雍州からずっと、諸侯が支配する領域から外れていただけに、盗賊の襲撃も何度か受けた。

が、こちらには霞も加わり、生半可な人数で討ち取られる筈もない。

何度か追い散らすうちに、恐れをなしたのか、ピタリと襲撃は止んだ。

「あれやな」

霞が示した先に、城が見えた。

規模としては小さいんだろうけど、なかなか堅牢な雰囲気だ。

と、城から数騎が出て、駆け寄ってきた。

先頭にいるのは、菖蒲ぐらいの背丈の娘。

「止まれ！ 何奴だ！」

……本人は迫力を込めたんだろうけど、はっきり言って威圧感ゼロ。

ただ、得物を持ち、兵を従えているところを見ると、たぶん将なんだろう。

「呉の美綴綾子だ。こっちは張遼、こちらは朱然。太守馬騰殿、若しくは馬超殿にお取り次ぎ願いたい」

と、馬上の娘が、フツと緊張を解いた。

「あ、美綴さんだね。お姉様から話は聞いてるよ。私は馬岱、よろしくね」

この娘が、あの馬岱か。

とても、後で魏延を斬り捨てる武将には見えないなあ。

……ん？

何か……左右の二人、固まってないか？

「どうかしたか？」

「……いや、綾ちゃんって、あないな口上も言えるんやなあって」

「……ボクも、正直驚いたよ」

「お、お前らなあ」

ガックリと項垂れるあたしを見て、馬岱はクスクスと笑う。

「じゃ、案内するね。ついて来てね」

さてさて、錦馬超とのご対面か。

城門のところに、人影が見えた。

あれは月と詠、そして華雄。

「みんな、無事みたいだね」

「……ああ」

そして、その隣にいる、凛々しい女の子。

「あたしが、馬超だ。よろしくな、美綴、張遼、朱然」

〔四十七〕（後書き）

活動報告にてアンケート実施中です。
ご協力よろしくお願い致します。

ゝ四十八ゝ（前書き）

仕事が出来ず、こんな時間になってしまいましたが、次話投稿です。

（四十八）

「月、詠。……ホンマ、無事で良かった」

「霞さんこそ。もう会えなかったら、どうしようかと」
感動のご対面、だな。

つくづく、月とその配下とのつながりの強さを感じる。

呉の面々にも、これは勝るとも劣らない、そんな感じさえする。

「美綴。これを返そう」

華雄から、倚天の剣を渡された。

「やはり、これは私には過ぎた得物のようだ。お陰で、月達を守る事は出来たがな」

そう言う華雄は、頬に傷が残っている。

「華雄、それは？」

「何、少しばかり賊に不覚を取ってな。大した事はない」

「でも、勇敢だったわ、華雄は。シ水関の、あの猪と同一人物とは思えなかったわよ」

「もう、詠ちゃんてば、でも、本当に華雄さん、大活躍でしたよ」

人間、変われば変わるモンだよな、ホント。

「なあ、そろそろ……いいか？」

馬超が、遠慮がちに声をかけてきた。

「うん、ごめんね、翠ちゃん」

「あ、いや。ほら、先に話し合う事を、片付けちまおうぜ？」

もっともな言葉だ、誰からも異論は出ない。

「とりあえず、初対面もいる事だし。自己紹介からしないか？」
なら、こっちから名乗るのが礼儀だろう。

そう思ったけど、向こうから名乗りを上げた。

「あたしは姓を馬、名を超、字を孟起という。よろしくな」

「たんぽぽはねえ、馬岱。真名は蒲公英だよ！」

「おい、コラ！ 軽々しく真名を名乗るな、っていつも言ってんだ

ろ？」

「えーっ？ 別にいーじゃない、月ちゃんだって許してるんだよ？」

「月達とお前じゃ事情が違うだろうが」

「お堅いんだから、お姉様は。だから、お婿さんだって決まらないんだよ」

ゴンッ！

うへへ、あの拳骨は痛そうだぞ。

「いったあい！ お姉様、乱暴過ぎ！」

「うっさいバカ！ お前も将なんだから、もう少し落ち着け！」

……うん、仲がいいんだな、これは。

「あたしは、姓が美綴、名は綾子。字も真名もないから、好きに呼んでくれ。よろしくな」

「ボクは、姓が朱、名が然、字は義封。あと、真名は紅蓮。よろしくね」

「……悪いな。見苦しいところを見せちゃってさ。ま、こっちこそよろしく」

あたし達は、改めて握手を交わした。

「まず、孫策との同盟だが、これについては異存はない。曹操が、漢王朝の敵になる事は、想像に難くないからな」

そう言って、翠はあたしを見る。

「何と言っても、陛下自ら將軍位を授けた相手が、ここにいるからな。これ以上の説得力はないさ」

「あたしは、そんな大層な奴じゃないけどな。けど、それで信用して貰えるのなら、それでいいけど」

「なら、同盟についてはこれで決まりだな。後、騎兵だけど」

と、翠は隣の蒲公英を示した。

「あたしは、それでも太守代理だからここを離れられないけどさ。代わりに、たんぼぼを行かせる。いいな？」

「う、うん。大丈夫かな？」

不安そうなたんぽぽ。

「大丈夫だ。武人としての腕は全然ダメだけど、馬の扱いは慣れるだろ？」

「ぶー。お姉様、それ褒めてないよ」

……まあ、確かに蒲公英個人は、正直あまり強そうには見えない。菖蒲よりは強いかな、というぐらいかな？

「あたしから、まだ一本も取れないうちはダメだろ」

「それは、お姉様が強すぎるんだよー」

一方の翠は、見事に隙がない。

「そういや、綾子は天下無双の強さらしいじゃないか。一度、あたしと仕合してみないか？」

「ちよい待ち！ それやったら、ウチも混ぜてえな」

って、何で話がそっちに行くんだ？

「私も、と言いたいところだが、得物がないからな。今回は見物に回らせて貰う」

「翠さん、霞さん対綾子様か。うん、楽しみだね」

お前も煽るなよ、紅蓮。

「おし！ じゃ、明日にでもやろうぜ！」

「よっしゃ。楽しみやな、あの恋ですら勝てんかった奴相手やからなあ」

「……あのさ。マジでやるのか？」

一応、聞いてみるが、

「あたしはもちろん大まじめだけど？」

「ウチかて。な、ええやろ？」

なんか、選択の余地なさそうね……ま、いいけどさ。

翌日。

ビュン、ビュン！

「うゝ、めっちゃ腕が鳴るわゝ」

シュツ、シュツ！

「そうだな。あたしも、たんぽぽ相手ばかりじゃ鈍っちまうからな」
「ぶー。お姉様、それはないよ。たんぽぽだって頑張ってるのに」
ぷう、と頬を膨らます蒲公英。

「まだまだ修行が足りないんだよ。呉に行くまでに、少しでも鍛えておくんだな」

「はあ。脳筋だよねえ、お姉様って」

「何だと！」

「お姉様が怒ったー。もう、単純なんだから」
あらら、追いかけてこ始めちゃったよ。

「……さて。今更止めよう、とは言わないけどさ。あたしも、二人
いっぺんには無理だぞ？」

「ウチかて、サシで勝負がええ。ほな、始めよか」
お互いに、訓練用の模擬槍を構える。

真剣だと万が一の事もあるし、本来の得物とはどちらも違うから、
ハンデなし、という意味ではこれでいい。

……まあ、当たり所が悪かったり、気を抜けば大けがはしそうだ
けどな。

一定の間を取り、相対する。

「綾子。わかつとるやろうけど、手加減なしやで？」

「勿論だ。あたしも、それで霞相手なんて考えちゃいないさ」

「よっしゃ」

槍を構えた。

模擬槍、とは言っても、ずっしりとした重みがある。

「ほな、行くで？」

「いつでも来い！」

シュツ！

ホントに、いきなり槍が繰り出されてきた。

速い！

穂先を払い、受け流した。

「ウチの突きをかわすか。なら、これならどうや!」

「どないした! 受けるだけで、ウチには勝てへんで!」

「なら、行かせて貰うさっ!」

ブンッ!

槍を少し短めに持ち、下から薙いだ。

「させるかっ!」

ガッン!

受けられたけど、それは想定範囲。

すかさず引き、薙ぎのラッシュ。

ゴン!

ゴン!

柄同士がぶつかり合い、鈍い音を立てる。

「槍の使い方間違ってるで!」

「いいや! 槍は突くばかりが能じゃないっ!」

「なら、ウチもそうさせて貰うで!」

振り下ろされる槍を、弾き返す。

「やるなあ! ウチの打ち込みを、あっさり受けるやなんて。流石

や!」

「神速の張遼、余裕か?」

「アホ拔かせ! こないな気持ちええ仕合で、手抜くなんて、勿体

無いわ!」

うん、速さなら星とか思春に匹敵する。

それに、一撃一撃が、重い。

ブン、ブン、ブン!

と、霞が槍を振り回す。

黒田節みたいな、ゆっくりした動きじゃない。

香港映画みたいな、目にも止まらない、という奴だ。

「受けてみい、ウチの一撃!」

……しかし、だ。

あたしには見えちゃうんだ、これが。

そして、ほんの一瞬。

霞が、僅かに握りを変えた。

ビュッ！

繰り出された槍を、紙一重で避けた。

霞が、呆れたようにあたしを見る。

「何やて！ アレまでかわせるんか？」

「今のはヤバかったけどな」

「ヤバいものもあるかい！」

「いいのか、しゃべってる余裕なんか見せて。オラオラオラッ！」

あたしは柄を短く持ちかえ、滅茶苦茶に突きまくる。

本来、槍はリーチの長さを活かすんだけど、乱戦となれば逆に懐に入られ、不利になる場合がある。

そうなれば、槍は無用の長物、剣に持ち替えられてしまう、という訳だ。

ただ、振り回すだけでも近寄りにくくなる、というのを活かして、接近戦に持ち込ませない……そう言う手もあったりする。

そして、こんな風に使い、無理矢理格闘戦に引き込むやり方もある。

……全部、本で得た知識なので、正直、ホントにあっているかはわからなかったんだけどな。

でも、実践してみた限り、ほぼ事実みたいだ。

「綾子、自分無茶苦茶やで？」

「いいんだよ！ そう言いながらしっかり受けてるじゃん！」

「当たり前や！ ウチかて、意地っちゅうモンがあるからな！」

全く、乱れがない突き。

隙を見せているつもりはないのに、全く気が抜けない。

この世界は、何でこう人外揃いなんだ？

「そりゃっ！」

「でりあっ！」

一向に、勝負がつかない。

……もう、何十合打ち合ったか、わからん。

「まだまだあっ！」

気合いを入れ直し、あたしは突きを繰り出した。
が、

「わわっ！」

踏み込んだ足が、地面にめり込んだ。

たまらず、バランスを崩した。

「今や！」

それを見逃すような、霞じゃない。

あたしの首筋めがけて、槍が向けられた。

「そうは行くかよっ！」

無我夢中で、霞の槍を掴んでいた。

「な、何やて？」

「どっせええい！」

そのまま、背負い投げみたいな格好に。

「んな、アホなああああ！」

……ぶん投げちゃった、つい。

「綾子。あれは反則やで」

「すまん。つい、身体が反応しちゃったんだよ」

流石は霞、ただ投げられた訳じゃなく、しっかりと受け身を取っていた。

……まあ、それでも打ち身をしてしまい、あたしはこうして説教されている訳。

「で、どうするんだ？ あたしは、待ちぼうけか？」

翠は、不満そうだけど。

「いや、相手したいのはやまやまだけど。今日は勘弁してくれないか、もう限界だよ」

「だろうな。しかし、見応えがある仕合だったな。霞とあれだけ遣り合える奴なんて、あたしはほとんど知らないぜ？」

「そうなのか？」

「どうも、翠達は以前から月達と面識があるらしいけど。最初から、いきなり真名を呼んでいたしな。」

「うーん、ウチはまだ消化不良やねんけどなあ」

「はは、また近いうちに相手するからさ」

「ホンマか？ 約束やで？」

目をキラキラ輝かせる霞。

ホント、武を競うのが好きなんだねえ。

……と、蒲公英があたしの側にやって来た。

「綾子姉さま、たんぼぼとも手合わせして欲しいな」

「おい、よせて。見てなかったのか、霞との仕合を」

翠の言葉にも、平然としている。

「もちろん、見ていたよ。たぶん、お姉様とでもいい勝負じゃない？」

「わかってるなら、やるだけ無駄だろうが」

「でも、綾子姉さまって底が知れないから、興味があるんだもん。ねー、いいでしょ？」

その、お願いポーズはやめい。

……さて、どうしようか。

そう思っていたら、紅蓮が立ち上がった。

「その前に、ボクが相手になるよ」

「え？ 紅蓮が？」

「うん。ボクに勝てたら、綾子様に手合わせをお願いしたらいい。でも、ボクにも勝てないんじゃ、翠さんの言う通りだよ」

「ふーん。自信満々なんだね」

「少なくとも、綾子様と一緒に修羅場を潜ってきたからね。言っておくけど、そう簡単には負けないよ？」

何か、妙に気迫に溢れてないか、紅蓮の奴？

「そうだな、紅蓮ならちようどいいんじゃないか、たんぽぽにも」
「せやなあ。これはこれで、おもしろいかもな」

「お姉様、霞お姉さま。もう、他人事だと思って。ねえ、綾子姉さまはどうなの？」

「って、あたしに振るな。」

「……でも、蒲公英の実力を見ておくのは悪くないな。」

紅蓮も、決して弱くはないし。

「紅蓮の言う通り、まずは紅蓮との手合わせをしてからだな」

「もう、綾子姉さままでそう言うんじゃない、仕方ないな。なら紅蓮、勝負！」

「望むところさ！」

言うが早いか、得物を手に飛び出していく二人。
「って、おい！」

「ちよっと待て！ どうして二人とも真剣なんだよ！」

「だって、模擬槍じゃ調子でないんだもん」

「ボクも、この方がいい。大丈夫、殺しはしないから」

「言ってくれるじゃない。たんぽぽの事、甘く見ない方がいいよ？」

「それは、実力を見せて貰ってからさ。でりやあああ！」

あゝあ、そのまま始めちゃったよ。

……もう、知らん。

ホントにヤバそうだったら、無理にでも止めに入るしかないかな。

ちなみに、結果は紅蓮の勝ち。

「綾子姉さま、鍛錬お願い」

「だゝかゝらゝ、ボクに勝ってからじゃないと許さないって！」
また、どっかで見たパターンだし。

「どうなってんだ、これ？」

「モテるなあ、綾子は。ウチも混ぜて貰えへんか？」

「全力で却下。っーか、これ以上話をややこしくしないでくれ……」

またひとつ、あたしの悩みの種が増えそうだ。

〓四十八〓（後書き）

蒲公英、こんな感じでしたよね……今ひとつ、上手く書けてないかも。

引き続き、活動報告でのアンケート実施中です。
ご協力よろしくお願い致します。

ゝ四十九ゝ（前書き）

今回はゆったりまったり話です。

（四十九）

翌日。

翠との仕合予定だったんだけど、臥せている馬騰さんの体調が思わしくないらしい。

それもあり、翠と蒲公英は仕事やら何やらで、慌ただしくしている。

……という事で、予定がなくなった。

さてさて、どうすつかね。

「綾子さん、ちょっとよろしいですか？」

月が、顔を覗かせた。

「どうかしたか？」

「ええ。今日、お時間ありますか？」

「あるけど。つか、むしろヒマ」

ぶっちゃけて言うと、月はクスクスと笑う。

「なら、みんなでちょっと、お出かけしませんか？」

「みんなって。霞や華雄達も一緒、って事か？」

「ええ。如何でしょうか？」

「そうだな……。悪くないな」

あたしの言葉に、月はニッコリ笑った。

可憐、というか清楚というか……。あの笑顔は反則だよなあ。

「それで、どこへ？」

「はい。少し行ったところに、見晴らしのいい場所があるんです。

そこで、お弁当でも、と思うんです」

「なるほど。ピクニックね」

「えっと、ぴくにつく……。ですか？」

「ああ。あたしの国の言葉で、そんな風に弁当を手の外に出かける事を言うんだ」

「ふふっ。ならまさにぴくにつく、ですね」

「なら、弁当の準備がいるな。どうするんだ？」

「あ、はい。私が作ろうかと」

でも、六人分ともなると、それなりに大変だよな。

「おし。あたしも手伝う」

「え？　ですが、それでは」

申し訳なさそうな月の頭に、手を置いて、

「気にすんな。あたしだって、たまには料理の勉強しないとダメだからさ。な？」

「へ、へう。綾子さん、そ、それはいいんですが」

「ん？」

見ると、月が顔を真っ赤にしている。

「手……。恥ずかしいですよ」

「……あ。悪い悪い、つい」

無意識で、頭を撫でていたらしい。

何でだろうな、月を見るとつい。

「あゝっ！　綾子、またアンタ！」

そして、詠に怒られるのも、毎度のパターンになりつつあるな。

城の台所を借りて、調理開始。

「ボクも手伝うよ」

と、紅蓮も参戦する事に。

董卓に朱然に挟まれて、料理をするあたし。

……何っ！　か、妙に豪華というか、あり得ないなこれ。

「弁当だと汁物は厳しいから、焼き物、揚げ物、煮物、炒め物、蒸し物……。このあたりで手分けだな」

まあ、中華料理は全般に弁当には不向きだけど、それでも工夫すれば何とかなるだろ。

「私はだし巻き卵と麻婆茄子、八宝菜……。あと、間に合えば何品か作りますね」

「じゃあ、ボクは青椒肉絲と酢豚、春巻きあたりにしようかな」
って、二人でだいたいわれちゃうな、これだと。

……なら、あたしは中華以外にしようかな。

「とりあえず、炒飯はあたしが。それ以外の何品か、それも作るよ」
「わかりました。では皆さん、頑張らしましょう」

「応っ！」

「綾子様、戦じゃないんだからさ」

紅蓮がすかさずツツコミを入れる。

「いいや、戦と同じ気持ちで臨むさ。真剣勝負、って意味でな」

「本当、綾子さんと紅蓮さんって、仲良しなんですね。まるで、本当の姉妹みたいです」

「え？……いい、イヤだなあ、月さん。ボクなんかじゃ、綾子様の妹なんて」

……そう言いながら、チラチラあたしを見るのは何故だ？

木耳に青梗菜、豚肉、鶏卵、干しアワビ……。

いやー、新鮮な海鮮除いたらほとんど揃ってるな、ここ。

「しかし、食材が豊富だね。西涼って、地域柄肉食が中心の印象があったんだけど」

「ええ、紅蓮さんの言う通りですね。私も、并州刺史の時来てみて最初に、同じ事を思いましたから」

「そう言えば、月は翠達と随分親しいみたいだな。その時からなのか？」

「地理的にお隣同士みたいなものでしたし、翠ちゃんも蒲公英ちゃんもあんな性格ですから、すぐに仲良しになれたんです。……連合軍が結成された時も、総力をあげて助けに行くって言うてくれたんです」

「そうか」

翠の性格なら、そう言うだろうな。

「でも、私が止めたんです。もしそんな事をしたら、馬騰さんまで

一緒に狙われてしまいますから」

「だろうな。けど、よく連合軍不参加で、袁紹から何も言われなかったな」

「それは、羌族の人達にちょっと手伝っていたいただきましたから。異民族の侵入があった、となればそれを防ぐのが西涼太守の役目ですから」

「なるほど。で、袁紹は裏がある事も気付かなかった、と」

「ええ、まあ……」

月は曖昧に笑う。

……ぶっちゃけバカだしな、ありや。

「だから、家族みたいな付き合い方をしているんです、私達。その関係は今でも変わりません」

「でも、食材の話はまた別だね？」

あ、それはあたしが話の腰を折ったからだ。

「紅蓮、そうだったな、悪い。月、あたしもその理由は聞きたいんだけど」

「はい。この大陸の人々は、周辺の民族が侵攻してくる事を恐れています、彼らもただ攻めてくる訳じゃないんです」

「どういう事？」

「私達は農耕を基本としていますが、周辺の民族は基本的に狩猟か遊牧で生活しています。食糧がある程度計画的に手に入る私達と違い、彼らはいつでも充足できる訳じゃない。だから、足りなくなると、食糧を求めてやって来るんです」

ん？

ふと、あたしは疑問を持った。

「ちょっと待った。だったら、何も攻めてこなくてもいいんじゃないのか？」

「どうしてでしょうか？」

月は、首を傾げる。

「だってさ。食糧が足りなければ、買うなり交換すればいい訳だろ

？ 攻めてくれば犠牲だって出る訳だし」

「それは無理だと思います」

「無理なのか？」

「はい。まず、私達が使っている通貨は、彼らの国では使えませんが、流通していません」

「なら、外貨として使えないのか？」

「そもそも、貨幣という概念がありませんから。綾子さんの国では、それが可能なんですか？」

「ああ。世界中のあらゆる、とはいかないけど、それでも大きな国とか、周辺の国だったら、一定の比率で両替が出来るんだよ」

「そうなんですか。もし、それだったら少しは話が違いかも知れません。でも」

と、月は言葉を濁す。

「どうしたんだ？」

「……はい。一番の違いは、民族性です」

「民族性、か」

「そうです。彼らは先ほども言った通り、狩猟か遊牧が生業です。つまり、足りなくなれば……相手から奪います。力尽くで」

「……………」

「生きるためには、他者を殺す事を厭いません。……それに、そういう民族性なので、どうしても攻撃的になります」

「じゃあ、今後も異民族との争いは絶えない……そういう事か」

「ええ。羌族は比較的私達に近い事もあって、多少の農耕は営みますし、お付き合いもできるんです。……やっと、最初の質問にお答えできますね。この西涼に物資が豊富なのは、ここが交易の中継点だからです」

「という事は、当然西からもやって来るのか？」

「そうです、そうでなければ交易は成り立ちませんから」

「そうか。シルクロードだな」

「しるくろーど？」

二人は、首を傾げている。

「あ、悪い悪い。絹の道、って言えばわかるか？」

「ああ、それでしたら。よくご存じですね」

「ごめん、ボクは知らないや。名前からすると、絹の交易をするための街道みたいだけど」

紅蓮の質問に、月は頷いて、

「そうですね。もちろん絹だけじゃなく、いろんな物がこの道を通ってやり取りされているんです」

「ふーん。どこまでつながっているの？」

「私も詳しい事は……。綾子さん、ご存じですか？」

「え？ う、うーん、確か地中海までつながっていた筈だったけど……」

「地中海？」

うー、地図がないと説明しづらい。

それに、地中海って言っても通じないとか、時代が違うとは言え不便だ。

「とりあえず、ずっと遙か西にある海さ。確か、ローマ帝国が支配……している筈」

「きつと、何年もかかるんだろうね。でも、行ってみたいな」

テレビか何かで、あそこを縦断するバスツアーが開催されていた、って聞いた事がある。

確か、距離が一万四千キロ、バスで五十五日かかる……そんな事を言っていたな。

単純に人間の足の十倍で移動できるんだとしたら……ほぼ二年がかりか、うへー。

「そうですね。この大陸が平和になったら……いつかは」

「うん。そうだよ、そうしよう」

シルクロードの旅か。

……それもいいな、なんか。

「月。準備はどう？」

と、詠が顔を覗かせた。

「うん。だいたい出来たかな」

……話しながらも、しっかりと手を止めなかったのは凄いと思うぜ、実際。

そして、一刻程かけて、近くの丘へ。

丘と言っても、遮る物が何もないので、ちょっとした山にも見える。

「おう、こりゃ確かに絶景だ」

地域柄、緑豊かな、とまでは行かないけど、地平線まで見通せそうな場所だった。

「ここは、一旦戦になると要衝になるけどね。見ての通り、これ以上の見張り場所はないからね」

「詠ちゃん、今はぴくにつくだよ?」

「わ、わかってるって。ただ、綾子や紅蓮は初めてだろうから、一応教えてあげただけよ」

「まあまあ、今日ぐらい気楽にしたらどや?」

「そうだぞ、詠」

「うう、霞はともかく、華雄にまで言われるとは。凹むわ」
何気に酷い事をさらっと言うな、詠。

が、当の華雄は平然としていたりするけどさ。

「綾子様、このあたりでどうかな?」

「ああ、いいんじゃないか」

「うん、じゃあ広げるね」
バサッ。

持参した大きな布を、紅蓮と二人で、地面に広げる。
ビニールシートならいいんだけど、そんなモンはないし。
そして、弁当を並べていく。

「うわー、めっちゃ豪華やん。これ、全部月らが?」

「ええ。私は少しだけで、ほとんどは綾子さんと紅蓮さんが謙遜するけど、凝った物は全部月がやったんだよな。」

あたしは、大量生産向きのモンばっかだし。

「それじゃ、いただきます」

「ちよい待ち。乾杯はせえへんのか？」

こんな感じで、賑やかなピクニックが、始まった。

「はい、どうぞ」

「おっとつと。じゃ、返杯な」

酒を酌み交わしながら、弁当はいいペースで平らげられていく。

「綾子。この俵みたいなのは何？」

「ああ、それはハンバーグ。名前は言い直しようがないから、そのままで呼んでくれ」

「はんばーぐ、ね。変わった味だけど、そこそこ美味しいわ」

「何意地張ってるのだ、詠？　これは、かなり美味いぞ？」

華雄は、よほど気に入ったらしく、もう三個目に手を伸ばしている。

「豚挽肉を、卵とか刻んだタマネギとかと混ぜて、こねながら形を整えた料理さ」

「ふむ、これも綾子の国の料理、か？」

「まあ、そうなるかな。もともとは、もっと西の国から伝わってきたらしいけど」

これでパンがあれば、挟んでハンバーガーにも出来るんだけどな。でも、小麦粉はあってもドライイーストがないから無理だし。

「綾子。これ、何ちゅう食い物や？　めっちゃ、酒に合うなあ」

一方の霞、食べてもいるがやっぱり酒がメインになってる。

で、さっきから箸で摘んでは、堪能しているもの。

「ああ、金平ゴボウだな」

「金平ゴボウ？　ゴボウはわかるんやけど」

「繊切りにしたゴボウを、砂糖と酒、醬ひしおなんかで炒めたものさ。お

かずにもいいんだぜ？」

「ま、ウチは酒の肴にちょうどええし。また、ぎょうさん作ったもんやな、しかし」

霞の言う通り、一つの重にぎっしりと、金平ゴボウが詰まっている。

……あたしの場合、量を多く作れば作る程味が良くなる、という妙な傾向がある。

料理が嫌いな訳でも苦手な訳でもないんだけど、これだけは謎のまままだ。

ともあれ、料理は至って好評で、作った甲斐はあった、かな？

「風が気持ちいいね」

唯一と言ってもいいぐらいの高台のせいか、風が常に通っている。アルコールで火照った身体には、確かに心地いいかも。

僅かな草地の上に、足を投げ出した格好でいると、月と紅蓮も真似をした。

上品な印象のある月だけど、決してお高く止まっている訳じゃない。

むしろ、時折見せる気さくな姿の方が、本来なんだろう。

「綾子さん。さっきのお話ですけど」

「さっき？」

「はい。城の台所でお話していた事です」

「ああ。絹の道を辿る、って話か？」

「そうです。綾子さんも、行かれた事はないんですよね？」

「ない。つか、自分の国から出た事がそもそも、なかったしな」

「そうなんですか？ ちょっと、意外ですね」

その言葉に、紅蓮も頷いている。

「綾子様、あまりにも馴染んでいるからさ。それに、ボクなんか知らない世界を、たくさん知っていそうだから」

「あたしのは、あくまでも聞いたり読んだりした話ばかりさ。あた

しだって、まだまだ知らない事だらけだし」

「じゃあ、本当に行きましようね、絹の道へ。ね、詠ちゃん、華雄さん、霞さん？」

いつの間にか、三人もそばにやって来ていた。

「ボクは、月が行くのならどこへでもついていく。たとえば、何年かかろうともね」

「せやなあ。ウチは酒が飲めて、強い奴と戦えるんやったら」

「私は、月を守るまでだ。そして、武人としての己を磨く。旅が、それに適うというのなら、喜んでどこへでも参る」

三者三様だけど、全員賛成、って訳か。

「だから綾子さん、紅蓮さん。きつと、無事でいて下さい……。大陸が、平和になるまで」

そう言って、月はあたしの手を握った。

「どうかしたのか？ 急に、何か変だぞ？」

すると、紅蓮を除く全員が、目を伏せた。

「綾子さん、ごめんなさい。実は私達、このまま西涼に残ります」

「へ？ どういう事だ？」

「実は、使者に赴くのももちろん目的ではあったんですが、もう一つ、雪蓮さんが私達に命じられた事があったんです。それが、西涼に私達を預ける事です」

「綾子もわかっていると思うけど、月、いえ、董卓が殺された事については、まだ諸侯の間で疑念が残っているの。だから、関わりがあると思われる孫呉には、曹操などの細作が随分と入り込んでいるわ。もちろん、明命や思春が始末しているんだけど、完全に、という訳にもいかない訳よ」

詠はそう言って、メガネをクイクイ、と持ち上げる。

「もともと、霞の事がなかったとしても、ボク達はこのまま、西涼に、という事だったわ。だから霞も、ボク達と一緒にいて貰う事にしたの」

「……そうか。けど、その方がいいよな」

「うちも、月とも、綾子達とも敵にはなりとうない。せやから、ど
のみちこの方法しかあらへんちゅう訳や」

そうか、それでピクニックを、なんて言い出したのか。

……寂しくなるけど、月達の事を考えれば仕方ない、か。

「わかった。あたしは、絶対に死なない。紅蓮も死なせはしない」

「ボクは大丈夫だよ。むしろ、綾子様を守ってみせるよ」

「きつとですよ、お二人とも」

「なら、約束をしよう。月、こんな風に小指を出して」

あたしは、手本を見せた。

「はい。これでいいですか？」

「ああ」

そして、小指を絡ませる。

「あたしの真似をして、続けてくれ。いいか？」

「ええと、はい」

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲まゝす。指切った！」

そう、指切り。

ベタベタだけどな……。

「綾子さん、これは？」

「あたしの国で、約束を守る時にする儀式みたいなモンさ。本当に
針千本飲む訳じゃないけど、そのぐらいの気持ちで約束する、って
事で」

「……はい。では、信じます。綾子さんとの、約束を」

もう、呉に戻る日も近そうだな。

〽四十九〽（後書き）

新規作品についてのアンケートは締め切らせていただきます。
ご協力ありがとうございました。

ゝ五十ゝ（前書き）

何のかんので、五十話に到達しました。
あと二十話ほどで完結となる予定です。
今しばらく、お付き合いいただければ幸いです。

（五十）

「それじゃ、またな」

「こっちこそな」

忙しい中、翠は城門まで見送りに来てくれた。

がっちりと握手を交わす。

「月達も、達者でな。また行こうぜ、ピクニックに」

「ええ、必ず」

「アンタが無事でいないと、月が悲しむから。絶対、約束は守りなさいよ？」

「美綴。私も、もっと精進するつもりだ。次に会ったら、手合わせを頼む」

「ウチかて、あないな消化不良のまんまやなんて、認めへんで。後、酒もまた飲もうな、絶対やで？」

あたしは一人一人と、互いに頷き合った。

「たんぽぽ。いいか、くれぐれも母様やあたしに恥をかかせるなよ」

「もう、お姉様ってば心配し過ぎだよ。たんぽぽだって、そこまで子供じゃないんだから」

「本当はあたし自身が行きたかったけど、そうもいかないしな。綾子、たんぽぽを頼んだぞ」

「ああ、任されよう。翠も、月達を頼んだ」

短い間だったけど、翠とは確かな友情が出来た、あたしはそう思っている。

がさつなところはあるけど、根は真っ直ぐだし、性格もさっぱりしている。

……似たもの同士なのかもね、あたし達って。

帰りは、まず天水郡を目指す。

メンツは入れ替わっているが、もう華琳の目をごまかす必要もな

いだろう。

「この鞍と鐙って、便利だね。綾子姉さま」

蒲公英の馬にも装備させてみたが、本人からはかなり好評だった。ちなみに、翠にも見せて、秘かに生産を始めて貰っていたりする。この時代、馬そのものが高価な事もあるけど、とにかく乗りこなす事が難しい。

つか、普通に無理。

あたし自身は、持ち前の運動神経で何とかしたけど、かなり練習をしないと、自在に操るのが相当にキツイ。

かなりあやふやな知識を元にしたんだけど、そこは職人の頑張りと工夫で実現。

「使えそうか？」

「いいと思うよ、かなり。ね、紅蓮」

「そうだね、やっぱり凄いよ。姉さんは」

西涼を出る前、紅蓮と蒲公英がまた、喧嘩しそうになった。

原因は、あたしの呼び方。

面倒になったので、紅蓮も好きに呼んでいい、って言ったら『姉さん』になった。

……それは構わないんだが、紅蓮が妙に上機嫌と言うか。

いいんだけど、戻ってからおかしな火種にならないでくれよ……

二人とも。

「そう言えば、長安ってよく聞くけど一度も行ってないな。どんな街なんだ？」

あたしの世界じゃ、何度となく出てくる名前だ。

この後出来る隋とか唐でも都になったし、あたしの時代でも西安、という名前で残っている。

蒲公英は、顎に指を当てて、少し考えてから、

「昔の都だよ。今は、何もないかなあ」

「何もない？ でも、以前とはいえ都だった場所だろ？」

「そうだけど。でも、昔の戦乱で略奪にあって荒れ果てたまま、って聞いたけど」

「……じゃあ、誰も住んでいないのか？」

あたしの質問に、紅蓮が答えてくれた。

「ううん、人は住んでいるよ。でも、洛陽どころか、西涼とか会稽よりもずっと少ないかな」

「……………」

「ボクも書物で読んだぐらいだけど、今の朝廷が成立する前、別の国が都にしていたんだ。でも、争いが起こって攻め込まれて、その時に跡形もないぐらいに略奪されたって話さ」

人が住めなくなるほどの、略奪か。

……以前、祭さんに叱られながら見た、あの村の光景が脳裏を過ぎった。

「なあ。長安に立ち寄ったら、遠回りになるか？」

あたしの言葉に、二人は顔を見合わせる。

「ちよっと遠回りになるかなあ。でも」

「わかってるよ、蒲公英。行っても何もない、だろ？」

「うん。何もない、という事は……」

治安も悪い、という事か。

「それでも、見ておきたいんだ。あまり寄り道をする時間がないのはわかってるんだけど」

「……姉さん。止めておこう、それは」

いつになく、硬い表情の紅蓮。

「一度だけ、行った事があるんだ。ボクは」

「なら、地理不案内じゃない、って事か」

「そうだね。でも、見るべき物は何もない。それに、危険だからね」「わかってる」

「いや、わかってないよ。姉さんは、もう一人だけの身体じゃないんだし。それに、月さんとの約束、忘れた訳じゃないでしょ？」

「紅蓮の言う通りだよ、綾子お姉さん。お姉様との再会の約束もある」

るんだよ？」

二人は、本気であたしを心配してくれている。

……これ以上は、我が儘だよな。

「……そうだな、今回は止めておこう。雪蓮にも、報告しなけりゃいけないしな」

紅蓮は、ホッとしたように表情を緩める。

「そうだよ。また、機会はあるしね、きっと」

ゴロゴロ。

なんか、空模様が怪しくなってきたな。

「たんぽぽ。泊まれそうな村とかは、まだ先か？」

「うん。急いでも、まだ半刻はかかるかも」
ポツ、ポツ。

そのうちに、雨が降り出した。

小雨なら構わないんだけど、結構な降りだ。

「こりゃたまらん。どっか、雨宿り出来ないか？」

「姉さん、あそこに木立が」

紅蓮が声を上げた。

「とりあえず、あそこへ駆け込もう。ホントにずぶ濡れになっちゃう」
う」

「うん！」

「了解！」

あたし達が駆け込んですぐに、
ピカッ！

あたり一面が光り、
ゴロゴロッ！

近くに落雷したらしいな。

「綾子姉さま、あれ！」

「ん？ お、ありがたいな。あそこまで、急ぐぞ！」

小さな洞窟だけど、あたし達と馬が入るのならどうにかなりそう
だ。

ザーツ。

うへー、土砂降りだな、こりゃ。

「紅蓮。手拭いを出してくれ」

「うん。蒲公英の分もあるよ」

「ありがとう。それにしても、凄い降りだね」

上着は完全にずぶ濡れ、ズボンも凄い事になっている。

「いやいや、参ったなこれ。すぐには止みそうにもないし」

「とりあえず、火を起こすね。馬は、火を怖がるから外につないで
くるから」

「なら、火はボクが。馬をお願い」

「うん、いいよ」

何やかんや言いながら、結構息が合ってるな、このコンビ。

「けど、この雨だろ？ 薪なんて用意できるか？」

木立だから枝は落ちているかも知れないけど、全部濡れていそう
だし。

「大丈夫。濡れないように油紙でくるんだ薪があるんだ。こんな時
のためにね」

「ホント、何でも持ってるな。紅蓮って」

「旅をする事が多かったからね。慣れているだけだよ」

そう言いながらも、照れているようだけど。

「後は、この火打ち石で」

カチカチ、カチカチ。

焚き付け用の紙が、じきに燃え始めた。

「ふうー、本当に凄い雨だね」

「ご苦労さん。また、濡れちまったな」

水を滴らせているたんぽぽの髪を、拭いてやる。

「綾子姉さま？」

「いいから、このぐらいさせてくれ。な？」

「う、うん……」

「姉さん。ボクには……？」

う、紅蓮がいじけている。

「わかったわかった。ホラ」

半ば自棄気味に、紅蓮の髪も拭いてやった。
全く、こいつらは……。

パチパチ。

たき火を前に、あたし達は身を寄せ合う。

こうでもしていないと、寒くて仕方がない。

「静かだね」

「ああ。二人とも、寒くないか？」

「ボクは、平気かな。姉さんが、暖かいから」

「たんぽぽも」

薄手の着物と、替えの下着だけの格好。

……この場に、男がいないからいいけど、でなきゃ恥ずかしくて
見せられたモンじゃない。

「……懐かしいな、何だか」

紅蓮が、何気なく呟いた言葉。

「ん？」

「昔ね、父さんと旅をした時にも、こうしてたき火に当たっていた
事があったから。それを思い出して、ね」

「紅蓮、お父様もお母様も……だっけ？」

「……うん。たんぽぽは？」

紅蓮の問いに、たんぽぽは寂しげに笑う。

「たんぽぽも、お父様もお母様もいないんだ。だから、馬騰のおば
さまに娘みたいに育てて貰って」

「……じゃあ、ボクとあまり変わらないんだね」

「……でもね、馬騰のおばさまも、翠お姉様も、本当の娘とか妹み

たいにしてくれるから。だから、寂しくはないの」

「そう。……ボクには」

と、紅蓮があたしを見る。

「姉さんが、いてくれるから」

……そうだな。

あたしと大して年は変わらないはずなのに、こうして生きるのに必死で。

家族の愛情もないし、恋愛にも縁がないなんて。

……そういう時代とは言え、辛いよな……。

パチパチ。

たき火の音が、やけにこだまする。

あたしはそっと、二人の肩を抱く。

「姉さん？」

「綾子姉さま？」

「今日は、こうして休もうぜ。な？」

「……そうだね」

「えへへー。やっぱり、綾子姉さまって、素敵だな」

まあ、今日ぐらいいは甘えさせてやろう。

……あたしなんかより、ずっとたくましく生きざるを得ない二人が、ほんの一時でも休まるのならな。

「……ん？」

目が覚めた。

どのぐらい、眠っていたんだろう？

気がつくと、紅蓮の外套がかけられていた。

その紅蓮も、蒲公英の姿も見えない。

どこ行ったんだ、あいつら？

あたしは起き上がり、洞窟の外へ。

あれだけ降っていた雨も、すっかり止んでいた。

ブルルル。

「そういや、こいつらは外につないでいたんだったな。」

「おお、よしよし。冷たい思いをさせて悪かったな。街に寄ったら、ニンジンでも奢るよ」

鼻を撫でると、馬はすり寄ってくる。

「あ、綾子姉さま。目が覚めた？」

背後から、蒲公英の声がした。

「ああ。目が覚めたらいないから、どうしたのかな、と思ってさ」

「これ、獲りに行っていたから」

手にしていたのは、数匹の魚。

「蒲公英、こんな物でいいかな？ あ、姉さん。おはよう」

紅蓮も、キノコやら野草を手に、戻ってきた。

魚は串に刺して火で炙り、キノコと野草は小鍋に入れて干飯と一緒に煮込む。

味噌があれば美味い鍋になるんだけど、味噌は岩塩だけ。

煮立ってきてから、紅蓮とあたしで味見。

「どうかな？」

「……ん。ま、こんなモンだろ」

こっちの世界に来て思ったけど、味噌は思っていたよりも薄い。塩や砂糖が貴重品というのものもあるんだろうけど、とにかく調味料を使わないってのに驚いた。

……つか、使わないってよりもない、って方が正確なんだけどさ。

味噌はもちろん、味噌も鰹節も昆布もない。

当然、味〇素とかほん〇しなんてある訳もない。

いい加減慣れたけど、いかに元の時代が、塩分とりまくりだったかを痛感する、

「こっちも焼けたよ」

昨夜があんな調子だったんで、ロクに何も食えなかったからな。

勿論、元の時代みたいな飽食は期待できないけど、今はこれでも十分だ。

「じゃ、いただくか」

「そうだね」

「あ、ちよつと待った。……明命、出てきていいぞ。一緒に食おうぜ？」

シュタツ。

あたしの呼びかけに、姿を現す明命。

「はあ、また見つかってしまいました。綾子お姉さまには、一生敵いそうにないです」

……あれ、二人とも固まってるぞ？

「姉さん、いつから気付いていたの……？」

「ん？ ついさっきかな？ だって、着いたばかりだろ？」

「はい。……あ、私は周泰、字を幼平と申します」

「……あ、そ、そうだね。たんぽぽは馬岱だよ」

うーん、ぎこちないな。

「ところで明命。わざわざこんな場所までどうした？」

「はい。劉表との戦が始まりました、至急、綾子お姉さまにお伝えするようにと、雪蓮さまから」

来るべきものが来たのかな……。

「となると、あたしは急いで戻るべきだろうな」

「はい。……食事を済ませたら、発ちましょう」

あたしの知る歴史はない、劉表との直接対決。

今の孫呉が後れを取るとは思わないけど、一刻も早く、戻った方がよさそうだ。

待っていてくれよ、雪蓮。

ゝ五十ゝ（後書き）

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

ゝ五十一ゝ（前書き）

拠点パート的な話になります。

あと、章タイトルを変更しました、内容にあってなかったの……。
次話から次章へと進みます。

（五十一）

急ぎに急いで、あたし達は廬江まで戻った。

本拠地は建業へと移っていたけど、劉表との戦にあたり、ここが前線となっているからだ。

北方の劉備が動く可能性は低いけど、備えを怠る訳にもいかない。なので、霰と亞莎はそのまま、広陵に止まっている……明命からそう聞かされた。

「廬江か……。ここは、あたしは初めてだな」

「ここか、柴桑が孫呉の支配域では南にあたるからね。姉さんは、どちらかと言えば北の方ばかり動いていたから無理もないよ」

「綾子お姉さま。ところで、紅蓮と馬岱さんですが……どういう事なのでしょう？」

明命が、目をウルウルさせている。

「え？ どうって？」

「ですから、紅蓮は呼び方が変わっていますし、馬岱さんに至っては……私と同じですよね？」

あ、そういう事か。

……ちゃんと言っておかないと、本気で落ち込みかねないからな、この娘。

「紅蓮は知っての通り、家族がいない。普段はああ見えても、それが心細い事もあるのさ。それは、蒲公英も同じなんだ」

「……………」

「あたしは、親代わりなんて大層な真似は出来ない。けど、姉代わりでいいのなら。それで、気が休まるのなら、あたしは厭わないさ」

「ですが、私も……」

あたしは、明命の頭に手をやる。

「綾子……お姉さま」

「明命。あたしは、認めた奴を差別するような事はしないよ。だから」

ら、明命も今まで通りさ」

わしわしと、髪の毛を撫でる。

……理由はわからんけど、あたしがこうすると相手は何故か、

「はにゃ〜……。幸せですう」

……となる次第だったりする。

あたしの手は、江原〇之か？

「もう気にするなよ。いいな？」

「は、はい！ 申し訳ありませんでした、綾子お姉さま」

……背後から、チクチクと視線が刺さってくるな、うん。

「さ、行くぞ。廬江まであとちよつとだろ？」

そう言って、馬を駆けさせた。

「あ、待ってよ〜」

「はうあつ、綾子お姉さまっ！」

「姉さん、ちょ、ちよつと！」

慌てて、三人は後を追ってくる。

……他の娘らにも、後でちゃんと話さないとな。

「お帰りなさい。あと、お疲れ様」

廬江城には、雪蓮が出張っていた。

冥琳に祭さん、それから……。

「『綾子軍団』もちゃんと揃っているわよ」

「……何だよ、それ？」

「そうではないか、綾子。あれだけの顔ぶれが従えば、お前も立派に諸侯が務まるぞ？」

冥琳まで、ニヤニヤして言うか。

「その連中は、どうしてるんだ？」

「ああ。調練や徴兵、糧秣の手配を手分けして貰っている。戦ともなれば、人手が足りんからな」

「そうか」

後で、顔を合わせるんだし、まずは報告からだな。

「まず、馬騰との結盟は成った。後、騎馬隊の調練には、馬岱に来て貰った」

「初めまして、馬岱です」

「よろしく。どうせ綾子の事だから、真名、交換したんでしょ？」

「……なんでわかるんだよ。雪蓮？」

あたしが言うのと、雪蓮はおかしそうに笑う。

「だって、こんな娘ですもの。綾子が懐かれない訳ないじゃない」

「何だよそれ」

「はっはっは。良いではないか、お主の特技であろう？ 年下の娘に好かれるのは」

いや祭さん、そう言いながらあたしの肩をバシバシ叩かないで下さい。

「だから、わたしの事も雪蓮でいいわ。あなたも、真名で呼んでいい？ あ、口調も普段のでもいいわ、敬語が不自然だからね」

流石は雪蓮、見抜いていたらしい。

蒲公英は、苦笑しながら、

「うん！ たんぽぽだよ、よろしくね♪」

「私も冥琳で構わん」

「ならば、儂も祭で良いぞ」

「……いいのかよ、みんなして」

ちよっと呆れながら言うと、

「綾子が認めた相手ならば、私は問題ないと思うが？」

「儂も同感じゃ。それとも、何か不服か？」

当然のような顔をされた。

……それだけ、信頼してくれてるんだろう。

そう、受け取っておこう。

真名はそれだけ重いものの、の筈なんだけど……孫呉の人々は、一旦仲間と認めたら後はとことん、仲良し。

それは、あたしがずっと感じている事でもある。

「雪蓮。そう言えば、蓮華達の姿が見えないけど」

「そうよ。だって、建業へ本拠地を移転している最中でしょ？ 蓮華と小蓮には、そっちに専念して貰ってるわ。穂と千花、思春、刃霧もそっちにいるわ」「……戦だつてのに、余裕だねえ」

半ば呆れながら言うと、冥琳が窘めるように言った。

「それは違うぞ、綾子。本拠地の移転も大事業だ。揚州もまだまだ完全に呉の支配下に入ったとは言えないが、本拠が定まらずに国造りどころではなからう？」

「それに、劉表ごとき、あやつらがおらんでも問題ないわ。策殿に公瑾、儂。更に綾子達まで揃っておるのじゃ。これで敗れるようでは、呉の未来などあり得るわい」

「本当なら、荊州に詳しい思春にもいて欲しかったんだけどね。あの娘、蓮華が第一だしね」

……だよな。

あたしごときが心配しなくても、ちゃんとその辺は考慮の上だったな。

「そういう訳で、今日はゆっくり休んで。軍議は明日開くから」

「いいのか？ あたしは別に構わないんだぞ？」

「どのみち、他の皆も今日は落ち着かないし。問題ないわよ」

そうは言うけど、雪蓮達があたしに気を遣ってくれているんだろうな。

……ここは、甘えておくか。

「なら、そうするよ。何かあったら、呼んでくれ」

「ええ、そうね。本当は、お酒でも、と行きたいんだけど」

「雪蓮。言わずとも、わかってるだろうな？」

すかさず、冥琳の低い声が飛んでくる。

「あはは、わかってるってば。じゃ綾子、また明日ね」

「蒲公英には、部屋を用意してあるぞ。どれ、儂が案内しよう」

「うん、ありがとう♪」

祭さんと蒲公英が出て行く。

「姉さん。ボク達も」

「そうだな……って、この城初めてじゃないか？」

「ちゃんと案内させるわよ」

とにかく、一旦落ち着こう。

部屋に戻ったあたし。

荷物を部屋の隅に置くと、そのままベッドにダイブ。

……今回も、いろいろとあったなあ。

かなりの長旅だったし、出会いもあった。

ふああ、何だか眠くなってきたな。

ちよつとだけ、仮眠しようかな……。

……何か、妙に暖かいな。

夢にしちゃ、妙にリアル……ん？

目を開けると、

「……起きた？」

恋がいた。

「……何やってんだ、一体？」

「……寝てた。綾子、気持ちよさそうだった」

「寝てたって……」

少し身体を起こすと、ベッドの上は凄い事になっていた。

セキトを初め、恋のペットというか家族がいて。

おまけに、どっから集まったのか、大量の猫。

そして、ねねまで一緒に丸くなっている。

……ムツゴ○ウさんもびっくりの光景だね、これ。

「いつから寝ていたんだ？」

「……ずっと前。もう、夜」

夜？

仮眠のつもりが、完全に爆睡していたな、こりゃ。

ぐうぐう。

と、盛大な音がする。

「……お腹空いた」

「ははは、恋らしいな。じゃ、飯食いに行くか」

「……（コクツ）」

あたしも、腹が減ったしな。

台所に行ってみたが、食事の時間が過ぎていたせいか、人気がなかった。

つまり、すぐに食べられそうな物はない、と。

……仕方がない、何か作りますかね。

幸い、竈の火はまだいくらか残っているみたいだし。

材料は……えーと。

「綾子様、お帰りなさいませ」

と、菖蒲がやって来た。

「ああ、ただいま」

「ところで、どうかなさいましたか。こんな時間に？」

「いや、寝ていたら晩飯食いそびれちゃて。何か作ろうかな、って」

「そうでしたか。では、私もお手伝いします」

「そいつは助かるな。とりあえず、材料も揃えたいんだけど……。」

手早く作りたいから、炒飯にしようかな」

「わかりました。ちよつと、集めてきますね」

菖蒲の奴、嬉しそうだな。

「おー、お姉さん。ご無沙汰なのです」

「主。ご無事で何よりでしたな」

台所を出て行った菖蒲と入れ替わりに、風と星が姿を見せる。

「今、菖蒲ちゃんが出て行きましたが、何かありましたかー？」

「晩飯をこれから作るんで、材料を集めるように頼んだんだ」

「そうでしたかー。星ちゃん、でしたら先ほどの物を、お姉さんに差し上げたらどうでしょうかー？」

「む。これか……主の為だ、そうしよう」

と、星は手にしていた包みを、あたしに差し出した。

「これは？」

「はっ。酒の肴に、と思っていた叉焼とメンマです」

「いいのか？ 特にメンマなんて、星の好物だろうに」

「はっはっは、ご案じめさるな。まだまだ、取り置きはございますよ」

……だよな、星がメンマを切らすなんて想像もつかない。

「綾子様。とりあえず、卵と野菜をいくつか、お持ちしました」

「お、サンキュー」

「さんきゅー、とは？ お姉さんの国の言葉でしょうか？」

あ、風が反応した。

理由はわからんけど、何故かカタカナ語とか横文字に、よく食いつくよなあ。

「ありがとう、って意味なんだけどさ」

「ふむふむ。さんきゅー、と」

「……って、何竹簡に書き付けてるんだ？」

「いえいえ。ただのめもですから気にしないで欲しいですよ」

メモって……まあ、それもあたしが根源か。

ぐうううう。

また、恋の腹が盛大に鳴る。

「綾子殿。恋殿を飢え死にさせてしまうおつもりですか！」

ついてきたねねが、ガーッと手を上げてまくし立てている。

迫力はないんだけど、あれでも責め立てているつもり……なんだろうねえ。

「とりあえず、これでいいか」

米は炊くまでもなく、冷や飯が釜の中に残っていた。

さて、作りますかね。

……っても、材料を刻んで、中華鍋で混ぜながら炒めるだけなんだけどな。

時間があれば餡掛けにしたいところだけど、あたしもさっさと食べたいから今日はやめとこ。

「綾子様。野菜を刻めばいいですか？」

「お、頼む」

「主。私も手伝いましょうぞ」

「むー。風だけ見ているというのも、何だか仲間はずれみたいで口惜しいのです」

「どうやら、みんな手伝ってくれるらしい。」

「恋殿。しばしの辛抱ですぞ」

「……（コクッ）」

「ま、あの二人は置いておこう。」

「さ、出来たぞ」

「……綾子様。一体、何十人分ですか……これ？」

「菖蒲が呆れたように言う。」

「残った冷や飯というにはちょっと量が多いなあ、とは思っていたけど。」

「でも、これでも多すぎる訳もないんだな、これが。」

「お待ちませ、恋。たくさん食ってくれ」

「大皿に、炒飯を山盛りにして盛りつける。」

「……ん。いただきます」

「もきゅもきゅと、恋が食べ始める。」

「どうだ？」

「……美味しい。とっても」

「無表情に見えて、微妙に笑顔になっている。」

「だろ？　じゃ、あたしも食べますかね。ねねもどうだ？」

「せっかくだから、いただくのです」

「よし」

「普通の皿に、二人分を盛りつける。」

「んじゃ、いただきますか」

「はい、いただきますなのです」

レンゲで一口、食べてみる。

うん、塩こしょうも上手いぐあいに利いているし、具に入れたチヤーシューとメンマもいいな。

「むむ、これはなかなか侮れませんぞ」

「我ながらなかなかいいできたな、うん」

……と、それを見ていた三人も、

「綾子様。私も、ご相伴にあずかってよろしいでしょうか？」

「私も、少しいただきたいですな」

「風も食べたいのです」

よほど、美味そうに見えたんだろうな。

「ああ、たくさんあるから。皆で食おうぜ」

そして。

「ふうん、これは美味しいわね」

「ふむ。儂も料理はするが、これはなかなかじゃな」

「うむ、やるではないか。綾子」

……何故か、雪蓮達まで食べに来ていたりする。

「綾子姉さま、おかわり貰うね♪」

「ちょ、ちよっとたんぽぽ！ 私の分も下さいよ」

「二人とも落ち着きなよ。姉さん、ボクもいいよね？」

そして、一緒に戻ってきた三人まで。

……しかし、戦の最前線とは思えない緊張感のなさだ。
ま、いつか。

ゝ五十一ゝ（後書き）

ご意見、ご感想がありましたらお気軽にどうぞ。

ゝ五十二ゝ（前書き）

なかなか出てこなかったあのキャラ、やっと登場です。

（五十二）

翌日。

予定通り、軍議が開かれた。

……あたしの席が、何故か雪蓮の次なんだけど、理由は教えてくれなかった。

後でわかるから、だそうだけど。

「江夏から江陵、こちらは雪蓮が指揮を。将には祭殿、星、紅蓮、菖蒲をつける。軍師は風に任せる」

「あら、将を入れ替えるのね」

「それもある。だが敵も主力はこちらに置くだろう。雪蓮がいれば、敵の目はそこに向くからな」

「了解。なら、もう一隊は？」

「うむ。寿春を出て新野を通り、北から侵攻する」

と、冥琳はそこであたしを見る。

「そちらだが綾子、指揮を執って貰う。恋、明命、蒲公英が将を務める。軍師は私だ」

「いいっ？ あたしが？」

「そうだ。今までは多方面作戦もままならなかったが、将も増えた事だ。その実地試験の意味合いもあるが、綾子には経験を積んで欲しいからな」

「そ、そう言われても……務まるかねえ、あたしに」

一隊を預かるだけでも、部下についた人の命がかかるのに。

今度は数千、数万が対象だ。

ぶっちゃけ、桁が違い過ぎる。

……この席順も、そういう意味かよ。

「だからこそ、私が補佐に当たるのだ。それに、この顔触れには別の意図もある」

「別の意図？」

「そうだ。気付かんか？」

冥琳は、あたしを試しているようだ。

明命は斥候には欠かせないが、後は恋に蒲公英……？

「あ。もしかして」

「言ってみてくれ。別に誤りでも咎め立てはせんよ」

「……騎兵、だな？」

「正解だ、綾子。思春が言っていた通り、劉表軍も水軍が主力だ。南から攻め上がるにはそれでも良いが、今回は北からも攻める。となれば、機動力が鍵となるのは必然だ」

「なるほどな。けど、あたしは騎兵の扱いはわからないぜ？」

「だから蒲公英をつけるのだ。それに今回は、お前には原則、本陣にいて貰う」

そう言って、冥琳はチラ、と雪蓮を見る。

「雪蓮や祭殿では、そのような役割は無理だ。兵の先頭に立つ戦いしかせんからな」

「ぶー、冥琳、それはあんまりじゃない？」

「そうじゃ。それでは儂が猪武者のように聞こえるではないか」

「実際そうなのだから仕方ないでしょう？ 兵の士気を高めるという点では、それは有効だし、それが孫家の戦い方。でも、いつもそれでは困るのです」

「……ま、冥琳が考えた事ですもの。任せるわよ」

「ありがとう、雪蓮」

さてさて……。

これは大変な事になったな。

あたしは、単独とか少数行動ばかりしていたし、もともとが個人技メインだったから、いざ指揮を……なんてわかる訳もない。

菖蒲や紅蓮、刃霧みたいな後から加わった奴等とはかく、後は皆、将としての経験を積んでいるし、実績もある。

……あたしもサボっていた訳じゃないんだが、そういうのは雪蓮や蓮華、祭さんの役目だと割り切っていたから。

太守なんて不相応な役目が廻ってきた時でさえ、不安で仕方なかったのに。

……うゝ、胃が痛い。

「ま、綾子なら大丈夫よ。ね、冥琳？」

「そうだな。私がつく以上、無様な真似はさせんさ」

「ははは……。一応聞くけど、拒否権は……」

「ないわよ？」

「ないな」

あつさりと断言されてしまった。

ガックリと項垂れるあたしを余所に、軍議は粛々と進められていく。

「しかし、よく受けたな。お前達が」

軍議の後で、あたしは星達と庭で話をした。

「確かに、主と一時的に離れる事になりますが、戦う場が変わるだけ。それに、冥琳の意見にも一理ありますからな」

「風はどうなんだ？」

「そうですねー。雪蓮さまに献策するのも一興かと思ひまして。お姉さんとは違うやり方をするお方ですし、風の勉強にもなると思うのですよ」

実感はないけど、二人はあの趙雲と程イク。

本来なら、違う主君に仕えているんだし、どちらも歴史に名を残す程の活躍をする人材だ。

あたしがとやかく言う筋合いでもないし。

「菖蒲は？」

「はい。綾子様と別々というのは、確かに不安ですし、不本意です。ただ、冥琳様のお考えもわかります。……私も、独り立ちしなくてはいいけませんから」　しばらく見ない間に、随分と大人びてきた気がする。

最初の頃は、ホント、子供だったんだけどな……って、あたしや母親か。

「ボクも、姉さんが一緒だどついつい頼っちゃうから。でも、それじゃいけないからね」

紅蓮……それはあたしのセリフだ。

何でも出来て、あたしなんかから見れば完璧超人。

……そう思うと、この顔ぶれってのも。

「主こそ、斯様な大役。主ならば務まると思います。が、くれぐれも無理をなさいますよう」

「冥琳さんがついてますから、心配はしてませんがー。お姉さん、総大将は突出しないものですよ?」

「あのな。あたしはそこまで猪か?」

なんか、雪蓮達と同じような事を言われている気がするんだが。

「いえいえ、風のお節介ですよ。恋ちゃんや蒲公英ちゃんを上手く使って下さいね」

「わかってるよ。……菖蒲、紅蓮。あたし達はまだまだ勉強する事が山ほどあるんだ。頑張ろうぜ?」

「はい!」

「うん」

一同、頷き合った。

二人と分かれ、あたしは調練場へ。

お、やってるやつてる。

「恋。どう?」

「……ん。悪くない」

蒲公英と恋が、騎兵の動かし方を確認しているらしい。

「あ、綾子姉さま。恋姉さまに、試して貰っていたところだよ」

「……綾子。これ、便利」

見ると、恋の馬には、鞍と鎧が装備されている。

勿論、西涼で翠に見せた物と同じ。

「少なくとも、馬上の戦闘も、行軍もかなり違う筈だからな。問題は、数が揃うかどうか」

「それなら大丈夫だよ。冥琳お姉さんが、手を打ってくれているから」

「冥琳が？」

「うん！ 実物を見て、すぐにこれは至急作らせよう、って。たんぽぼ達が向かう方角の鍛冶屋に片っ端から発注したって」

あ、なるほど。

一ヶ所で作らせると、どんなに頑張ったとしても、作れる数には限りがある。

けど、複数の箇所が発注すれば、それだけ多くの数が揃うな。

それに、盧江から寿春までは距離があるから、軍が移動する間に日数がかかる。

製造にかけられる日数がそれだけあるなら、全軍は無理でも、ある程度なら何とかなるかも。

「そうか。後は蒲公英の調練次第って訳か。頼むぜ？」

「うん。任せてよ」

そんな蒲公英の頭を撫でていたら、

「……恋も頑張る」

何か言いたそうにしているんだが……。

「……もしかして、これ？」

空いた手で、ジェスチャーをすると、

「（コクッ）」

凶星か。

まあ、別にいいんだけど。

「恋も、頼りにしてるぞ」

ワシワシと撫でると、

「……ん。綾子、頑張れば、またいい？」

「撫でて欲しい、って事か？」

「（コクッ）」

「あー、恋姉さまばかりずるいよ。たんぽぽも！」

いや、ずるいも何もないんだが……。

「じゃ、約束してくれる？ 活躍したら、また撫でてくれるって」

「あ、ああ。いいぜ」

あたしがそう言うのと、蒲公英は満面の笑みを、恋は僅かに笑みを浮かべた。

恋の場合は、あまり感情を顔に出さないから……ありゃ、相当喜んでると見た。

「こらー、恋殿をたぶらかすなです！」

ありゃ、ねねまでやって来た。

「わかったわかった、お前さんもだな」

「ち、違うのです！ ねねは、恋殿が……」

「はいはい」

その頭を撫でると……一気に大人しくなる。

しかしまあ、あたしは理由はわからんけど、妙な特技がいろいろ出来ちゃったね。

「むむむ。こ、これは危険な……。し、しかし、恋殿が……はふう
効果絶大だし。」

「はうあつ、あ、綾子お姉さま。私も、頑張りますからっ！」

……明命にまで見つかри、あたしのナデナデ祭はしばらく続いた。
「何をしているのだ、綾子。それに皆まで？」

あたし以下、将が一人も見当たらず、自ら探しに来た冥琳に見つかるまで。

数日後。

五千の兵と共に、あたし達は寿春を目指して出発。

「いやー、壮観だね」

「このぐらいで驚いてどうする。これから綾子が率いるのは全軍で五万だ。もちろん、輜重隊も含むがな」

ふえ〜。

小さな市の人口ぐらいの人数が、あたしの指揮で動く訳か。そう聞くと、改めてとんでもない大任なんだろう。

「しつかりしろ。総大将がそれでどうする」

「そう言われてもな。だいたい、あたしはガラじゃないだろ？」

「フッ、そう思うか？　だがな綾子、少しは自分の立場を弁えた方がいい」

あたしの……立場？

「既にお前は我らの客将、と言う訳にもいかない。正式な將軍位を持つ者は、雪蓮以外にはお前だけだ。蓮華さまや小蓮さまでさえ、今の朝廷が続く限りは、綾子よりも下に置かれる」

「いや、あたしは別に……」

「そんなつもりはない、か？　綾子が立身出世を望まないのは、呉に身を置く者であれば皆承知している。だが、公の立場ではそれは通用せんのだ」

「……………」

「欲のなさは、お前の美德でもあるが、同時に欠点でもある。それに、綾子が一軍を率いて戦えるようになれば、孫呉としても願ったりかなったりだ」

「どうしてさ？」

「ふむ。雪蓮はあの通り、王として大人しく収まる性格ではない。だが、雪蓮はかねがね、平和を取り戻したら、蓮華さまに王の座を譲るつもりだ。蓮華さまは決して臆病な方ではないが、雪蓮のように先陣を切って領土を切り広げていくよりも、王として配下を使う方が向いておられる。そうなった時、全軍を誰が指揮するのだ？」

「それなら、祭さんがいるじゃないか」

「確かに祭殿は武に優れているだけではなく、数々の戦場を経験しておられる。だが、お歳を考えれば、いつまでも頼る訳にもいくまい？」

本人に聞かれたら激怒しそうだな。

……でもあの人、事あるごとに自分の事を老軀だ年寄りだ、って言ってるけど。

「それで、あたしが、って事か」

「そうだ。武は言うに及ばず、軍略の才もある。あれだけの猛者を従えるだけの人望があり、その上公の立場も申し分ない。私でなくとも、全軍の指揮を取るに足る存在と、誰もが認めざるを得ないさ」
いつの間にか、あたしもえらい事になってるな……。

「ま、最早逃れられん。覚悟を決めるのだな」

「……嬉しそうだな、冥琳？」

確かに、彼女は微笑んでいる。

「嬉しいさ。孫呉の未来を託すに値する人材が、次々に揃ってきているのだ。菖蒲も綾子と同じく育てる。アーシェは私の後継。これ
でいつでも……ゲホッ、ゲホッ」

急に、咳き込み始めた冥琳。

「どうした、風邪か？」

「そのようなものだ。何、気にする事はないぞ」
気にするな、っても……。

確かあたしが知る周瑜って、若くして病死した筈。
まさかとは思うけど、この冥琳も……。

「ん？　どうかしたか？」

「いや。本当に身体は大丈夫なんだな？」

「ふふ、妙に氣遣ってくれるではないか」

「当たり前だ。冥琳には、まだまだ楽はさせないし、させられない
ぜ？　あたしを鍛え上げて、雪蓮が望む平和を掴むんだろ？」

「そうだな。私の事が心配ならば、見事に私を使いこなすだけの将
になってくれ」

だけど、顔色が少し良くない気がするな、やっぱ。

医者に診て貰うべきか……けど、どんな医者ならいいんだ？

あたしがそんな事を考えていると、伝令が駆け込んで来た。

「申し上げます！　前方二里に、人が倒れているとの事」

「人が？ 賊に襲われたか？」

「いえ。争った形跡はなく、どうやら行き倒れらしいのですが」
「なんか、刃霧みたいなパターンだな。」

「冥琳。どう思う？」

「ふむ、このあたりは我が軍の勢力圏。よもや、劉表の間諜とも思えないが」

「見てみないとわからん、って訳か。」

「ご指示を、美綴將軍」

「あはは、未だに慣れないな。」

「いいか、冥琳？」

「言っただろう？ 今の私は、お前の軍師だ。助言なら出来るが、
采配は綾子の役目だ」

「わかった。明命！」

「はいっ！」

「手の者を連れて、様子を見てきてくれ。もし不審なところがなければ、あたしのところへ」

「了解です！」

素早く、明命は姿を消す。

「全軍、ここで小休止をとれ。ただし、周囲の警戒は怠るな」

「ハハッ！」

少しして。

「綾子お姉さま、冥琳さま。連れて参りました」

明命の後ろには、赤毛の若い男がいた。

いた、というか、兵士に担がれているんだけだな。

「気を失っているだけで、特に怪しげな物は持っていないようです」

「そうか。水をかけてみるか、事情が知りたいし」

ザバッ！

近くの川で汲まれた、冷たい水を兵士がぶっかけた。

「う……」

お、意識があるみたいだぞ？

「おい、しっかりしろ。大丈夫か？」

「あ、ああ。食べ物を少し所望したいのだが……」

刃霧パターンだな、もつともあそこまで食べるかどうかはわからないけど。

「わかった。けど、あたし達も行軍中、大した物は用意できないぞ？」

「何、贅沢は言わない。質素には慣れているからな」

「そうか。至急、食事の用意を」

「ハッ！」

男は、よほど空腹だったようだ。

塩にぎり、漬け物――（あたしのアイディアで作り始めていた）、干し肉を炙ったものというメニューを、黙々と平らげた。

「ふう、ありがとう。人心地ついた」

「それにしても、あんな場所で行き倒れなんて、どうしたんだ？」

「うむ。患者の治療に根を詰めすぎてな。少々、無理をしてしまった」

治療？

「という事は、あなたはお医者さまですか？」

明命の問いに、男は大きく頷く。

「そうだ。私は五斗米道の医師で、名を華佗と申す。世話になっておきながら、自己紹介が遅れて申し訳ない」

「か、華佗だって？ アンタ、間違いなく、医者、の華佗なんだな？」

思わず、あたしは大声を出す。

華佗っていや、この時代きつての名医じゃないか。

青囊の書を残したとか、関羽の肘を切開手術したとか。

「どうしたのだ、綾子。そのように驚いたりして」

「い、いや……あはは」

あたしは笑って誤魔化す。

……けど、いたじゃないか。
探し求めていた、最高の医者が。

「私の事を知っているのか？……まあいい、ところで、何か礼をしたいのだが」

普段のあたしなら、そんなものは要らない、で終わるけど。

「なら、早速頼みがあるんだ。実は」

そう、言いかけた。

「な、何だ貴様らは！」

「ぬおおお、どけどけい！」

「そうよん、どかないとお仕置きしちゃうわよん」

何やら、向こうが騒がしいようだけど。

「何事だ！」

「は、はっ！あの者共が、急に押しかけて参りまして。押しとどめようとしているのですが」

見ると、筋肉ダルマが二体、立ちふさがる兵士をはね飛ばしつつやって来る。

……っーか、片方はあれ……貂蟬じゃないか。

「おおお、やっと見つけたぞ！　だありん！」

「あら、お久しぶりねん。ご主人様♪」

な、何だこいつら……。

貂蟬は相変わらずだし、隣の奴も変態丸出しルックだし。

あまりのキモさに、冥琳と明命、ねねは固まってるし。

「へー、変わった格好だねー」

蒲公英は何故か、興味津々という顔をしていて。

「……近寄るな。斬る」

恋は方天画戟を構えているし。

「ま、待ってくれ。この者共は、私の連れだ」

「……は？　華佗、アンタって一体……」

冥琳の事を頼もうと思うんだけど……大丈夫か、これ？

ゝ五十二ゝ（後書き）

ご意見、ご感想はお気軽にどうぞ。

（五十三）

「私の名は、卑弥呼。謎の巫女じゃ、がはははは！」

「私は貂蟬。絶世の美女にして、都の踊り子よん♪」

二匹の変態が名乗る。

……だから、みんなが固まってるんだってば。

冥琳が、辛うじて呪縛を脱したらしく、

「綾子。知り合い、なのか？」

「……あたしだって、こんな変態と知り合いなんて願い下げなんだからさ」

「ぬわぁんですって！ 誰が見るだけで吐き気を催す不気味な変態ですってえ！」

「落ち着くのだ、貂蟬。所詮はオナゴ、私たちの魅力が伝わらぬのよ」
いや、伝わらなくていいし、そんなモン。

「……っーかアンタ。今、卑弥呼、って名乗ったよな？」

「うむ。確かに私は卑弥呼だが」

「……卑弥呼って事は、アンタ邪馬台国の？」

あたしの言葉に、卑弥呼が顔色を変える。

「む。……貂蟬、これは？」

「無理もないわねん。そういう事よ」

「そうか。……オノコであれば、惜しい事だ」

……急に背筋が寒くなってきた。

「確かに、私は邪馬台国の者。だが、今はただの巫女よ」

「で、華佗。アンタは？」

「うむ。俺は、大陸中を回って病魔と闘っている。彼らとは、旅の連れ合いだ」

「……大したモンだね、いろんな意味で」

「それが医者を務めだからな」

じゃ、早速本題に入っちゃうか。

「貂蟬」

「何かしらん、ご主人様」

クネクネするなつてーの、いちいち。

「ご、ご主人様って……綾子お姉さま？」

「……明命。頼むから、何も言わないでくれ。あと、何もないからその哀れんだ眼はやめてくれ」

「は、はあ……」

「いろいろと話がある。勝手に去るなよ？」

「あらん、奇遇ねん。私も、ご主人様にお話があるの」

「……………」

「蒲公英、おかしな勘ぐりするなよ？ 恋、一応は怪しい奴じゃない筈だから斬るなよ？」

「えーっ、綾子姉さまったら、怪しいんだ」

「……わかった。でも、綾子危なければ、容赦しない」

蒲公英は後でお仕置きだな。

「じゃ冥琳、ちょっと来てくれ。華佗も一緒にな」

「どうしたのだ、一体？」

「俺に用か？ 構わんが」

冥琳の天幕に行き、横にならせた。

「綾子。私は何でもない、そう言っただろう？」

「そんな訳あるか。華佗、診て貰えるか？」

「うむ」

「冥琳。お前さんは隠しているつもりだろうけど、そのままじゃ、死ぬぜ？」

「……綾子。何故、それを？」

「雪蓮じゃないけど、勘だよ。華佗、よろしくな」

そして、華佗の診察開始。

しばらく冥琳の身体を診ていたが、ある一カ所で手を止めた。

「……む、これは……。確かに、厄介な病魔に蝕まれているようだ」

「やっぱりな。で、治せるか？」

「むむ。……いや、困難があつてこそ、医術の施し甲斐があるというもの。引き受けよう」

そう言って、華佗は懷から針を取り出す。

「はあああああつ！」

……華佗の右手が、光って見えるような。

なんか、素手でガン〇ム倒しちゃいそうだな、コイツ。

「我が身、我が鍼と一つなり！ 一鍼同体！ 全力全快！ 必察必治癒……病魔覆滅！ げ・ん・き・に・なれえええええええええええええええつ！」

そして、冥琳の胸に、針をうつた。

「……む。まだ蠢くか、病魔よ」

ガクリ、と項垂れる華佗。

「ダメか？」

「……いや、確かに効果はあった筈だ。どうだ、気分は？」

「……そう言われれば、胸のつかえが少し、取れた気がするが」

冥琳の顔色も、さつきよりも良くなっている。

「私の治療は、氣を送り巣くう病魔と闘う。だから、一度には無理だが、続けければ必ず」

「そうか。……頼む、冥琳を治してやってくれ」

「綾子……」

「あたしは、冥琳を失いたくないんだ。雪蓮のためだけじゃない、掛け替えのない、あたしの友人として」

嘘偽りのない、あたしの本心だ。

「わかった。俺も、全力を尽くそう」

「冥琳。……いいな、必ず治せる。だから、治療を受けて欲しいんだ」

あたしの言葉に、冥琳はフツと表情を緩めた。

「おかしな奴だな、お前も。私は、天命だと思っていたのだがな」
「そんな天命なんて、あたしがぶん殴ってでも変えてやるさ。言っ

ただろ、そう容易くは死なせないってな」

「なら、そうするでしょう。華佗、よろしく頼む」

大きく頷く華佗。

やれやれ、後は華佗の腕と、冥琳の快復力に期待しよう。

その夜。

あたしは貂蟬と二人、陣の外に。

他の奴らには聞かせられない話をする事になるからな。

「さて貂蟬。あたしにも話がある、そう言ったな？」

「ええ、そうよ。でも、まずはあなたの話から聞くわよん」

「そうか」

まずは……。

「じゃあ一つ目。あたしが、今ここにいる理由だ。あの時はまだ言えない、そうだったな？」

「ええ、そうよん」

「それは、今も同じか？」

「……………」

卑弥呼は少し、考えてから、

「……そうね。いつまでも知らないままじゃ、あなたも納得しないわね。いいわん」

どうやら、話してくれるらしい。

トクトクトク。

持ってきた徳利から、酒を注ぐ。

……素面で聞くよりは、この方が良さそうだから。

「貂蟬。アンタもどうだ？」

「ええ、いただくわん」

二人、杯を干す。

「ご主人様を連れてきた理由だけど。この世界が、ご主人様の知る世界と違うって事は、気付いたかしら？」

「そりゃ、な。曹操や孫策、劉備に董卓。みんな、あたしの知る歴史じゃ、ひげ面のおっさんばかりの筈だから」

「そうねん。それは、正史。つまり、本来の歴史の流れなのねん」

「ん？　じゃあ今あたしがいるこの世界は、そうじゃないって事か？」

「その通りよ。この世界は、外史と呼ばれる世界。ご主人様、平行世界、って言葉は知っているかしら？」

「平行世界？……うーん、知らないなあ」

「そうよね。ご主人様の世界でも、平行世界の住人はいるんだけどねん」

「え？　誰だ、一体？」

貂蟬は、頭を振る。

「ごめんなさい。それは言っちゃいけない事になってるの。それに、本題とは外れるわ」

それはそれで気になるんだけど……。

でも、貂蟬の言う通り本題じゃないし。

「わかった。続けてくれ」

「ええ。それで、この外史も、立派な世界の一つ。でもねん、本来あるべき姿通りにならない、そういう場合もあるの」

「あるべき姿って？」

「そうねん。例えば、ご主人様の知っていたこの時代、どうなったか覚えてるかしら？」

「正史の、って事か？」

貂蟬は頷く。

あたしは、記憶をたぐり寄せる。

「ええと……。最終的には魏も呉も蜀も、天下統一は出来なくて。司馬懿の息子だったか孫だったかが、別の国で統一を果たした……だったかな？」

「そうねん。他には？」

「董卓は呂布に裏切られて殺されたとか、諸葛亮は三顧の礼で、劉

備が新野にいる時に仕えたとか？」

「どう？ ご主人様の知る正史とは、違っていると思わない？」

「……だな。それを言ったら、いろいろとおかしいんだ。それに、有名な武将は皆、女ばかりだし」

「でもねん、もしそれがこの外史では正しい姿だとしたら、どう？」

「つまりは、だ。今あたしが経験している全ても、歴史の一つだと？」

「ご名答よ。でもねん、ちょっとした手違いがあって、ご主人様を連れてくる必要が出たの」

「手違いって？」

「ご主人様。天の御遣いの話、聞いたかしら？」

「ああ。管輅の占いがどうか、って奴か？」

「そうよん。でもあれ、ご主人様の事じゃない。それも知っている？」

「……確か、雪蓮は間違っているんじゃないか、って」

「いいえ、間違っていないわん。実際にいるもの、天の御遣いが」

「北郷一刀。奴だな？」

「ええ」

「で、アイツがどうかしたのか？ 見たところ、あたしと同じ世界の人間みたいだけど」

「うーん、ちょっと違うのねん。年代は確かに同じだけど、二人は生きている世界が別なの」

また、平行世界か。

「実は、ご主人様、と言える人はね、一人だけなの。本当は」

「ん？ あたしじゃなくて、北郷がそうだ、って事？」

「その通りねん。ただ、この外史に召喚する時に、媒介とする銅鏡に亀裂が入ってしまったの。それで、時空に歪みが出来て、このままでは外史そのものが崩壊する危険が発生してしまった訳なの」

「……………」

「そこで、急遽ご主人様に白羽の矢を立てた、という訳なのよん」

「ちょっと待った。どうして、あたしだったんだ？　言っておくけど、あたしや一般人だぞ？」

「わかってるわ。でもねん、同じ世界から召喚できる人数は一人、と決まっているのねん。それに、召喚するのは誰でもいい、って訳にはいかないのよ。その条件に沿ったのはご主人様、あなたただけだったの」

わかったような、わからんような。

「なら、あたしはその歪みを是正する為だけに、ここにいる。そういう事になるのか？」

「ううん、それもあるけど。一旦歪んだものは、元には戻せないのねん。でも、ご主人様じゃないと出来ない事は、まだ残っているわ」「それは？」

「……ごめんなさいね。それは、まだ言えないの」

また秘密かよ。

ただ、こんなガタイのいい奴が肩を窄めているのを、あれこれ責める気にはならない。

トクトクトク。

杯に酒を注ぎ、干した。

「とりあえず、あたしがここにいる理由はわかった。なら次だけど、このあたしの力は一体、なんだ？」

「それね。原因は、想像がついているかしら？」

「何となくな。あたしのカバンに入っていたタブレット型パソコン、あれだろ？」

「その通りよん。ご主人様そのままじゃ、この外史で生き延びるのは困難。だから、あそこに詰め込まれていた技能とかを、ご主人様に授けたの。それは、私じゃなくて、外史の管理者が、ね」

「……この異常な動体視力とか、弓の腕とか、馬術とか？」

「ええ」

「あたしが可愛いと思ったものに好かれたり、小さい娘らにやたらと懐かれるのもか？」

「そうよ。ただ……」

と、貂蟬が言葉を濁す。

「何だよ？」

「……副作用じゃないけど。一緒に、邪な物も、この外史に流れ出ているのねん」

「邪って？」

「ご主人様は、言わば正義の権化。でもねん、正義あるところに悪あり、それが物語。わかる？」

「じゃあ、悪に相当するモノが、流れ出て世にいる。そう言いたいのか？」

「そうねん。心当たり、あるでしょ？」

そう言われて、やっとわかった。

「会稽で襲われ続けたのも、そのせいだってんだな？」

「ご主人様が、名誉とか地位を得る時、邪なモノが襲い来る。それは、止めようがないの」

「ハア、そんな理由であたしはあんな目に遭ったってのか？ あたしは、そんなモン、欲しいとは思ってないぞ？」

「ご主人様が望まなくても、それは避けられないのねん
んなアホな。」

「ならさ。王朗とか、奴らがラスボス、って訳じゃないのか？」

「それも言えないの。ご主人様自身で確かめるしか、ないのねん」

「無茶苦茶だな……」

頭を抱えたくなるな、全く。

「じゃあ、最後だ。あたしは、元の世界に戻れるのか？」

「……………」

無言の貂蟬。

「いや、無理なら無理。そう言ってくれ、いつそその方がすつきりする」

「……言えないわ。それも」

「そっか。……わかった」

いろいろとわかった事もあれば、謎が増えもしたけど。

とりあえず、あたしはこの先も、何とか生き延びないといけないようだな。

もつとも、死ぬつもりもないけどさ。

「じゃあ、私からご主人様にお話よ」

そう言えば、そうだったな。

「ああ。何だ？」

「もう一人のご主人様を、決して死なせないで欲しいのねん」

「北郷を？」

貂蟬、真剣な表情だ。

「しかしな。アイツは魏にいるんだろ？ こっちに寝返るんならともかく、今はどうしようもないじゃんか」

「それはわかってるの。でも、あちらのご主人様に死が訪れると、外史そのものはその瞬間、最期になるわ」

「なら、嚴重に警護でもつけて、どっかに閉じ込めればいいじゃん」

「それは無理ねん。ご主人様達の意にそぐわない事は、私達には出ないの」

「じゃあ、どうしろつつーんだ？」

「ご主人様がやれる範囲で構わないの。でも、これはご主人様にしか頼めない事よ」

「……なんか、無理難題だなあ。あたし、神じゃないんだぜ？」

「それでも、ご主人様なら何とかなるわん。信じてるから」
んな事で信じられてもねえ。

「やれやれ。あたしがあたしじゃないみたいだぜ、これじゃ。とにかく、やれるだけはやってみるけどさ」

「お願いね」

「……つーかさ、貂蟬が守ってやればいいんじゃないじゃね？ アンタ、強そうだし」

「そうしたいのはやまやまなのねん。でも」

「出来ない、か。……厄介だね、貂蟬も」

「ごめんなさい、本当に」

しかし、ホントどうすりゃいいのか。

いずれ、魏とは戦わざるを得ないんだろうし。

……その最中に、北郷を殺さないようにしないといけない、とか。ま、なるようにしかならないか。

それまで、奴が死なない事を祈っておくしかなさそうだな。

翌朝。

揃って、朝食を取る。

華佗と、変態筋肉ダルマ二匹も一緒だ。

みんなも、いくらかは慣れた……かな？

「冥琳。どうだ、調子は？」

隣の冥琳に、小声で聞いてみた。

「ああ。だいぶ気分がいい。妙な咳も止まったしな」

「そうか、良かった。ホント」

後で、雪蓮には教えてやらないとな。

……アイツの事だ、冥琳の事にも気付いていそうだしな。

「蒲公英。食事が済んだら、あたしにも騎兵の動かし方、指導してくれ」

「うん、いいよ」

とにかく、今はあたしの役目を果たそう。

「うーん、燃える乙女も素敵よん」

「ふふふ、貂蟬よ。オノコに飽きたらぬか？」

……こいつらの事は、敢えてスルーだな。

ゝ五十二ゝ（後書き）

ご意見、ご感想はお気軽にどうぞ。

ゝ五十四ゝ（前書き）

余震に巻き込まれて、更新が止まっていました。
今月中には何とか完結させるつもりでいますので、もうしばらくお
付き合います。

（五十四）

久々の寿春城は、もう目の前。

「懐かしいような気もするけど、そうでもないか？」

「まあ、お前は大陸中を動き回っているからな。無理もあるまい」
そう話す冥琳は、すっかり顔色が良くなっている。

「どうやら、もう心配なさそうだな」

「ああ、華佗とお前のおかげだ」

「俺は医者だが、病巣は患者次第でもある。患者が治そうという気にならなければ、どうにもならん」

「しかし、本当に呉に來ないか？ 待遇は保証するが」
冥琳の誘いにも、華佗は笑うだけ。

「まだまだ、俺を必要としている者が大陸中にいるのだ。それに、報酬や地位に興味がない、面倒なだけだ」

「そうか。残念だが、仕方ない」

この調子だと、あと数日でまた、旅に出るのだろう。

確かに、華佗ほどの医者がいってくれば、何かと安心だ。

……ただ、副産物で、あの変態二匹がもれなくついてくるけど。

「綾子姉さま。だいぶ、扱いが上手くなってきたね」
と、蒲公英。

馬そのものの乗り方もそうだが、騎馬隊の戦法もいろいろと仕込まれたからな。

あたし自身で直接指揮を取るかどうかはわからないが、動かし方もわからずに指示は出せない。

「ホント、翠や蒲公英、霞達を敵に回さなくて良かったとつくづく思う。そうでなくても、編成に金のかかる部隊だし」

「その代わり、機動力は絶大だからな。期待してるぞ、綾子」

「あはははは、ま、まあ……何とかなるだろ、きっと」

「大丈夫だよ。綾子姉さま、優秀だもん。ね、恋姉さま？」

「……ん。馬も、綾子の事、好き」

やれやれ、ボーナス特典はいいけど……收拾がつかなくなりそうだなあ、これも。

「さて、城門が見えてきたな」

「へえ、あれが袁術の本拠地だったところかあ」

蒲公英はもちろん初めて。

……あたしには、いろんな意味で思い出深い城だし、冥琳や明命ならもつといういろいろとあるだろう。

「袁術ですか……。もう、懐かしい名前ですね」

つい最近の事に思えるけど、雪蓮が独立を果たしてから、もう結構な間がある。

明命がそう思うのも、無理はないだろうな。

「だが、袁術……いや、^{カンツ}楨子だったな、今は。なかなか、好評らしいな？」

「え？ あ、あの……」

冥琳の言葉に、おろおろしながら、あたしを見る明命。

……あ、なるほどな。

「明命、心配いらなくて。冥琳は知っているよ」

「そ、そうなんですか？ 綾子お姉さま」

「当たり前だろ？ 三姉妹だって、雪蓮には勿論だが、冥琳だって当然承知の上。楨子や対子の事もな」

「だが、ただ好評なだけではないようだな。鑑賞料が思いの外集まっ
つていて、案外バカにならない金額のようだ」

ライブチケット、って訳か。

この時代は、代理店とか事務所とか、そういう中間搾取する組織がない。

当然、儲けだってでかいだろう。

……あと、得体の知れない団体もないしな。

「その分、対子^{トイッ}はだいぶ痩せたようだがな」

「ま、そりゃそうだろ。でも、我が儘言われるのには慣れてるだろ、適任だよ」

「そうだな。それに、興行が別の効果ももたらしているらしい」

「別の効果？」

「そうだ。興行が来る、となれば、という事で、住民達の治安意識が高まったところが多いようだ、そして、その効果は興行後も続いているらしい。治安がしっかりしていれば、また興行が見られる…そういう期待があるのだろう」

皮肉だねえ。

かつては治安を悪化させるばかりだった存在が、今や真逆とは。

「今のところ、孫呉にとっては害はなく、益をいろいろともたらしめている以上、私はとやかく言うつもりはない。それに」

冥琳は私を見て、ニヤツと笑う。

「討逆將軍殿の肝いりとあれば、な」

「…冥琳。ホント、絶好調だな」

「ああ。お陰様でな」

これだけ元気なら、もう心配要らないな。

住民の歓迎を受け、城内へ。

建業へ本拠を移したとは言え、残っている民の数も多く、賑わいも失われていない。

「美綴將軍！」

見ると、元袁術軍の兵士達。

あの後も来る機会があったが、何のかんのと慌ただしかったし。

「久しぶりだな」

「はい。將軍のご活躍、いつも耳にしています」

「…そんなにあたしの噂って、されてるのか？」

「もちろんですとも。周瑜様と並び、今や呉の柱石と呼ばれる御方ですぞ？」

あちゃー。

程々に頑張れば何とかなるか、とか思っていたけど……。

「そちらにおわす、呂布將軍とも互角の戦いをなさるとか、我らも楽しみにしておりますな」

「互角ねえ。たぶん、そんな事は……」

「……そんな事、ある。綾子は、強い」

空気読めよ、って恋に言うだけ無駄か。

「そのような方に従って戦えるなど、我らは誇りに思います」

「將軍！ 我らの命、お預けしますぞ」

「あ、ああ……。ありがとう……」

蒲公英と明命はなんか目を輝かせているし。

……冥琳は言うまでもなく。

あたしって、そこまでの器量じゃない……ってのは、もはや通用しないのかな、これ。

「……で、あたしの席は……？」

「そこしかなかろう」

「……やっぱり？」

城内に入り、早速軍議、となったんだが。

謁見の間で、あたしの示されたのは……かつて雪蓮、その前は美羽が座っていたところ。

つまりは、城主の席。

「……落ち着かないな。冥琳がここに座ればいいだろ」

「私は軍師に過ぎんよ」

一蹴されてしまった。

他は……。

恋は首を傾げているし、明命は目が合った瞬間、とんでもないと手を振るし。

呉の将じゃない蒲公英はあり得ないし、ねねは……。

「恋殿。城下になかなか評判の飲茶を出す店があるそうですぞ。後

で参りましょう」

……恋以外の事には興味なし、と。

蓮華か、せめてシャオでもいいれば話は別だけど、そうでもない限りは、

「どうした？ お前以外にそこに座る者はおらんぞ？」

……冥琳の言う通りのようだ。

観念して座るが……落ち着かない。

ちなみに華佗と変態二匹は、城下へ行っている。

もともと将でもないのだし、

「ここにも俺の治療を待つ患者がいるのだ！」

と、熱血バカぶりを発揮して飛び出していった。

「綾子」

「ああ。……では、軍議を始める。冥琳、よろしく」

「わかった」

冥琳は一同を見渡してから、

「皆、知っての通り、荊州の劉表と一触即発状態になっている。もともと浅からぬ因縁のある相手、戦端が開かれるのも時間の問題と思われる。明命、流水群の動きは？」

「はっ！ 蔡瑁一族と張允、黄祖らは、江陵一帯に布陣。雪蓮様の本隊に備えているようです。一方、新野には文聘と魏延が指揮を執る部隊が進駐しているようです」

おや、聞いた事のある名前が混じってるな。

「魏延か。間違いないのか、明命？」

「綾子お姉さま。不確かな情報を提供する事は、私の信条に反します」

毅然と言い放つ明命。

「すまん、疑った訳じゃないんだ。ただ、魏延か……」
チラ、と蒲公英を見る。

「何、綾子姉さま？」

「いや……」

魏延っていや、確か諸葛亮が死んだ後、謀反を起こそうとして馬岱に斬られた……だったよな？

この世界じゃどうなのかわからんけど、何かしらの因縁はありそうだ。

「文聘はともかく、魏延は厄介な気がする。少なくとも、猛将には違いないだろうし」

「綾子？ 魏延を知っているのか？」

「面識はないし、あたしが知っているのはあくまでも噂程度さ。けど冥琳、敵を知り己を知れば、百戦危うからず……だろう？」

「ほう。孫子を知っているとは、流石だな」

「いや、これはあまりにも有名だからさ。とにかく、気になるところは確かめておきたい」

「いいだろう、私も賛成だ。明命、魏延について、可能な限りで調査を」

「はっ！」

素早く出かける明命。

「ところで冥琳。侵攻ルート、じゃない侵攻路だけど。汝南から新野、でいいんだよな？」

「ああ。汝南はかつて袁術の出身地だったが、今は支配する者もない。それに、騎兵中心で動くなら地形的にも向いている」

「なるほど」

ルートのには問題なし、と。

「それに、新野城は規模が小さく、攻城戦となると籠城側が圧倒的に不利だ。だから、劉表軍も野戦を選択せざるを得まい」

「……なあ。ぶっちゃけ、楽勝じゃね？」

こっちは騎兵が主体、しかも恋と蒲公英が率いるんだし。

何か策を講じてきたとしても、冥琳がいればまず通じないだろう？

……なんか、あたしの存在意義がない気がする。

「楽勝ならばこそ、確実な勝利を得なければなるまい？ それに、

犠牲は少なければ少ない程、理想の展開だ」

「そりゃそうだけどさ。何か拍子抜けっつーか」

「むしろ、この戦、負けて貰っては困るからな。今後のためにも」

「ま、もちろん勝つさ。これだけお膳立てして貰ってるんだから」

「それでいい。それから兵力だが、こちらは五万、劉表軍は三万との事だ」

「数でもこっちの優位は動かない。……あと、何かあるか？」

いくつか細かな打ち合わせはあったけど、概ねこれで終了。

明命待ちの事もあるけど、各々が準備にかかる。

「綾子は、これに落款を」

ドサッ！

目の前に、山のような竹簡が積まれる。

「冥琳？……これ、何だ？」

「見ての通り、決済の必要な書類だが？」

「……なんで、あたしが？」

「決まっているだろう？ 軍を動かすのにも、いろいろと手続きがいるのだ」

しれっと言う冥琳。

「いや、手続きはいるんだろうけど。でも、どうしてあたしが？」

「無論、雪蓮が指揮を執るなら雪蓮がやる事。だが、こちらは綾子が指揮を執る。ならば、落款も当然、そうなるな」

「……………」

「さ、まだまだあるのだ。早速取りかかってくれ」

「……マジ？」

「私は真面目だが？ ああ、心配するな。わからんところは教える
そう言いながらも、冥琳の前にもやっぱり、竹簡の山が。

……これじゃ、手伝ってくれとも言えないじゃんか。

「ちなみに、いつまでに？」

「そうだな。今日中、と言いたいところだが……。明日一杯までで
構わんど、ただし先ほども言った通り、まだ残っているからな？」

……ちよつとだけ、雪蓮の気持ちがわかった気がする。
これなら、現実逃避して酒でも飲みたくなるわ。
……そういう訳にもいかず、泣く泣く竹簡の山とのバトル開始となった。

数日後。

寿春城を出発した軍は、一路西へ。

「ふあああ……」

「うわー、綾子姉さま。大きな欠伸、余裕だね♪」

「……いや、蒲公英。それは断じて違うぞ」

「でも、これから戦だったのに、ゼーんぜん緊張感がなさそうだから」

まあ、緊張してないってのは嘘ではないな。

……というか、眠くてそれどころじゃない。

結局、後から後から書類が出てきて、それを片付けるために昨夜までずっと、部屋に籠もりきりだった。

あまりに終わらないので、城内をうろついていたねねを拉致……
もとい連れ込んで、手伝わせたけど。

ちなみにその当人は、

「……むにゃむにゃ。竹簡が襲ってきます……ぞ。恋殿お……」

恋にしがみついて、眠っていたりする。

それに引き替え、いつもと変わらない我が軍師殿。

「ん？ どうした、私の顔に何かついてるのか？」

「……いや、つくづく化け物だなあ、って。美周嬢様は」

「失礼な奴だな。私のどこが化け物だと？」

「なんで、あたし以上の竹簡を処理して、それでいて普通なんだよ？」

あたしの言葉にも、冥琳は平然と、

「あの程度で音を上げるような私ではないぞ、綾子？　雪蓮はあの数倍の竹簡を処理する事もあるのだから」

「数倍って……マジかよ？」

「ああ。……もつとも、よくサボって、蓮華さまが仕方なく手伝われる事も多々あるが、な」

「ははは……」

今なら、雪蓮と思いい切り話が合う、そう断言しよう。

つか、もしあたしが会稽太守なんて引き受けていたら……。

くわばらくわばら。

「くぁ……」

ダメだ、眠すぎる。

フリ○クでもありゃいいけど、この時代、コーヒーですらある訳がない。

お茶を濃いめに淹ればいいんだろうけど、茶葉自体が貴重品だし。

「……冥琳」

「何だ？」

「今日は、早めに行軍を止めないか？」

「ふむ……。よかろう、総大将の命として、全軍に通達しておこう」

「そうしてくれ」

このまま戦闘なんて始まっても、あたしゃそのまま寝ちまう。

もつとも、新野まではまだまだ距離があるから、今日明日の戦闘なんてあり得ないけどな。

軍勢は汝南を通り過ぎ、荊州との境付近に到着。

「綾子お姉さま、冥琳さま。劉表軍は新野城を出て、この先に布陣しています。左翼が文聘、右翼に魏延。主将は劉磐！」

また知らない名前が出てきたぞ。

お、冥琳が難しい顔になっている。

「どうした？」

「劉磐が出てきたか。……いや、劉表の甥なのだが、勇猛な将として知られているのだ」

「けど、事前の情報では出てこなかったぜ？」

「どうやら、こちらの軍勢が予想以上に多かったので、急遽派遣された、との事です」

と、明命。

「だが、将が勇猛でも、こちらは引くつもりはない。中央はあたしと冥琳、左翼は蒲公英だ。そして右翼は恋とねね、いいな？」

「……ん。頑張る」

「たんぽぽに任せてよ♪」

「恋は、正面から粉碎しつつ、弓兵を背後に回らせて殲滅させるんだ。ねねに、機は任せた」

「了解しましたぞ」

こっちはこれでよし、と。

あたしの知る歴史上の因縁もあり、魏延には蒲公英を当てる事にした。

「蒲公英。ホントに、大丈夫なんだろうな？」

「うん」

あゝ、何か企んでるな、あの顔は。

……まあ、無理をしなければいいんだがな。

「明命は遊軍として待機。頃合いを見て、戦線に投入する」

「はいっ！」

さて、いっちょやりますか。

あたしは、集結した兵士達の前に立つ。

「皆の者！ 敵は我が孫呉に仇する劉表だ！ けど、鍛えられた我が軍の敵ではない！ 何より、お前達には周公瑾の頭脳と、呂奉先の武勇がついているのだ、何も恐れる事はない！ 思う存分戦い、勝利を己の手で掴み取れ！」

「応っ！」

必死で考えた、戦の前の訓示というか号令。

……とりあえず、士気向上にはつながったようだ。

「では全軍、かかれっ！」

ジャーン、ジャーン、ジャーン！

銅鑼の音が、鳴り響く。

「綾子。……わかつているな？」

「……ああ」

あたしの仕事は、ここで全軍の指揮を執る事。

改めて、自分に言い聞かせる。

〔五十四〕（後書き）

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

なお、直近の数話に改訂表示がついていますが、呼称の一部に間違いを見つけたため、その部分だけ訂正させていただきました。
内容そのものには手を入れていませんので、ご了承下さい。

（五十五）

「申し上げます！ 右翼呂布將軍、文聘軍を撃破、敵左翼は総崩れとなっております！」

「伝令！ 敵主力が二手に分かれ、一手は敵左翼の支援に、もう一手はこちらへ向かっているとの事！」

次々に入る戦況報告。

予想通り、恋の方は相手にならなかったらしい。

それで、敵本隊が二手に分かれたようだけど。

「もともと数では敵が劣勢。なのに、それを更に分けるとは」

呆れたように言う冥琳。

「どうやら、敵には軍師がいなかったようだな。あと、まともに指揮を執れる奴が」

「そのようだな。明命、新野城の様子はどうか？」

「はっ！ 二千程が後詰めで待機していますが、動いたとの報告はありません」

「一応、伏兵の警戒も怠るな。劉表に、その余力があるとは思えんがな」

「了解です！」

さて、後は左翼の蒲公英だが。

「伝令、伝令！」

お、来たかな？

「左翼馬岱將軍、敵右翼と激突！ その後、撤退中！」

「どういう事だ？」

「わからんな。冥琳、支援がてら、様子を見に行きたいんだが」

「綾子。言っただろう、お前は」

「役割はわかってるって。ただ、どうにも釈然としないんだ。だから、自分の目で確かめたいのさ」

「ふむ」

冥琳は少し考えて、

「様子を見るだけ、と約束できるか？　もし危険と判断したら、すぐに戻るんだ」

「いいのか？」

「止めても聞かないだろう？　雪蓮で慣れている、心配いらんよ」

「悪いな。じゃあ五百だけ、連れていく」

「ああ」

あたしは、蒲公英が最初に布陣したあたりへと向かった。

……ホントに撤退してくるな。

そして、敵は勢いに乗り、追撃してきてるし。

「美綴將軍。如何なさいますか？」

「そうだな……。食い止めてもいいが、どうも蒲公英の動きが怪しい。よし、周囲に伏せるぞ」

「ははっ！」

あたしと五百の兵は、手近な窪みに分散して姿を隠した。

ドドドドドド。

そして、近づいてくる馬蹄の音。

「どうした！　孫家の兵とは、このように弱体揃いか！」

「やーい、脳筋！　追いつけるものなら追いついてみる！」

「な、何だとお！　このアタシを愚弄するかっ！」

……なんか、ガキの喧嘩みたいなやり取りが聞こえるんですけど。そつと覗くと、蒲公英の手勢は皆、敵をおちよくりながら撤退しているようだ。

……すっごくわかりやすい挑発なんだけどなあ。

で、でかい金棒を振り回しつつ、先頭になって追ってくる奴。どうやら、あれが魏延らしい。

「よーし、全軍反転！」

と、蒲公英が急に軍を止めた。

……いや、急じゃない、これは。

いくら訓練された騎兵とは言え、動きが見事すぎる。

「とうとう観念したかつ！ アタシと戦える奴はいないのかつ！」

「ここにいるぞー！」

本人は勇ましいつもりなんだけど、全然格好ついてないぞ、蒲公英……。

「フン、ガキではないか！ 将を出せ将を！」

「全く、これだから脳筋はイヤになっちゃう」

「生意気なガキだ！ アタシの鈍砕骨で、お仕置きしてくれるっ！」

蒲公英に向けて、突撃してくる魏延。

「よーし、今だよ！」

蒲公英が、槍を振るった瞬間。

「ワン、ワンワンッ！」

十数匹の犬が、解き放たれた。

犬つても、猛犬つてよりも……セキトみたいな、普通の犬ばかりか。そして、まっしぐらに魏延に向かっていく。

「あひゃあっ！」

あれ、猛然通ってきた魏延が、急に慌てふためきだしたけど。

「ワン！」

「わわわわわっ、よ、寄るなあっ！」

ありやうや、将がパニックに陥ったせいで、ついてきた劉表軍の兵士まで混乱してるぞ。

あたしは、素早く蒲公英に駆け寄って、声をかけた。

「蒲公英」

「あれ、綾子姉さま。どうしたの、こんな場所です？」

「どうしたじゃない。お前が敗走してるって報告が入ったから、様子を見に来たんだ」

「あ、それなら作戦だから。ほら、あの通り」

「あの通りって……」

蒲公英は、口に手を当ててニヤニヤしながら、
「魏延って脳筋なのと、犬が大の苦手なんだって。だから、ちょっ

とからかってここまで連れてきてから、犬を放ったの」

それ、作戦って言えるのか？

つか、引つかかる方も引つかかる方だけど。

「んにゃあーっ！……ど、どわっ！」

逃げ回っていた魏延が、不意に見えなくなった。

「あははー、掘っておいた落とし穴にまではまったみたい。本当、脳筋だねー♪」

この広い荒野で、どうやったらそんなピンポイントで落とし穴にハマるんだ？

……いろいろあり得ないけど、ツツコむのは止そう。

「ぎ、魏延將軍！」

劉表軍の兵士、もう大パニック。

「よーし、みんな今だ！ かかれーっ！」

「応！」

蒲公英の号令で、満を持して騎兵が襲いかかる。

「よし！ 美綴隊も続け！」

「はっ！」

ヒュンヒュン！

混乱する敵の周囲から、一斉に矢を射かける。

こうなれば、もうまともな合戦にならない。

劉表軍右翼は壊滅し、大量の投降者が出る始末。

「よし、蒲公英。このまま敵本陣をつけ！」

「うん、了解！」

「誰か！ 本陣と右翼の恋にも、これを伝えろ！ 一気に片をつける！」

「ははっ！」

さて。

静まり返った中、

「ワン、ワン！」

犬が、しきりに吠えている。

近づいてみると、魏延が落ちた落とし穴だった。

「よしよし。お前ら、ご苦労さん」

「ワン！」

一匹一匹撫でてやり、兵に引き渡した。

……つーか蒲公英、策はいいけど犬はどうするつもりだったんだ？

「おーい、生きてるか？」

「……ワタシをこのような目に遭わせるなど、貴様らそれでも武人か！」

「それだけ吼えられるのなら大丈夫そうだな。今、引き上げてやるけど、妙な真似するなよ？」

「……………」

兵士が差し出した槍に掴まり、穴から出てきた魏延。

やっぱ、あたしと同じぐらいの女子なんだ。

「悪いけど、アンタは捕虜だ。一旦、縛らせて貰うぞ？」

「フン。好きにしろ」

髪の毛が……パンクだよな、これ？

雰囲気的には、ブラック○ヤック先生？

「何だ？ アタシの顔が珍しいのか？」

「いや、そうじゃないけどさ。あ、そうそう。あたしが、美綴だ」
すると、魏延が驚いてあたしを見る。

「な、何だと？ 何故敵の総大将がここにいる？」

「まあ、いろいろあるんだよ。さて、本陣に戻るぞ」

「はっ！」

「ただいま」

「お帰り、綾子。しかし、様子見と言いながら結局は戦闘になったようだが？」

帰るなり、冥琳に睨まれた。

「う、すまん」

「ま、無事に戻ったからいいが、もう少し総大将としての自覚を持って。いいな？」

「わかった。気をつけるよ」

冥琳は回復したとは言え、まだ病み上がり。

あまり心配をかけるのも拙いし。

「恋、よくやってくれたな」

「……ん。綾子も、無事」

そんな恋の頭を撫でてやる。

「綾子姉さま、たんぽぽにも」

「ああ、わかったわかった。ほら、ねねもこっち来い」

「ねねはべ、別にいいのです。……でも、どうしてもというのなら、撫でさせてやりますぞ」

全く、素直じゃないね。

三人の頭を、代わる代わるなでなで。

いやゝ、撫でられている方の顔を見ているだけで、こっちまで癒されるわ。

そんなにいいのかねえ、あたしの手は。

「うう、綾子お姉さま……」

「だああ、明命も泣くな！ ほら！」

「はわあ……。いいですう」

自棄気味に、四人の頭を撫で回す。

……我ながら、シュールな図だよな、これ。

「……フン。随分と呉とは、お気楽な集団のようだな」

「あれは別だ、気にせんでくれ」

毒づく魏延に、冥琳が溜息をつく。

……いや、そこで嘆息されるあたしは一体……。

「さて、魏延よ」

「……………」

縛られたまま、魏延は冥琳を睨み付ける。

「敗北は、戦いの常。恥じ入る事ではないが」

「斬れ」

「……まだ、私は何も言っていないが？」

「黙れ。何も聞く耳は持たないし、ワタシは降るぐらいなら死を選ぶ」

魏延は、毅然と言う。

あれ、魏延って謀反人ってイメージがあったんだけど。

……もしかして、あれも後世の創作か？

「もう、脳筋は結論を急ぎすぎ」

「黙れ、このガキが！」

「たんぽぽはガキじゃないもんね。それに、あっさりたんぽぽの策に引っかかったんだもん、やっぱり脳筋じゃない」

「ぐぎぎぎぎ……。貴様、いつか絶対クロス……」

この二人の相性が悪そうなのは……まあ、そうなんだろう、きっと。

「蒲公英、止せ。敵とは言え、仮にも将だぞ」

「はぁい」

「降る気はない、殺せ、か。綾子、どうする？」

冥琳が、あたしに振ってきた。

「いや、これあたしの判断じゃ拙くないか？ 雪蓮に伺いを立てた

方がいいと思うぜ」

「しかしな。捕虜の処遇は、王から権限を与えられた者が行っても、何ら問題ではないぞ？」

「そうかも知れないけどさ。でも、それって雪蓮から言質を得ている訳じゃないだろ？」

「……そうだな。ならば、それまでは捕虜として留めるか」

「アタシをどうする気だ！ いいからさっさと斬れ！」

「もう、うるさい！」

ドスッ！

「ガッ！」

蒲公英が、槍の石突きを魏延の腹に叩き込んだ。

そのまま気絶して、静かになったかな。

「見張りをつけて、別の天幕に閉じ込めておけ」

「はっ！」

連行されていく魏延。

「冥琳。新野城はどうするんだ？」

「たった二千とは言え、放置しておいて背後から襲われたのではかなわん。明日、攻めるつもりだ」

「なるほど、そうするか。じゃ、今日はみんな、ご苦労だったな。ゆっくり休んでくれ」

「……ん。ちんきゅー」

「はい、恋殿。食事にしましょうぞ」

「たんぽぽもお腹空いたー」

「はいはい、飯にするか。冥琳も明命も、一緒にな？」

「ああ、そうだな」

「はいっ！」

その夜。

……ん？

妙な気配を感じ、あたしは目が覚めた。

「うわっ！」

「く、曲者だ！」

すぐ近くで、叫び声がする。

あたしは飛び起きて、青？の剣を手の外に出た。

まさか、また件の刺客か？

けど、それならこんな陣中では襲わないだろうし。

「綾子お姉さまっ！」

「明命か？」

「はい！ 不覚でした、警戒は厳重にしていたのですが……」
明命ほどの相手に悟られずに、一体誰が？

そして、目的は……まさか。

あたしは、魏延を閉じ込めている天幕へ。

……案の定、見張りの兵士が倒されている。

勿論、魏延の姿は、見えない。

「美綴將軍！　こ、これは……」

駆けつけてきた兵士達。

「騒ぐな！　明命、外部から侵入された気配は？」

「そ、それが……。調べさせたのですが、それはないようです」となると、内部に手引きした奴がいるのか？

けど、劉表軍が間諜を紛れ込ませられるとは思えない。

「まだ遠くには行っていない！　探せ！」

「はっ！」

あたしが指示を出している間に、冥琳達もやって来た。

「魏延に逃げられたか」

「ああ。けど、明命は外部からの侵入者はない、と言っている。となると内部になるんだが」

冥琳はしばし考えてから、

「誰か。寿春城から連れてきた兵の隊長をここへ」

「はっ！」

本陣の天幕に、一同は集まっていた。

「お呼びでしょうか」

そこに、冥琳が呼んだ兵士の隊長が入ってきた。

「実は、先ほどの騒ぎで一つ、気になる事があって来て貰った」

「はっ。何でしょうか」

隊長は、緊張の面持ちで答える。

「今回の兵の中に、ここ最近雇ったばかりの兵は混じっていないか？」

「はい。十名ほどですが、訓練でも成果を出した者を連れてきます」

「では、急ぎその者達が揃っているかを確認し、報告を」

「は？　しかし、一体」

「理由は後で聞かせる。急げ！」

「は、はっ！」

隊長は、慌てて飛び出していく。

「冥琳。どういう事だ？」

「……いや。杞憂であればいいのだが」

「まさか冥琳さま。我が軍の中に、間諜が混じっていた、と……？」
明命の言葉に、冥琳は難しい顔つきになる。

「あくまでも、推測だが。……だが、気になるのだ」

そして、冥琳の予感……的中。

十名の兵士は、皆姿を消していた。

魏延を逃がす手引きをしたとみて、間違いないだろう。

「も、申し上げます！」

「何事だ！」

その最中、悪い知らせが飛び込んできた。

〔五十五〕（後書き）

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

（五十六）

「曹操軍が動き始めました！」

第一報を告げる伝令。

報告された事実には、別に驚きはない。

なんせ、華琳は霸王を自負している。

この群雄割拠の中、ジツとしている訳がない。

「で、どこへ向かったんだ？」

「ハッ！ 北へ！ 官渡に向かったとの事！」

官渡？

あれか、関羽が顔良と文醜を斬って、袁紹が滅びるきっかけになった戦いか。

「北に向かったか……。いよいよ、足場を固めに入ったようだな。他には？」

「今のところは、特にございません」

「わかった。下がって良い」

冥琳は、腕組みをして思案中。

「とりあえず、曹操の目はしばらく、北に向いたようだが……」

「ん？ いい事じゃないか、こちらの脇腹を衝かれずに済むし」

「そうなのだが、一つ気がかりがあるのだ」

「気がかり？」

「ああ。杞憂に終われば良いが……」

あたしもだが、明命と蒲公英も首を傾げる。

「冥琳さま。江陵攻防戦でも、我が軍は優位に戦いを進めているとの事でし、新野もさほど脅威ではありませんが」

「そうだよ、冥琳姉さま。魏延には逃げられたけど……：：：？」

「いや、そうではないのだ。ねね、頼んでおいた調査だが、どうだ？」

ねねは、眉間に皺を寄せて、

「まだ、細作が戻らないのです。このような筈はないのですが……」
その時。

「も、申し上げます！」

さっきの兵士が、天幕に飛び込んできた。

……今度は、嫌な予感がする。

「何だ！」

「ハッ！ 呂蒙將軍から、急使が参りました！」

亞莎から？

確か、下ヒの劉備に備えている筈だよな……？

「よし、ここへ通せ！」

「ハッ！」

そして、息も絶え絶えな伝令が、担ぎ込まれるように入ってきた。

「み、美綴將軍と、周瑜都督にも、申し上げます」

「用件のみで構わん。何だ？」

「は、はい。劉備軍が、こ、こちらへ向かって進軍中。数は二万との事」

「何だと？」

「うむむ、どうやら、裏をかかれたのです……」

ガックリと項垂れるねね。

「やはりか……」

「冥琳？ まさか、読んでいたのか？」

「いや、可能性を考えていたのだ。劉備が動くかも知れぬ、とな」

「けどさ。呉に攻めてくるにしても体勢が整ってないし、第一その為
に亞莎と霰が備えていたんじゃない？」

「亞莎達は、広陵に拠って、劉備軍が万が一南下した場合の備えだ。
西進は想定していないだろう」

「……………」

「それに、これは事実だ……。ご苦労、下がって休め」
「は、ハッ！」

再び、伝令は担がれて下がっていった。

「綾子お姉さま、冥琳さま。ただちに、確認と偵察を！」

「そうだな。明命、頼む！」

「はいっ！」

飛び出していく明命。

「……どうやら、全て仕組まれていたようだな」

「仕組んだって、誰が？」

「恐らくは、諸葛亮だろう」

あの、はわわ軍師か。

いくらほんわかしていても、諸葛孔明はやっぱし只者じゃない、
って訳か。

「でも、この状態で兵を出す意味がわからないのです。徐州はまだ
まだ、大規模に兵を挙げるだけの余裕などありませんぞ」

ねねの意見は、至極もつともだろう。

……けど、あたしには思い当たる事がある。

「……義、かな」

「義、ですと？」

「そうさ、ねね。劉備は義を旗頭にしている。恐らくは、それが理
由だろうよ」

「綾子の推測は、正しいだろう。劉備と劉表は、先祖を辿れば同族
だからな」

冥琳も同じ意見か。

「そ、それだけの理由で、兵を動かしたというのですか？」

「劉備はそういう奴だ。とにかく、備えが必要だな」

「ああ。新野は五千を割いて備えさせよう。残りは、情報を集めて
からだ」

皆、慌ただしく動き出した。

数刻後。

流石は明命、手早く情報を集めてきていた。

「すると、率いる将は関羽。軍師は鳳統か」

「はい。下ヒには劉備と諸葛亮、張飛が残り、城に立て籠っているようです」

今度は、あの鳳統がいる。

それに、関羽は知勇兼備の名将。

……こりゃ、一筋縄ではいかないな。

「恋、蒲公英。二人で関羽に当たってくれ。万が一、という事もある。冥琳、指揮を頼む」

「どうする気だ？」

「あたしが新野を落とす。このままじゃ、挟み撃ちだろ？」

「しかし、それならば、綾子が迎え撃つべきだ」

「いや、新野城は放っておけば厄介だけど、かと言って正面から攻めても粘られたらまずいだろ？」

「しかしな。それに、策はあるのか？」

「ある。……あたしと明命で」

「はうあっ？ 綾子お姉さま、一体どうなさるおつもりですか？」

「まずは、その策を聞かせて貰おう。その上で、判断する」

そうだな、冥琳も明命も、それを話さない限り、納得はしてくれないだろうし。

「わかった。まずは……」

あたしは、皆に説明を始めた。

数日後。

まだ、劉備軍は到着していない。

一方、あたしの軍は、三万で新野城を完全に包囲し、二万は周囲の警戒に当たっている。

トラメガでもあれば、この状態でお約束の奴をやりたところだけど。

……そんな物はないので、使者を送って降伏勧告。

相手が受ける訳もないんだけど、やらないと不自然、という訳で。ちなみに、魏延は案の定、城内にいた。

劉磐と文聘は、襄陽まで逃げたみたいだ。

まあ、魏延がいてくれないと、あたしの策が破綻するんだけどさ。そして、降伏勧告が撥ね付けられた後で、夜を待って、正門と裏門から、一斉に攻撃開始。

ただ、攻城兵器の用意がないのと、犠牲を出したくないので、矢を射かけるだけに留めさせた。

それでも三万対二千、飛び交う矢の本数にも差があるから、劉表軍は必死だ。

「さて、行こうか」

「あの、本当に綾子お姉さまも行かれるのですか？」

心配そうな明命の頭を、軽く撫でてやる。

「あたしが行かなきゃ、コレ使えないし。大丈夫だって」

「それはそうですけど。でも、私達と同じようには動けませんよね？」

そりゃそうだ。

いろいろとチート気味なあたしでも、そこまで身のこなしは軽く出来ないし。

「ま、何とかなるって。それより、そろそろいいだろう」

暗闇に乗じて、あたし達は城壁に近付く。

上には、見張りの兵士が……三人か。

「まず、あれを始末する」

以前使った、漆黒の矢を取り出す。

キリキリキリ。

ヒュッ！

「ぐうっ！」

まず、一人。

ヒュッ！

ヒュッ！

「うぐっ！」

「ぐふっ！」

短い叫びを上げて、見張りは倒れた。

「よし、今だ」

「は、はいっ！」

ヒュンヒュン。

ビュッ！

ガチン！

明命達は、鍵縄を投げ、城壁に引っ掛けた。

まず、先発隊が慎重に上っていく。

そして安全を確認後、次々に縄を上る。

さながらロッククライミングか、忍者映画の世界。

……もちろん現実だから、落ちたら死ぬし、敵に見つかったら終わりだけだな。

「綾子お姉さま、急いで」

「ああ、了解」

最後に、あたしと見張りで残っていた兵士が、縄を上る。

……しかし、結構腕にくるな、これ。

足場もないから、とにかくしつかりと縄につかまるしかないし。

……我ながら、ちょっと無謀だったかも。

今更後悔しても遅いし、頑張って上りきらないと。

作戦は始めてしまったから、ここで中止なんて出来っこない。

「クッ、このっ……」

「もう少しですよ、お姉さま」

明命の声が、間近に聞こえる。

手のひらの感覚がなくなりかけた頃、漸く城壁に手がかかった。既に上っていた兵が、腕を掴んで引っ張り上げてくれる。

「ハア、ハア……。実際にやると、結構しんどいな」

「もう、だから無茶だつて言つたじゃないですか」

呆れたように、明命に言われてしまう。

「悪かったよ。もう、これっきりにするよ、つーか無理だわ、これ」
「そうして下さいよ、本当に」

「わかつたよ、あたしも身に染みたからさ。……さて」

城壁の上から見ると、ホントに小さな城だな、ここ。

住民は避難したらしく、街はほとんど真っ暗。

「じゃ、行くか。くれぐれも慎重にな」

「……説得力ないです、綾子お姉さま」

明命、ホントに悪かつたって。

戻ったら、何かでお詫びしとかなきゃな……。

物音を立てないよう、全員が軽装。

あたしもそうしたいんだけど、万が一があつたら、と強く言われたので、薄い鎧を着込んでいる。

……だから、余計に縄上りでしんどかつた気がするぞ？ ま、文句を言っても始まらないか……。

あたしは、なるべく音を立てないように、慎重に城壁から下りた。

そして、敵本陣らしき場所を発見。

「魏延將軍！ 裏門が押されています」

「今少し踏ん張れ、と伝えろ！ ええい、ワタシが打って出られれば」

「なりませぬ！ 將軍がおられなければ、もはやここを守り抜くのは困難となります」

「わかつている！ お前達は、裏門の援軍に。ワタシは状況を見て、どちらかに向かう」

「ハハッ！」

お、魏延が一人になったっぽいな。

あたしは手早く鎧を脱ぐ。

物音を一切立てないようにするには、やはり邪魔だから。

「綾子お姉さま」

「よし、行くぞ」

明命に従い、匍匐前進で魏延に近付く。

あまり近寄り過ぎると感付かれるから、間合いをはかりつつ、な。そして、懷からケータイを取り出す。

予めモードは切り替えておいたから、決定キーを押すだけ。

「ワン、ワンワンッ！」

いきなり、あたりに犬の鳴き声が響き渡る。

「あ、あひゃっ！」

魏延の奴、慌ててる慌ててる。

……蒲公英が使った犬の鳴き声を、ケータイで録音。

それをアラームにセットして、最大ボリュームで再生した、ってのが種明かし。

「んにゃあっ、ど、どこだっ！」

その状態で明命に持たせて、魏延の周りを走って貰った。

犬が四方から寄ってくるように聞こえてるだろうな。パニクリまくりの魏延、とうとう城内を逃げ始めた。

パニクリまくりの魏延、とうとう城内を逃げ始めた。

「ぎ、魏延將軍？ 如何なさいました？」

「うわーっ、んにゃーっ！」

明命が巧みに追い回すので、魏延はますますパニックに。

「お、おい！ 將軍があれじゃ」

「ど、どうする？」

「どうするって……」

城内の劉表軍兵士に動揺が走る。

「よし、今だ。火を放て！」

「応っ！」

明命の部下が、城内のあちこちに火をつけて回る。

「て、敵襲だ！」

「裏切り者がいるぞ！」

こうなれば、もう戦闘どころじゃない。

門を固めていた連中までも、右往左往を始めた。

「えい！」

ドカツ！

「ぐはっ！」

「ぐう！」

隙だらけのそいつらを、城内で見つけた模擬剣で、片っ端から気絶させていく。

……必要のない人殺しは、あまりしたくないからさ。

「美綴將軍！ 城門を開けます！」

「おう、頼むぜ！」

ギイイイ。

開いた城門から、恋がなだれ込む。

「り、呂布だあっ！」

「……抵抗すれば、殺す」

「わ、わかった！ 降伏する、するから命だけは！」

ガシャン、ガシャン。

あちこちで、武器を捨てる音がする。

「上手くいったようですね」

「ああ。そう言えば、魏延は？」

「どけどけどけ！ うわーっ！」

と、あたしの横を猛スピードで走り抜け……そのまま、城門から出て行った。

「綾子お姉さま……どうしましょうか？」

「……ヘタに止めると、こっちが大怪我しそうだ。ほっとう、城は落ちたんだし」

「そうですね……」

劉表軍の兵士は、ほとんどが降伏。

とりあえず武装解除の上、城内の一角に押し込める事にした。

「また手柄を立てたな、綾子」

「……皮肉か、それ？」

「事実だがな。無茶をしても結果を出すとは……全く、これでは雪蓮と変わらんぞ？」

我が軍師、どうやらややご立腹らしい。

「まあ、結果オーライって事で」

「私の知らない言葉で誤魔化そうとしても、そうはいかないが？」
いや、別に誤魔化してないけどなあ。

「伝令、伝令！ 劉備軍を確認しました！ 旗は『関』と『鳳』！」
「来たな」

さて、今度は手強い相手だな。

……でも、勝てるさ。

きつと、な。

ゝ五十六ゝ（後書き）

感想で、右左がおかしいとのご指摘をいただきました。

鏡じゃあるまいし、右と右がぶつかる訳ありませんよね……。

大変失礼致しました。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

ゝ五十七ゝ（前書き）

劉備以下の面々の扱いが……かも。
好きな方々には、申し訳ない展開になっています。
悪しからず。

（五十七）

相對する、軍勢。

この規模で向きあうのって、あたしは初めてかも。
数だけなら黄巾党もあったけど、あっちは賊軍だったしな。

「劉玄德が一の家臣、関雲長！ 義により馳せ参じた！」

関羽が、前に進み出てきた。

「卑劣なる呉の者共よ！ 我欲を満たさんが為に揚州のみか、荊州までも兵を進めるとは。恥を知れ！」

よく通る声で、関羽がこちらに向かって叫んだ。

「舌戦、って奴か？」

「そうだ。あの程度で我が軍に動揺を与える事はない。放っておいて構わん」

冥琳はそう言うけど……。

「どうした？ 我が武に恐れを成したか？ それとも、身に覚えがあつて後悔でもしているのか？」

「……なあ。ホントに出なくていいのか？」

「ふむ。舌戦に応じなければならぬ、という決まりはないが……」

「流石、臆病者の集まりよ！ 美綴に呂奉先、周公瑾と、揃いも揃って見かけ倒しの張りぼてか？ 畏れ多くも帝から賜りし官位など、貴様らにはそぐわぬわ！ 即刻返上し、どこへなりと失せるがよいわ！」

「……綾子。出る」

と、恋が得物を手にした。

「恋？」

「……関羽、綾子の事、悪く言う。赦さない」

静かな口調に、怒りが感じられる。

「挑発に乗るな。正攻法でも、我が有利なのだ」

冥琳はそう言うけど……兵達の間にも、険悪な雰囲気広がって

いる気がする。

「いや、相手は舌戦を挑んで来ているんだろ？　なら、こっちもそれでやり返せばいい。恋、ちょっと頼みがある」

「……関羽、恋が倒す？」

「いや、鳳統が何か企んでいたらヤバイ。だから、あたしが合図したら……」

恋が頷くのを確かめてから、あたしは冥琳を見る。

「出るぞ。これは、主将としての命令だ」

「止めても無駄なのだろう？　なら、私は何も言わんよ」

冥琳と言葉を交わし、あたしは馬に跨がった。

両軍から視線を浴びまくりの中、あたしも進み出た。

「望み通り出てきてやったぜ、関羽！」

「来たな！　僅かばかりの武功に驕り、陛下の恩を忘れる輩が！」

いやいや、随分悪人認定されてるねえ、あたしは。

「では聞くが、アンタはそれを陛下に確かめたんだろうね？」

「その必要などない！　現に貴様らは、陛下の親戚筋にあたる劉表殿に対し、戦いを挑んでいる！　何よりの悪逆の証左ではないか！」

あゝ、その理屈で来るか。

「なら聞くが、先に軍を催したのは劉表だぜ？　明らかに、楊州を伺ってな」

「それは、孫策の野心を見抜いての事！」

「そうかな？　だいたい、楊州にしても、孫策が正式な牧だぜ？」

それに従わない奴を討伐するのは当然だ。あと、もし孫策に野心あり、って言うならさ。勅令で討伐令が出るなり、問責の使者が来て然るべきじゃないのか？」

「そ、それは……」

お、困ってる困ってる。

即興だけど、冥琳とシミュレーションしたからな。

「そういう劉備こそ、随分と腹黒いじゃないか」

「な、何っ？」

「だってそうだろう？ 劉表の救援を口実に、何の咎もない孫呉に攻め入るとはな。義が聞いて呆れるよ」

「貴様っ！ 我が主人を愚弄するか！」

「お互い様だろ、それは。アンタの言う通り、もし孫呉に義がない、つてのなら、あたしは最初からここにはいないさ」

「くっ……。減らず口を。字も真名もないなど、人として欠落している輩が！」

ネタが尽きたらしいな。

あたしの個人攻撃ぐらいなら、どうって事はない。

「関羽」

「な、何だっ！」

「この世の人間は、全て字と真名が必要か？ それがなければ、人間じゃない、とでも言いたいのか？」

「そうではない！ この大陸に抛り、民の上に立つ者として、相応しくないではないか！」

「だとすると、相当薄っぺらだな。関雲長って人物は」

「何っ？」

眼光だけで相手を殺しかねない、そんな鋭い視線を浴びる。

でもさ、ガン飛ばされたぐらいでビビるあたしじゃないんだよね。

「名は体を現す。でも、ご大層な名がついた人物が、ホントに皆立派か？ 真名は確かに聖なるモノ、でもあたしはない事を気にした事はない」

「……………」

「少なくとも、あたしはこうしてみんなに必要とされている。ただ利用する、されるだけの関係じゃない。それ以上、何を望む？」

「う……」

よし、勝ったな。

悪いけど、あたしは口喧嘩でも負けた事はないのさ。

そんな奴に、舌戦を挑むにはお前さんでは役不足だったな、関羽？

「義ならば、こっちにこそあるぜ？ さて、話は終わりだな。関羽、一応聞くが……退く気はないか？」

「ふ、巫山戯るな！ この期に及んで！」

「そうかい。じゃ、仕方がないな」

あたしは、大きく手を振る。

ヒュッ！

陣から放たれた、一条の矢。

まっしぐらに敵陣に飛び込むと、関羽の牙門旗を射貫いた。

「な、何をする？」

「交渉決裂だろ？ これから殺り合うってのに、何をするも何もないだろ？」

「き、貴様っ！ 我が青龍刀の錆にしてくれるっ！」

敵陣で何か騒いでいるが、関羽はすっかりいきり立っている。

ジャーン、ジャーン。

背後で銅鑼が鳴り、一斉に矢が放たれた。

慌てて敵陣も、動き出した。

「じゃあな、関羽。決着は、戦で付けようぜ」

あたしは、悠然と戻る。

入れ違いに、恋が陣から出てきた。

「ま、待て！ 私と勝負しろ！」

「そうしたいんだけど、あたしはここまでさ。アンタの相手は」

「……恋がする。関羽、行く」

「クッ！ し、仕方がない！」

関羽は観念したのか、恋と打ち合い始めた。

……悪いけど、恋には勝てないよ、アンタじゃ。

一騎打ちをきっかけに、両軍は動き出していた。

とは言え、歩兵主体なのは劉表軍と同じ劉備軍。

しかも、訓練期間が短かったのか、練度は今ひとつっぽい。

「いっけー！」

「敵陣を攪乱します！」

蒲公英の騎兵が敵陣を突き崩し、明命が混乱した敵を確実に追い詰める。

「冥琳」

「綾子、どうかしたか？」

「劉備軍、確か二万だったよな？」

「そうだな。それがどうか……」

と、冥琳の顔色が変わる。

「……確かに妙だな。いくら何でも、数が少なすぎる」

「ああ。この辺りで、兵を伏せるとしたら？」

「長坂坡だろうな。あそこは川があるせいで、ちょっとした林になっている」

「場所は？」

「我が軍の、背後に当たる。……どうする？」

「冥琳は、このまま本陣を指揮してくれ。そっちは、あたしが対処する」

「わかった。だが」

「無理はしないさ。じゃ、頼んだぞ？」

あたしは、密かに兵を集める。

乱戦模様になって、弓兵の出番はあまりない。

だから、それを移動させる事自体は、不自然じゃない。

……さて、気付かれないようにしないとな。

「どうだ？」

「ハッ！ 間違いありません。長坂坡に敵影を確認！」

周泰隊の兵士が、そう報告してきた。

明命本人が戦闘している最中、流石に連れて来られない。

なので、代わりにベテランを一人、貸して貰った訳。

期待通り、きっちりと敵情を探ってきてくれた。

「で、将は？」

「はい。どうやら、鳳統が率いているようです」

「え？ 魏延じゃないのか？」

「いえ、それらしき将は見当たらず。その代わり、特徴のある大きな帽子を被った、小柄な将を見ました」

間違いなさそうだな。

しかし、あのあわわ軍師がねえ。

確かに、伏兵の指揮ってのは難しいし、その意味では適任ではあるんだけど。

……でも、危険は承知の筈。

もう、なりふり構わず……そういう事か？

「よし。風下から火矢を放つ。そして、出てきたところを、一斉攻撃だ」

「は？ しかし、火矢ならば、風上から放つべきでは」

兵士から、戸惑いの声が上がる。

「わかってるさ。でも、相手が鳳統ならば、その程度の裏はかかないとな。頼んだぞ」

「は、はあ……」

ヒュンヒュン！

風向きに逆らう格好で、火矢が林へ飛び込む。

勿論、それだけじゃ火事にはならないけど。

慌てて飛び出してくる、劉備軍の兵士達。

……案の定、鳳統の制止も効かない、か。

けど、これで伏兵としての意味はなくなった。

「よし！ 今だ、一斉射撃！」

「応っ！」

ヒュッ、ヒュッ！

グサッ！

「ギャッ！」

飛び出せば、こうしてハリネズミにされてしまう。

かと言って林に留まれば、少しずつ広がり始めた火に包まれる。

「皆殺しにされなくなかったら、投降しろ！」

あたしは、林に向かって叫ぶ。

すると、バラバラと、武器を捨てた兵士が出てくる。

「よし、そのまま大人しくするんだ」

ゆっくりと、包囲を狭める。

あたしも一歩、林に近づいた。

ビュッ！

と、何か質量のあるモノが、あたしに向かってきた。

ガキン！

すかさず、倚天の剣で受け止める。

「流石はお姉ちゃんなのだ」

「な……お前は！」

あたしに向かってきたのは、蛇矛を構えた張飛だった。

魔女みたいな帽子を被っていたのは、どうやらこちらを騙すつもりだったのだろう。

「へへー。悪いけど、お姉ちゃんは、ここで討ち取らせて貰うのだ！」

「下ヒは……そうか、虚兵かつ！」

牙門旗が残っていれば、誰だってそこに将がいると思う。

これを奪われる事は、武将としては恥辱の限りだからだ。

……それを捨ててまで、張飛がここに意味。

「うりやりやりやりっ！」

鋭く繰り出される蛇矛。

ガキン！

キン、キン！

受け止めるが、その一撃一撃が、重い。

「流石は張飛だな」

「へへーん！ まだまだなのだ！」

ビュオッ！

「！」

ガアン！

速さなら、恋や星の方が上だろう。

だが、受ける度に、手が痺れる。

あたしは一旦距離を取り、青紅の剣も抜いた。

「二刀流なのか、お姉ちゃんは！」

「まあな。流石に張飛相手だと、本気出さないとヤバイんでな」

「鈴々も望むところなのだ！　うりやりやりゃー！」

ビュッ、ビュッ！

キン！

キイン！

全て受け流す。

「仕方がない。おい、あたしが張飛を抑える！　その間に敵兵を殲

滅させろ！」

「そうはいかないのだ！」

ヒュンヒュン！

と、大量の矢が飛んできた。

そして、

「ワッッ！」

森の中から、大量の兵が出てきた。

……どうやら、塹壕でも掘って隠れていたようだ。

優勢だった筈が、忽ち形勢逆転。

「鈴々ちゃん！」

「ばっちりなのだ、朱里！」

「美綴さん、あなたの負けです。投降して下さい」

「やっぱりか……。しかし、全軍で来るとはね」

劉備と諸葛亮、そして鳳統。

「美綴さんさえ破れば、呉軍は総崩れになります」

最初から、あたしが狙いだったとはね。

ホント、買い被られたモンだ。

「美綴將軍！　ここは我らが引き受けます！　今すぐ本隊へ！」

「させないのだ！」

「ギャアッ！」

あたしを庇った兵士が、張飛に刺殺される。

「劉備。何故、あたしを狙った？」

「あなたがいる限り、孫策さんには勝てませんから」

「調べさせて貰いました、美綴さんの事。武功、人望、あらゆる面で、あなたは脅威。だから、排除するには全力で当たるしかない……そう結論を出したんです」

諸葛亮は、俯きながら言う。

「言っておくけど、雪蓮は強いぜ？　あたしなんて、微々たるモンさ」

「それは謙遜です。孫策さんは、美綴さんがいればこそ、赫々たる戦果を挙げています」

うーん、引き下がる気はなし、か。

「でも、あたしを倒してどうするつもりだ？」

「孫策さんとの、駆け引きに使わせて貰います」

劉備が、言い放つ。

「お断りだ。あたしのために、雪蓮に迷惑はかけられない。討つ気なら、かかって来いよ？」

「……これでも、ですか？」

諸葛亮は、こちらの兵に弓を、槍を突きつける。

「兵士さん達の命、全てと引換にしてでもですか？　その決意は」

「脅すつもりかい？」

「ええ。本意ではありませんが、仕方ありません」

「そうか。けどな、あたしはアンタらに利用されるつもりもないし、兵達をむざむざ殺させもしない」

……そう、あたしには見えていたから。

ヒュンヒュンヒュンヒュン！

「ぐわっ！」

「ぐはっ！」

あたし達を包囲していた劉備軍の兵士が、次々に倒されていく。

「みんなっ、いっくよっ！」

「姐御に手を出す奴は、俺がまとめて地獄へ送ってやるぜっ！」

心強い味方の登場。

「綾子お姉ちゃんを虐める奴は、シャオがぜったい許さないんだから！ 刃霧、遠慮なんてする事ないわよ！」

「わかってますって、シャオ様！ おりゃおりゃおりゃあっ！」

はは、張り切ってるな、シャオも刃霧も。

「はわわわわ、ど、どうしてこんな事に……」

「残念だったな。けど、あたし達の本当の強さは、これだ！」

「あわわわわ、と、桃香さま」

「桃香お姉ちゃん、逃げるのだ！」

慌てて、遁走する劉備達。

……けど、お前さん方は逃げられないよ。

「綾子さま！ 遅くなりましたっ！」

「遅れて済まぬ！ 皆の者、綾子殿をお守りせい！」

上手く、裏をかいたつもりなんだろうけどさ。

霰達が、そこまで間拔けな訳ないだろ？

「劉備。まだ逃げるつもりか？ それとも、向かってくるかい？」

「……うう、負けちゃった……」

ガックリと、その場に膝を付く劉備。

……終わったな、どうやら。

（五十七）（後書き）

実際の距離感からいけば、かなり無理のある展開かと思います。
……ご都合主義、という事でご容赦を願えば幸いです。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

（五十八）

「シャオ、刃霧。それに亞莎、霰。ホントに助かったよ、ありがとう」

新野城に入り、落ち着いたあたしは、駆けつけてくれたみんなに礼を言った。

実際、危ないところだった。

……まさか、劉備が全軍でやってくるなんて、流石に誰も想定していなかったし。

まあ、あたしの知識の中にある劉備って、お世辞にも義理堅いと言えなかった呂布を匿って、城を乗っ取られるようなエピソードがあった人物だし、やりかねない、と言われればそうだったんだけどな。

「ううん。綾子お姉ちゃん、無事で良かった。ね、刃霧？」

「ええ。ホントに良かった、姐御を助けられて」

「申し訳ありません。劉備への備えを任されているながら、虚兵の計にかかってしまっただけ」

「いや、亞莎だけの責ではない。綾子殿、私にも落ち度があったのだ。済まぬ」

「……いや、あたしは誰も責める気はないぜ？ ホントに感謝の気持ちしかないんだ。だから、おかしな責任を感じないでくれ」

みんな、本気であたしの事を心配してくれてるんだよね。

おっと、ちょっとウルっときちゃったかも。

「さて、劉備達の処分だが。どうするのだ、綾子？」

冥琳の言葉で、場が引き締まる。

「どうするって言っても。あたしの一存で決めていい事じゃないだろう？」

「そうだな。ただの一兵卒ならともかく、劉備は仮にも徐州牧。他の者ならいざ知らず、本来なら朝廷に伺いを立てるべきだろうな」

なんせ、捕虜が劉備に關羽、張飛、おまけに諸葛亮に鳳統、ときたもんだ。

ゲームなら配下には出来ないけど、放つと厄介だから斬首、というレベルだぜ、この顔ぶれ？

もちろんあいつらを殺す気もないし、そんな事をしたら今度はあたしが糾弾される立場になる。

……理想が先行しすぎて好きになれないタイプではあるけど、少なくとも世のため人のため、という活動はしているんだ。

どちらにしても、あたしの独断で処理は出来ない。

「ひとまず、雪蓮に決めて貰おう。冥琳、使者を立ててくれ」

「わかった」

「明命。劉表軍の動きは？」

「はい。江陵は雪蓮さまが間もなく攻め落とす勢いです。兵のほとんどが江陵と江夏に集まっていて、襄陽に残った兵が動き出す気配はありません」

「となると、こっちも当分動きはない、と。引き続き、情報収集を頼んだ」

「はいっ！」

「それから蒲公英。魏延は見つかったか？」

「うーん、探しているんだけど、どこに隠れたか全然見つからなくて。脳筋だから、何かを企んでいるとかじゃないとは思うけど……」

実際、戦闘となれば厄介だけど、そうでもなければ蒲公英の言う通り、脅威にはなり得ないかな。

不意だけ衝かれないよう、注意しておけば問題ないだろう。

「美綴將軍。捕虜の劉備が、お目通りを願っております」
劉備が？

今更、あたしに何の用があるんだ？

「それで、用件は？」

「それが、美綴將軍に直接話したい、と」

さて、どうしたものか。

処分を下す必要はないから、あたしの方は特に用はない。

……ただ、やっぱり歴史に名を残した人物。

話ぐらい、聞いておくべきかもな。

「冥琳。あたしの仕事は、特にないな？」

「ああ。劉備軍兵士の武装解除を進めているし、周囲の警戒は恋が当たっている。少しなら、構わんぞ？」

「わかった、なら少しだけ、外すぞ？」

あたしはそう答えてから、

「劉備に会う、と伝えておいてくれ。ただし、諸葛亮や関羽達はダメだ。劉備とサシでなら、とな」

「はっ！」

釘を刺しておかないと、劉備一同全員と話すハメになりかねない。結びつきの強さは、呉の面々に匹敵するぐらいだから。

……それに、あたしの頭じゃ、諸葛亮や鳳統がいたら、言いくるめられかねない。

ただでさえ多忙な冥琳を、こんな事で引っ張り出したくないし。

「待ってくれ、綾子殿」

と、霰が声を掛けてきた。

「何だ？」

「劉備と話をするのか？　なら、私も同席させて貰えぬか？」

サシで、って言った以上、こっちが二人ってのはどうなんだろう？

立場的にはこっちが上だから、何とでも言えるとは思うけど……。

「何か理由でも？」

「うむ。劉備は義を旗印にしていた英雄、と聞いている」

「確かにそうだな。で？」

「綾子殿も知っての通り、私の主義も『義』。ならば、どのような

『義』を志していた人物か、興味が湧こうというもの」

なるほどな、そういう理由ね。

「それに」

「ん？」

「綾子殿の手並みは存じているが、仮にも今の貴殿は総大将。いかに陣中で捕虜相手とは申せ、不用心が過ぎぬか？」

「あたしの心配はありがたいけどさ。そこまで抜けてるつもりはないぜ？」

「そうではない。私でよければ護衛を兼ねて、同席させていただきたい、それだけの事」

そりゃまあ、霰がそばにいれば安心だけどさ。

……まあ、単なる興味本位、って訳でもないなら、問題ないか。

「いいぜ。一緒に来てくれ」

「忝ない」

「失礼致します。劉備を連れて参りました」

「ああ、入ってくれ」

「ハッ！」

あたしの天幕に、後ろ手に縛られた劉備が、兵士に連れられて入ってきた。

「ご苦労さん。下がってくれ」

「ははっ！ 外にありますので、何かありましたらお知らせを」

「ああ」

さて。

あたしは腰を上げ、倚天の剣を手にした。

「あ、あの……」

劉備が、顔色を変える。

……そういう事か。

「心配すんな。無抵抗の相手を斬る趣味は持ちじゃない」
ブツッ。

劉備の縄を切ってやる。

「話をするのに、アンタを縛ったままってもアレだからな。ま、

座れよ」

床几を出し、勧めた。

「あ、ありがとうございます……。お優しいんですね」

「ん？ あたしが？」

「はい。連合軍の時は、あまりお話する機会もありませんでしたし。それに、伝え聞く武勇伝を聞かされる度、もっと怖い人なのかな、って」

「……あたしの本意じゃない噂が多い気がする。どうせ、あたしが化け物みたいに言われるものばっかだろ？」

「そういうのもありましたけど。……ところで、そちらの方は？」

劉備が、霰に目をやる。

「ああ、申し遅れた。私は孫呉の将、姓を太史、名を慈、字を子義と申す。お初にお目にかかる、劉備殿」

「あ、はい。こちらこそよろしく……。え」と

「太史慈、で結構」

「じゃ、よろしくお願いしますね、太史慈さん♪」

捕虜の割には、暗さを感じさせないな。

このぼわぼわした感じ、地のままだらう。

「で、あたしに話がある。そう聞いたけど」

「はい。美綴さんに、どうしても聞きたい事がありました」

「あたしに？ ま、言ってみな」

「美綴さんは、天の御遣い様……。なんですよ？」

「うーん……。そんなようなもの、かな？ ちゃんとしたのなら、

魏にいるけど」

「北郷さんの事ですよね？……。でも、美綴さんの方が、より御遣い様、って感じがします」

「あたしが、ねえ」

「北郷さんは、キラキラした服を着たり、私達の世界にない知識とかを持っているみたいですけど。めいど服、とか言うのも」

メイド服？

「ちょっと待て。メイド服を考え出したのは、北郷なのか？」

「え？ そうだって聞いてますけど。他にも、せえらあ服とか、すくみず、とか？」

……月達が着ていた服、あれの出所は奴か。

つか、セーラー服にスク水って。

……今度会ったら、問答無用でシメる必要があるな。

「以前、孫策さんに言われましたよね。私は甘い、って」

「ああ。？水関の時だったか？」

「はい。……美綴さんも、そう思っていますか？」

伺うように、あたしを見る劉備。

「そうだな、あたしも雪蓮と同じかな。アンタの理想は確かに正しいし、話し合いで物事が解決するなら、それに越した事はないさ。けど、それなら何故、この時代も、昔も、戦が絶えないと思う？」

「それは、話し合う努力をしないとか、最初からそのつもりがないとか……」

「それもあるかもな。勿論、言っても聞かない奴なんぞ、いくらでもいる。けど、本質的には、戦争なんて割に合わないだろ？ 人は死ぬ、金にかかる、国土は荒れる……まあ、対価に見合う事はないな」

「ですよね。なら、どうして……」

「一つは、人間の欲望じゃないのか？ コイツには際限がないし、これを満たすのは不可能に近い。足りなければどうするか、他から奪い取るなり、まだ所有者のいないところを自分で切り開くしかない」

「でも、それじゃ獣と同じです！」

「そう。なら、そいつらを抑えこんで、平和を作るにはどうしたらいいと思う？」

「ですから、解り合えるまでとことん話し合いをすればいいんです」

「話し合いも別に悪いとは言わないぜ？ けど、その為には、話し合いの出来る環境を作るのがまず先じゃないのかな」

「……………」

「欲と欲がぶつかり合って、戦いになっているんだろ？ その当事者同士が、いきなり争いをやめてさあ話し合いだ、なんて出来る訳がない」

「じゃあ、美綴さんはどうしろ、と言うんですか？」

あたしに食い下がられてもなあ。

そうは思うけど、劉備は真剣だ。

「アンタは否定するだろうけどさ。力には力で対抗するしかない、あたしは思うんだ。その上で、話し合いの場を作る。お互いに認め合った上で、な」

「……じゃあ、誰かが悲しんだり、苦しんだりする事は避けられない……」

劉備の顔は悲痛そのもの。

「そんなのは理想さ。人は生きていれば、喜怒哀楽がつきまとうモンさ」

「……強いんですね、美綴さんって」

「そうかな？ 割り切っていないと、めんどいだけだし。あたしは出世とか、権力とか、そんなモンはなるべく関わりたくないだけさ」

……お、悲しげだった顔が、笑ってる。

「何だか、負けちゃったのに、今は全然悔しくないなあ。私じゃ、勝てなくて当たり前だもん」

……なんか、地が出てないか？

「劉備殿。一つだけ、伺いたい。宜しいか？」

あたし達のやり取りを黙って聞いていた霰が、初めて喋った。

「はい、どうぞ。太史慈さん」

「忝ない。劉備殿は、義を旗に掲げて今まで来られたと聞き及びます。では、貴殿にとっての『義』とは？ それをお聞かせ願いたい」

「私の義、ですか。……いくつかあります」

「ほう。一つだけではない、と？ ますます興味深い」

「と言っても、大した事でもないんですけどね」

劉備は苦笑いしてから、

「まず、漢王朝への『義』、です。私はこれでも中山靖王の末裔、今の皇帝陛下とは親戚に当たりますから。『義』を尽くすのは当然です」

「なるほど。次は如何なる『義』ですか？」

「はい。私には、愛紗ちゃんと鈴々ちゃんという、かけがえのない妹がいます。血は繋がってませんけど、交わした義姉妹の誓いは、私には絶対不滅のもの。朱里ちゃん、雛里ちゃんも、やっぱり大切な仲間です。みんなとの繋がりが、これも『義』だと」

見た目は頼りなくても、やっぱしこの娘は劉備玄徳なんだな。

一切の迷いも嘘もない。

「最後に、もう一つだけあります。私を信じてついてきてくれる兵士さん、民の皆さん。この人達が笑って幸せに暮らせるように、これは私の願いでもあります。でも、この乱世に立った私の義務、そうも思っています。これも、『義』です」

「……………」

霰はジツと聞き入っていたが、徐に目を見開いて、

「いや、貴殿がどういう人物か。その一部を垣間見られた気がします。非常に純粋な義の心をお持ちのようだ」

「エヘッ、ありがとうございます♪」

「ただ……。惜しいかな、純に過ぎる気がします。綾子殿が申される通り、理想が先走り過ぎておりますぞ。人が従うのは、理想のみに非ず。これからは時間もたんとあります故、よくよく考えあれ」

「……そうですね。ご忠告、ありがとうございます」

劉備は、丁寧な霰に頭を下げる。

霰もまた、礼を返した。

翌日。

シャオと刃霧に、劉備一行の警護を託して、送り出した。

関羽は最後まであたしを睨み付けたまま、諸葛亮と鳳統は怯えたままで。

……後は雪蓮が判断する事だ、アイツらの運命がどうなるかは、な。

「綾子殿。あれで、宜しかったのか？」

「霰、何が言いたい？」

「いえ。劉備殿は、真名を預けたいようでしたが」

「ああ、そうみたいだな。……でも、あたしには受ける気がない」

「何故です？ 真名を許すというのは信頼の証。綾子殿は、劉備殿を信用できぬ、と？」

「……いや。信用しない訳じゃないんだ。ただ、生きる道が決定的に違うって事もわかったからさ。あたしと劉備じゃ」

ふと、あたしは気になっていた事を思い出した。

「そうだ。霰に一つ、聞こうと思っていた事があったっけ」

「ほう。伺いましょう」

霰は、微笑みながらあたしを見る。

「劉備と霰、違いはあるけどどちらも『義』に生きている、そうだろう？」

「左様ですな」

「もし、雪蓮やあたしよりも先に、劉備と出会っていたら。どうしていた？」

「さて……。意地悪な質問ですな」

そう言いながらも、霰は笑っている。

「意地悪ってつもりはないんだけどなあ」

「わかっております。仕官するかどうか、という事であれば。答えは『否』です」

「即答だな」

「はっはっは、それはそうです。私は、劉ヨウ殿を裏切るつもりが毛頭なかったのですぞ？ それが、私の『義』でしたからな」

「けど、今はこうして、ここにいてくれている」

「雪蓮殿と、綾子殿がいればこそ、です。ご自身も仰っていた通り、武を認めたからこそ、話し合いが成り立ったのです」

「……そっか」

「しかし、感心しましたぞ。あの劉備殿を諭された一言一言が、誠に説得力がありました」

……あれ、実は冥琳とか風の受け売りなんだよね。

もし、劉備と舌戦になったらイヤだったから、冥琳と打ち合わせしている時に話し合っておいた。

あと、別れる前に風から、万が一の事があると、という事でレクチャーがあった。

……でなきゃ、あたしの頭であんな事は考えられないって。

「私も、星殿と同じく、貴殿に仕えるべきでしたかな？」

「……冗談でもやめてくれ。ただでさえ、それで雪蓮にからかわれているんだから」

「冗談ではないのですがな。ま、お困りのようですし、このあたりで止めておきましょう」

……なんか、おもちゃにされる事が多くないか、この頃のあたしって。

「綾子お姉さま！ 襄陽の様子を見て来ました！」

お、明命が戻ってきた。

「わかった、早速軍議を開く！」

結局、勢いが完全にこちらにある以上、襄陽でも大した抵抗は受けなかった。

むしろ、劉備の救援が阻止された事で、劉表軍の士気はがた落ちだったようだ。

包囲しているうちに投降兵が相次ぎ、とうとう劉表は、益州に落ち延びたらしい。

蔡瑁一族は江夏で戦死、それを見て荊州南郡も相次いで降伏。

こうして、荊州は孫家の支配下に入った。

ちなみに劉備一党については、雪蓮が死を与える事はしなかった。それどころか、

「わたし達の邪魔をしなければ、民のために活動するのは好きにしているわよ」

とお墨付きが出たため、ボランティア活動みたいなものに従事していたりする。

関羽達は渋い顔をしていても、当の本人がそれで満ち足りているんじゃない、もう敵として立ちふさがる事もなさそうだ。

……まあ、それはいいとして、だ。

「じゃ、綾子。頑張ってね♪」

「後は頼んだぞ」

そう言い残し、雪蓮達は建業に戻っていく。

そして、襄陽に残されるあたし。

「さてさて、お姉さん。何から始めましょう？」

「やはり主の側が一番ですな」

風に星、更に千花、霞、恋、ねね、紅蓮、そして蒲公英に囲まれているあたし。

「……なあ。普通、こういう場合は蓮華とかシャオが、ここにいるべきなんじゃね？」

「いえいえ。もう決定事項ですからねえ。そんな訳で頑張りましたよね、綾子さん？」

何故か嬉しそうな千花。

……なんでさ。

思わず、衛宮の口癖が出ちゃった。

いくらこの顔ぶれだからって、あたしが荊州牧代理はないだろ？

「心配しなくても、正式な人が任命されるまでの間だからね」

と、雪蓮には言われたけどさ。

……早速、目の前に山と積まれた竹簡は、どうしてくれるんだ？

ゝ五十八ゝ（後書き）

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

ゝ五十九ゝ（前書き）

オリキャラながら、キャラ崩壊してしまった気もしますが……。
勢い任せで投稿します。

五十九

「魯肅様！ お持ちしました」

「はいはい。そこに置いて下さいね。あと、そっちは終わっていますから」

「ははっ！」

ドサツ。

また、コントとしか思えない量の竹簡。

……もう、いい加減慣れてきたよ。

つか、悟った。

「綾子さくん、落款は終わりましたかあ？」

「あのな。千花と一緒にしないでくれるか？」

「ええ？　じゃあ、私の倍片付いたって事ですかあ。凄いですね」

「逆だ逆！」

「逆って事は……。ああ、なるほど」

拍子抜けするような、のんびりした反応。

この通り、手の動きがスローモーなら、別にいいんだけど。

サラサラサラ。

カチャ。

手の動きは止まらず、山と積まれていた竹簡が、どんどん減っている。

……軍師としてはわからんけど、事務処理やらせたら恐らくはこの大陸で一番じゃないのか、千花って？

「うう、千花殿お。あまり手際よく進めすぎないで下され。ねねの方が追いつきませんぞ……」

半泣きのねね。

……泣きたいのは、あたしも同じ。

「あらあら、泣かないで下さいよお。ほら、飴あげますから」

「ねねは子供じゃないのです!」
もう、どこからツツコんだらいいやら。

襄陽に来てから、早一週間が過ぎた。

劉表の統治は、苛酷な税の取り立てこそなかったけど、戦がなかった事もあり、どうも賄賂が横行していたらしい。

勿論、そんな奴等は皆取り調べの上、派手にやっていた奴は財産没収の上にクビ。

んで、新しく任命しなおしたり、配置転換したり。

……つまりは、仕事がそこからスタートな訳で。

「しかし、劉表の奴は何をしていたんだ？ 戸籍が整備出来てないから、これじゃ徴税もいい加減になるぜ？」

「そうですねえ。これはみんなで手分けして調べるしかないでしょうね」

「マジか。しかし、蒲公英や星は治安で駆り出しているし……うん」

絶望的に人手が足りん。

つか、やる事多すぎ。

「風殿はどうしたのです！ この忙しい時に」

「そういや、姿を見ないなあ。」

「風さんでしたら、人手が足りないから集めてきます、と出かけたようですよ」

「いや、バイト募集じゃないんだからさあ。」

「呼びましたかー？」

いきなり、背後から声がかかった。

「どわっ？ ど、どこから湧いたんだ？」

「むー。風は蚊の幼虫じゃないのですよ。何処から、と言うなら、その抜け穴ですけど」

ぬ、抜け穴だあ？

……見ると、あたしの席の真後ろに、いつの間にか階段が見えて

いた。

「まだまだ未知の城ですし、お姉さんに何かあるといけませんので。いろいろと調べていたら見つけましてー」

「これ、何処に出るんだ？」

「裏門の近くにある民家につながってますねー。それから、こっちは隠し扉が」

と、風が手で押すと、壁が動くし。

……何、この忍者屋敷？

若しくは、ドラ○エの城かよ。

「……とりあえず、それはいいから。で、人材発掘はどうなったんだ？」

「ぐー」

「あらあら、風さんはおねむですかあ？」

「うー、ねねも眠りたいですぞ」

いや、あたしもだし。

「寝てる奴はほっとけ。で、そこで固まってるお二人さんかな？この居眠り軍師に拉致されたのは」

戸惑っている、若い男二人。

「むー。突っ込みすら貰えないとは、最近のお姉さんはつれないのです」

「だったら寝たフリすんな。で、アンタらは？」

あたしに問われて、何とか二人は再起動。

「は、はい。お初にお目にかかります。私は伊籍と申します」

「は、初めまして。自分は馬良です」

「で、二人を拉致してきた目的は？」

「勿論、文官として働いて頂こうかとー」

「そうですね。荊州でも知られた馬家、その中でも一番優秀な長男さんに、劉表さんに見る目がなくて重用されずにいた、凄腕の文官さん。うんうん、私もいいと思いますよー」

「……知ってたのか、千花？」

「ええ、まあ」

こいつもほんわかしているけど、人脈は広い。

……その千花が褒めている人材だ、優秀なのは間違いないだろう。

「で、お姉さん。どうでしょうかー？」

「見ての通りだし、ジモティーが加わるのは助かる」

「じもていー？」

おっと、全員から不審な目で見られてしまった。

……なんか、古いって言われた気もするぞ？

「二人とも、荊州の出身のようだし。荊州の事情に通じているのなら、あたしとしてはむしろ大歓迎だ」

「じゃ、決まりですね♪ 早速よろしくお願いしますねえ、伊籍さん、馬良さん？」

嬉しそうに、仕事を割り振る千花。

この時は知らなかったんだけど、伊籍も馬良も、蜀の功臣だった人物らしい。

実際、二人が来てくれたおかげで、あの無間地獄から少しは解放された。

……筈だよな、うん。

ゴキゴキ。

首を動かすと、かなりいい音がする。

……疲れたあ。

しがない高校生でしかないあたしが、何の因果で県知事みたいな事してんのかね、しかし。

ある意味、元の世界の総理大臣なんかより、よっぽど激務な気がする。

コンコン。

ん、ノックの音がするな？

「誰だ？」

「私ですよ」

千花の声がした。

「悪いけど、今日は業務終了だぜ？　もうクタクタだ」

「お仕事じゃないですよ。お腹、空いてませんか？」

言われてみれば、確かに夕食すっ飛ばしてるな。

そう思うと、急に空腹を覚えた。

「いや、確かに腹が減ったわ」

「じゃ、今から一緒にしませんかあ？」

「ん？　食事の誘いか？」

「ええ、まあ」

「いいぜ。付き合うよ」

あたしは、剣を手にしち上がった。

ちなみに青紅の剣と倚天の剣は、鍛冶屋に研ぎに出している。

しばらく戦いもなさそうだし、いくら宝剣と言っても、メンテナ
ンスフリーじゃない。

こんな風に、人を殺す為の武器を手入れする。

元の世界じゃ考えられない事だけど、今のあたしはホントに、殺
し殺される中にいる。

身を守る術を持たないと、待っているのは……死。

だから、武具の手入れは不可欠。

で、今手にしているのは、無銘の剣。

劉表が使っていた奴らしいんだが……手入れはいいものの、使わ
れた形跡がほとんどない。

まあ、ワンポイントリリーフだから、いいんだけどさ。

「綾子さくん？」

おっと、千花が呼んでいる。

「あ、今出るよ」

街に出て、一軒の酒家に到着。

「ここでもいいですかあ？」

「任せる。あたしも、まだ不案内だし」

「じゃ、入りましょ」

「いらっしゃいませ。お待ちしておりました」

主人らしきおっさんが、丁寧な礼をしてくる。

「あれ？ 予約しておいたのか？」

「ええ、まあ。ここ、予約制みたいでして」

「……じゃあ、あたしが他にしようとか言ったら、どうするつもりだったんだ？」

あたしが言うと、千花は少し考えてから、ポン、と手を打った。

「ああ、そう言えばその可能性もありましたねえ」
想定してないのかよ。

「流石綾子さん。とても、私の及ぶところではありませんねえ」

「……いや、そこで感心されても」

当の本人は、相変わらずニコニコしてるし。

「では、お席にご案内致します」

危うく空気と化すところだった主人が、声をかけてきた。

「あ、はいはい。お願いしますねえ」

マイペースつつーか、未だに掴めないわ、千花は。

「じゃ、乾杯しましょ」

「そうだな。まずは、お疲れさん」

カチン。

盃を合わせる。

あたしも、すっかり酒に慣れちまったな。

「ふう、美味しいですねえ。ささ、料理も美味しいみたいですよ」

と、マメに取り分けて、渡してくれる千花。

「よく知っていたな、こんな店を」

「いえいえ、馬良さんに教えて貰ったんですよ」

「なるほどな。お、これ美味しいな」

皿に盛られた油淋鶏が、マジで美味い。

「ええ。うーん、美味しい物って幸せになれますよねえ」

千花の場合、いつも幸せそうなんだけどな。

「しかし、千花はホント凄いやなあ。あの量を平気でこなすとか
「はい？」

「いや、今日だけでも処理した竹簡の量、半端じゃないだろ？」

「そうでしょうかねえ。私には、特別多くないかなあ、って」

いや、多い通り越して尋常じゃないし。

「あたしの国だって、千花ほど計算や処理が速い奴はそうそういないぜ？」

「そうなんですかあ？ 綾子さんみたいな凄い方ばかりなのかなあ、
って」

「……凄いか？ あたしって」

「ええ、そりゃもう」

千花はずい、と身を乗り出してきて、

「凄いですよ。あの冥琳さんが、手放しで褒める方ですし」

「それがわからないんだって。あれだけ完璧超人の冥琳が、あたし
みたいな奴をそこまで買うのか、って」

あたしがそう言うのと、千花は大げさに溜息をつく。

「綾子さーん？ 謙遜は綾子さんの美点ではありますけどお。度が
過ぎるとちよーつとどうかなあ、って」

「他の奴にもそんな事を言われたけど……。あたしは、謙遜してい
るつもりはないぜ？」

「うーん、無自覚もそこまで行くと罪ですねえ」

ひでえ言われようだな。

「でもでも、本当に綾子さんって、本当に普通の方なんですか？」

「普通だってば。言っただろ、あたしはただの学生なんだって」

「学生ですかあ。私塾の生徒、ですよねえ？」

私塾っていや、そうなるのかな？

穂群原学園は、私立高校だし。

「綾子さんが普通だって仰るなら、その私塾の生徒さんは皆、武に
長けて人望も厚い、ってなりますけど」

「それはないな。あたしも、武道は好きだったけどさ、ここの武人達とは訳が違うし。人望だって、せいぜい部長ぐらいさ」

「はあ、でもそれじゃあ、この数々の勲功は……説明がつきませんねえ」

千花は、納得していない様子だ。

……まあ、あたしだって、こうなった理由をわかるように説明できる自信なんてないし。

つか、原因はこうでした、なんて言えないわ。

「千花こそ、マジで凄いつて。人脈は広いし、いつも笑顔じゃないか」

「うーん。人付き合いはもともと、家業がありましたし。でも、そんなに私、いつも笑ってますかあ？」

「……千花こそ、自覚がないじゃないか」

「ですかねえ。でもでも、泣いたり怒ったりするよりも、笑っている方が良くないですか？」

「そりゃそうだけどさ。でも千花の場合、笑っている以外の顔、見た事ないぜ？」

「な〜んか、私が極楽トンボみたいに聞こえますよ、それだと？」
杯を干す千花。

手酌をしようとするのを止めて、注いでやった。

「そうは言っていないだろ？ 難しいと思うぜ、いつも笑顔、ってのは」

「そんな事ないですよ。綾子さんの周りは、いつも笑顔の人ばかりですよ？」

「あたしの周り？」

千花は頷いて、

「例えばですけどお。シャオ様とか、明命ちゃんとか、紅蓮ちゃんとか。あとあと、民の皆さんもそうですねえ」

「そうかな？」

「そうですね。襄陽の民の皆さん、ご覧になってませんか？」

「……そんな暇ないって、千花だってわかってるだろ？」

実際、こうして街に出たのは、襄陽に来てから初めて。

以前来た時はまだ身軽だったけど、今のあたしは立場がある。

……まあ、立場もそうだけど、仕事が多すぎてどうにもならん。

「それでも、綾子さんは凄いつて思いますけど」

「凄いかどうかは置いといて。あたしの周りが笑顔だらけ、ってんなら、それはそれでいい事だろ？」

「ええ。勿論ですよ」

と、千花は席を立った。

……で、あたしのところにやって来て、膝の上に座る。

「……何やってんだ、千花？」

「いえいえ。ただ、綾子さんの事……好きになっちゃったかなあ、
って思っただけですよお」

「……は？」

この状態でコクるか、普通？

「つか、酔ってるだろ？」

「ぜんぜん、酔ってないですよお？　そういう綾子さんこそ、も

っと飲みましよう」

うん、どっから見ても完璧な酔っ払いだな。

……とりあえず、酔い潰すか。

このままいると、いろいろと面倒な事になりそうだ。

「ほら、もっと飲め。酒が足りてないみたいだぜ？」

「綾子さんったらあ。えへへへ」

ガシッ。

千花に、いきなり抱きつかれた。

「お、おい、千花？」

「えへへへ、綾子さん……」

「コラ、離れろって」

振り解こうとするんだけど……なんか、がっちりホールドされてるぞ？

「綾子さ〜ん。もう、そんなに激しく動いちゃダメですって〜」
「だあああ、誤解されるような事言うな!」
ああ、周囲の視線が冷たい……。

翌朝。

「お姉さん。やはり、そういう趣味がありましたかー」
「主。そういう事ならば、私にお声をかけていただければ」
何故か、酒家での騒ぎが風と星に筒抜けになっていたらしく。
……あたしは、朝からいじられるハメになっていた。
「ささ、綾子さん。今日もまた、張り切ってお仕事しますよ〜」
当の本人は、何も覚えていないというオチまでつくし。
結局、終日憂鬱なまま、仕事に没頭するハメになった。

ゝ五十九ゝ（後書き）

伊籍と馬良はオリキャラですが、特に展開には絡んできません。
本当に收拾が付かなくなりますので……。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

ゝ六十ゝ（前書き）

年度末でもないのに仕事が修羅場です……。
更新はしばらくこんな感じで間が空くかも知れません。

六十

数週間して、漸く政務も一段落。

……ホント、人生でこんだけ仕事する奴っているのかね、つてぐらいの量だった。

日本の政治家や官僚なんて、これから見りゃ遊んでいるだけ、そうも言いたくなるさ。

「主。宜しいですか？」

昼食を終え、まったりしているところに、星がやってきた。

「どうした？」

「はっ。昔馴染みから、書簡が参りましてな」

と、あたしに差し出してきた。

「読んでもいいのか？」

「構いませぬ。中に、主の事も書かれていますからな」

まあ、読んでみればわかるか。

カラカラ。

書簡と言えば、この時代は木か竹。

紙は貴重品なので、まず目にする事はない。

重いしかさばるし、墨で書くので文字がかすれたり消えたりする。と言っても、製紙工場で木材を化学処理、なんて製法がこの時代にある訳がない。

日本でも和紙の原料はコウゾとかだった筈。

だから、コストを下げるのはかなり厳しいみたいだ。

……とは言え、これはマジで何とかしたいねえ。

「主？ 如何なされた？」

「……え？ あ、何でもなし」

最近、考え込む事が多くなった気がするな。

書簡は、久闊を詫びる事から始まり、近況報告が続く。

そして、頓に噂に出るあたしに興味があり、是非会ってみたいの

で取り成しを頼みたい、と書かれていた。

署名は、『嚴顔』とある。

……嚴顔は、確か蜀の将で、何処かの太守だったな。

大陸中を回った星なら、知り合いでも不思議はないかもな。

「なるほどな。嚴顔って、どんな人物だ？」

「は、豪放を絵に描いたような者です。弓の扱いに長け、また無類の酒好きでもあります」

「……それって、どんな祭さん？」

「はっはっは、確かに仰せの通り。祭殿によく似ておりますぞ？」
だとすると、気難しいとか、ひねくれたとか、その心配はない、と。

「けど、あたしはこの有様だ。とても、蜀まで出向けないぞ？」

「いえ、書簡にもありますが、嚴顔が江陵までは出向くとの事。襄陽からも近いですし、双方で日数の節約になりますぞ」

なら、何とかなるか。

「気晴らしにもなりますかな？」

「え？」

星は、あたしの顔を覗き込んで、

「やれやれ。酷い顔をなさっておいでですぞ？」

「そんなに酷いか？」

「ご覧あれ」

手渡された鏡を覗き込む。

うわー、クマは出来てるわ、目つきは変わってるわ。

「少し落ち着いたようですし、休息を取られた方がよろしいかと思
います」

「……だな。嚴顔には、承諾の返信をしておいてくれ。日時は……
そうだな」

実際の日数がわからないので、荊州に入った時点で連絡を貰うようにすればいいか。

「では、仰せのままに。御免！」

さて、ああは言ったものの……巖顔が本当に祭さんみたいなのかどうかは、あたし自身の眼で確かめるしかない。

それに、益州は地形が嶮岨で、攻め込みにくいという話だ。仮に争いにでもなったら厄介だが、巖顔と良好な関係を作れば、その懸念がなくなる。

……逃げ込んだ劉表とか、もともとボンクラという噂の劉璋が、脅威になる事はなさそうだし。

「綾子さくん、どちらにいらっしゃいますかあ？」
げ、千花の声だ。

……悪いけど、ちよつとだけ抜け出して昼寝でも。

「どちらへ行かれるのでしょうか？」

ぬっと、姿を見せる風。

……いい加減、慣れたよ、もう。

「今日はどうからだ？」

「はいー。その筆筭を動かすですすねー」

……もはや、忍者屋敷決定だな、この城。

風に気を取られているうちに、千花に見つかってしまった。

「ああ、ここでしたか。急ぎで落款をいただきたいものが、ありますー」

……休めるのはまだまだ先になりそうだな、こりゃ。

後から聞いた話だけど、広い荊州はひとくくりで州ではあるけど、実質は二つに分かれているらしい。

あたしのいる襄陽を中心とするのが『荊北』、この江陵を含めた南側が『荊南』。

北に寄っている襄陽は洛陽に近いだけじゃなく、大陸のあらゆる場所に通じる要衝。

そして洛陽は東西からの攻撃には強いが、南北からは意外と脆い。だから、襄陽を抑える、というのはかなり重要だったりする。

一方、江陵は長江に面していて、物流の拠点でもあり、益州から揚州に抜ける、軍事的にも重要な場所。

……そんな重要な州を、言っちゃ悪いが、あの程度の将と兵士で保っていられた劉表は、ある意味有能なのかも。

ま、荊州自体が人口が多いし、他の州に比べれば豊か、つてのが大きいんだろう。

三國志演義の世界だと、曹操に追われた劉備は最初、江陵を目指したらしい。

そして、曹操もまた、江陵には行かせられない、と追撃したとか。そのせいかどうかは知らないけど、占領した時には、糧秣と金が随分と貯めてあったらしい。

お陰で、兵站を見てきた千花の悩みが一度に解消したらしいが……
……どうだけ溜め込んでいたんだか。

こうして支配者は変わったが、江陵は相変わらず賑わっている。

つか、むしろ人が増えているらしいな。

「賑わってますねー」

「うむ。交通や物流の要衝である上に、孫家がしっかりと治安を維持しているからな。当然であろう」

言い出しっぺの星と、何故かついてきた風と三人で、こうして江陵の街を散策中。

……あ、仕事を放り出してきた訳じゃないからな？

ちゃんと千花にも断ってきたし。

「じゃあ、お戻りになったらちゃんとその分まで、お仕事用意しておきますねえ」

……とか、不吉な事を言われたのは、この際気にしない事にする。

「星。厳顔は明日、到着の予定だったな？」

「はっ。約定を違える事を酷く嫌う御仁ですからな。間違いなく、現れるかと」

「じゃあ、今日は時間があるか。とりあえず、買い物もしたいし」

「その前に、お昼にしませんかー？」

風に言われて気が付いたが、確かにそんな時間だな。

……時計を気にする習慣がなくなったせいで、時間の概念が曖昧になっているのかな？

「いいぜ。店はどうするんだ？」

「そうですねー。星ちゃん、何か当てはありますか？」

「主は、特に好き嫌いはありませんか？」

「別にこれと言ってはないけど。ただ、あんまし食い慣れない物はパス」

「ぱす？ お姉さん、それはどういう意味でしょう？」

どっから出したのか知らないけど、手に筆と書簡を持っている風。

「……何のつもりだ、それ？」

「勿論、お姉さんが広めた『めも』の用意ですよ？」

「いや、それはわかるんだけど」

「そして、お姉さんの国の言葉は、とっても新鮮ですから。めもを取っておいても、何かと役に立つかと」

そんなモンかねえ。

「まあ、いいけど。やめとく、とか、却下。そんな意味で合ってると思う」

「なるほどー。勉強になりますね」

ホントに書き付けてるし。

「私とて、怪しげな物を主に試していただくつもりなどござらぬよ。では、こちらへ」

……そう言うのだから、信用するしかないだろ？

案内されたのは、酒家。

星の性格を考えれば、想定範囲内だけどさ。

「しかし、ホントに飲むか？ 普通」

「おや。いけませぬか？」

「……いや、ダメとは言わないけど。一応、あたしも立場があるんだし」

「平気ですよー。誰もお姉さんの事、気にしてませんから」

「左様。もっと気楽になされませ」

「……星が気楽すぎるんだって。あと、風もな」

「星ちゃんと一緒にされるとは不本意ですよ」

「そうは言いますがな、主。あなたも、お気楽とは申しませぬが、変わりませぬな」

星が、杯を傾けながら言う。

「どのあたりが？」

「強さとか、人望は勿論以前と比較になりませぬが。人物そのものは、初めてお会いしてより、そのままかと」

「そりゃまあ、あたしのパーソ……」

横文字を使いかけて、風が素早くメモの用意をし出したのに気づく。

おととつと、あまり横文字のボキャブラリー増やすと、妙な事に使われかねないから気をつけないと。

「……あたしの個性まで、変わっちゃしょうがないだろ？」

「当然です。主は、その飄々としたところが良いのです。なあ、風？」

「そうですねー。あと、誰にでも気さくなところも、お姉さんの魅力かと」

「兵からも民からも、親しみやすいと評判ですからな。世には我が身を必要以上に高貴だと思い込み、庶人を軽んじる輩が多い」

「……袁紹とか袁術の事じゃん」

「いえいえ、奴らだけではありませぬ。権力や地位を手に入れた途端、手のひら返しになる者ばかり。主や伯符殿のような御方の方が、希有なのです」

「風も、それは感じてますねー。だからこそ、最初にお会いした時にお仕えする候補に入った訳でして」

「そう言ってくれるのは嬉しいけどさ。あたしは何度も言うけど、出世立身には興味が無いんだぜ？」

「ふふ。ならば、このような地位までたどり着かれたのです？」

そう言われてもな。

陛下にしてもそうだし、冥琳や華琳からも、あたしの実力以上の評価を受けているとしか言えん。

謙遜しているって言われるが、あたしは所詮、ただの高校生なんだ。

自分のしてきた事に後悔はしてないし、間違っているとも思わない。

もし間違っているのなら、こんな風にあたしを慕ってくれる連中がいる訳がない。

……ただ、戸惑いだけはいつまでも消えない。

「さあな。運が良かったのはあるだろうけど」

「運も実力のうちですからね。風が見る限り、大陸でそれを兼ね備えているのは、他には曹操さんと雪蓮お姉さん、蓮華お姉さんぐらいだと思うですよ」「……やれやれ。エライ連中と一緒にされたモンだね」

あたしはぼやきながら、運ばれてきた担々麺に箸をつけた。

「あの、失礼ですけど。荊州牧代理の美綴様、でしょうか？」

と、妙齢の美人が声をかけてきた。

妙齢、ってもそこまで歳は感じないし、若々しい感じがするけどさ。

……あと、もの凄く立派な胸をお持ちで。

冥琳とか祭さんとかにも負けてないぞ、これ？

「いかにも。こちらは美綴様だが、貴殿は？」

「あ、申し遅れました。私は荊南長沙郡の住人、黄忠、字を漢升と申します」

黄忠って……蜀の五虎将か。

一人いないなあ、と思っていたけど、これで全員揃った訳だな。

「あの、私の顔に何かついてますか？」

「え？ あ、済まない。あたしは美綴綾子」

「お食事中に失礼かとは思ったのですが、ご一緒させていただいて
も？」

あの黄忠なら、話を聞きたいところだね。

「いいぜ」

「主。よろしいのですか？」

「ああ。まさか、あの黄忠に会えるとは思わなかったし、な」

「あら？ 私の事をご存じでしたか？」

黄忠は、口に手を当てて驚く。

「長沙に黄忠あり。そのぐらい、あたしでも知ってるさ」

もちろん、元の世界での知識だけだな。

「ふふ、それは光栄ですわ」

「……主が許されるならば、私も名乗らねばな。姓は趙、名な雲、
字は子龍。主の一番の槍でござる」

「風は姓が程、名が立、字は仲徳。お姉さんの軍師ですよー」

二人が名乗ると、黄忠はニツコリと笑みを浮かべた。

「趙子龍さんに程仲徳さん。お二方の名も、よく耳にしていますわ」

「そう言う貴殿こそ、かなりの遣い手と見たが？」

「ふふ、それはお互い様でしょう？」

実際、星の言う通りだろう。

つーか、あの黄忠ならば、関羽とも互角の筈。

……ただ、あたしの知ってる黄忠って、白髭の爺さんなんだけど
な。

どこをどう見ても、婆さんには見えないよなあ。

「美綴様、お酒は如何ですか？」

どうやら、自分でも飲んでいたらしく、卓上とは別の徳利を差し
出した。

「勧められる酒を断るほど、野暮じゃないさ」

「主。私が飲もうとした時には苦言を呈しましたな？」
ジト目で星に見られる。

「あのな。星は最初から酒目当てだっただろ？ 一緒にするな」

「しかしですな」

「まあまあ、お姉さんも星ちゃんも、どっちもどっちって事で
「待て。それは断じて違う」

そのやり取りを見て、黄忠がクスクス笑う。

「あら、ごめんなさい。お三方とも、仲が宜しいのですね」

「当然ですぞ、黄忠殿。この趙子龍、大陸中を廻って決めた主ですからな」

「風もですねー。お姉さんといると、退屈しませんし」

「どういう意味だ、それ？」

「いえいえ。お姉さんは何かと事件に巻き込まれますし、変化に富んでいますから」

……否定できん。

「では、まずは一献」

「あ、そ、そうだな」

全く、星と風のおかげでペースが狂いっぱなしだぞ。

「なかなかお強いですわ」

「ふっ、貴殿こそかなりの強者ではないか」

この二人、底なしか？

卓上に転がっている徳利が、凄い事になってるんだけど。

「さ、美綴様ももっとお過ごし下さいませ」

「そうですぞ。勧められた酒は断らぬのでござろう？」

「いや、ちょっとタイム……あ」

「じー」

風が素早くメモを取り、

「お姉さん。意味を教えてください」

「あら？ 何をしているのです、程立さん？」

黄忠が、風の手元を覗き込んだ。

「これはですねー。お姉さん語録とでも言いましょうか、それをめもしているのです」

「美綴様の語録、ですか。そう言えば、耳慣れない単語が使われていますね」

「そうなのですよ。風も、もっと教わりたいのですが、お姉さんがいけずなので」

ふう、と頬を膨らませる風。

「つくづく不思議な方ですね、美綴様は」

「そんなつもりはないんだけど……そう見える？」

「ええ。弓の腕も優れていると伺っていますが、武一辺倒の方ではないようです」

「あたしは武人のつもりなんだけど。どーも、そう思われてない節が」

その時。

ガチャン。

何かが割れる音と共に、酒家の中が、急に騒がしくなった。

「うるせえ！ おいてめえ、もういっぺん言ってみろ！」

「ああ、言ってやるさ。この能なしの腰抜け野郎が！」

酔っぱらい同士が喧嘩を始めたらしい。

「お、お客様。あの、お静かに願えませんか？」

店の主人が飛んできたが、

「すっこんでろ！」

敢えなく、片割れに吹っ飛ばされる。

「酒に飲まれるなんて、最低ですわね」

「全くだ。無粋な輩には、酒を嗜む資格などない」

黄忠と星の言葉に、酔っ払いが反応。

「おい。何か言ったかその女ども」

「おうおう、兄ちゃん達。酔っ払って喧嘩なんて、みつともないと思わないのか？」

風、宝慧にしゃべらすなよわざわざ……。

「何だとコラァ！ 痛い目に遭いてえのか？」

「黙ってる、この年増！」

……と、あたりの温度が急に下がった気がした。

「……今、何て言いました？」

黄忠、顔は笑っているが……あの柔らかな雰囲気が一変。

「なんだあ？ 何か文句あんのか、ババァ！」

「ふふ、うふふふ。誰が、年増ですって？」

「な、何だよ……」

酔っ払いは、やっと気付いたらしい。

……自分が、禁句を言った事を。

「うふふふ。すこーし、おいたが過ぎますわよ？ 私が、きつい

お仕置きをして差し上げますからねえ？」

「あ……ああああ」

そして、酔っぱらい二人は見るも無惨にボコボコにされていった。

……あたしでも、あそこまではやれないってぐらいに、な。

「なんじゃ、騒がしい」

変わり果てた元酔っ払いが二体出来上がった頃。

凍り付いた空気を読まないような、のどかな声がした。

「亭主。酒を貰おう……ん、お主は紫苑？」

「あら、桔梗じゃない？」

黄忠が、阿修羅モードから復帰。

「む？ おお、星もおるではないか。久しぶりじゃの」

「桔梗か。早かったではないか」

早かった？

って事は……この人、厳顔か？

ゝ六十ゝ（後書き）

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

ゝ六十一ゝ（前書き）

間が開いてしまい申し訳ないです……。

急に暖かくなったかと思えば寒くなったりで、体調を崩してしまいました。

皆様も、くれぐれもお気をつけて。

六十一

「お初にお目にかかります。……巴郡城主、嚴顔と申します」

「一応、荊州牧代理、って事になつてゐる美綴だ」

そのまま酒家、という訳にもいかず、江陵城へと皆で移動。

黄忠も、嚴顔の知り合いみたいだし、一緒に来て貰った。

「この度は、拝謁を……」

「あ、ちよつとタンマ……じゃない、待った」

「むー。何故、言い直すのですか」

膨れている風はほつといて。

「あのさ。アンタ、あまりその言葉遣い、慣れてないだろ？」

「ほお。何故そう思われる？」

「何となくね。それに、あたしも堅苦しいのは苦手だから。普段の

口調でいいぜ？」

「宜しいのか？」

「その方が話しやすいだろ？　なあ、黄忠？」

「うふふ、桔梗。美綴様の仰る通りよ？」

「……ふむ。なるほど、噂通りの御仁のようじゃな。ならば、そう

させて貰おうかの」

どこか、ホツとしたようにいう嚴顔だった。

……しかしまあ、この人もまたでかいね。

黄忠もそうだけど、祭さんや冥琳にも負けてないっつーか。

……この世界、酒好きは巨乳になるというお約束でもあるのか、
と言いたくもなる。

嚴顔に至っては、肩当てに『酔』の文字を入れているぐらいだし、
どこをどう見ても酒豪だろうし。

ま、それは置いといて。

「で、あたしに会いたって事だったけどさ。用件を聞こうか？」
「おお、そうじゃった。伺いたい事と、願いたい事があるのじゃが」
「まずは言ってみてくれ。ただ、あたしはあくまでも一時的な代理だし、最高責任者は孫策だ。答えられない事もあるぜ？」

「当然じゃ。まず、今後について伺いたい。……知っての通り、劉表が季玉のところに逃げ込んでおるが」

「季玉？」

「お姉さん。益州牧の劉璋さんの事ですよー」

風がすかさずフォロー。

「なるほどな。で？」

「うむ。わしらは正直賛成出来なかったのじゃが。劉表はお主らと対立し、敗れて逃げ込んできたのじゃ。匿えば、そのまま孫策と対立する事になるからの」

「そうね。特に孫策さんは、劉表とは因縁があるし」

「そうなんじゃ、紫苑。わしらは、それを懸念しておったのじゃが……」

嚴顔は、あたしを見て、

「わしらは勿論、戦いを楽しむ武人ではある。じゃが、今の孫呉と戦えばどうなるか。それがわからぬような、愚物であるつもりもない」

「しかも、隣接するのが我が主、と来ては、な。そうであろう、桔梗？」

「そうじゃ、星。美綴殿の武は、巴蜀の地にも聞こえているからの。それに、お主を始め、孫家の将は猛者揃いの上、兵は実戦を重ねて鍛えられておる。それに比べ、わしらの兵は戦らしい戦もなく、お世辞にも強いとは言えんからの」

おいおい、そんな事言っているのかよ？

軍事機密とまではいかないけど、兵の質云々は安易に他国に漏らして良くないだろ。

……と、嚴顔はあたしを見て、

「心配するでない。この程度の情報、お主になら伝えても構わんじやろう」

「随分と、お姉さんの事を信用されているようですが。仮にも敵対する可能性のある相手に、手のうちをひけらかすのはどうかと思いますよー」

風が、あたしの代わりにすかさずツツコミを入れる。

「フン、わしを見くびるでない。それでも一城を預かる身、人を見る目はあるつもりじゃ」

「桔梗よ、随分と我が主を買っているではないか？」

「当然じゃ。いくら星の推挙があつたとは言え、ここまで出向いて今こうしてわしに会う労を執った。そもそも、よからぬ企みをするような御仁ならば、お主ほどの者が易々と従わぬじゃろうて」

ホント、エラく信用されてるわ、あたし。

「そんな御仁が率いる精兵。これと戦う事は、赤子でも結果はわかるうと言ふもの」

「で、心配して来たって訳か。劉璋の指示で？」

「あの阿呆にそんな機転が利く訳がなからう。わしの独断じゃ」

阿呆って……自分の主君に容赦ないねえ。

確かに、劉璋は優柔不断で弱気だった、とはあたしの知る歴史でも言われているけどさ。

「で、どうなんじゃ？ 戦うしかないのなら、わしも覚悟を決めねばならんが。なるべくなら、民を巻き添えにしたくないのでな」

厳顔は真剣だ。

これは、あたしの権限を逸脱しているレベルだろう。

攻められているならともかく、無闇に侵略する自由なんてある訳がない。

……もつとも、そんなつもりもないんだけどな。

「少なくとも、あたしにはアンタらと戦うつもりはない。意味もなければ、恨みがある訳でもないからな」

「じゃが、劉表の事は如何するのじゃ？」

そう、戦端が開かれるとすれば、その点だな。

「孫策から指示が出れば、従うしかないかもな。けど、そうはならないと思うぜ？」

「何故、そう言い切れるのじゃ？」

「確かに、孫家は劉表に遺恨はあるさ。けどな、雪蓮……孫策は、そればかりに囚われるような、みみっちい器量じゃないからな」

「なるほどの」

「それに、仇だった黄祖は討ち取った。劉表は今や何の力もないし、劉璋はアンタが言う通りなら、まず荊州に攻め込むなんて考える筈もない。そうだろ？」

「確かにな。季玉に、そんな器量があれば、わしらがこんなに苦労する筈もないからのお」

そう言って、嚴顔は苦笑を漏らした。

「だから、劉表がおかしな考えをしない限り、アンタが懸念するような事は起こらない。あたしはそう思うぜ？」

「ううむ……。ならば、重ねて問うが。美綴將軍、美綴殿自身はどうなのじゃ？ 武に生きる者を自負しておれば、戦いを好む、そう見られても致し方ないと思うが」

「うーん、言いたい事はわかるんだけどさ。あたしが望むのは、数の暴力同士がぶつかり合う合戦じゃなくって。個人の武、武道なんだ」

「武道とな？」

「ああ。武そのものは戦う手段だけどさ、必ずしも命をかけあうばかりじゃないだろ？ あたしが目指すのは、心身共に自分を鍛える事。美人が、武を併せ持てば最強だろ？」

あたしがそう言うと、嚴顔と黄忠は顔を見合せる。

そして、笑い出した。

「うははは、自分で美人と言い切るとは」

「うふふ、正直な方ですわ」

「……そんなにおかしいか？ あたし、これでも自分には自信があ

るつもりだけどなあ」

む、星と風まで笑ってやがる。

「主らしいのですが……。しかし、何と言いますか。くっくっく」

「ふふふ、流石はお姉さんですねー。風もまだまだ、お姉さんには敵いそうにないのです」

……全く、どいつもこいつも。

巖顔は、ひとしきり笑ってから、

「ま、兎に角、美綴殿や孫策殿は信用してよさそうじゃ。……そして、願いなんじやが」

そう言えば、質問だけじゃなかったな。

しかし、不戦以外に何があるんだ？

「実はの。……劉表の将に、魏延と言う者がおる。美綴殿とも戦ったと聞き及んでおるが」

「いたぜ。けど、魏延がどうかしたか？」

「実は……。奴は、わしの弟子でな」

「アンタの弟子？」

「そうじゃ。不肖の弟子じゃが、わしと浅からぬ関わりがある」
意外だけど、驚きはない。

だって、この程度で驚いていたらキリがないだろ？

変態筋肉達磨とか、あり得ないものだらけの世界だし、ここ。

「それはわかった。けど、どうしてあたしにそんな事を？」

「うむ……。奴は今、益州……いやわしの城におるのじゃよ」

「何だと？」

「おおー、道理で蒲公英ちゃんがいくら探し回っても見つからない訳ですね」

すると巖顔は、深々と頭を下げる。

いきなりの事で、訳がわからない。

「我が弟子の不始末は、師であるわしの始末。だが、奴はまだ若い。確かに頭よりも身体が先に動く事ばかりじゃ。武もまだまだ未熟……」

…それでも、わしは焰耶……魏延を死なせたくないのじゃ。代わりにこの老骨の頸を差し出す故、奴は見逃してただけぬか？」

「桔梗！ あなた……」

「何を言っているのかわかってるのか、桔梗？」

黄忠と星に詰め寄られるが、嚴顔は動じない。

……いや、覚悟を決めてきているんだ……最初から。

「もし、それでもあたしは魏延を許さない。……そう言ったら、どうする？」

「……………」

嚴顔は答えない。

「敵対する意思はない、それは聞いた。けど、孫呉から見れば、魏延を匿う事は敵対行為そのものだぜ？」

「じゃから、わしが」

「仮に、だ。アンタの申し出通りにアンタを斬ったとする。それで、全てが片付くと思うかい？」

「それを、美綴殿に頼みたいのじゃ」

「いや、ぶっちゃけ無理。つかまず、アンタを斬ったらそれこそ、あたしは魏延に逆恨みされるぜ？」

「そのような事はさせぬ！ あやつには、よく言い聞かせて……」

「死んでしまった後で？」

「そ、それは……」

「まだあるぜ？ アンタは魏延を救うため自分が犠牲になるって言うけど。アンタは劉璋の配下だ。そのアンタをあたしが斬れば、それは劉璋と孫策が対立するという事になるな」

「季玉にそのような……」

「ああ、劉璋はアンタの言う通りかもね。けどさ、曲がりなりにも益州が諸侯の侵略も受けず、黄巾党の襲撃もほとんど受けなかったのは何故だい？ 地理上の位置関係とか、地形の問題、ってのはなしな」

「……………」

厳顔だけじゃなく、皆があたしの言葉に聞き入っている。

ちよっとやりにくい、おちゃらけられる雰囲気じゃないから、このまま続ける事にする。

「アンタだけじゃない、劉璋の配下には人材が揃っているんだろ？」

「……うむ。曹操や孫呉には敵わぬが、それでも有為の士は少なくはない」

「そんなところで、宿将と言うべきアンタを斬ったらどうなるか。

劉璋がヘタレでも、中には怒って攻めてくる奴がいると思うがね」

「では、どうあっても焰耶を！」

「ちよっと待った。魏延はまだ、あたし達に挑もうとしてるのか？」

「……うむ。特に、馬岱とは勝負をつける、と息巻いておった。なので殴り付けて縛ってきたわい」

いやはや、ホント祭さんとやる事なす事似てるわ。

……つーか、やっぱり蒲公英の奴、魏延とこうなったか。

歴史の修正力って奴なのかも知れないけど……。

「一つ聞きたい。魏延の執念は、単なる私怨か？ それとも、将としての矜持か？」

「……焰耶は、確かに猪突猛進な奴じゃ。だがの、将としての立場まで忘れて振る舞うほど、愚かではない。自身の怨恨が皆無、とは言いい切れぬが、少なくとも矜持……それじゃ」

「なら、あたしも勝敗は兵家の常、としか言えないな。劉表は敗れたんだ、これ以上の争いは無益。それこそ、アンタが避けたがってる民を苦しめる事になるだけ。だから、降りかかる火の粉は振り払うけど、そうでなければこれで仕舞いにしたいんだよ」

あたしは咳払いを一つ。

「だから、自分を犠牲にするとか、そういうのはなしで頼むわ。いろいろと面倒なだけだしな」

「面倒か……うむ、確かに面倒じゃな」

「しかし、面倒で外交を片付けるとは……。ま、主ですからな」

「ですねー。つくづく、外交官泣かせなお方ですからね」

「……星、風。何が言いたい？」

「いや、主はわかりやすくて良い、そう申したのです」

「お姉さんがその調子だから、お仕えしがいがあるのですよ？ お気になさらず」

「気にするわ！」

「ふふ、本当に仲が良いですわ。ねえ、桔梗？」

「うむ。……では美綴殿、焰耶の事……許しを得た、そう受け取るがよいな？」

「……ああ。少なくとも、あたしにはそのつもりはない。後は魏延次第だけど、それは任せていいんだな？」

「無論じゃ。……忝い、この通りじゃ」

「またも、頭を下げる厳顔。」

「……こんな人を斬れる訳ないだろ？」

「私からもお礼を申しますわ。桔梗は、私の大切な友人……。それに、美綴様の懐の広さ、私も感服の限りです」

「はは。とにかく、無益な争いはよそうぜ？」

「やれやれ、とにかく一件落着、かな？」

「では主。改めて、誓いの杯と参りませぬか？」

「……星。そう言って、お前が飲みたいだけだろ？」

「これは心外な。酒こそ、人生の潤滑油。私は」

「あゝ、はいはい。わかったわかった、とにかく飲み直して事だな」

「と、厳顔が目を輝かせた。」

「なんと、酒宴を開くとな。無論、わしも加えて貰えるのじゃろかな？」

「当然、私もですわ」

「申し上げます」

「と、伝令の兵が入ってきた。」

「何事ですかー？」

「はっ。建業より、黄蓋將軍と周泰將軍がお越しにござります」

「祭さんと明命が？ わかった、通してくれ」

「ならば、わしらは外すとするか」

「そうね。では美綴様、後ほど」

そう言つて、部屋を出ようとする二人。

「あ、待った。ちょうどいい、二人を紹介したいから残ってくれ」

「良いのか？」

「いいんだよ、今来る二人は、そういう事で目くじら立てる事はないからさ」

ほどなく、祭さん達が姿を見せる。

「久しぶりじゃの、綾子」

「ご無沙汰しています、綾子お姉さま」

「急にどうしたんだ、二人して」

「いや、建業の方も一段落しての。蒲公英と紅蓮、儂らと交代になったんじゃ」

「それで、襄陽に行ったのですが、こちらにおられるとの事だったので」

答えながら、やっぱり嚴顔と黄忠が氣になるようだ。

「えーと、自己紹介して貰っていいか？ お互いに」

それぞれが顔を見合わせつつも、自己紹介タイムに。

「なんと。孫呉一の弓使い、黄蓋殿であつたとは」

「こちらこそ、黄忠殿と嚴顔殿と申せば、大陸切つての弓使いと聞く」

……で、三人揃つて何故か、あたしを見る。

「……じゃが、この綾子が来てからは、どうも分が悪くての」

「確かに、美綴殿は、あの飛將軍呂布にも勝る弓の腕、と聞き及んでおる」

「なら、私達よりも……ですわね」

……なんか、怪しい雲行きに。

「まあまあ、そのあたりは酒を酌み交わしながらゆるりと話しませ

ぬか？」

「おお、気が利くではないか、星！」

「あ、あの祭さま？ 引き継ぎがありますけど……」

「そのようなもの、後で良いぞ明命。厳顔殿も黄忠殿も、なかなか酒をたしなむとお見受けする」

「おお、当然じゃ」

「黄蓋殿も酒がお好きとは、ますます気が合いますわね」

……やっぱりこうなったか。

「風。そう言えば」

「ぐー」

……ダメだ、案の定寝てるし。

「さ、綾子。酒じゃ酒じゃ！」

「主、参りましょう」

引きずられるような格好で、宴会の場に連れて行かれるあたしだった。

……で。

予想通りというか、それ以上というか。

まあ、飲むは飲むは。

「それで桔梗ってば、成都城の城壁を壊してしまっただすよ」

「わしの豪天砲は、やわな城壁では耐えきれぬ。季玉のボウズがいかんのよ」

「弓使いじゃからと言って後方に甘んじず、前線で戦う。そして、常日頃から鍛錬を欠かさぬ。これぞ、武人じゃ。いやいや、桔梗も紫苑もわかっておるわい」

「祭こそ、弓のみならず、氣まで扱うというではないか。やはり、真の武人はそうでなくてはいかん」

似たもの同士三人、ものすごく気があったようで。

いつの間にか、真名まで交換する始末。

「さあさあ、お姉さんもぐーっと行くですよ」

「……いつの間に起きたんだ、風？」

「細かい事は気にしないのですよ。明命ちゃん、どうかしましたか
ー？」

「い、いえ……。私はちよっと」

どうも、以前に酔っ払ってやらかしたのが未だにトラウマらしい。

「ささ、酒もメンマもたんどござれば。もっとお過ごしなされ」

そりゃまあ、飲むけどさ。

「……ハア」

と、ため息をつく明命。

「どうした？」

「……あ、い、いえ。そ、その……羨ましいな、と」

「……ああ、アレか。気にするな、アレは特別製だ」

「そ、そうでしょうか？ でも、綾子お姉さまだって立派なのに……」

と、明命はあたしの胸を見る。

「明命ちゃん、気にはしていないのですよ。世の中には、まな板
がお好みの殿方もいるようですからー」

「……風。どっから聞いたんだよ、その知識。あたしは教えた覚え
はないぞ」

「そうですねー。不思議な電波を時々感じるのですよ、風は」

……そう言えば、この酒代はどうなるんだろ？

後で、千花に怒られなきゃいいけどな……。

ゝ六十一ゝ（後書き）

次話から新たな章に入ります。
挿話は誰にするかまだ考え中、
もうしばらくお待ち下さい。

六十二

「南蛮？」

「はい。不穏な動きがある、と。それで、私がこちらに来る事になりました」

厳顔と黄忠が帰った翌日。

あたしは二日酔いの頭痛に悩まされながら、話を聞いていた。
ちなみに祭さんと星は、平然としている。

桔梗と紫苑も、上機嫌で戻っていったが、酒が残っている様子は皆無。

「酒をたしなむ者に悪い奴などおらぬ。わしの真名を預けようぞ」
「なら、私もそうしますわ」

って、気がついたら二人の真名も預かっているというオチまでついた。

……底なしですか、アンタら？

おまけに、今度は会ったときには必ず、と弓の勝負を挑まれた。

まあ、人の生き死にのない勝負だし、そっちは別にいいんだけど。

「南蛮と言えば、漢王朝の支配が及ばない土地ですよー？」

「そうです。時々、こちらに入ってくる事はあったようですが、それもせいぜい、小規模なものだったようです」

「じゃが、今度ばかりはちと本格的らしくての。明命の調査もさる事ながら、戦いに備えて、経験の浅い二人に代えて儂が、という事になったんじゃないよ」

南蛮ねえ。

あたしのいた時代じゃ、南蛮って言えば戦国時代のポルトガルやスペインの事。

けど、ここで言う南蛮は、もっと身近。

「なんか、チキン南蛮食べたくなってきたな」

「……は？」

「何じゃ、それは？」

「主。それは一体？」

「おおー、またお姉さん語録が増えたのです。めもめも、っと」

……あ、声に出てた？

「……ゴホン。と、とにかく、南蛮が動き出したのはわかった。で、冥琳の見解は？」

「お姉さん、ちきん南蛮の解説がまだですよー？」

「……後で作ってやるから。とにかく、本題に戻らせてくれ」

「それならいいのです。でも、約束を破るとお仕置きですからね？」

「私も、楽しみにしておりますぞ」

「ほわー、綾子お姉さまの手料理、楽しみですねぇ」

「酒の肴になると良いがの」

「って全員かい！」

思わず、ツツコミを入れてしまう。

「あ、冥琳さまの見解でしたね。ええと……」

くっ、スルーの技を覚えるとは。

成長したな、明命。

「ほぼ間違いないく、曹操の策だろう、と。恐らく、貢ぎ物などで機嫌をとったのかと」

「いよいよ動き出したか。袁紹とも決着をつけたようですしな」

歴史通りというか、華琳があのおバカ丸出しの袁紹に負ける筈もないわな、そりゃ。

「じゃが、厄介なのは南蛮の情報というのは乏しくてな。儂もほとんど知らん」

「星や風はどうだ？」

「いえ、私もそちらには足を運びませんでした故。仕えるほどの諸侯がいるような土地ではありませんぬ」

「ぐー」

「なら、情報集めが先だな。明命、頼めるか？」

「はいっ！」

「お姉さん、今度はツツコミすらなしですか？　最近、ますますいけずになってきたのですよ」

だったら寝たフリすんなよ。

「祭さん、そうなるといつ曹操軍が攻めてくるかわかりませんよね。備えも必要ですが」

「それならば公瑾から聞いておるから安心せい。それより、ちきん南蛮とやらを所望じゃ」

「そ、そうですね。それをいただいてから、私も南蛮へ向かいますので」

結局、作るしかなさそうだな。

詳しいレシピは忘れたけど……何とかなんだろう。

数週間後。

「綾子お姉さま、只今戻りました」

襄陽でまた竹簡の山に埋もれていると、南蛮から明命が帰ってきた。

「おう、お疲れさん」

「……お姉さま？　あの、お顔の色が良くないですけど……」

「まあ、気にするな。何でもないからさ」

ぶっちゃけ、慣れた。

つーか、諦めの境地だからな。

「綾子さーん。落款、終わりましたかあ？」

千花か。

「その全部、片付いてる。今日はこれで終わりでもいいよな？」

「えーとお。ん……」

そこ、考え込むな。

「とにかく終わりだ、終わり」

あたしは席を立つ。

「じゃあ、外で昼にするからな。何かあったら、後で聞くとよ」

「はあゝい、了解ですよ」

「という訳だ。明命、昼飯付き合ってくれるな？」

「あ、は、はい！」

明命と並んで、頭を撫でてやる。

「はうあつ？ お、お姉さま」

「ん？」

「い、いえっ！……その、続けて下さい」

光悦の表情、って奴か。

しかし、そんなにいいのかね、コレ？

自分にやってもわからんし、今度蓮華にでも試してみようかな？

……祭さんだと怒られそうだし、思春にやったら斬られそうだし。

「あれえ？ 綾子お姉ちゃんじゃない」

「お、姐御だ」

街の飯店に行く……何故か、シャオと刃霧がいたりする。

そういうや、祭さんが支援に来る将の話をしていたな……シャオの

事だったか。

「……で、こんなトコで何やってんだ？」

「何って、もちろんお昼だよ？ ねー、刃霧？」

「ですよ、シャオ様？ 姐御達も飯だろ、一緒にどうだい？」

その前には、井が山積みになっている訳だが。

「相変わらず、よく食うな……」

「見ているだけで、お腹一杯になりそうですよ……」

「にやに言ってるんにゃ、あにえご」

「あゝ、また口に物入れたまましゃべってる！ お行儀が悪いって
言ってるでしょ！」

このやりとりも変わらんねえ。

「ま、とりあえずあたし達も食おうぜ？ 明命も、走り詰めだった
んだろ？」

「い、いえ。それに、慣れてますから」

「いいから、ホラ座れって。何でも、好きなモン頼んでいいからな、あたしの奢りだ」

「ええっ？　で、でも……いいんですか？」

上目遣いの明命。

クーツ、可愛いねえ。

「あーっ、みんなめえいぶわっかりじゅるい！」

「だーかーらー、お行儀悪いっ！」

シャオ、刃霧に対しては徹底してお姉さんモードだよな。

「先に行っておくけど刃霧、お前はダメだ」

「……んぐっ。えーっ、どうしてさ？」

必死に飲み込んでから、あたしに食い下がってきた。

「……あのな。お前の食べる分まであたしが出せる訳ないだろ？

自分の分がなくなっちまうよ」

「そうだね。綾子お姉ちゃんの言う通りかなあ」

「私もそう思います。刃霧の食欲は、ちょっと普通じゃないですから」

「うう、みんなして俺を苛める。こうなったら自棄食いだ、親父、ラーメン大盛り五杯とチャーハン大盛り五皿追加、あと餃子百個に桃まんを五十個、それからごま団子！」

「まだ食うんかい！」

「って言うか、食べ過ぎよ！」

……しかし、これだけドカ食いしても、ちっとも太らないってのも。

まあ、ミステリーだわ。

「……親父。こっちは酢豚定食な」

「……じゃあ、私は麻婆丼で」

食事が済み、烏龍茶を飲みながら明命の報告を聞く。

「綾子お姉さま、ご確認下さい」

と、明命はあたしのケータイを差し出した。
南蛮の偵察に行く際に、貸していた物だ。

「どれどれ」

データモードに切り替え、画面に表示。

「……お、出た」

あたしの言葉に、皆が画面を覗き込んだ。
そこに写っていたのは……。

「猫耳娘……？」

そう、耳と尻尾のある、女の子。

明命にカメラモードでの使い方を教えて、隙を見て必要な物を撮
ってくるように、と思ったんだけど。

……まさか、こんなモンが撮れるなんてなあ。

「……そうなんです」

「何のコスプレなんだ、こいつら？」

「こすぷれ？ それ、何なの、お姉ちゃん？」

「俺も初耳だな。意味はなんだ、姐御？」

「あ、えーと……」

……あ、物陰に宝慧の頭を発見。

プレッシャーというか視線を感じるが、気にしない気にしない。

「ま、気にするな。あ、こっちは虎娘だし……なんだこいつら？」

「いえ、それがどうやら本当に生えているようでして……その……
ん？」

明命の様子がおかしいな。

「……危うく、もふもふするところでした」

……あゝ、そういう事か。

確かに、これは明命にはヤバそうだな。

「で、コイツらは何者なんだ？」

「はい。南蛮大王の孟獲と、その仲間です」

「……ハァ？」

こんな奴らが、攻めてこようとしてるってか？

どの写真を見ても、ちーっとも迫力を感じないんだがな。

「なんか、可愛いね。これ」

「んー、どっから見ても……俺には敵に見えませんよ、シャオ様」
感じる事は皆、一緒らしい。

「それで、軍勢の数は？」

「それが……よくわからないんです。まともな人間の兵隊が、ほとんど見当たらないんで」

「でも、攻めてくるなら兵がいらないとおかしいよね、明命？」

「そうです、シャオ様。私もそう思うのですが、見当たるのは動物ばかりでして」

動物……。

それって、まさか。

「明命。その動物は撮ってあるか？」

「は、はい」

あたしは、サムネイルを次々に見ていく。

そして、見つけた。

「やっぱりか。こいつらの武器というか兵は、これだ」

その画像を、全員に見せた。

「これが？」

「姐御。これ、何か知ってるのか？」

「ああ。これは、ゾウという生き物さ。見ての通り、図体がでかい。こんなのが襲ってきてみる、ただの人間じゃ手も足も出ないぜ？」

「確かに、大きかったです。それに、身体も堅そうでしたし」

「でも、これも何だか可愛いねー。ちょっと、乗ってみたいかも」

「シャオ様？ 本気ですか？」

「あれえ？ 刃霧は怖いのか？」

悪戯っぽく笑うシャオに、刃霧は慌てて、

「そ、そんな訳ないじゃないですか！ おおおお、お、俺はべべべ、別に」

どもりまくつとるぞ、刃霧。

「綾子お姉さま。対策は……あるのでしょいか？」

心配そうな顔の明命。

そりゃまあ、まともに当たればどうにもならんだろ。

対策、対策……ん、待てよ？

あたしの知る歴史で、孟獲と戦った奴っていや。

「劉備の一行どうしたか、誰か知ってるか？」

明命と刃霧は首を振る。

城に戻って誰かに聞けばわかるか、と思っていると。

「綾子お姉ちゃん。シャオ、見たけど」

「え？ どこでだ？」

「んーとね、江夏近くの村で働いていた。治水工事だったから、まだいるんじゃないかな？」

「シャオ様？ 劉備なんていましたっけ？」

と、刃霧。

「あのね、お昼ご飯が遅くなって、お腹空いた〜、って暴れていたの、誰だったっけ？」

「え？ や、やだなあ、俺そんな事言ってますんって。あははは」

「……言っただな」

「……言っただね、刃霧」

あたしも明命も、シャオの言葉が真実だと見抜いている。

つか、刃霧ならやりかねないし。

「う……。だ、だって、あの日は朝食に麦飯五合だけでさあ」

五合って……まあ、今更驚きもないけど。

「とにかく、刃霧が劉備に関してはアテにならんって事はわかった」

「う……。非道いよ、姐御」

泣いても知らん。

でも、江夏ならばそう遠くない。

「よし、城に戻るぞ。至急、動く必要がある」

「え？ でもまだ俺、杏仁豆腐が……」

「……お前はいいから、好きなだけ食ってろ。シャオ、明命、行く

ぞ」

「ああ、待ってよ姐御！」

で。

もろもろ全権をシャオと千花、風に丸投げ……もとい委任して、あたしは江夏に来ていた。

散々文句も言われたし諭されもしたが、あたしは頑として譲らなかった。

孟獲対策の為には必要不可欠で、あたし自身が動くしかない、そう言い張って。

「しかし、主も動きが軽快なのは良いのですが。身軽すぎますぞ？」
領内だから平気、と言ったのだが、誰もつけないのは不用心すぎる、という事で星がついて来た次第。

「けど、華琳の事もある。時は金なり、だ」

「主。それは？」

「あたしの国の諺だよ。さて、劉備は……お、いたいた」
職人に混じって、泥まみれになりながら工事を手伝っている。

「よ、元気か？」

「え？……あ、美綴さん」

ぺこっと頭を下げる劉備。

「何用だ？」

「お姉ちゃんに手を出したら許さないのだ！」

そして、間に立ちふさがる関羽と張飛。

……まあ、手にしているのが鍬と畚の綱じゃ、あまり迫力もないんだけど。

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん。下がって」

「で、ですが桃香さま！ こやつのせいで」

「美綴さんは何も悪くない。だから、そこをどいて」

「……わ、わかりました」

「お姉ちゃんがそう言うのなら、どくしかないのだ……」

かなり不承不承だが、仕方がないかな。

実際、劉備にはかなり手厳しい事を言ったしな。

「劉備、ちよつと頼みがある。諸葛亮と鳳統を少しの間、貸してくれ」

「はわわ、わ、私ですか？」

「あわわわ、ど、どうしよう……朱里ちゃん」

いきなり指名されて、戸惑いを隠さない諸葛亮と鳳統。

「朱里ちゃんと雛里ちゃんを？」

「ああ。何も雪蓮やあたしに仕えてくれ、って言うんじゃない。ただ、知恵を借りたいんだ」

「ん」

劉備は迷っている。

「貴様！ 朱里と雛里をどうする気だ！」

「関羽。今更、お前さんとわかり合おうとは思わない。けど、あたしはこの二人をどうかしようと思ってきたんじゃない。それは、あたしの名にかけて誓う」

「信じられるか、そのような事！」

「そうなのだ！」

「お前らがあたしを信じないのなら、それは仕方がない。けど、今は時間がないんだ」

「ならば、同席を要求する！」

あゝ、もうめんどくさい奴だな。

「星」

「はっ」

「これを、お前に預ける」

あたしは、二振りの愛剣を、星に手渡した。

「主！」

「これであたしは丸腰だ。それでも、まだ信用しないと言うつもりか？」

「ぐっ……。だが、懷中に小刀を隠しておるやも……」
プチ。

「いい加減にしろ！ お前の態度は、忠義を通り越したただの我が儘だ！」

キレたあたしは、思い切り怒鳴った。

周りにいた兵士や職人が、驚いてこっちを見ている。

「いいか？ あたしだって武人の端くれ。名にかけて誓った約定を破るような真似はしない。だいたい、もしお前らを殺すつもりなら、こんな回りくどいやり方する訳ないだろ！」

「そ、それは……」

「とにかくだ。あたしは、可能な譲歩はしたんだ。それに、許しを貰うのはお前じゃない。劉備、どうだ？」

劉備はジッと、あたしを見る。

「……ん、わかった。朱里ちゃん、雛里ちゃん。美綴さんに力を貸してあげて」

「宜しいのですか、桃香さま？」

「わ、私は……」

怯える二人の頭を、そっと撫でてやる。

「はわっ！」

「あわわ」

「……頼む。民を救うためでもあるんだ、あたしの頼みは」

「……………」

「……………」

暫く、あたしを見上げていた二人。

そして、

「わ、わかりました……。私で宜しければ」

「雛里ちゃん？ 大丈夫なの？」

「だって朱里ちゃん。手がこんなに温かい人が、悪い企みをする筈ないもん」

「……そっか。そうだよね……。美綴さま、わかりました」

やれやれ、
どうにかなかったか。

ゝ六十二ゝ（後書き）

南蛮相手という事で、当事者に再登板して貰う事に。
数話限りとなりそうですが……はてさて。

六十三

二人を連れて、襄陽に戻ると。

「あ、どうも。お久しぶりですね」

穩がいた。

事態が緊迫してきたので、雪蓮が気を利かせてくれたらしい。

風と、何やら話し込んでいるところだった。

「ところで綾子さん？ 何故、その二人がいるんですかねえ？」

流石に、あたしの後ろにいる諸葛亮と鳳統を見とがめたか。

「はわっ！」

「あわわ」

穩が睨んでも迫力ないと思うんだが、二人はあたしの後ろに隠れている。

「そうですよ、お姉さん。風というものがあらながら、浮気するとは節操がないのです」

「……風、その言い方は止せ。誤解される」

「あ、あの……」

「ん？」

「……本当に、良かったのですか？ その、私達……ここに来てしまっ」

諸葛亮がおどおどしながら言う。

鳳統に至っては、帽子を目深に被ってしまった。

……まあ、風は不機嫌オーラ全開だし、他の連中も戸惑っているから当然と言えば当然だけど。

「いや、こっちから頼んだ事だから。穩、あたしの立場はまだ、荊州牧代理でいいんだろ？」

「まあ、そうですね」

「だったら、この荊州に攻め入ってくる連中は、あたしの責任で防がなきゃいけない。手立ても、あたしの判断って事になるな？」

「ですけどお、それと諸葛亮ちゃん、鳳統ちゃんがどう関係あるんでしょうか？」

「今回の孟獲との戦い、この二人にアドバ、じゃなくって助言を貰う事にする」

「理由は、お聞かせいただけますね？」

穩の言葉に、将全員がジッとあたしを見る。

「……ああ、勿論さ。最初に明命から報告を受けたとき、あたしが聞いた事は覚えているな、風？」

「はいー。孟獲軍の情報はないのか、とお訊ねになりましたね」

「そうだ。そして、誰にも情報がないから、調べなきゃいけない。それで、明命に行って貰った」

そして、あたしはケータイの写真をみんなに見せて、
「見ての通り、敵は今までとは違う。何より厄介なのは、このゾウだ」

「ほえー、大きな生き物ですねえ」

「図体だけじゃない。力もあるし、身体も重い。それに、皮膚も硬いときている。こんなのに進んでみる、無事じゃ済まないぜ？」

「お姉さん、能書きはいいですから。理由を聞かせて欲しいのですよ」

不機嫌オーラそのままの風。

「じゃあ、結論から言う。諸葛亮と鳳統は、南蛮の事情に通じている。だから来て貰った訳さ」

「説明になってないような気がしますねえ。そもそも、どうやって二人が南蛮に詳しい、なんてご存知なんですか？」

「……勘、かな」

「はわわ、か、勘でわかつちやっただんですか？」

「あわわ、だ、だとすると凄すぎましゅ……あうう」

いや、勘だと言えないんだけどな。

まさか、歴史では南蛮との戦いに孔明が出向いたから……なんて言える訳がない。

言ったところで、たぶんジョークとしてしか受けて貰えないだろうしな。

なんせ、この世界じゃ蜀という国は出来ていないし、劉備は勿論、あの調子だし。

……ただ、目の前の諸葛亮と鳳統、大陸中の地理に通じているらしいってのは聞いている。

地理に詳しいって事は、地形だけじゃなくそこにいる民族や風土も知っていそうだ、というのがあたしの読み。

「勘ですかあ。それを言われると、何も言えませんか」

「上手く誤魔化された気がするのですよ。でも、孫呉には勘を否定すると大変な御方がいらっしやいますしねー」

「だろ？ だったら、あたしの勘も信じて欲しいんだ。この広い荊州を、南北から一度に攻められたら守りきれるもんじゃない。だから、南蛮との戦いはさっさと終わらせる必要があるんだ」

「それで、私達にお声をかけられた、そういう事ですか」

「そうだ、諸葛亮。あたしは、叶うことなら、こんな事で民を苦しめたくもないし、泣かせたくもないんだ」

「……………」

しかし、あたしもまさかあの諸葛亮に対して、こんな偉そうな事を言う事になるとはね。

まあ、それを言ったら、曹操や孫策、劉備とタメ口を聞いている時点で……………だけど。

「朱里ちゃん」

と、鳳統。

「……………うん、わかってるよ、雛里ちゃん」

諸葛亮は、あたしを真っ直ぐに見据えた。

「わかりました。……信じましょう、美綴さんの事を」

「私達でよければ、お力になります」

「ありがとう。それから、あたしの事は、綾子でいいぜ？」

信頼するって言うてくれた以上、あたしも堅苦しいのはなしだ。

「……では、私の事は、朱里とお呼びくだしい！……はわわ、また囁んじゃった」

「あわわ、で、では私も雛里で……いいです」

「真名だろ、それ？ いいのか？」

「構いません。美綴さん、いえ綾子さんが、私達を信じてくれた事へのお返しです」

「それに、真名を預けた以上、綾子さんも信頼に背くような事は出来ないでしょうから」

「はあ、仕方ないですね。わかりました」

「……風は、負けてないのですよ」

「……何処を見て言ってるんだ？」

年齢はさておき、体型はどっこいどっこいだと思うがなあ。

「さて、朱里に雛里。改めて、よろしく頼む」

「はい♪」

「お任せ下さい、信頼には全力で応えます」

顔合わせの後、あたしは二人を私室に案内した。

他の連中は了承こそしてくれたが、まだ納得しきっていない様子だったし。

折角力を貸してくれるというのに、萎縮させてしまう事もないかな。

「まずはこれを見てくれ。さっきもちよつと見せたけどさ」

あたしは、ケータイの画面に、明命が撮影した写真を表示している。

「はわわわ、す、凄い綺麗な絵だよ、雛里ちゃん」

「あわわわ、ど、どんな絡繰なんですか……？」

「……すまん。あたしも説明できる程、詳しくはないんだ。ただ、これは絵じゃない、写真だ」

「写真？」

「その名の通り、このレンズを通して見たモノを、そっくりそのまま画像として保存してるんだ」

「や、やはり、それも天の国の技術なのでしょうか？」

「いや、それは違うな、朱里。北郷がどうなのかは知らないけど、あたしは天から来た訳じゃない」

すまんな、北郷。

あたしは、天の御遣いとか、そんな評価はされたくないのさ。

……それに、いろいろとめんどくさそうだし。

「でも、これだけの技術を持った国なんて、天の国でもなければ説明が付きませんよ」

「そこはあまりツツコまないでくれ。ただ、ひとつ言えるのは、あたしは技術者でもなければ、侵略者でもない。確かにこれ単体では凄い技術だろうけど、これでこの世界を変えるつもりもないし、そんな事はそもそも無理だ」

「はい。綾子さんにそんな野心があったら、今頃私達はこうしていらなかったでしょうから」

「ま、そういう事。便利な道具の一つ、ぐらいに考えておいてくれないよ」

「おっと、話が脱線したな。で、コイツらが南蛮の連中らしいんだが」

「拝見します」

雛里は、怖々とケータイを手にする。

「私も、直に見た事はありませんが。伝え聞く容姿と一致していますね」

「そして、ゾウは南蛮にしか生息していません。……人の数倍の高さと、数十倍の重さと聞いています」

「あたしのイメージ、いや想像しているのと同じかな。で、問題はその対策なんだが」

「弓や剣では歯が立たないでしょう。かと言って、これだけの大きさでは、立ち足だかつて……」

「撥ね飛ばされるか、踏まれるだけでしょーうね」

「そうなんだ。けど、対策を練らずにぶつかるのは下の下。……何か、いい知恵はないか？」

「うーん」

「難題ですね……」

流石に、いくら朱里と雛里でも、立て板に水、とはいかないか。

「相手は動物だから、本能で危険を悟らせたなら、動きも鈍くなるんだらうけどなあ」

「本能、ですか。動物が怖がるものと言えば」

「……火だね、朱里ちゃん」

「うん。でも、どうやって使うかだよね。火矢ぐらいじゃ、効果はあまりなさそうだし」

「もしくは、兵だけを狙撃出来ればいいんだが……」

あたしが口を挟むと、朱里がぶるぶると頭を振る。

「そ、それは無理だと思います。綾子さんや黄蓋さんみたいな腕前がある兵士さんがいるとは思えませんし、弓も距離を縮めなければ命中率が落ちますし」

「待って、朱里ちゃん。確かに、兵士の皆さんが相手を確実に狙撃するのは無理でも、隊長級の相手だけなら、数も少ないし」

「……そっか、そうだね。じゃあ、それも併せて」

見た目ははわわあわわでも、流石は諸葛孔明と鳳士元だわ。

二人で話し合っているうちに、どんどん戦術が積み上げられていく。

こうして、対孟獲への備えは、着々と進められた。

そして。

……孟獲軍が、動いた。

あたし達は、既に江陵に移動していた。

南から来るのだし、移動距離は短い方がいいに決まっているから

な。

「よし、行くぜ！」

「応っ！」

軍師に朱里と雛里とねね、将は恋、明命、祭さん。

シャオと刃霧は同行したがっていただけ、華琳がいつ動くかもわからなかったし、何とか宥めた。

風と星、穏、千花も残って貰う。

……風は機嫌を損ねていたけど、横文字を教えてやる約束で何とか。

「申し上げます」

そこに、兵士が駆け込んできた。

「何だ？」

「ハッ。長紗より、黄忠様が来られました。美綴將軍に、お目通りを願っております」

紫苑が？

「いいだろう、今は城の入口か？」

「ハッ！」

「祭さん。軍を率いて向かって下さい。あたしは後から追いかけます」

「承知じゃ。じゃが、行軍は急ぎになる。はよう来るのじゃぞ？」

「わかっています。では、頼みました」

「よし。では皆の者、儼に続けい！」

張り切る祭さんをよそ目に、あたしは紫苑を通すように告げた。

こっちから出向いてもいいんだけど、最近は何かとうるさいんだよね……。

「お忙しいところ、押し掛けてしまい、申し訳ありません」

「いや、いい。……で、その格好は？」

相変わらずの爆乳はさておき、今日は弓矢に鎧姿。

普段は柔らかな印象の人だけど、こうしてみるとやっぱ黄忠なんだ

よなあ、この人もさ。

「宜しければ、私もこの戦い、戦列に加えていただけませんか？」

「それは有り難いけど。ただ、太守の韓玄がよく認めたな？」

「ええ、よく話し合いましたから。わかって貰いましたわ」

話し合い、ねえ。

……気のせいかな、ちょっと韓玄に同情したくなったような。

「綾子さん？ 何をお考えですか？」

げ。

ヤバい、読まれてる？

顔は笑ってるけど、背景に文字が浮かんできそうな気迫だ。

「そ、それより、確か娘さんがいたよな？ どうしたんだ？」

「ああ、璃々なら、桔梗に預けて参りましたわ。銘酒を手土産にしたら、喜んで引き受けてくれました」

……いや、もう何も言うな、あたし。

「そこまでされて、断れないな。わかった、頼む」

「うふふ、ありがとうございます。綾子様」

しかしまあ……ますますチート化してんな、呉は。

一路、建寧を目指す。

巴郡を通る事になったけど、これは事前に劉璋の許可を得ている。

……つか、桔梗が許可する、と言って寄越しただけなんだけど。

「季玉がゴチャゴチャ抜かすようなタマではないわ」

そう、竹簡に書いてあった。

……ま、内部干渉するつもりもないし、したくないからほっとくけど。

「ふう、しかし暑い……」

「本当ですなあ」

「雛里ちゃん、暑いなら帽子取ろうよ？」

「い、いいの朱里ちゃん。平気だから」

もともと孫呉は温暖だけど、こっちはマジで暑い。

……けど、軍師―ズ以外のみんなは、平気そうにしてるな。

「暑くないのか？」

「私は、慣れていますから」

「そうじゃ。だらしがないぞ、綾子」

「確かに、暑いのは暑いですが、これが普通ですからね」

……だそうだ。

「恋は？」

「……平気。恋も、小さい時から、慣れてる」

さいですか。

けど、あたしは正直、参っている。

南中に入ったあたりからずーっとこの調子だから。

おまけに蚊は寄ってくるし、妙にカラフルなへビは出てくるし。

さっさとケリつけて帰りたいよ、もう。

「申し上げます！ 前方二十里に、敵軍を発見！」

伝令が駆け込んできた。

「いよいよだな。明命、斥候を頼んだ」

「はいっ！」

「綾子。先方は勿論、儂であろうな？」

いや、弓隊のあなたが前に出過ぎるのはどうかと。

この人も、桔梗みたいに戦い好きだからなあ。

「あ、あの……」

「何じゃ、小娘？」

「あうう……。作戦があるので、それに従って頂かないと」

「祭さん。朱里が怯えてるじゃないか」

「儂はこれが普通じゃ。この程度で縮み上がってどうする」

「あらあら、もっと言い方がありますよ？ ほら、鳳統ちゃんまで

怖がってるじゃありませんか」

「むう。これでは、儂が悪者ではないか」

威張ったり拗ねたり、忙しい人だよ全く。

「今回の軍師は二人なんだ。任せないとダメですよ」

「別に従わぬとは言っておらんぞ」

「なら、朱里の言葉を聞いてやって下さい。雛里も、あたしの陰に隠れるな」

……優秀なんだけど、二人とも内気過ぎるのがなあ。

もう一人の軍師殿は……。

「恋殿、小細工などこのねねが全て見抜いてみせますぞ！ 存分にお働き下され」

「……ん。ちんきゅー、頼りにしてる」

……相変わらず、恋のオマケ状態だし。

「と、とにかくですね。弓に長けた皆さんには、精密射撃をお願いしましゅ！……また囁んじやったよ」

「そして、敵が混乱したところで、一気に火計を仕掛けましゅ……あわわ」

……周りが、思い切り和んでるなあ。

「ゴの奴らにゃ！ この南蛮に攻めてくるとは、身の程知らずなのにゃ！」

……ホントに、猫耳付きかよ。

進撃してきたかと思ったら、前に出てきた将……というか生き物。

「我こそが南蛮大王孟獲なのにゃ！ みいはえらいのにゃ！」

「はわゝ、もふもふしたいですう」

「明命、気持ちはわかるが……まずは落ち着け」

「……可愛い」

あ、恋が撫で始めた。

「はにゃゝん」

「……猫だな」

「……猫ですわね」

「……猫、ですね」

「……はっ？ にゃ、にゃにをするんだにゃ！」

「……お前、可愛い。だから、撫でた」

「なああん」

猫だよなあ、どう見ても。

なら、ちよつと喉仏あたりを。

「ごろごろ」

「あーっ、みいさまばかりずるいにゃ！」

「……がおー」

「な、何だあ？」

あつという間に、あたしは周りを取り囲まれて。

……で、スリスリされてるんですが？

「はわわわわ、あ、綾子さん」

「あわわわわ、だ、大丈夫ですか……？」

「心配要らん。あやつは、ああして猫に好かれやすいのじゃ」

「はわゝ、お姉さま。もふもふ、もう我慢できません」

うゝむ、あれだけ備えたのは、もしや無意味だった……とか？

「……恋も、可愛がる」

戦をしに来た筈が、完全にそんな雰囲気じゃなくなっている。

……結局、全く戦わないまま、日が暮れた。

「お、覚えているのにゃ！ 明日は、こうはいかないじょ！」

捨て台詞っぽいのを吐いて、去って行く孟獲一行。

「……どうすつかね、あれ」

「……どうしましょうか」

「……どうしましょう……」

あまりの事に、誰も対処が浮かばなかった。

ゝ六十三ゝ（後書き）

なかなか戦いに入れません。

綾子のスキルから行くと、この方が自然でしょうけど。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ゝ六十四ゝ（前書き）

今月中に完結させる予定でしたが、ちょっと難しそうです。
連休中か、連休明けぐらいになるかも知れません。

六十四

「ただいま戻りました」

「おう、ご苦労さん」

明命が斥候から戻ってきた。

「で、どうじゃった？」

「はい。南蛮、と言っても小さな集落の集まりです。兵の数は集結したとは言っても、二万がやっとかと」

数だけなら、楽勝とは行かなくても勝てる筈だ。

なんせ、こっちは一騎当千の将が揃っている上、引き連れてきた兵も屈強。

……が、朱里や雛里の表情は冴えない。

「……ただ、あまり悠長には戦えませんね」

「……食糧が、腐ってきていますし。水も、この辺りのは毒されていますから」

「生水が駄目なら、煮沸すれば良いのです」

「それでも駄目なんです、ねねさん」

「あら、どういう事なの？ 朱里ちゃん」

と、紫苑。

「やっぱり、毒が抜けないらしくて。飲んだ兵士の方が、酷い下痢や腹痛に襲われています……」

「……となると、細菌が混じっているんだろうな」

「細菌？」

あたしの言葉に、全員が首を傾げる。

あ、この時代はまだ細菌というもののそのものが知られていないか。「微生物」とって、目に見えない小さな生き物さ。中には人間の役に立つ奴もいるけど、こうして悪さをする奴もいる」

「そ、そんな生き物が水の中に？」

「いや、細菌自体はあたし達の身体の中にもいるんだけどさ。つー

か、気にしていたら何も出来ないぜ？　今こうして吸っている空気にも、細菌は混じっているんだから」

「あわわ、た、大変です」

「……いや、そこ慌てる所じゃないから。言っただろ、細菌全部が悪さをする訳じゃないって」

とは言うものの、全員あまりいい気持ちはしないらしい。

「水なら、濾過する事で飲めると思うぜ？」

「濾過、ですか？」

「そう。ホントはフィルターって言うのがあればいいんだけど、簡単なのは炭を使う事だな」

「炭……ですか」

朱里達の表情が変わった。

「そう。木炭でもいいんだけど、竹炭がもつといいかな。で、それを何かの入れ物に多めに入れて、そこにやばそうな水を入れるんだ。そして、数時間漬けておいたら終わりだ。心配なら、その後で煮沸すればいい……って、どうかしたか？」

なんか、全員呆気に取られてるんですが？

「……あの。それも、綾子お姉さまの国では、当たり前前の知識なのでしょうか？」

「当たり前って言われるとな。ただ、アウトドア……じゃない、野外生活の基本みたいなモンだけど」

「天の御遣いって、魏にいるって話ですけど。本当は、綾子さんこそそうなのでは？」

「ねねもそう思うのですぞ……。綾子殿の知識、あまりにも我らとかけ離れているのです」

墓穴を掘ったか、もしかして？

「申し上げます！」

伝令が、そこに飛び込んできた。

「何事じゃ？」

「はっ！　我が軍の背後より、所属不明の軍勢が迫っております」

「ええっ？　で、でも所属不明って……旗はないのですか？」

「はい。牙門旗も見られず、また甲冑も見慣れぬ物との事」

正体不明の軍勢……まさか、とは思うがなあ。

「それで、数は？」

「およそ、一万！　ただ、正確なものではない、と」

「見ての通り、密林だらけですし、足場も沼が多くて……。私も、大変でしたから」

明命の、実感のこもった言葉通りなのだろう。

「でも、このままでは挟み撃ちね……。綾子さん、どうなさいますか？」

軍を二手に分けるのが、一番オーソドックスだろう。

ただ、食あたりや水あたりで、戦闘力は思いの外削られているのが実情でもある。

「朱里、雛里、ねね。あたしは、その軍勢に全力で当たるべきだと思います。どうだ？」

「……そうですね。現状だと、それが一番かと」

「孟獲軍は、地の利がありますし。私の把握している地図も、この辺りまで来ると正確かどうかわかりません」

「それに、奴らは少数ですからな。追えば逃げる、の繰り返しでなかなか捕まえにくいのです」

「よし、決まりだ。祭さんと紫苑は、左右に兵を伏せて、挟撃を頼みます」

「応、任せておけい」

「わかりましたわ」

「明命は、手勢を連れて奴らの背後に回りこんでくれ。退路を断てば混乱する筈だ。出来れば、正体も突き止めて欲しい」

「はいっ！」

「恋とねねは、敵を正面から迎撃。三方から攻撃が始まったら、一気に敵陣を突き崩してくれ」

「……わかった。恋、頑張る」

「ねねにお任せなのですぞ！」

「朱里は全体を見て、臨機応変に部隊を動かして欲しい」

「はい！」

「雛里は、あたしと一緒に不意打ちや、まさかとは思うが孟獲の襲撃に備えて欲しい」

「了解です」

「じゃ、みんな頼むぜ？　あたし達の力、見せてやるぞ！」

「応っ！」

さて、なんか勢いで仕切っちゃったけど……。

「雛里」

「は、はいっ！」

「……こんなもんで良かったか？　折角軍師としていて貰ってるんだから、任せりゃ良かったかな」

「いえ。綾子さんは総大将ですから、それでいいと思います。将の皆さんは、状況判断が出来る方ばかりですから、細かい指示は不要です」

「私もそう思います。それに、役割分担は的確だと思っていますよ♪」
雛里だけじゃなく、朱里にまで褒められてしまったぞ。

「はは、臥龍、鳳雛に褒められるとはね。ありがとうな」

「あう……。お、お礼を言われる事じゃないです」

「あ、あの……。それなら後で、撫でていただければ……」
「いいけど。……なあ、これ、そんなにいいか？」

と、撫でる真似をする。

「はい……。暖かくて、優しくて」

「とても、心が休まるんです。不思議、ですよね」

「そうなのか。……自分じゃわからんし、まあいいや」

「はわわ、綾子さん。敵が、攻めて来ちゃいました！」

「……お、来たか」

さて、いっちょやりますか。

ヒュンヒュン。

飛び交う、無数の矢。

「ぐわっ！」

「ぎゃっ！」

平野と違い、木々には遮られるものの、それでも確実に矢は兵士の命を奪っていく。

……まあ、命中率は圧倒的にこちらが上みたいだけどさ。

なんせ、祭さんに紫苑、おまけに恋まで弓を手に行っているんだ。

この大陸でも屈指の弓使いばかり揃っているんだから、どんな軍だ。

「せっ！」

ヒュッ！

「ぐはっ！」

あたしも、ジッと座ったままってのは性に合わないので、時折こちらに忍び込もうとする、敵の間諜を射ている。

「あわわ、もう十二人目です」

「いんや、十三人目だ。つか、しつこい」

ドドドドドドド。

ん？

なんか、急に地面が揺れだしたな。

「も、申し上げます！」

「どうした？」

「は、はっ！ も、孟獲軍が、どこからともなく現れ、迫っております！」

「……来たか。雛里、備えは？」

「は、はいっ！ 予備の兵士さん達が待機していますから、予てからの手筈で大丈夫です」

「よっしゃ。おい、各部隊に伝令を。孟獲軍がやってきたが、それはこちらで対処するから、目の前の敵を確実に叩け、と」

「はっ！」

「今度こそ、みいたちにこてんぱんにされるのにゃ！」

「そうにゃ！ みいさま強いのにゃ！」

相変わらずニャーニャーと騒いでいるな。

違うのは、ゾウに乗っている事。

「祝融！ やっちゃんじょ！」

「パオーン！」

ドスドスドス！

流石に地形は把握しているようで、ゾウの重量でも沼地に足を取られる事もなく、まっしぐらに突進してくる。

……けど、その猪突猛進こそ、待っていたんだが。

「よし、今だ！」

合図と共に、用意した特大の綱を引く兵士たち。

「にゃ、にゃんだとー！」

いくらゾウとは言え、何頭かは引っ掛かる。

転倒させるのではなく、足止めが目的。

「ど、どくんだじょ！」

「無理だにゃ！ ゾウは急には止まれにゃい！」

そして、ゾウ同士が衝突を始めた。

「パオオーン！」

「パオン！」

「こら！ 言う事を聞くにゃ！」

「みいさま、どうすればいいにゃ？」

「……がう」

案の定、獣娘達は大混乱。

「雛里！」

「はいっ！ 皆さん、次の攻撃をお願いします！」

ヒュンヒュン！

火矢が、孟獲軍の周りに突き刺さる。

そして、油を染み込ませた枯草に燃え移る。

火の勢いそのものは弱いが、ゾウのような草食動物を怯えさせるには十分。

「ひ、卑怯だじょ！」

「そうにゃ！ 正々堂々と勝負しろにゃ！」
獣娘達は一斉に抗議。

……いや、迫力ないねえ。

ズドドドド。

そのうちに、暴れ回るゾウの何頭かが、突然地響きと共に視界から消えた。

掘っておいた落とし穴に落ちたんだろう。

「いや、悉くハマるとはね。流石は雛里だ」

「エヘヘ。ありがとうございます」

あまりの可愛さに手が出かけたが、咄嗟に抑えた。

どうも、あたしのナデナデは効きすぎるようだからな。

「ふにゃあ。目が回るにゃ……」

「みいさまあ。逃げた方がいいにゃ」

おっと、そうはいかんよ。

「全員、捕らえろ！ いいか、殺すなよ？」

「応っ！」

「にゃにする！ 離せにゃ！」

「あたしは美味しくないじょ！ 食べるとお腹が痛くなるにゃ！」

いや、食べないし。

あたしは、孟獲の前に立つ。

「おい」

「お前は誰にゃ！ みいは王様だじょ！ ヘヘーっするにゃ！」

「王様ねえ。……にしちゃ、可愛すぎるな」

頭に手を伸ばし、撫で付ける。

「うにゃー♪」

お、気持ち良さそうだ。

……わざと、手を引つ込める。

「どうして止めるにゃ！ もっとするにゃ！」

「なら、降伏しろ。どのみち、もうお前らの負けだ」

「う……。悔しいけど、確かにお前の言う通りにゃ……」

「みいさま、トラ達は負けたのにゃ？」

「……がうがう」

周りの獣娘達、一斉に落ち込む。

「そもそも、何で攻め込んで来たんだ？」

「曹操とか言う奴が、たくさんごちそうを持って来たんだにゃ。で、ゴとか言う奴らをやっつけたら、ごちそう食べ放題だって約束されたんだにゃ」

……食い物に釣られた訳かよ。

「けどさ。食い物はあるだろ、ここにも？」

「あるけど、足りないんだにゃ。それに、ごちそうはケイシユウとかエキシユウとかにはたくさんある、そう言われたじょ？」

……まあ、此処に比べりゃそうだろうけどさ。

華琳の奴、抜け目がないよな、ホント。

「なら、食い物が手に入ればいいんだろ？」

「にゃ？ お前らがくれるのか？」

「いや、あたしらだってタダで分ける訳にはいかないさ。けど、こっちでしか採れない果物とか、野草があるだろ？ それと交換すればいいじゃないか。貿易、って奴だ」

「よくわからにゃいけど、みいたちの食べ物があれば、代わりにごちそうにしてくれるのかにゃ？」

「……詳しい事は、また後だ。とにかく、あたし達はお前らがこれ以上、何もしないなら戦うつもりはない。仲良くしようぜ、な？」

首筋を撫でると、

「不思議だにゃ。お前、何者にゃ？」

「何者って。美綴綾子だけど」

「気に入ったにゃ！ みいの真名は美以にゃ、今から綾子が南蛮の

王様だじょ！」

「いいっ！ いや、王様は美以だろ？ それに、あたしには主がいるからさ」

「みいは構わないにゃ。けど、綾子はみいのご主人様にな！」

「ご主人様だにゃ！」

「がうがう」

「いててて。お、お前ら。いっぺんにしがみつくな！」

「はわわわ、綾子さんが大変な事になってます」

「あわわわ、朱里ちゃん。ど、どうしよう」

「はわわあわわ言ってるで、これ何とかしろー！」

「はうあゝ、もふもふですう」

「……可愛い」

美以達相手に和んでいる二人は、とりあえず置いというて。

目の前に、縛り上げられたおっさんが一人。

あたしを、憎悪むき出しの目で睨んでいる。

「で、お前さんか。黒幕は」

「……………」

あたし達を背後から襲おうとした軍は、チートとしか言えない将に囲まれてフルボッコ。

結果、軍は壊滅、指揮していた将は討ち取られるか、捕虜となった。

「黙りかい？ 王朗さんよ」

「！……貴様、何故儂を知っている？」

「あたしが、会稽太守に任じられて。誰が一番面白くなく思うか……考えりゃわかるって。雪蓮に追われるまでは、アンタがその立場だったんだからな」

「そうじゃ！ 儂は会稽太守として、何の落ち度もなかった！ なのに理不尽にも、孫策めは攻めてきおった。挙げ句の果てに、出自

も知れぬ貴様のような輩が後金だと!」

「あたしは望んだ訳じゃない。ただ、陛下の思し召しを断れるか、普通?」

「黙れ! おおかた、甘言で陛下を惑わしたのだろうか、この女狐め!」

うわゝ、酷い言われよう。

「信じろ、って言っても無理だろうけどさ。それに、アンタは正しい事をしているつもりだろうけど、端から見りゃただの逆恨みだ。だから、領民から見放されるんだよ」

「黙れ黙れ黙れ!」

「……お前、五月蠅い」

恋が、方天画戟を突きつける。

「さっさと殺せ! だがな、末代まで崇ってやる故、覚悟するのだな!」

「そう言われてもなあ。まあ、アンタのせいでいろんな人が迷惑を被ったのは確かだ。裁きは雪蓮に任せよう」

「そのような悠長な事で良いのか? 儂を捕らえても、貴様は助かった訳ではないのだぞ? フハハハハ」

「……どういう意味だ?」

「フン。儂だけの力で、ここまで出来ると思ってたか!」

黒幕がまだいる……って事か。

「なら、話して貰おうか?」

「吐かせる事なら、儂に任せよ」

「私もお手伝いしますわ」

と、妙に張り切る二人が、王朗に近づいたその時。
シュッ!

「うぐわっ!」

王朗の首筋に、矢が突き刺さる。

「何者!」

素早く我に返った明命が、あたりを見渡す。

その間にも、王朗に何本もの矢が、向かってきた。

「クソッ！」

咄嗟に、あたしは剣で矢を叩き落とす。

……が。

グサッ！

「ガッ！」

右肩に、焼け付くような痛みが走る。

王朗に氣をとられて、背後からの矢に氣がつかなかったか……不覚！

「お、お姉さまっ！」

「綾子！　しっかりせい！」

「綾子さん！」

く、やばい……だんだん、氣が遠くなって……。

〔六十四〕（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

次回作候補も現在公開中です。

そちらの方のご意見も伺えれば幸いです。

く六十五く（前書き）

少々、ベタな展開になります……。

六十五

「姉ちゃん、何やってんだよ？ 遅刻するぜ？」

「待てって、実典」

しかし、今日に限って何でまた寝坊したんだ、あたし？

朝練どころか、ホームルームにもヤバイぜ、これ。

「つーか実典、アンタも朝練どうしたんだ？」

「今日は休みだって、昨日言ったの姉ちゃんだろ？」

「あれ？ そうだったか」

「ったく、朝から寝ぼけてちゃしょうがないだろ？」

実典に言われるとは、あたしもヤキが回ったね。

「綾子。ご飯はどうするの？」

「ああ、悪いけど時間がない。これだけ貰っていく！」

焼いたトーストを咥えて、靴を履く。

エレベーターのところで、実典が待っていた。

「姉ちゃん、急いで」

「わかってるって！」

学校までは、当然ダッシュ。

こういう時、この状態で曲がり角にさしかかると、誰かにぶつか
る、なんてベタなお約束があるよなあ。

……とか、余計な事考えていたら。

「うおっ！」

ドシン！

ホントに、出会い頭になった。

「いてて……」

「す、すいません！」

相手も確かめず、あたしは咄嗟に謝った。

「いや、そちらこそ怪我はないかい、お嬢さ……げ、美綴？」

な〜んか気障ったらしい台詞だな、と思ったら。

「なんだ、ワカメか」

「ワカメじゃない！ 俺だよ、俺！」

「……誰だったっけか。実典、このワカメ誰だ？」

「誰って。副部長じゃないか」

「副部長？」

「そうだって！」

「……う〜ん」

思い出せないんだよなあ、何故か。

あたしの知り合いに、こんなワカメいたっけ？

「それより姉ちゃん、遅刻遅刻！」

「あーっ、そっちの方が重要だ！ じゃあ、悪かったな、見知らぬワカメ」

「だからワカメじゃないって言ってるだろ！」

なんか叫んでるけど、思い出せないって事はどうでもいい奴なん
だろ。

ブオン、ブオン！

「ほらほら、遅刻しちゃうわよ？」

原付とは思えない爆音を立てて、疾走してくるのは冬木の虎。

「藤村先生、前、前！」

「え？」

ドシン！

「ギャアアアア！」

ほら、言わんこっちゃない。

さっきのワカメが、思い切り巻き込まれたぞ。

「あらら、ちゃんと車道は端っこを歩かないとダメよ？」

「そ、そういう問題かタイガー！」

「私はタイガーじゃないっ！」

バシン！

「ふべっ！」

どっから取り出したのかは知らんけど、竹刀でワカメを吹き飛ばす藤村先生。

「美綴さん？ 急がないと遅刻するわよ」

「そういう先生こそ、こんな時間でいいんですか？」

「ああーっ、そうだった！ じゃ、またね！」

ブロロロロロロ！

……なんか、仮面ラ○ダーのバイクみたいな音出してるぞ、あの原付。

「姉ちゃんってば！」

「あ、そうだった。急げ！」

坂道を登り切り、校門を抜け、教室に駆け込んだ。

ま、間に合ったあ。

「あら、美綴さん。今日は遅かったのですね」

「おす、遠坂。いやあ、今日に限って寝坊だよ」

「珍しいですわね。朝練が休みだったとは言え、美綴さんがこんなに慌てて来るなんて」

今日も、遠坂は見事な猫被りぶりだ。

「……あれ？ 氷室達はどうした？」

「氷室さん達なら、国体で遠征中でしょう？ 美綴さん、ご存じの筈ですわよ」

そうだったけ。

……なんか、いろいろと記憶が欠落してるなあ。

ガラッ。

「おはよう。日直、礼を」

お、葛木先生だ。

「美綴さん。後で、お話があるから」

そう言って、遠坂は意味深にニヤリと笑った。

……なんか、嫌な予感がするぞ。

そして、昼休み。

遠坂に中庭に連れ出された。

「何だよ、一体？」

「ねえ、綾子。前にした賭、覚えているわよね？」

猫被りモード解除の遠坂、やけにニヤニヤしている。

「賭？」

「ほら、どっちが先に彼氏を見つけるか、って。まさか、忘れた、とは言わせないわよ？」

「……いや、覚えている。けど、それがどうかしたか？」

「うふふふ」

「な、何だよ？ 気持ち悪いな」

「いいわよ、出てきて」

遠坂の合図と共に、木陰から一人の男子が出てきた。

「……衛宮？」

戸惑うあたしを余所に、遠坂は衛宮の腕を取る。

そして、

「これでわかったでしょ？ 賭は私の勝ちね」

「……マジ？」

「ええ。ね、士郎？」

「あ、ああ……。まあ、そういう事だ、美綴」

照れながらも、否定しないって事は……。

「で、綾子はどうなの？ このまま、私の勝ちって事でいいのかしら？」

くそ、勝ち誇ってやがる。

……ふと、その時ものすごい寒気を感じた。

「衛宮先輩、それに遠坂先輩。……それ、どういう意味ですか？」
いつの間にか、桜が背後に立っていた。

「さ、桜？」

「あら、間桐さん。何か御用？」

「……ふふ、うふふふふ。お二人とも、事情をじっくりと聞かせて

いただきましょか？」

……なんか、どす黒いオーラが出ているんですけど。

「じ、じゃあ、あたしはこれで。後は三人でゆっくり話し合ってくれ」

「み、美綴？」

「ちょ、ちょっと綾子？」

なんか、引き留められてるけど、あたしには関係ないし。

三十六計逃げるにしかず、だ！

……しかし、遠坂に先を越されるとは。

しかも、衛宮が相手とはね。

完全にノーマークだっただけに、無念というか……。

このままじゃ、賭は負け。

けど、今のあたしには彼氏なんている筈もない。

そんな事を考えながら、下駄箱で上履きに履き替えようとした。

「……あれ？」

あたしの上履きの上に、何か載っている。

……手紙か。

周囲を素早く見渡して、中身を確かめた。

『放課後、体育館の裏で待っています。大切なお話があります』

妙に可愛らしい便箋に、それだけが書かれている。

……これ、ラブレターかね？

あたしも、何度か貰った事はあるにはある。

……ただ、全部相手は女の子だったけどな。

今回も、そんな雰囲気はある。

でも、ホントに男子からの手紙、という可能性だってある訳で。

……会うだけ、会ってみるか。

もしかしたら、勝負をイーブンに持ち込めるかも知れないからな。

……もしかしたら、だけど。

放課後。

「あたしは、ちょっと遅れていくから。部の連中に、そう伝えておいてくれ」

「いいけどさ。姉ちゃん、どうしたんだ一体？」

訝しげに、あたしを見る実典。

「いや、ちよつと……な。じゃ、頼んだぜ？」

気になり出すと止まらないモンで、午後の授業はほとんど頭に入らなかった。

相手がまだ男か女かもわからないし、男だとしても後藤みたいな奴かも知れないし。

……まさか、柳洞って事は……ないよな？

靴を履き替えるのもどかしく、あたしは体育館裏へ。

……誰もいないなあ。

「おい、来てやったぞ？　あたしに用か？」

「そうよん。待っていたわ」

と、頭上から声が。

……って頭上？

「とうっ！」

スキンヘッドにお下げ髪の筋肉達磨が、女子のブレザーを着込んでいた。

「愛しているわよ、ご主人様」

「な……なんだお前？」

「むちゅー」

「うわーっ、来るな来るな、この化け物！　妖怪変化！」

バキッ！

「ぐはっ！」

……あ、あれ？

なんか、確かな手応えがあったな。

ズキッ！

「ぐわっ！」

右肩が、酷く痛む。

「いてて……ん？」

ふと、気がつく……あたしの周りには、いろんな人が集まっていた。

明命、蒲公英、菖蒲、シャオ、刃霧、朱里、雛里、恋、ねね、星風……それに、美以までいる。

そして、何故か部屋の隅に倒れている貂蟬と、その隣で呆然としている華佗。

「……あれ？ どうしたんだ、みんな？」

「……う……」

「シャオ？ どうかしたか？」

「綾子お姉ちゃん！ 良かった、本当に！」

堰を切ったように、泣きながらシャオが抱き付いてきた。

「綾子お姉さま！」

「綾子様！」

「綾子姉さん！」

「姐御！」

「綾子さん！」

「……綾子」

「綾子殿！」

ってお前ら、一度に乗っかるな……重いって。

「主。二週間も目が覚めなかったのです、皆が心配するのは当たり前ですぞ」

「に、二週間？」

「そうですねー。幸い、華佗さんが見つかったので治療していただけましたけど、かなり危なかったのです」

「いや、俺だけでは不可能だった。南蛮にしかない、幻の薬草がなければ、危ういところだった」

「綾子を助ける為に、みいは頑張ったにゃ！」

「……そっか。みんな、ありがとう。そして、済まない」

「もう、ご主人様ったら酷いのねん。折角、私が手厚い看病をしてあげていたのに」

そして、貂蟬も復活。

……さっきのは、夢か。

冗談抜きで、こいつに告白なんかされたら全力でボコるけど。

しかし、二週間か。

「綾子さん。あの後ですけど、王朗の残党は、祭さんが建業へと連れて行きました」

「それから、軍の撤収と荊州の備えは、風さん、ねねさんと協力して手配してあります」

ホント、頼りになる軍師ーズだよ。

「……綾子お姉さまを襲った矢ですが、犯人に逃げられてしまいました。後を追ったのですが……」

申し訳なさそうな明命に、あたしは手を振る。

「仕方ないさ。明命が追えなかった相手だ、それだけ厄介な奴だ、って事だろ」

「はい。ですが……」

「いって。それより華佗、あたしのこの傷、あとどのぐらいで治る？」

「うむ。安静にしていれば、あと一月、というところだな」

「一ヶ月もか。もう少し、負からないか？」

「……何を言っている。だいたい、お前が受けた矢には、毒が塗ってあったのだぞ？ 当たり所が悪ければ、致命傷になっていたところだ」

「ど、毒？」

「そうだ。もし、骨に達していれば、肉を開いて骨を削らなければならぬところだったぞ？」

うへー、それってあたしの知る歴史つつーか演義で、関羽が碁を打ちながらやらせたってアレか？

……麻酔なしであんな荒っぽい外科手術とか、願い下げだって。
「とにかく、良くなるまでおとなしくしてなさい、って雪蓮お姉ちゃんから。その間は、シャオが綾子お姉ちゃんの代わりをするからね」

「……わかった。頼むぜ、みんな」

「御意ですよー」

「はっ！」

「はいっ！」

「了解しましたぞ！」

「……ん」

「任せとけて」

ホント、頼もしい顔ぶれだよ。

普通に考えりゃ、あたしみたいな凡人がこの中に混じっている事自体、あり得ないよなあ。

みんなが各々の持ち場に戻り、部屋に残ったのは……貂蟬だけ。
キモイんだけど、話があるからな。

「さっきは悪かったな。けど、夢に出てくるアンタも悪いんだぜ？」

「んもう、ご主人様の夢まで責任取れないのねん」

結構な左ストレートを入れたつもりだったんだけど、全く効いていない様子がないね。

「ところで、いくつか質問がある」

「いいわよん。答えられる事には答えるわ」

「……結局のところ、あたしは元の世界に帰れるのか？　それとも、このままなのか？」

「その事ねん。……ご主人様次第、ってところねん」

「あたし次第？」

「そうよ。……本当に、元の世界に戻る事を強く願うなら、適うかも知れないけどねん」

「……………」

「どう？ 本当に、それが今のご主人様の願いなのかしらん？」

「……わからん。あたしのいるべき場所がどっちなのか、わからなくなってきたんだ」

もちろん、生まれ育った元の世界。

両親がいて、実典がいて、親友や後輩がいて。

弓道部部长としてのあたしが、高校生としてのあたしがいる。

……けど、こっちに来て、早いものでもう数年が過ぎた。

雪蓮とは、マブダチと言える関係だろう。

そして、こんなあたしを慕ってくれたり、信頼してくれている仲間達がいる。

「それならば、答えはご主人様自身で出すしかないのねん」

「……やっぱ、そうか」

ふう、とあたしは息を吐く。

「それから、あたしをここに呼んだ理由。それは、まだ教えて貰えないのか？」

「……ごめんなさいね。ただ、もうじきわかると思うのねん」

「もうじき、ね」

あたしにも、この戦乱が終息に向かいつつある事は、わかってい

る。

大陸の南半分は、ほぼ孫呉が押さえた。

一方、北半分は、華琳がまとめるのも時間の問題。

あいつは覇道を歩む事を公言しているのだし、当然、決着をつける事になる筈だ。

「グッ……」

「痛むの？」

「ああ、少しな……」

「そう。華佗を呼んでくるわねん」

そう言って、部屋を出て行く貂蟬。

とにかく、この傷を早く治さないと。

……もう少し、あたしも頑張るしかないみたいだからさ。

〔六十五〕（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

次回作候補も公開中です。

そちらの方へのご意見も引き続きお待ちしております。

ゝ六十六ゝ（前書き）

土方歳三を主役とした『至誠一貫』、公開中です。
本作と併せてよろしくお願い致します。

六十六

「よし、もういいだろう」

一ヶ月後。

あれから華佗がずっと残ってくれていた事もあり、あたしは無事に完治。

「利き腕が使えないってのは、こんなに不便だとは思わなかったよ」
「筆を持つ、箸を持つ、全て利き腕で行うように自然と訓練されるからな」

「そうだな。右腕の筋肉もだいぶ落ちた気がするし、鍛え直さないと」

……で、何気に残念そうな菖蒲とか、明命とか、紅蓮とか。

あたしが不自由しているだろうから、と代わる代わる世話を焼いてくれていた、それはいい。

……ただ、ちょっと気を許すと、頼んでない事までしようとするのはマジ勘弁だ。

何をされようとしたのかは、本人達の名誉のため伏せておく。

つーか、思い出したくない。

「綾子、もう大丈夫のようね」

そこに、蓮華が入ってきた。

当然、思春は側に控えている。

「心配かけたな」

「私だけじゃないわ。他の将も、それから民もそうだったわ。特に、南陽とか会稽とか、綾子と関わりの深いところは大変だったわよ？」

「……そっか。ありがたいよ、ホント」

「もちろん、思春もよ？」

「なっ、れ、蓮華さま！ わ、私は別に」

その割には、随分慌てているようだな。

「ふふっ、もう少し素直になればいいのに」

「……蓮華さまには言われたくありません」

「し、思春！ それ、どういう意味よ！」
相変わらず、仲のいい主従だこと。

「あ、そうそう。正式な荊州牧就任、おめでとさん」

「私は、綾子のままで良かったと思うんだけど。そう言う勅令だから仕方ないけど」

劉表が益州に逃げ込み、実質空席のままだった荊州牧。

いくら漢王朝が形骸化していると言っても、その職務にはまだ権威が伴っている。

華琳は、漢王朝そのものには手を触れていない。

連合軍参加の際、建前上とは言え、陛下に忠誠を誓ったせい……なのかな？

もつとも、華琳の事だ。

『そのような形ばかりの権威などなくとも、私は自分の力で覇道を歩めるわよ』

……ぐらいの事は言いそうだな。

「で、あたしはこれからどうしたらいいんだ？」

「それなんだけど。姉様が一度建業に来るようになって」

「建業に？」

「ええ。何人か、同行させるわ。まだ怪我が治ったばかりだから、何か起きたら対応できないでしょ？」

「……すまん。あたしのために」

「気にしないで。あなたは、孫家にとっても、呉にとってもそれだけ大切な人だから」

ホント、呉ってアットホームだよなあ。

一旦仲間になった人物に対しては、ホントの家族のように接し、大切にする。

「それで、誰が主と同行するのですかな？ 私は譲りませんか？」

「風もお姉さんと一緒に行きますねー」

星と風は、真っ先に手を挙げる。

「あーっ、二人ともずるい！」

「そうですよ！ 抜け駆けは許しません！」
「だあああ、またこのパターンかい！」

「静まれ！」

収拾がつかなくなる寸前で、蓮華がみんなを一喝。
すっかり、貫禄が出てきたねえ。

「それはこちらで決める。追って沙汰があるまで、この件については勝手は許さん！」

「……みんな。気持ちはうれしいけどさ、蓮華の言う通りだぜ？」
「……はっ」

「それから紫苑、蒲公英、それに諸葛亮と鳳統」

「はい」

「はーい♪」

「は、はい！」

「……はい」

呼ばれた四人が、蓮華の前に出た。

「荊州と南蛮の平定で、多大なる助力を貰った。姉に代わり、この通り、感謝する」

そう言って頭を下げる蓮華に、四人は慌てる。

「おやめ下さい。私達に、そのような」

「そうだよ。たんぼぼ達だって、月達を助けて貰ったんだし、おあいこだよ」

「はわわわ、わ、私も別にそんなつもりないでしゅ！……あう」

「あわわわ、そ、そうでしゅ。……私まで噛んじゃった」

「いや、蓮華の言う通りだ。……あたしからも、この通りだ」

実際、この四人がいなけりゃ、もっと手こずっていただろう。
けど、あくまで助っ人、いつまでも呉の将のように働いて貰う訳にはいかない。

「蓮華。あたしから礼がしたいんだが、いいか？」

「そうね。任せるわ」

「綾子さん。私は別にそのようなつもりでは」

「いいんだ、紫宛。あたしの気の済むようにさせてくれよ。な？」

「……仕方ありませんわ。あまり固辞も、却って失礼でしょうから」
「他のみんなもいいな？」

全員が頷いたのを確かめて、

「まず、朱里に雛里」

「は、はい！」

「はい……」

「二人には、お菓子の製法を教える」

「お菓子、ですか？」

戸惑う二人。

「ああ。勿論、製法はあたししか知らない。材料が上手く手に入るかどうかからんだけど、きつと二人にも満足のいくモノが作れる筈だぜ？」

天下の大軍師相手に書物つてのもあり得ないし、お菓子作りが好きみたいだから。

ちなみに、生クリームを使ったレシピを教える予定。

牛乳はまだないけど、西涼に行けば馬乳があったぐらいだ、何とかなるだろう。

「たんぽぽは、新しい槍だ。強くなりた、って言ってたからな」

「う、うん。でも綾子姉さま、今の槍でもたんぽぽ、十分だよ？」

「まあ、そう言うな。あたしのこの剣を鍛えた鍛冶屋に頼むんだぜ？」

そう言って、二振りの愛剣を見せる。

「え？ その宝剣を？」

「そうさ。だから、業物になる事は保証出来る。ただ、出来上がるまでに日数がかかるから、後で送らせるよ」

「なんか悪いなあ。たんぽぽだけ、いいの？」

「いいんだ。それより、新しい槍でもっと腕を上げるんだな。でないと、いつまでも翠には勝てないぜ？」

「はあゝい」

そうは言っても、あの翠に追いつくのは相当難しいだろうけど。その分、格好の目標ではあるかもな。

「紫苑だけど……璃々ちゃんだっけ？ 会った事がないから、どんな子かわからなくて。だから、在り来たりだけど……酒でいいかな？」

「勿論ですわ。それで、どのようなお酒を？」

「あゝ、それなんだけど。星」

「はっ。紫苑、これを」

あたしの合図で、星が紫苑に杯を手渡す。

「これは？」

「ま、飲んでみな」

「え、ええ」

紫苑は、杯の中身を一気に干した。

「きゃっ！ こ、これは？」

どうやら、炭酸にびっくりしたらしい。

「ははは、紫苑も同じか。私も、最初は同じ反応を見せてしまったからな」

「星も？ それで一体、これは？」

「主が作らせた、主の国の酒です」

「まあ、綾子さんの？ 何というお酒ですか？」

「シードル、って名前なんだ。リンゴを発酵させた酒だよ」

「しーどる、ですか……。あ、でも酸味が効いていて、なかなか美味しいですわ」

もう一杯貰った紫苑、なかなかお気に召したらしい。

「まだ試作品なんだけど。とりあえず、これを一ヶ月分。桔梗に渡したのと同じだけ、やるよ」

「まあ、何よりの贈り物ですわ。ありがとうございます。……でも、宜しいのですか？」

「ん？」

紫苑は、チラ、と星を見て、

「祭さんや星のような、お酒を好む方は他にもいますわ。それなのに、そんな貴重な品を私だけがいただいちゃって」

「気にすんな。言っただろ、試作品だって。今、蜜柑酒も造らせてるんだ。出来たらまた試してみてくれ」

「ふふっ、ではそう致しますわ」

紫苑、嬉しそうだな。

「ではでは、皆さんを送る宴を始めますよー」

四人は、呉将ではない。

だから、それぞれの場所に帰らなくてはならない。

勿論、これでお別れ、って訳じゃないけど。

「なら、盛大に送り出してあげましょう？」

と、蓮華の一言で、大宴会決定。

……あたしは、華佗から病み上がりには酒は禁物、と釘を刺されていたので、ずっとお茶だったけどな。

そして、二週間後。

「……九十九、百！」

うし、腕立て伏せ終了。

華佗も他の地へ去り、正式に牧の引き継ぎも終えたあたしは、ひたすらリハビリというか鍛え直し中。

鍛冶屋に頼んで、鉄アレイも作って貰った。

後は、柔道漫画みたいに、丈夫な縄を大木に縛り付けて……とか。とにかく、ほぼ寝たきりに近かったので、右腕だけじゃなく、全身の筋力が落ちていた。

あまりムキムキマッチョにするつもりはないけど、とにかく暫くはトレーニングを続けないと。

「綾子様」

「お、菖蒲か」

「これ、お使い下さい」

と、手ぬぐいと水筒を手渡してくれた。

「ありがとうな」

「いえ。それにしても、頑張っておられますね」

汗だくのあたしを見て、菖蒲は感心したように頷いている。

「仮にも武官のあたしが、戦えないなんてのは洒落にならないからな」

「……あの。よろしければ一手、お願い出来ませんか？」
一手？

将棋するのか、とかそんなボケはさておき。

「あたしとか？」

「はい。あれから、祭様にも鍛えていただきましたし。それに、綾子様のお手伝いにもなるかと」

言われてみると、菖蒲の言う事にも一理ある。

もともとは、あたしの弟子みたいなモンだし。

それに、どの程度成長したのかも見たい。

「よし。ならやるか」

「はいっ！」

久々に持つ、刃引きした模擬剣。

結構、ずっしりと来るもんだねえ。

「では、行きます」

「おう、いつでも来い」

一定の距離を置いて、向き合う。

……ふむ、構えに余裕が出てきたな。

以前はがむしゃらに前に出よう出よう、という意識が強すぎた。だから、あしらうのも簡単だったし、実際に戦場で武官として働く、という機会があまりなかった。

「祭さんに、かなりしごかれたな？」

「はい。雪蓮様や、思春様も、時折お相手していただきました」

なるほどね。

これだけ英才教育施されりや、それなりに腕は上がる筈。後は、本人の才能と努力次第、ってところか。

「はあっ！」

まず、正面からの打ち込み。

ガキン！

とりあえず、受けてみる。

「お、だいぶ重くなったな」

「まだまだあ！」

今度は、突きのラッシュか。

模擬剣とは言え、以前の菖蒲だったら剣の重さに振り回されていた。

それが、手足のように扱えるようになってる。

当然、突きは鋭く、速い。

「やるなっ！」

「まだ余裕ですな、綾子様！」

当たり前だ。

そんな簡単に、弟子に超えられてたまるか。

「なら、これでどうですかっ！」

今度は、斜めに斬りつけてきた。

咄嗟に、下がってかわす。

……と、振り下ろした剣を返さず、そのまま突いてきた。

カアン！

あたしも剣を下げ、防いだ。

「ほう、腕を上げたようだな」

「うん、確実に強くなっているね」

いつの間にか、星と紅蓮が見物に来ていた。

「綾子様。余所見ですかっ！」

ビュッ。

鋭い刃風を、紙一重でかわす。

「悪い悪い。じゃ、お返しだ」

あたしも、反撃に出た。

まず、何度か突きを繰り返してみる。

ガキン！

ガン！

「全部受けきるか、ふむ」

「いくら様子見とは言え……。凄いね」

「なら、これでどうだ？」

ビュオッ！

今度は、思い切り払ってみせる。

ガキッ！

これも、受け止められた。

「流石は綾子様。手が痺れます」

多少、苦しそうだけど、それでも以前の菖蒲なら、そのまま吹き飛んでいた筈。

「よし。それなら」

あたしは剣を引くと、間合いを取った。

そのまま、青眼に構える。

菖蒲は剣を戻し、八相に構えた。

「……………」

「……………」

あたしは、ジッとそのまま体勢を保つ。

「……ふむ」

「……へえ」

見物の二人も、それきり声を立てない。

やがて。

「でやっ！」

先に動いたのは、菖蒲。

「はあっ！」

気合一闪、斬りつけてきた。

「フッ！」

ガン！

あたしは剣を僅かに動かし、菖蒲の剣と交わる寸前に、その根元を払った。

「あっ？」

剣は、菖蒲の手を離れて、

「おっと」

「危ないなあ、もう」

星と紅蓮の間に、突き刺さった。

「参りました」

「いや、良くやったぜ、菖蒲？ 強くなった、ホント」

「ありがとうございます。でも、万全でもないのに全く歯が立ちませんでした。私も、まだまだですね」

「そうでもないさ。おい、紅蓮」

「うん？ 呼んだかい？」

「ちよっと、菖蒲と勝負してみろ。今なら、いい勝負になるぜ？」
あたしが言くと、紅蓮は一瞬、目を丸くした。

「菖蒲、僕で良ければ」

「うん、お願い。私も、実力を確かめたいから」

「わかった。ただし、手加減はなしだよ？」

そして、あたしの使っていた模擬剣を手に、菖蒲と相対する。

「主。もう宜しいので？」

「いや、まだだな」

「そうですね？ 万全であれば、一手所望を、と思ったのですが」

「……勘弁してくれ。今のあたしに、趙子龍の突きはキツいって」

「はっはっは。私を負かした数少ないお方のお言葉とは思えませぬが。では、またいずれ。約束ですぞ？」

「あ、ああ」

とは言うものの……以前とは、星も比較にならないほど強くなってるからな。

「あ、お姉さん。こちらでしたかー」

そこに、風がやって来た。

「どうした？」

「はいー。曹操さんに動きあり、と間諜から知らせが来まして」

「華琳が……そうか。報告を聞こう」

あたしもしりハビリ半ばだけど、時は待ってくれそうにもない。いいよ、か。

ゝ六十六ゝ（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

六十七

「綾子！」

「おわっ！」

建業に着くなり、雪蓮に抱き付かれた。

「お帰り！　でも、無事で良かったわ」

「雪蓮……」

「皆、心配していたのだ。だが、良くやってくれたよ、綾子」

「綾子殿の無茶は今に始まった事ではないが。それにしても、破天荒な御仁だ、相変わらず」

霰の言葉に、みんなが笑う。

「あたしだって、好きこのんで騒動ばかりに巻き込まれてる訳じゃないぜ？」

「それにしても、という事じゃろ。天運みたいなものじゃ、諦めいやれやれ。」

あたしの平穏な日々は、いつ戻るのやら。

「さて、疲れているでしょ？　今日はゆっくり休んでね。後で、お帰りのさいの意味を込めて酒宴があるから」

「……雪蓮。そう言って、アンタが飲みたいだけじゃないのか？」

「ぶーぶー、それひどーい。ねえ、冥琳？」

「綾子の言う事が、真実だと思うが？」

「えーん、冥琳と綾子がいじめる」

「そうつれない事を申すな。酒を飲むのに、ごちゃごちゃと理由はいらぬじゃろう？」

「然様。祭殿の仰せの通り、酒は楽しむものですぞ、主？」

ああ、そういや酒豪が集まっているなあ、よりによって。

「ま、よかろう。ただし……」

と、冥琳はニヤリと雪蓮を見た。

「な、何かな……あはは」

後ずさりする雪蓮の肩を、冥琳がガシッと掴んで、

「抜け出してサボっていた分の落款、それまでに片付けたらな」

「……え。本気？」

「これが冗談を言っている眼に見えるか？」

「あ、あははは……」

ま、頑張れ雪蓮。

翌朝。

うゝ、やっぱり酒が残ってるなあ。

あのメンツが集まった時点で、ちよつとじゃ済まないだろうなあ、
とは思っていたけどさ。

「綾子様、お酒臭いですよ？」

「うん。ちよつと今日は酷いかも」

「……お前らに言われなくてもわかってるよ。ちよつと、顔洗って
くる」

井戸に行くと、雪蓮に会った。

「あら、おはよう。いい天気ね」

「ああ……。しかし、やっぱり平気なんだな？」

「うん？」

「いや、酒の話。あたしはどーも抜けてないみたいだし、さっきも
菖蒲と紅蓮に酒臭い、って言われるし」

「あの程度じゃ酔っ払わないわよ。母様なんて、もっと凄かったん
だから」

あの程度って……尋常じゃない量だったよな？
つか、それよかもっと凄いつて……。

「あ、そうそう。それで思い出したんだけど、母様のお墓参りに行
きたいの。綾子、付き合って」

「あたしが？」

「うん。まだ、母様に紹介してなかったしね。朝食の後でいいから」

「わかった。なら、また後で」

孫堅さんか。

勿論、会った事はないけど……話を聞く限り、豪快な人だったんだろうな。

……とにかく、挨拶に行こう。

建業の城を出て、小さな森に向かう。

その小川のほとりに、孫堅さんの墓はあった。

ちょうど、その部分だけ森が開けて、空が見渡せる場所だった。

「これが？」

「そうよ。派手な事が嫌いだったからね、静かな場所にしてあげたのよ」

確かに、ここなら静かだろうけど。

でも、一時は江東に覇権を打ち立てた人の墓にしては、粗末過ぎる気がした。

何も、皇帝の墓みたいにどーん、としたものじゃないにしても、だ。

「……けど、豪快な人だったんだろ？」

「そうよ。でもね、普段はとても質素な人だったわ。美麗美食は以ての外、余分な蓄えがあればその分で兵を揃えたり、民の為に使ったりね」

「そっか。だから、みんなに好かれていたのか」

「……うん。呉で、母様の事を悪く言う人は、まず見かけなかったわ」

そう言って、雪蓮はそっと、墓石を撫でる。

「さ、お墓を綺麗にしましょう。綾子、手伝って」

「わかった」

まず、墓石の周りの草むしり。

と言っても、結構凄まじい事になっている。

雑草というのは、人間が植えた奴と違って、自前で水や養分を調達しなきゃいけない。

となれば、遅くなるのは当然って訳で。

根っこは深くなるわ、いろんなところに絡みつくわ。

……取り除くのも、その分大変になる。

「雪蓮。墓参りって、どのぐらい前に来たんだ？」

「そうねえ。綾子がこっちに来る少し前ぐらい……かな？」

「うへ。もう何年も来てないって事か」

「そうよ。だから母様、きつと怒ってるわ」

そう言いながらも、雪蓮はどこか、楽しげだ。

ボコッ。

音を立てて、雑草を引き抜く。

「綾子、随分手際がいいわね」

「ああ。あたしも向こうで、こういうのはやっていたからな」

弓道場の周りの草むしりだけだな。

慎二がその都度サボって、見つけてはボコっていたとか、蒔寺が乱入して大騒ぎになったとか……今にして思えば、懐かしいな。

「雪蓮。地面から出ている分を折ってもダメだぞ。こうやって、根元を探さない」と

「え？ そうなの？」

「雑草ってのは生命力が強いからな。それじゃ、またすぐにボウボウになるぞ」

「うーん、めんどくさいなあ」

草抜きがありや楽だけど……あ、そうだ。

「雪蓮、墓の周りに水を撒いてくれ。たっぷり」と

「え？ でも、まだ終わってないわよ？」

「いいんだ。騙されたと思って、な？」

「え、ええ」

戸惑いながらも、雪蓮は持ってきた桶に水を汲んだ。
バシャ。

バシヤ。

「よし、そんなモンでいい。……よつと」

うん、簡単に抜けた。

「こうすると、土が柔らかくなって抜きやすくなるんだ。やってみな」

「っしょ。あ、本当だ」

「しばらく雨が降ってなかったようだし、地面が固くなっていたからな。これで、だいぶ捗るだろう」

「綾子って、本当にいろんな事知ってるわよね」

「感心したように言われると、妙に照れ臭い。」

「でも、これ泥だらけになるわね」

「……まあ、それはしょうがないな。終わったら、周りから土を掘ってかけておこう」

草を抜き終わったら、今度は墓石を水拭き。

それ自体は小さいんだけど、数年野ざらしのままだったから、汚れがなかなか落ちない。

洗剤なんてモノはないしなあ。

「根気よく、やるしかないか」

「そうね。やるなら徹底的にやれ、って母様に怒られちゃうからね」

ゴシゴシ。

ゴシゴシ。

「……シユールだ」

「しゅーる？」

「現実にはあり得ない、ってぐらいの意味さ。だってそうだと、あの英雄孫策と二人で、こうして墓掃除をしてるんだぜ、あたし？」

「あはは、それもそうかもね。でも綾子、それを言うならあなただってそうよ？」

「あたしが？」

「そりゃそうよ。その孫策の片腕って呼ばれているのは、どこの誰

だと思ってるの？」

「え？ そりゃ冥琳の事だろ？」

「冥琳もそうね。けど、今はあなたもそう呼ばれてるって、知らなかったみたいね」

「……マジ？」

「本当の話よ。嘘だと思うなら、街に出て聞いてみたらいいんじゃない？」

「どうしてこうなったんだろうなあ、一体？」

「ただ、あたしを信じてくれた雪蓮の為に、必死でやって来ただけなんださ。」

「実際、頼りにしてるしね。孫呉がここまで来られたのも、あなたのおかげだし」

「まあ、そりゃ嬉しいけどさ」

「本当、あなたがいてくれて助かった。ううん、あなたがいなければ、今のわたしはなかったわ」

「……雪蓮。ありがとうな」

「あら？ どうしてお礼を言うの？ 言わなきゃいけないのはこっちよ？」

「いや、いろいろさ」

「いろいろって？」

「いろいろはいろいろだ。さ、綺麗になったんじゃないか？」

「あ、そうね。じゃ、お参りしましょう」

手を合わせ、眼を閉じる。

「……………」

「……………」

さっきまで微風すらなかったのに、いつの間にか髪が揺れるぐらいの風が、吹き抜け始めた。

あたしが眼を開けると、雪蓮はまだ、手を合わせている。暫くして、やっと顔を上げた。

「熱心に、何を？」

「久しぶりだったから、そのお詫びとか、近況報告よ」

そして雪蓮は、あたしを見てから、

「母様。紹介が遅くなったけど、わたしの大切な仲間、ううん、親友って言った方がいいかな……。綾子、自己紹介して」

「あ、ああ。初めまして、あたし、美綴綾子です。雪蓮には、お世話になっていきます」

「さっきも話していたけど、彼女、本当頼りになるのよ。母様が自分の力で手にした江東も、母様の仇も、綾子がいたから今はこうして、孫呉の元にあるの」

そっと、墓石を撫でる雪蓮。

「あの冥琳も、祭も、もちろん蓮華やシャオも、綾子の事が大好きで、みんな仲良くやってるわ。……。だから母様、安心して。もうすぐ、母様の夢、かなえられるから」

「雪蓮。孫堅さんの夢、って？」

「……前にも話したと思うけど、わたしの夢は、そのまま母様の夢だった事よ」

「呉の民が、笑って暮らせる国……か？」

「ええ。戦がなくなれば、それは自ずと叶う。そして、その戦は……残すところ、あと一度だけ」

そう、まさに覇道を突き進む、華琳との決戦。

……だいぶ、あたしの存在が歴史を書き換えている気もするけどな。

「ニャー」

「ん？」

と、野良猫が数匹、姿を見せた。

「また、綾子？」

「……否定はしない」

実際、あたしの足下ですりすりとして身体を擦りつけてきてるし。

「本当に、あなたっていろんなものに好かれるわね」

「そりゃまあ、嫌われるよりはいいけどな。……けど、自分でも説明がつかないのさ」

そう言いながら、腹を見せる猫ののど頸を、くすぐってやる。

「ゴロゴロ」

一匹がそうすると、他の猫たちも同じようなポーズを取る。

「わかったわかった」

まあ、和むからいいけど。

「ねえ、わたしにもやらせて」

「って言うんだけど、いいか？」

あたしが言うのと、

「にゃ」

甘えた声で返事が返ってきた。

「たぶんいいみたいだぞ」

「本当に会話出来そうね、綾子なら」

そう言いながら、雪蓮も猫ののどをくすぐろうとする。

「フギャッ！」

と、猫が慌てて飛び退いた。

「あら？ 嫌われちゃったかしら？」

「おかしいな。そんな雰囲気なかったのに」

……それ以外の猫も、皆身構え始めた。

「フーッ！」

一匹が、毛を逆立てたかと思うと、そのまま何処かへ走っていった。

「お、おい？ どうした？」

呆然とその後ろ姿を見送る。

「ギャーッ！ い、いてててて！」

猫が飛び込んだ方角から、人の悲鳴が聞こえた。

そして、残った猫も皆、そっちに駆けていく。

「何かあったらしい……。雪蓮、伏せろ！」

「え？」

あたしは、倚天の剣を抜き、飛んできたモノを叩き落とした。

「これは……矢？」

シュッ！

次々に飛んでくる矢を、片っ端から叩き落とす。

「クソッ、刺客か！」

「刺客って……まさか、綾子を？」

そうかも知れないが、矢の軌道は、あたしを狙ってはいなかった。その間に、雪蓮も南海霸王を抜いた。

「そう、わたしを……。綾子、捕まえるわよ！」

「了解だ！」

「い、いてて！ な、何だこの猫は！」

「俺も引つかかれた！」

猫たちが、刺客どもに襲いかかっているらしい。

声のした繁みに飛び込むと、見慣れない甲冑を身につけた兵を数名、目にした。

「その鎧……。魏のものね」

「魏の……。まさか、華琳が？」

「わからないわ。とにかく、話を聞かせて貰わないとね」
押し殺したような雪蓮の声。

さっきまでの穏やかな顔は、すっかり影を潜めている。

「さ、大人しくして貰おうかしら？」

「う、うるせえ！ おい、殺せ！」

その声に、周囲の繁みが動いた。

「囲まれたか？」

「……みたいね」

「飛んで火に入る夏の虫、って奴だな。死ね、孫策！」

「お断りよ。それにしても曹操も、随分と卑劣な事をするじゃない？」

「……………」

敵は、答えない。

そして、無言で迫ってきた。

「雪蓮」

「何、綾子？」

「……あたし達の命と引き替えにするには、ちょっとばかり釣り合わないと思わないか？」

「いいえ。ちょっとじゃないわ、あと百倍ぐらいじゃないとね」

「……やるか」

「……ええ」

「死ねえええっ！」

繰り出される槍。

「はっ！」

南海霸王が煌めき、穂先を切り飛ばしていく。

シュツ、シュツ！

飛んでくる矢は、全部倚天の剣で叩き落とす。

ズシャ！

「ぐわっ！」

バスツ！

「げえっ！」

孫家伝来の業物と、この時代きつての宝剣。

その組み合わせが、宙を舞う。

何とも豪華絢爛な事だが、それが確実に、敵の命を刈り取っている。

「く、くそっ！ この化け物どもめ！」

「卑怯者に言われたくない、ねっ！」

ザシュ！

「全くよ。この孫伯符、騙し討ちごときで倒れるほど、安くはないわよっ！」

ズバツ！

迫ってきた連中が、一度に数を減らした。

「くそっ！ 遠巻きにして、射殺せっ！」

一斉に、矢が向けられた。

「綾子」

「何だ、雪蓮？」

「わたしが斬り込むから、その隙にあなたは脱出して」

「な、何を言うんだ、雪蓮！」

「いい？ わたしが倒れても、呉には蓮華がいる。シャオだっている。でもね、あなたの代わりはいないわ」

「バカ言うな！ 雪蓮の代わりなんていやしななんだ！」

「でも、このままだと二人とも死ぬわよ？」

「……かもな。でもな、それならそれで、あたしの運命って奴だ。

まだ、孫呉には雪蓮が必要だ、そうそう死なせはしない！」

「綾子……」

そう、タダじゃ死んでやらないさ。

ドスッ！

「ぐえっ！」

バスッ！

「ぐはっ！」

……不意に、敵の包囲網が崩れ始めた。

「貴様ら！ 全員、生かしては返さんぞ！」

「我が主に向けた刃、死んで後悔するが良い！」

「あの声は……祭？」

「ああ……。星か」

どうやら、駆けつけてくれたようだ。

「く、く……。こうなれば、どちらかだけでも息の根を……」

と、倒した筈の一人が、矢を放ってきた。

まずい、雪蓮に向かってっている。

くそ、間に合わないか……。っ。

咄嗟に、雪蓮の前に立ちはだかる。

「綾子……？　ちよ、ちよつと、綾子、何やって」
今度こそ、年貢の納め時かな……悔しいけど……。

ゝ六十八ゝ（前書き）

散々空気だった彼が、やっと登場です。

六十八

流石に、あたしも諦めるしかない……そう思っていた。
けど。

「フギャーッ！」

けたたましい悲鳴が、目の前で上がる。

閉じていた眼を開くと……そこには、矢を脇腹に受けた猫達が、いた。

「な、何やってんだよ、お前ら！」

慌てて、その一匹を抱き起こすが、

「……ニャン」

弱々しく一鳴きして……ガクリ、と首を垂れた。

「何だよ……何だよ！」

「綾子……」

「こいつらが、何をした……？ 何の罪があるってんだ？」

視界が、ぼやける。

悲しくて、悔しくて……くそっ！

「星！ 祭さん！ そいつら全員、引っ捕らえろ！ 一人も逃がすな！」

あたしは、心の底から、叫んでいた。

「お、お猫様っ？」

「……明命か」

「綾子お姉さま、お怪我は……」

あたしは、頭を振る。

「そうですか……。お猫様が、身を挺して……」

「馬鹿野郎だ……。あたしを庇って死ぬなんて」

「ううっ……こんなのって、こんなのって……ありなんですか、お姉さま！」

明命が、しがみついていた。

あたしは、猫を手にしたまま、ただ、涙していた……。

どのぐらい、時が経ったのか。

気がつくと、皆が周りに揃っていた。

「ごめんなさい……。わたしの為に」

そっと、雪蓮が猫の死体を撫でる。

「……綾子。敵は皆、捕らえたか殺したぞ？」

「……主。このような卑劣な輩、正体を暴かねばなりませんまい」

「……お猫様の無念、晴らしましょう。綾子お姉さま」

あたしは、袖で眼を拭った。

「雪蓮。頼みがある」

「何？」

「こいつを、葬ってやりたいんだ。……孫堅さんの、隣に」

「母様の？」

「そうだろ。だってこいつがいなけりゃ、雪蓮かあたしが、あの世に行っていたんだ」

「……そうね。この子も、立派な呉の勇者だものね」

「孫堅さん。隣、借りますね」

そう断ってから、手で地面を掘っていく。

ザッ、ザッ。

石を除け、草を取り。

ただ無心に、穴を深く、広く。

誰も、あたしを手伝わない。

いや、手伝って貰う訳にはいかない。

「……………」

皆、黙ってあたしのする事を、見守ってくれているらしい。

ザッ、ザッ。

漸く、猫一匹が入るだけの大きさになった。

矢は、誰かが抜いてくれたらしい。

すっかり、冷たくなった猫の身体を持ち上げ、穴の中へ。

「綾子、ここからは私にも手伝わせて」

雪蓮が、一緒に土をかけてくれる。

「……………」

「……………」

「申し上げます！ 曹操軍が合肥に向かい、進撃中との事！」

「来たわね……。皆の者、出るわよ！」

「応っ！」

「綾子。……出陣よ」

「……ああ。行くよ」

「辛いだろうけど、泣いていても何も解決しないから」

「わかっている。華琳に真意を確かめなきゃいけないしな」

あたしは、立ち上がった。

「……行くぞ。星、風、菖蒲、紅蓮」

「はっ！」

「了解ですよー」

「はいっ！」

「うんっ！」

華琳との決戦にあたり、正式に四人はあたしの直属になった。

……そうさ、みんなの為にも、あたしはこんなところで落ち込んでちゃいけない。

華琳の奴が、何故あんならしくない手を使ったのか。

それを問い質さないと。

返答次第では……許さない。

「冥琳。来るんだよな、華琳は？」

「間諜の知らせでは、『曹』『夏侯』『荀』の牙門旗を確認したそうだ。間違いないだろう」

「……華琳。お前の言う霸道が、ウソっぱちなのかどうか、聞かせ

て貰うぞ」

合肥に集まった面々。

雪蓮以下、冥琳、祭さん、明命、霰、亞莎。

それに星、風、菖蒲、紅蓮。

山越の動きに目を光らせる必要があるから、シャオ達は居残り。

蓮華は荊州で、睨みをきかせている。

恋とねねは、遊軍として寿春で待機。

つまりは、これで今の孫呉の総力が結集している、という事になる。

それでも、華琳の事だ。

万全の体制を整えて来るだろう。

……だけど、負けられない。

いや、負ける訳がない。

「雪蓮」

「うん？」

「戦を始める前に、華琳の奴に真意を質したいんだ」

「ええ、そうね。言い分ぐらい、聞かせて貰おうかしら」

「冥琳」

「何だ？」

「……もし、華琳があたしを射つような真似をしたら、だけど」

「……わかった。そこまで奴が堕ちているのなら、一切の手加減はしない。徹底的に曹魏を叩き、皆殺しにしてやるさ」

「それも、アイツの態度如何さ……。よし、出てくる」

「綾子様、危険です。まさか、お一人で？」

「菖蒲。あたしは、華琳と話をしに行くだけさ」

「し、しかし。綾子様を闇討ちにしようなどと企む輩、せめて兵をお連れ下さい！」

「それじゃ、話し合いになんてならんさ。勿論、おかしな素振りを

見せたら、ただじゃ済まない。……けど、どうしても腑に落ちないんだ。アイツらしくないんだ、何もかもが」

「……菖蒲。気持ちはわかるが、姉さんのやりたいようにさせてあげよう」

「でも紅蓮！」

「菖蒲。同行したいのは私も同じなのだ。だが、主はそのような悪辣な企みなど、吹き飛ばしてしまう御方。その事は、お前が一番良く知っているのではないか？」

「……わかりました。星さんの仰る通りだと思いますから」
こうまで、あたしを想ってくれる仲間達。

……だからこそ、あたしは行かなきゃならない。

「……ありがとう、みんな」

あたしはそれだけを言うと、城門へと向かった。

「曹孟徳はいるか！」

魏軍の先鋒に向けて、あたしは声を張り上げた。

「孫呉の美綴綾子、曹操に質したい事がある！ ビビってないなら、出てこい！」

もし、ここで矢の一本でも飛んで来たなら、話し合う機会は永久になくなる。

けど、華琳の奴が変わらないのだとしたら……必ず出てくる。

……と、敵陣の中央が二つに割れ始めた。

そして、威風堂々と、三騎が間を進んで来る。

真ん中は言わずもがな、金髪クルクルヘアの霸王。

左は夏侯淵、右は夏侯惇。

華琳は、二人に何かを言っている。

夏侯惇がいきり立つのを、夏侯淵がしきりに宥めているようだな。

……そして、華琳が一騎で、あたしの方へとやって来た。

「久しぶりね、綾子。陛下の御前以来かしら？」

「……ああ」

「それで、私に何の話かしら？ 私に質したい事がある、とか言っていたようにけど？」

「……………」

あたしは黙って、一本の矢を取り出す。

鏃が血で染まり、どす黒く変色していた。

「それは？」

「……雪蓮を狙った矢さ」

「孫策を？」

「ああ。……雪蓮！」

あたしの合図と共に、雪蓮がやって来た。

その後ろには……刺客どもが縛られたまま、連れて来られている。勿論、そいつらには、魏の甲冑をつけさせてある。

「さて、曹操。その犯人はこいつらなんだけど。弁明があるなら、聞いてあげるわ」

雪蓮は冷たく言い放つと、刺客どもを華琳の前に押しやった。

「……この者達が……貴女を？」

「ええ。わたしを庇おうとして、綾子が必死に戦ってくれたわ。そして、その矢が、彼女の命を奪うところだった」

「……………」

呆然と、雪蓮の話を聞く華琳。

「でもね、一人の勇者が身代わりに立ちはだかったの。勿論、自らの命と引き換えにね」

「……何の罪もない猫が、だぜ？ 本来、気儘な生き方をする猫が、あたしを庇って死んだんだ。……あたしの目の前でな」

「……桂花！」

華琳は、自陣を振り仰いで、怒鳴った。

「どういう事だ、これは！」

「は、はっ！ 直ちに調査を！」

慌てた声で、返事が飛んできた。

「必要ないわ。我が魏の兵なのか、偽りかは直接聞けばいいもの」
華琳は馬を下り、縛られたままの一人に近づいた。

「貴様、誰の麾下か？」

「……………」

チャキッ。

大きな鎌をつきつける華琳。

「答えたくないのなら、それで良い。だが、この曹魏の名を汚した罪、その身で購って貰おうか。この場で」

有無を言わせない、毅然とした口調。

鎌をつきつけられた奴は、震え上がっている。

「そ、曹操様。わ、私は」

「私は？」

「き、許貢様に命じられた事を遂行したまでです」

「やはりか……。抜け駆けの功を立てるつもりだった、そうだな？」

「は、はいっ！」

「……馬鹿ね。この曹孟徳が歩む覇道が、そのような下劣な事で為し遂げられると思ってか！」

「ひっ！」

華琳の剣幕に、刺客ども全員が竦み上がる。

「秋蘭！」

「はっ！」

「直ちに許貢とその配下を全員捕らえよ！ 一人たりとも逃すな！」

「……御意！」

「春蘭！ この者どもを引っ立てなさい！」

「華琳様！ しかし」

「聞こえなかったの？ 私は、すぐに引っ立てなさい、そう言ったのよ？」

「は、はいっ！」

連行される資格ども。

この手で、とも思ってたけど……それは一時の感情任せでしかない。

だから、睨み付けるだけで、あたしは耐えた。

「……私の、監督不行届ね。言い訳はしないわ」
俯きながら、華琳が呟く。

「孫策」

「何かしら」

「……まずは、この不始末の落とし前をつけさせて欲しい。そうでなければ、私は自分を許せない」

「当然ね。そのまま攻めてくるというのなら、孫呉の兵は、魏を最後の一人まで殺すわ。決して、降伏も認めない」

「……ええ。我が覇道、こんな形で押し通すつもりはないもの」
「それで？」

「虫のいい話というのは重々承知の上。それでも、貴女に頼むしかない」

そして、華琳は膝を突き、頭を下げた。

「直ちに、軍を撤退させるわ。だから、決戦はまたの日まで、預かって欲しいの」

「へえ？ 勝手に攻めてきて、部下の不始末とは言えこんな事にまでなってる？」

雪蓮の声は、どこまでも冷え切っている。

「わかってるわ！ だから、勝手な事を承知で頼んでいるのよ！」

「それなら、戦場で決着をつけるまでよ。あなたのしている事はね、人の家に強盗に入っておいて、盗ったものは返すから見逃してくれ、そう言っているようなものよ？」

「クッ……。それなら、私にどうしろ、って言うの？」

「そうね。この場で、わたしに斬られるのなら……話は別よ？」
やばい、雪蓮は本気だ。

「ま、待て！」

「綾子。何故止めるの？ この娘の覇道とやらが、私やあなたを卑劣な方法で死に至らしめるところだったのよ？」

「違う！ 私の覇道は、そんな非道なものとは相容れない！」

「その言葉、今の孫呉で誰が信じると思うの？　言っておくけど、合肥の城にいる皆、あなたをどれだけ憎悪しているか……わかるわよね？」

「……………」

こんな華琳を見るのは、初めてだ。

あれだけプライドが高く、自信に満ち溢れていて、いつも王道を歩んでいた奴が。

許貢の事は、芝居じゃない。

そんな華琳が、あんな姑息な真似をして、それを芝居で誤魔化するなんて、あり得ない。

……けど、その華琳が、万策尽きた、という顔をしているなんて。「待ってくれ！」

と、その時。

魏の陣から、一騎の将が、飛び出してきた。

……あれは、まさか。

「一刀！」

「……やはり、北郷か」

北郷は、あたし達のところまでやってくると、馬から飛び降りた。そして、いきなり土下座を始めた。

「頼む！　今回の事、華琳は本当に何も知らなかったんだ！」

「……あなた、確か曹操のところの、天の御遣いね？」

「そうだ」

「それで？　今は、君主同士の話し合いをしているのだけど？」

「わかっている！　けど、俺だって魏の一員、責任の一端はあるんだ！」

必死に、頭を下げる北郷。

軟派な奴、というイメージがあったけど……どうやら、華琳の下で多少は鍛えられたらしいな。

「なら、あなたが落とし前をつけてくれる、とでも言うの？」

「……落とし前になるかどうかはわからないけど。曹魏が確実に撤

退して、きちんと後始末をつける証として。……それまで、俺が人質になる」

「……か、一刀？ 貴方、何を言っているの？」

華琳が北郷に詰め寄る。

「華琳。俺だって、これでも天の御遣いだぜ？ その本人が人質として残る、もし何か約束を破ったならもちろん、命はないけどさ。俺、華琳を信じているから」

「バカな事を言わないで！ だいたい、そんな事で孫策が引き下がるんでも思ってるの？」

「わかってくれ、華琳。俺は、お前が誤解されたまま、後世に悪名だけを残すなんて、耐えられないんだよ」

……なんか、毒気を抜かれた感じだなあ。

雪蓮を見ると……うん、たぶんあたしと同じ。

「綾子。どうする？」

「……北郷。本気なんだろうな、さっきの言葉」

「当然だ！」

「一刀！」

華琳の剣幕にも、北郷は動じない。

あたしは、もう一度雪蓮を見る。

そして、頷いて見せた。

雪蓮は、軽く頭を振って、

「……いいわ。天の御遣い君に免じて、この場はそれで引きましょう」

「待ちなさい！ 私は……」

「いいんだ、華琳。俺が言い出した事、これで前言を翻したら、それこそ名折れじゃないか」

「一刀……」

北郷は、華琳を抱き締めた。

……ああ、この二人、そういう関係なんだろうな……きっと。

「行きなさい、曹操。わたしの気が変わらないうちにね」

「……わかったわ。けど孫策、もし一刀の身に何かあったら」

「ええ、その時は好きにすればいいわ。ただし、あなたが約束を果たせば、の話よ？」

華琳は何かを堪えるように、グッと拳を握りしめた。

そして、自陣へと戻っていく。

「全軍、直ちに撤退せよ！ この地の砂粒一つたりとも、持ち帰る事は罷り成らん！」

「おい、北郷。お前、カッコつけ過ぎ」

「……何とでも言え。俺は、こんな事しか出来ないんだ」

「さ、御遣い君？ 悪いけど、一緒に来て貰うわよ？」

「ああ」

思わぬ形で、一触即発は避けられた。

……猫への悲しみは消えないけど、せめて、冥福を祈ろう。

……そして、その分まで生き抜いてやるさ。

絶対にな。

ゝ六十八ゝ（後書き）

身代わりに猫を死なせてしまいました。綾子を不死身にでもしない限り、誰かがあの矢を受けるしかありません。

他にもっと上手い展開があるのかも知れませんが……作者の力不足でこれが限界です、申し訳ありません。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

六十九

「行つたわね」

「ああ。流石の曹操も、此度ばかりは大人しく引き下がるしかないだろう」

合肥の城壁で、華琳が軍を返すのを、みんなで見守った。

……ただ、雪蓮と冥琳の表情は、厳しいままだ。

「でも、油断はしないわよ？」

「当然だ。黄蓋殿、ここを頼みます」

「応。任せておけ」

「亞莎、明命、祭を補佐して。特に明命は、敵の間諜に注意を」

「はいっ！」

「御意です！」

「綾子は、わたしと一緒に建業に帰りましょう。彼を、吊ってあげなくちゃね」

「……わかった。コイツは？」

あたしは、後ろに立つ北郷を見た。

拳を握りしめて、ジツと華琳の軍を見送っている。

「ここに置いておく訳にもいかないでしょ？ 連れて行くわ」

「そうだな。だが、北郷とやら」

冥琳が、眼鏡の奥を光らせる。

「何だ？」

「……天の御遣いとの事だが、我が呉ではそのような威光など通じない。だから、特別扱いも出来ない」

「わかってるさ。俺は、人質だからな」

「それから、女の子に手を出すのも禁止よ。『魏の種馬』さん？」

「え？ そ、孫策。どうして、それを？」

さっきまでの厳しい顔つきはどこへやら、大慌ての北郷。

「北郷。悪いけどこの話、すっごく有名だぜ？ なあ、みんな」

「主の仰せの通り。魏の将と見れば、見境もなく手を出しているとか？」

「曹操さんを始め、皆さんお兄さんの毒牙にかかってしまっているとか、聞いているのですよ」

星と風の反応に、全員が頷いた。

「ボウズ。命が惜しければ、呉ではそのような真似は慎む事じゃな」

「亞莎、明命と離すのは賢明ですな、雪蓮殿。純な二人、このような男の手にかかれば危うい」

祭さんと霰が追い打ち……いやいや、みんな容赦ないねえ。

あたしは、北郷の肩に手を置いて、

「わかっただろ？ 無事に魏に帰りたければ、呉では大人しくしているんだな？」

「う……。わ、わかった。けど、美綴」

情けない顔で、あたしを見て、

「……俺、そんなに節操なしに見えるか？」

「つーか、どう見たってナンパ野郎だろ、お前？」

「ぐはっ。桂花に囲まれてるようだぜ……人質なんて、言い出さなきゃ良かった」

ガックリと肩を落とした。

「そんな訳だ。菖蒲も紅蓮も、気をつけろよ？」

「大丈夫です。私は綾子様一筋ですから」

「ボクも、悪いけど好みじゃないから。姉さんが男だったら別だけどね」

「美綴……。お前、そっちの趣味か？」

「ちーがーうー！ だからお前ら、誤解されるような言い方止せて言ってるんだろ！」

「……私は、本気ですけどね」

「ボクも、別に構わないんだけど？」

あーもー、なんでこいつらは。

「お姉さんがお望みなら、風はいつでも歓迎ですよー」

「やれやれ、主も罪な御方ですな。勿論、私も構いませぬが」

「だあああ、お前らもかつ！」

ボカツ！

とりあえず、北郷を殴っておく。

「いてっ！ 何すんだよ！」

「やかましい！ お前が余計な事言うからだ！」

「八つ当たりは良くないわよ、綾子？」

「そうだぞ。良いではないか、皆にそれだけ愛されている、という事だからな」

……ハア、もう嫌……。

建業に戻り、あの場所へと向かった。

雪蓮と冥琳、それに南陽から戻った恋も一緒。

そして、

「俺にも、せめて手を合わせさせてくれ。頼む」

と、北郷もついて来た。

人質なのだから、あまり歩き回るのもどうかと思うんだが、あまりに熱心に頼まれて雪蓮が根負けした格好になった。

程なく、目的地に到着。

「変わってないわね……。当たり前だけど」

「だな」

あたしと雪蓮で綺麗にした、孫堅さんの墓。

その隣に、目印に立てた枝が並んでいる。

一度手を合わせてから、持ってきた墓石を、代わりに置いた。

勿論、きちんとしたものではなく、孫堅さんのと似たような格好の、天然石だ。

金をかけて、猫が浮かばれるのなら、あたしはケチるつもりは一切ない。

……けど、何となく、それは望んでいないような、そんな気がし

たから。

そして、全員で手を合わせる。

「……ありがとう。本当に」

「雪蓮と綾子を救ってくれた事、私からも感謝するぞ」

「……お前、偉い」

「……………」

ふと、気がつく。

あたりは、何十匹もの猫が集まっていた。

「お前らも、葬式に来てくれたのか」

「ニャーオ」

猫達は、墓の前まで行くと、めいめいに何かを落としていく。

トカゲだったり、ネズミだったり。

「供え物か……。なら、あたしも」

建業の市場で買った、最高級のマタタビの実を、そこに並べた。

「俺も、キャットフードか、シーチキンでもあればな……」

ボソッと呟いた北郷の言葉に、あたし以外が首を傾げる。

「北郷。みんなが引いてるぞ？」

「え？」

「横文字とか、この世界にないモノの名前、あんまり口にしない方がいいぞ？」

「……ああ。けど、美綴。君はやっぱり……」

「その話は後だ。まだ、葬式の最中だぜ？」

そしてあたしはもう一度、手を合わせた。

その夜。

通夜って訳じゃないけど、何となく酒でも飲みたい気分だった。謁見の間に顔を出すと、ちょうど雪蓮と冥琳が話し込んでいた。

「綾子？ どうしたの？」

「まだ、執務中か？」

「ううん、もう済んだところよ。ね、冥琳」

「ああ」

「なら、丁度良かった」

あたしは、厨房で貰ってきた徳利を掲げて、

「雪蓮。どうだ？」

「あら、綾子からのお誘いなんて珍しいわね。……いいわよ、わたしもそんな気分だし」

「なら、外に行くか。他に二人、誘ってもいいか？」

「サシで、じゃないの？ わたしは別に構わないわよ」

「わかった。という訳で、付き合ってくれ。冥琳」

「私もか？……ふむ、いいだろう。そして、もう一人は？」

「北郷だ。アイツにも、話しておきたい事があるんだ」

あたしの言葉に、二人は顔を見合わせる。

「……ま、いいわ。でも、わたし達が酔った隙に逃げたりしないでしょうね？」

「雪蓮。お前がそこまで前後不覚になった事があるか？」

冥琳の言う通りだ。

そんなへべれけになった雪蓮なんて、想像もつかん。

「それよりも、酔った勢いで何かやらかす事はないのか？」

「それもないだろ。つか、そうになったらあたしが手加減なしでボコる」

「じゃあ、問題なしね。ふふっ、冥琳と飲むのも久しぶりね」

そして、庭に移動して、いざ開始。

……ただ、人数は増えていたけど。

「酒を嗜むのに、私を外すとはあまりに無慈悲ですぞ、主？」

まあ、酒の事で星に黙って、という事自体、無理だったかも。

おかげで、始める前に風、菖蒲、紅蓮に見つかった。

「結局、ほとんど全員大集合になっちゃったわね」

「……俺、いいんだよね？ ここに加わっても」

散々脅したのが効いたのか、北郷は隅で小さくなっている。

「今更出て行け、とも言わないって。じゃ、全員に行き渡ったか？」
みんなが頷いたのを見て、雪蓮に目配せした。

「じゃ、乾杯。我が呉の勇者に」

「乾杯！」

一斉に、杯を干す。

喉を焼く、きつめの酒。

……あたしも、すっかり慣れちゃったな。

「さて、綾子。話しておきたい事があるそうだが？」

「そうだな、冥琳。……丁度いい、みんなにも聞いて貰おうか」
もう一杯干してから、北郷に話しかけた。

「北郷。あたしに聞きたかった事、言ってみてくれ」

「……いいのか？」

北郷は、他のみんなを見回した。

「いいさ。ここにいるのは、あたしの大切な仲間だ」

「わかった。俺は、天の御遣い、なんて言われているけど、本当は違う。この時代から約二千年後の世界から来たんだ」

「二千年後だと？」

「そうだ、周瑜。だから、孫策や周瑜、趙雲、勿論曹操や孫権、劉備なんかも知っているさ。……ただし、歴史上の人物としてだけだな」

「へえ。じゃあ聞くけど、わたしはどう伝わっているの？」

興味深げに、雪蓮が訊いた。

「孫策は、『江東の小霸王』って言われている。……俺の知っている歴史だと、孫堅が戦死した後、袁術の食客になっていた。その後で袁術から兵を借り、それを活かして江東を平定。版図を広げただ、許貢の食客に毒矢で狙われて重傷を負った。その傷が元で死んだ、って事になってるな」

「……わたしの辿ってきた道とそっくりね。襲われたところまで」
「そうなんだ。俺もびっくりした」

「それで？ わたしが死んだ後、呉はどうなったの？」

「孫権が後を継いだ。その後で、曹操と対決する事になるんだ。赤壁でな」

「赤壁か。確かに、曹魏の軍とともに遣り合うなら、格好の場所だな」

冥琳が頷く。

「勿論、孫策以外、ここにいる殆どが、その戦いに参加した筈だ。ただし、趙雲は劉備に仕えていた事になっているけどな」

「ほう。拙者は、あの劉備殿の許でか」

「そして、その後で劉備は蜀を作るんだ。だから、この時代を伝えた書物は、魏・呉・蜀で『三國志』って名前で呼ばれてるんだ」

意外と、北郷が知識を持っている事に驚いた。

あたしなんぞ、ゲームが元の知識だからなあ。

「そして、俺のこの知識は。……ここにいる美綴も持っている。そうだな？」

全員の視線が、あたしに集まる。

「……ああ」

「じゃあ、綾子様も天の御遣い、という訳ですか？」

北郷がいくら否定しても、未来からやって来た、って事は伝わらないようだ。

確かに、天からやって来ました、の方がわかりやすいしな。

「菖蒲。それは違う」

「でも、姉さん。その御遣いさんが知っている事を、姉さんも知っているんだよね？」

「そうさ。でも、北郷とあたしのいた世界、似ているけど違う筈だ」

「どういう事だ、美綴？」

訝しげな北郷。

「試しに聞けどさ。北郷は、冬木市、って街を知ってるか？」

「冬木市？ いや、知らないな。平成の大合併で出来た新しい市か？」

「昔からある。それから、お前がこっちに来る時に、総理大臣だったのは誰だ？」

「ええと、確か……」

北郷は少し考えて、一人の名前を口にした。

「……やっぱりな。あたしの知らない名前だ」

「そんな筈ないだろ！ 日本の総理大臣は、一人しかいないんだ」

「そうだな。けどな、元々いた世界が、似て非なるモノだったとしたら、どうする？」

「け、けど……。名前だってそうだし、美綴はどう見ても日本人じゃないか。それも現代の」

「ああ。けど、考えても見ろよ。あたしや北郷が知っている、この時代ですら、知識とは違うじゃないか」

「そりゃそうだけど……」

「主な将はみんな女。それに、曹操に仕えている筈の風も、ここにいる。恋なんて、あたし達の知る歴史だったら、もう殺されているんだぜ？」

「ちなみにお姉さん。風は、どう伝わっているのですかー？」

「名前は程立から程？に変えて、曹操に仕えているんだ。そして、巨漢だったって事になってる」

「むー。風とは全然違うようですね」

「だろ？ いいか、北郷。これは、貂蟬からも聞いた話だけど……どうやら、この世界はパラレルワールドらしい」

「パラレルワールド？ ああ、小説なんかで出てくる『平行世界』って奴か？」

「そうだ。そう考えれば、全てが納得いくんだよ。あたしと、北郷のいた『日本』が異なっている、って話もな」

「……じゃあ、俺はただ一人、ここに飛ばされた、って訳か」

「そうなるな。あたしもそうだ」
何でこうなったか。

……考えてもわかる筈がない。

ただ、貂蟬の奴は、あたしに何かの役割を求めて、ここに連れてきたらしい。

となれば、北郷にも、何か役割があるんだろう。

「……けど、わからない事がある」

北郷は、あたしを見ながら言った。

「何だ？」

「俺、元の世界で剣道をやってたんだ。無敵、とまではいかないけど、そこそこの腕前だった筈なんだ。けど、この世界に来て、それがほとんど役に立たない事を思い知らされたんだ。春蘭に、何度殺された事か」

春蘭……夏侯惇か。

アイツ、確かに手加減なんて言葉は知らなさそうだしな。

「けど、美綴は違う。元の世界でどうだったのかは知らないけどさ、それでもあの平和な日本にいて、どうしてこれだけ活躍できるんだ？」

「そうだな。もともと、あたしはいろんな武道をやっていた。得意は薙刀だけど、部活は弓道部だったしな。それ以外にも空手道場には通っていたし」

「でも、それはルールの中で行うものだろう？ 実戦とは違う筈だ」
なるほど、北郷の言いたい事はわかった。

「それは、あたしも最初に思ったよ。ここにはいないけど、明命……周泰と、いきなり一騎打ちになったんだ。でも、あたしは勝っちまったんだよ」

「……懐かしいわね。わたしが、綾子と初めて会ったときの事ね」

「そうだな。あの時は本当に驚いたものだったが」

「まさか、その後で孫策と周瑜が出てくる、なんてあたしだって思っ
てなかったさ」

「そうね。でも、あの時は本当に、綾子が天の御遣いじゃないのか、
って思ったわよ」

「……ま、北郷のおかげで、そんな噂も広まらずに済んだけどな。」

それでだ、北郷。お前の疑問は、あたしにもまだはつきりとした理由はわからない。けど、思い当たる事はある」

あたしは、カバンに入っていたタブレット型コンピュータの事を話した。

正直、あれ以外に原因が思い当たらないからな。

「……じゃあ、何か？ その壊れたコンピュータに入っていた情報が、美綴に取り込まれた、と？」

「そうなるんだ。あたしも、バカバカしいとは思っただけだよ」

「……………」

黙り込む北郷。

でも、あたしにはこれ以上、説明のしようがない。

「主。一つ、宜しいか？」

「星、何だ？」

「はい。主は、何かしらの役目がある、と仰せになりましたな。

では、その役目が終わった時、如何なされます？」

考えてもみなかった事を、指摘された。

確かに、役目が済んだ時点でどうなるか、それは貂蟬にも聞かされていない。

「元の世にお戻りなされるか？」

「……わからん」

「そ、そんなのダメです！」

菖蒲が、抱き付いてきた。

……知らない間に、だいぶ飲んだらしい。

「綾子様がお帰りになるのなら、私もお供します！」

「ボクも、だね。姉さんのいない世界なんて、つまらないもの」

「風は言いましたよね、お姉さんにお仕えすると。それは、期限を切った覚えはないのですよ」

「私もですぞ、主？ もし、勝手にお戻りになったなら、例えば天界だろうと何だろうと、乗り込みますからな」

紅蓮、風、星……。

「当然、わたしも認めないからね？」

「そうだな。私も、みすみす命の恩人を手放す気はないぞ？」

「ははは、どうやら、帰るに帰れなさそうだな。美綴？」

「……ああ。だが北郷、お前もそうなんだろう？ あれだけ、魏の女の子を手玉に取っていてはな」

「な、そ、それは関係ないだろ！」

巻き起こる笑い。

その後は、そのままドンチャン騒ぎになった……ような気がする。

「……何だ、これ？」

気がつくと、辺り一面、酒の匂いが充満していた。

そして、見事に雑魚寝している面々が。

あたしの袖は、菖蒲と紅蓮がしっかりと握っていたし、足には風がしがみついているし。

「綾子様……離れませんよお……」

「……姉さんは、ずーっとボクの……姉さん……さ」

「風を置いていくなど……絶対に認めない……のです」

大丈夫さ。

何故かはわからないけど、お前達と離れる事はない……そんな気がするから。

ゝ六十九ゝ（後書き）

一刀の扱いが散々ですが、原作に拘るつもりはありませんので。

七十

「お初にお目にかかります。曹孟徳の使いで参りました、郭嘉、字を奉孝と申します」

「同じく、楽進、字を文謙です。お目通りいただき、ありがとうございます」

一ヶ月後。

華琳の遣いとして、この二人が建業へとやって来た。

楽進は初対面だけど、確かに魏の武将には違いない。

背はあたしよりも低いけど、引き締まった身体に、あちこちに残る傷跡。

……それに、全身から漂う闘気。

抑えてはいるんだろうけど、ただ者じゃない、つてのは隠せないね。

「わたしが孫策よ。そちらが周瑜、こっちは……」

「存じています。ご無沙汰していました、美綴殿」

「ああ。郭嘉も元気そうだな」

そのやりとり、雪蓮は首を傾げたが、

「……そう言えば、そうだったわね。昔、風や星と一緒に旅をしていたのよね」

「はい。美綴殿とも、その折に知己を得まして」

「あ、あの……。私は初めてですので、ご挨拶を」

楽進は、そう言ってあたしを見た。

「改めて、楽進、字を文謙と申します。美綴様の名は、何度も耳にしています。武人として、一度お会いしたいと願っております」

「そ、そうなんだ。あたしは美綴綾子。よろしくな」

「あ、ありがとうございます！」

……あたし、何か礼を言われる事、したっけ？

しかし、あたしの名前……どこまで伝わっちゃってるんだろう

な。

見ず知らずの樂進にまで、こう言われちゃうとは。

「ま、話は後ね。まずは用件を聞きましょう」

「……はい。まずは、先立っての許貢の一件、改めてお詫び申し上げます、との事です」

郭嘉が、神妙な顔で言い始めた。

「これを」

樂進が、大きな箱を前に置き、蓋を取った。

中から出てきたのは出前のラーメン、てな訳はなく。

……うへー、生首かよ。

「此度の首謀者、許貢です。お改め下さい」

雪蓮は、箱の中を覗き込み、

「……間違いないわね」

「その他、許貢の配下全て、曹孟徳立ち会いの下、打ち首に処しました」

全員かよ。

華琳も、こうなると苛烈だからな。

無関係の奴が混じっていた可能性はあるんだろうけど、連帯責任で、って事か。

……それを異常、と思わなくなっているあたり、あたしもだいぶこの時代に染まっちゃってるんだろう。

「それから、これをお納め下さい」

郭嘉が取り出した竹簡を、冥琳が受けとる。

「雪蓮。中を改めるぞ？」

「ええ」

カラッ。

「……ほう」

冥琳が、竹簡から顔を上げた。

「郭嘉殿。貴公、この書簡の内容は、聞かされて来たのか？」

「……はい」

「楽進殿は？」

「私も、存じています」

「そうか。雪蓮、綾子。見るがいい」

あたしは、雪蓮が受け取った書簡を、隣から覗き込んだ。

「ふーん。猫の香典にしては、随分多いようね？」

「は。金で片付く問題ではないが、せめてもの誠意を受けて欲しい、との事です」

そこに書かれていた金額を見て、あたしはひっくり返りそうになった。

荊州で予算を扱っていたからわかるんだが、兵を集めたとしたら、五千人程度は確実に集まるぐらいの額。

「華琳の奴、思い切ったもんだ」

「綾子。それよりも次、見て」

「次？ ああ、まだあった……って、いいっ？」

猫の喪が明けるまで、魏軍は一切、呉に対して軍事行動は行わない。

その証として、郭嘉、楽進両名をそれまで預ける……って。

「人質、か」

「有り体に言えばそうね」

「けど、もう北郷がいるじゃないか。どうすんだ？」

あたしの言葉に、郭嘉と楽進は頷き合う。

「それについてですが、一刀殿は、お返し願いたい、と」

「隊長は咄嗟にああ言いましたが、曹魏にとって、隊長はご自分が思う以上に、影響をお持ちなのです」

「それで、あなた達が身代わりに、という事なの？」

「そうです。我が主の、せめてもの誠意、とお考え下さい」

「……どう思う、冥琳？」

「そうだな。郭奉孝と言えば、荀文若と並ぶ、魏の知恵袋。そして楽文謙は、戦場で常に先頭に立つ、魏の勇士。期限を切ったとは言え、その二人を送ってくるとは、曹操も思いきった真似をする」

「そうね。綾子は？」

「え？ あたしか？」

「そうよ。あなただって、当事者ですもの。曹操の提案、どう思うのか、聞かせて」

雪蓮の言葉に、全員の視線があたしに集まる。

「うーん……。二人は、それでいいのか？」

「美綴殿。これは主命ですから」

「そうです。真名を預けた我が主が命じた事。それに、隊長が魏にとっても、私自身にとっても掛け替えのない御方です」

「なあ、楽進。その隊長、って？」

「あ、そ、そうでした」

楽進は少し恥ずかしげに、

「一刀様は、魏の警備隊で隊長を務めておられるのです。私は、その下で任についております」

「警備隊？」

「はい。市井の治安維持や、街の人々の困り事解決に当たるなどです。隊長の発案で、様々な事項が解決をしています」

ふーん、ただ女の子を引っかけまくってる訳じゃない、って事か。もっとも、あの華琳が、ただのナンパ野郎にあそこまで入れ込む訳がないか。

「尊敬しているのか、北郷を？」

「はい！ 隊長は素晴らしい御方ですから！……それに、お優しいです」

おやおや、真っ赤になったぞ。

……やっぱ、ナンパ野郎な事自体は事実か。

「雪蓮、冥琳。北郷は返した方がいいと思うな。もともと、そういう約束だったんだし」

「そうね」

雪蓮は頷いたが、冥琳はジッと、二人を見ている。

「……ふむ。だが、二人が曹操に策を授けられて来たのではない、

と証明する事は出来るのか？」

「なるほど。我々が内部攪乱、あるいは何らかの破壊工作の命を帯びてきた、と？」

「そんな！ 華琳様はどのような御方ではありません！」

「だがな、郭嘉、楽進。もとはと言えば、曹操が我が呉を攻めた事が、此度の事件へとつながった事は事実だ。そして、両軍は未だ、敵対関係にあるのだが？」

「……確かに、その通りでしょう。こればかりは、私達を信じていただく他、ありませんから」

「敵の武将がやって来て、信じてくれ、はいそうですか。なんて、無理に決まってるわよ。劉備じゃあるまいし」

雪蓮も同意か。

……けど、あたしにはどうしても、あの華琳がそんな姑息な真似をするとは思えない。

それに、郭嘉も楽進も、正直そういう任務には不向きだと思う。

お、そうだ。

「ちょっと待っててくれ。すぐに戻る」

そう言って、あたしは謁見の間を出た。

「え？ どこに行くのよ、綾子？」

「いいから。魏の二人もな」

「は、はあ……」

「何だよ、美綴」

「いいから来いって。……まったく、部屋にいないから逃げたのかと思っただぞ」

街で北郷を見つけたあたしは、城内へと引きずっていった。

「逃げる訳ないだろ。そんな事をしたら、華琳の誇りを傷つけるかな」

「……だからと言って、人質が街で買い食いするか、普通？」

「いいだろ、別に」

そう、北郷は暢気に、点心を頬張っている最中だった。今も手に、ちまきを手にしたままだったりするんだが。

「緊張感がなさ過ぎなんだよ、お前は」

「仕方ないだろ。腹が減ったからと言って、勝手に厨房漁る訳には
いかないんだし」

「ほら、着いたぞ」

「着いたって、ここ玉座……うわっ！」

そのまま、奴を部屋に押し込んだ。

「一刀殿？」

「た、隊長？」

「稟に風？ ど、どうしてここにいるんだ？」

「街で暢気に買い食いしていたから、引っ張ってきたんだ。まずか
ったか、冥琳？」

「い、いや……」

「買い食いねえ。お昼、足りなかったの？」

呆れたように雪蓮が言う。

「そういう訳じゃないけど。ってそれより、二人はどうしたんだ？」
北郷の反応を見る限り、示し合わせた、なんて事はないな。

コイツに、そんな芝居が出来るとは思えない。

「孫策殿。お願いがあります」

「何かしら、郭嘉？」

「少し、一刀殿と話したいのですが。どこか、場所をお借りできな
いでしょうか？」

「あら、内緒話？ そんな事をしたら、ますます疑っちゃうわよ？」

「そうではありません。御前で議論するより、結論を得てからの方
が、と思ひまして」

「ふーん。どうしょっか、冥琳？」

「ふむ。郭嘉殿が言われる事も道理だが……」

こりゃ、埒があかないな。

「なあ。あたしが立ち会う、って事でどうだ？」

「美綴が？」

あたしの顔を見た北郷に、頷いてみせる。

「そうだ。あたしは確かに呉の人間だけど、ここにいるほとんど面識があるし。……一応、あたしがいれば、雪蓮や冥琳が心配するような話は出来ないだろう？」

「……そうね。綾子なら、何かあっても心配要らないし」

「確かに、適任だな。わかった、綾子に任せよう」

「美綴殿。ありがとうございます」

「ありがとうございます、美綴様！」

面と向かって頭を下げられると、何だかこそばゆいな。

「なら、あたしの部屋に来るといい。雪蓮、終わったら知らせるかな」

「ええ。お願いね」

「ま、座ってくれ。お茶でも入れるよ」

三人に、椅子を勧めた。

「はい」

「どうぞ、お気遣いなく」

「……いいのかな。俺、女の子の部屋に入ったりして」

北郷はそう呟いたが、

「……今更、何を言っているのですか」

「そうですよ、隊長」

二人に、白い眼で見られただけ。

「わかってると思うけど。あたしに変な気を起こしたら」

「そ、そんな事しないって！俺だって、命は惜しいよ……」

「……隊長。まさか、呉でも……」

「してないしてない！つーか、最初に釘を刺されたって！」

「……桂花が、全身精液男、って言うのも頷けますね」

北郷、自業自得だ、諦めろ。

「そ、それよりだ！ 二人がここに来た理由、まだ聞いてないぞ。聞かせてくれ」

「はい。一つは、許貢の処分と、謝罪を伝えに来たのです」

「そうだったな。孫策は、受けてくれたのか？」

「……明確な返答はいただけませんが、恐らくは。華琳様として、精一杯の誠意は見せたのですから」

郭嘉がそれを話し、楽進が後に続く。

「もう一つは、隊長を迎えに来ました。元々の約定は、既に果たしていますので」

「そっか。なら、一緒に帰ろう」

「……………」

「ん？ どうした、風？」

「……私は、一緒にできないのです。稟様も、ですが」
楽進、辛そうだな。

「どういう事だ？」

「華琳様の命、です。一刀殿は返していただくが、猫の喪が明けるまでは、私と風が残れ、と」

「ちよっと待て！ それじゃ、俺の代わりに二人が、って事じゃないか」

「そうです、隊長。それだけ、華琳様はこの事を重く見ているのです」

「それなら、俺がこのまま残ればいいだけだろ？」

思わず北郷がそう言うのと、楽進は立ち上がってその胸ぐらを掴んだ。

「隊長！ 華琳様が、どういうお気持ちで命じられたか、わかっているのですかっ！」

「な、風？」

「華琳様だけじゃない。季衣も流々も、春蘭様も秋蘭様も、真央も沙和も！ 隊長がいなくなったら、どんな想いをしていると思うので

すか!」

あたしの知らない名も混じっているけど、きっとみんな、魏の武将なんだろう。

「……風の言う通りですよ、一刀殿。あの時は咄嗟で仕方なかったとは言え、華琳様の嘆きを、考えてみた事はあるのですか?」

「う……。け、けど」

「無論、私達も……ですよ?」

俯きながら言う郭嘉の言葉に、楽進も手を離した。

「隊長は……。ご自分の存在がいかに大きいか、おわかりじゃない。それに、街の人々が、隊長に会いたがっているのですよ」

「……すまん」

あたしは、入れ終わったお茶を、みんなに手渡した。

「まずは、全員落ち着け。部外者のあたしが言う事じゃないかも知れないけどさ」

「……はい。そうですね」

「ありがとうございます、美綴様」

「……そうだな。美綴、いただくよ
ずずつ。」

お茶を啜る音が、一斉に聞こえた。

「……美綴。これって」

「わかるか、北郷?」

「ああ。……紅茶か、久しぶりだな」

「では、これは天の国の茶?」

郭嘉と楽進が、驚いたように茶碗の中を見る。

「いや、茶葉自体はこの国のものさ。ただ、製法は違うけどな」
茶を扱う商人に、頑張って作って貰った成果が、これ。

発酵をより進めれば、という曖昧な知識しかなかったから、だいぶ苦労させたみたいだけど。

「美綴様も、天の御遣いという噂は、真でしたか」

「それは違うんだ、楽進。天の御遣いはここにいる北郷、ただ一人

さ」

「ですが、隊長しか知らない筈のお茶が、ここにあるのは何故ですか？」

楽進の疑問に、北郷が答えた。

「俺と美綴、別の世界の住人みたいなんだ。ただ、良く似ているっただけの事だ」

「……その割には、一刀殿と美綴殿では、能力にかなりの差がありますが？」

「勘弁してくれ、稟。美綴みたいな化け物と一緒にされたら敵わん」
「ほう？ あたしを化け物呼ばわりするとは……いい度胸してるな、北郷？」

ボキボキと、指を鳴らす。

「楽進。ちよっとコイツと話がしたいんだが、止めないでくれるか？」

「はい。仮にも女性相手に化け物呼ばわりするなど」

「そうですね、美綴殿。手加減は無用です」

「いいっ？ 風、稟、た、助けてくれ！」

「心配すんな。ちよーっと、話し合いをするだけだ。な？」

「や、やめてくれ！ 謝るから、な！」

「問答無用！」

久々に、武器なしで武を奮ってみた。

ま、この程度なら華琳に怒られる事もないだろうな。

「じゃあ、二人とも。よろしくな」

「隊長こそ、お気をつけて」

「一刀殿。華琳様がお待ちかねです、真っ直ぐにお帰り下さい」
翌日。

話し合いの結果、華琳の提案通りに、北郷は魏へ。

そして、郭嘉と楽進が、ここに残った。

「綾子。あの子、随分ボロボロだったけど。平気なの？」

「問題ないだろ。な、楽進、郭嘉？」

「はい。隊長は、あのぐらいで丁度いいんです」

「そうですね。いい薬になったと思います」

「……随分、短期間に親しくなったようだが。何があったのだ、綾子？」

「ま、いろいろさ」

訝しげな冥琳に、あたしは笑って返した。

北郷の一隊は、どんどん遠ざかっていく。

「本当にいいのね？ 二人には、監視付きになるけど」

「構いません。元より、覚悟の上です」

「はい」

「……わかったわ。あなた達がおかしな真似をしない限り、呉は客人として、歓迎するわ」

雪蓮の一言で、二人の扱いは決まった。

「稟ちゃん。元気でしたか？」

「風！ あなたこそ！」

感動かどうかは知らんけど、こんな再会もあったし。

「美綴殿。よろしく願います」

「え？ あ、あたし？」

「はい。武人として、あなたを尊敬していましたから。是非、お話を聞かせて下さい！」

楽進には、真顔で迫られるし。

……いずれ、戦う相手なんだろうけど。

何となく、視線を魏の方向に向けた。

城壁を吹き抜ける風が、あたしの頬をくすぐる。

「とにかく、これで解散。戻りましょ」

「そうだな。雪蓮、仕事はたくさん残っているしな」
「げ？」

雪蓮が、救いを求めるように、あたしを見る。

「楽進、郭嘉。部屋に案内するよ」

「はいっ！」

「わかりました」

そう言つて、さっさと歩き出す。

……でないと、あたしまで巻き添え食いそうだったし。

「ちょっとー、綾子の薄情者！」

「さ。行くぞ、雪蓮」

「あーん」

「……あの。孫策様と周瑜様は、いつもああなのですか？」

楽進は、呆気にとられている。

「そうさ。華琳のところじゃ、まず見られない光景だろ？」

「は、はぁ……」

「呉は、変わった方が多いですからねー」

「……風。あなたも、ですよ？」

「全くだ。さ、行こうぜ？」

〳七十〳 (後書き)

書き進めているうちに、予定の話になりましたが終わらず……。もう暫く、お付き合い下さいませ。

七十一

翌日。

「稟ちゃん。元気そうですねー」

「そのようだな」

「風、星。久しぶりですね」

三人が、旧交を温め合っている。

何かを示し合わず、とまで勘ぐる奴はいないだろう。

郭嘉はそういう奴じゃないし、風と星に至っては……絶対にないな。

「お姉さん。稟ちゃんと語り合いたいのですが」

「宜しいですか、主？」

「もちろんさ。いつまでも、とは行かないだろうけど、一晩ぐらいなら平気だろ」

「ありがとうございます。美綴殿」

どうやら、星の部屋に向かうらしい。

……そう言えば、楽進はどうした？

「なあ、楽進を見なかったか？」

あたしは、通りすがりの兵に、声をかけた。

「楽進様でしたら、部屋の方におられますが」

「部屋？」

「はっ。ご案内します」

兵に先導され、城内の一角にある部屋に着いた。

……うわー、物々しいねえ。

不寝番の兵が十名ほど、何者も通さない、と言わんばかりに完全武装で立っていた。

「ここ？」

「はい」

あたしは呆れながら、部屋に近づいた。

「ここは、立ち入り禁止です」

隊長格っぽい兵が、あたしを遮ろうとする。

「あのさ。あたしが誰だか、知ってるよな？」

「当然です、美綴様。ですが、ここはお通しできません」

「誰の命令だ？ 雪蓮か、冥琳か？」

「……………」

答えられない、か。

「楽進と話をするだけだ、通してくれ」

「美綴様！ それは出来ません」

頑として譲らない兵達。

斬り通るのは難しくないけど、城内で意味もなく騒ぎを起こしたくないし。

「なら、雪蓮に許可を貰ってくればいいんだな？」

「あ、お、お待ち下さい！ 困ります」

何故か、慌てる兵士達。

「なんでさ？ まさか、雪蓮の命でも聞けない、って言うつもりか？」

「そ、それは……………」

「綾子。命じたのは私よ」

その声に、兵士は救われたような顔をする。

振り向くと、よく見知った顔が二つ、そこにあった。

「蓮華？ いつ、建業に？」

「ついさっきよ。雪蓮姉様と綾子が狙われた、って聞いて、駆けつけたのよ」

「そういう訳だ。私は、蓮華様の傍を離れる訳にはいかんからな」
思春も、そうは言うが、なんか困っている感じがする。

「つか、荊州はいいのか？」

「……まあ、蓮華の事だ、そっちは何とかしてきたんだろう。」

「で、これはどういう事なんだ？」

「当然の措置を執ったまでよ。仮にも敵国の人間を、監視もつけず

に放置なんて、あり得ないわ」

蓮華の表情は、厳しかった。

「なら、郭嘉はどうするんだ？」

「星と風が一緒なのでしよう？ それなら問題ないわ。それに、軍師ですもの。単独で何かを為せるとは思えない」

「……じゃあ、楽進は武官だからダメ、って言いたいのか？」

「そうよ。それに、あの娘、相当腕が立つようじゃない。ね、思春？」

「……は。抑えてはいますが、あの闘気はかなりのものかと」

「姉様も綾子も、甘過ぎるのよ。あの曹操が、何の企みもなく、将を送り込んでくると思っているのかしら？」

呆れたように言う蓮華。

「そうかなあ。雪蓮も冥琳も認めたからこそ、ここにいるんだろ？」

「そうかも知れないけど。でも、このままあの娘を放置しておく事は、私は反対よ」

「……なあ、蓮華。楽進と話したのはのか？」

「え？ する訳ないじゃない、その必要もないもの」
やっぱりか。

蓮華は、思い込むと頑として考えを変えないところがあるからなあ。

「なら、いい機会だ。話をすればいい」

あたしはそう言うと、蓮華の手を掴んだ。

「え？ ちょ、ちょっと綾子？」

「いいからいいから。おい、まさか蓮華まで通さない、って言うつもりじゃないよな？」

呆然としている兵士に、ちょっと、いい笑顔をしてみせる。

「わ、わかりました！ どどど、どうぞ！」

「……綾子。兵が疎み上がっているぞ？」

「この程度でビビる方が負けなんだよ、思春」
コンコン。

「樂進。入るぜ？」

返事を待たず、あたしはドアを開けた。

「美綴様？ 外が騒がしいので、何かと思いましたが」

「いや、悪い。ちょっと話がしたいんだけど、いいか？」

「構いませんが。……そちらの方は？」

樂進は、蓮華と思春を見る。

「蓮華。まさか、名乗りもしないつもりじゃないだろ？」

「……わかったわよ。私は荊州牧の孫権、字を仲謀。揚州牧、孫策の妹だ」

「私は甘寧、字は興覇だ」

「孫権様に甘寧様……。お初にお目にかかります、私は樂進、字を文謙と申します」

丁寧な頭を下げる樂進に、蓮華はやや戸惑った様子だ。

「とりあえず、座ろうぜ。突っ立ったままで、話も何もない」

「はい。どうぞ、お使い下さい」

部屋の隅にあった椅子を、樂進が並べていく。

「それで美綴様。お話とは？」

あたしを正面から見据えて、樂進が言う。

「気づいていたと思うけど、今のアンタ、監禁状態なんだ」

「……はい。仕方のない事だと思っています、今の魏と呉の関係からすれば」

「ホントに、そう思うのか？」

「もともと、我が魏が戦を仕掛けた事が、今回の騒動の発端です。

……華琳様は、本気で悔やんでおられますが」

「信じられるか、そのような事！」

蓮華が、樂進を睨み付ける。

「ならば、何故に許貢のような者を自軍に置いていたのだ？ 我が呉に恨みを持つ事ぐらい、調べればすぐにわかる筈だ！」

「……………」

「既に、死人に口なしだ。何とでも言えるだろう」

「それは違います！ 華琳様は、そのような御方ではありません！」
「何故、そのような事が言える？」

「華琳様は、常日頃から覇道を唱えている御方です。あのようなやり方は、華琳様が最も忌み嫌う事です」

「だが、現に姉様が綾子、どちらかが確実に命を奪われるところだったのだぞ？ 勇気ある猫がいなければ、だ」

「……そうです。ですが、その謝罪は、孫策様は受け入れて下さいました」

「そう、姉様は認めたようだな。だが、私はまだ、曹操を許した訳ではない」

楽進は、下唇をかみ締めている。

「……楽進。蓮華様の言葉、理不尽に聞こえるかも知れないが。呉の将兵の怒りは、それぐらいのものだと言う事だ」

静かに、思春が言う。

「はい。……もし、逆の立場であれば、私も魏の将兵も、絶対に呉を許さないでしょう」

「そうだ。私とて、蓮華様と同じ思いだ。……もちろん、雪蓮様が認めた事を、私情を以て覆すような真似はせぬがな」

「思春？ あなた……」

驚く蓮華。

「蓮華様。人間というもの、感情はあって当然です。ですが、この仕置きは、次代の王たる蓮華様としては、相応しくないかと」

「……あたしも、思春の意見に賛成かな」

「綾子まで……」

「いいか？ まず、楽進は楽進、華琳じゃないんだ。それはいいかな？」

「……ええ」

戸惑いからか、口調が普段の柔らかなモノに戻ったな。

「感情任せで楽進を責めるのは、誰だって出来る事。でも蓮華、お前さんがやっちゃダメだと思うんだ、あたしは」

「感情任せって、私はそんな！」

「いいから聞けって。雪蓮やあたしの事を本気で心配してくれたって事はわかる。そして、みんなが気持ちの整理がまだついていないって事もな」

「……………」

「でもな。気持ちでは納得しなくても、雪蓮は華琳の謝罪を受けたんだ。だから、北郷は帰ったんだし、期限付きとは言え、郭嘉や楽進がここにいる」

「そ、それでも、誰もつけずなんて」

「……ま、華琳がその程度の奴だとしたら、あたしは失望するね。もし、そんなセコい企みでこの呉が負けるような事があっても、呉の民は誰も、華琳に従わないんじゃないか？」

「……そうね。少なくとも、雪蓮姉様はこの地を、自分の力で、正々堂々と取り戻したもののね」

「そうさ。けど、華琳ほどの奴が、その程度もわからない、なんてあり得ない。そうだろ、楽進？」

「はい。華琳様は、民の意にそぐわない政治は好むところではない、常日頃からそう仰っています」

きっぱりと頷く楽進。

「そんな華琳が、邪な事を言い含ませた奴を、派遣すると思うのか？」

「……そうだな。蓮華様もご存じかと思いますが、曹操は人材をとっても大切にする人物。そして、楽進と言えば、危険を顧みず常に先陣を切る勇将。そのような者を、こうして警戒されるのを承知で派遣するでしょうか？」

「……なら、思春は信用すると言うの？」

「はい。これは、武人としての勘でもあります。楽進にはそのような真似が出来るとは思えないのです」

「そう……」

落ち込む蓮華の肩を、あたしはポン、と叩いた。

「蓮華。お前さんの言う事も、決して全て間違っている訳じゃないぜ？」

「綾子……」

「けどな、雪蓮はそう甘くないさ。蓮華が、一番よくわかってるじゃないか」

「そうね。姉様は、私以上に鋭いし、苛烈なものね」

蓮華は顔を上げると、楽進に頭を下げた。

「この通りだ。必要以上に、あなたを疑ってしまった」

「い、いえ！ 頭を上げて下さい、孫権様！」

「いや。仮にも孫家に連なる者として、してはならない事だった。許せ」

「孫権様……。私は、気にしておりません。それに、美綴様と甘寧様が、私を認めて下さった。それで十分です」

「そうか」

やれやれ、一時はどうなるかと思ったんだけど。

「思春。表の兵達を解散させて」

「はっ」

「宜しいのですか？」

「ええ。許貢の一件は、まだ整理がついた訳じゃないけど。でも、少なくともあなたの事は信じる事にするわ」

「……はい。ありがとうございます」

「よし。なら、仲直りに、メシでも食いに行こうぜ？」

あたしの発言に、楽進が目丸くする。

「え？ 食事、ですか？」

「ああ。当然、ここじゃないぜ？ 建業に来てから、ずっとこの部屋だろ？」

「……ええ、まあ」

楽進自身が、あらぬ疑いをかけられなくなかったらしく、一人謹

慎状態だったらしい。

だから、蓮華があそこまで物々しくするまでもなかったんだけだな。

「蓮華と思春も一緒だからな」

「え？ 私も？」

「ああ。お詫びとして、蓮華の奢りだぜ？」

冗談めかして言うあたしに、蓮華も笑ってくれた。

「ふふっ、良いわ。今日は、私が持つわよ」

「い、いえ、そんな。それでは、申し訳ありません」
慌てる楽進。

「いいって事さ。な、蓮華？」

「ええ。思春、いいわね？」

「……はっ」

「なら、昼に城門で待ち合わせて事で。楽進は、昼になったらあたしが迎えに来るよ」

「ですが……」

「遠慮すんなよ。それとも、他国の将とメシなんて、嫌か？」

「い、いえっ！ では、お供します」

あゝ、真面目だねえ。

そして、街にある飯店へ。

「あの……。孫権様はいつも、こういった店に？」

「私はあまりない。どちらかと言うと、雪蓮姉様の方が気軽に出入りしているようだ」

「……蓮華。いい加減、普段の口調で話そうぜ？」

「あ、綾子！……済まない、楽進」

「いえ、お気になさらず」

そう言う楽進の眼は、柔和な感じがする。

武人ではあっても、普段は穏やかな性格なんだろうね。

店はなかなかに混み合っていたけど、先に予約しておいたので、庭に面した席に案内された。

天気がいいので、こんなテラス形式の席の方がいいだろうし。

「さて、注文するか。楽進、何か苦手なモノはあるか？」

「いえ……。ただ、なるべくならば、辛い物があると」

「辛い物、ね。なら、麻婆豆腐は決定だな。後は……」

適当に注文し、菜譜を置く。

「ところで、美綴様。一つ、伺いたいのですが？」

「いいぜ。何だ？」

「はい。孫策様や孫権様だけでなく、華琳様の真名も預かっておいでのご様子ですが」

「ああ」

「経緯を、お聞かせいただけませんか？ 失礼ですが、美綴様は呉の将、華琳様とどのような関係なのか、と思ひまして」

「私も、聞かせて欲しいわ。あの曹操が、滅多に真名を預けるとは思えないし」

「確かに、蓮華様の仰る通りです」

三人に、ジッと見られる。

「そんなに見つめなくてもいいって。確か、南陽を落とした時、だったな」

「あの時……そうか、確かに曹操が助力を申し出たな」

「その際、何度か雪蓮のところにも来ていたのは覚えているか、思春？」

「ああ。……遠い昔の事のようにだな」

思春が、眼を細める。

……もともと細いから、目を瞑っているようだとか、そんな事は言っちゃいけない。

「預かったのは、南陽を落とした後だな。華琳から仕官の誘いを貰ったな」

「……そうね。あの戦い、綾子抜きでは語れないもの」

「そうだったのですか、孫権様？」

「ええ。袁術を見限った兵を連れ、ほとんど単独で城に乗り込んだのよ、彼女は」

「た、単独で？」

「いや、そんなに驚かれても。」

「そう。そして、少人数で南陽城を制圧してしまったの。勿論、多少の戦闘はあったけど」

「……やはり、美綴様の武名、噂だけではなかったようですね」

「ま、まあ、それは置いといて。あたしは、雪蓮と共に行動すると決めていたから、断ったんだよ。折角だったけどな」

「……それで、その折に華琳様が？」

「そう。あたしはそんなつもりはなかったんだけどな」

「いえ。わかります、華琳様ならきつとそうなさるでしょう。あの方は、認めた人物に対してはとてご執心なさりますから」

「……そうなんだよな。あたしも、一時はあんまりしつこいんで、辟易していたぐらいだからさ」

あたしは、盛大に溜息をつく。

「けど、曹操の気持ちもわかるわ。綾子のような人物、大陸広しと言えども、そうそう見つかるものじゃないわ」

「やはり、そうですか？ 華琳様は、常々仰っています。美綴殿さえ我が陣営にいてくれたなら、大陸の覇権は今頃、魏にあっただろう、と」

どこまで過大評価されてるんだ、あたしは？

雪蓮の夢の為に頑張ったとは思うけどさ、そりゃ。

「でも、こうして呉に残って貰えているわ。楽進には悪いけど、彼女は呉の至宝。だから、曹操には渡せないわ」

「そうでしょう。まだ、面識を戴いて間もないと言うのに、呉の皆様が如何に美綴様を頼りにしているか。切々と伝わってきます」

だから、そんな尊敬に満ちた眼であたしを見ないでくれれば。「お待たせしました」

そこに、料理が運ばれてきた。

やれやれ、妙な空気からこれで解放されるかな。

「さ、麻婆豆腐だ」

「はい、ありがとうございます」

見た目にも、真っ赤、というしかない麻婆豆腐。

それを前に、楽進は目を輝かせている。

「では、いただきます」

「みんなも食べようぜ？」

「そうね」

「ああ」

各自で、料理を取り分け、食べ始めた。

「……む。こ、これは？」

一口、麻婆豆腐を食べた楽進が、動きを止めた。

「ん？ 口に合わなかったか？」

「いえ、違います。……美味しいです、今までに食べたどの麻婆豆腐よりも」

そう言うのと、もの凄い勢いで食べ始めた。

あまりの食べっぷりに、全員が固まっているし。

「そうか。これ、確かにこの店の自慢だけどさ」

「はいっ！ 間違いなく、天下一品だと思います」

嬉しそうだなあ、しかし。

「綾子。確か、この麻婆豆腐は」

「……ああ。あたしが自分の国で食べた事のある奴だけど」

冬木にあった、中華料理屋。

そこの超激辛麻婆豆腐は、知る人ぞ知る名物。

あまりの辛さに、全国から辛い物好きが集まっては、皆撃沈していた……なんて曰く付きの奴だけど。

試しにこの店の主人に教えたところ、いつしか名物になっていたりしたんだが。

「あ、あの。お代わりをいただいても……？」

「はやっ！ もう完食かよ」

「……は、はい。あまりに美味でしたので」

少し赤くなりながらも、残ったソースまで綺麗に平らげる楽進。

「別に、いいと思うが。どうだ、蓮華？」

「え、ええ。構わないわよ」

「ありがとうございます！」

結局、麻婆豆腐だけで五皿。

その上に、麻婆丼を三杯も平らげた楽進だった。

見ているこっちが、しばらく麻婆はいいや、って思ってしまうぐらいの食べっぷり。

「是非、この製法をお教えいただきたく！」

そして、店の主人にしつこく聞き、元があたしだと知れてしまい

……大変だった。

「美綴様！ 是非私を、あなた様の弟子に！」

「どうするの、綾子？」

「いや、どうする、って言われても……」

結局、押しの強さに根負けして、弟子はともかくレシピだけなら、って事で何とか納得して貰ったけど。

……ホント、この世界の人物は個性派揃いだわ。

〽七十一〽 (後書き)

なかなか上手くまとまらず、こんな展開になっています。
なお、登場キャラは、原作全員とはしません。
それこそ、收拾がつかなくなりますので……。

挿話　く蓮華の場合く（前書き）

何通りか考えてみましたが、蓮華の話でまとめてみました。

挿話　蓮華の場合

探し人を、やっと見つけた。

全く、何処にいても神出鬼没なんだから。

「姉様」

「あら、蓮華。どうしたの？」

「……いえ。またお酒ですか」

私は、盛大に溜め息をつく。

揚州牧というだけでなく、呉王でもある雪蓮姉様。

曹操が既に魏王を名乗っている上、漢王朝は既に形骸化。

だから、姉様が王を称する事に問題はない。

……のだが。

「姉様。お酒を止めろ、とは申しませんが。せめて、このような場所だけはお控え下さい」

「いーじゃない。部屋の中に籠って吞むばかりじゃ、気が滅入るもの」

今日は城壁の上だから、まだマシな方。

時には木の上とか、あり得ない場所にいたりする。

身軽なのはいいんだけど、冥琳が毎度、頭を抱えているのは私も

同感。

「姉様。少しは王としての自覚を持って下さい！」

「あー、はいはい。それより蓮華、話があったんじゃないの？」

「ね、姉様？　何故、それを？」

「だって、顔に書いてあるもの」

……まただ。

私は、どうしてこう、顔に出してしまうんだろう？

思春みたいに、常に冷静でいられたらいいんだけど。

「ま、座りなさい。ほら、夕焼けが綺麗よ」

「……はい」

本当に、雪蓮姉様には敵わない。

「まずは一献。呑みなさい」

「……はい」

満たされた杯に、顔を近付ける。

上質な、果実みtainな香りがする。

「姉様。これは？」

「いいからいいから。美味しいわよ」

ニコニコしながら、私を見る姉様。

……とりあえず、飲んでみよう。

口当たりは少し、甘味を感じる。

でも、喉越しは悪くない。

後味もすつきりしているし。

「どう？」

「ええ、美味しいですね。でも、こんなお酒、何処から？」

「何処からだと思う？」

「少なくとも、揚州や荊州ではないですね……。まさか姉様、魏から」

「あはは、勘ぐり過ぎよ、蓮華。これはね、綾子の国のお酒よ」

「綾子の？」

「ええ。泡盛、って言うんだって。お米が原料だって聞いたけど、詳しい製法は知らないわ」

「泡盛……。強めのお酒なのに、口当たりの良さといい、喉越しと
いい、凄いいと思います」

「でもね。このお酒、何年か寝かせると、もっと美味しくなるんだ
って。待ち遠しいわね」

そう言いながら、姉様も盃を干した。

「どうぞ、姉様」

「ありがと。うーん、本当に美味しいわ」

至福の時、という顔をするわね、本当に。

「それで、話って何かしら？」

「……はい。魏から来た、二人の事なのですが」

「郭嘉と楽進、だっけ？ あの二人がどうかしたの？」

「ええ。……叱られました、綾子と思春に」

「へえ？ 珍しいわね、あなたが誰かに叱られるなんて」

「そんな事はありません。まだまだ、私は未熟者ですから」

「ま、いいわ。でも、どうして？」

「……はい。魏の二人を、監視も付けずにいたので、私が指示したのですが」

姉様はジッと、私の話に耳を傾けている。

「特に、楽進は見ての通り、かなりの腕を持つ武官です。……駆けつけてみて、驚きました。野放図だったのを見て」

「蓮華。あなたの気持ちはわかるけど、わたしがそうさせたの。勿論、冥琳も賛成の上でね」

「はい……」

「曹操が策を持たせるには、あの娘では無理よ。真っ直ぐ過ぎて、嘘がつかないもの」

姉様は、私の杯に、お酒を注いだ。

「それに、わたしの勘が、あの娘達は大丈夫、って言っていたしね」
「……それを言われたら、冥琳じゃなくても反対出来ませんよ」

姉様の勘は、本当に軍師泣かせだと思う。

これが、私が姉様に勝てない最大の理由かも知れないわね。

「でも、それだけじゃないわよ。だって、一番の当事者が、悲しんではいても、ちっとも怒ってないわ。なのに、わたしがとやかく口を挟めると思う？」

「そうみたいです。綾子、あの二人には、何も言わずに普通に接してますから」

「そう。でもね蓮華。あなたのした事が、必ずしも間違いじゃないのよ。そこは、勘違いしないでね？」

「雪蓮姉様……」

「あなたの判断も、一つの考え方よ。王として、それが正しいと思うなら、呉の民にとって悪い結果にならないと判断したのなら。それが、王というもの。ただし、判断には責任が伴うけどね」

「はい」

一気に話したせいか、喉が渴いた。

「んくっ、んくっ……。ふう、美味しいわ」

「あらあら、さっきまで文句を言っていた割には、いい呑みっぷりねえ」

ニヤニヤとする姉様に、

「だって、私は母様の娘で、姉様の妹ですから。これは血筋ですよ？」

と、やり返した。

「あははは、言うわね、蓮華？　なら、もう少し付き合いなさい」
「ええ」

翌朝。

予想はしていたけど……。やっぱり、お酒が残っている。

「蓮華様。少し、過ぎたようです」

「うう……。雪蓮姉様に、本気で付き合った私が間違っていたわ」

「程々になさって下さい、お身体に障りますから。水です、どうぞ」
思春は小言を言いながらも、世話を焼いてくれる。

「ありがとうございます」

「それにしても、蓮華様が二日酔いとは珍しいですね」

「そういう気分だったのよ。姉様と、ああしてお酒を呑むなんて機会、滅多にないしね」

そう言えば、昨夜は思春の姿が見えなかったけど。

いつもなら、目につかない場所で控えてくれているのだけど。

「思春は、何をしていたの？」

「はい。お二方の水入らずを邪魔してはと思い、久々に明命と鍛錬

を」

「そうね。腕は上がっていた？」

「はい。以前とは比較にならない程でした。私も、うかうかしてられないかと」

「そう。あの娘も、随分と修羅場を潜っているものね」

それに比べ、思春は私に付き従っている事もあり、実戦の機会は案外少ない。

それでも、私なんかよりはずっと凄腕なのは確かだけれど。

「ごめんなさいね。私の為に」

「……蓮華様。私へのお気遣いでしたら、無用に願います」

「でも、常に私の傍だもの。功を立てる機会が少ないのは確かよ」

「私は、蓮華様と共にあれば、それで良いのです。それに、私の実戦が少ない、と言うのは、それだけ蓮華様が戦場に身を晒す機会が少ないと言う事です。明命だけでなく、恋、星、霰、紅蓮、菖蒲……そして綾子。これだけ将が揃っている事を、むしろ誇りに思います」

「……そうね。強大な筈の曹魏なのに、心細さは全くないものね。民を見ていて、そう思うわ」

「腕は、また鍛えれば良いだけです。明命に抜かれたとしても、それは呉の為になるだけの事。気にはしておりませんよ」

思春は、割り切って物事を見ていると、本当に思う。

「ならいいの」

「蓮華様。少し、街を歩きませんか？ 建業にお戻りになる前に」
思春から、こんな事を言い出すのは珍しい。

普段なら、危険だからと外出を止める方が多いぐらいなのに。

「私は構わないけど」

「では、参りましょう。少し、お見せしたい場所があります」

「見せたい場所って？」

「来ていただければおわかりかと。それでは、後ほど。……出来れば、顔を洗う事をお勧めします」

「う……。わ、わかったわ」

「どうやら、相当酷い顔をしているようね。」

「着きました、ここです」

「思春に案内された場所は、街外れの大きな建物だった。」

「ここは？」

「まずは、お入り下さい」

「え？ いいの？」

「勿論です」

「じ、じゃあ……」

「門を潜った途端、何かにぶつかった。」

「イテッ！ あ、ゴメンなさい！」

「い、いえ、平気よ」

「あ、見つかったちゃう！ じゃあね、お姉ちゃん！」

「そう言って、駆けていく男の子。」

「大丈夫ですか、蓮華様？」

「ええ。びっくりしたわ、いきなり」

「と、後から女の子がやって来た。」

「私を見て足を止め、ジッと見上げてくる。」

「あれ？ お姉ちゃん、誰？」

「え？ ええと、私は」

「こちらは孫権様だ。孫策様の妹君にあらせられる」

「じゃあ、孫策お姉ちゃんの妹なんだ！ やっぱり似てるね」

「え？ 思春、これは一体……？」

「訳もわからず混乱する私に、思春が微笑む。」

「さっきの子供は、やはり何処か駆けていった。」

「ここは、孤児院、という施設です」

「孤児院？」

「そうです。戦争が起これば、兵が傷つき、中には死ぬ者も出ます」

「……ええ」

「それだけではありません。疫病や天災、飢饉。盗賊に命を奪われる者も、未だ絶えません」

「そうね。でも、一人でもそうした者が減るよう、姉様も私も、そして皆が日々努力している」

私の言葉に、思春は頷く。

「勿論です。ただ、それでも亡くなる者はまだまだ少なくありません。そして、親が亡くなった子供は、どうなるでしょう？」

「それは……。親戚が引き取るとか」

「そういう子供もいるのは事実ですが。身寄りのない子供、というのも存外多いものです」

「……………」

言われてみれば、その通りだ。

けど、この大陸で、そこに思いが至る為政者は、いるのだろうか？

「この孤児院は、そうした子供達を集め、育てている施設です」

「こんな施設があったなんて……」

「ご存知ないのも、無理はありません。つい最近、雪蓮様がお作りになったばかりですから」

「姉様が？」

「はい。もともとは、綾子の提案、との事ですが」

「綾子、という事は……。綾子の国には、こうした施設があった、という事ね」

「恐らく。身寄りのない子供は、誰も引き取らなければ路頭に迷います。その結果、人買いに出される者、飢えて死ぬ者、盗賊に身を落とす者……。いずれにせよ、不幸な末路を辿る事になります」

「だから、ここで引き取り、大人になるまで面倒をみる……」

思春は、大きく頷く。

「そうです。兵になる者、官吏になる者、商いをする者、田畑を耕す者……。いずれにせよ、未来の孫呉を支える人材になるでしょう。子は国の宝……よく言ったものです」

「そうね。でも、この発想は流石ね」

「……蓮華様。魏との決戦が終われば、雪蓮様は王位を蓮華様に譲るおつもりとか」

「そうみたいね。私としては、姉様の方が王として相応しい、と思うんだけどね」

「いえ、どちらが相応しい、と言うのは間違いかと。雪蓮様は、国を広げる王として適した御方。蓮華様は、国というモノが定まり、そこを発展させていく王として適した御方かと。ですから、優劣の問題ではないと思います」

「ありがとうございます」

「いえ。及ばずながら、私も蓮華様の為、力を尽くします。それと」

「時には、こうして市井を見て回るのも、悪くありませんな」

「思春？」

「……雪蓮様と綾子が、何故民に好かれ、慕われるか。最近漸く、その理由がわかってきた気がするのです」

「こうして、民の目線でモノを見られるから？」

「はい。もし、王位に就かれたとしても、それは努々、お忘れなきよう。そして、全てをご自身だけで抱え込まないで下さい。その為に我らがいるのです」

「……わかったわ」

無口な思春が、ここまで語ってくれるとはね。

ちよつと意外だけど、でも嬉しいと素直に思う。

「あれ？ 蓮華に思春じゃないか」

そこに、綾子が顔を見せた。

「綾子。どうかしたのか？」

「いや、何でも楽進の仲間て玩具やら何やらを作る奴がいるらしくてさ。個人的な土産って預かったらしいんだよ。で、ここの子供達なら喜ぶかな、って思ってたさ」

そう言いながら、綾子は袋を掲げてみせた。

「ねえ、思春。やっぱり、綾子って凄いわね」

「はい。仰る通りかと」

そう言って、二人で笑い合う。

「な、何だよ？」

「何でもないわ。ありがとう、綾子」

「……あたし、何か礼を言われる事、したっけ？」

首を傾げる彼女を見ながら、ふと思った。

雪蓮姉様も綾子も、ずっといてくれるのだろうか？

……いや、二人に限って、私や皆を置いてきぼりにする訳、ないわね。

「あーっ、綾子姉ちゃんだ！」

「ホントだ！　ねえねえ、今日は何して遊んでくれるの？」

今度は、たくさんの子供に囲まれてしまう。

「今日は、お土産持ってきたぞ。ホラ」

袋から取り出されたのは、様々な絡繰人形。

「わーっ、凄いよこれ？」

「僕にも頂戴！」

「押すなって。まだたくさんあるからさ」

綾子、いい笑顔をしているわね。

「それに、今日はそっちのお姉ちゃん達も遊んでくれるってさ」

「え？」

「な。わ、我らもか？」

「当然。それとも、嫌か？」

……嫌、なんて言える訳ないじゃない。

そこまで、私は冷たくなれないもの。

「……思春」

「……御意」

仕方がない、どうすればいいかわからないけど……この子達に、接してみましようか。

「ありがとうございます。美綴様だけではなく、孫権様や甘寧様にまでお相手いただいたて」

孤児院の院長、という女性が、何度も頭を下げる。

「気にするな。私の方こそ、このような施設がある事を初めて知ったのだ。礼を言うのはこちらだ」

「そう言っていたけると、子供達も喜びます。……今でこそ、あやうって明るさを取り戻してくれましたが……」

院長の顔に、僅かに翳りが差した。

「……仕方ないさ。親を亡くして、いきなり元のように、って方が難しいんだ」

「美綴様が仰せの通りです。でも、こうして日々、子供達の顔が、明るくなっていくのを見るのは楽しみです」

……そうね。

子供達の顔に、笑顔がある事。

それこそ、雪蓮姉様が願っている夢。

……ふふ、また綾子に気づかされたわね。

「困った事があったら、私にも言ってくれ。力になる」

「ありがとうございます。孫策様のみならず、孫権様まで……」
そう言って、院長は目頭を押さえる。

「院長さん、湿っぽいのはなし。子供がびっくりしちまうぜ？」

「え、ええ……。そうですわね」

と、そこに兵が駆け込んできた。

「孫権様、美綴將軍。周瑜様がお探しです！」

「そうか。では、城に戻るぞ」

院長の見送りを受けて、孤児院を後にする。

「蓮華、思春。ありがとな」

「え？」

「何の礼だ、綾子？」

私達の反応に、綾子は笑って、

「子供達、とっても喜んでたじゃないか。その礼さ」

「いいのよ。お礼を言うのは、私の方だから」

「そうだな。私も、礼を言っておこう」

「何だそりゃ。じゃ、おあいこって事で」

そして、三人で顔を見合わせ、心から笑った。

……いい一日だったと思う。

七十二 (前書き)

新章に入ります。

七十二

「いろいろと、お世話になりました」

「私も、本当に良くしていただいて。感謝します」

郭嘉と楽進が、魏に帰る事になった。

喪が明け、約束が履行された以上、二人は戻るしかない。

「今度会うのは戦場か。……正直、戦いたくはないけどな」

「美綴様。私も同じ気持ちです……叶わない願い、ですけど」

「星、風。達者で、とは言いません。まだ、私達は敵味方ですから」

「うむ。だが、私は主に従うまで。戦場での手加減は要らぬよ。お互いに、な」

「稟ちゃん。曹操さんには、よくお礼を言っておいて下さいねー」

「ふふ、何の事ですか、風？」

全く、これから戦う同士とは思えないな。

「では、そろそろ。孫策殿にも、宜しくお伝えを」

「わかった。じゃあな」

二人は頭を下げると、馬に跨がった。

後ろ姿が、小さくなる。

「さて、戻ろうか。軍議の時間だ」

「はっ」

「はいー」

雪蓮が王座に座り。

両脇に蓮華とシャオ。

軍師が、冥琳を筆頭に、穂、亞莎、風、ねね……と、千花もいる。

武官が祭さん以下、思春、明命、霰、恋、星、菖蒲、紅蓮、刃霧

……あと、あたし。

勢揃いしてみると、マジで壮観だわ。

「さて、みんな揃ったわね。冥琳、始めて」

「わかった。皆、知っての通りだが……。この大陸は、今は大きく二分されている。一つは言うまでもなく、我が孫呉。もう一つは……曹魏。大陸の統一を目論む霸王、曹操が率いている」

みんな、冥琳の言葉に聞き入っている。

「曹操が覇道を改める事は、万に一つもなからう。……ならば、我が孫呉との対決は必然となる。そして、我らが取るべき道は二つ。亞莎、わかるな？」

「は、はいっ！ 一つは、曹魏の軍門に下り、安泰を図る道。もう一つは……誇りをかけて、決戦に臨む道です」

「愚問じゃな。戦わずして降るなど、儂は御免じゃ」

「そーだよ！ シャ才達、今まで一生懸命頑張ったのは、曹操なんかに頭を下げる為じゃないもんね」

「よく言った、小蓮。姉様、取るべき道は、ただ一つかと」

……ま、だよな。

この場に張昭とかいたら、降伏を主張すんのかね？

もつとも、この面子で不戦とか、あり得ないけどな。

「そうね。わたしも、戦わずに呉の民を守らずに降る、何て選択肢は眼中にないわ」

雪蓮がそう言って、方針は決まり、と。

「明命。予想される敵将と、数は？」

「はい、冥琳さま。曹操自身が率いてくるのは間違いないでしょう。これに、夏侯淵、夏侯惇、楽進、李典、于禁、許チヨ、典韋が従い、軍師は荀？と郭嘉。その全員が参加、と見ています。兵は、最大で八十万程度かと」

「やはり、そのぐらいいは出てくるでしょうね。百万の動員も可能なんでしょうが」

「穏ちゃんは、馬超さん達の事がある、そう言いたいんですよねー？」

「確かに、馬超軍が長安を窺えば、本拠地はがら空きには出来ない

……。それに、蓮華様が率いる荊州の軍勢もあります」

流石に最終決戦を前にした軍議、みんなが口々に意見を出している。

「馬超殿に蓮華殿、そして本隊。これで、我が軍はどれぐらいの規模になるか？」

「そうですね。六十万……。それが限度でしょうか。南方の備えもありますし」

「ふむ、二十万は不足……。厳しい戦いと言うのは、変わらぬようですな」

「そんな差など、恋殿の武勇で弾き返せるのです！」

「……ちんきゅー。それは、無理」

みんな、やる気は変わらないけど、流石に表情は厳しい。とか、ぼーっとしていたところ。

「綾子様は、如何ですか？」

「そうそう、まだ姐御の意見、聞いてないぜ？」

菖蒲、刃霧……。あたしに振ってどーすんだよ。

あーあ、全員の注目を浴びちゃってるよ。

「さ、姉さん。みんな、待ってるよ？」

紅蓮まで……。全くもう。

「……わかったよ。とりあえず、数で負けてるなら、こっちの得意分野に持ち込むしかないだろ？」

「得意分野って？」

「冥琳や穩なら、思いついている筈なんだけど。呉の強みって言うたら、水軍と火、だろ？」

あたしの言葉に、二人は大きく頷いた。

「流石ですねえ。綾子さん、やっぱり軍師になりませんか？」

「……全力で遠慮しとく。亞莎、水軍での決戦に適した場所は？」

「ひゃい？ え、ええと……。赤壁、でしょうか？」

「正解だ、亞莎。後は火、だが……」

小説だと、ここで孔明が祈祷して、風が吹くんだけど……。いない

んだよなあ。

まさか、その為だけにもう一度借りてくるって訳にもいかないだろうし。

……あ、そうだ。

「祭さん」

「ん、何じゃ？」

「くれぐれも、無茶はしないで下さいよ。向こうには、天の御遣いがいるんです。……バれますから」

「……どういう意味か、わからんが？」

首を傾げているところを見ると、惚けている訳じゃなさそうだけど。

けど、苦肉の計なんて、あたしゃ目の当たりにしたくないぜ？

「わからなくてもいいです、でもホントに無茶はダメですから」

「ふむ、よくわからんが。綾子がそう言うのなら」

あたしは祭さんに頷き返してから、冥琳を見る。

「あたしからはこんなところだけど？」

「ああ、十分だ。火は、何とか考えよう」

やれやれ、これで解放されるかな。

赤壁の戦いぐらいなら、あたしにも少しは知識がある。

でも、実際に戦場に立って、あの華琳相手にその知識が通じるとは思えないんだよな。

それに、北郷だって、この戦の経緯ぐらい知ってるだろうし。

だから、ぶっちゃけ展開が読めない。

……なんて、あたしが考えるだけ、ムダだな。

「じゃあ、細かい陣立てはまた後でって事にするけど。蓮華、小蓮。あなた達もここに残りなさい。孫家の存亡を賭けた決戦ですもの」

「ですが、雪蓮姉様。荊州はどうなるのです？」

蓮華がすかさず尋ねる。

「勿論、考えているわよ。穩、千花、霰、それに刃霧、蓮華達に代わって荊州をよろしくね」

「ぶうぶう。私は除け者ですか、雪蓮さまあ」

「私も、折角の大戦。外されるのは心外ですな？」

「俺だって、シャオ様の側で戦いたいですよ！」

相変わらずニコニコしたままの千花以外、全員不満らしい。

「そう言わないの。荊州だって大事なのよ？」

「そりゃ、わかってますけどお……」

「穏。状況に応じて牽制して貰う事になるのだ。西涼との連携もある。そうすると、私かお前、どちらか、となるな？」

「冥琳の言う通り。でも、わたしがここにいる以上、冥琳は動けない。……わかるわね？」

「……はぁい」

「霰と刃霧、あなた達も頼りにしていない訳じゃないわ。むしろ逆よ」

「……そう言われては仕方ありませんな。荊州に参りましょうぞ」

「刃霧。シャオならへーきだから。頑張ってきてね？」

「わかりました、シャオ様。俺、行ってきます」

さて、あたしは……どうなるんだろ？

まあ、なるようにしかならないけど、どうせなら見てみたいかな。
な。

リアル赤壁なんて、見たくても普通見られるもんじゃないし。

そんなこんなで、軍議がお開きに。

何だか、妙に疲れた。

「綾子」

蓮華と、思春があたしに声をかけてきた。

「どうした？」

「これから、水軍の調練に行くの。良かったら、一緒にどう？」

「へ？　けど、あたしは水軍なんて扱えないぜ？」

「当然だろう。調練を行うのは私だ」

あらら、思春に怒られてしまった。

「ふふ。綾子、まだ呉の水軍を見た事ないでしょう？ 一度、見て貰おうかと思ってね」

「あ、そう言う事ね。すまん、ボケてたらしい」

「で、どうなのだ？ 貴様も、水軍の動きは一度見ておくべき、とは思うが？」

「そうだな。なら、連れて行ってくれ」

あたしのイメージだと、水軍イコール海賊、かな？

でも、この場合、戦いは海じゃなくて川だしな。

まあ、百聞は一見にしかず、だ。

建業の外れにある、大きな湖。

「どひゃー、これ全部か」

「いや、湖賊の取り締まりや、商船の警護に一部は出払っている。それから、修理中の船もある」

事も無げに言う思春、

それでもこれ、何百隻あるんだ？

博物館で見た、安宅船みたいな奴もあれば、小早みみたいなものもある。

「はあ……。壮观だね、しかし」

「呉の主力ですもの。これがある限り、曹操に引けは取らないわ」
蓮華が胸を張る。

「だろぅな」

手で触れ、撫でてみた。

「へえ、やっぱり木造か」

「ほう。綾子の国は違うと言うのか？」

「ああ。あたしの国というか世界だと、船は鋼鉄製が多いかな。後、帆船はほとんどないな」

「え？ 帆もなしに、どうやって船が進むの？」

「まさか、皆人力のみ、という訳ではないだろうな？　それに、鉄で造った船が、水に浮かぶとは思えん」

「思春、全部機械で動くんだよ。エンジンってのが積まれていて、石油とかを燃やして動かすんだ。後は、浮力を使うから沈まないんだけど……詳しい事はあたしもわからん」

「良くわからんが……とにかく、人手なしに動くのか。では、かなり速度も出るのだろうな？」

「そうだな。軍艦だったら、全速力が馬の全力ぐらいかちょっと上……かな？」

確か、馬は最高速度が九十キロぐらい。

軍艦は、速い奴だと百キロぐらい出た……筈。

まあ、あたしの知識と、今の時代の常識じゃ違うんだろうけどさ。馬だって、サラブレッドみたいなのじゃないし。

「……凄いな。そんな船が一隻でもいたら、水戦にならん」

「そうね……」

呆氣に取られる二人。

「ただ、人力で動かす船は残っているぜ？　あたしも漕いだ事があるし」

「え？　なら綾子も、水軍経験があるって事？」

「違う違う。あたしの時代は平和だって言っただろ？」

「なら、どういう事だ？」

「いや、船ってもいろいろあるだろ？　この時代にも」

「それはそうだが……。漁船や渡し船の類か？」

「どっちも違うかなあ。池とか沼とかでよく見かけたんだけど、ボートって名前だな」

「暴徒？　随分、物騒な名前ね？」

「あ、いや、ボート。大きさはこんなもので、自力で漕ぐんだ。目的は……遊びかな？」

ジェスチャー混じりで説明するあたし。

言葉だけで通じない相手への説明って、ホントに大変だわ。

「うっぷ……」

いよいよ、長江に出て調練開始、となった訳だけど。
いや、揺れすぎだろこれ！

「ふふ、流石の綾子も、船には弱かったのかしら？」

「意外なところに弱点があったのだな、貴様も」

弱点とか、そういうレベルじゃないし。

「二人は平気そうだな……」

「当然でしょう？ このぐらいで船酔いしてたんじゃ、呉の将は務まらないもの」

「蓮華様の仰せの通りだ。それに、今日はまだ流れが緩やかだ、こんなもの揺れているとは言わん」

マジですか。

あたしも、この時代にだいぶ馴染んだと思っていたけど……。
こういう目に遭うと、まだまだもやしっ子だなあ、って痛感する
訳で。

「そんなんじゃ、後が大変よ？ 雪蓮姉様とか祭なんて、時化ている中で酒宴やるぐらいなもの」

「うへへ。それこそあり得ないなあ」

想像するだけで……また吐き気が。

「どうするのだ？ もし辛いのなら、陸に上がっても構わんぞ」

「いや……。それじゃ、折角乗せて貰った意味がない」

あたしは、懷を探り、袋を取り出す。

紐をほどいて口を開けると、独特の香りが鼻をついた。
さて、効くかなあ。

そう思いながら、中身を一粒つまんで、口に。

「綾子。何だそれは？」

「……………」

ジェスチャーで、ちょっと待てと訴える。

うう、酸っぱ。

……けど、少し楽になったかも。

「ふう。すまんすまん」

「いいけど。何を食べたの、一体？」

蓮華が、袋に顔を近づけた。

「う、酸っぱい。何これ？」

「食ってみるか？」

一粒ずつ、二人の手に置いた。

「これは……？ 梅か？」

「でも、梅の実にしては柔らかいわね……」

蓮華は、恐る恐る口に運ぶ。

一方、思春は一気に口に放り込む。

「うう、これ……」

「かなり、強烈な酸っぱさだな」

思春は顔色を変えずに食べてるけど、蓮華は……なんか、スッ○マンみたいな口になってるぞ。

「これ、何なの？ 梅の実ってのはわかるんだけど」

「梅干しさ。梅の実を塩漬けにした後で、天日干しにした保存食。酔い止めにも効くらしい」

イメージだけで作ってみたら、見事にカビだらけになったりしたけどな。

干している最中に雨に降られたり、色づけに使う赤ジソが売ってなくて探し回ったり。

けど、試行錯誤の末完成した奴は、マジで美味かった。

菖蒲に食べさせてみたら、涙目で逃げ回っていたけど……そんなものかねえ。

……ん、どうにか立てそうだ。

「無理しなくていいのよ？ 急には無理でしょう？」

「そうだぞ、綾子。生まれた時から水の上にいた、我ら呉の人間とは違うんだ。身体に慣れさせるにも、時間がかかって当然だ」

「そうかも知れないけどさ。けど、戦闘になったら、場所なんて選べないだろ？　なら、少しでも慣れておきたいんだ。もし良かったら、今日だけじゃなくて、しばらくこうやって乗せて欲しいんだ」

あたしの言葉に、蓮華と思春は、顔を見合わせた。

「……いいのか？　徐々に慣れる、なんて悠長な時間はないんだぞ？」

「わかってる。けど、少しでも差がつけば、完全に不慣れな魏の連中よりは有利だろうし。頼む」

「……如何なさいますか、蓮華様？」

「そうね。綾子の言う事にも一理あるわね……。思春、綾子に暫く、水軍の調練に同行して貰いましょう。雪蓮姉様と冥琳には、私から話しておくわ」

「わかりました。今日は一旦戻るが、明日からでいいな、綾子？」
あたしは、しっかりと頷いてみせた。

グラッ！

「おっと」

船の揺れに、あたしは思わずよろめく。

……ってここ、手すりないじゃん！

「うわわーっ！」

気がつくど、そこは空中。

で、そのまま長江にダイブ。

「綾子！」

「くっ！　船を止めろ！」

二人の声が聞こえたけど、そこまで。

てか、流れが、想像以上に速い。

こんなもん、泳ぎ切れば問題ないって思っていたけど……鎧が、あり得ないぐらいに重い。

解こうにも、紐が水を吸って固くなってるし。

切ったって、こんな状態で剣なんて抜ける訳がない。

くそっ……だんだん、力が入らなくなってきた。

溺れるなんて、あたしらしくない……。な。
意識が、だんだん薄れていく……。
……はは、このまま死ぬ……。かな？

〓七十三〓（前書き）

間が空いてしまい申し訳ありませんでした。

七十三

気がつけば、そこは見知らぬ天井。

……って、ベタ過ぎるお約束は置いといて。

つか、どこだよここ？

「お、気がついたか？」

桶を手にも、女性が部屋に入ってきた。

あれ、この人どっかで会った事があるな……。

しかし、誰だっけ？

あたしも、記憶力にはそこそこ自信はあるんだけど。

「食欲はあるか？」

「ええと……」

そう言われてみれば、空腹を感じるな。

「はい」

「なら、今粥を作るからな。もう少し、休んでいるといい」

女性は微笑むと、また部屋を出て行った。

うーん、めっさいい人っぽいぞ？

この世界に来て、いろんな人と知り合ったけど……どうして、名前が出てこないんだろう？

そうそう、持ち物の確認が必要だな。

青？の剣、倚天の剣、どちらも枕元に立てかけてあった。

鎧とか、あたしが着ていた服は……あ、陰干ししてある。

財布代わりの巾着とか、腰に下げていた水筒もある。

……あー、ケータイもあるけど、あれだけ派手に水に浸かったかなあ。

試しに電源を入れてみたけど、ウンともスンとも言わない。

流石にケータイシヨップはないし、ご臨終かねえ。

高かったのに、参ったなあ。

少しして。

もうもうと湯気を立てる土鍋を手に、女性が戻ってきた。

「お待たせ。起きられるか？」

「え、ええ」

あたしは身体を起こして、ベッドから出た。

「熱いから気をつけてな。味の方は、保証しないけど」

「はは、ありがとうございます。……あの」

「ん？」

「あたしを、助けてくれたんですよね？」

「ああ。長江を渡っていたら、ちょうど流れてきたんでな。一瞬、死体かと思ったけど」

「そうですか。ありがとうございます」

「いいって事さ。さ、冷めないうちに食べてくれ」

「あ、はい」

女性が茶碗によそってくれた粥を、レンゲで口に運ぶ。

かなりあっさり目、というか、ほとんど味はしない。この時代は、ホントに薄味だと思う。

つか、元の世界が塩分摂りすぎなんだろうな、きっと。

少なくとも、この食生活なら、高血圧とか脂肪過多にはならんな……多分だけど。

「どうかな？」

「ええ、優しい味ですね」

美味いとか不味い、とかを問うレベルじゃないし、そうとしか言いようがない。

ま、無難だとは思うけどさ。

「そ、そうか」

「ところで、一つ聞いてもいいですか？」

あたしは、レンゲを茶碗に置いた。

「ん？ 何だ？」

「……失礼かなとは思いますが。以前、どこかでお会いしません

でした？」

「……ハア。やっぱり、覚えてないか」

ガックリと肩を落とす女性。

「私、やっぱり影薄いんだな」

「いえ、忘れているあたしが悪いんです。気にしないで下さい」

「いいんだ、どうせ私は地味で普通なのさ……」

あらら、いじけちゃった。

「……すみません。お名前、教えていただけますか？」

「……ああ。私は公孫賛だ」

公孫賛って……あーっ！

「そうか！ 連合軍の時に」

「思い出してくれたか。そう、あの時軍議の席で一緒だっただろ？」

「……そうでした。袁紹に敗れたって聞いてましたけど、無事だったんですね」

「何とかな。桃香を頼って行ったんだけど……知っての通りで、また流浪の日々さ」

桃香……劉備か。

「ああ、今の私はもう、太守でも何でもない。だから、丁寧語は要らないぞ？ それに、お前さんの方が官位は上だしな。美綴將軍？」

「……なら、そうするけど。その將軍、ってのも出来れば勘弁して欲しい。なんか、違和感があってさ」

「ふーん、噂通りの人物のようだな。まあいいけどさ」

公孫賛って、随分気さくなんだなあ。

お陰で、あたしも話しやすく助かるけどさ。

「で。その美綴が、どうしてあんなところで溺れてたんだ？」

「船から落ちたんだ。呉の水軍訓練を見せて貰ってる最中に」

「へえ？ 天下無双のお前でも、弱点はあるって事か」

妙に感心したように、頷く公孫賛。

「別にあたしは天下無双じゃないけどな。でも、ホントにありがとう。助けてくれて」

「いって事さ。私も、ちょっとは世の役に立てた、って事だしな」
世の役って、ちょっと大袈裟すぎるだろ。

あたしはそんな大層な存在じゃないんだけどなあ……何か、過剰に思われている気がする。

「そうだ。蓮華達が探しているんじゃないか？ 連絡を取らないと」

「誰かの真名か、それ？」

「あ、孫権の事。きっと、あちこち……って、あのさ、公孫賛」

「何だ？」

「……ここ、どこなんだ？」

一番聞かなきゃいけない事だろ、これ。

どうも、まだ本調子じゃないな、あたし。

「武進の近くだ」

武進って事は……そんなに流されたって訳でもないのか。

「なら、すぐに建業に知らせないと」

「すぐには……無理かな」

「え？ どういう意味だ？」

「外を見ればわかるさ」

外？

あたしは部屋の窓から、外を見た。

……何、あれ？

ゴウゴウと、長江が音を立てている。

今までに見たことのない、とんでもない流れだ。

「お陰で、みんなここで足止めて訳。私は当てがないからいいけど」

「でも、何でまた。少なくとも、あたしが覚えている限りだと、こんなんじゃないかったぜ？」

「美綴が意識を失ってる間、だんだんこんな調子になってきたんだ。どうも、上流で大雨になったって話だ」

これじゃ、確かに渡るのは不可能だな。

いくら呉の水軍が猛者揃いでも、この中を進むのは無理だろうし。

……ヤバいなあ、もうじき華琳の軍勢だつて来るだろうに。
かと言って、空でも飛べない限り、どうしようもない。

あたしの四次元ポ○ットもどきのカバンは建業に置いたままだし、
あったところで、流石にタケ○プターもパー○ンのマントもないし
なあ。

つまりは、八方塞がりって奴。
ハア、参ったなもう。

翌朝。

体調が悪いわけでもなく、怪我もないあたし。
寝ているだけって、ぶっちゃけ無理。
なので、起き上がって村を散歩中。

つても、小さい村だし、あつという間に外れまで来ちゃったけど。

「ねーねー、お姉ちゃん？」

誰かに、袖を引っ張られている感覚。

見ると、小さな女の子だった。

「あたしか？」

「うん！　ねーねー、遊ぼうよ」

ニコニコと笑ってるけど……どこの子だろ？

「璃々々？　どこ行つたの？」

「あ。お母さん！」

どっかで聞いた声だなあ、と思っていたら。

「あら？　綾子様じゃありませんか？」

あのダイナマイトバディは……紫苑？

で、お母さん……って事は。

「この子、紫苑の娘さん？」

「ええ。申し訳ありません、娘がご迷惑をおかけしたようで」

「い、いや、いいけど」

「お姉ちゃん、お母さんのお友達？」

璃々ちゃんは、ジーツとあたしを見てくる。

「まあ、友達って言えば……そうなるのかな？」

「じゃあ、璃々ともお友達だね♪」

随分、人懐っこい子だな。

紫苑の人当たりの良さに似たのか、教育の賜物なのか。

よくわからんけど、思い切り気に入られたらしい。

「えへへ♪ お姉ちゃん、お名前は？」

「あ、えっと、あたしは美綴綾子だ」

「んーと、美綴綾子お姉ちゃん？ 随分、長いお名前だね？」

「綾子でいいよ。璃々ちゃん、でいいかな？」

「うん♪」

「もう……。本当に申し訳ありません、綾子様」

「いいって。ところで紫苑、どうしてこんなところに？」

「はい。曹操との決戦が迫っていると聞きました。及ばずながらお手伝いを、と思ひまして」

「そりゃ有り難いけどさ。よく、韓玄が許したな」

「ええ、それはもう。十分にお話しましたから」

……それって、拳で語れとかそっちじゃないだろうな？

紫苑、人当たりはいいんだけど押しは強いからなあ。

韓玄ってかなりのボンクラらしいから、紫苑がいないと政務も止まるだろうし。

まあ、困るのは韓玄だし、いいんだけどさ。

「でも、璃々ちゃんまで連れてくるなんて……いいのか？」

「だってー。お母さんと一緒にいいんだもん」

そう言って、膨れる璃々ちゃん。

……ヤバい、可愛すぎる。

「何度も言って聞かせたんですけど、どうしてもって言い張るものですから」

紫苑って、甘い母親には見えないんだけど。

「璃々ちゃん。わかってると思うけど、これから大きな戦があるん

だぞ？ 危ないんだぞ？」

「へーきだもん。お母さんは強いし、璃々、怖くないもん」

「こんな調子なんですよ。でも、璃々の言う事も、もっともだと思
い直したんです」

そう言って、紫苑は微笑む。

「今の孫呉には、数多くの将が揃っています。勿論、筆頭格は綾子
様でしょうけど」

「いやいや、武官なら恋とか星とか霰とかがいるし。軍師だって冥
琳に穏、亞莎、風達がいるだろ？」

「ええ。皆さん勿論、一角の人物ですわ。でも、皇帝陛下から直々
に將軍位を賜ったり、代理とは言え州牧を務めたり、それで孫策様
の信頼が一番厚い、というのは綾子様だけですよ？」

「う……。それを言われると、否定出来ないじゃないか」

「ふふ。否定なさる事はない、それだけの事です。璃々、この方
はね、本当に凄いのよ」

「えー？ でも、お母さんより強い人なんていないよ」

「そんな事はないわよ。それにね、強さというのは、武の腕前ばか
りじゃないの」

「……よくわかんない」

「今はそれでいいのよ、璃々。いずれ、あなたにもわかる時が来る
から。さ、お母さんは綾子様とお話があるから、近くで遊んでらっ
しゃい。あまり遠くに行かないようにね？」

「うん！」

璃々ちゃんは、元気に駆けて行った。

「はは、ホントに元気いっぱいだな」

「申し訳ありません、いろいろと失礼な事をしてしまっ

「子供はあれでいいんだって。いい子じゃないか」

「ありがとうございます。ところで、綾子様は何故此処に？」

まあ、当然聞かれるわな。

華琳との決戦を前に、一人でこんな場所にいるんだし。

「恥ずかしい話だけど、水軍の調練中に、船から落ちてな。そのま
ま、流された」

「そうでしたか、それは災難でしたね。お怪我はなかったんですか
？」

「ああ、それは何とか。公孫賛に助けて貰ったんでな」

「公孫賛様？……あの、元幽州牧の？」

「そうさ。袁紹に敗れてから、たまたまこの辺りにいたらしくてさ」

「では、今もこちらに？」

「いるよ。良かったら、会ってみるか？」

「ええ。お願いしますわ」

……で。

何故か、酒の席になってしまっていた訳だが。

紫苑が来た時点で、予想していなかったあたしが悪いのか？

「おい、美綴い。もっと飲めっ！」

「はいはい」

「さ、公孫賛様も。もつとぐつと」

「おお、話がわかるじゃないか、ひつく！」

こんな感じで、完全に泥酔状態だったりするんだが。

「だいたいだなあ、普通のどこが悪いっ！」

「いいえ、悪い事なんてないですよ。ねえ、綾子様？」

「そりゃそうだ。あたしだって、普通だと思うぜ？」

「嘘をつくにゃ！」
にゃ？

お前さんは美以か。

「わたひらってなあ、白馬將軍なんて呼ばれたもんにゃ。麗羽があ
んにゃ無茶しなければよかったのら」

「わかってますよ、公孫賛様」

「いいや、わかつれない。わたしは、白蓮にゃ」

「……さりげなく真名乗ってないか、それ？」

「いいのら！ お前らも、真名教えるのにゃ！」

その言葉に、思わず紫苑と顔を見合わせる。

「どうするんだ？ こんな状態で真名預かってても、覚えているのかどうか」

「そうですね。とにかく、どんどん飲んでいただきましょうか」

「あー？ またわたひを、普通と馬鹿にしたらろ？」

「してませんわ、そのような事。ささ、もう一献」

「おう、飲むのら。とことん、飲むろーっ！」

「仕方ありませんわね。お付き合いしましょう」

紫苑、顔が笑ってるぞ。

「綾子様も、どうぞ」

「お、おう……。紫苑、ほどほどにしてくれよ？」

「あら？ どうしてですか？」

「どうしてって……。あたしまで潰されちゃうって」

「こらー、美綴！ もっと飲め、どんどん飲めーっ！」

完全にスイッチが入っちゃってるというか……。よほど溜まっていたんだな、いろいろと。

「わかったわかった。だから、少し静かにしてくれ。な？」

「なんらとー？ 何がわかったのら？」

これ、大丈夫か？

こういう飲み方は、絶対身体に良くないだろうしなあ。

「綾子様。では、私が」

「ん？」

紫苑は腰を上げると、公孫賛の前に立つ。

「ちょっと、失礼しますね」

そして、そのまま彼女を抱き締めた。

「な、何をするのら！」

「いろいろと、ご苦労なさったようですね。母さんが、話を聞いてあげますよ？」

母さんって……まあ、実際母親だけどさ。

けど、今の公孫賛にそれ、通じるのか？

「……………」

「泣きたかったら、泣いていいのですよ？」

「う……ひつく、ぐすつ……。母様、わたしは、わたしは……」

「よしよし、いい子ですね」

優しく、頭を撫でていく。

「わたしだって、頑張ったのら。烏丸とも戦った、幽州の庶人を守ろうとした」

「ええ」「にゃのに、みんな普通だ普通だ、ばっかり。わたしだって、好きで普通になったんじゃないのら！」

「そうよね。人は生まれながらに定めがある……。だから、皆が一騎当千な筈もないし、才気溢れる訳でもないわ」

「……ぐすつ」

流石と言うか、泣き止んだみたいだ。

「……………」

「あら？」

「すう、すう……」

寝ちゃってるな、これ。

「ふふ、可愛い寝顔ですわね」

「とりあえず、寝台に運ぶか」

あたしは、公孫賛を抱えて立ち上がる。

「お一人で大丈夫ですか？」

「平気さ」

しかしまあ、ホントに軽いな。

もともと細身なんだろうけど、苦労して痩せたのかも。

ベッドに運び、布団をかけた。

「しかし、あの状態から宥めるとは。流石は紫苑だな」

「ふふ、母親なら誰でも出来る事ですわ。綾子様にも、いずれわかります」

「そうかな？ あたしにも、そんな日が来るかねえ」

あたしも、いつかは素敵な恋ができやいいんだけど。

「綾子様には、好いた殿方はいらっしゃらないのですか？」

好きな奴か。

……まあ、気になる奴はいたけど、競争相手が多すぎ。

遠坂との賭けがあるし、あまり悠長な事はしてらんないんだけど。

「今は、いないな」

「そうですか。でも、綾子様程の方と釣り合う殿方、なかなか難しいかも知れませんけど」

「おいおい。あたしは、そんな高望みをするつもりはないぜ？」

「でしたら、きっと素敵な出会いがありますよ。ふふ」

そう言えば、紫苑だって当然旦那さんがいた筈だよな？

聞いても大丈夫……かな？

「私の主人の事、お聞きになりたいですか？」

「え？ どうしてわかった？」

紫苑はニツコリ笑って、

「お顔に書いてありましたから。構いませんけど、その代わり、もう少し付き合ってくださいね？」

「へいへい。覚悟決めて飲むよ」

明日は二日酔い確定だな、これ。

七十三 (後書き)

章タイトル通りの展開になるのは、もう少し先かも……。

ゝ七十四ゝ(前書き)

久々にプチ無双話です。

七十四

「綾子お姉さま！」

案の定、二日酔いで寝ていたところに、誰かが飛び込んできた。

「いてて……ん？」

「良かった！　ご無事で！」

「どわっ！」

ダイブされ、そのまま抱き付かれた。

「明命？」

「もう！　あまり心配させないで下さいっ！」

「あ、ああ……わりい。どうして、ここに？」

「皆で手分けして、お探したんですよ？　そうしたら、お姉さまらしき人を見た、って情報が入って」

「……そっか。心配かけたな」

そんな明命の頭を、撫でてやる。

「はふう……。お姉さまあ」

……あんまし、妙な声を出すなよ。

誰かに聞かれたら、誤解されるぞ？

「あらあら、お邪魔でしたか？」

「うわっ！」

「はうあっ！」

ほら、紫苑に見つかった。

慌てて、飛び退く明命。

「おはようございます。綾子様に明命ちゃん」

「お、おはよ……」

「お、おはようございますっ！」

「朝食の支度が出来ましたので。召し上がりますか？」

「そういや、昨日は酒ばかりだったからな。」

意外と空腹を覚えていたので、あたしは起きる事にした。

……まあ、このまままでいたら、誤解されても反論できないしな。

「おはよー！ 綾子お姉ちゃん♪」

璃々ちゃんは、朝から元気だ。

……元気すぎて、頭に響くんだけど、流石にそれは言えない。

「おはよう……あたた……」

公孫賛も、やっぱり頭を抱えて姿を見せた。

「昨日はすまん。迷惑をかけたらしいな」

「いえいえ、お気になさらず。さ、公孫賛様も召し上がって下さい。

明命ちゃんもどうぞ」

「え？ 宜しいのですか？」

「ええ。その様子だと、朝食はまだでしょう？」

「はい……。綾子お姉さまを探すのに夢中で」

「ふふ、だったら一緒に食べましょう」

微笑みながら、紫苑は手際よく皿を並べていく。

「璃々、手伝って」

「うん！」

「あの、私もお手伝いします！」

紫苑はともかく、二人は流石に元気だ。

……あたしと公孫賛は、どう考えても無理だけど。

「何だ。美綴も二日酔いか？」

「まあね。アンタが酔い潰れてから、紫苑に付き合わされた」

「そ、そうか……。な、なあ。昨夜の事は……」

「公孫賛。誰だって、溜め込んだモノを吐き出す日があったっていいじゃんか」

「美綴……」

「だから、あたしも気にしないし、紫苑だってそうさ。な？」

「ええ、勿論ですわ」

「ねーねー、お腹空いたよー。早く食べようよー」

おっと、璃々ちゃんがご機嫌斜め、かな？

見ると、完全に仕度は完了のようだ。

「はいはい。じゃ、皆様もどうぞ」

「いただきます」

紫苑の手料理は、なかなか手が込んでいて、美味しい。

やっぱり母親なんだなあ、とつくづく実感させられる。

二日酔いではあったけど、その美味さにつられて、結構食が進んだ。

「うん、いけるな。私も、このぐらいの腕があればなあ」

そして、何故かまた凹んでいる公孫贊。

やっぱ、一朝一夕に自信を持って、って言っても無理か。

「……おかわり」

「あたしも、いいか？」

「はい。たくさん召し上がって下さいね」

そして、何だかんだ言いながら、黙々と食べる二日酔いコンビだったりする。

食事が済み、お茶を飲みながら、明命の報告を聞く事にした。公孫贊は気を利かせようとしたけど、そのまま残って貰った。璃々ちゃんは、つまらないだろうから、と紫苑が外に行かせたけど。

「ところで明命。みんな、と言ったけど。他の連中には知らせたのか？」

「あ、はい。綾子お姉さまに教えていただいた、狼煙を使いました」

「そっか。ホント、悪い事をしたな」

「いえ。でも、ご無事で本当に何よりです」

そう言いながら、チラチラと公孫贊を見る。

「あの、綾子お姉さま。この方は？」

「そういや、自己紹介してなかったか。じゃお互い、よろしく」

「え？ あ、ああ。私は元幽州牧の公孫賛だ」

「私は揚州牧孫策に仕える、周泰と申します。公孫賛様は、何故こちらに？」

「……いろいろあってな。流浪中にここで足止めされたんだ」

「詳しい事は追々でいいだろう。公孫賛は、流されていたあたしを助けてくれたんだ」

「そ、そうでしたか。お姉さまをお救いいただいて、ありがとうございます
ざいます」

深々と頭を下げる明命。

「いや、もういいって。礼なら、美綴から貰ったし」

「いえ。綾子お姉さまはこの孫呉にとっても、私にとっても、掛け替えのない御方なんです。こうして、無事なお姉さまにお会いできて、どんなに嬉しいかわかりません」

「そ、そうか。しかし美綴、本当に慕われているな。黄忠といい、周泰といい」

そんな、羨望の目で見られても困るぞ。

「公孫賛。ところでアンタ、当てはない……そう言っていたな？」

「ああ。漢王朝も瓦解しているも同然だし、元州牧って何の役にも立たないからな」

「なら、あたし達と一緒に建業に行かないか？」

「え？」

「私も賛成です。綾子お姉さまの命の恩人、このままお礼もせずには、孫呉の名折れです」

ああは言っても、明命は気が済んでないらしい。

それに、たぶん雪蓮も蓮華も、このまま別れたりしたら納得しないだろうな。

「それは、私に孫策に仕官しろ……そう言う事か？」

「いや、そんなつもりはない。勿論、公孫賛にその気があるのなら、あたしは喜んで仲介するけどな」

「……少し、考えさせてくれ」

「でも、建業には行かれた方がいいと思いますよ、私も。孫策様の性格からすれば、このまま公孫賛様が去ったりすれば、どこまでも追ってこられるかと」

紫苑、笑顔で脅すなよ。

でもまあ、実際そうなるだろうけどさ。

「わかったよ。けど、仕官するかどうかは別だぞ？」

「勿論だって」

「ありがとうございます！ お姉さま、そうと決まれば急ぎましよう」

「そうだな。今日中に建業に向かおう。紫苑も公孫賛も、いいな？」

「はい」

「任せるよ。私は見ての通り、身軽だからな」

で。

いざ出発、と村を出て数刻後。

「はあっ！」

「よっ、と」

何故か、紫苑と二人、弓を射まくり中。

その度に、的になった奴が一人、また一人と倒れていく。

「流石ですわね、綾子様。大陸一と呼ばれるだけの事はありますわ」

「そりゃ褒めすぎだって。紫苑の方が、よっほど凄いで？」

「お前ら、戦闘最中に余裕ありすぎだ、ふっ！」

そう言いながら、公孫賛は飛んできた矢を、剣で叩き落とした。

「公孫賛様！ 璃々を、お願いします」

「ああ、任せておけ！ 璃々、私から離れるなよ！」

「うん！」

しかしまあ、なんであたしはこう、トラブルに巻き込まれるかねえ。

村を出てしばらくして、

「綾子お姉さま。あの船、何かおかしいです」

って明命に言われて長江を見ると、確かに怪しい船がいて。

あたし達がいたのとは別の村に向かっていたから、急いで駆けつけてみると……。

これが、案の定湖賊だった訳で。

明命に、近くの呉軍に急を知らせるのと、村に危険を知らせるよう伝えさせた。

お陰で、あたしも公孫賛も、もう二日酔いなんて言ってられなくなった。

「綾子様。私達も、黙って見ている訳には参りません。戦いましょう」

紫苑は紫苑でそう言いながら、某忍者も真っ青なぐらいの速さで、次々に賊を射落とし始めた。

幸い、相手は大船団じゃないが、それでも数隻の船がいる。

全員が甲板に出てくる訳じゃないけど、上陸しようとすればどうしても姿を見せるしかない。

それをこうして一人ずつ、倒していつている訳だけど。

「しかし、キリがないな」

「仕方ないですわ。矢では船を沈める事は出来ませんし」

「火矢つても、用意しているヒマもないし。そもそも、ありゃ数を揃えないと燃え広がらないしな」

向こうからも矢は射かけてくるけど、揺れのない地面からのあたし達みたいに狙いが定まる訳じゃない。

それに、あたしはともかく、紫苑は大陸きつての弓の遣い手。

たまに飛んでくる流れ矢とかだけ避けていれば、あんまり怖くはない。

……まあ、揺れている目標に確実に当てている紫苑もあたしも、どうかしていると思うけどさ。

「見ろ！ 小舟が向かってくるぞ！」

公孫賛が叫んだ。

埒が明かないと思ったのか、数人が小舟に飛び移り、漕ぎだしてきた。

姿勢を低くしているの、こっちの矢が思うように当たらない。

「あたし達を直接、片付けようって訳か。公孫賛、璃々ちゃんを連れて、下がってくれ」

「どうする気だ？」

「あたしと紫苑で、食い止める」

「おい、いくら何でも無茶だろ？ 相手はまだ百人以上はいるぞ？」

あたしは紫苑と顔を見合わせ、ニヤリと笑う。

「紫苑。どうだ？」

「そうですわね。綾子様とご一緒なら、問題ありませんわ」

「な……。お前らって、一体……」

呆れ返る公孫賛。

「璃々ちゃん。このお姉ちゃんと一緒に、少しだけ向こうに行っているんだ。いいね？」

「でも、お母さんと一緒にいいな」

「璃々。聞き分けのない事を言わないの。綾子様は、あなたの為を思って仰ってるのよ？」

「後で、遊んであげるから。な？」

「本当？ 絶対、約束だよ？」

「ああ、約束するよ」

「うん、それならいいよ！」

そんな璃々ちゃんの頭を軽く撫でてから、

「じゃ、さっさと片付けて来ようぜ？」

「ええ。公孫賛様、よろしくお願いします」

「わかった。二人とも、無事に戻ってくるんだぞ？」

そう言う、公孫賛は璃々ちゃんを背負って走り出す。

さて、久々に暴れるか。

船から飛んでくる矢を避けたり叩き落したりしながら、あたし達は岸边にたどり着いた。

だいぶ、手持ちの矢がなくなってしまったな。

「紫苑。矢は全部、預けておく」

「はい。私は、援護に徹するのですね？」

「ああ。格闘戦は、あたしの方が向いているだろうしな」
「わかりましたわ」

その間にも、小舟との距離はみるみる縮まっていく。
見るからに人相の悪い男が……二、三十つてどこか。

「おい、見ろよ。女だぜ？」

「捕まえたら、たっぷり楽しませて貰おうぜ？」

「そうだな。俺達の邪魔をしてくれた札を、たっぷりとな」
全く、どうしてこういう連中って下衆ばかりなんだか。

小舟から聞こえてくる会話に、あたしは吐き気がした。

「紫苑！」

「はい！」

いくら低い体勢とは言っても、これだけ近ければあまり意味がない。

「ギャ！」

「わわっ！」

紫苑の矢が、一人、また一人と、長江へ賊共を叩き込んでいく。
まあ、川に落ちればまだいい。

小舟の中に倒れる奴が続出し、どうやらバランスが崩れたらしい。
一艘の小舟が、あっという間に転覆した。

それを見て、もう一艘が明らかに慌てている。

岸からでも、手が届きそうな距離まで来ているのに、仲間を助けるのか上陸するのか、判断がつかないらしい。

「綾子様！ 今です！」

「よしっ！」

紫苑の援護射撃を受けながら、あたしは一気に駆け寄った。

そのまま、無事な方の小舟に飛び乗る。

「こ、このアマっ!」

「ゲスにアマ呼ばわりされる謂われはない!」

舳先にいた奴を、斬り捨てた。

狭い船の上に、奴らは得物を手にする前。

義経じゃないけど、一方的に倒させて貰う。

……とは言え、足下がぐらつくから、あまり飛び跳ねられないけどな。

「舐めやがって!」

賊の一人が、大きなハンマーを振り下ろしてきた。

「あぶね! あたしを潰す気か!」

「当たりめえだ! 死ね!」

ブン、と大きな音を立てるそれは、避ける以外にない。

あんなモン、受け止めたら剣が折れるし。

……ん、待てよ?

「おりゃあっ!」

一撃を避けた後、倚天の剣でハンマーに斬りつけてみた。

スパツ、と音がしそうなぐらい、それは見事に真っ二つ。

流石は、岩を泥の如く斬ると言われる剣だな。

「な、何っ?」

「死ぬのはアンタだったな」

「ひ、ひいっ!」

怯えた男を、あたしは躊躇する事なく、突き殺した。

「ま、待ってくれ! 降参する!」

それを見た他の男達は、次々に武器を投げ捨てた。

「よし。なら、あのでかい船にもそう伝えろ。さもなくば」

「わ、わかった!」

慌てて、男達は大船に合図を送る。

「やりましたね、綾子様」

「そうだな。紫苑、助かったよ。ありがとう」

「いえ。ふふふ」

紫苑って、笑いもホント色っぽいよなあ。

「で、綾子と黄忠だけで、湖賊を打ち負かした……か」

「まるで母様みたいね」

わざわざ建業から駆けつけたのは、何故か雪蓮と冥琳。

君主と筆頭軍師が、救援とは言え自ら出てくるってのも大袈裟だよな。

……まあ、恐らく雪蓮が飛び出して、仕方なく冥琳が追ってきたんだろうけどさ。

「とにかく、みんなも村も無事で良かったけどね。思春、どう？」

「はっ。多少の手入れは必要ですが、使えそうかと」

転覆した小舟以外は、ほぼ無傷で手に入ったらしく、思春が調べていた。

「全く、我が軍の韓信殿は、相変わらずというか」

「……誰が韓信だよ、冥琳？」

「おや、違うのか？ では、樊カイ殿と呼びましょうか？」

「どっちも却下だ。ったく」

「でも、綾子にまた、新たな伝説が増えちゃったのは確かだけどね。

……あら？」

雪蓮の声に振り向くと、璃々ちゃんをおぶった公孫賛が、そこにいた。

「あなた……。確か」

「ああ。久しぶりだな、孫策。黄忠、この子はお返しする」

「ありがとうございます、公孫賛様。お礼ではないですが、今後は紫苑、とお呼び下さい」

「いいのか？」

「ええ。璃々の命の恩人ですもの」

「そ、そうか。なら、私も白蓮でいい」

そんな二人のやりとりを、雪蓮と冥琳は呆然と見ている。

「綾子。これ、どういう事？」

「……まあ、いろいろとな。それより公孫賛、建業には来て貰えるんだろう？」

「え？ あ、ああ」

「なら、行こうぜ。あんまり、ゆっくりしている時間もないだろうしな」

そう言って、あたしは公孫賛の肩を叩く。

建業に戻って、公孫賛の歓迎会。

……の前に、あたしは蓮華とシャオと菖蒲と刃霧と紅蓮と星と風に囲まれて、二時間説教を食らう羽目に。

途中で菖蒲は泣き出すし、散々だった。

……まあ、自業自得なんだけどさ、あたしの。

く七十五く（前書き）

三ヶ月近く更新が止まったままでしたが、お待たせしました。

七十五

説教と酒宴という、妙な取り合わせが済んだ翌日。

二つの知らせが、飛び込んできた。

一つは、華琳が許都を発ったとの知らせ。

もう一つは……。

「そう。陛下がねえ」

「やむを得まい。ある意味、必然とも言える事だ」

集められた将の前で、雪蓮と冥琳が感慨深げに話している。

献帝が、皇帝の座から下りると宣言したらしい。

で、後継者もないので、漢王朝はそのまま自然消滅。

そんなんありか、と思ったけど、今や何の実権もない国家が、存続する意義はどこにもなく、大きな反対も起きなかったって話だ。

勿論、漢王朝そのものの臣下は、いろんな理由で反対したらしいけど。

仕事がなくなるだけとか、特権がなくなるからとか、結局は自分本位な理由ばかりで、献帝の決意を覆せるようなモノはなかったみたいだ。

そう考えると、あたしのいた時代ってホントに恵まれていたんだなあ、って思う。

総理大臣や与党がどんなに失政をしたって、せいぜい首のすげ替えがあるぐらいで、国家がなくなる事はなかったからな。

それどころか、強制的に止めさせる方法がないのをいい事に、何時までもその椅子にしがみつくような奴もいたし。

まあ、あれは選挙で選ばれた、って建前があるからだろうけど……。

そして、最後の勅命が、華琳を魏王に、雪蓮は呉王に封じる、って奴だった。

……そうなる、あたしにくっついてた將軍位はどうなるんだ？

「とにかく、王になるのは悪い話ではない。曹操と、対等だと天下に公表されたようなものだしな」

「そうね。冥琳、ひとまず、体制を決めましょう。細かいのは後で決めるとしても」

「そうだな。綾子」

え？

いきなりあたしかよ？

「綾子は、征北大將軍に任じる」

学級委員か飼育係にでもされそうな気軽さで言われてもなあ。

名前からして随分大層な名前だなあ、って思ったら、

「つまり、北に対しての方面軍司令官、というところだな。綾子なら適任だろう」

「ちょい待て。まさか、あたしが華琳との戦い、指揮を執れ……と？」

「まあ、全部ではないがな。うちの王殿は、大人しくしている訳がない」

「うふふ、とーぜん。いくら綾子でも、全部は譲れないわ♪」

だろうな。

「じゃあ、あたしは何をすりゃいいんだ？」

「本当は、わたしが先陣に立ちたいんだけど、そうもいかないでしょ？ だから、綾子に先陣の全指揮を任せようって事」

「全指揮……？」

「そ。星、風、菖蒲、紅蓮は勿論だけど。紫苑、それから、この娘達も任せるわ」

雪蓮の合図と共に、連れてこられたのは……。

「朱里、それに雛里？」

「お久しぶりです、綾子さん」

「私達も、何かお手伝いがしたくって。それで、孫策様をお願いしましたんです」

「そりゃ有り難いけどさ。よく、劉備が許したな」

以前、二人に来て貰った時は、あたしから頼んだ。

けど、今回は二人の意思って事だろ？

「桃香様は、孫策さんと綾子さんに全てを託す、そう仰せでした」
「曹操さんが大陸の覇者となれば、今の自分でもいられなくなる、と。その為に、勝って欲しい……と」

「なるほど。むしろ、快く送り出してくれた、ってトコか」

「はい」

はわわあわわ言っているが、この二人の頭脳は紛れもない本物。風を信じていない訳じゃないけど、正直有り難いのは確かだ。

「よろしくな、綾子」

「ふふっ、役者が揃いましたわね」

「……ホントにいいのか、これみんなあたしの指揮で？」

趙雲に程立、徐盛、朱桓だけでも十分チートなのに、その上に黄忠、おまけに諸葛亮と鳳統とか。

何処のパワーアッ○キットだよ、これ。

「当然だろう？ 頼りにしているぞ、征北大將軍殿」

「あ、でも綾子がみんな倒しちゃ駄目だからね？ わたしが行くまで、主力は残しておく事。いいわね？」

逃げ道完全に塞いでくれたらしいな、これ。

……いいのか、ホントに？

決戦場は、合肥城付近になるだろう、というのが、軍師らの一致見解。

って事で、あたし達は先発して合肥城に入る事となった。

……結局、水軍の調練、役に立ちそうにもないな。

まあ、船から落ちた時点で、あたしには縁がない、としか言えないけどさ。

その前に、顔合わせを兼ねての軍議をする事になった。

「お姉さん。今更ですけど、筆頭軍師は風ですからねー」

「無論、主の檣はこの星ですからな」

……この二人がご機嫌斜めだったりするんだけだな。

本来、風はこの場にいない筈だし、星だって紫苑や朱里、雛里とは仲間だったんだろうけど。

つまりは、あたしの存在がみんなの運命を大きく変えちゃまってるって事。

「あのなあ。あたしはそういう事に順序をつけるの、好きじゃないんだって」

「はわわ、そ、そんなつもりはないんでしゅ……あう」

「あわわ、そ、そうでしゅ」

相変わらずカミカミだねえ。

って和んでいるのはあたしだけか？

「綾子、ここだったか」

と、白蓮がその場に入ってきた。

「悪いけど、今から軍議なんだ。話なら、後にしてくれないかな？」

「ああ、その事か。私も、今回の戦、加えて貰う事にしたんだ」

「あの、どういう事でしようか。白蓮さん？」

「朱里は知ってると思うけど、私はこれでも、騎馬隊の指揮には自信がある。だから、孫策に頼んで綾子と一緒に行く事にしたんだ」

「へ？　つまり、あたしの指揮下で動く……って事か？」

「そうなるな。改めてよろしくな、征北大將軍殿」

「……その呼び方は止めてくれ。あたし自身、むず痒くて仕方ないんだから」

「ははは、天下無敵の綾子も形無しだな。ま、そういう訳だから、軍議に加えさせて貰うぞ？」

そう言いながら、白蓮は椅子を持ってきて腰掛けた。

「じゃあ、始めるぞ。風、まずこの合肥についての説明を」

「御意ですー。ではでは、まずはこの地図をご覧下さいね」

あたしが持っている地図帳は、厳重に建業で保管されている。

……まあ、この時代に、あんな正確な地図がある訳じゃないんで、他国に知られたら大変な事になる。

一刀はどうやら、めぼしい物は持ち込んでいないらしいから、恐らく華琳のところにもない筈だ。

あれを見せた時の冥琳、いつになく顔色を変えていたからな。

とは言え、あると便利な代物、部分的に複写した物がここにあつたりする。

「巢湖の北岸に、この合肥城は位置していますけど、当然曹操さんから見れば、目の上の瘤な訳ですよ」

「確かに、あの一件がなければ、曹操が手放す筈ないもんね。城自体、相当手を加えているみたいだし」

あたしは、もう一度地図を覗き込む。

「しかし、こうして見ると……三方を囲まれる格好にもなるなあ」
もし、呉からこの城を攻めるとするなら、長江から巢湖に入って水軍で……しかなさそうだ。

ただ、紅蓮の言う通り、この城を築いた奴がかなりガチガチに防備を固めたらしく、あたしから見ても難攻不落、という印象がある。引き渡すにしても、ある程度破却してからでも良かったんだろうけど、全く手をつけた様子もない。

ま、セコい真似は華琳のポリシーに反するだろうし、あくまでも正々堂々、なんだろうな。

「でも、完全包囲される事はないでしょうね」

と、朱里。

「どうしてそう言い切れるのだ、朱里？」

「はい、星さん。そこが、魏軍の弱点でもあるんです。北方が基盤の曹操さんには、大掛かりな水軍がありません」

「黄河がありますから、皆無という訳ではありませんけど。そちらの船を此処まで運ぶ訳にもいきませんし。精々、近隣の漁船を徴発するぐらいでしょうか」

雛里が後に続く。

「南船北馬、って奴か」

「姉さん、なんだい、それ？」

……あれ、あたし何かおかしな事言ったか？

「風、わかるだろ？」

「確かに、そんな言葉がありますが。お姉さんはよくご存知ですねー」

「南は船が、北は馬が主な移動手段。大陸の特色を一言で言い表すとそうなりますな」

「ふふ、綾子様は博識ですわね」

「いやいや、あたし程度で感心していたら、氷室や遠坂なんて大変だぜ？」

「とにかく、完全に包囲される心配だけはないって事だな。ただ、数はまだ向こうの方が多いな」

「ですねー。だから冥琳さんは、決戦の場を赤壁と決めたのかと」

「つまり、私達は此処で魏軍を引き付けて、その間に本隊が準備を整える……と言う事でしようか」

「一旦魏軍が退いた事で、呉が体勢を立て直せたのは確かですが……それでも、国力の差は歴然としていますからね。周瑜さんが慎重を期すのも当然かと」

……つまりは、先鋒でもあるけど、かつ華琳を誘き寄せる役まで回された、って事かよ。

そりゃ、これだけのチートな面子揃ってるんだ、不可能じゃないだろうけど。

うーん、またしても責任重大だなこりゃ。

「で、魏軍が姿を見せるのは何時になるんだ？」

あたしは、紅蓮を見る。

「今のところ、三日後の予定みたいだよ。勿論、行軍速度を上げれば別だけど」

「それはないな。華琳は正々堂々がモットー……じゃない、主義だからな」

言ってる端から、風がメモ取ってるし。

またお姉さん語録が増えましたねー、と言わんばかりに嬉々とする

るのはやめい。

「確かに、この戦での勝者が、大陸の覇権を手にしますからね」

「焦って兵を疲弊させたり、そんなのは曹操さんには似つかわしくありませんね」

朱里と雛里、仲良く口を揃える。

「逆に言えば、此処に着くあたりで、魏軍の士気は高いまま、という事でもありますけどねー」

「何とか、それを少しでも挫いておきたいところだけど……。何かいい策はないか？」

あたしの言葉に、軍師三人は考え込む。

「……相手は、あの曹操さんですからね」

「小細工は通用しませんね。逆手に取られて、無用な被害を出しかねませんし」

「それに、稟ちゃんと苟？さんもいますしねー」

それはわかってるって。

あたしじゃ思いつかないから、聞いてみたんだけど……。

そう思いながら、みんなの顔を見渡す。

……ん？

ふと、白蓮と目が合った。

「……な、何だ？」

「……あ。そうだ、白蓮がいたじゃないか」

「私がどうかしたのか？」

「風、朱里、雛里。こんな事、思いついたんだけどさ」

話していくうちに、三人の顔つきも変わってくるのがわかる。

二日後。

夜を待って、あたしと星、白蓮は城を出る。

「しかし、思い切った事するな」

呆れたように、白蓮が言う。

「そうか？ あたしにしちゃ、悪くない策だと思うけどなあ」

「伯佳殿。主の無茶は今に始まった事ではござらんよ」

「……なあ、星。真名預けたんだし、字じゃなくてそっちで呼んで欲しいんだけどな？」

「おや、別に他意はござらぬよ。何となく、この方がしっくり来ましてな」

「うう、なんか差別されてる気がするぞ……」

あらら、いじけちゃったよ。

「それより、頼むぞ白蓮、星。この策、二人にかかっているんだからな？」

「お、おう」

「はっ」

「けどさ。本当に良かったのか？」

と、白蓮があたしの顔を見る。

「何がだ？」

「決まってるだろ？ 綾子は総司令官じゃないか。やっぱり、合肥にいるべきだったんじゃないのか？」

まあ、同じ事は他のみんなにも散々言われたけどな。

……ただ、なあ。

「ふふ、主にそれを言っても無駄でござるよ。菖蒲も紅蓮も風も、またか、という顔をしていたではありませぬか」

「あゝ、確かにな。紫苑も強く引き留めなかったし、朱里と雛里ぐらいだったな、あわあわしていたのは」

「それに、他人を危険に晒して、ご自分が安全な場所にいる事を嫌うのも主ですからな。尤も、主がそうやすやすと不覚を取とは思いませんが」

「それに、今回はどうしても将が三人必要なんだ。だから、この顔触れ以外にはあり得ないんだよ」

あたしが言うのと、白蓮は肩を竦める。

「星も大変だな。私なら、こんな主人に仕えたら身が持たないぞ？」

「はっはっは。これで存外、楽しいものですよ？ 伯佳殿にも、今にわかりましょうぞ」

「まったく、好き放題言ってくれるよな。」

そして、予定していた場所に到着。

「フフ、この風、この肌触りこそ戦争よ」

「いっぺん言ってみたかったんだよな、これ。」

……けど。

「主？ 誰の言葉ですか？」

「綾子。何だそりゃ？」

……やめときゃ良かった。

みんなが、明らかに引いているような気がするし。

元ネタが某太尉だなんて、言っても通じないしな。

「と、とにかく。ここからは手筈通りだ、頼むぞ？」

「おう」

「御意！」

合図と共に、軍が三つに分かれていく。

「周囲に、敵の間諜は？」

「はっ。何名か潜んでいるようですが、全て対処しております」

明命から借りた、間諜専門の兵が答える。

紅蓮を連れてくれば一番いいんだろうけど、そうすると合肥の守備が手薄になっちゃうし。

「おし。じゃ、行くとすつかね」

あたしは弓を手に、振り返る。

「いいか？ あくまでも今回は、敵の士気を挫くための作戦だ。無理はするなよ？」

「応っ！」

兵達が、抑えた声で応えた。

「じゃ、全員配置につけ！」

あたしの言葉を合図に、散らばる兵士。

さ、
いっ
ちよ
や
り
ま
す
か。

く七十五く（後書き）

最終話まで全部書いてから公開する予定でしたが、思いの外時間がかかりそうなので、書き上がった分だけ先に公開します。

「至誠一貫」の更新の合間に進めるため、もう少し完結までかかるかと思いますが、よろしくお付き合い下さい。

ゝ七十六ゝ（前書き）

ストックは2話のみです。
続きはできあがり次第公開します。

七十六

「んしょ、っと」

大木を登ると、月明かりのお陰もあって、だいぶ遠くまで見通す事が出来た。

持ってきた弓に、矢を番える。

真っ直ぐに放てば失速して落ちちゃうだろうから、空に向けて放つ。

……まあ、これで当たれば凄いかもな。

「っし、行け！ ファン〇ル！」

……言ってみただけだからな？

とにかく、あたしが射たないと始まらないって事で。

風切り音を立てて、矢が疾る。

やがて、

「ぐわっ！」

短い絶叫がして、人影が崩れ落ちる。

そこに慌てて駆け寄る人影目掛けて、あたしは次々に矢を放つ。

いやいや、全部命中とは……我ながら、チート過ぎるだろ。

「美綴様。上げますぞ？」

下から声がかかる。

「おう、いいぜ？」

あたしは、枝に縛り付けたロープをほどいて、引っ張った。

カラカラと音がして、滑車が回る。

洛陽で見つけて買ってみた奴だけど、木製の割に精巧でなかなか丈夫と来ている。

何でも、華琳の配下に、ドクター〇松みたいな奴がいて、そいつがあれこれと作っては販売してるんだとか。

ま、この時代にこんなモンがある事には、もはやツツコミする気力もないけどさ。

……で、こいつを使って、矢籠を引き上げてやろう、って訳。いくらあたしでも、大量に矢を背負って木登りなんて無理だしな。引き上げた籠を、そのままロープで縛り付けると、再度弓を構える。

三、四十人程倒すと、敵軍も動きが出た。

……まあ、この林に目をつけるよな、普通は。

数百の兵が出てきて、一列に並んだ。

そして、一斉射撃。

迂闊に近付かずに、飛び道具には飛び道具で、と言う作戦か。

もちろん、向こうにはこっちが見える訳がないから、当てずっぽうに射ってるんだろう。

まあ、あたしんトコの兵は全員、射程外にいるし、まさか相手が木の上にいるなんて思わないだろうし。

集団の先頭にいる奴目掛けて、矢の連射。

……ありゃ、外れた。

やっぱ、紫苑や祭さんみたいにはいかないか。

改めて一本だけを番えて、放つ。

見事に命中し、また一人倒れた。

「こっちだぞ！」

どうやら、今ので発射された方角を見極めたらしい。

盾を手に、数百の兵が向かってくる。

じわじわと、あたしとの距離が縮まっていく。

……と、その時。

不意にドドド、と音がして、その姿が消えた。

仕掛けておいた落とし穴に、上手くハマってくれたようだな。

「な、何が起きた？」

「い、いきなり地面が崩れて……うわっ、何だこれ？」

穴には油を撒いてあるから、そうそう簡単には上がって来られない筈。

……さて、悪いけど、こっちも作戦なんですね。

籠の中に一本だけ用意しておいた、鏃に布を巻いた奴を取りだし、火を付ける。

そして、その穴目がけて、放った。

「あ、熱っ！」

「ひ、火が！ 誰か、消してくれ！」

火達磨になった連中が、穴から飛び出してくる。

そのまま、自軍に向けて逃げ込んで行く。

あたしは、マグライトを取りだし、点滅させた。

待機していた兵が、その合図で動き出す。

あたし自身も、大木を下り始めた。

「騒ぐなっ！ それでも貴様ら、曹魏の精兵か！」

動揺する魏の兵達を、必死に誰かが叱咤している。

あの声は……たぶん、夏侯淵か。

冷静な将というイメージがあるんだが、彼女が率いていたにしては、よくこんな策に引っかけたなあ。

……ま、賽は投げられたんだ、やるきやないさ。

「美綴様。全員、配置につきました」

「……よし。全員、射撃用意」

「はっ！」

あたし達は、敵陣のすぐ近くで、全員が匍匐したまま、弓を手にしている。

出来るだけ目につかないよう、短弓を持たせた。

「……今だ、撃てっ！」

あたしの合図で、一斉に矢が放たれる。

「ぐっ！」

「うぎゃっ！」

かなりの至近距離からの射だ、ほとんど外れはない。

「か、夏侯淵様！ 敵襲です！」

「わかってる！ 各自、持ち場を離れるな！」

流石というか、彼女の一喝で、浮き足立っている魏軍が少し、落ち着いたように見える。

さて、こちらでも仕上げと行きますかね。

一本だけ残しておいたロケット花火に火を付け、空へ向かって打ち上げた。

ヒュルルル、と独特の音が、あたりに響き渡る。

「な、何の音だ？」

落ち着きかけた魏軍に、また動揺が走る。

「うおおおおおっ！」

そこに、喊声と共に、敵陣に突入したモノがある。

白蓮と、星の騎馬隊だ。

注意がこちらに引きつけられていたから、咄嗟に対処のしようがない。

「あたしらも行くぜ？」

「応っ！」

鬨の声を上げながら、敵陣へと突入開始。

完全に、魏軍は浮き足立っている。

「オラオラオラッ！」

ス〇ンドでも出せそうな勢いで、剣を振るう。

肉を断つ手応え、飛び散る血飛沫、断末魔の絶叫。

……人間、慣れって怖いよな。

あまりの凄惨さに、胃の中身を全部戻して祭さんに殴られたのが、遠い昔の事みたいだ。

「死ねえ！」

「おっと」

敵兵が繰り出した槍を抱え込んで、相手の喉を貫く。

「か、夏侯淵様！ 前方からも！」

「クッ……。退けっ！ 殿は私が務める！」

夏侯淵が、そう叫ぶ。

立て直しは無理、と判断したらしい。

いくら魏の兵士が精強だとしても、一度恐慌をきたすと手の施しようがないって事だ。

「美綴様！　そろそろ、頃合いかと」

「わかった。趙雲隊と公孫賛隊にも合図を出してくれ」

「ははっ！」

長居は無用、さっさと引き上げるか。

……と。

「ぐふっ！」

「ぎえっ！」

あたしの周りにいた兵士が数人、短く叫んだかと思うと、倒れた。
「どうしたっ！」

見ると、急所に矢を受けていた。

この状況で、こんな真似の出来る奴は一人しかいない。

そして、矢はあたしに向かってても飛んでくる。

全て剣で払い落とすが、狙いが正確な上、放たれる間隔がとても短い。

「美綴様！」

「どうした！　早く退け！」

「し、しかし……」

「ここにいたら、あの矢の餌食になるだけだ！　早くしろ！」

「は、はっ！」

慌てて、味方の兵が後退していく。

「そこにいるのは、美綴か！」

夏侯淵が、弓を構えたまま、じりじりと近寄ってくる。

「バレたか。久しぶりだな、夏侯淵」

あたしも、剣を構えたままで応える。

「見事にやられたな。お前が、呉軍の先鋒とは聞いていたが、まさか自ら夜襲とは。恐れ入るよ」

「ま、これがあたしのやり方なんでね。これは戦、悪く思わないでくれ」

「ああ。……だが、美綴。お前は逃す訳にはいかん」
冷たい声で、夏侯淵が宣言した。

「そうだな。あたしを討ち取れば、魏軍の士気も一気に上がるだろうな」

「いや、お前は殺さない。華琳様がお悲しみになる」

「……捕らえて、あたしを降伏させるつもりか？」

「そう容易いとは思わん。だが、華琳様はあの通りの御方、一度ご執心になると徹底されるのでな」

「だろうね。でも、あたしもこんなところでやられる訳にはいかないのさ」

そう言いながら、左手で、腰から弓を外す。

「夏侯淵。一つ、勝負しないか？」

「ほう。どんな勝負だ？」

「コイツで。互いに一矢だけ放って、それで勝負を付ける。どうだ？」

「……大した自信だな。私が、魏きつての弓使い、と知っての事だろうな？」

ニヤリ、と夏侯淵が笑う。

「だが、美綴。呉にも黄蓋、黄忠と揃っている中、お前の弓についての噂が絶えない。その腕前、見せて貰うと言うのも一興だな」

「そうしてくれ。もう、どちらも撤退はほぼ済んだ感じだしな」

あたしも夏侯淵も、周囲には数人の兵が残っているだけ。

ただ、このままここに残れば、魏の方は援軍が駆けつけるだろうな。

弓と、たった一本の矢だけを手に、相対する。

距離は、目測だけど三十五間（メートル）ほど。

有名な通し矢よりも更に距離を取るんだから、普通は相手に擦り

もしないだろうね。

……まあ、夏侯淵もそうだけど、今のあたしも十分普通じゃないんだけどさ。

「夏侯淵、準備はいいか？」

「応。何時でも良い！」

「わかった。じゃあ、三つ数えたら、始めようぜ」

あたしも矢を番え、射の構えを取る。

キリキリキリという音だけが、静まりかえった草原に響く。

「……三」

「……二」

「……一！」

弦を放れた矢は、まっしぐらに互いに突き進む。
そして。

カツン、と短い音がした。

矢は二人の中間点で失速し、地面に落ちている。

「……ウソだろ、おい？」

「……相討ちだな。ある意味」

あたしと夏侯淵は、互いの矢を拾い上げた。

矢同士が交錯するだけでもあり得ないのに……。

「鏃が、欠けているようだな」

「ああ。ホントに正面衝突した、って訳か」

「……とにかく、勝負は引き分けのようだ。美綴、早く引き上げろ」

「わかった。夏侯淵、この矢、交換しようぜ？」

「矢を？」

「そうさ。こんなモン、お互い見る機会はどうそうないだろう？
念に、な？」
記

あたしはニカツ、と笑ってみせる。

夏侯淵も、フツと表情を緩めた。

「うむ、良かろう。それから、私の事は以後、秋蘭で良いぞ」

「え？ いいのか？」

「華琳様も真名をお許しになっているのだろうか？　それに、武人としてのお前に、敬意を払いたいのだ」

「わかったよ、秋蘭。なら、あたしの事も綾子で」

「では、次は負けぬぞ。綾子」

あたしは頷くと、回れ右をした。

「退くぞ」

「はっ！」

最後まで付き添ってくれた兵を連れて、あたしは星達が待つ場所へと向かった。

「綾子！　無事だったか」

「全く、主は無茶ばかりなされる」

思い切り、呆れた二人に迎えられた。

「そう言うなって。二人とも、お疲れさん」

あたしは、白蓮を見て、

「どうだった？　久々の戦は？」

「そうだな。まだまだ、私もやれるって事はわかったよ」

実際、白蓮の指揮には一糸の乱れもなかった、と兵からの報告があった。

「星も、霞の特訓の成果、あったようだな」

「はい。次も、お任せあれ」

自信を取り戻した白蓮と、自信を付けた星。

この矢もそうだけど、得る物が大きかったな、今回は。

〓七十七〓 (前書き)

こっちも進めないと……という事で亀更新。

七十七

「うゝ、よく寝た……」

伸びをしながら、あたしはベッドから起き上がる。

殺風景な部屋にも、いい加減慣れた気がするな。

「……むにゃむにゃ」

「すうすう……」

前線の城なので、建業や襄陽のように、将ごとの部屋などを用意できる訳もない。

なので、一応城主でもあるあたしも、個室じゃなくて相部屋。そんな訳で、菖蒲と紅蓮が、並べたベッドの上で寝ている。

……星と風も譲らなかつたんだけど、全員は流石に無理だし。結局、あたしがあみだくじを作って決めさせた。

「綾子様……。お慕いしていますよ……」

「ふふふ、姉さん……。ボクなら、いいよ……」

……二人とも、物騒な夢を見ているらしい。

寝惚けたまま襲われたらかなわん、さっさと起きるとしよう。

「あら、綾子様。おはようございます」

部屋を出たところで、紫苑に出くわした。

「おっす」

「ふふ、よくお休みになったみたいですね。朝食、来ていますから食堂へどうぞ」

「あれ？ まさか、紫苑が準備を？」

「ええ」

「今の紫苑は将だろ？ そのぐらい、当番兵にさせてゆっくりしてりゃいいのに」

「いえいえ、毎朝の習慣ですから。こうしてないと、何だか落ち着

なくて」

うーん、母親の顔だねえ。

「紫苑。璃々ちゃんと会いたいのなら、今のうちに建業に戻ってもいいんだぜ？」

「……綾子様。お気遣いはありがたいのですが。今の私は将、綾子様をお手伝いすると言いつ出したのは私ですよ？」

紫苑は、笑みを消して言う。

「そりゃまあ……な。けど、いいのか？」

「璃々も、いつまでも私が傍に居る訳にはいかないでしょう。よく言い聞かせてきましたから、大丈夫です」

「そ、そうか……」

本人がそう言う以上、あたしとしては何も言う事はない。

……さっさと終わらせないと、この戦も。

と、背後でドアが開いた。

「ふあああ……。おはよう、姉さん」

「おはようございましゅ、綾子しゃまに紫苑しゃま」

紅蓮はともかく、菖蒲は酷い有様だぞ、おい。

「あらあら。二人とも、早く顔を洗ってらっしゃい。それから菖蒲ちゃんは、髪もどうにかした方がいいわよ？」

「……え？ あ、あわわわわっ！」

今頃慌ててるし。

「ったく。ホラ、行くぜ？ 朝食が冷めちゃうからな」

あたしは二人と連れ、井戸へと向かった。

城主の間つつーか、玉座に座るあたし。

……落ち着かねーな、どうも。

「では、始めましょうかねー」

進行役の風の言葉で、軍議開始。

「まずは紅蓮ちゃん。今の魏軍の侵攻は、どんな感じですかねー？」

「うん。姉さんが痛撃を食わせたせいもあって、かなり慎重になっているみたいだね。位置はこの辺りの筈だよ」

紅蓮が、地図の一点を指さす。

「此処までは指呼の距離ですね。曹操さんの軍なら、一気に寄せれば数刻、というところででしょうか？」

「遮るものがありませんし、もし伏兵を考えても無駄ですからね。恐らく、細作を繰り出しながら進んでくるとは思いますが、それでも明日には押し寄せてくるかと」

朱里と雛里の言葉に、皆が頷いた。

「この合肥城、元々は魏が呉に備えて築いた城ですよね。防備は固めたつもりですが、どうしても北からの攻撃にはやや弱い気がします」

「うむ。菖蒲の懸念通り、三方を敵に囲まれる事になるから……」
「となると、あまり城の防御力を当てにし過ぎるのは危険ですわね」
「かと言って、まさか打って出る訳には行きませんしねー。荊州や南蛮の全軍まで動員すれば、数の上では魏軍に対抗できますが、そうでもない限り、まともに正面決戦は無謀なだけなのですよ」

「うーん……」

何か、いい手はないかねえ。

ここを放棄して水上で待ち構える……いや、それじゃダメだな。

菖蒲の言う通り、この城は呉から見れば厄介な存在だ。

完全に破壊すりゃ違うかも知れないけど、あと一日で連中がやって来るってのに間に合う訳がない。

それに、荊州をこっちが抑えている以上、今の華琳には水軍なんて殆どないだろう。

誘い込むたって、引かかる確率は低そうだし。

かと言ってここに籠もって勝てるか、つてのもちよつと厳しそうだし。

あたしは、全員の顔を見回した。

星や紫苑、菖蒲は難しい顔をしているし、風は……あ、寝てやが

る。

「朱里」

「は、はひっ？」

いきなり名指しされたせい、朱里は素っ頓狂な声を上げる。

「何か、いい策はないか？」

「はわわわ、そ、そう仰いまして……」

そうは言うけど、何か思案がありそうな顔してるようにしか見えん。

それに、大軍相手に奇策を講じるのが諸葛亮じゃないか？

……ま、あたしのイメージだけどさ。

「そっか。お前さんなら何か思いついたと思ったんだけどな」

「……朱里ちゃん。綾子さん、お見通しみたいだよ？」

「ひ、雛里ちゃん……」

「朱里。今は皆、思案に困っているところだ。思うところがあれば、主に申し上げたらどうだ？」

雛里と星に促され、朱里は顔を上げた。

「策と言いますか……。本当、思いつきですけど」

全員、朱里の話に聞き入り始めた。

翌朝。

「美綴様。全軍の準備、整いました」

「うし、ご苦労さん。じゃ、手筈通りにな」

「ははっ！」

伝令の兵が一礼し、駆け足で去って行った。

「あ、あの……。本当に大丈夫でしょうか？」

朱里が不安げに、あたしを見上げる。

「大丈夫だって。元々は朱里の考えた策だろ？」

「それはそうですけど……。あうう……」

あたしはポン、と朱里の頭に手を置いた。

「はわわっ？」

「大丈夫さ。もし危なくなったら、あたしが何としても助けるからさ」

「綾子さん……」

頭を撫でているうちに、朱里の顔から不安の色が消えていく。

「あ、あの……。もう少し、撫でていただけますか……？」

「え？ 別にいいけど」

「はふ……」

風といい、菖蒲といい、そんなにあたしの手っていいのかね？

自分で自分を撫でてわからんしな。

「姉さん。そろそろだよ？」

おっと、紅蓮が迎えに来たようだな。

「じゃ、朱里。しっかりやれよ？」

「御意です♪」

御意はまずくねーか？

一応、朱里は劉備に従っているんだし……ま、いいけどさ。

そして。

いよいよ魏軍本隊のおでまし。

合肥城の前で、全軍が停止した。

城門の上では、朱里が一人、琴を弾いている。

そして、全部の城門は大きく開いたまま。

旗はやたらと城壁に立てているけどな。

「魏の兵は、驚いていますね」

「それはそうだろう、菖蒲。しかし主も朱里も、思い切った事をなされる」

慌てて、陣から人影が飛び出していく。

恐らく、周囲の伏兵を警戒しているんだろう。

さて、華琳はどう出るかな？

そんな事を思っていたら、陣の前に秋蘭が姿を見せた。

そして、朱里に向けて弓を構える。

……朱里は、何事もなかったかのように琴の演奏を続けているな。朱里に向け、秋蘭が必殺の矢を放つ。

狙いは正確、恐らくは朱里の眉間か胸に突き刺さるだろう。

……何事もなければ、な。

ガツン、と鈍い音がして、朱里の目の前で矢が弾かれた。

あゝ、秋蘭ビックリしてるわ。

今度は立て続けに矢を番え、連射してきた。

その都度、ガツンガツンと鈍い音がして、矢は空しく落下するだけ。

「うん、バッチリだな」

「綾子様、あれは何なのですか？」

「透明プラ板、って奴さ」

「透明ぷらばん、ですか……」

「今更驚く事もあるまい、菖蒲？ 主のいつもの奇術、それだけの事だろうが」

「は、はあ……」

奇術って言われると……まあ、そうか。

なんせ、あの四次元カバンから出ただけだし。

……どうせなら、『もしも○ボックス』とか『タケ○プター』でも出せるといいんだけど、流石に無理らしい。

朱里の周りに、箱形に組んだプラ板を立てただけなんだが、いくら秋蘭の弓が正確無比でも、あれを貫くのは無理だろ。

なんせ、事前にあたしと紫苑でテストして、完璧に防ぐ事は確認済みだしな。

……お、秋蘭の後ろから、誰か出てきたな。

ありゃ、夏侯惇か。

隣には許チヨもいるな。

と思っていたら……あらま、秋蘭の制止を振り切って、突っ込んできたな。

「……予想以上に、綾子様と朱里の策、見事に決まりましたね」

「流石は主ですな。では、皆に合図を」

……まあ、これはあたしのオリジナルじゃないんだけどさ。

しかし、この世界でも孔明は流石だね。

ちゃんと『孔明の罠』は思い付くんだからな。

……もつとも、琴の演出はあたしの趣味っつーか、お約束だけど。

華琳のトコに司馬懿がいなくてか、ここ漢中じゃないだろとか、そんなのは気にしたら負けって事で。

ただ、司馬懿は罠だと信じきって撤退したんだけど……いやいや、突っ込んでくるとはな。

城内に突っ込んできた魏軍は、何の抵抗もないので拍子抜けしたようにキョロキョロと辺りを見回している。

「か、夏侯惇將軍！ 本当に、誰もいないようです！」

「何だと？ そんな筈はない、探せ！」

「う、うわあああ！」

「な、何だこりゃ！」

お、一部で落とし穴に引っ掛かってくれたらしい。

広い通りはあちこち落とし穴だらけ、気がついた時には避けるのも厳しいかもな。

「お、おのれっ！ おい、諸葛亮を捕らえろ！」

「はっ！」

魏の兵士達は、夏侯惇の声に弾かれたように、城壁に取り付く。

「今だ！」

合図と共に、城壁の上に伏せていた兵が、一斉に立ち上がる。

油を撒き散らして登れなくなしたり、紫苑の指揮で矢を浴びせたり。

あつという間に、連中は大混乱に陥った。

それを見て、秋蘭が救援に向かってきた。

「星！」

「お任せあれ！」

それを、星の一隊が遮る。

「此処は通さんぞ、夏侯淵よ」

「くっ、趙雲か……」

いくら秋蘭でも、星相手では分が悪い筈。

「紅蓮、菖蒲！」

「了解！」

「はいっ！」

二人は、許チヨに当たらせる。

二対一なら、いくら許チヨでもそうそう勝てないだろうからな。

「うえー、なんでボクだけ……」

「悪く思わないでよ？」

「行きますっ！」

「季衣！ おのれ、貴様ら！ 卑怯だぞ！」

それを見て、夏侯惇が駆け寄ろうとする。

……では、行きますか。

「よっ。暫くぶりだな」

「み、美綴？ 貴様！ 総大将が何故ここにいる！」

「さて、ね。どうする、降伏するか？ もうだいぶ、アンタの兵にも被害が出ているぜ？」

「だ、黙れ！ ここで会ったが百万年、その首貰った！」

「……それを言うなら、百年目、だろ？」

「ええい、煩い！」

夏侯惇、勢い任せに大剣を振るってきた。

倚天の剣を抜き、受け止めるあたし。

ガアン、と派手に鋼同士がぶつかり、火花を散らす。

相変わらずの馬鹿力だぜ、いくら銘剣とは言え、よく剣が折れないモンだよ。

「どうした、そんなモンか？」

「ほざけ！」

ますますいきり立つ夏侯惇。

確かに強いけど……でも、恋には及ばないよな、やっぱ。

太刀筋が相変わらず見えてしまうあたしには、大した事ないと思えてしまう。

……ま、しばらく相手をしてやりますか。

七十八

七十合ぐらいは、打ち合ったかな？

「でりゃっ！」

少しもへばった様子がないのは、流石夏侯惇というトコ。

秋蘭は星に遮られて近づけてないし、許チヨは身軽な紅蓮と菖蒲相手に手こずっている。

その間に、紫苑が風と雛里の指示を元に、的確に敵兵を減らしていく。

朱里は……うん、無事に避難したみたいだな。

「さて、夏侯惇。そろそろ、終わりにさせて貰うぜ？」

「貴様！ 私を愚弄するか！」

「つーかさ、確かにアンタは強いけどさ。強いだけなんだよね」

「何だと！」

「悪いけど、恋は当然として、今のアンタ、星や霞にも勝てないって」

「ほざけっ！ その大口、叩けなくしてやる！」

やれやれ、猪だねえ。

あたしは青？の剣も抜き、構えた。

不思議と、剣の重みは感じない。

まるで、二本ともあたしの腕と一体化したみたいな、そんな感じさえる。

さ、ケリをつけますか。

「おりゃあ！」

渾身の一撃を、あたしはしっかりと受け止めた。

返す刀で……と思ったその時。

「グッ！」

不意に、夏侯惇が呻いた。

……左眼に、矢が突き刺さり、血を流していた。

「おい！ 大丈夫か！」

たった今まで一騎打ちをしていた事も忘れ、あたしは思わず声をかける。

「う、煩い！」

しかし、誰だ一体？

あたしが振り向くと……弓を手に、呆然と立ち尽くす魏の兵を見つけた。

夏侯惇がピンチと思って、援護射撃のつもりだったんだろうけど……狙いが外れたって訳か。

「姉者！」

「春蘭さま！」

秋蘭と季衣が、同時に叫ぶ。

「夏侯惇。その傷では、これ以上は無理だろ。帰って手当をした方がいいぜ？」

「み、美綴。情けをかけるつもりか！」

左眼を押さえながら、夏侯惇があたしを睨む。

「ああ。そんな手負いの奴に勝っても、あたしは嬉しくないし」

「これしきの傷なぞ……ええい！」

うひゃー、矢ごと左眼を引き抜いちゃったよ、この人。

「父母より賜りしこの眼、我が体内に戻すより他になし！」

そして、矢だけを抜き捨て、眼を飲み込んだ。しまった。

……当然、左眼のあった場所からは……うげ、グロテスク過ぎ。

しかし、かなり痛いだろうに全く泣き言を言わないのは流石、としか言えないわ。

あたしなら、絶対無理だね、うん。

「星、紅蓮、菖蒲、紫苑、兵を引け。これじゃ、合戦にならん」

「……そのようすな。やむを得ますまい」

星が槍を引くと、皆も各々の得物を下げた。

「秋蘭、許チヨ。夏侯惇がこうなった以上、停戦と行かないか？」

「綾子……良いのか？」

「秋蘭さま、どうしましょう……?」

「この先鋒、権限は全てあたしにあるんだ。何か言われても、責任はあたしを取る。だから、早く連れて帰って、手当てしてやった方がいい」

「……済まん。この借りは、必ず返すぞ」

秋蘭はそう言って頭を下げ、夏侯惇に駆け寄る。

「姉者、しっかりしろ」

「わ、私なら平気だ……。いいから、美綴を……っ!」

「莫迦を言うな! 皆、撤退だ!」

その言葉を合図に、魏兵は退き始めた。

「後は追わない、それは約束するぜ?」

「わかってる。綾子が約束を違えるような奴じゃない事は、私も信じている」

「ありがとう、姉ちゃん」

重傷を負った夏侯惇を抱え、秋蘭達は去って行く。

「宜しいのですか、綾子様。魏軍は戦意を喪失していましたし、降伏させる事も可能だったのでは」

「菖蒲ちゃん、それでは駄目ですねー」

「濡れ手に粟、で勝ちを得ても、綾子さんに取っては名誉にはなりません。それどころか、孫呉にも不名誉になってしまいます」

「それに、曹操さんは正々堂々を好む御方です。許貢の件を見ればわかります。敵失に乗じて夏侯淵さんや許チヨさんを捕らえたりしたら、今度は綾子さんが悪者になってしまいます」

と、我が軍師ーズの分析。

「ま、あたしの役目は十分果たしたし。朱里、ご苦労さん」

「い、いえ。ちょっと、怖かったでしゅ……あう」

相変わらず、カミカミの朱里だった。

「それで姉さん。これからどうするの?」

「一旦、雪蓮に状況報告だな。これは、あくまでも華琳と雪蓮の戦だしさ」

「そうですわね。此方も、全くの無傷ではありませんから、立て直しの時間も必要ですし」

「どうやら、意見も纏まったみたいだな。」

「じゃ、とりあえず一休みしようぜ。紅蓮、念のため、見張りだけは残しておけよ？」

「心得ているよ、姉さん」

その夜。

「やっほー」

「……全く。我が王はどこまでも世話が焼ける」

遊びに来た、というようにしか見えない雪蓮と、眉間を抑えた冥琳が、合肥城にやって来た。

しかし、王様がこんな気軽に、最前線に来ちゃっていいのかね？
……まあ、冥琳の様子を見れば、止めても無駄って奴なんだろうけどさ。

「雪蓮。まだお前さんの出番じゃない気がするんだけどな？」

「ぶーぶー。いいじゃない、別に」

「大人しくしている、という方が無理ではあるのだよ。この呉王殿はな」

相変わらず苦勞人ですな、周公瑾様は。

「ま、曹操との直接対決はもう少し後になるでしょうけど。今日は、ただ労いに来ただけよ」

そう言いながら、雪蓮の後から、兵士達が何かを運んできた。
って、酒かよ。

「はわわ、だ、大胆ですよ」

「あわわ、ま、まだ曹操さんが撤退した訳でもありませんけど……」

あゝ、この二人はまだ免疫がなかったっけ。

……逆に、免疫あり過ぎな奴は、目を輝かせているな。

「流石は雪蓮様、話がおわかりになる」

「ふふ、そうですわね」

星と紫苑は、いそいそと準備にかかっているし。

「と言う訳だから。綾子、付き合うわよね？」

「……どうせ、拒否権はないんだろ？」

「うん」

即答だよ。

「雪蓮がここに来た時点で、諦めるんだな」

「わかったよ。けど、兵達はどうするんだ？」

「私達だけ楽しんだら士気が下がっちゃうわよ。程々に許可って事でいいわ」

「へいへい。菖蒲、紅蓮。手配と、念のため警戒を頼んだぞ」

「綾子様、私もお供を……」

「そうだよ、姉さん」

「却下だ。つーか菖蒲と紅蓮、お前らはなるべく飲むな」

「はい……」

「はぁ……」

二人は、ガックリと肩を落とす。

「綾子。ちょっとかわいそうじゃない？」

「……いや、あいつらの酒癖悪過ぎだからさ」

「でもねえ。二人とも、半泣きしてるわよ？」

雪蓮の言う通り、二人とも眼がうるうるしてる。

菖蒲はともかく、紅蓮までその顔は反則だろ。

「わかったよ。酒はダメだけどさ……今度、お菓子でも作ってやるよ」

「え？ 本当ですか？」

「姉さんのお菓子？」

「ああ。それでよけりゃ、な」

お、水を得た魚みたいに元気になったぞ。

「お菓子ですか……。ちょっと、食べてみたいですね」

「そうだね、朱里ちゃん」

……ってそのはわわあわわ、何を期待してる。

「お姉さん、当然、風にも作って下さいますよねー？」

「……もう、わーったわーった。一人も二人も変わらん、食べたい奴はその時に来い！」

って、何をそこで手を挙げてやがりますか、孫伯符さん？

「じゃ、かんぱーい」

雪蓮の音頭で、一同、盃を合わせた。

「んー、今日のお酒はまた格別ね」

「確かに美味ですな」

雪蓮と星、互いに頷き合っている。

「……なあ、冥琳。この二人に、ツツコミ入れたら負け……だよな？」

「ああ。特に雪蓮には、な」

肩を竦めながら、冥琳は盃を干す。

「綾子……最近、冥琳に似てきたんじゃない？」

「……まあ、冥琳が頭を抱える理由は、よくわかるかもな」

「ぶー、ひっどーい。どう思う、星、紫宛？」

「それだけ、我が主も成長された、という証かも知れませぬな」

「そうですわね。初めてお会いした時よりも、随分大人になられたという感じは受けますわ」

「と言う訳だ、雪蓮。お前がいつまでも子供じみている、それだけの事のような」

「みんな酷いわ。少しは王を敬おうって気はない訳？」

「だったら、敬いたくなるような振る舞いをして欲しいものだな。なあ、綾子？」

「だな」

「ぐすっ。いーもんいーもん、どーせわたしは王らしくないですよーだ」

あらら、雪蓮の奴、枝で地面を弄り始めたよ。

「あらあら。雪蓮様、そう拗ねないで下さいな。ささ、お一つすかさず、紫苑が宥めにかかる。」

流石は母親、ドンぴしゃのタイミングだ。

「ところで冥琳。本隊の準備はどんな感じだ？」

「ああ。綾子が上手く時間を稼いでくれたお陰で、だいぶ整っては来た。ただ……」

「ん？ まだ何かあるのか？」

「いや。綾子の働きでだいぶ数は減らしたのだが……。それでもまだ、我が軍の兵力は魏には及ばんだ」

「……マジ？」

「勿論だ。それで、何か策を立てねばならんだ」
局地戦でいくら勝っても、大勢には影響がない。

今までの合戦とは、やっぱ訳が違う。

シミュレーションゲームじゃ、そこまでの再現は出来ないからなあ。
あ。

「でも、これだけ軍師が揃ってるんだ。いい策は出てくるんじゃないかね？」

「そう願いたいのだがな。とにかく、相手はあの曹操だ、迂闊な真似は出来んのでな」

「ちよっとお、めーりんに綾子。何そこで、真面目な話してるのよ！」

いつの間にか復活した雪蓮が、あたしに絡んできた。

「ふふ、確かに今は戦勝祝いの場か」

「そうよ。わかってるならめーりん、綾子を貸しなさい」
うーん、珍しく酔ってるなこりゃ。

「はいはい、御意ですぞ」

苦笑しながら、冥琳は立ち上がった。

「綾子。済まんが雪蓮の相手をしてやってくれ」

「冥琳は？」

「ふっ、軍師は気苦労性でな。思い立った事はすぐに実行しておきたいのだ」

「ん？」

「言っただろう、策を立てねばならんな。折角諸葛亮や鳳統、程立がいるのだ、相談しない手はなからう？」

あゝ、あの顔は何か思いついたんだな。

こういう時の冥琳は邪魔しないに限る。

邪魔する気は微塵もないけどさ。

「では主。改めて」

「ふふ。私にもお酌させて下さいね？」

「はいはい。なら、とことん飲むか？」

「そうこなくっちゃ。綾子、今日は寝かせないからね？」

「……雪蓮。他人が聞いたら誤解しそうな言い方すんな」

「あら？ わたしは別に構わないのよ？ めーりんとしてるんだし」

「だああ、いいから飲め！」

どうしてあたしにその気はないってのに、周りはこんなんばっかなんだよ……ったく。

だいぶ酒が進んだ頃。

「ねえ、綾子」

ポツリ、と雪蓮が呟く。

「何だ？」

「この戦いが終われば、大陸に平和が訪れるわね」

「まあ……だろうな。どっちが勝っても、な」

この世界では、蜀は国家として存在していないからな。

雪蓮は勝ったら、予告通り蓮華に王の座を譲るつもりだろう。

今の蓮華なら、この大陸を上手く治められる、あたしはそう確信している。

……もし、あたしらが負けて華琳が覇者となっても、庶民には悪

い世にはならないだろう。

「それでね。その後は……どうするの？」

「は？」

「綾子自身よ。戦いがなくなった後」

「あたし……か。わからん」

正直、そうだった。

そもそも、あたしはいつまでここにいられるのか。

今は止んでるけど、あたしを襲ってきた連中の正体も、まだ謎だし。

「約束してね。勝手にいなくならないって」

「そんなつもりはないけど」

「綾子にそのつもりがなくても、ある日突然……って事もあるわよ」
星と紫苑も、いつの間にか手を止め、雪蓮を見ていた。

「雪蓮。どうしたんだ、急に？」

「……勘よ。そんな気がするのよ」

雪蓮の勘、か。

……ホント、あたしは一体、どうなるんだろうな。

「主。私は、主に生涯お仕えすると決めたのですぞ。どこまでも追いかけますからな」

「あらあら、星ちゃんも言うわね」

「ふふ。わたしも、綾子と冥琳、二人とも逃がさないから。覚悟なさい？」

「はは……」

戦の最中とは思えない、静かな夜だった。

七十九

翌朝。

「大変だ、姉さん！」

血相を変えて、紅蓮が部屋に飛び込んできた。

「ふあああ……。どうしたんだ、一体？」

雪蓮がなかなか解放してくれず、寝付いたのは夜が白み始めた頃。

……ホントに戦の最中か、これでも？

ちなみにその張本人は、あたしの隣で思い切り夢の中だったりするけど。

つー訳であたしは絶賛、眠い。

「建業から、捕虜が脱走したらしいんだ」

「捕虜？」

「うん。それも、将ばかりだって」

なんか妙だな、それも。

蓮華がそんな手抜きをすることも思えないし。

「つーか、よくそんなすぐに知らせが届いたな？」

「ああ、姉さん発案の、伝書鳩って奴を使ったんだって」

あゝ、あれね。

確かにアイディア出したのはあたしだけど。

……にしても、ちよつと鳩、速すぎる気はするけどな。

突っ込んだら負けの気がするから、この辺で。

「で、誰が逃げたんだ？」

「えっと、蔡瑁に蔡和、蔡中、文聘、張允……ってところみたいだね」

「劉表軍だった奴らばかりだな。他には？」

「他にも何人かいたみたいだけど、無名の人ばかりかな？」

これ、何かあるな絶対。

……あ、もしかして。

「紅蓮。冥琳は？」

「もう起きて、朱里達と何か相談していたよ？」

「そっか。じゃ、あたしも起きるか」

「……ついでに、口も濯いだ方がいいよ。かなり、酒臭いから」

「はは……」

モンダ○ンとかブレ○ケアは、流石に四次元カバンにも入ってない……よなあ。

「おっす」

「お目覚めか、將軍殿？」

「お、おはようございましゅ」

あれ、冥琳と朱里だけか。

「珍しいな、朱里が雛里と一緒にやないなんて」

「雛里ちゃん、朝食の仕度してるんです。今日は任せちゃいました」

「そ、そっか」

鳳雛に朝食作らせるとか、ホント凄い世界だわ。

「で、冥琳。紅蓮から聞いたんだけど」

「ああ、捕虜の件だな。その顔は、気付いているようだな？」

「そりゃそうだろ。あんな顔して中座したんだ、タイミングが合いすぎだって」

「たいみんぐ？」

「で、お姉さん。それはどのような意味なのでしょうかー？」

風が、メモと筆を手に、いつの間にか背後にいたりする。

ったく、お前さんは忍者かよ。

「で、策ってのはわかったけどさ。なんで劉表んトコにいた連中ばっかなんだ？」

「むー。風は無視ですか、お姉さんは酷いお人なのです」

「あー、わかったわかった。意味は後で教えてやるから。冥琳、続けてくれ」

「うむ。まず、我が呉と魏、まだ兵数に開きがある事は言ったな？」
「ああ」

「となれば、やはり当初の予定通り、此方の得手、水戦に持ち込むより他はない。だが、今の魏には水軍がない」

冥琳は、あたしの反応を確かめながら話す。

ここまでの説明で、特に疑問はない。

「となれば、船の確保もそうだが、船の扱いに長けた人材を必要とする筈だ。劉表軍は、嘗て孫呉以上に隆盛な水軍を持っていた時期もある。特に、蔡瑁と張允がその中核だな」

「なるほどな。そいつらが脱走しても、荊州にはそのまま戻れない。となれば、華琳に保護を求めるしかない、か」

「そうだ。曹操としても、水軍の知識や経験が豊富な連中が一度に手に入るのだ。飛びつくのが自然だろう」

「でもさ。華琳だって無条件に人を信じる訳じゃないだろう？ 策だつて疑うんじゃないのか？」

「それなら、大丈夫だと思います」

と、朱里。

「根拠は？」

「はい。劉表さんのところにいた方々は、孫呉に敗れて捕虜になっていた訳ですから、当然恨んでいるでしょう。それをそのまま曹操さんに伝える訳ですから、調べたところで何も出てきません。真実なんですから」

は。

やっぱ軍師って奴は、考え方が違うねえ。

考えてみりゃ、あの赤壁の戦いでも周瑜と諸葛亮が知恵を絞って、曹操に勝ったんだから当然なんだろうけどさ。

「それにな、綾子。この策には、もう一つ手を加えてあるのだ」

「なんだ、まだあんのか？」

「ああ。それは、爆睡している呉王殿が起きてからにしよう」
そこに、エプロン姿の雛里が姿を見せた。

「あ、あの……仕度が出来ました。食堂へお越しくだしやい……あう」

何故そこで囁むかね、この娘は。

夕方。

明命が、合肥へとやって来た。

……ここ、最前線の城……だよな？

まあ、報告にやって来たんだけどさ。

それにしても呉軍の幹部、勢揃いし過ぎじゃね？

「じゃあ明命、蔡瑁達はそのまま長江を渡っていった訳ね？」

「はい、雪蓮さま。追わないのは不自然なので、祭さまが一応、追撃している振りを」

まあ、荊州に向かっても、霰や穩達が眼を光らせてるしな。

「後は、曹操が上手く引かかってくれる事を願うしかないわね。ところで、冥琳？」

「何だ？」

「……これ、どういう事かしら？」

雪蓮は、ポン、と竹簡を放った。

「……これが、どうかしたか？」

「どうした、ですって？」

キツ、と雪蓮は冥琳を睨み付ける。

「そこに何が書かれているか、声に出して読んでみなさいよ！」

「思春が捕虜逃亡幫助の罪で、将の地位剥奪の上投獄……これ正しいのか？」

冷静な冥琳の言葉とは裏腹に、あたしは思い切りフリーズ。

……いや、星も菖蒲も紅蓮も、皆驚いているぞ。

「思春がそんな事する筈がないのは、冥琳が一番良くわかってるじゃない？」

「私もそう思いたい、これは事実だ。だから、蓮華様が毅然とし

た態度で……」

「そういう問題じゃないの！ 策にしても、ちょっとやり過ぎだつて言いたいのよ！」

雪蓮は、拳で机を激しく叩いた。

反動で、載せられていた茶碗が弾かれ、床で碎け散る。

「思春が今まで、呉にどれだけ貢献したか、わかってるの？」

「無論だ。武にも優れているが、蓮華様に対する絶対的な忠誠。あれは誰にも引けを取らん」

「それがわかつているなら、いくら策でもこれはないわ。冥琳、あなたそれでも血が流れているの？」

「……雪蓮、それはどういう意味だ？」

「そのままよ！ わたしが言いたいのは、やり過ぎだって事。それに、どうして呉王であるわたしに、何の相談もなかったのかしら？」

「酒を食らっていた御方に、そのような事を言われる筋合いはないな」

「何ですって？」

「大体、私は大都督。このような策も含め、全般をお任せいただけるものと思っていたがな？」

「……言ったわね。わたしの信頼を笠に着て、それで増長したって訳ね？」

冥琳と雪蓮の言い争いは、どんどんヒートアップしていく。

朱里と雛里ははわわあわわ言ってるし、明命や菖蒲らはおろおろしてるし。

星とか紫苑たちは厳しい顔だし、風は……あ、寝てやがる。

……ハア、あたしが仲裁しないとダメか。

「あのさ、二人とも。ちょっと落ち着けて」

「……綾子、黙っていて。これは王としての沽券に関わる事よ」

いっぴになく、冷たい雪蓮の声。

「雪蓮。お前は言った筈だな、私と綾子、どちらも自分に欠かせない存在だと」

「ええ、言ったわ」

「なら、その私のする事を、何故信じない？ 蔡瑁らを逃がしたただけで、曹操が信用するとも思っているのか？」

「そうね、それは冥琳の言う通りかも知れない。でもね、私が言いたいのはそこじゃないの」

二人とも、一步も譲る気配がない。

なまじ親友だけに、こうなると余計に厄介かも。

「思春は、呉に取っても大事な将よ？ 策に使うなんて、あり得ないわ」

「雪蓮。情に流されるとは、それでも王か？」

「ええ、王失格大いに結構よ。でもね、勝てば何をしてでも許される、そんな冥琳も大都督失格よ？」

「聞き捨てならんな。この呉に、私の代わりが務まるような人物がいるとでも？」

「ええ、いるわよ。あなたの目の前にね」

……は？

って、あたし？

その場の全員の視線が、あたしに集まっていた。

「明命。今の呉で、綾子に武で勝てる将がいると思う？」

「え、ええと……。恋さまぐらいでしょうか」

「そうね。じゃあ菖蒲、ここまでで軍を率いて一番功を上げているのは誰？」

「……綾子様、だと思います」

「なら、そこで寝たふりをしている風。わたしや蓮華を除いて、人望を集めているのは誰かしら？」

「おおー！ つい陽気に誘われてしまいましたー。ええと、やはりお姉さんかとー」

「そ。朱里と雛里から見て、知勇兼備の将で、綾子以上の人物は心当たりがあるかしら？」

「はわわ、そ、そんな人物、いる訳がありません」

「あわわ……わ、私も朱里ちゃんと同じです……」

雪蓮は満足げに頷く。

……って、何だこの流れ？

「聞いての通りよ。……周公瑾、あなたは大都督の身分とわたしの信頼をいい事に、やり過ぎたのよ。大切な将を、策とは言え、わたしの許可なしに処分した事は赦せないわ」

「……つまり、私はお払い箱、そう言いたいのだな？ 孫伯符殿」

「ま、待て二人とも！ 早まるな！」

「いいえ、もう結論は出たわ。美綴綾子、あなたを今から呉の大都督に命ずる。周公瑾はその任を解き、当面の間、謹慎を命ずる」

毅然と、雪蓮が言い放つ。

「後悔するぞ、孫伯符殿？」

「……連れて行きなさい」

そう命ぜられた兵達も、事態の急展開ぶりに戸惑っているが、

「何をしている、早くせよ！」

「は、はっ！」

雪蓮の一喝に、慌てて動き出した。

「失礼します、周瑜様」

「お、おい」

「綾子。いくらあなたでも、こればかりは認めない。王の命令は、絶対よ？」

あたしが呆然と立ち尽くす中、冥琳は連行されていった。

明命だけを連れて、あたしは城壁に登った。

日は傾き始め、辺り一面が、オレンジ色の世界だった。

「明命。雪蓮の話は、ホントなのか？」

「……はい。思春さまは、冥琳さまの命で現在も、牢に入られています」

「よく、蓮華が止めなかったな。いや、止めたんだろうけど」

「……冥琳さまが、断固たる措置を執るように、と。王族ではありますが、今の蓮華さまには、冥琳さまに命令を下す権限がありませんでしたから」

雪蓮のあの調子だと、思春はすぐに牢から出されるだろうけど。

ただ、そうなると今度は姉妹で喧嘩になるかも。

「それで。思春は罪状を認めたのか？」

「そのようです。蔡瑁らはかつての同僚、いつまでも獄に繋いでおく事は忍びなかった、と」

……もう、何が何だかわからん。

思春は言い訳をするような奴じゃないから、沙汰には従うだろうし。

蓮華は直情型、芝居には向いてないしなあ。

「なあ、明命」

「何でしょうか、綾子お姉さま」

「……あたしに、大都督なんて務まると思うか？ ああの周瑜の代わりだぜ？」

都督は、軍司令官の事らしい。

しかも、その頭に『大』がつくという事は、つまり最高司令官って事。

今のあたしは、雪蓮に次ぐ地位と権力を手にした、って事になるらしい。

……実感がないし、そもそもちつとも嬉しくない。

「綾子お姉さまと冥琳さま、どちらが凄いか上とか、そんなのはわかりません」

「……だよな」

「でも……。雪蓮さまも、綾子お姉さまを信頼しているからこそ、お命じになられたのだと思います」

「信頼と、適任は別。そうじゃないか？」

「そうかも知れません。でも、私は綾子お姉さまが相応しくないと

も思いません」

明命があたしを見る眼は、真剣そのものだ。

「とにかく、魏に勝つ事だけを考えましょう。……それさえ終われば、きつと……」

「……ああ」

湖上を吹く風が、明命の黒髪を揺らしていく。

「にゃー」

と、どこから紛れ込んだか、一匹の猫が姿を見せた。

「ふふ、お猫様も、綾子お姉さまの事を認めておいでですよ？」

「はは。……ほら、チチチチ」

指を差し出すと、猫はフンフンと匂いを嗅ぎ、そのまま擦り寄ってきた。

……しかし……どうなるんだろうな、ホント。

〽七十九〽（後書き）

すっかり隔週更新になっていますね……。

この三連休も月曜以外仕事だったりしまして、なかなか時間が取れません。

次話も少し間が空くかもしれませんが、どうぞご了承下さい。

ゝ八十ゝ (前書き)

このペースだと百話超えるかも……。

八十

「じゃ、始めてね？」

「……なあ、マジであたしが？」

「何度も言わせないの。大都督はあなたなんだからね？」

うー、満面の笑顔で言いやがるよこの王様。

「そうは言うけどさ。あたし、冥琳から何も引き継いでないぜ？」

いきなり言われても何すりゃいいのかわからん」

「あ、それなら大丈夫。亞莎、いいわよ？」

「は、はい。失礼します」

おいおい、気軽に将を前線に持って来すぎだっつーの。

「亞莎。冥琳の傍にずっとついていた事、無駄にしてないわよね？」

「ひゃい！　だだだ、大丈夫です……多分」

……不安だ。

「ま、そういう事よ。わからない事は亞莎に聞けばいいし、もともとあなたには風、朱里、雛里とついているのよ？　それでもまだ不足かしら？」

「なあ、やっぱり冥琳を元に戻せないのか？」

「それは、駄目」

雪蓮は、表情を消した。

「王の決定は絶対よ。いくら冥琳と言えども、それは例外じゃないの」

「意地張るなって。ちよつとの行き違いだったのかも知れないけどさ、冥琳抜きでこの劣勢をどう覆す気だ？」

「そこを何とかするのが大都督の役目じゃない。綾子、期待してるわよ♪」

無茶振りもいいとこだぞ、おい。

「あ、そうそう。大都督って事で、武官もここにいる人以外、綾子の好きに動かしていいからね。ただし、荊州は一応そのまま、あと

山越の動きも警戒しないといけないから、蓮華と祭も外してね？」

「……なんか、ほとんど退路が断たれている気がするんだが」

「全部決定事項だからね。勿論、わたしも戦わせてね？」

あたしの脳内で、アスキーアートキャラが踊り始めている。

……ホント、どうしてこうなった？

軍議の後、あたしは冥琳の様子を見に行く事にした。

謹慎、とは言うけど、実際は軟禁に近いものらしい。

いくら何でも、そこまでするか、つてのがあたしの正直な気持ちだ。

「美綴様。申し訳ありませんが、此処から先は何人たりとも通すな、と孫策様の厳命です」

冥琳の部屋近くで、あたしは兵士に行く手を遮られた。

「……あたしは大都督。つまり、お前らの上官だな？」

「はい」

「なら、上官の命には絶対服従。それが、軍隊って奴じゃないのか？」

こういう権力を笠に着るやり方は好きじゃないんだけど、この際仕方ない。

「し、しかし……」

「王の命が絶対だ、それもわかる。けど、雪蓮はあたしに全権を与えたんだ。だったら、どっちの言う事を聞くべきか……わかるだろうか？」

「お、おい。どうする？」

「そ、そう言われても……」

二人の兵は、思い切り困惑している。

あたしだってこいつらを困らせたくはないが、どうしても一度、冥琳とは話しておきたい。

「雪蓮の命は、お前達にここを誰も通すな。そうだな？」

「え、ええ」

「……なら、あたしの命令だ。この場を立ち退け」

「そ、それは出来ません！」

「んー？ だってさ、この場を一步も動くな、そんな命は受けてないんだろ？」

「それはそうですが……。しかし、それでは」

ま、屁理屈って奴だな。

「なら、ちよつとだけ、他の場所にいて貰うぜ。……星、明命」

「はっ！」

「はいっ！」

物陰にいた二人が、素早く飛び出す。

「ぐげっ！」

そして、得物で兵の鳩尾を突き、気絶させた。

「二人とも、流石だな」

「主の命ですから仕方ありませんが。少々、強引では？」

「そうですよ。雪蓮さまに知られたら、大変ですよ？」

「ま、そんな時はそんな時さ。それより、見張りを頼んだぜ？」

そう言い残し、あたしは冥琳の居る部屋へ。

ドアをノックすると、

「誰だ？」

訝しげな、冥琳の声が返ってきた。

「あたしだよ。入っていいか？」

「……綾子か。いいぞ」

部屋の中は、膨大な書物で埋め尽くされていた。

「な、何だこりゃ？」

「仕方なかろう？ 軟禁されていて、する事が他にないのだ」

そう言いながら、冥琳は溜息をつく。

床には反古つつーか、落書きが散乱している。

「しかしまあ、凄い量だな？」

「そうか？ 建業の私の部屋には、この数倍の書物があるぞ？」

「……はあ。やっぱ、冥琳とあたしじゃ、格が違い過ぎる」

「しかし、良いのか？」

「え？」

「私は雪蓮に任を解かれ、こうして軟禁されている身だ。その私に会いに来て平気なのか？」

「多分、つーかヤバいだろうな」

「……ならば、何故来た？」

冥琳は、あたしを軽く睨む。

「だってさ、あたしら友達だろ？」

「……………」

「友達に会うのに、理由なんているか？」

「……本気で言っているのか、綾子？」

「ああ」

「……ぷっ」

冥琳が、噴き出した。

「全く、おかしな奴だな。何の利もない事で、わざわざ無茶をするとは」

「何だよ。折角人が心配して来てやったのに」

「ああ、悪い。しかし……ぷっ」

また噴き出してゐるし。

「ったく。……けど、思っていたよりも元気そうだな」

「ふっ、私が落ち込んでいるとでも思ったのか？」

ニヤリ、と冥琳が笑う。

「普通の神経なら、ショック……いや、衝撃を受けて当然だろ？」

「確かに。権力という奴は、一度手にすると手放すのが惜しいという輩も多い」

「それもあるだろうけどさ。確か、雪蓮と冥琳は、『断金の交』って奴を結んでいるだろ？」

「流石は綾子、知っていたか」

冥琳は感心したように頷く。

「……その二人が、こんな風に喧嘩する事自体、あたしにはまだ、信じられないのさ」

「……そうか」

「なあ。もしかして、これも策なのか？」

「……………」

「今、ここには誰も居ないぜ？ ホントの事、話してくれないか？」
けど、冥琳はただ、頭を振るばかり。

「冥琳！」

「……済まんが、話す事は何もない。帰ってくれないか」
そう言って、冥琳は眼を伏せる。

「何者！」

廊下で、星が叫んだ。

あたしは、慌てて飛び出す。

「どうした？」

「主、曲者ですぞ！」

曲者？

「明命は？」

「は、逃げた曲者を追って行きました」

そう言いながら、星は槍を振るっている。

……………」

あたしは咄嗟に屈むと、頭上を何かが通り過ぎていった。

ガチン、と音がして……うわ、忍者のくくないみたいな武器が壁に
食い込んでるよ。

「星、何人かは生かして捕らえろ！」

「御意！」

とは言うものの、意外と数が多い。

あたしは青？の剣を抜き、手近な敵に斬りつけた。
「たあっ！」

「ぎゃっ！」

どうやら、腕は大した事はないようだ。

……まあ、今のあたしは、そんじょそこらの奴にはやられそうにもないけどさ。

そこに、ドカドカと足音が近づいてきた。

「綾子様！ 何事ですかっ！」

「姉さん！」

菖蒲と紅蓮が、騒ぎを聞いて駆けつけてきたらしい。

「まずい、退けっ！」

残っていた連中が、慌てて逃げ出そうとする。

「逃がすか！ 捕まえろ！」

「応っ！」

こうなれば、多数に無勢。

勝負は、程なくついた。

……ただ、曲者全員が、斬り死にするか、もしくは自殺しちまっ
て、生存者はゼロ。

「明命、そっちは？」

「はい……。何人かは生け捕りにしようとしたのですが、抵抗が激
しくて無理でした」

「しかし、何者でしょうか。主を狙った訳ではないようですが」

兵士達が、死体の懷に手を入れたり、着物を脱がせたりし始めた。
何か、正体を知る手がかりがないか、調べているらしい。

なんか追い剥ぎみたいで、見ていてあんまし気持ちのいい光景じ
やない。

明命と紅蓮も、それに加わって死体を調べ出した。
そして、

「何か、束帯に縫い込んである感じがしませんか？」

「うん。よし、外してみよう」

二人は、ベルトを外し始めた。

小刀でそれを裂くと、中から何やら、紙片が顔を覗かせた。

「嚴重に、蠟で封がしてありますね」

「切らないように、そっと剥がそう」

他の兵士達の方は、どうやら空振りだったらしい。

「みんな、ご苦労さん。死体を片付けてくれないか？」

「ははっ！」

再び動き始めた兵士を横目に、あたしは紅蓮の手許を覗き込む。

「どうだ？」

「もうちょっと……よし、剥がれた」

だいぶしわしわになっていたけど、文字は問題なく読めそうだ。

……で、読み進めている二人の顔が、みるみる青ざめだした。

「……これは……」

「……そ、そんな……何かの間違いです！」

「何を書いてあるんだ、一体？」

あたしは、紅蓮の手から紙片を取り、広げた。

「……は？ これ、何のギャグ、いや冗談だ？」

「主、如何なされた？」

「星、読んでみる」

「は。……こ、これは……曹操殿からの密書……？」

華琳の字を見た訳じゃないし、あたしは鑑識でも筆跡鑑定家でもないから、本物かどうかはわからないけど。

「『かねてからの申し出通り、貴公の我が方への帰順を心待ちにするものなり。共に天下平定と庶人の安寧の為に、合力を切に願う』

……と書かれていますな」

「そ、それって内通者が居るって事ですか？」

「可能性はあるね。恐らく、その人物に書状を届けるのに、攪乱で人数を出して騒ぎを起こさせて、その間に……とかね」

菖蒲も紅蓮も、考え込んでしまう。

「ですが、ここまで手が込んでいると、逆に謀略の可能性もありますよね」

「明命の言う通りだな。この密書が、誰宛なのかにもよるが……」

「見当ならついているわよ？」

いつの間にか、雪蓮までその場にやって来ていた。

「どういう事だ？」

「決まってるじゃない。……それ、冥琳宛よ」

「……は？」

雪蓮の言葉に、あたし以下その場の全員がフリーズ。

「だってそうじゃない。元劉表の配下を逃がしてみたり、思春を投獄してみたり。その上大都督の地位まで剥奪されたのも。動きが怪しい上に、わたしや呉を恨んでいても当然でしょ？」

「お、おい。いくら何でも飛躍し過ぎだろ、それ！」

「そうですよ、雪蓮さま。冥琳さまに限って、そのような事は」

「綾子、明命。あなた達の気持ちはわかるけど……これは、事実よ。それに、わたしの勘がそう告げているの」

そう言われると、誰も否定出来なくなる。

雪蓮の勘は鋭いつつーか、一種の超能力に近いからな。

……けど、冥琳がそんな真似する筈ないだろ？

「雪蓮……。そんな眼で、私を見ていたのか？」

部屋から、冥琳が姿を見せた。

「あら、謹慎中だって事、忘れたの？ 勝手に部屋を出ないで欲しいわね」

「そんな事より。そんな見え見えの手にひっかかる程、愚かだったのかお前は！」

冥琳は、いつになく怒っている。

……が、雪蓮は冷然としたまま。

「問答無用。せめて、わたしの手で殺してあげるわ」

そう言いながら、南海霸王を抜いた。

「雪蓮……。お前という奴は」

「言い残す事があれば、聞いてあげるけど？」

「……お前は、変わってしまったな。呉王の座を手にしてから、な」
「あら。あなたこそ、王が扱いやすい蓮華になるのを見越して、ま

すます身勝手になっていたじゃない」

「……もう、何を言っても聞かぬつもりか」

「そうね。それじゃ冥琳、さようなら」

雪蓮は、南海霸王を突き出した。

……が、激しい金属音に、それは遮られる。

あたしが、とっさに青？の剣で防いだ。

「……何の真似かしら、綾子？」

「雪蓮。どういふつもりか知らないけどさ、やり過ぎだって。冥琳も、どうしてだよ……」

「……興醒めしたわ。冥琳を部屋に戻しなさい」

傍に居た兵士に、雪蓮が命じる。

「し、しかし……」

「命令よ」

「……は。周瑜様、失礼致します」

冥琳は何も言わず、部屋に戻された。

「雪蓮。お前……」

「……綾子。言いたい事は、戦いが終わったら聞くわ。今のあなたは大都督なの、それを忘れないでね」

それだけを言い残し、雪蓮は立ち去った。

「何なんだよ、もう……」

「……………」

あたしの呟きに、誰も答えはなかった。

ゝ八十一ゝ（前書き）

隔週更新が定着してしまったような……。
とりあえず書き上がったので投稿します。

（八十一）

「ハア……」

今日、何度目の溜息かな、これ。

雪蓮と冥琳はあんな事になるし、あたしはあたしでこの先どうすりゃいいのかわからんし。

「もう、二十三度目ですねー」

「主。そうしていても、何も解決しませぬぞ？」

呆れたように、風も星もあたしを見る。

「そうは言うけどさ。マジでどうすりゃいいのかわからんって」

「これも、何かの策なのでしょうか？」

「でも朱里ちゃん。孫策さん、本気で周瑜さんに斬りかかったみたいだよ？ そうだよ、菖蒲ちゃん？」

「う、うん……」

「姉さんが止めてなきゃ、確かに冥琳さんはこの世とおさらばしていたね」

みんなの顔も、どうしても沈みがち。

「……雪蓮と冥琳は、世界中の誰よりも固い絆で結ばれてるんだぜ？
それが、あんな……」

あたしの存在が、悪影響を与えているんだろうか？
だとするなら……。

あたしは、黙って席を立つ。

「綾子様、どちらへ？」

「……ちよっと、外の空気でも吸ってくる」

「では、私がお供を」

ついてこようとする菖蒲を、手で制した。

「悪いけど、ちよっと一人にして欲しいんだ」

「綾子様……」

ちよっと悲しそうだったけど、一人になりたいのは事実だし。

いつの間にか、日が沈んでいた。

夕陽、ホントに綺麗だよな。

元の世界でも夕焼け空ってそれなりに綺麗だと思ったけど、この時代は空気の澄み方がダンチ。

そりゃまあ、光化学スモッグも温暖化も無縁な時代なんだから、当たり前なんだけどさ。

……それにしても、あたしは何故、ここにいるんだろうな。

貂蟬の奴もあれつきり姿を見せないし。

あたしを襲ってきた謎の連中、そいつらとの決着もついていないけど、最近は動きも見せないし。

もう、何十年もこの世界に居るような気がするけど……そんな訳ないんだよな。

……戦わなきゃ自分が死ぬ、だからこうして剣を手に、随分とたくさんの血を見てきた。

雪蓮も、そんなあたしを必要としてくれたし、お陰でたくさんの仲間も出来た。

華琳との勝負はまだついてないけど、これさえ終わればもう、大きな殺し合いはない筈。

なのに……何でだよ、もう。

……ん？

不意に、何かの気配を感じた。

あたしが屈むと、その頭上を何かが通過していく。

そして、カツン、と音がして、何かが転がっていた。だいぶ辺りが暗くなったせいで、よく見えん。

……あ、そうそう、マグライトがあったつけ。

電池切れだけは怖いけど……お、ついた。

落ちていたのは、一本の矢。

ただ、誰が、そもそもどうやってここまで飛ばしたんだ？

矢なんて、そんな何キロも飛ぶモンじゃないしなあ。

……お、何か結んであるな……紙みたいだけど。

矢文みたいだな、ちよつと見てみるか。

夜更け過ぎ。

あたしはそつと、部屋を抜け出た。

いつもなら、菖蒲や紅蓮が傍に居るんだが、今日は近付けさせなかった。

かなり、心が痛んだつつか、眼をうるうるされるのに耐え抜いたあたしは、ベートーベンみたいな元総理から表彰されてもいいぐらいじゃね？

……まあ、それはいいとして。

いくら深夜とは言え、最前線の軍事要塞。

見廻りの兵もいるだろうし、あたし一人がうろつけばたぶん誰かに見つかるだろうな。

……つつか、明命とか紅蓮あたりの目をかすめる方法が思いつかん。

なら、あたし一人じゃなきゃいい訳だな、うん。

「それで私に同行せよ、と？」

「ああ。お前さんなら腕は折り紙つきだし、あたしの無茶にも慣れるだろう？」

星は、大きな溜息をつく。

「全く。主、ご自身の立場をわかっておいでなのでしょうな？」

「あたしはあたしさ。いい加減、そんな性格もわかってきただろ？」

「……仕方ありません。言い出したら聞かないでしょうし、主人にはさせられませぬ」

そう言って、星は槍を手にしち上がった。

腕が立つ上に機転が利く星がいてくれれば、あたしも心強いしな。

星の先導で、城を抜け出す事に無事成功。

……まあ、あたしとしては誰にも見つからずに済んで良かったけど、逆に侵入しようとしたら……どうなんだ？

抜け出しておいてなんだけど、城の警備状況を一度見直した方がいいかもな。

さて……。

当たり前だけど、辺り一面、真っ暗闇。

いくら視力が化け物じみてしまっているあたしでも、これじゃ何も見える訳がない。

月でも出てりゃ別だけど、今日は新月だし。

まあ、星明かりがあるから、その意味じゃホントに真っ暗じゃないんだけどな。

……お、なんか向こうに白い物がボーッと光ってら。

「主！」

「いや、たぶん大丈夫」

「で、ですが……妖の類では」

確かに、白い物体がぼんやりと見えりゃそうかも知らんけど。

星の着物も白なんだが、素材が違うからなあ。

星の声は低く抑えたものだったけど、それでも向こうは気付いたらしい。

「コマ〇チと言えば？」

男の声がする。

「ビートた〇しのギャグだろ？」

「じゃあ、日本人メジャーリーガーで、毎朝カレーしか食べない人は？」

「イチ〇ー」

あたしが答えると、白い物体の正体が近づいてくる。

「なあ、北郷？ もう少しマシな合言葉、思いつかなかったのか？」

「別にいいだろ。同じ時代の日本人にしかわからないネタばかりなんだし」

不貞腐れたように、北郷は言った。

その後ろから、秋蘭の溜息が聞こえてくる。

「全く、何を言っているのかさっぱりだぞ。……ところでもう一人は、趙雲か？」

「そうだ、夏侯淵。主の檣はこの私、いかなる場所だろうがお供するのが我が使命だ」

「ふっ、それはお互い様だな。……さて、本題に入ろう。お互い、刻も限られているだろうからな」

北郷の制服、しかし目立つよなあ。

……つか、こいつも一張羅だろうに、いつもそれで平気なのかねえ。

「まずは綾子。……改めて姉者の事、礼を言わせて貰う」
そう言って、秋蘭は頭を下げる。

「いや、あたしもあのまま夏侯惇を討ち取ったところで、嬉しくも何ともないし。まあ、将としちゃ失格だろうけどさ」

「だが、あそこで勢いに乗じて姉者を手にかけていたら……。私は、綾子を一生恨んだであろうな」

うへ、秋蘭に恨まれたんじゃ、マジで死ぬまで安息の時間なくなるんじゃないか？

くわばわくわばら。

「夏侯淵。そのような事、私が許すと思うのか？」

「いや。だが、感情という奴はそう容易く抑えきれるとは限らぬものでな。……だから、そうせずに済んだ事も感謝しているさ。趙雲、お前とそのような事で刃を交えるのも、不本意だしな」

「華琳も、口には出さないけど。美綴の処置を喜んでいたぜ？」

「北郷の言う通りだ。……礼は礼として、受け取って欲しいのだ、綾子」

「わかったよ。用件はそれだけか？」

「いや、もう一つある」

秋蘭と北郷は、互いに頷き合ってから、

「単刀直入に言おう。……美綴、魏に来ないか？」

……ホント、そのまんまだねえ。

「北郷、新手のギャグか？」

「違う！俺は真剣だ！」

北郷は、思わず叫んだ。

「北郷！声が大きいぞ！」

「あ、ああ……悪い、秋蘭」

「……北郷。あたしがどんな立場で、雪蓮とあたしがどんな関係か、知っての事だろうな？」

「当然だ。でも、今の孫策はどうだ？王になった途端、周囲を顧みなくなったそうじゃないか」

「貴様。当て推量で物を言うと、承知せぬぞ？」

星が槍を構えた。

……が、北郷は動じない。

「当て推量じゃない。知っているんだぞ、孫策と周瑜が仲違いしている事は」

「……そうか。じゃあさっきの間諜は、やっぱり華琳の手先か」

「……………」

沈黙は、肯定なんだろうな。

「綾子。姉者の事もあるが……今のお前を呉に置くのは、私としても忍びないのだ。華琳様も綾子の事は高く評価し、気にかけておられる事はわかっているだろう？」

そりゃまあ、何度もヘッドハンティングされたし。

あたしなんざよりもずっと優秀な配下たくさん抱えている筈なんだけど、華琳の人材収集にかける執念は凄まじいからなあ。

「これが黄蓋と周瑜だったら、俺も策と疑っただろうけど……あの孫策と周瑜だ、あり得ないだろう？」

やっぱり『苦肉の計』、知っていたか。

祭さんは幸い、前線には来ていないし、あたしが釘を刺したせい、軽拳には走ってないようだけど。

こいつがどこまで知識があるのかわからんけど、やっぱり歴史と同じ事を繰り返すのは危険だな。

「同じ日本人同士、殺し合うなんておかしいって。今のままじゃ、どう足掻いても華琳の勝ちには動かないんだ。だったら」

北郷は、必死に訴えてくる。

「綾子。私も武人としてだけでなく、一人の人間として、お前を失いたくないんだ。……私と共に来てくれないか？」

秋蘭の言葉にも、誠意が感じられた。

「……二人の気持ちはわかった。少し、考えさせてくれ」
「主……」

「そうだな。だが、あまり猶予はないぞ？……む？」

背後から、誰かが迫ってくる気配がする。

「北郷、帰るぞ？」

「え？ 急にどうしたんだよ、秋蘭？」

「いいから来るんだ！ では綾子、また連絡する」

それだけを言い残し、秋蘭は北郷を引きずり、去って行った。

「綾子お姉さま！」

「姉さん！」

明命に紅蓮か。

……まあ、見つからずに済むとは思っていなかったけどさ。

城に連れ戻されてみると、主だった顔ぶれが殆ど、揃っていた。

……が、肝心の奴がいない。

「あれ、雪蓮は？」

「お呼びしようと思ったのですが……」

「儂が止めさせたのじゃよ」

そう言いながら、祭さんが入ってきた。

「あ、あれ？ どうしてここに？」

「何じゃ、聞いておらんのか？」

「聞いてないからびっくりしたんですよ。いつ、この城に」

「つい先程じゃ。夜分ではあるが、新たな大都督殿に挨拶を、思ったのじゃが」

「それで、祭さまをお連れしたところ、綾子お姉さまのお姿が見えなかったんです」

道理で、バレるのが早いと思った。

「策殿の事、儂も思うところが些かあるのじゃ。ところで綾子。お主は、このような夜更けに何をしていたのじゃ？」

みんなの視線が、突き刺さるようだぜ。

まあ、星を連れていたとは言え、城を無断で抜け出したのは事実だし。

「夏候淵と、天の御遣いに会っていた」

……全員、程度の差はあれ驚いた。

そりゃそうさね。

「あ、綾子様？ 今まさに敵対している相手じゃありませんか！」

「おおー。お姉さん、大胆不敵ですねー」

「……星。お前も承知の上で同行したのじゃな？」

「そうだ。私も最初は呆れたが、主一人で行かせる訳にはいかぬからな」

「そ、それで、どのような用件だったんですか？」

「理由さえ正当なら、星さんも一緒だった事ですし、事を荒立てる必要ありませんが」

「そうね。朱里ちゃん雛里ちゃんの言う通りね。綾子様、如何ですか？」

……まあ、隠す事じゃないな。

あたしには何も疚しい事はないんだし。

「一つは、先日の礼が言いたかったらしい」

「礼……。姉さんが、夏候惇を見逃した事だね？」

「ああ。……そしてもう一つは、あたしへの寝返り勧誘さ」

「……戲けか、夏候淵ともあろう者が」

「そうですよ、綾子様が寝返りだなんて、天地がひっくり返るよりもあり得ません」

全員が、同感だとばかりに頷く。

「それでですねー。お姉さんは、何と答えたんですか？」

「……少し考えさせてくれ、そう言ったよ」

「はわわっ！　そ、それは……」

「あわわ……。はっきりと断らないのはまずいでしゅ」

「……綾子お姉さま。どうしてですか？」

悲しげに、明命はあたしを見た。

「何でだろうな。夏侯淵も北郷も、本心から言ってくれたからか…

…冥琳の事があるからか」

「ふむ……。お主も、悩みが深いようじゃな」

「当然ですよ。もう、何が何だか」

「も、申し上げます！」

そこに、兵士が駆け込んでくる。

「何事じゃ！」

「は、はっ。周瑜様のお姿が、見当たりません」

「……は？」

「孫策様の命で、定期的に周瑜様の様子を見ていたのですが……。つい今し方確認したところ、お姿がなく」

「明命、紅蓮。すぐに探し出せ」

「はいっ！」

「わかった！」

すかさず飛び出していく二人。

「菖蒲、星、紫苑も、城内の搜索を。風は冥琳の部屋を調べてくれ」
「綾子、儂はどうする？」

「……とりあえず、一緒に雪蓮に知らせに行きましょう。黙っている訳にもいかないですから」

「……そうじゃの」

「朱里と雛里は、ここに残って情報の取り纏めを頼む」

「わ、わかりました！」

「は、はひっ！」

……冥琳、お前さん一体……。

ゝ八十二ゝ（前書き）

お待ちせしました。

八十二

「そう。冥琳がねえ」

主立った全員を、至急謁見の間に集めた。

流石に雪蓮に知らせない訳にもいかず、当人は玉座で腕組みをしている。

「方々探したんだけど、見つからなかった。冥琳の事だから、その辺りも考えていたんだろうな」

「やはり、曹魏に行かれたのでしょうか……？」

「他にはあり得ないでしょうね。他のどの方角に向かっても、何処も孫呉の支配権ですわ」

「明命、紫苑さんの言う通りだろうと思うよ」

「ふむ、公瑾ともあろう奴が、随分と思いついた事をしたものじゃないな」

朱里に雛里、それに風は……何やら思案に明け暮れているようだ。

「綾子」

と、雪蓮が顔を上げた。

「それで、どうするのかしら？ 大都督として、軍に指示を与えるべき場面じゃない？」

「んなコト言ったって……」

冥琳が、ホントに華琳のトコに走ったのなら、この合肥にいるのは考え物だ。

当然、この城の攻め方だってわかっている筈だし。

……つか、今ここに雪蓮がいるのを知れたら、そっちの方がヤバイような。

いくら蓮華が控えているとは言え、今雪蓮に万が一のコトがあったら。

「祭さん、明命」

「なんじゃ？」

「はい、綾子お姉さま」

「すぐに雪蓮を連れて、建業に戻ってくれ」

「あら？　どういう事、綾子？」

雪蓮は、訝しげにあたしを見る。

「わかるだろ？　もし冥琳がホントに華琳のトコに走ったのなら、間違いなくこの合肥に寄せてくるぜ？」

「望むところじゃない。わたしがこの手で、冥琳をあの世に送ってあげるだけの事よ」

「……雪蓮。あたしは、大都督だったよな？」

「ええ」

「なら、将と兵には、あたしが命令を下す権限がある訳だ」

「……綾子？　あなた、一体何を言っているの？」

あたしはそれに答えず、

「公覆、幼平。もう一度命じる、伯符殿を建業へお連れしろ。大都督としての命令だ」

わざと、声の調子を抑えて言い放つ。

「綾子。あなた……っ！」

「……不服があるなら、あたしの職務を解くがいいさ。あたしはそれでも構わないぞ」

「……策殿。悪いが、儂らとて将だ」

「綾子お姉さまの命ですから、失礼します」

雪蓮は、ふう、と息を吐く。

「わかったわよ。綾子、後は任せていいのね？」

「……ああ」

祭さんと明命に伴われて、雪蓮は出て行った。

「さて……紅蓮。魏軍の動きから目を離すな」

「うん、わかった」

「菖蒲、星、紫苑。お前らには、これやって欲しいんだ」

冥琳を敵に回す事がどれだけ恐ろしいか、呉の人間ならわかってない筈はない。

……まあ、将だけならまだいい。

けど、兵に取って見れば、今まで孫呉の躍進を支えてきた冥琳が脱走し、魏に寝返ったなんて事を知ったらどうなるか。

士気はがた落ちだろうし、悪くすれば戦意を失って逃亡する事もあり得る。

あたしには悔しいけど、冥琳に負けないぐらいの信頼と信用を得ているとは言えないし、そんな自信もない。

勿論、冥琳が華琳のところに駆け込んでなければ一番いいんだけど、状況から見てそれを期待するだけ無駄っぽい。

なら、例えバレたとしても、兵が意気消沈しないシチュエーションを用意してやりやいいだけの事だよな。

だから、精々悪あがきをさせて貰うさ。

「風、朱里、雛里。お前らもいいか？」

「はいですー」

風が応え、朱里と雛里も頷いた。

それから数日。

魏軍には、動きは見られない。

陣の中で何をしているのか知らんけど、少なくとも攻撃どころか、間諜もほとんど忍び込んでくる様子もない。

お陰で、こちら準備を進める事が出来たけどな。

「姉さん、雪蓮様達も無事に建業に着いたって。明命から知らせがあったよ」

「そっか、了解だ」

「ところで姉さん、これは何なの？」

紅蓮は、兵が運んでいる箱を指さす。

「ああ、朱里が考えた新兵器さ」

「新兵器？」

「そうさ。冥琳も、これは知らない筈だ」

「綾子様、準備はもうすぐ整います」

当人が、報告にやって来た。

「朱里、新兵器って聞いたけど。一体何なんだい？」

紅蓮が当然の質問をすると、

「あう……。そ、それは……」

困ったように、朱里はあたしを見る。

「悪いけどさ、見てのお楽しみって訳だ」

「……わかったよ。姉さんと朱里だから、信じるしかないもんね」

「主。蓮華殿から伝令が参りましたぞ」

「お姉さん、風の手筈は整いましたよー」

みんなが、忙しく動き回っている。

アドバイスを貰いながらとは言え、全部あたしの指示なのは事実。

……あたしもジツとしているのは性に合わないんだけど。

ちよっと手伝おうと思って他の場所に行ったら、報告に来た菖蒲にこっぴどく叱られた。

「綾子様がこの場で最高責任者なんですよ。もう少し、ご自分の立場を弁えて下さい！」

……強くなったな、菖蒲も。

てな訳で、あたしも今は動くに動けない。

けど、それも今夜限り。

さ、いっちょやってやりますかね。

で、夜になった。

「姉さん、準備終わったよ」

「うし。じゃ全員、手筈通りにな」

「応っ！」

みんなが、一斉に動き出す。

「ではではお姉さん、また後でー」

「無事にお戻り下さいね、綾子さん」

「朱里ちゃん達と、待っていますね」

軍師三人に頷き返す。

「菖蒲、星。三人を任せたぞ」

「はいっ！」

「お任せあれ。では主、参ります」

残ったのは紫苑と紅蓮、そしてあたしの部隊だけ。

「悪いな、危険な役目を頼んじまって」

「あら、武人の誉を与えていただいたと思っていますわ。ねえ、紅蓮ちゃん」

「うん。姉さんについていて、危険じゃない方がおかしいしさ」

「……なんか、あたしが無茶苦茶やってるように聞こえるぜ？」

「あれ、違うの？」

紅蓮の奴、ニヤニヤしてやがるし。

「うふふ、あなたの負けですわね、綾子様」

「ったく。ま、そんだけ余裕がありゃ大丈夫だろ。なら、行くぞ」

「わかりましたわ」

「了解！」

程なく、魏軍が押し寄せてきた。

巢湖側を除く、三方からの一斉攻撃。

合肥城の南側は、湖に面しているのが強み。

だけど、同時に弱点でもある。

華琳からここを明け渡された後で、冥琳達がいろいろと対策を考えたけど、地形の制約でどうにもならないらしい。

だから水軍を配置してそれを補う格好になるんだけど、大量に船を浮かべるだけの広さがない。

攻める場合にも大軍では無理、という守備側でのメリットもあるんだけど、裏を返せば守備部隊も手薄になりがち。

特に今日は守備にあたる水軍が交代する日だから、本来なら尚更手薄になる。

冥琳は当然それを知っている筈だし、忍び込もうとする間蝶が少なかったのは、その分水軍の動きを監視していたのもあるみたいだ。

だから、それを逆手に取る事にしたって訳だ。
風達は、交代の船団に紛れて先に脱出させた。

城の三方から、一斉に関の声が上がった。

立て続けに打ち鳴らされる銅鑼。

「いいか、無理に当てるよりも、とにかく数を射て。そして、出来る限り身を守れ、いいな？」

「応っ！」

「さて。紅蓮、兵への合図は任せたぜ？」

「了解、姉さんも頑張って」

「ああ。紫苑、行くぞ？」

「ええ」

あたしと紫苑は弓を手に、正門の上に登った。

夜の戦い、いくらあたしでも必中は無理。

でも、見えないなら見えやすくすりゃいいだけの事。

番えた矢の先に、兵が火をつけた。

「いけっ！」

「はっ！」

あたしと紫苑で、競うように火矢を放つ。

神社の灯籠みたく、一定間隔で城の周囲が明るく浮かび上がった。

「火を消せ！」

慌てたように号令を飛ばした奴に、今度は普通の矢を放っていく。
致命傷を与えなくても、それだけで敵兵が動揺するのがわかる。

「流石ですわね」

「紫苑こそなっ！」

そして、他の弓兵が放った矢もまた、敵兵をなぎ倒していく。

「貴様ら、それでも曹魏の精兵かつ！ 怯むなっ！」

ん、この声は……確か。

「美綴！ 貴様がそこにいるのはわかってるのだ！ 出てきて私と勝負しろ！」

うん、夏侯惇だな。

「先日の借りを返さなければ気が済まん！　どうした、怖じ気づいたか？」

……いや、あれで飛び出るのはアンタか華雄ぐらいのモンだろ？

「綾子様。どうなさいますか？」

「そうだな。……紫苑、アイツ自身に当てないように、黙らせてみないか？」

「面白そうですわね、いいでしょう」

二人並んで、夏侯惇に狙いを定めた。

「おいっ！　聞こえているのだろう、返事をしろ！」

……向こうから、勝手に位置を教えてくれるとはね。

相手がその気なら射殺されてもおかしくないぞ、あれじゃ。ま、いいや。

紫苑と同時に矢を放つ。

そのまま、矢は夏侯惇……の馬に当たる。

「ヒヒーン！」

「お、おおっ！」

あたしのは左前脚に、紫苑のは右前脚に命中。

流石の夏侯惇も、振り落とされたらしい。

「夏侯惇將軍！」

「ええい、放せっ！　この程度で怪我などするかっ！」

とは言え、仮にも将が落馬ともなれば、兵に落ち着けと言う方が無理だろ、実際。

そこに、伝令が駆け寄ってきた。

「美綴様！　搦め手より敵影を確認したとの知らせが！」

「来たか。紅蓮は？」

「はっ。既に次の行動に移られています」

「わかった」

あたしは頷くと、

「紫苑、ここはもういい。紅蓮と合流してくれ」

「綾子様は……愚問のようですね」

「ああ。話が早くて助かるよ」

「……わかりました。では、後程」

駆けていく紫苑を見送ってから、また矢を数本放った。
さてと、あの猪はどうしたかな？

「おのれ、卑怯だぞ美綴！」

あゝ、地団駄踏みながら剣を振り回してら。

……いや、まあわかりやすいんだけどさ。

アンタの任務って、陽動じゃないのか？

敵ながら、華琳には同情しちまうな。

と、その時。

背後でドーン、と音がした。

裏門が破られたんだろう。

なら、長居は無用だな。

最後に、夏侯惇に向けて、残った三本全てを放った。

「ふざけるなっ！」

二本は、当然叩き落とされてしまう。

まあ、仮に避け損なっても、掠り傷で済む場所は狙ったんだけどな。

で、本命の一本は……奴のデコに。

「な、何っ！」

慌ててるけど、もう遅い。

デコに突き刺さった矢が、プラプラと揺れている。

……ただし、先端は鏃じゃなくて、吸盤だけだな。

「し、將軍！」

「な、何だ、これは？」

うん、傑作だな。

雪蓮に見せたら、腹抱えて笑い転げるだろうなあ。

そして、城内から突如として、火の手が上がる。

どうやら、朱里の仕掛けは成功したらしいな。

「全員、撤収する。あたしについて来い！」

「応っ！」

ゝ八十三ゝ（前書き）

今回も思い切りご都合主義です。

八十三

「な、何だこりゃ？」

「油だ、油が撒かれてるぞ！」

搦め手から城内に雪崩れ込んできた敵兵。

明かりなんてつけちゃいないから、足下の確認なんて出来る訳もなく。

結果、盛大にぶちまけられた油にこける奴が続出。

先頭がこけ、後に続く連中が急に止まれる筈もないので、侵入したはいけど收拾がつかない始末だ。

「しまった、謀られたぞ！」

「引け、引くんだ！」

おー、慌ててる、慌ててる。

でも、悪いがもう手遅れだ。

隠れていた紅蓮の兵が、用意していたロープに点火。

油をたんまり染み込ませたそいつは、あっという間に火が伝わっていく。

そして、ドカンドカンと派手な音がして、地面が吹っ飛んだ。

……まあ、音の割には威力ショボいんだけど。

ただ、敵兵はもうパニックで收拾不可能な感じだ。

「よし、今だ！」

城内に残っていた兵全てが、あたしの前に勢揃いしている。

それ以外は紅蓮が率いる、放火魔部隊に配置した。

「一気に駆けるぞ。敵には目もくれるな！」

「応っ！」

そして、西門を開き、外に向かって飛び出した。

最初は盲点狙いで正門から出る事も考えたんだが、夏侯惇に見つかったら間違いない追ってくる筈だろうし。

後は西か東か、それは下駄占いで決めた。

……いいんだよ、そのぐらいいい加減じゃないと、連中の裏をかけるんだから。

「て、敵が打って出てきたぞ！」

「迎撃しろ！」

案の定、意表を衝けたらしいな。

矢は飛んでくるが、狙いは滅茶苦茶、脅威でも何でもない。

「ギャッ！」

……とは言え、運悪く流れ矢に当たる奴もいる。

でも、止まらない。

関ヶ原合戦の島津軍みたいに、とにかくひた走るのみ。

「綾子様！ 敵が追ってきますわ！」

矢を放ちながら、紫苑が叫ぶ。

あゝ、確かに追いかけてくるな。

……ん、ありや何だ？

何か、光って……って、ヤバイ！

「紫苑！ 指揮を頼む！」

「綾子様、何を？」

「アレを防がないと、みんなが吹っ飛ぶ！ 任せたぜ！」

あたしは、馬を返して殿に向かう。

近くにいた兵に馬を任せ、地面に立つ。

それからイテンの剣とセイコウの剣、両方を抜き、構えた。

迫りくる光を、クロスさせた剣で迎え撃った。

「でえええい！」

グッ、物凄いパワーだな、クソッ！

剣が、いや腕が弾き飛ばされそうだぜ。

けど、気を抜いたら、あたし自身、吹っ飛んじまう。

……いや、あたしだけじゃなく、必死に駆けていくみんなまで巻き添えだ。

「させるかあああつ！」

何とか踏ん張ると、腕にもう一度、力を込めた。

そのまま、光を袈裟斬りに。

……普通は斬れるモンじゃないし、そもそもそう言う問題でもない。

でも、あたしの愛剣は、並のチートじゃない。

現に、ない筈の手応えと共に、光が割れていく。

そして、あらぬ方向に四散した。

その様を、敵兵が呆然と見送っている。

……というか、流れ弾になってむしろ、魏の連中が右往左往している。

「……あれを止められましたか。流石ですね」

「いや、止めなきゃ大惨事だったし。そうだろ、凧？」

月明かりに映える銀髪、全身から漂う闘気。

紛れもなく、凧本人だった。

「どうやら、目的は果たせなかったようです。残念ですが」

あたしが稼いだ時間は、みんなが安全圏に脱するには十分だったようだ。

「ですが、綾子様。あなたとの勝負はついていません」

そう言いながら、凧は構えを取る。

「悪くない提案だな。けど、今はパス」

「ばす……？」

凧は、首を傾げる。

「意味なら、後で北郷にでも聞いてくれ。じゃ、またな」

「逃がすと思いますか、私が？」

「いんや。でも、あたしは逃げるけどなっ！」

あたしは、懷から取り出したボールを、凧に投げつけた。

「何の真似ですかっ！」

当然、凧はぶつかる前に叩き落とす。

……でもな、それは避けないとダメなんだな。

割れたボールから、もうもうと粉が舞い上がる。

「な、何だこれ！」

「悪いな、風！」

あたしはそう叫ぶと、駆け出した。

ちなみに粉の正体は、炭を細かく粉末にした奴に、唐辛子を混ぜたモノ。

いくら風が激辛マニアでも、あれには耐えられないだろうしな。

「ゲホッ、ゲホッ！ あ、綾子様、卑怯ですよっ！」

「今のあたしには卑怯もヘチマもないんだ、じゃあな！」

噎せ返っている風にちよつとだけ罪悪感を覚えながら、あたしはその場を後にする。

無事、味方と合流し、そのまま長江へと出る。

手筈通り、そこには呉の船団が待っていた。

「綾子、無事じゃったか」

迎えに来てくれた祭さんが、ホッとしたような顔をしている。

「ご心配かけました」

「全くじゃ。あまり、年寄りの寿命を縮めるものではない。さ、出すぞ」

船は岸を離れ、建業に向けて走り出した。

「そうじゃ。綾子に一度、聞いておかねばと思っていた事があるのじゃ」

「あたしに？」

「そうじゃ。以前、儂にいくら策でも、と申した事を覚えていような？」

あ、多分苦肉の計の話だな。

「はい、確かに」

「あれから随分考えたのじゃが、未だに意味がわからんのじゃよ」

「……わかりました。理由をお話します」

あたしは、苦肉の計について、知っている限りを祭さんに話した。天の御遣いである北郷が、その事を知っている可能性が高い事も。

「なるほどのう。確かに儂は、曹操と雌雄を決する事にでもなれば、この老体を捧げる覚悟は出来ておった。綾子がおらねば、儂もそうしていたやも知れぬの」

「だから、あたしは止めたんです。祭さんは……あたしの姉さんみたいなものだから」

「別に気を遣わなくてよいぞ。儂はそこまで若くない」

「いえ、マジ……じゃない、本気で言ってますよ。祭さんはまだまだ若いし、綺麗ですから」

「そ、そうか。なんだかこそばゆいのう」

祭さんが照れるなんて、レアだなあ。

つか、これも素の祭さんなのかも。

「時に、冥琳はどうしておるかの」

「やっぱ、気になりますか」

「当然じゃ。策殿は何故か頑なじゃが、あの二人はあれ如きで仲違いするなど、呉の誰一人として信じておらぬわ」

「ですよ。雪蓮も言っていました、冥琳とあたしが両腕だって。……あたしがそうなのかどうかはともかく、冥琳は呉に不可欠ですよ」

「うむ。しかし、あ奴の策だとして、御遣いに露見する恐れはないのか？」

「……わかりませんが、冥琳程頭の切れる奴が、そう簡単には尻尾を掴ませる訳ありませんし。それに」

「それに、何じゃ？」

「……北郷は、悪いけどそこまで頭脳明晰じゃないですよ。あたしと同じ、普通の奴です」

「むう、綾子と同じだと申すなら、尋常ではなくなるではないか。お主は天下に名だたる豪傑なのじゃぞ？」

いや、だからそれは過大評価なんですってば。

「とにかく、心配ありませんって」

「……そうじゃの。策殿と公瑾を信じるより他あるまい」

そう言って、祭さんは長江の北岸に眼を向けた。

今度は長江に落ちる事もなく、無事に建業に到着。

つか、この状況であたしまで消息不明になったら流石にヤバいんで。

……だからって、四六時中誰かが傍にいて監視しないで欲しかったけど。

「綾子お姉さま！」

「姉さん、無事だったんだね」

建業に入ると、明命と紅蓮が駆け寄ってきた。

「ああ、二人ともご苦労さん。で、首尾は？」

「はい。合肥城は城壁も崩れて、完全に瓦礫の山です。少なくとも、この戦の間に要塞として使うのは無理かと」

「魏の水軍、どうやら元劉表配下が率いていたみたいだね。数が少なかつたから、退く時には障害にならなかつたけど」

「そっか。とりあえず、みんなが無事で何よりだな」

……と。

気がつけば、あたしの周りは猫だらけ。

「お前らも出迎えに来てくれたのか？」

「ニャー」

マジで、建業中の猫が集まったんじゃないか、ってぐらいに。

「はうゝ、お猫様で一杯です」

「……紅蓮。明命がトリップしかかってる、早く連れて行ってくれ」

「とりっぷ？」

「陶醉し過ぎてる、って事。頼んだぜ」

「うん、わかった。……でも姉さん、本当に不思議な言葉を使うんだね」

「ですねー。お姉さん語録がまた増えたのですよ」

よいしょ、と風が地面から顔を出した。

「……どっから湧いた」

「風はいろいろとあるのですよ。それよりお姉さん、皆さんお待ち

かねですよ？」

「おっと、そうだったな。祭さん、行きましょう」

「そ、そうじゃな。……しかし、凄い特技じゃの、これは」

呆れたような祭さん。

「風ならいつもの事です。コイツの不思議キャラは」

「い、いや、それもあるのじゃが……この猫の大群、綾子が呼んだのじゃろう？」

「あたしが呼んだって訳じゃないですよ。……まあ、懐かれているのは否定しませんけど」

「そうかの。お主は猫に庇われる程じゃから、不思議ではないのかも知れぬがの」

「そうですねー。風も、まだまだお姉さんには及びませんし」

「はふう……。モフモフですう」

あ、まだ明命がいる。

「姉さん、僕の手には負えないよ、こうなったら」

「やれやれ。……とりあえず、このまま連れて行くしかないな」

決戦を前に、殆どの将が顔を揃えていた。

いやー、豪華絢爛っつか、何だろうねこのオールスターぶり。

何度見てもそう思うわな。

……ただ、本来は雪蓮の隣に座しているのは、あたしなんかじゃない。
ない。

ここは、やっぱ冥琳の席だと思う。

あたしがいくらチートじみた事ばかりやってきた、ってもそれはそれ。

呉の大都督に相応しいのは周瑜公瑾、その人だけだよ。

「では、始めましょうか。蓮華、お願いね」

「姉様？」

「いーじゃない。どうせ、嫌でもあなたは仕切る事になる運命なんだから」

「そうだとしても。今の呉王は姉様ではありませんか」

「もう、細かいのねえ」

「姉様が大ざっぱ過ぎるだけです！」

「はいはい。じゃ、そういう訳で、よろしく」

そう言つて、雪蓮はニッコリ笑う。

「ハア……。仕方ありませんね、わかりました」

しかし、どうしてこう、姉妹なのに性格がこうも違うのかねえ。

フリーダム過ぎる雪蓮と、真面目過ぎる蓮華と。

……冥琳も、よくこの二人の間にいて、胃に穴が開かなかったモンだわ。

「では、綾子。現在の戦況について、報告を」

そうは言いながらも、きっちり王様モードに切り替わる蓮華は流石だと思う。

「あいよ。まず、涼州と荊州は動きなし。それはいいな？」

「ええ」

偉そうに話してるけど、全部朱里と雛里に任せちゃったんだよな、分析。

二人は喜んで引き受けてくれたけど、そうでもなきゃあたしが冥琳の代わりなんて務まらないし。

まあ、どうせこの戦が終われば、全て片付くだろうし。

「で、まず合肥城は、仕掛けた上で放棄した」

「何故、放棄した？」

「理由は二つ。一つは、決戦に持ち込むには陸戦だと限界がある事。もう一つは、冥琳が失踪した事だ」

「……確かに、この建業を攻めるには渡河するしかないが。だからと言って、合肥は重要拠点ではないのか？」

「確かにそうだな。でもさ、魏は少なくとも、この戦の間はあそこを活用するのは無理だ」

「我らから、渡河する事がないからか？」

「それもある。後、徹底的に壊したからな。だから、利用価値がな

いんだ、少なくとも今の状態ではな」

「なるほどな。それで、魏はいつ攻めてくると思う？」

「あまり遠くない日だろうな。恐らく、予定していたよりも手間取らせた筈だから、補給を考えるとそろそろ決戦に持ち込みたいだろう、あたしはそう見てる」

「わかった。では、決戦についてだが……その前に。入れ」
「はっ」

部屋に入ってきたのは……思春だった。

ゝ八十三ゝ（後書き）

年内には何とか完結させたいところですが……頑張ります。

ゝ八十四ゝ（前書き）

またまた遅くなりました。
年内にどこまで進められるか……。

八十四

「思春……いや、興覇」

「はっ」

「此度の事、申し開きがあるなら申せ」

蓮華の表情は厳しい。

みんなも、どこか複雑な顔をしてる。

まあ、これだけ信頼関係のある主従なんて、いくらこの大陸が広くてもそうそうない筈だ。

その二人が、静かに睨み合っている。

雪蓮だけは、何を思うのか無表情だけど。

「ありません」

「そんな筈なからう！ 誰に命じられたのだ？」

「私の独断です。処罰なら、甘んじて受けます」

「本心か、それが？」

「はい」

蓮華が立ち上がり、何か言いかけたその時。

「……なら、死罪しかないわね。覚悟の上のようだし」

雪蓮の一言が、その場に響いた。

「姉様。今、なんと……？」

「死罪よ。将として主君の信頼を裏切ったんですもの。当然でしょう？」

「しかし。まだ動機も曖昧なままです。性急過ぎるかと」

「そうかしら？ 本人が認めてるんだし、処罰を受けるって言うてるわよ？」

「ですが、あまりにも腑に落ちません。詳細を調査するべきです」

……なんで、この二人が言い合いしてるんだ？

明命や菖蒲は明らかにオロオロしてるし、祭さんは眉間に皺を寄せてるし。

いや、兵なんて完璧に動揺してるぞ？

「蓮華。わたしは、呉王として当然の判断を下したまでよ？ 不服があると言うの？」

「この場は私にお任せいただける、あの言葉は偽りですか？」

「そうは言っていないわよ。話をすり替えないで！」

「いいえ、王たる姉様が道を誤るならば、それを糺すのも私の使命です。綾子！」

ありゃ、いきなり振られたぞ。

「あたし？」

「そうだ。姉様、いいえ呉王は乱心されておいでだ。速やかに拘束せよ」

「ええっ？ お、おい、蓮華、落ち着けて！」

「いや、もう呉王には冷静な判断は望めぬ。このような非常時に相応しい存在ではない。よって、その任に耐えられぬとみなすしかあるまい」

「へえ、そんなに王になりたい訳？ でもね、あなたのその甘さで、果たして曹操に勝てるのかしら？」

冷めた雪蓮の声。

「綾子、何をしている！」

蓮華は明らかに苛立ち始めた。

……いや、だから何であたしが板挟みになってるんだ？

「綾子。あなたなら、このお馬鹿な娘の口車に乗ったりしないわよね？」

「口を慎め！ 綾子、これは呉王代理としての命令だ！」

「……綾子。いくらあなたでも、わたしに剣を向けるなら……容赦しないわよ？」

雪蓮は、南海霸王に手をかけた。

他の連中は、呆然と見守っているばかり。

……あたしに、こんなバカバカしい事で決断しろって？
なんか、妙にムカついてきた。

「いい加減にしろ、お前ら！」

キレ気味に叫んだあたしに、二人は驚いたらしい。

まあ、あたしがキレるのは久しぶりっつーか、こっちに来てからはあまりない筈。

「綾子……？」

「ふざけんな！　あたしは、お前らの喧嘩仲裁でこんな事してるんじゃないんだぞ！」

「……………」

「雪蓮も蓮華も、何考えてるんだ一体！　内輪揉めしてる場合じゃねーだろ！」

「でも綾子。わたしはただ……」

「私も、そんなつもりはない。ないが……」
遠慮がちにあたしを見る雪蓮。

蓮華は蓮華で、気まずそうに目を逸らす。

「でもプラカードもあるか！　もういい、勝手にすればいいさ！」
あたしはそのまま、謁見の間を出ていく。

「ま、待て！　まだ軍議の途中だぞ！」

「知った事か！」

慌てて制止する蓮華を無視して、あたしは部屋を出た。

私室に戻ると、あたしは私物の整理を始めた。

もう、こんな国なんか知るモンか。

喧嘩したきや、勝手にすればいいさ。

四次元カバンに、適当に物を放り込んでいく。

……と、入口に気配を感じた。

「お姉さん、出て行っちゃうおつもりですかー？」

「主。……わかっておいでとは思いますが」

「風に星か。言っておくが、止めても無駄だぜ？　完全に愛想が尽きたからな」

「でもでも、今のお姉さんは立場がありますしね。皆さんがそう簡

単には立ち去らせるとは思えないのですよ」

「主は、名実共に孫呉の重鎮ですからな。雪蓮殿や蓮華殿が、黙って見過ごす筈がありませんぞ？」

「なら、あのくだらない姉妹喧嘩を仲裁しろって言うのか？ あたしはゴメンだね」

「それなんです。全て、冥琳さんの策ではないかとー」

風の後ろから、朱里と雛里が顔を覗かせた。

「私も、風さんの意見に賛成です」

「あまりにも、出来すぎだと思ひまして。朱里ちゃんとずっと話していたんですが……」

「だからお前ら、何か考えてる様子だったのか？」

「はい。ただ、推測だけで申し上げるのもどうかと思ひまして」

「それで、お話する機会を窺っていたんです。曲がりなりにも軍師としてお手伝いに来ているのですから、不確かな事で綾子さんを惑わしてはいけないかと」

……確かに、全て冥琳のシナリオと言われりやそうかもな。

あの華琳をペテンにかけるんだ、生半可な策じゃ無理だろうしな。にしても、だ。

「なら聞くけど。ここまでする必要はあったのか？ 思春を死罪だなんて、やり過ぎもいいトコだぜ？」

「それは、そうですが……」

朱里や雛里を責めてもしゃーない。

「冥琳の策ならそれはそれでいいさ。けどな、あたしは何も聞かされちゃいないぜ？ それでどうやってあの華琳と戦えってんだよ」

「では、どうしても出て行く、そう仰るんですね？」

「ああ。でも、みんなは好きにするがいいぜ？ あたしに付き合う必要はない」

あたしはそう言うと、荷造りを再開。

っても、何でもかんでも持ち出すつもりはない。

……ここを出てどうなるかはわからん。

ただ、言える事はこれ以上、茶番に付き合う気はないって事。

当人達は真剣だろうし、覇権をかけた争いつてのも理解してるさ。でも、あたしはそもそもがイレギュラーだし。

天の御遣い、ってなら北郷がいるしさ。

そう考えると、全てがバカバカしいんだよ。

「主。そうとあらは、私はお供するまでですな」

「へ？」

「ですねー。風もお姉さんにお仕えしている訳ですしね」

「お、おい。星、風」

「そもそも、我らは呉の者ではありません。主が雪蓮殿を見限る以上、此所に残る謂れはないですからな」

「お仕えするのに相応しいと思ったからこそ、こうしてお姉さんの傍にいますよ？ 置いてきぼりは願ひ下げなのです」

「……けど、あたしはこれからプー、いや無職になるんだぜ？ 給料だって払えないし、それこそ野垂れ死にするかも知らんぞ？」

二人は、だからどうした、と言わんばかりの顔をしている。

「元々流浪生活を送っていましたからな。酒を少しばかり控えれば良いだけの事です」

「厚遇を望むなら、最初から曹操さんのところに行っているのですよ。お姉さんはいけずなのです」

「綾子さん。……お二人は、真剣ですよ？」

「綾子さんのお気持ちもわかりますが、私がもし同じ立場なら、やつぱり同じようにすると思います」

朱里と雛里も、いつになくマジだ。

かと言って、黙って抜け出したくはないしな。

「……わかったよ。二人は好きにしてくれ」

「ふっ、元よりそれ以外はあり得ませんかな」

「ではでは、風達も仕度してきますねー。あ、朱里ちゃん雛里ちゃん。お姉さんが抜け出さないよう、見張って下さいね」

「はわわ、わ、わかりました」

「あわわ……が、頑張りましたゆ」

……信用ねーな、あたしも。

「ところで朱里と雛里はどうする？」

「私達、ですか？」

「……突然過ぎて、まだどうしたらいいのかわかりません」

二人は、困惑したように顔を見合わせた。

「もともと、お前達は劉備にあたしが頼み込んで借りたんだ。そのあたしが去る以上、ここに残る義理はないぜ？」

「それはそうなんですが……」

「……ただ、桃香さまに、どう申し上げたらいいのか。綾子さんのお手伝いの役、果たせてませんから」

「そんな事はないさ。二人がいなかったら、と思うとゾツとするよ。ホント、ありがとな」

まだ困り顔の二人。

何となく、帽子の上からその頭を撫でてやる。

「はふう……」

「あふう……」

「……なあ、一度聞きたかったんだけど」

「ふわい。何でしょうか？」

あゝあ、伏龍と鳳雛が完全にトリップしてるよ。

「なんで、あたしが頭を撫でると、そうも心地よさそうな顔をするんだ？」

「……雛里ちゃん、どうしてだろうね？」

「うん、朱里ちゃん。……でも、心地良いんだよね」

自分じゃわからんからなあ、こればかりは。

明命とか菖蒲も同じような反応だし。

「ただ……」

「何だ、雛里？」

「……綾子さんの暖かさが、伝わってくる感じがするんです。手を通して」

「うへ。あたしや江原〇之じゃないってーの」

「あ、あの……。どなたの事でしようか？」

「気にしないでいい、ただの独り言だから」

「……綾子さん。私から、提案があるのですが」

お、朱里が蕩けモードから回復したぞ？

「提案って？」

「はい。綾子さんが出て行かれるのを、私は止めるつもりもありますがせんし。そこまで決意されたのなら仕方ないと思います」

「ああ。で？」

「……ですが、周瑜さんの事が、どうしても引つかかるんです」

「どうって言われても。冥琳からは何も聞かされていないし、それは朱里の推測だろ？」

「そうですね……でも、あまりにも出来すぎている気がするんです。この流れそのものが」

確かに、典型的な内輪揉めもパターンだよな、これって。

「そうだとしたら、その策を私達の方で更に進めてはどうかと思いますまして」

「策を進める？　けど、仮に冥琳の策じゃないとしたらどうする？」

「その可能性は低いと思うんです、私も」

雛里も復帰したようだ。

「恐らく、呉の何処かに、内通者がいると思うんです」

「内通者？　それなら、明命あたりが気付くんじゃないのか？」

「普段ならそうでしょうけど、今は明命ちゃんもあちこち飛び回っている最中です。目が届かなくても仕方ないかと」

「……それは、冥琳じゃない、って事か？」

「そうです。もし周瑜さんが内通されていたのだとしたら、先ほどのやりとりは辻褄が合わないんです」

「……………」

「ですから、いっその事逆手に取れないかと。そうだね、朱里ちゃん？」

「うん。綾子さんのお腹立ちはごもつともですけど……如何でしようか？」

……上目遣いはやめなさい、あんたら。
しかも眼をウルウルさせるのは反則！

「わ、私からもお願いします。綾子さん」

だーっ、雛里まで同じマネすな！

「綾子さん、お願いします」

「お願いです」

二人は、じりじりと迫ってくる。

……いや、怖い訳じゃないよ？

むしろ、強く言ったら泣き出すんじゃないか、という顔だし。

「な、なら、どうすりゃいいか言ってみろ。それ次第で考えてやるよ！」

「ほ、本当ですか？」

「後から、やっぱり駄目、とか仰いませんか？」

「だ、だから、話の内容次第だって……ああもう、なんで半泣きしてんだよ！」

「ぐすっ、信じていただけなのかと思うと、何だか悲しくて……」
「私達、やっぱり綾子さんのご期待に添えなかったのかと思うと……」

なんか、端から見たらあたしが二人を苛めているようにしか見えなくね、これ？

「な？ だから話してみろって。聞いてやるからさ？」

「ぐすっ、ぐすっ……。やっぱり駄目だよ、雛里ちゃん」

「ひっく、ひっく。どうしよう、朱里ちゃん」
う……。

「ああ、もう！ わかったよ、信じる、信じるから！ お前らの策に乗ってやるよ！」

途端に、二人はぴたりと泣き止んだ。

「今の言葉、確かですね？」

「取り消しは効きませんよ？」

……あれ、なんかおかしいな？

「星さん、風さん。綾子さん、賛成して下さいましたよ」

「ふふ、なかなか迫真の演技だったな、二人とも？」

「まあ、お姉さんの弱点はそこですからねー。相手の弱みにつけこんでこそその軍師ですから」

そう言いながら、二人が入ってきた。

思いつきり、ニヤニヤしながら。

「……お前ら、最初からグルだったのかよ？」

「ぐる？ また、お姉さん言葉ですね？」

「主。これは立派な策ですぞ？ なあ、朱里、雛里？」

「エヘヘ、その通りです」

「あ、ごめんなさい。こうでもしないと綾子さん、聞く耳を持っていただけないって思ってた」

……やられた。

そりゃ、諸葛亮に鳳統、おまけに程イクまで揃ってたもん。
あたしに、敵う訳ないじゃん。

「……もういい、あたしの負けだ。で、どうすりゃいいんだ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1860q/>

綾子†無双

2011年11月29日19時55分発行